岐阜県文化財保護センター調査報告書　第11集

徳山ダム水没地区埋蔵文化財
発掘調査報告書　第４集

戸　入　村　平　遺　跡

１９９４

水　資　源　開　発　公　団

財団法人　岐阜県文化財保護センター

第 4 号住居跡出土土器

第 4 号住居跡（上が南）

序

揖斐川の最上流部に位置する岐阜県揖斐郡徳山村は、徳山ダム建設に伴って全村水没することとなり、昭和62年４月１日をもって藤橋村に合併されました。徳山地区には豊かな自然とともに、旧石器時代にまでもさかのぼる数多くの遺跡が残されていますが、これら歴史的な文化遺産も多くが水没することとなりました。

このため、水資源開発公団の委託を受け、昭和61年度から岐阜県教育委員会が発掘調査に着手し、平成３年度からは(財)岐阜県文化財保護センターが発掘調査を継続しております。これまで空白であった岐阜県と滋賀県、福井県の接点でもあるこの地域の、東西・南北の文化交流の様相などの解明が期待されることから、全国的にも注目を集めています。

本報告書は、徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告の第４集であり、昭和63年度から平成元年度にわたって実施した「戸入村平遺跡」の調査結果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代と室町時代以降の遺構・遺物が発見されましたが、とりわけ縄文時代中期から晩期の貴重な資料を得ることができました。本書が、東海地方の歴史研究に多少なりとも資するところがあればと願うものです。また、研究者のみならず多くの方がたに広く活用され、埋蔵文化財に対する理解が深められますとともに、ダム建設に協力された方がたのふるさとを見直す一助になれば望外の喜びです。

刊行にあたり、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成に際しましてご指導・ご協力を賜りました各位ならびに関係諸機関に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも一層のご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成６年12月

財団法人岐阜県文化財保護センター
理事長　　吉田　豊

例　言

1．本書は、岐阜県揖斐郡藤橋村大字戸入字村の内に所在する「戸入村平遺跡」(G19T06372)の発掘調査報告書である。

2．本調査は、徳山ダム建設事業に伴うもので、水資源開発公団から岐阜県が委託を受け、岐阜県教育委員会が実施した。報告書の編集・刊行は、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は、岐阜県教育委員会文化課が昭和63年度・平成元年度に実施し、大参義一信州大学教授(現愛知学院大学教授)の指導のもとに、宮崎光雄(昭和63年度)・只腰正知(平成元年度)・宇野治幸(昭和63・平成元年度)が担当した。

4．出土遺物の整理・報告書の作成は、財団法人岐阜県文化財保護センターにおいて実施し、宇野治幸(平成4年度)・千藤克彦(平成4・5年度)・鈴木昇(平成4年度)・武藤貞昭(平成5・6年度)が担当した。

5．本書に掲載した遺物の実測については、土器・土製品の実測・拓影は、武藤貞昭・小谷和彦・藤田英博、石器は千藤克彦、陶磁器・銭貨は鈴木昇が中心となり、次の者が行った。
小野木学・木村剛・権田絵里・竹中栄子・関晶子・松岡美代子・江間香代子・服部みどり
水谷八重子・浅野紀美代・酒向邦子・進藤有美子

6．実測図等のトレースは次の者が主に行った。
高嶌桂子・竹中栄子・千藤克彦・木村剛・高島俊美・傘木文恵・竹内恒子

7．遺物の写真撮影は、武藤貞昭・篠田通弘・千藤克彦・鈴木昇が行った。

8．本書の執筆は、武藤貞昭・千藤克彦・鈴木昇・藤田英博・小谷和彦が担当分担し、執筆者名は文末に示した。なお、愛知学院大学教授大参義一氏に玉稿を賜った。全体の編集は武藤貞昭が担当した。

9．事前の地形測量は株式会社イビソクに委託して行った。

10．サヌカイト、黒曜石製遺物の原材産地分析および垂玉の産地分析は、京都大学原子炉実験所藁科哲男・東村武信の両氏に委託し、炭化材の樹種同定および炭化種実同定は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。それぞれの結果は第6章に掲載した。

11．発掘調査および報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略・順不同)
土肥孝・西村勝広・冨井眞・工藤俊樹・木下哲夫・泉拓良・間壁忠彦・間壁葭子・平井勝・東洋一
岡村道雄・高畑知功・高橋護・吉田英敏・西野秀和・松山和彦・山本正敏・狩野睦・内堀信雄
奥義次・前田清彦・増子康眞・戸田哲也・鈴木保彦・山本暉久・恩田勇・小島俊彰・野口哲也
森勇一・堀木真美子・海道順子・梅田美由紀・後藤信幸・下畑五夫・山田正昭・合田幸美
島田修一・澁谷昌彦・田村陽一・穂積裕昌・森川幸雄・丸山幸太郎・伊藤克司・筧真理子・南久和
後藤秀園・大参義一・赤澤徳明・岩田隆・冨山正明・水資源開発公団徳山ダム建設所・藤橋村
久瀬村・揖斐川町・揖斐川町歴史民俗資料館・揖斐県事務所・西濃教育事務所

12. 発掘調査ならびに調査記録および出土品の整理等には、次の方々の参加・協力を得た。

（敬称略・順不同）

佐々木明・酒井潤一・藤田英博・成瀬正勝・坂井浩・田中弘志・西村勝広・権田絵里・木村剛
竹中栄子・関晶子・高島俊美・中石たけ・小林さずゑ・中川操・中川逸枝・中川みさお・竹中春子
高橋みやの・増元みち・高橋しも・高橋ゆりの・高橋春枝・高橋花子・竹中きさお・竹中としえ
小寺ひさえ・清水義太・清水おぎの・小西直政・小西きよ子・清水勝三・清生満雄・井部政男
丹度芳子・小玉長八・小玉春子・泉武光・佐島岩吉・佐島みさお・扇間重男・堀田信子・小倉富恵
高嶌桂子・脇野伸子・駒田香絵・澤井梅子・河本節子・中村とよみ・水谷八重子・松岡美代子
江間香代子・伊藤節子・和田恵利子・酒向邦子・山本真理・棚橋つや子・米津光枝・傘木文恵
進藤有美子・竹内恒子・浅野紀美代・広瀬宣子・佐藤まさみ・服部みどり・加納恭子・岩平澄子
豊田圭子・山岡頼美・後藤けい子・小田富士子・直井江里子・近藤千世子・北島直子・長坂薫

13. 調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡　例

1．遺構挿図の縮尺は次のとおりで、それぞれスケールを添付した。

・住居跡……1／60　　・炉跡……1／30
・土器棺墓……1／20　　・配石土坑……1／40
・その他、遺構全体図や縮尺の異なるものは、添付したスケールのとおりである。

2．遺物挿図の縮尺は次のとおりで、それぞれスケールを添付した。

・縄文土器・土製品……1／3・1／5・1／10
・陶磁器類……1／3　　・銭貨類……1／1
・石皿……1／6　　・磨石・凹石類……1／3
・石錘……1／2　　・その他の石器……2／3
・縮尺の異なるものは、それぞれ添付したスケールのとおりである。

3．図中の方位は、第１～４図は真北を示し、その他はすべて磁北を示す。

4．水糸レベルは標高を示し、土層図の右または左肩に記した。

5．本文・表・図中に、必要に応じて遺構記号を使用したが、これらは次のように遺構の種類を表す。

・ＳＢ＝住居跡　　・ＳＺ＝土器棺墓　　・ＳＫ＝土坑　　・Ｐ＝ピット

6．遺物番号は種類によって次のように表記した。なお、本文・挿図・表・図版とも統一してある。

・石器類……　1～　　・土器棺墓出土土器類……501～
・陶磁器類……601～　　・銭貨類……701～
・縄文土器・土製品……1001～

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
　挿図目次
　表 目 次
　図版目次
第１章　遺跡の環境…… 1
　第１節　自然環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 3
第２章　発掘調査の経過…… 13
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 13
　第２節　発掘調査の方法と経過…… 14
第３章　層序…… 18
第４章　縄文時代の遺構と遺物…… 22
　第１節　概略…… 22
　第２節　住居跡と出土遺物…… 32
　第３節　土器棺墓と出土土器…… 144
　第４節　配石土坑…… 160
　第５節　その他の土坑・ピットと出土遺物…… 161
　第６節　石器類…… 214
第５章　その他の時代の遺構と遺物…… 284
　第１節　中近世陶磁器類…… 284
　第２節　銭貨類…… 288
第６章　自然科学的分析…… 297
　藤橋村徳山地区遺跡出土のサヌカイト、黒曜石製遺物の原材産地分析
　戸入村平遺跡出土の垂玉の産地分析
　戸入村平遺跡出土炭化材の樹種同定および炭化種実同定
第７章　まとめ…… 319
引用・参考文献…… 321
図版

挿図目次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　旧徳山村地内の遺跡分布図…… 5
第３図　旧徳山村地内の中世墓分布図…… 9
第４図　遺跡周辺地形図…… 14
第５図　グリッド設定図…… 15
第６図　年度別調査区域図…… 16
第７図　遺跡土層断面図…… 19
第８図　遺構配置全体図…… 23
第９図　遺構全体図（１）…… 24
第10図　遺構全体図（２）…… 25
第11図　遺構全体図（３）…… 26
第12図　遺構全体図（４）…… 27
第13図　遺構全体図（５）…… 28
第14図　第１号住居跡（ＳＢ１）…… 33
第15図　第１号住居跡・炉跡…… 34
第16図　第１号住居跡出土土器（１）…… 36
第17図　第１号住居跡出土土器（２）…… 37
第18図　第１号住居跡出土土器（３）…… 38
第19図　第１号住居跡出土土器（４）…… 40
第20図　第１号住居跡出土土器（５）…… 42
第21図　第１号住居跡出土土器（６）…… 44
第22図　第１号住居跡出土土器（７）…… 46
第23図　第１号住居跡出土土器（８）…… 47
第24図　第１号住居跡出土石器（１）…… 48
第25図　第１号住居跡出土石器（２）…… 49
第26図　第２号住居跡（ＳＢ２）…… 51
第27図　第２号住居跡炉跡および埋甕…… 52
第28図　第２号住居跡出土土器（１）…… 53
第29図　第２号住居跡出土土器（２）…… 55
第30図　第２号住居跡出土土器（３）…… 57
第31図　第２号住居跡出土土器（４）…… 59
第32図　第２号住居跡出土土器（５）…… 60
第33図　第２号住居跡出土土器（６）…… 61
第34図　第２号住居跡出土土器（７）…… 64
第35図　第２号住居跡出土土器（８）…… 65
第36図　第２号住居跡出土土器（９）…… 68
第37図　第２号住居跡出土土器（10）…… 69
第38図　第２号住居跡出土土器（11）…… 70
第39図　第２号住居跡出土土器（12）…… 71
第40図　第２号住居跡出土土器（13）…… 72
第41図　第２号住居跡出土土器（14）…… 74
第42図　第２号住居跡出土石器…… 75
第43図　第３号住居跡（ＳＢ３）…… 77
第44図　第３号住居跡出土土器…… 79
第45図　第３号住居跡出土石器…… 80
第46図　第４号住居跡（ＳＢ４）…… 83
第47図　ＳＢ４主要土器出土位置図…… 85
第48図　ＳＢ４土器・礫出土状況図…… 89
第49図　第４号住居跡出土土器（１）
　Ｃ１～３・５～７群…… 98
第50図　第４号住居跡出土土器（２）…… 99
第51図　第４号住居跡出土土器（３）
　Ｃ７群 …… 100
第52図　第４号住居跡出土土器（４）
　Ｃ７群 …… 101
第53図　第４号住居跡出土土器（５）
　Ｃ７群 …… 102
第54図　第４号住居跡出土土器（６）
　Ｃ７群 …… 103
第55図　第４号住居跡出土土器（７）
　Ｃ７群 …… 104
第56図　第４号住居跡出土土器（８）
　Ｃ７群 …… 105
第57図　第４号住居跡出土土器（９）
　Ｃ７群 …… 106
第58図　第４号住居跡出土土器（10）
　Ｃ８群 …… 112
第59図　第４号住居跡出土土器（11）
　Ｃ８群 …… 113
第60図　第４号住居跡出土土器（12）
　Ｃ８群 …… 114
第61図　第４号住居跡出土土器（13）
　Ｃ８群 …… 115
第62図　第４号住居跡出土土器（14）
　Ｃ８群 …… 116
第63図　第４号住居跡出土土器（15）…… 117
第64図　第４号住居跡出土土器（16）
　Ｃ８・12・13群 …… 118
第65図　第４号住居跡出土土器（17）
　Ｃ13・14群 …… 121
第66図　第４・５号住居跡等出土土器・土製品
　…… 122
第67図　ＳＢ４石器出土状況図 …… 123
第68図　第４号住居跡出土石器（１）…… 124
第69図　第４号住居跡出土石器（２）…… 125
第70図　第４号住居跡出土石器（３）…… 126
第71図　第４号住居跡出土石器（４）…… 127
第72図　Ｃ７群土器の立面形分類 …… 129
第73図　Ｃ７群土器の平面形分類 …… 129
第74図　Ｃ７群土器の渦巻文の変遷模式図 … 130
第75図　Ｃ８群土器の器形分類 …… 133
第76図　第５号住居跡（ＳＢ５）…… 136
第77図　第６号住居跡（ＳＢ６）…… 137
第78図　第７・８号住居跡出土土器（１）… 141

第79図　第７・８号住居跡出土土器（２）… 142
第80図　土器棺墓（１）…… 153
第81図　土器棺墓（２）…… 154
第82図　土器棺墓（３）・配石土坑…… 155
第83図　土器棺墓出土土器（１）…… 156
第84図　土器棺墓出土土器（２）…… 157
第85図　土器棺墓出土土器（３）…… 158
第86図　土器棺墓出土土器（４）…… 159
第87図　土器棺墓出土土器（５）…… 160
第88図　その他の土坑・ピット出土土器（１）
Ｃ１群 …… 167
第89図　その他の土坑・ピット出土土器（２）
Ｃ１・２群 …… 169
第90図　その他の土坑・ピット出土土器（３）
Ｃ２群 …… 170
第91図　その他の土坑・ピット出土土器（４）
Ｃ２～６群 …… 171
第92図　その他の土坑・ピット出土土器（５）
…… 173
第93図　その他の土坑・ピット出土土器（６）
Ｃ６群 …… 175
第94図　その他の土坑・ピット出土土器（７）
Ｃ６・７群 …… 177
第95図　その他の土坑・ピット出土土器（８）
Ｃ７・８群 …… 179
第96図　その他の土坑・ピット出土土器（９）
Ｃ８・９群 …… 181
第97図　その他の土坑・ピット出土土器（10）
Ｃ９・10群 …… 183
第98図　その他の土坑・ピット出土土器（11）
Ｃ10・11群 …… 185
第99図　その他の土坑・ピット出土土器（12）
Ｃ11群・Ｃ８～11群の胴部 …… 187
第100図　その他の土坑・ピット出土土器（13）
Ｃ８～11群の胴部…… 189
第101図　その他の土坑・ピット出土土器（14）
Ｃ８～11群の胴部・Ｃ12・13群
…… 191
第102図　その他の土坑・ピット出土土器（15）
Ｃ13群…… 193
第103図　その他の土坑・ピット出土土器（16）
Ｃ14群…… 194
第104図　その他の土坑・ピット出土土器（17）
後期…… 196
第105図　その他の土坑・ピット出土土器（18）
後期…… 197
第106図　その他の土坑・ピット出土土器（19）
後期…… 199
第107図　その他の土坑・ピット出土土器（20）
後期…… 201
第108図　その他の土坑・ピット出土土器（21）
後期…… 202
第109図　その他の土坑・ピット出土土器（22）
晩期…… 205
第110図　その他の土坑・ピット出土土器（23）
晩期…… 206
第111図　その他の土坑・ピット出土土器（24）
晩期…… 207
第112図　その他の土坑・ピット出土土製品 … 210
第113図　その他の土坑・ピット出土石器（１）
…… 211
第114図　その他の土坑・ピット出土石器（２）
…… 212
第115図　その他の土坑・ピット出土石器（３）
…… 213
第116図　石鏃の分類…… 214
第117図　包含層出土石器（１）石鏃…… 217
第118図　包含層出土石器（２）石鏃、石槍… 218
第119図　包含層出土石器（３）石錐、石匙… 219
第120図　包含層出土石器（４）石匙、掻器… 221
第121図　包含層出土石器（５）掻器、削器… 222
第122図　包含層出土石器（６）削器、ピエス・
エスキーユ…… 223
第123図　包含層出土石器（７）ピエス・エス
キーユ、ヘラ形石器、石錘…… 224
第124図　打製石斧の折損の部位による分類… 225
第125図　包含層出土石器（８）打製石斧…… 226
第126図　磨製石斧の全幅と全厚の関係…… 227
第127図　磨製石斧の折損の部位による分類… 228
第128図　包含層出土石器（９）磨製石斧(1)　229
第129図　包含層出土石器（10）磨製石斧(2)　230
第130図　包含層出土石器（11）石核…… 232
第131図　包含層出土石器（12）石核、２次加
工のある剥片…… 233
第132図　包含層出土石器（13）２次加工のあ
る剥片、使用痕のある剥片、未製品… 234
第133図　石錘の重量分布…… 236
第134図　凹石の分類…… 238
第135図　磨石の分類…… 240
第136図　包含層出土石器（14）凹石…… 244
第137図　包含層出土石器（15）凹石、磨石(1)
…… 245
第138図　包含層出土石器（16）凹石、磨石(2)
…… 246
第139図　包含層出土石器（17）凹石、磨石(3)
…… 247

第140図　包含層出土石器（18）敲石、磨石(1) …… 248
第141図　包含層出土石器（19）敲石、磨石(2) …… 249
第142図　包含層出土石器（20）磨石…… 250
第143図　包含層出土石器（21）石皿、砥石、石棒…… 251
第144図　包含層出土石器（22）石製品…… 252
第145図　凹石、磨石、敲石類の観察面の位置 282
第146図　中近世陶磁器（1）…… 289
第147図　中近世陶磁器（2）…… 290
第148図　中近世陶磁器（3）…… 291
第149図　中近世陶磁器（4）…… 292
第150図　中近世陶磁器（5）…… 293
第151図　銭貨類拓影図…… 295
第152図　サヌカイトの原産地…… 298
第153図　黒曜石の原産地…… 298
第154図　ヒスイとヒスイ類似岩の原産地…… 312
第155図　ヒスイ原石の元素比値 Zr／Sr 対 Sr／Fe の分布および分布範囲 …… 312
第156図　ヒスイ原石の元素比値 Ca／Si 対 Sr／Fe の分布および分布範囲 …… 312
第157図　ヒスイ原石の元素比値 Na／Si 対 Mg／Si の分布および分布範囲…… 312
第158図　戸入村平遺跡出土の硬玉製垂玉の Zr／Sr 対 Sr／Fe の分布 …… 312
第159図　戸入村平遺跡出土の硬玉製垂玉の Ca／Si 対 Sr／Fe の分布 …… 312
第160図　戸入村平遺跡出土の硬玉製垂玉の Na／Si 対 Mg／Si の分布 …… 312
第161図　硬玉製垂玉（34727）の蛍光X線スペクトル…… 312

表目次

第１表　旧徳山村地内の縄文遺跡一覧…… 4
第２表　旧徳山村地内の縄文以外の遺跡一覧… 8
第３表　旧徳山村地内の中世墓一覧…… 10
第４表　ＳＢ４覆土分層とセクションベルト出土土器点数…… 88
第５表　土坑一覧表（１）…… 162
第６表　土坑一覧表（２）…… 163
第７表　土坑一覧表（３）…… 164
第８表　石鏃の分類別出土点数 …… 215
第９表　凹石の分類別出土点数 …… 239
第10表　凹石の凹みの分類別使用石材 …… 239
第11表　凹石の表裏面の凹みの組み合わせ … 239
第12表　磨石の磨面の分類別使用石材 …… 242
第13表　石鏃計測表（１）…… 258
第14表　石鏃計測表（２）…… 259
第15表　石鏃計測表（３）…… 260
第16表　石鏃計測表（４）…… 261
第17表　石鏃計測表（５）…… 262
第18表　石槍計測表 …… 262
第19表　石錐計測表（１）…… 263
第20表　石錐計測表（２）…… 264
第21表　石匙計測表 …… 265
第22表　掻器計測表 …… 265
第23表　削器計測表（１）…… 265
第24表　削器計測表（２）…… 266
第25表　ピエス・エスキーユ計測表（１）…… 266
第26表　ピエス・エスキーユ計測表（２）…… 267
第27表　ピエス・エスキーユ計測表（３）…… 268
第28表　ピエス・エスキーユ計測表（４）…… 269
第29表　ヘラ型石器計測表（１）…… 269
第30表　ヘラ型石器計測表（２）…… 270
第31表　打製石斧計測表（１）…… 270
第32表　打製石斧計測表（２）…… 271
第33表　磨製石斧計測表（１）…… 271
第34表　磨製石斧計測表（２）…… 272
第35表　打欠石錘計測表（１）…… 272
第36表　打欠石錘計測表（２）…… 273
第37表　打欠石錘計測表（３）…… 274
第38表　切目石錘計測表（１）…… 274
第39表　切目石錘計測表（２）…… 275
第40表　切目石錘計測表（３）…… 276
第41表　切目石錘計測表（４）…… 277
第42表　切目石錘計測表（５）…… 278
第43表　切目石錘計測表（６）…… 279
第44表　磨・凹・敲石計測表（１）…… 279
第45表　磨・凹・敲石計測表（２）…… 280
第46表　磨・凹・敲石計測表（３）…… 281
第47表　磨・凹・敲石計測表（４）…… 282
第48表　石皿計測表 …… 283
第49表　砥石計測表 …… 283
第50表　石棒計測表 …… 283
第51表　垂飾類計測表 …… 283
第52表　石冠計測表 …… 283
第53表　石刀計測表 …… 283
第54表　鈎形石製品計測表 …… 283
第55表　円盤状石製品計測表 …… 283
第56表　中近世陶磁器計測表 …… 294
第57表　銭貨類計測表 …… 296
第58表　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 … 299
第59表　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（１）　301

第60表　各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（2）　302
第61表　岐阜県藤橋村徳山地区遺跡出土の黒曜石製石器、剥片分析結果 …… 303
第62表　岐阜県藤橋村徳山地区遺跡出土のサヌカイト製石器、剥片分析結果 …… 303
第63表　岐阜県揖斐郡藤橋村徳山地区遺跡出土のサヌカイト、黒曜石製遺物の原産地推定結果 …… 304
第64表　愛知県下及び福井県下産出のガラス質安山岩の分析結果 …… 305
第65表　岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果……306
第66表　和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果……306
第67表　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（1）…… 308
第68表　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（2）…… 309
第69表　戸入村平遺跡出土の硬玉製垂玉の元素分析値の比量と比重 …… 313
第70表　戸入村平遺跡出土の硬玉製垂玉の現在産地分析結果 …… 313
第71表　戸入村平遺跡出土炭化材および炭化種実 …… 314

図版目次

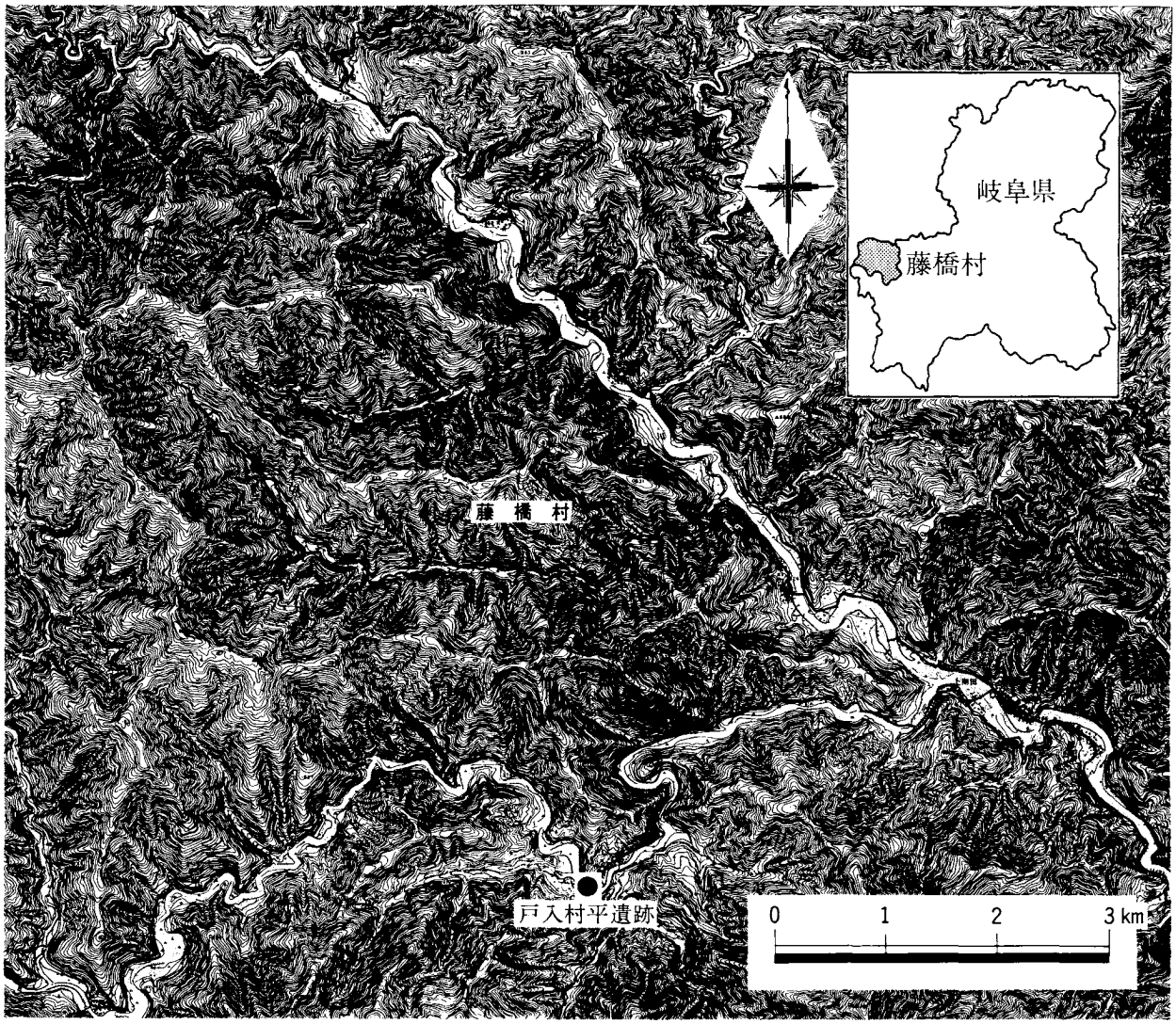
図版１　戸入村平遺跡調査区全景
図版２　遺跡遠景（調査前）・発掘風景
図版３　第１・２号住居跡
図版４　ＳＢ１～３炉跡
図版５　第３・４号住居跡
図版６　ＳＢ４土器出土状況
図版７　ＳＢ４炉跡・石皿・埋甕出土状況
図版８　ＳＢ４土器・ＳＢ２埋甕・ＳＢ６炉跡出土状況
図版９　第１・２号土器棺墓
図版10　第３・４号土器棺墓
図版11　第５・６号土器棺墓
図版12　第７～10号土器棺墓
図版13　第11～13号土器棺墓・配石土坑
図版14　ＳＢ１出土土器（1）・ＳＢ２出土土器（1）
図版15　ＳＢ２出土土器（2）
図版16　ＳＢ１出土土器（2）
図版17　ＳＢ１出土土器（3）
図版18　ＳＢ２出土土器（3）
図版19　ＳＢ２出土土器（4）
図版20　ＳＢ４出土土器（1）
図版21　ＳＢ４出土土器（2）
図版22　ＳＢ４出土土器（3）
図版23　ＳＢ４出土土器（4）
図版24　ＳＢ４出土土器（5）
図版25　ＳＢ４出土土器（6）
図版26　ＳＢ４出土土器（7）・ＳＢ７出土土器他
図版27　ＳＢ３・７・８出土土器
図版28　土器棺墓出土土器（1）
図版29　土器棺墓出土土器（2）
図版30　土器棺墓出土土器（3）
図版31　ＳＫ・Ｐ出土土器（1）中期①
図版32　ＳＫ・Ｐ出土土器（2）中期②
図版33　ＳＫ・Ｐ出土土器（3）中期③・後期①
図版34　ＳＫ・Ｐ出土土器（4）後期②・晩期
図版35　住居跡出土石器（1）
図版36　住居跡出土石器（2）
図版37　住居跡出土石器（3）
図版38　住居跡出土石器（4）
図版39　住居跡、その他の土坑・ピット出土石器
図版40　その他の土坑・ピット出土石器
図版41　包含層出土石器（1）
図版42　包含層出土石器（2）
図版43　包含層出土石器（3）
図版44　包含層出土石器（4）
図版45　包含層出土石器（5）
図版46　包含層出土石器（6）
図版47　包含層出土石器（7）
図版48　包含層出土石器（8）
図版49　包含層出土石器（9）
図版50　包含層出土石器（10）
図版51　包含層出土石器（11）
図版52　包含層出土石器（12）
図版53　中近世陶磁器（1）
図版54　中近世陶磁器（2）
図版55　中近世陶磁器（3）
図版56　中近世陶磁器（4）
図版57　中近世陶磁器（5）
図版58　中近世陶磁器（6）
図版59　銭貨類
図版60　戸入村平遺跡出土の炭化種実（1）
図版61　戸入村平遺跡出土の炭化種実（2）
図版62　戸入村平遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真（1）
図版63　戸入村平遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真（2）
図版64　戸入村平遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真（3）

第1章　遺跡の環境

第1節　自然環境

位置と地形　「戸入村平遺跡」は、岐阜県揖斐郡藤橋村（旧徳山村）大字戸入字村の内に所在する。本遺跡が所在する徳山地域は、木曽三川の一つ揖斐川の最上流部にあり、岐阜県の北西端で福井県と滋賀県の県境に位置する。周囲は、越美山地と呼ばれる山々に囲まれている。

地形を概観すると、越美山地は能郷白山をのぞいて 1,200m前後の峰で占められ定高性を示す。これらの山頂付近はいずれも傾斜の比較的ゆるい平頂峰であり、このことから越美山地は長い間に準平原化された後、現高度に隆起したことが考えられる。この山地を揖斐川が深い谷をつくって流れている。揖斐川本流（東谷）は山地帯の北西から南東方向に直線的に流下するが、これは揖斐川断層と呼ばれる断層線上を流れているためである。一方、西谷川は曲流し、



第1図　遺跡位置図

先行性流路をたどっていると考えられる。

どちらの谷も急であるが、それぞれに小規模な河岸段丘・扇状地が形成されている。徳山地域の人々の生活の場は、これらの狭い段丘や小扇状地上にあった。東谷には、上流から塚・櫨原・山手・上開田・本郷・下開田、西谷には門入・戸入の各集落があった。

地　　質　徳山地域を構成する地質は、大部分が美濃帯と呼ばれる古生代から中生代にかけて海底で堆積したと考えられる岩石(中古生層)である。徳山地域の谷では中古生層の堆積岩である粘板岩・砂岩・礫岩・チャート・石灰岩・緑色岩（輝緑凝灰岩）の礫が見られる。

一方、北東部の能郷白山を中心として、能郷白山花崗閃緑岩が約35kmの岩株状の岩帯を形成している。この岩帯は美濃帯に貫入し、接触変成作用を与えている。この岩帯は、K－Ａｒ年代測定により約2,000万年前の新第３紀中新世に形成されたことが明らかになっている。(小井土　1994)

「戸入村平遺跡」の立地する藤橋村大字戸入地内の地質は、緑色岩・チャート・石灰岩・砂岩の岩片を含む泥岩の中生層である。

気候と植生　徳山地域は北陸地方と東海地方の境にあり、四方を海抜 1,200m前後の越美山地に囲まれている。こうした位置的・地形的特徴がこの地域の気候を大きく左右している。夏は南東季節風の影響を受けて多量の雨が降り、冬は北西季節風の影響を受けて大雪が降る。このため徳山地域は年間降雨量が 3,000mmを超える日本でも有数の降水量の多い地域である。

気温では年較差・日較差が大きい。冬は－10℃近くにも気温が下がり、夏には30℃をこす暑さを記録する。これは四方を高い山で囲まれた盆地で、内陸的気候のためであると考えられる。徳山地域の植生は、基本的にはブナ・ミズナラを主とする冷温帯落葉樹林帯に属する。この地域で見られるブナ林は、林床にチシマザサを伴っており、日本海側の地域に見られる植生をしている。太平洋側にありながら日本海側型の植生を示すのは、この地域が冬に積雪が多いという日本海型の立地条件のためである。樹木には他にトチノキ・ケヤキ・ホウノキ・クリ・サワグルミ・ヤマボウシなどがみられる。

「戸入村平遺跡」付近の現在における潜在自然植生は、ブナ・ミズナラなどの冷温帯落葉樹林帯～クリを中心とする中間温帯落葉樹林であるが、現在はスギ・ヒノキの植林やミズナラ・クリなどの２次林がみられる。

（千藤克彦）

第2節　歴史的環境

「戸入村平遺跡」は、揖斐郡藤橋村大字戸入字村の内に所在し、揖斐川支流の西谷川の左岸段丘上の旧戸入集落の西半部に位置する。本遺跡の西方対岸の西谷川右岸段丘上に「はいづめ遺跡」と「小の原遺跡」があり、両遺跡は向かい合っている。主として「はいづめ遺跡」は縄文時代晩期後葉から弥生時代前期、「小の原遺跡」は縄文時代草創期から前期、「戸入村平遺跡」は縄文時代中期から晩期にかけての遺跡である。このように3遺跡は各時期によってそれぞれ異なる段丘に立地している。

徳山ダム建設に伴って廃村になった旧徳山村（昭和62年3月31日廃村）には、平成6年10月現在、34か所[1)]の遺跡が知られている。このうち、ダム建設に伴う水没地区内に所在する遺跡は25か所である。

旧徳山村の遺跡は、すでに大正年間に小川栄一氏によって調査され報告されている。第二次大戦後も小川氏の調査によって報告されたが、5か所の遺跡しか知られていなかった。その後も、小澤一弘氏らによって「塚奥山(宮ヶ原）遺跡」の遺物紹介がなされただけであった。ダム建設計画が本格化した頃から、根尾弥七氏・篠田通弘氏ら地元研究者たちが、村内を踏査し、多くの成果を発表した。岐阜県教育委員会は、先達の成果を踏まえ、徳山ダム建設に伴う水没地区内の埋蔵文化財の分布調査を実施し報告した。ここでは、分布調査の結果を基にして、平成6年10月までの発掘調査や整理作業の結果を中心に概観を述べることにする。

旧石器時代　徳山地区では、地元研究者たちの分布調査によって「塚奥山（宮ヶ原）遺跡」や「小の原遺跡」などの5遺跡からナイフ形石器に類似する石器が採集され、旧石器時代遺跡の可能性が報告された。そして平成5年度から発掘調査の始まった「寺屋敷跡」で、ナイフ形石器や剥片・砕片多数が出土し、徳山地区の歴史が2万年以上前の旧石器時代から始まることが確かめられた。これらの石器の出土状況は攪乱を受けていない極めて良好なもので、現在も調査を継続中である。

縄文時代　縄文時代の遺跡は、現在26か所（第2図、第1表）が知られている。この内、水没地区内にある遺跡は20か所で、平成6年度までに12か所の調査が終了している。

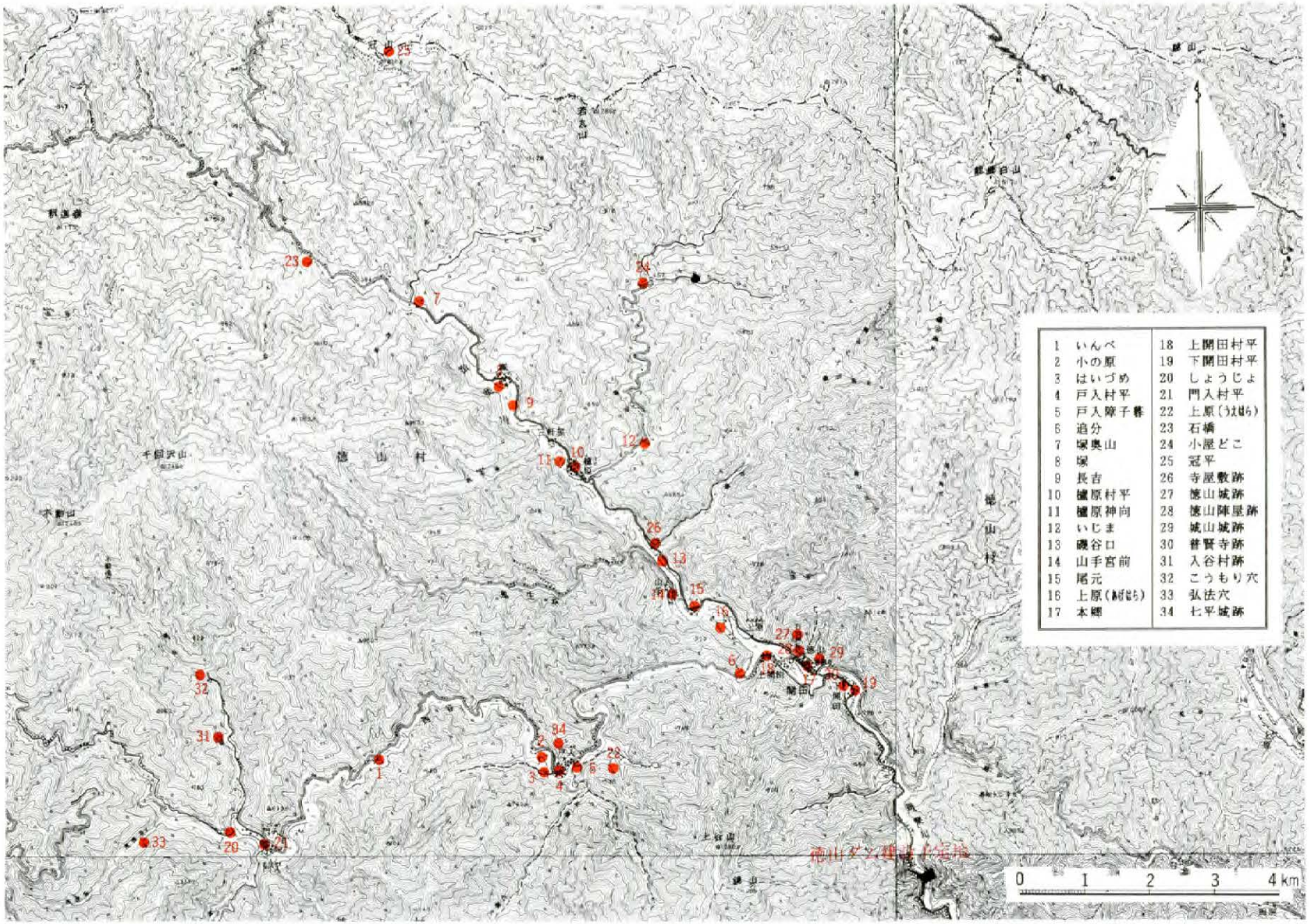
縄文時代草創期の遺跡は、現在のところ有舌尖頭器を検出した「小の原遺跡」・「山手宮前遺跡」の2か所である。「小の原遺跡」では、多縄文系の表裏縄文土器（椛ノ湖II式併行）を検出しており、草創期末の遺跡といえる。現時点において他にはこの時期のものは認められない。今後、調査の進展に伴い、東谷筋でもこの時期の遺跡の増加が期待される。

早期になると徳山地区の各地に遺跡が点在してくる（14遺跡)。揖斐川本流域の東谷筋では、

第1表　旧徳山村地内の縄文遺跡一覧

No.	遺跡名	旧石器	縄文時代 草	縄文時代 早	縄文時代 前	縄文時代 中	縄文時代 後	縄文時代 晩	弥生	発掘調査結果 遺物	発掘調査結果 遺構	備考	
1	いんべ			◎	◎	◎	◎	◎		・早期：押型文土器、茅山下層式、入海式土器など。 ・中期：里木式、中富式、取組式土器など。 ・後期：宮滝式、堀之内式土器など。 ・晩期：五貫之森式～下り松式土器多数出土。・石器多数出土。	・集石炉跡 ・土器棺墓 ・配石土坑	H2・4年度 発掘調査	水没地区内に所在し発掘調査を実施する遺跡
2	小の原		○	◎	◎					・草創期：表裏縄文土器等。 ・早期：押型文土器(穂谷式等)、田戸下層式・上層式、野島式、鵜ヶ島台式、茅山下層式、粕畑式、上ノ山式、入海式、石山式、天神山式、塩屋式土器など。 ・前期：清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式、北白川下層Ⅰa～Ⅱb式、諸磯式土器など多数出土。 ・石器多数出土。有舌尖頭器他各種の石器多数出土。	・前期の住居跡2軒 ・早前期の集石炉13基等	S62・63年度 発掘調査 報告書刊行	
3	はいづめ			△	○	△	△	◎	○	・早期から後期までの土器は少量。 ・晩期：西之山式、五貫之森式～下り松式、大洞B-C式～C2式。 ・弥生：前期の遠賀川系土器2個体検出。 ・石器：異形部分磨製石器、石冠・石刀・石棒など各種石器多数出土。	・住居跡3軒 ・土器棺墓16基等	S61・62年度 発掘調査 報告書刊行	
4	戸入村平			△	△	◎	◎	◎		・船元式、里木Ⅱ式、咲畑様式(中富、神明、島崎Ⅲ)、北白川C式、古府式などの中期土器を中心に晩期までの土器多数。 ・晩期土器棺は、稲荷山式～西之山式。 ・各種の石器多数出土。	・住居跡8軒 ・後晩期の土器棺墓13基等 ・配石土坑	S63・H1年度 発掘調査 報告書刊行	
5	戸入障子暮									・土器小破片出土（時期不明）。 ・石器少量出土。	・未検出	H1年度調査 報告書刊行	
6	追分			○			○	○		・早期・後晩期の縄文土器少量。 ・打製石斧多数出土、他の石器は少量。	・未検出	H1・2年度 発掘調査 報告書刊行	
7	塚奥山	?		△		◎	○	△		・中期を中心に多くの土器・石器が採集されている。		(宮ヶ原)	
8	塚					◎	◎	△		・中期から後期までの縄文土器や石器各種多数出土。	・住居跡 ・集石遺構等	H2・3年度 発掘調査	
9	長吉			○		△		○		・石器類少量。 ・茅山下層式・樫王式土器等出土。	・遺跡の中心は減失 ・土器埋設遺構1基	H3年度 発掘調査 報告書刊行	
10	櫨原村平	?			△	○	◎	○		・緊急試掘で後期を中心に多くの土器・石器が出土している。			
11	櫨原神向									・石鏃・打製石斧・スクレイパー少し。			
12	いじま									・縄文土器細片少し。			
13	磯谷口					◎				・中期の船元式土器など出土。	・未検出	H2年度 発掘調査	
14	山手宮前		△	○	△	◎		○		・中期後半の土器を中心に高山寺式、樫王式土器など出土。 ・有舌尖頭器他各種石器類出土。	・住居跡	H4・5年度 発掘調査	
15	尾元			△	△					・石器のみ。異形部分磨製石器。			
16	上原(あげはら)	?		○	◎	◎	◎	◎	○	・縄文早期～弥生前期(遠賀川式)の土器・石器多数出土。	・住居跡 ・土器棺墓	H2年度～ 発掘調査中	
17	本郷									・石皿のみ。			
18	上開田村平			△		◎	○			・中期後葉～後期の土器や石器各種出土。	・住居跡 ・早期末の焼礫集積遺構	H4年度 発掘調査	
19	下開田村平			◎		◎	◎	○		・早期、中期後半～晩期樫王式土器まで出土。石器は多くない。 ・押型文土器、茅山下層式、上ノ山式土器など。	・住居跡1軒 ・早期の焼礫集積遺構3基	H2年度 発掘調査 報告書刊行	
26	寺屋敷	○		○						・ナイフ形石器、石核、フレーク、チップ。 ・茅山下層式、入海Ⅱ式土器。	・住居跡	H5年度～ 発掘調査中	
20	しょうじょ									石鏃・打製石斧・石匙・スクレイパー。			水没地区以外の遺跡
21	門入村平									石鏃少し。			
22	上原									縄文土器小片少し。石鏃・石錘少量。			
23	石橋					△				縄文土器少し。石鏃・石錘・石匙。			
24	小屋どこ	?		△	○	◎	△	△		中期を中心に早期から晩期の土器・石器類。			
25	冠平									石鏃。			

＊アミカケの遺跡は、平成5年度までに発掘調査を終了したもの。
＊表内の○・◎・△は、発掘調査で出土した土器を中心とする遺物の量による。ただし、未調査遺跡については、徳山村の歴史を語る会(1984)、篠田通弘(1986)による。
＊No.は、第2図の遺跡番号に準ずる。



第2図　旧徳山村地内の遺跡分布図

「塚奥山遺跡」・「長吉遺跡」・「尾元遺跡」・「上原遺跡」・「上開田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」・「寺屋敷跡」・「山手宮前遺跡」などで遺物が出土している。特に「尾元遺跡」では、付替道路進入路の確認調査時に、大形の異形部分磨製石器を検出した。「下開田村平遺跡」では、押型文土器・茅山下層式土器・上ノ山式土器やこの時期の焼礫集積遺構・配石遺構を検出した。「長吉遺跡」では少量ながら茅山下層式土器がまとまって出土している。「上開田村平遺跡」では、押型文土器・茅山下層式土器が出土しているほか、炭化材を多量に含む直径4mの焼礫集積遺構が検出されており、炭化材の年代測定の結果、早期末の遺構であることが判明している。平成5年度から発掘調査の始まった「寺屋敷跡」では、茅山下層式土器・入海II式土器を検出し、平成4・5年度に発掘調査した「山手宮前遺跡」では、高山寺式土器を検出した。さらに、「上原遺跡」でも平成6年度現在、第3・4・5地点から押型文土器を検出し、特に、第4地点では高山寺式土器がまとまって出土している。西谷筋では、「いんべ遺跡」・「はいづめ遺跡」・「小の原遺跡」・「戸入村平遺跡」・「追分遺跡」で遺物が出土している。「小の原遺跡」については、既刊の第2集で述べているように、早期の集石炉や石器を大量に検出している。また、土器では早期の各小時期のものが出土しており、山形や楕円の押型文土器をはじめとして、関東系の田戸下層式・田戸上層式・野島式・鵜ヶ島台式・茅山下層式土器や、東海系の八ッ崎I式・粕畑式・上ノ山式・入海式土器などが出土している。「いんべ遺跡」では、平成2年度の発掘調査の結果、押型文土器をはじめとして早期後半の茅山下層式・入海式土器等や集石炉を検出した。「はいづめ遺跡」でも押型文土器が出土しているが、小破片で磨滅しているため「小の原遺跡」からの流れ込みと考えられる。「戸入村平遺跡」・「追分遺跡」では少量ながら押型文土器や繊維土器が出土している。

前期では東谷・西谷両筋に9遺跡が分布する。東谷筋では、「櫨原村平遺跡」・「尾元遺跡」・「上原遺跡」・「小屋どこ遺跡」などが知られている。特に平成2年度から発掘調査を継続している「上原遺跡」では、北白川下層式土器や蝶形石器・糸巻形石器と呼ばれる異形石器を検出していたが、今年度の調査で北白川下層式・諸磯式土器を伴う住居跡1軒を初めて検出した。西谷筋の「小の原遺跡」では、住居跡や集石炉を検出し、前期全般にわたる大量の遺物が出土している。土器を見ると、前期前半では東海系の清水ノ上I・II式土器が主体をなす。後半では関西系の北白川下層式土器やこの影響を強く受けた在地系のものが主体となり、関東系の諸磯式土器は列孔文土器が主で他のものは非常に少ない。「いんべ遺跡」では、平成2年度の発掘調査で前期前半までの集石炉跡と土器を確認した。他に「はいづめ遺跡」で若干の遺物を検出している。

中期になると遺跡数が14に増大する。東谷筋では、「塚奥山（宮ヶ原）遺跡」や「上原遺跡」などのように面積的に広く、大集落が営まれていた可能性の高い遺跡がある。平成2年度から発掘調査を継続している「上原遺跡」では、集落跡を検出しており、土器・石器も大量に出土

している。また、平成4・5年度に発掘調査した「山手宮前遺跡」では、中期後半を中心とした住居跡を検出し、このうちの2軒は埋甕を伴っていた。ともにまだ未整理の段階のため、詳細は今後の整理を待ちたい。このような大集落の営まれていた遺跡が存在する一方で、平成2年度に発掘調査した「下開田村平遺跡」や「磯谷口遺跡」のような小規模な遺跡も散在する。「下開田村平遺跡」では住居跡を1軒検出したが、遺物量は少なく遺跡の範囲も狭い。「磯谷口遺跡」も遺跡の範囲は狭く、遺物は出土したが遺構は検出できなかった。また「塚遺跡」は平成2・3年度に発掘調査を実施し、中期の住居跡・配石遺構のほか、土器・石器なども大量に検出した。平成4年度に発掘調査した「上開田村平遺跡」でも中期後葉の土器を検出している。「櫨原村平遺跡」・「石橋遺跡」・「小屋どこ遺跡」なども採集資料からこの時期の遺跡と思われる。西谷筋では、「戸入村平遺跡」が中心であり、中期後半の住居跡を8軒検出した。土器を見ると東海系・関東系・信州系・関西系・北陸系のものが混在する。詳細については、本書の第4章で述べることとする。また、「いんべ遺跡」では、中期後半の関西系の里木II式土器や東海系の土器が出土している。このように、中期になると遺跡が増大するが、中期後半の遺跡が多い。

後期になると一般的に遺跡数は減少する傾向であるといわれているが、徳山地区では後期に属する遺跡は11遺跡確認されており、この傾向は認められないと思われる。東谷筋で発掘調査によって確認されたのは、「塚遺跡」・「上原遺跡」・「上開田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」である。「塚遺跡」・「上開田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」では、後期前葉の磨消縄文系土器と縁帯文系土器が多数出土している。「上原遺跡」では、この時期の遺構として住居跡1軒と土器棺墓1基を検出し、土器も多数出土している。表採資料では「塚奥山（宮ヶ原）遺跡」・「櫨原村平遺跡」・「小屋どこ遺跡」などがある。西谷筋では「戸入村平遺跡」・「いんべ遺跡」・「はいづめ遺跡」・「追分遺跡」がある。「戸入村平遺跡」では、土器棺墓を4基検出した。土器棺には、中津式・福田KII式の土器が用いられていた。また、関東系や東海系・北陸系の土器が出土している。詳細については、本書の第4章で述べることとする。「いんべ遺跡」でも後期前半の土器が出土している。

晩期になると東谷筋では、発掘調査が進んでいないため明確には言えないが、遺跡の規模が縮小すると思われる。この筋では、「塚奥山（宮ヶ原）遺跡」・「塚遺跡」・「櫨原村平遺跡」・「上原遺跡」・「小屋どこ遺跡」・「長吉遺跡」・「下開田村平遺跡」がある。「上原遺跡」では、平成2・3年度の調査で大洞系の土器や土器棺墓を検出した。「長吉遺跡」・「上原遺跡」・「下開田村平遺跡」・「山手宮前遺跡」でも樫王式土器が出土している。西谷筋には「はいづめ遺跡」14基、「戸入村平遺跡」7基、「いんべ遺跡」11基と大量にこの時期の土器棺墓を検出した。「はいづめ遺跡」で検出した土器棺墓は、晩期後半の五貫森式期から下り松式期のものと考えている。また、関東系の大洞式土器なども出土している。「戸入村平遺跡」で検出した土器棺墓は、東海地方で

は、稲荷山式から西之山式、畿内では、滋賀里Ⅲb式に併行する資料と考えられる。詳細については、本書第4章で述べることとする。「はいづめ遺跡」で3軒の住居跡を検出した以外に他の遺跡では現在のところ住居跡は検出していない。なお、「追分遺跡」でも少量の土器が出土している。

弥生時代　弥生時代の遺物を出土している遺跡は、現在のところ、「はいづめ遺跡」と「上原遺跡」だけである。「はいづめ遺跡」では、前期の遠賀川系土器が2個体とその他のものが出土している。遠賀川系土器は土器棺墓として使用されていた。また、「上原遺跡」でも数点の遠賀川系土器片が出土しているが、未整理のため、詳細については今後の課題である。したがって、この時代の徳山地区の様相については、資料が少ないため、今後の調査の進展によって明らかにされることを期待したい。

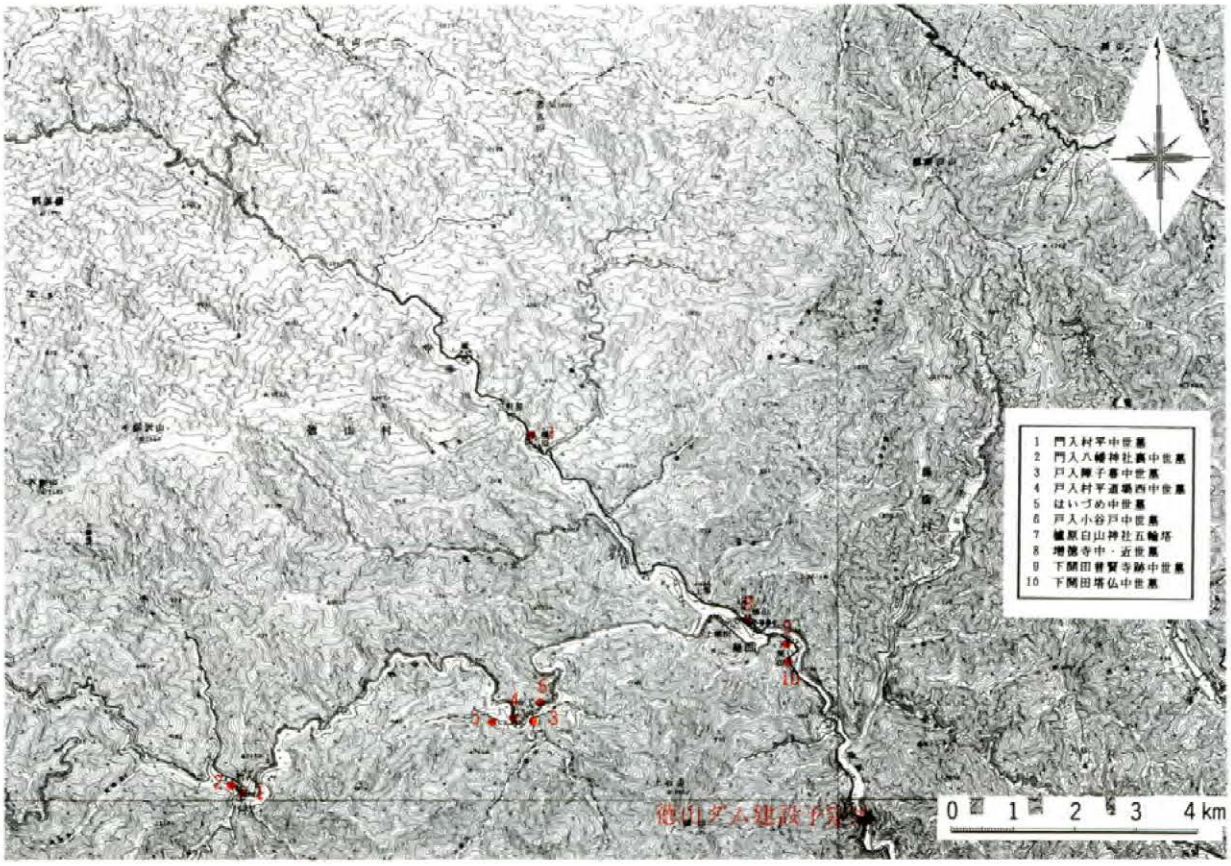
第2表　旧徳山村地内の縄文以外の遺跡一覧

No.	遺跡名	古代	中世	近世	不明	遺構	遺物	備考	
4	戸入村平		◎	◎			天目茶碗・銭貨・陶磁器類他	S63·H1年度発掘調査	水没地区内に所在し発掘調査を実施する遺跡
5	戸入障子暮		◎	◎		中世墓	古瀬戸瓶子・近世陶器他	H1年度発掘調査	
6	追分	△		△			須恵器・近世陶器他	H1·2年度発掘調査	
7	塚奥山			○					
8	塚		○	○			中近世陶磁器・銭貨	H2・3年度発掘調査	
10	櫨原村平			○					
13	磯谷口	◎					須恵器・灰釉陶器他	H2年度発掘調査	
26	寺屋敷跡	○				礎石建物跡	灰釉陶器・鉄製角釘	H5～発掘継続中	
14	山手宮前		○	○		掘立柱建物跡	山茶碗・中近世陶磁器・銭貨	H4·5年度発掘調査	
16	上原	○	○	○		掘立柱建物跡	須恵器・灰釉陶器など	H2～発掘継続中	
17	本郷		○	○					
27	徳山城跡		○			中世城館跡			
28	徳山陣屋跡		○	○		近世陣屋跡			
29	城山城跡		○			中世城館跡			
18	上開田村平		○	○		中世墓・厠跡	山茶碗・中近世陶磁器・銭貨・和鏡	H4年度発掘調査	
30	善賢寺跡		△			伝中世寺院跡。遺構検出できず。	寺院跡に伴う遺物検出できず。	H3年度発掘調査	
19	下開田村平	△	△	○			須恵器・山茶碗・中近世陶磁器	H2年度発掘調査	
34	七平城跡		○			中世城館跡			
31	入谷村跡			○		集落跡			水没地区以外の遺跡
32	こうもり穴				○				
33	弘法穴				○	水銀採掘鉱山跡			
21	門入村平			○		集落跡			
23	石橋	○							

＊アミカケの遺跡は、平成5年度までに発掘調査を終了したもの。
＊表内の○・◎・△は、発掘調査で出土した土器を中心とする遺物の量による。ただし、未調査遺跡については、徳山村の歴史を語る会（1984）、篠田通弘（1986）による。
＊No.は、第2図の遺跡番号に準ずる。

古　　代　平成5年度から発掘調査の始まった「寺屋敷跡」で、平安時代の礎石建物跡が検出され、平安時代後期の灰釉陶器や鉄製の角釘も多数検出した。また「磯谷口遺跡」・「上原遺跡」・「下開田村平遺跡」・「追分遺跡」でも、須恵器や灰釉陶器が出土し、「石橋遺跡」でも表採されている。「磯谷口遺跡」については、「寺屋敷跡」との関連が注目される。なお、「磯谷口遺跡」では、土坑より瓦器（黒色土器）が1点出土している。「上原遺跡」では、掘立柱建物跡が検出されたが、柱穴から灰釉陶器片が出土したため、この時期の遺構と考えられる。「下開田村平遺跡」・「追分遺跡」・「山手宮前遺跡」でも若干の遺物が出土しているが、この時代の状況は不明である。

中世以降　中世以降の遺跡としては、中世墓の「戸入障子暮遺跡」・「徳山城跡」・「城山城跡」・「徳山陣屋跡」がある。「戸入障子暮遺跡」では既刊の第2集で述べているように、蔵骨器として使われた鎌倉時代末期の古瀬戸瓶子を検出した。これに対して、この遺跡の対岸の「戸入村平遺跡」の発掘調査では、宋銭や明銭、大窯期以降の陶磁器類は出土しているが、それ以前の遺物は確認していない。詳細は、本書第5章に述べることとする。このほか「下開田村平遺跡」ではこの時期の遺構は検出できなかったが、山茶碗や陶磁器類の小破片を検出した。平成3年度に発掘調査した「普賢寺跡」では、古瀬戸、瀬戸美濃系陶器が若干出土している。また、平成4年度に発掘調査した「上開田村平遺跡」では、中世墓・和鏡・宋銭多数（さし銭）や厠跡



第3図　旧徳山村地内の中世墓分布図

が、また平成4・5年度に発掘調査した「山手宮前遺跡」でも、宋銭多数（さし銭）や掘立柱建物跡が検出されたが、詳細は今後の整理を待ちたい。なお、平成2年度から発掘調査を継続している「上原遺跡」でも、多くの山茶碗が出土し、また、厠跡を検出している。

1）　戸入障子暮遺跡は『改訂版・岐阜県遺跡地図』（平成2年3月　岐阜県教育委員会）では戸入障子暮中世墓（中世墓）と障子暮遺跡（縄文時代遺物散布地）の2遺跡として登録されている。そのため遺跡数は35になる。

（第3集の「歴史的環境」を小谷和彦が加筆・修正）

第3表　旧徳山村地内の中世墓一覧

No.	名　　称	旧　所　在　地	備　　考
1	門入村平中世墓	揖斐郡藤橋村大字門入 字門入2071-1	門入集落の入口の墓域の一角に2群からなる五輪塔4基が建つ。1基は総高30cmの一石五輪塔。1基は地輪・水輪・火輪・風輪・空輪ともよく残る総高39cmの五輪塔。1基は台石に火輪がのるだけのもの。1基は地輪が失われているが、自然石の台石に水輪・火輪・風輪・空輪が残るもの。
2	門入八幡神社裏中世墓	〃　藤橋村大字門入 字門入2166-1	八幡神社境内地の本殿裏の一段高くなったところに前列に五輪塔2基、後列に宝篋印塔3基が建つ。宝篋印塔は右端のものが宝珠と請花が欠失する他はほぼ完全に残っており、姿体は秀美である。
3	戸入障子暮中世墓	〃　藤橋村大字戸入 字障子暮552-2	宝篋印塔1基、五輪塔2基および自然石を利用した墓石からなる。宝篋印塔の前庭部に頸部を打ち欠いた古瀬戸瓶子が蔵骨器として転用され埋納されている。宝篋印塔は露盤と塔身のみが残る。五輪塔は一石五輪塔であり、全高42cmを測る。
4	戸入村平道場西中世墓	〃　藤橋村大字戸入 字村の内163-12	宝篋印塔1基、五輪塔1基、道祖神1基からなる。傍らの自然石に「(表銘)当区歴代道場坊之碑(裏銘)昭和二十八年三月二十八日喜寿記念広瀬新次郎」と刻された碑が建ち、これら中世墓の基壇もこの時に再整備されたものとみられる。宝篋印塔は相輪部が残り、塔身・基礎部は五輪塔の転用である。五輪塔は各輪ともよく残り、総高55cmを測る。
5	はいづめ中世墓	〃　藤橋村大字戸入 字ハヒツメ715	宝篋印塔1基が祀られる。宝珠・露盤・塔身・基礎が残り、現存高50cmを測る。露盤の馬耳形突起が直立し、古い様式を留めている。
6	戸入小谷戸中世墓	〃　藤橋村大字戸入 字小谷戸467-89	宝篋印塔1基が祀られる。宝珠・塔身・基礎が残り、現存高38.5cmを測る。宝珠が塔身上に逆置されている。
7	櫨原白山神社五輪塔	〃　藤橋村大字櫨原 字村平230-1 境内地の内	水輪・火輪のみ残る。傍らに自然石に陰刻された「奉納仁田四郎由定烏山神社五月廿八日ハセ原村中」の碑が建つ（年号不詳）。
8	増徳寺中・近世墓	〃　藤橋村大字徳山 字村平360　墓地の内	徳山村内で唯一の宗教法人である曹洞宗増徳寺の境内に墓域が設けられ、中世以降の墓碑が建っている。
9	下開田普賢寺跡中世墓	〃　藤橋村大字開田 字村ノ内145，146	中世の寺跡と伝えている普賢寺跡の一角に、近世以降の墓碑に混じって3基の五輪塔が建っていたと伝えるが、分布調査においては確認されなかった。
10	下開田塔仏中世墓	〃　藤橋村大字開田 字北野64-1	かつて宝篋印塔が建っていたが、昭和46年に盗難にあい、今日では所在不明である。

（『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書』昭和60年3月 岐阜県教育委員会より）

文献等より見る古代中近世の徳山

律令下の西濃地方北部は、揖斐川を境として、右岸を池田郡、左岸を大野郡に区分し、徳山の地も東西に二分されている。「徳山」関係の史料は、江戸時代以降のものがほとんどである。近代以前の集落の地名として、揖斐川上流東谷左岸に「塚」・「櫨原」・「徳山（本郷）」が、東谷右岸に「山手」・「池田（上開田）」・「漆原・志津原（下開田）」、西谷に「門入」・「戸入」が挙げられている。徳山の古代については、史料がないため不明な部分が多い。「徳山」関係の地名が史料に現れるのは、『美濃神名帳』（天慶～天徳［947～957］年間の頃に修撰された官簿）の「山手」集落の加茂神社の記載が最初である。『揖斐郡史』・『徳山村史』では、「上開田（池田）」の六社神社の造立は保元元（1156）年としている。

平安時代のこの地方の歴史を解く鍵の一つに、白山信仰がある。この信仰は岐阜・石川県境の白山を中心に、僧泰澄によって開かれた山岳宗教である。平安末期に成立した『白山之記』には天長9（832）年に美濃・加賀・越前に信仰の三馬場を開いたと記している。『文徳天皇実録』には元慶8（884）年の僧宗叡による白山修行の記事があり、平安初期に白山がすでに山岳修験 の霊場として著名であったことを示している。越美山地で最も標高の高い能郷白山は、福井県大野市・岐阜県根尾村・藤橋村（徳山）の境界に位置し、白山を中心とする広域な山岳修験の霊場の一つと位置付けられていたと考えられる。僧泰澄の開山と伝える能郷白山神社は、根尾村能郷にあり、能郷白山信仰の中心馬場として栄えた。越前馬場の福井県勝山市の白山平泉寺への道は、温見峠（能郷～温見）を越えて通じている。能郷と徳山は同じ大野郡に含まれ、江戸時代にはともに旗本徳山氏の領地であり、歴史的に密接な関係を持つ両地の往来は、能郷白山信仰が展開された時代にも活発に行われていたと考えられる。「塚」・「本郷」・「櫨原」にあった白山神社の神像には、いずれも興国元（1340）年の銘文があり、能郷白山信仰が南北朝時代にも徳山に浸透していたと考えられる。平成4年度に発掘調査された上開田村平遺跡から14世紀頃の鋳造と考えられる和鏡（松鶴鏡）一面と、「さし銭」の状態で唐代の「開元通寶」9枚・宋銭21種の78枚が出土した。今後の整理と調査を待たねばならないが、能郷白山信仰との関連も推測される。徳山でこの信仰がどのように展開していたかは不明である。『徳山村史』によれば、「下開田」集落にあった普賢寺は真言宗の寺院と伝え、山岳信仰との結びつきが考えられる。普賢寺跡の発掘調査は平成3年度に完了しているが、信仰に関連した遺構・遺物については確認されていない。

徳山・根尾の地が、南北朝抗争の中で南朝方の拠点の一つであったことは、『太平記』等に記載されている。「櫨原」には新田義貞の櫨原死亡説伝承が残されている。越前で再挙を計った義貞が、越前藤島での敗北後徳山の地で没したという。勿論、この説は伝承の域を出ないが、この時代に美濃［杉ノ谷］峠（徳山～福井県大野市）・冠峠（徳山～福井県池田町）・檜尾峠（徳山～ 福井県池田町）・高倉峠（徳山～福井県今庄町）等を経由した徳山と越前の往来が想定で

きる。

近世における徳山と隣国との往来は、東谷から越前への街道の他、西谷の「門入」からホハレ峠を越え坂内村に入り、八草峠を経て近江の木之本へ通ずる街道がある。追分遺跡では、少量の須恵器や中近世の陶片が出土した。西谷下流の「追分」は、東谷右岸を遡り「山手」・「塚」から越前への街道と、「上開田」・「徳山（本郷）」・馬坂峠を経て「能郷」への街道の分岐点にあたる。近江・越前・能郷へ向かうこの地は、その出土遺物等から中世以前よりの往来の可能性を示している。西谷の集落形成は14～15世紀頃と考えられる。「門入」の八幡神社の鰐口には、文明８（1476）年銘が刻まれている。昭和63・平成元年度の戸入村平遺跡の発掘調査では、古瀬戸の陶片と宋・明銭等が出土している。『揖斐郡史』には、永享３（1431）年の山の年貢、永享６（1434）年の畑作・土地所有・麻作・狩猟等に関する史料が記載され、はしはら・やまて・いそたに・さもと・とにゅう・かんたに・つかなどの地名も確認できる。

古代・中世に栄えた白山信仰は、蓮如を中心とした浄土真宗本願寺派の布教活動の前に衰退していく。徳山へも越前との各峠道を通り浄土真宗の勢力が浸透してくる。中世以降、徳山では殆どの住人が浄土真宗に転宗し、在地の人々の手で作られた道場を中心に展開していく。近世以降各道場は、越前にある誠照寺派西福寺、根尾村にある誠照寺派専念寺・西本願寺派西光寺に属している。

戦国時代以降、土着の豪族として「徳山」を支配していたのは、鎌倉・室町時代に美濃国守護の土岐氏の支族、徳山氏である。『徳山村史』によれば、徳山氏が活躍し始めたのは、室町時代の応永年間（1394～1427）以降としている。徳山氏の家系図によると永享10（1438）年頃に、本郷の徳山氏の菩提寺である増徳寺（曹洞宗）の記載があり、徳山氏の出現とほぼ一致する。戦国時代の徳山氏は、美濃国に在住しながらその地理的環境から越前との結びつきも強く、東海地方の勢力に左右されない行動をとっている。戦国期の道三・信長の頃でもこの様相の変化はない。

江戸時代、徳山氏は徳山の領地（約800石）が安堵されたのに加え、各務郡更木領（約4,300石）を新たに封ぜられ、5,000石の旗本となった。これに伴って、徳山の地には徳山陣屋が設けられ、大政奉還に至るまで代官と在地の庄屋によりその統治が行われている。なお、西谷に関する最古の記録として、「戸入」の六社神社に寛文５（1665）年の造立をしるす棟札がある。

江戸時代初期の古文書に現われる徳山氏領の村名として、徳山の「徳山（本郷）」・「山手」・「櫨原」・「塚」・「漆原・志津原（下開田）」・「池田（上開田）」・「戸入」・「門入」の８ヶ村と根尾の「能郷」の名が記録されている。　（鈴木　昇）

第２章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至るまでの経緯

徳山ダム建設は、昭和32年電源開発株式会社が発電を主目的に建設計画を発表した。その後、伊勢湾台風をはじめとして相次ぐ下流域の大出水により、昭和46年度からは、建設省が引き継いで調査を行ってきた。昭和48年３月木曽川水系の水資源開発基本計画の変更により、水資源開発公団が事業を実施することになった。

ダムは、流水の正常な機能の維持、水道用水および工業用水の供給、ならびに発電を目的として建設する多目的ダムで、ロックフィル形式である。貯水容量は６億６千万m³、堤高は161mである。このダム建設により、洪水満水位水没線は海抜401mとなり、旧徳山村のほぼ全戸が水没（門入地区だけが水没からまぬがれる）することとなった。当然埋蔵文化財のほとんどが湖底に沈むことになる。

このため、昭和58年10月12日に、水資源開発公団徳山ダム建設所長より遺跡の分布調査の依頼があった。これを受けて岐阜県教育委員会は、昭和59年10月２日から11月17日にかけて、文化庁の昭和59年度国庫補助事業として分布調査を実施した。昭和60年３月にはこの調査に基づき、『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書』を発刊した。

さらに、昭和60年５月９日、水資源開発公団徳山ダム建設所において、徳山ダム水没地内埋蔵文化財発掘調査計画のための打ち合せを行った。昭和60年夏から秋にかけて発掘調査計画策定のために、岐阜県文化財保護審議会委員（当時信州大学教授、現在愛知学院大学教授）の大参義一氏の指導のもとに、数回の現地調査を実施した。以上の調査結果に基づき、昭和61年３月17日、徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査計画書を水資源開発公団に提出した。

昭和61年４月７日、水資源開発公団から岐阜県に対し、昭和61年度の発掘調査の委託契約締結の依頼があり、これを受託した。岐阜県教育委員会は、昭和61年度の発掘調査を「はいづめ遺跡」2,007m²の調査面積のうち600m²に限定して実施した。徳山ダム建設に伴う水没地区内の埋蔵文化財の発掘調査は、昭和61年度から平成９年度までの長期にわたる発掘調査である。このため、昭和61年度の発掘調査は、協定書締結のための基礎資料を得る意味も合わせ持った試行的発掘調査となった。

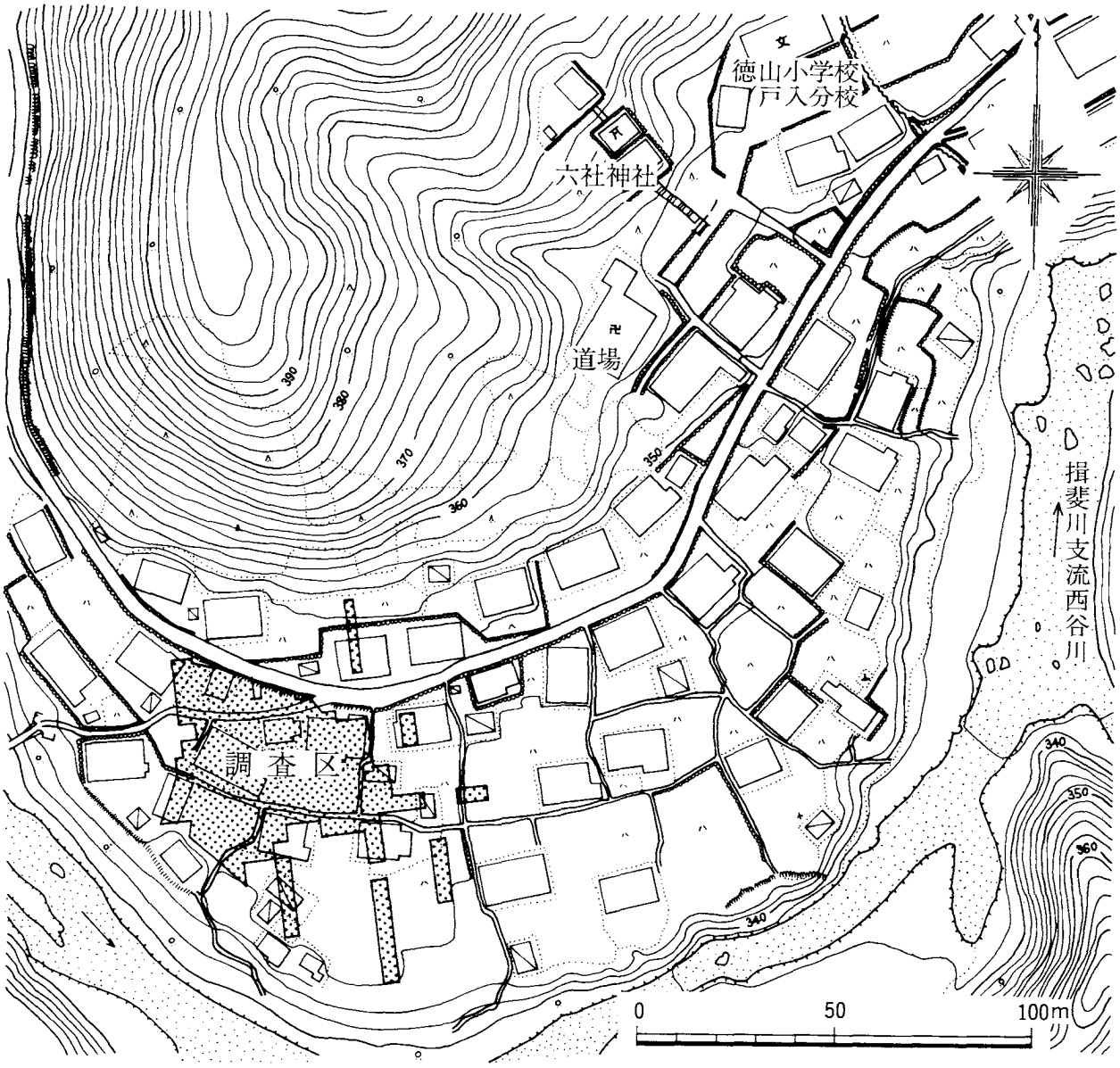
昭和62年３月27日、計画書の一部手直しを行い、水資源開発公団と岐阜県の間で「徳山ダム建設事業に伴う水没地区埋蔵文化財発掘調査に関する協定」を締結した。岐阜県教育委員会では、この協定書に基づき、昭和62年度から発掘調査を実施することになった。

「戸入村平遺跡」は、協定書に基づき、昭和63年度と平成元年度の発掘調査計画により実施した。昭和63年度に800m²、平成元年度に1,505m²の、合わせて2,305m²を発掘調査した。

平成3年4月1日、財団法人岐阜県文化財保護センターが発足し、水資源開発公団から岐阜県が受託した発掘調査は、財団法人岐阜県文化財保護センターが県より受託し実施することになった。この調査体制の変動と新遺跡の発見をふまえ、平成3年4月1日付で協定書の一部変更を行った。平成6年現在、その後の新遺跡の発見や遺跡面積の変動、徳山ダム建設工期の変更に伴い、現協定の変更に向けて協議を重ねている。

第2節　発掘調査の方法と経過

「戸入村平遺跡」は旧徳山村戸入集落の西端に位置する。廃村前は宅地および畑地であったが、調査を開始した昭和63年は、廃村から1年を経ており、家屋は解体され、荒蕪地となって



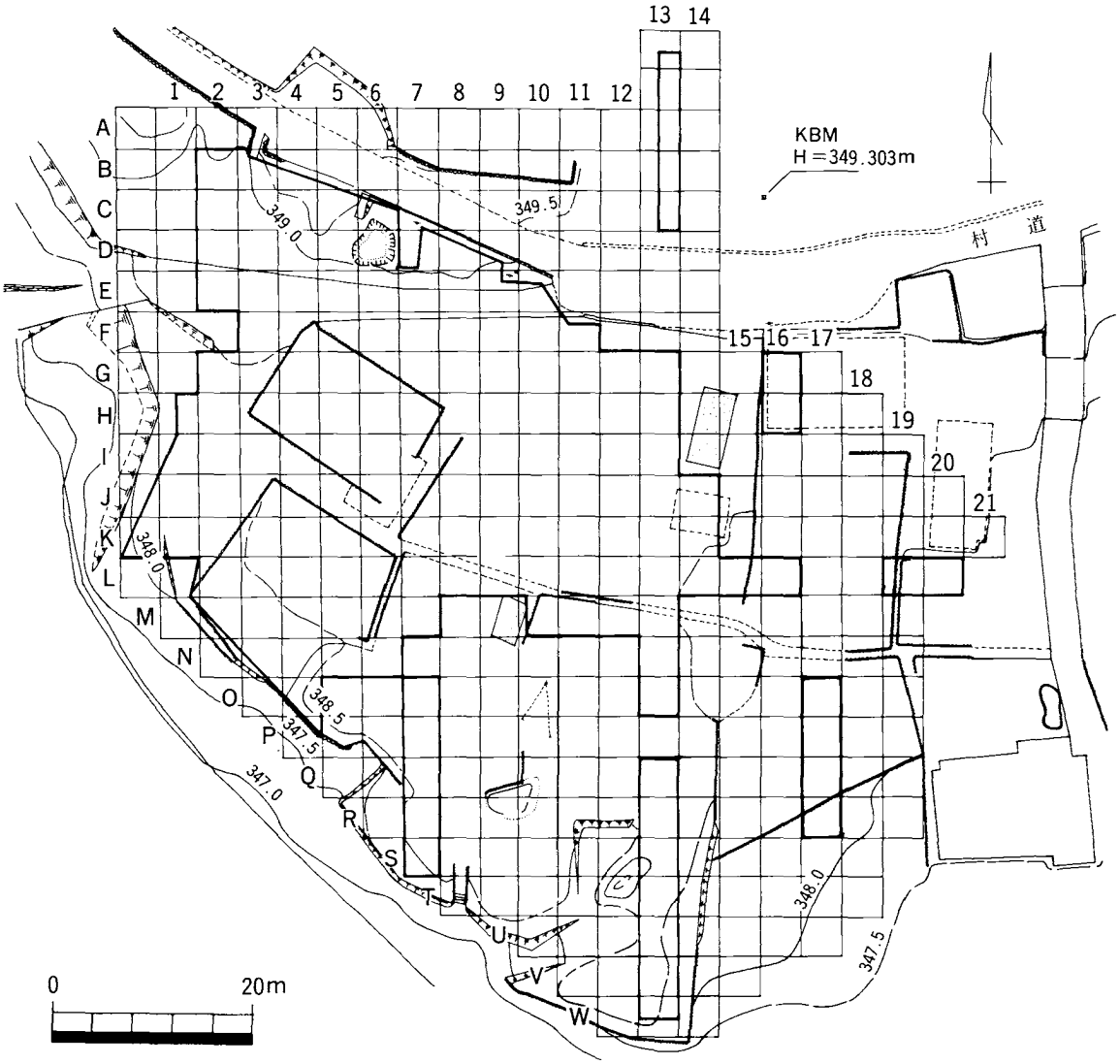
第4図　遺跡周辺地形図（1／2,000）

いた。当初の計画では、分布調査の結果に基づき、村道より南側を2,000m²調査する予定であった。

調査方法は、グリッドを設定し、グリッド単位のトレンチ発掘により遺跡範囲を確認し、面的に広げる方法をとった。グリッドは磁北に合わせて基線を設定し、４ｍ単位とした。遺跡範囲の広がりを考慮して、北西端を基点に、南方向にＡからアルファベットの大文字を、東方向に１からアラビア数字を順次付し、グリッドの北東のコーナー杭にグリッド名を記した。

掘削はすべて人力で実施し、一部の南北トレンチとコンクリートや敷石等の除去にのみ重機を使用した。

遺物の取り上げは、全体の進行状況を考え、遺構外のものはグリッド単位の層序別で一括して取り上げた。遺構のものは、平面分布とレベルを記録して取り上げるもの、遺構の区画単位で一括して取り上げるもの、遺構で一括して取り上げるものの３種の方法を使い分けた。調査



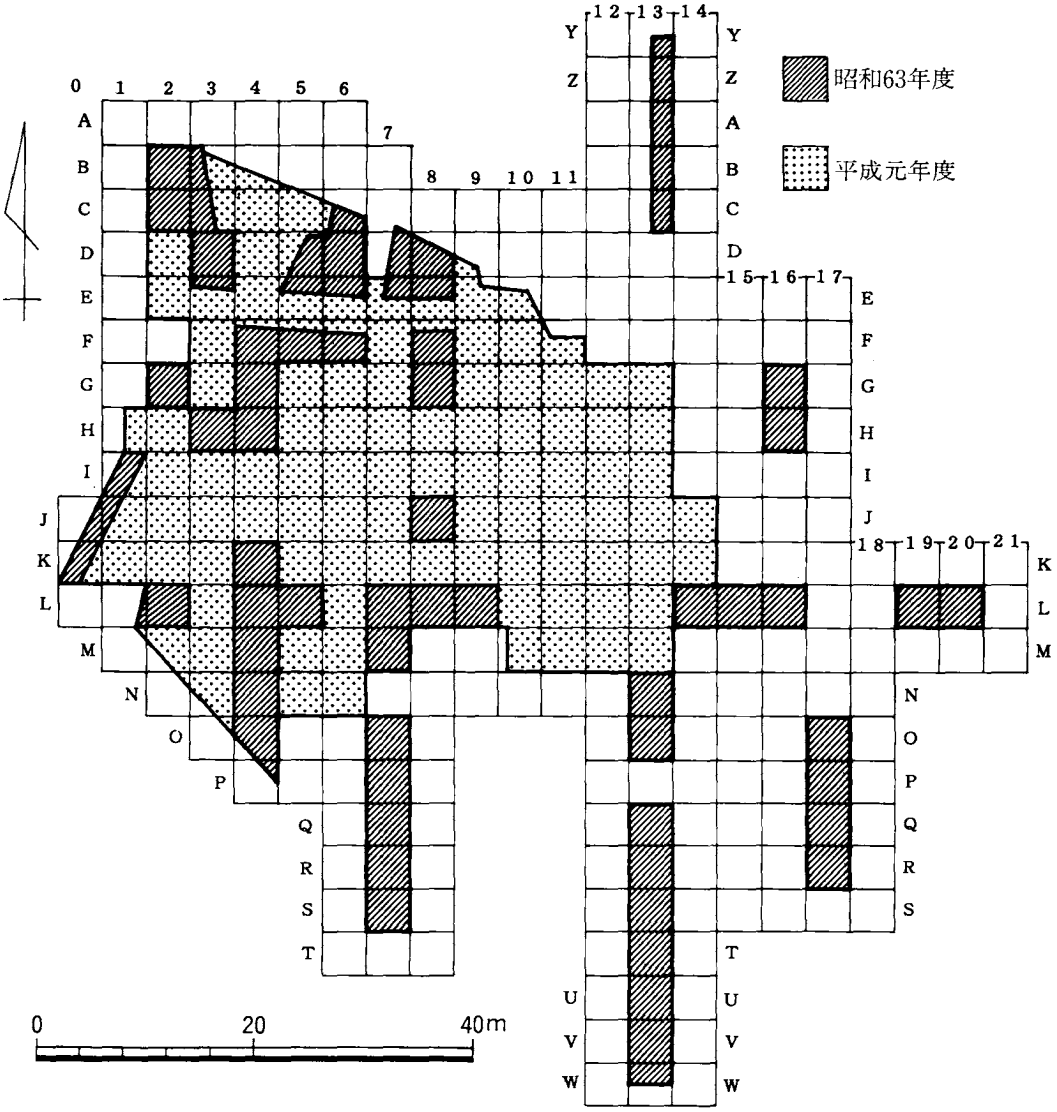
第５図　グリッド設定図

面積に対し、予想をはるかに上回る遺物量と複雑な遺構の検出状況が重なり、全体の進行は遅れ気味であった。そのため遺構についても一括の取り上げを余儀なくされる部分が多かった。その他、排土からの遺物や所属不明の遺物は、発掘区一括として処理した。

土層セクション図のほか、遺構の平面図・断面図・エレベーション図などは必要に応じて実測し、写真の記録をとった。なお、1,400余に上る土坑・ピットについては平面図と観察記録の作成のみに留めた。発掘区全体の遺構プラン図作成は完掘と並行して進め、発掘区全体写真の撮影はローリングタワーを組んで実施した。

次に発掘調査経過について簡単に述べておく。

昭和63年度は、対岸に所在する「小の原遺跡」の調査が面積拡大により遅れ、「戸入村平遺跡」の調査は10月4日から実施した。そのため当初計画を変更して、800m²の調査となった。第6図



第6図　年度別調査区域図

のように、遺跡の範囲を確定することと、遺構の有無および分布を把握することを主眼においたトレンチ調査となった。11月14日にひとまず作業を終了し、現場事務所を撤収した。現地での残務を調査員のみで11月17日まで行い、完了した。この年の調査で、土器棺墓３基を検出したほか、遺物量の豊富な良好な遺跡であることを確認した。

平成元年度は、1,200m²の調査計画で着手したが、遺跡面積の増大で、最終的に1,505m²を調査し、前年度分と合わせて2,305m²となった。現地調査は４月17日より始め、４月19日の鍬入れ式を以て正式に開始した。前年度のトレンチ調査のデータをもとにした全面発掘を進め、後述のように縄文時代中期の住居跡８軒のほか、多くの遺構と、約10万点の遺物を検出した。

６月２日からグリッドの畦を外す作業を開始し、順次セクション図の作成にはいった。住居跡をはじめとする遺構プランの検出・完掘に努め、８月24日から全体実測を開始した。なお、８月17日からは並行して「追分遺跡」の調査を開始したため、調査体制を二分することとなった。９月に入り、遺構の掘り下げがほぼ終了し、全体の清掃と実測を進めた。10月23日に遺構全体写真を撮影し、10月27日を以て作業員を動員しての調査を終了した。以後は調査員と補助調査員のみで残りの遺構の完掘と実測にあたった。

11月後半からは時雨や降雪の日が多くなり、作業は困難を極めた。12月20日、第４号住居跡の掘り下げ途中ながら、以後の調査は無理と判断し、遺構の保護を施して本年度の現地調査を終了した。

このような事情で、第４号住居跡の完掘と実測は、平成２年度に当該年度計画とは別に、前年度残務として実施した。

（武藤貞昭）

第3章　層　　序

蛇行しながら東へ下る西谷川は、戸入集落の背後の山にぶつかり、大きく南へ迂回する。最も南へ張り出した尾根を巡るように、川の流れは南向きから北東方向へ大きく変わるが、その左岸に舌状の河岸段丘が形成されている。この段丘上は戸入集落の上手部分にあたるが、戸入村平遺跡は段丘西部に位置する。

段丘西部は標高 348m台の平坦面であるが、段丘が開ける北西部分がやや高く、下手にあたる東はやや低くなる。段丘全体の土砂の堆積はさほど厚くなく、地山としている黄褐色土面まで、平均して約60cmである。山側である北ほど厚く、約80cmを測るが、遺跡の南端や東端では50cm弱となる。従来より宅地および畑地として利用されてきており、大規模な掘削は受けていないが、段丘南部に一部、掘削・整地の痕跡があった。

調査に伴い、７列東壁・Ｆ列北壁・Ｌ列北壁に堆積土層確認のためのセクションベルトを残し、土層断面を記録した。集落内の家屋およびそれに付随する施設等に伴う削平・掘削が、遺物包含層まで、ところによっては地山まで入っており、残存の良くない部分も随所に見られた。全体的には同じ様相を呈しており、基本的に、上部から第Ｉ層（表土･耕作土等）、第II層（暗褐色土層）、第III層（黒褐色土層）、第IV層（黄褐色土層、本遺跡での通称地山）に分けられる。各セクションベルトの土層断面図から代表的な部分を図示した（第７図）ので、これにより本遺跡の土層堆積を述べる。

第Ｉ層；表土および耕作土等がこれにあたる。場所によっては、宅地・路地等に伴う整地土も含めた。厚さ10～20cm程度である。

Ｉａ層；表土あるいは畑土にあたる。褐色土である。

Ｉｂ層；褐色土で亜角礫を多く含む。

Ｉｃ層；砕石混じりの青灰色土で、整地土である。

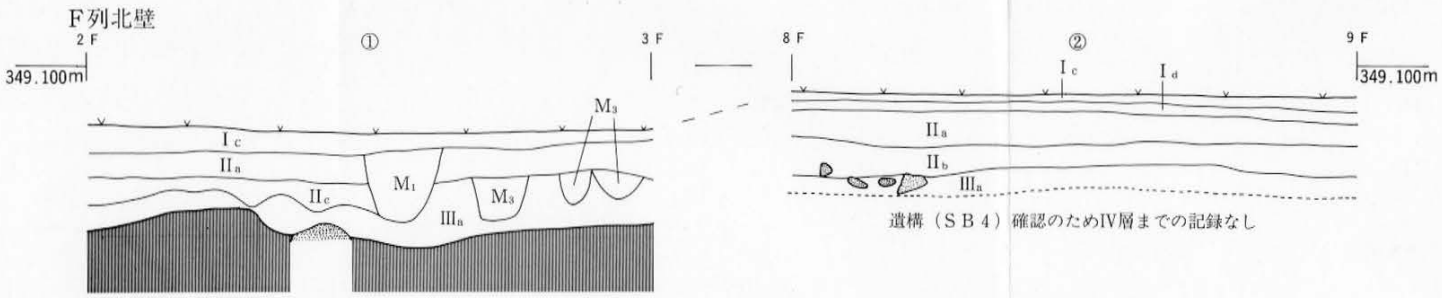
Ｉｄ層；砕石混じりの赤褐色土で、整地土である。

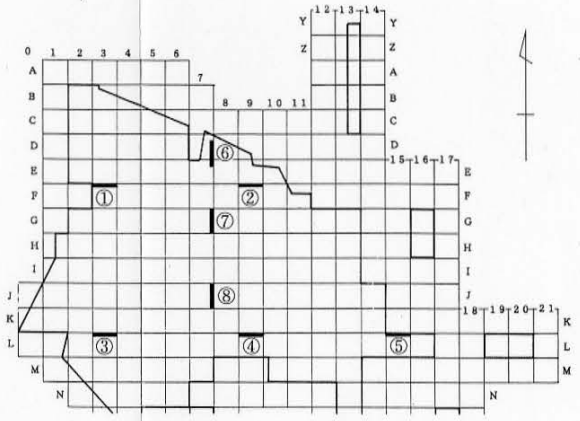
Ｉｅ層；砕石混じりの褐色土で、整地土である。

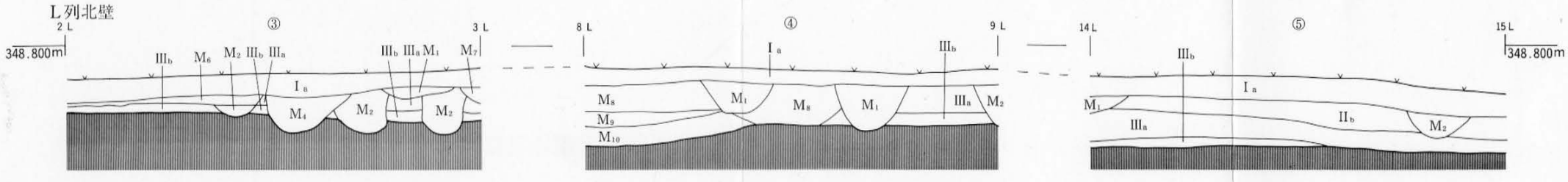
第II層；表土層の下に堆積している暗褐色土層で、基本的にしまりの強弱と遺物包含の度合からIIａ層とIIｂ層に分かれる。厚さ10～40cm程度である。

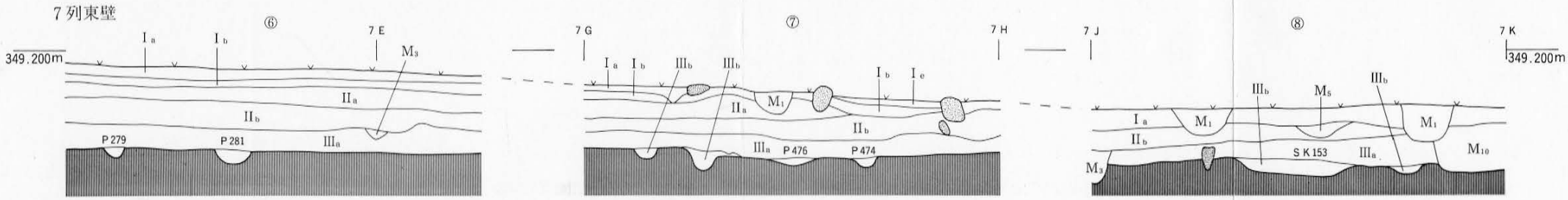
IIａ層；しまりの悪い暗褐色土で、径５cm以下の亜角礫を含む。遺物の包含はIIｂ層に比べ少ないが､縄文時代中期から近世までの様々な時代の遺物が混在している。Ｇ～Ｈ列より北側（山側）において厚さ10～30cm程度堆積し、Ｇ～Ｈ列以南では確認できない。

IIｂ層；しまりのある暗褐色土で、厚さ10～25cm程度ある。縄文時代中期～晩期の遺物を多く包含しているが、中近世のものも出土する。段丘の西端近くになると確認でき









Ⅰa 褐色土。表土あるいは畑土。
Ⅰb 褐色土。亜角礫を多く含む。
Ⅰc 青灰色土。砕石まじりの整地土。
Ⅰd 赤褐色土。砕石まじりの整地土。
Ⅰe 褐色土。砕石まじりの整地土。

Ⅱa しまりの悪い暗褐色土。φ5cm以下の亜角礫を含む。縄文時代中期から近世までの遺物を包含する。
Ⅱb しまりのある暗褐色土。縄文時代中期～晩期の遺物を多く包含している。
Ⅱc しまりのある暗褐色土。黄褐色土のブロックを含む。

Ⅲa しまりのある黒褐色土。Ⅲbとともに縄文時代中期の遺物を包含する。
Ⅲb しまりのある黒褐色土。黄褐色土のブロックを含む。

Ⅳ 黄褐色砂質土。地山である。（スクリントーン部分）

M1 褐色土。礫混じりでしまり悪い。中近世から現代のピット覆土。
M2 黄褐色土粒混じりの暗褐色土。しまり悪い。
M3 暗褐色土。炭粒が多く混じり、しまり悪い。
M4 黄褐色土粒混じりの褐色土。しまり悪い。
M5 Ⅱb層の土に多くの炭が混入。
M6 褐色土。炭が混入した整地土。

M7 黄色粘質土。井戸の石積みの貼り土。
M8 角礫を多く含む暗褐色土。
M9 角礫混じりの褐色粘質土。
M10 角礫混じりの黄褐色粘質土。

0 1 2 3 4 m

第７図　遺跡土層断面図　（１／50）

ない。

IIｃ層；しまりのある暗褐色土で、黄褐色土のブロックを含む。

第III層；第II層の下に堆積している黒褐色土層で、IIIａ層とIIIｂ層に分かれる。厚さ15～40cm程度で、縄文時代中期の遺物包含層である。

IIIａ層；しまりのある黒褐色土である。

IIIｂ層；しまりのある黒褐色土で、中に黄褐色土のブロックが随所に入る。

第IV層；本遺跡でのいわゆる地山とよんでいる土層である。黄褐色砂質土で、しまり・粘性ともある。円礫を含む。

以上の基本的層序のほかに、セクションベルトに認められた、土坑・ピットの覆土および人為的に埋め立てたと考えられる土層堆積は、一括してM層の表示にした。それぞれの様相は以下のとおりである。

Ｍ１；礫混じりの褐色土で、しまりは悪い。中近世から現代に至る比較的新しい時期のピットの覆土であると思われる。

Ｍ２；黄褐色土粒混じりの暗褐色土で、しまりは悪い。II層上から掘り込まれたピットの覆土に認められる。

Ｍ３；炭粒が多く混じる暗褐色土で、しまりは悪い。II層中あるいはIII層上から掘り込まれたピットの覆土に認められる。

Ｍ４；黄褐色土粒混じりの褐色土で、しまりは悪い。

Ｍ５；IIｂ層中にレンズ状に入った土層で、IIｂ層の土に多くの炭が混入している。

Ｍ６；Ｌ列西端の表土（Ｉａ層）下に入った土層で、炭が混入した褐色土である。整地土である。

Ｍ７；３Ｌ杭付近の表土（Ｉａ層）下に入った土層で、礫混じりの黄色粘質土である。井戸の石積みの外側の貼り土である。

Ｍ８～M10；７Ｋ杭付近から南に向かって扇形状に広がる地域で、表土（Ｉａ層）下に整地土が入る。扇形状の摺鉢状凹地は、II層・III層をはね、地山であるIV層まで掘り込んでいる。凹地を埋めている整地土に、上からＭ８～M10の３種類の土層が確認できる。

Ｍ８；角礫を多く含む暗褐色土。

Ｍ９；角礫混じりの褐色粘質土。

M10；角礫混じりの黄褐色粘質土。

（武藤貞昭）

第4章　縄文時代の遺構と遺物

第1節　概　　略

1．あらまし

「戸入村平遺跡」は、縄文時代中期から晩期までと中近世の複合遺跡である。これまで大きな開発から免れてきた反面、背後の山も安定しており、土砂等の堆積があまり進まない段丘上の集落内に所在しているせいか、現在までの人々の生活に起因する攪乱は多い。地山への掘り込みは、縄文時代の遺構ばかりでなく、現代の生活の痕跡も目立った。逆に縄文時代の住居跡の床面は、掘り下げて地山面にあたったところに設定している例が多い。黒褐色土におけるプランの見極めは困難を要し、炉石の検出で住居跡とわかる例が少なくない。調査における今後の大きな課題である。

このような事情で、縄文後期以降の明確な遺構については、土器棺墓を除いて検出できなかった。

今回の調査で検出した遺構は次のとおりである。

縄文時代中期後半の住居跡8軒、土器棺墓13基（後期4基・晩期7基・不明2基）、配石土坑1基（時期不明）、その他の土坑・ピット1,431である。

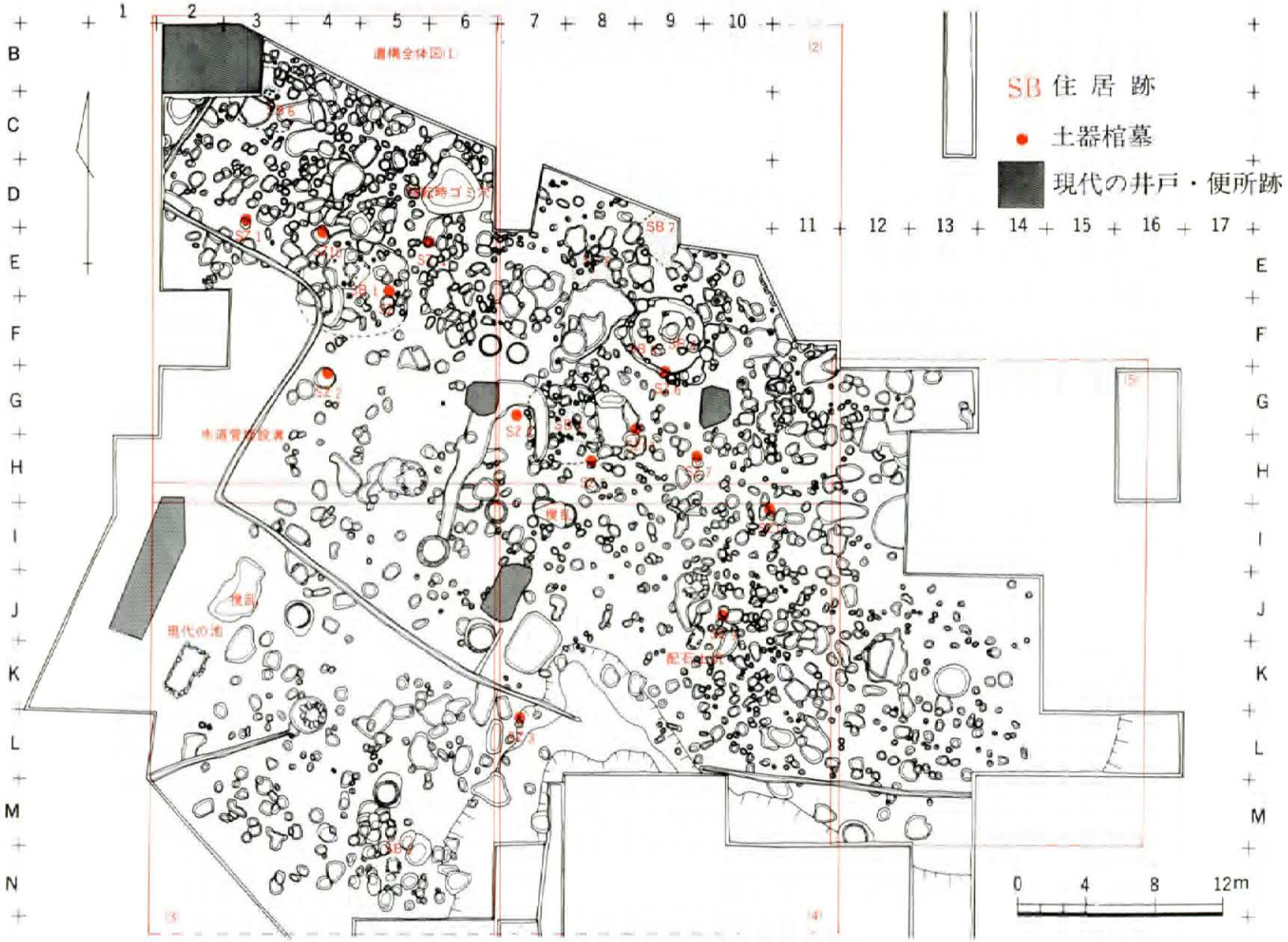
住居跡の配置は、第2号住居跡が調査区の南に位置する以外、北区に集中している。ただ、土坑・ピットの配置を見ると、調査区中央部の西半分はやや疎になり、そこを取り囲むように馬蹄形に濃密に分布しているようにとらえられなくもない。住居跡もその濃密な土坑・ピット分布域に重なっている。住居跡として検出できなかったものがいくつかある可能性があり、それらも含めて集落の復元を検討する必要がある。

土器棺墓もこの分布域に沿って構築されており、時代の差はあるが居住域と墓域の関係を考えていく検討材料になる。後晩期の住居跡が検出できなかったため、今後の課題としたい。

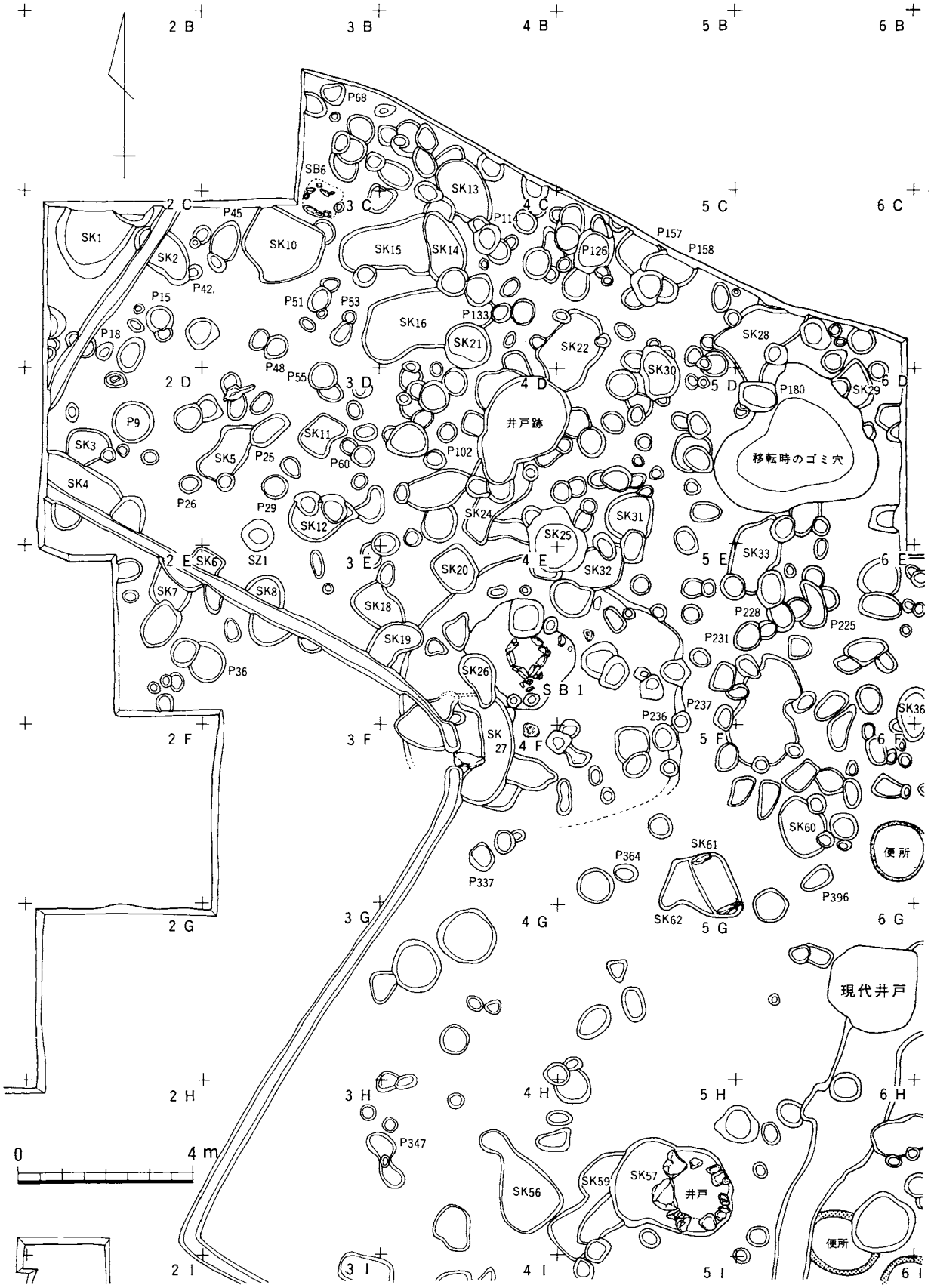
縄文時代の出土遺物は、総点数[1]95,906点の約98%にあたる93,587点である。内訳は、土器類が82,203点、石器類が11,384点である。土器で見ると、その9割以上が中期後半のものである。

2．縄文時代中期土器の分類

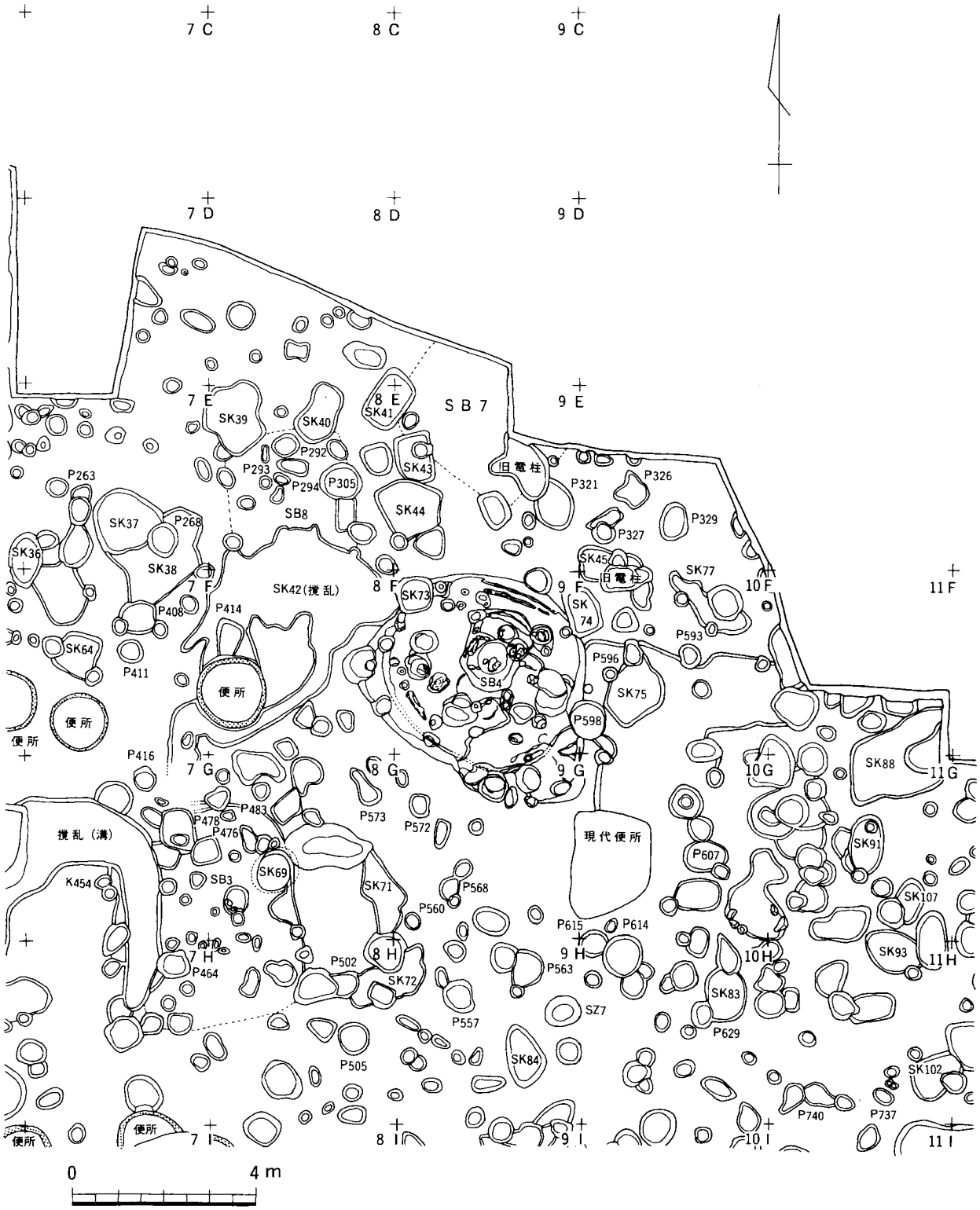
本遺跡出土の縄文土器は、早期・前期の小片を若干含むほかは中期中葉から晩期までの時間幅を有する。当地の地域的特性から多数の型式を含み複雑な様相を呈している。



第8図　遺構配置全体図

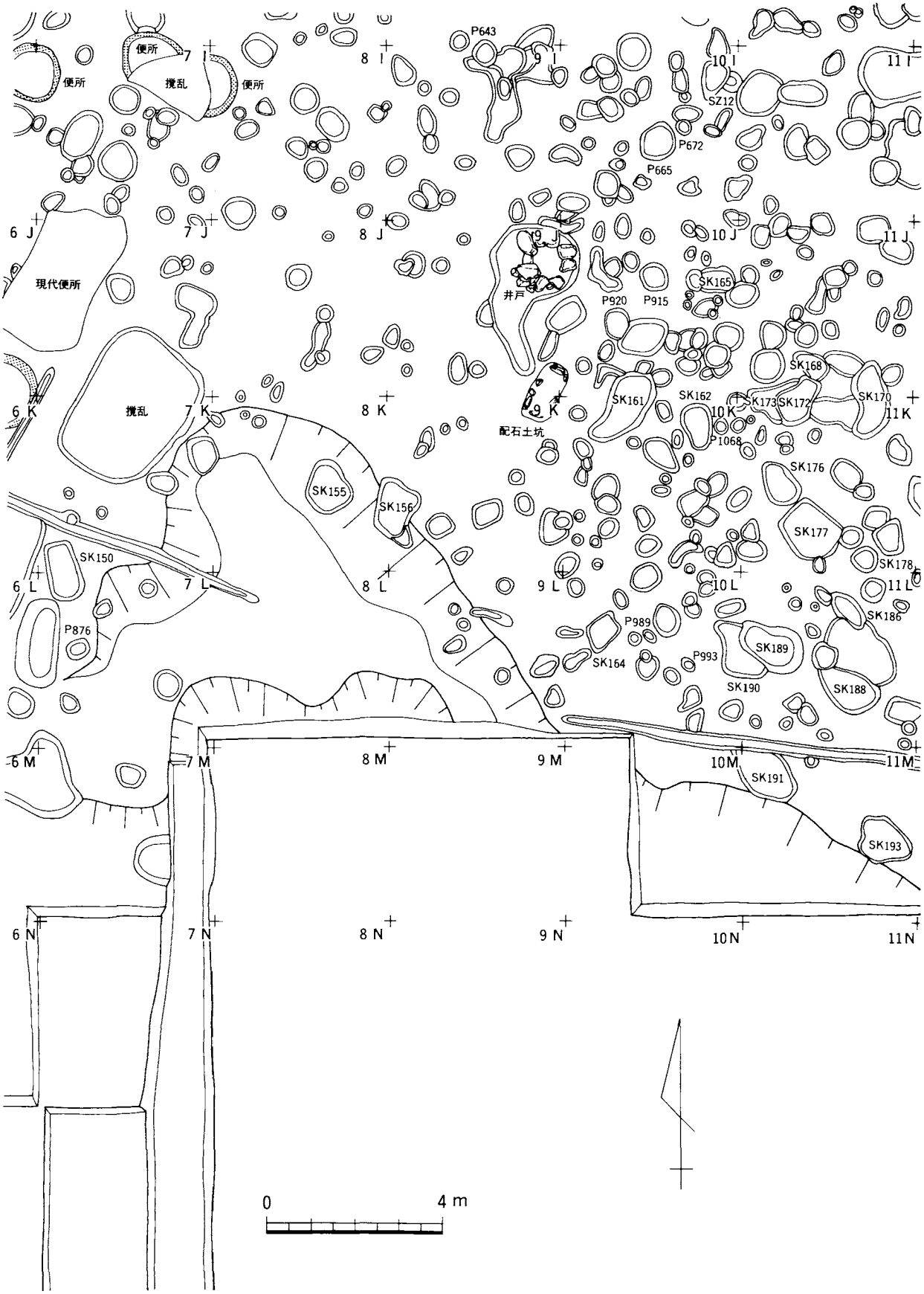


第9図　遺構全体図(1)　　(1／150)

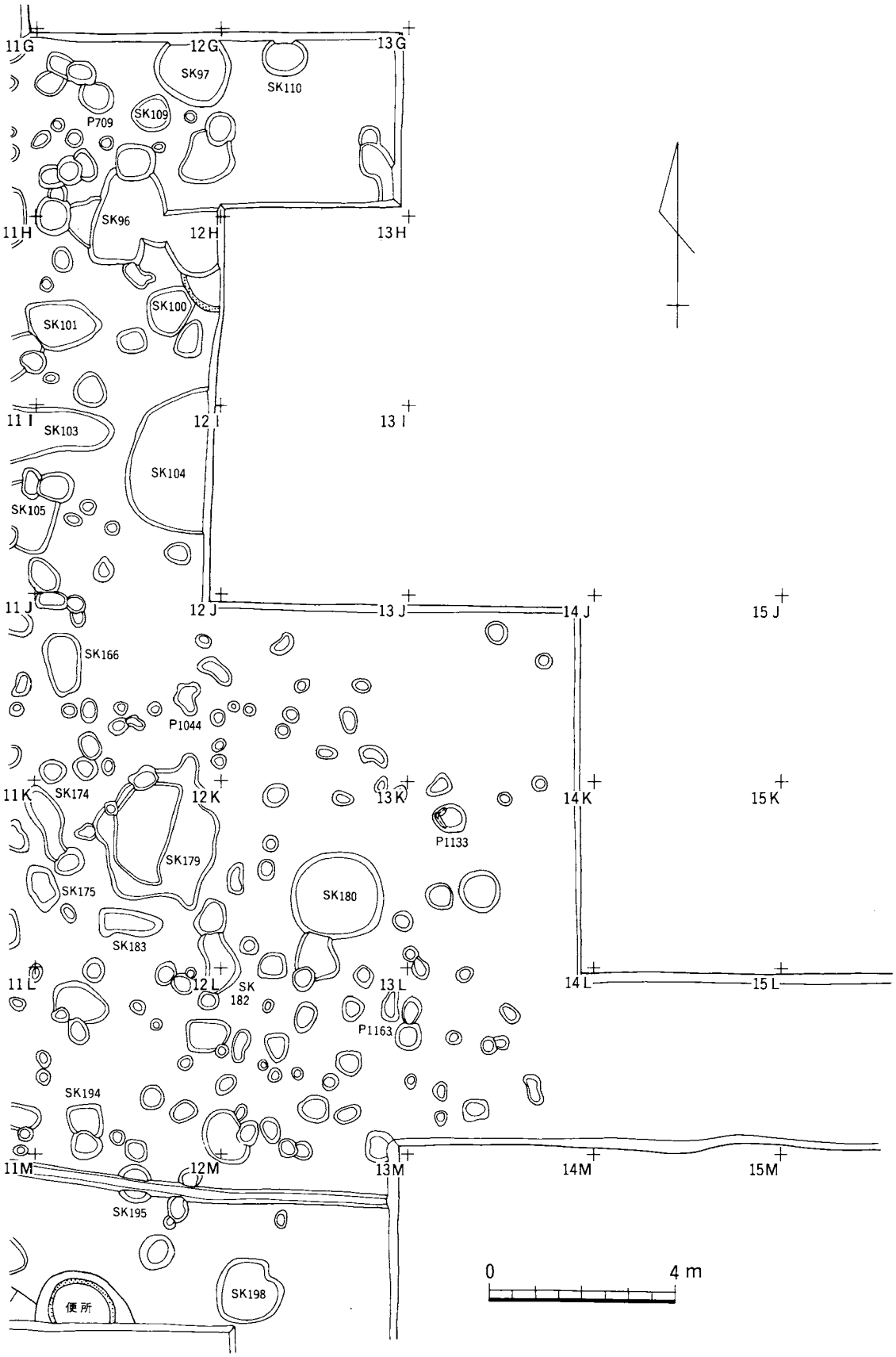


第10図　遺構全体図(2)　（1／150）

第11図　遺構全体図(3)　　(1／150)



第12図　遺構全体図(4)　　（1／150）



第13図　遺構全体図(5)　　(1／150)

今回の報告にあたり、遺構外出土土器も含めた総数82,203点について何度かの選別・抽出を行い、分類・整理に努めた。特に58,849点にのぼる遺構外出土土器の中にも良好な破片資料が多く、それらも含めて報告する方向でいた。しかし、時間的・予算的制約もあり、今回は遺構外出土土器の資料提示を断念せざるを得なくなった。とりわけ中期以外の土器については、遺構外出土分に依拠するところが多く、その分不十分な報告になることをお詫びしたい。

今回は、質・量ともに出土土器の中心を占める中期の土器について述べるが、前述のとおり遺構外出土分も含めて検討してきているので、分類の大枠については遺跡の中期全般の様相と異なる部分はないと考えている。

分類は、有文系土器を中心に、現在用いられている型式設定を適用しつつ、文様要素・文様構成・器形等により11群に分類した。なお、無文系深鉢形土器（無文土器・縄文土器・櫛描沈線文土器)、型式および小時期不明の土器、脚台部と底部については各々１群にまとめ、全体としては14群の構成とした。

各群の内容は次のとおりである。

Ｃ１群土器　船元II・III式に類似する土器。

Ａ類　縄文を地文とし、貼付隆帯に爪形文や刺突文・刻目によって文様を施す土器。

Ｂ類　縄文を地文とし、幅の狭い貼付隆帯の両側に半截竹管による平行沈線文を施す土器。

Ｃ類　縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線文を施す土器。

Ｄ類　地文が無文のもの。

Ｃ２群土器　船元III式が在地化したと考えられるもので、貼付隆帯による施文を基調とするキャリパー形口縁をもつ器形の土器。そのほとんどが島崎II式に分類されているもの。

Ａ類　隆帯に沿って隆帯間に櫛描沈線を施すもの。

Ｂ類　貼付隆帯のみで櫛描沈線が見られないもの。

Ｃ類　船元III－Ｅ式に分類されたものに類似し、太く短い沈線を施文するもの。

Ｄ類　地文が縄文で、その他のものを一括した。

Ｅ類　縄文を施さないその他のものを一括した。

Ｃ３群土器　貼付隆帯に沿って「く」の字状の押し引き（連続刺突文）を施す波状口縁の土器を典型とするもので、北屋敷式に類似する土器。

Ａ類　北屋敷式の典型的なもので、特徴的な「く」の字状の押し引きによる連続刺突文

を施すもの。

B類　口縁部文様帯に、半截竹管を伏せて引いた見かけ隆帯状の集合沈線文を施すもの。

C 4群土器　中期中葉の信州系の土器。

A類　勝坂式系の土器。

B類　平出III類A群に類似するもの。

C 5群土器　中期中葉の北陸系の土器。上山田式・古府式に類似するもので、半截竹管状工具による半隆起線文を主文様とするもの。

A類　古府式に類似する深鉢および台付鉢類。

B類　上山田式から古府式に類似する浅鉢類。

C 6群土器　船元IV式・里木II式に類似する土器。

A類　縄巻縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線文を施すもの。

B類　撚糸文を地文とし、半截竹管による平行沈線文あるいは沈線文を施すキャリパー形口縁をもつ器形のもの。

C類　撚糸文を地文とし、交互刺突による波状文を施すもの。

D類　地文が撚糸文で、B・C類にあてはまらないもの。

E類　撚糸文を施文するだけのもの。

F類　地文が条線文のもの。

C 7群土器　口縁部が大きく張り出し、頸部がくびれるキャリパー形口縁の土器で、口縁部に渦巻文を中心に円弧文を細い隆線や沈線で描く文様帯をもつ。中富IV・V式、炉畑式などの型式名をもつが、いわゆる咲畑式A類の範疇にはいる土器。

A類　張り出した口縁部が内彎するもの。

B類　内彎した口縁部がさらに外反気味に立ち上がるもの。

C類　把手が発達したり、口縁部および胴部文様が異種のもの。脚台をもつもの。

C 8群土器　口縁部の文様帯が前面に立体化し、口縁部上下2段の厚い貼付隆帯をベースにした橋状把手や装飾的な把手を発達させた土器。神明式1類Bに類似する。

A類　口縁部文様帯の上の厚い貼付隆帯が口端にあたり、内側に蓋受け状の段をもつもの。

B類　口縁部文様帯の上に、やや外反気味に直立する口縁をもつもの。

Ｃ類　Ａ・Ｂ類にあてはまらないその他のもの。

Ｃ９群土器　口縁部に隆帯による区画文を配するものが多く、区画内に縄文・刺突文・沈線文を充填する土器。加曽利ＥII式・曽利III式の影響を色濃く受け在地化した取組式から島崎III式に類似するもの。

Ａ類　口縁部に隆帯による楕円区画文を配し、区画内に縄文を充填するもの。

Ｂ類　口縁部に隆帯による楕円区画文を配し、区画内に刺突文や沈線文を充填するもの。

Ｃ類　口縁部の区画内に沈線文・刺突文を施し、突起・把手をもつもの。器形・文様とも曽利III式の影響を色濃く受けている。

Ｄ類　粘土を貼り付け肥厚化した口縁部文様帯をもち、隆帯あるいは沈線で文様を割り付け、沈線文と刺突文を充填した土器。

Ｅ類　口縁部が刺突を数列施した文様帯になる土器。

Ｃ10群土器　北白川Ｃ式に類似するもの。

Ａ類　北白川Ｃ式土器の深鉢Ｃ類に類似するもので、突起状山形口縁をもつ土器。

Ｂ類　北白川Ｃ式土器の深鉢Ａ２類に類似し、口縁部の幅が狭く、口縁部と胴部との境を外面へ肥厚させる土器。

Ｃ類　浅鉢類。

Ｃ11群土器　口縁部に沈線による文様の割り付けを施す土器。島崎III式から山の神式に類似するもの。

Ａ類　口縁部に沈線による楕円区画文を配するもの。

Ｂ類　口縁部文様帯が幅狭となり、沈線文の簡略化が目立つもの。

Ｃ類　渦巻文あるいは同心円文が口縁部の主体となり、波状口縁の波頂部に位置することが多いもの。

Ｄ類　沈線で円形区画や蕨手文･渦巻文などを施文し、間に刺突や沈線を充填するもの。口縁部と胴部の文様帯の区分が不明瞭あるいは一体化してしまうもの。

Ｃ12群土器　無文系深鉢形土器を一括した。

Ａ類　無文土器。

Ｂ類　縄文土器。

Ｃ類　櫛描沈線文土器。

Ｃ13群土器　型式および小時期不明の土器を一括した。

Ａ類　縄文を主体とする深鉢類。

Ｂ類　貼付隆帯を主体とする文様を構成する深鉢類。

Ｃ類　沈線を主体とする文様を構成する深鉢類。

Ｄ類　複合口縁部。

Ｅ類　浅鉢類。

Ｆ類　壺形土器類。

Ｃ14群土器　脚台部および底部を一括した。

Ａ類　台付鉢の脚台部。

Ｂ類　底部。

なお、各群－類は必要に応じて細分し、種別した。

以上の分類は、様々な型式設定を参考にしているものの、東海・近畿・北陸の接点に位置するという徳山の地域的特性をふまえ、便宜的な部分や曖昧な部分もある。また、各群内にいくつかの時期差も内包している。

Ｃ１群土器からＣ11群土器までは、おおむね時期的変遷や地域的系統により群別している。Ｃ１群土器からＣ５群土器が中期中葉にあたる。Ｃ６群土器からＣ11群土器が中期後葉にあたる。ただ、Ｃ５群・Ｃ６群土器は中葉から後葉にかけてまたがる。また、Ｃ10群・Ｃ11群土器の中には中期末から後期初頭にかけての土器を含んでいる。

1）　第１次整理の注記終了時の遺物登録点数である。一部の接合は並行して実施されており、取り上げ時の点数より下回っている。

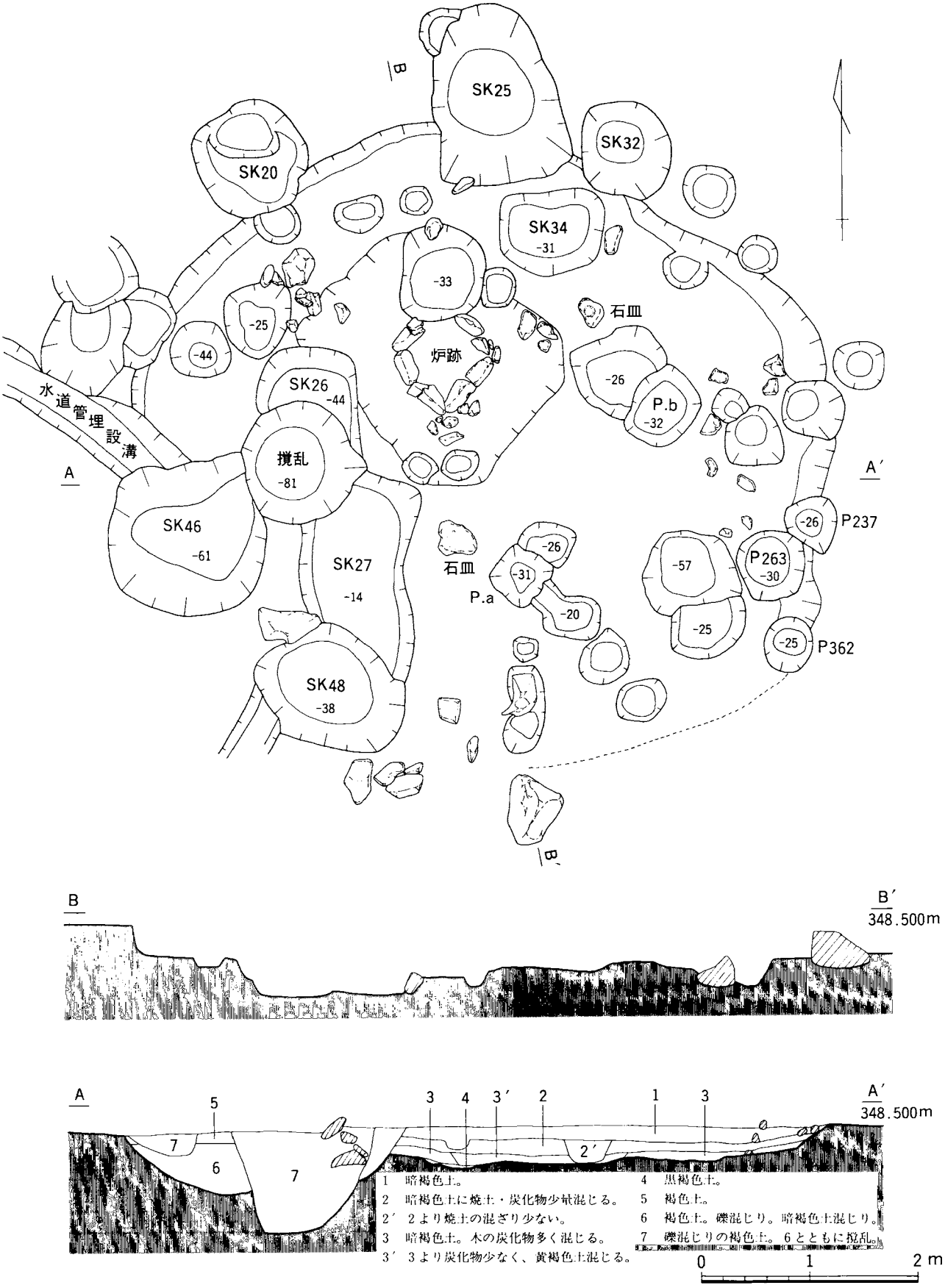
（武藤貞昭）

第２節　住居跡と出土遺物

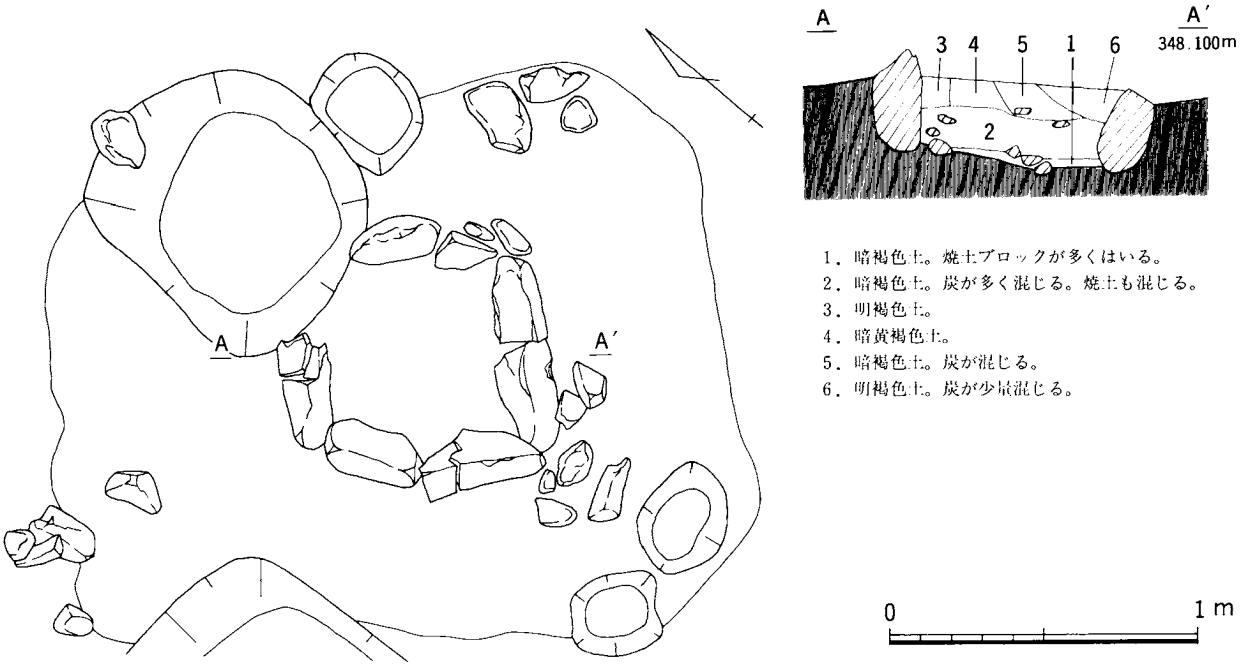
１．第１号住居跡　（ＳＢ１）

(1)遺　構（第14・15図、図版３・４）

４～５－Ｅ～Ｆグリッドに位置する。南西部には簡易水道の配水管が埋設されており、後世の攪乱と考えられる土坑がいくつか掘り込まれている。円礫を多く含む地山をわずかに掘り込んだプランである。北側の壁の立ち上がりは約25cm認められたが、地山面が南に傾斜しているため、南側では地山への掘り込みがほとんどなく、プランは判然としない。遺存状態の比較的



第14図　第１号住居跡　（ＳＢ１）



第15図　第1号住居跡　炉跡

良い北側のプランから推定すると、平面形は直径約6mの円形になる。主軸方位は炉跡・石皿・主柱穴などの配置から推定してN50°Wになる。周溝は認められなかった。

炉跡は川原石を方形に組んだ石囲い炉で、一辺が約90cmである。炉石はよく焼けており、割れたものが多い。炉床近くの埋土は炭・焼土を多く含んでいた。位置的には、住居跡の中央より奥に寄っており、炉跡をほぼ中心にして1.8×2.2mの長方形の範囲は、床面より約10cmほど低くなる。

住居跡の中央付近には、推定の入口方向から向かって左右に対峙するように、石皿が床面に設置されていた。2つの石皿は約2.4m離れている。

主柱穴は配置や深さから推定して、PaとPbが該当すると考えられるが、その他は判然としない。

覆土は基本的に3層に分かれる。いずれも暗褐色土で、多くの遺物を包含していた。

時期については、覆土出土遺物から中期後葉と考えられる。

⑵遺　　物

①縄文土器（第16～23図、図版14・16・17）

本住居跡の覆土からは、1,481点の土器が出土している。そのうち混入である後晩期の土器21点を除いて、ほとんどが中期後半のものである。有文系土器を中心に、前述した土器分類によりつつ、順に記述する。

Ｃ３群の土器（第16図　1001、図版16）

（1001）１点のみである。肥厚した口縁の裾に「く」の字形の連続刺突文を施文している。その下は縦位に連続刺突文が並ぶ。「北屋敷式」に比定でき、前述の土器分類ではＣ３群Ａ類に属する。覆土への混入と考えられる。

Ｃ６群の土器（第16図　1002～1006、図版16）

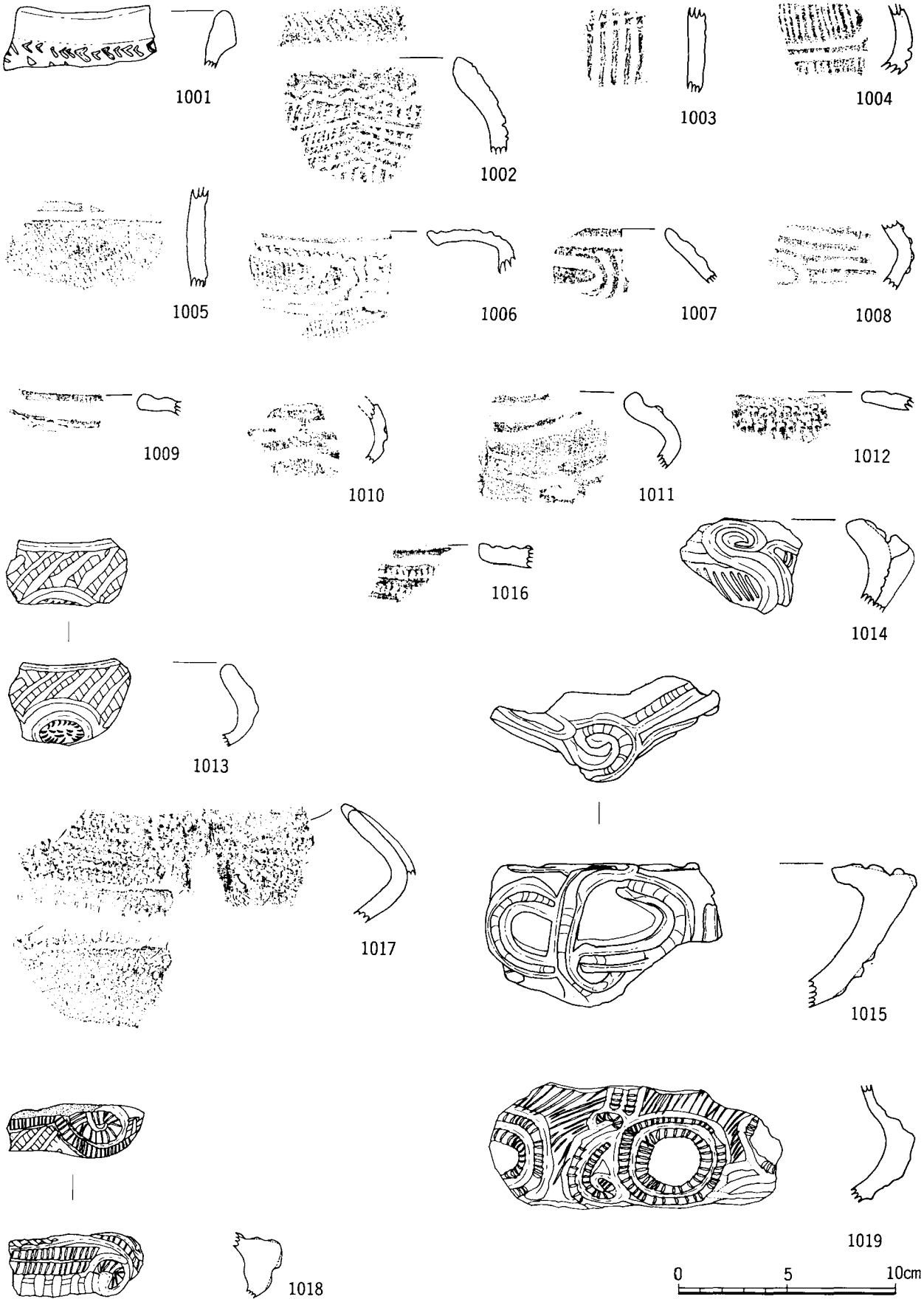
（1002）・（1003）は磨耗しているが、縄巻縄文を地文とし半截竹管状工具によって文様を描いたものである。「船元Ⅳ式」に比定でき、Ｃ６群Ａ類に属する。

（1004）・（1005）・（1006）は撚糸文を地文としている。（1004）は半截竹管状工具による平行沈線を引くが、（1005）は棒状工具もしくは半截竹管状工具の外面による幅広の沈線を引く。（1006）は口縁沿いの波状文を、紐状貼付の裾を交互に刺突して造り出しており、渦文も貼付である。３点とも「里木Ⅱ式」の範疇にはいると考えられ、（1004）・（1005）はＣ６群Ｂ類、（1006）はＣ類に属する。

Ｃ７群の土器（第16・17図　1007～1028、図版16）

キャリパー形口縁をもち、沈線や浮線による渦文と円弧文が施される土器で、口縁部が強く内彎するもの（Ａ類）と、内彎した口縁部がさらに外反気味に立ち上がるもの（Ｂ類）とがある。「中富Ⅳ・Ⅴ式」あるいは「咲畑式Ａ類」に比定できる。

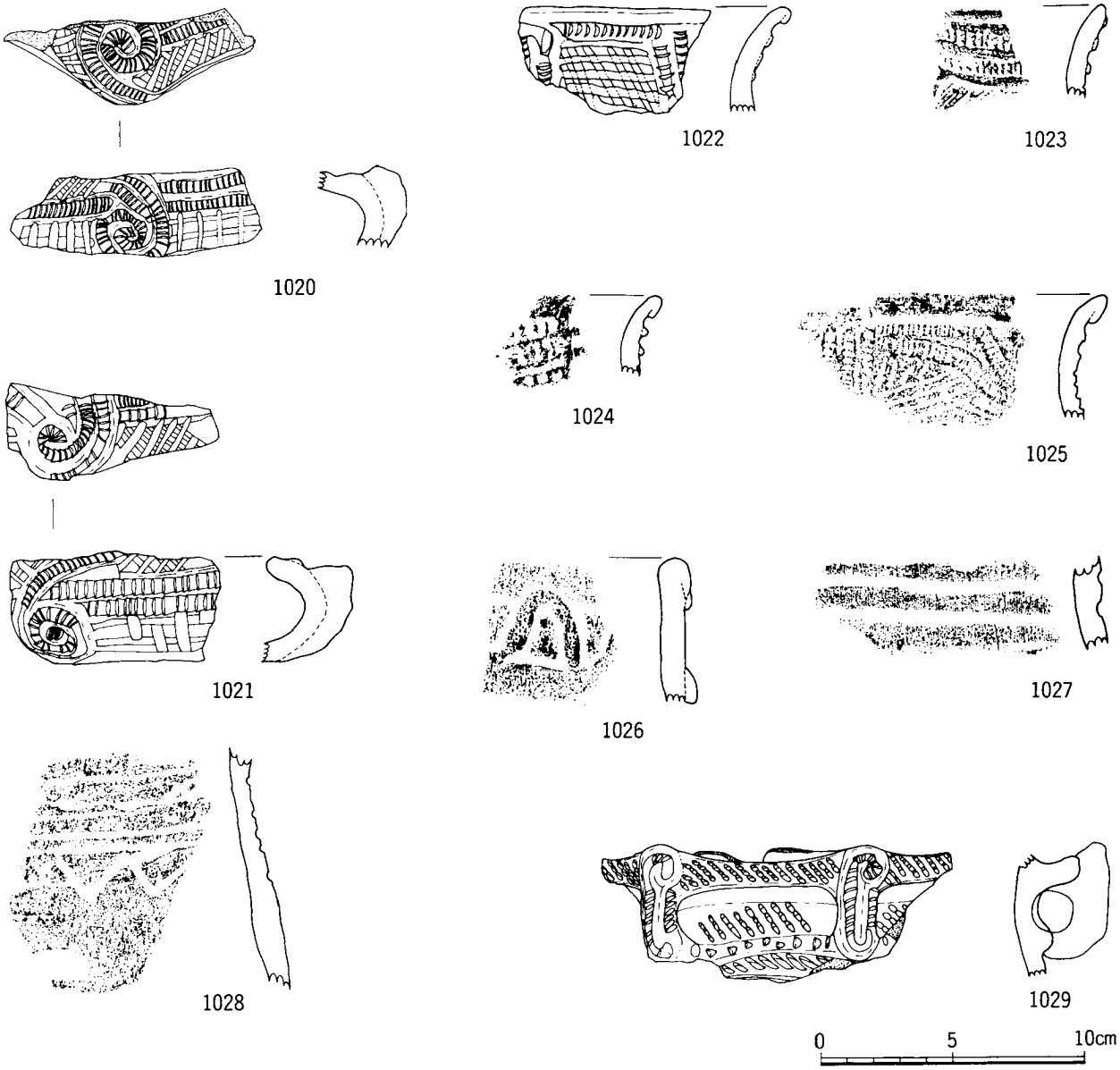
Ａ類に属するものとしては以下の11点がある。（1007）・（1008）・（1009）・（1010）はすべて沈線による施文（①）である。（1011）は貼付による施文（②）である。（1012）は口縁沿いに半截竹管状工具の内面による連続刺突文を施すが、刺突の両端が深くなる。貼付＋半截竹管状工具の外面による押し引き手法の連続刺突文（以下「押し引き」という）による施文のもの（③）が４点ある。（1013）は格子目状の貼付を伴い、円形区画内に爪形の刺突を充塡する。キャリパー部分に角をつけて区画する新しいタイプとは異なり、古いタイプと考えられる。（1014）は渦文のところで肥厚して角がつく新しいタイプで、区画内は箆沈線を充塡する。（1015）も渦文のところで角をつけるが、貼付間に押し引きを施す以外は無文である。（1016）は③種と考えられるが、小片のため詳細は不明である。また、やや異質で縄文を主体とするもの（④）に（1017）がある。波状口縁の波頂部に縦に隆帯を２本つけ、口縁部全体に繊維のはっきりしたＲＬの縄文を施している。



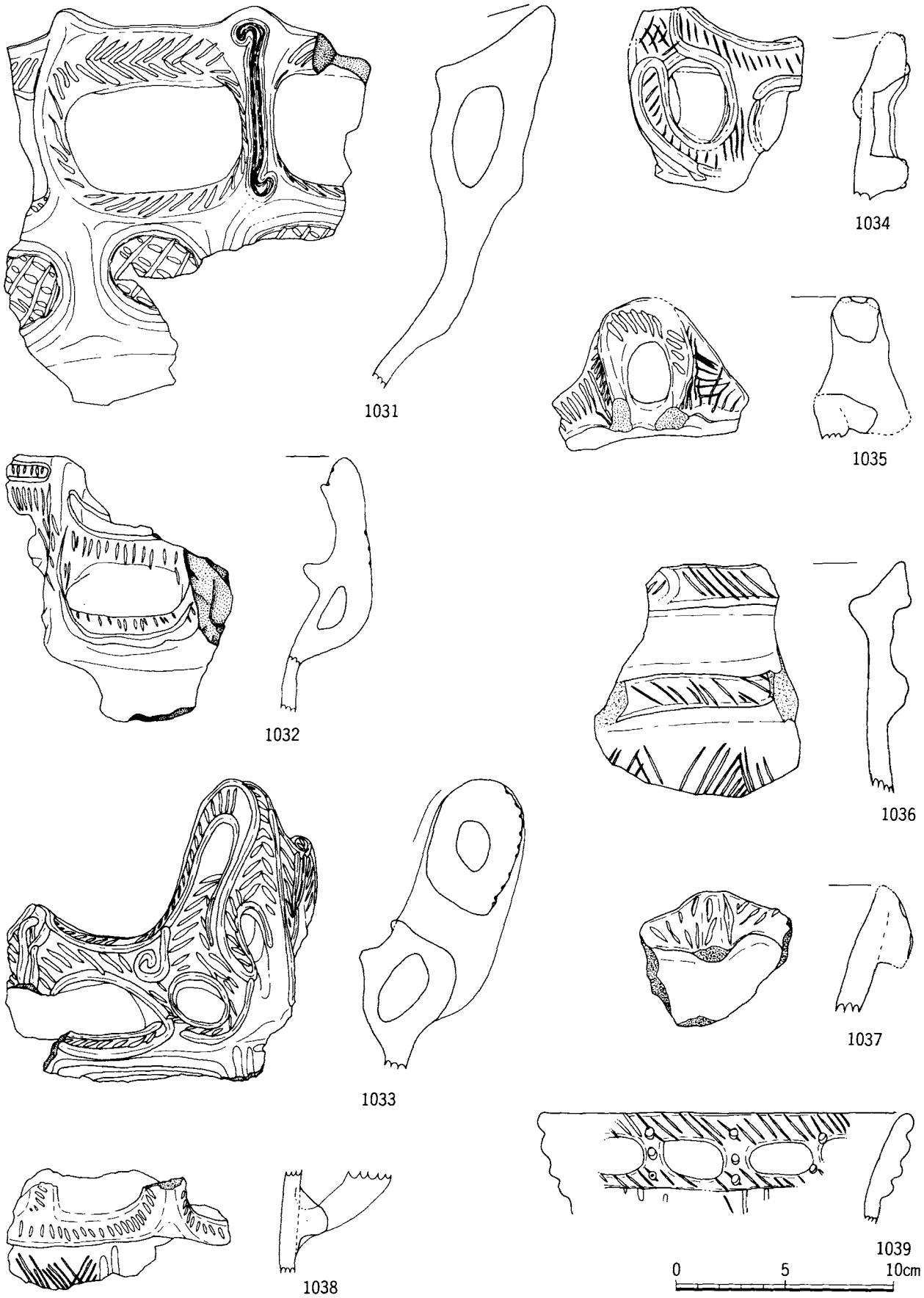
第16図　第１号住居跡出土土器(1)　Ｃ３・６・７群

Ｂ類に属するものとしては以下の９点がある。内７点は貼付＋押し引きによる施文である。(1018)・(1019)・(1020)・(1021) は、渦文が縦に連結する部分でキャリパー部が肥厚し、角がつくタイプである。(1019)が箆沈線を充塡する以外は、他の３点は格子目状の貼付を充塡している。(1022)・(1023)・(1024)は立ち上がり部分の破片で、キャリパー部の器形は不明である。(1022) は格子目状の貼付を充塡する。(1023) は箆沈線を充塡する。(1024) は竹管状の丸い刺突を充塡する。以上の７点と異なり (1025) は貼付が見られず、押し引き沈線で施文し、区画内を幅の狭い押し引き沈線で充塡している。また、(1026)は立ち上がり部の口縁沿いに波状の貼付を施す。他に比べ厚手である。

頸部から胴上部にかけてのものとしては、(1027)・(1028) があり、横位に沈線を巡らす。



第17図　第１号住居跡出土土器(2)　Ｃ７・８群



第18図　第１号住居跡出土土器(3)　Ｃ８群

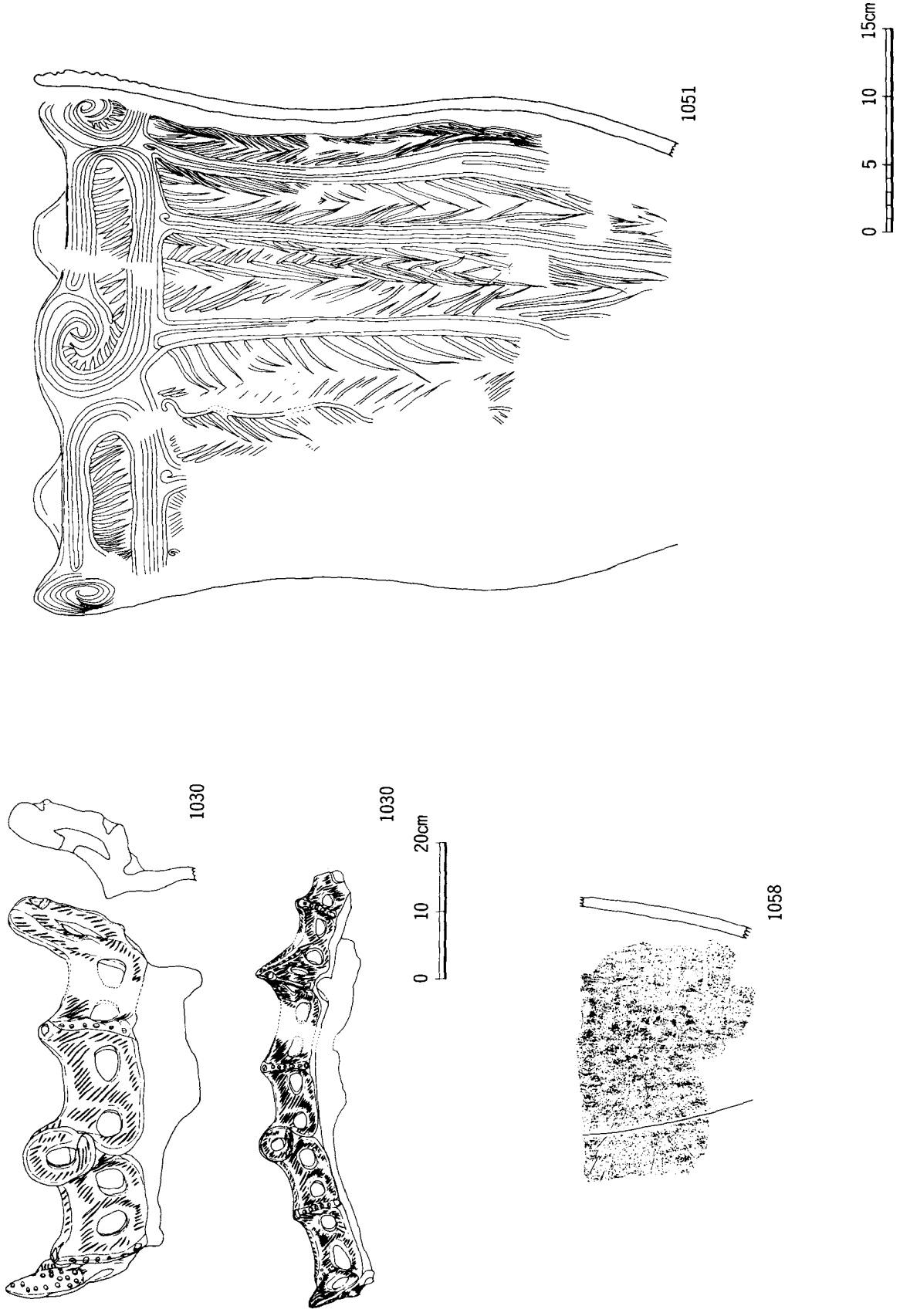
（1028）は直線状の沈線の下に鋸歯状沈線を巡らす。

Ｃ８群の土器（第17・18・19図　1029～1039、図版16・14）

口縁部の文様帯が立体化し、口縁部上下２段の厚い貼付隆帯をベースにした橋状把手や装飾的な把手をもつ土器で、やや外反気味の口縁が立ち上がるもの（Ｂ類）と、立ち上がりが見られず内側に蓋受け状の段をもつもの（Ａ類）とが見られる。「神明式」に類似する。

Ｂ類に属するものは（1029）１点のみである。外反気味に立ち上がる口縁部は、立ち上がり部で破損しており詳細は不明である。把手上には貼付による渦文を施し、貼付間に押し引きを入れる。隆帯上は、上段は細い竹管状工具による左傾の押し引き沈線を充塡し、下段は太い竹管状工具で刺突を施文する。また、区画内は基本的に無文であるが、部分的に細い左傾の押し引き沈線が入る。さらに、下段隆帯の下裾に刺突列を巡らす。

Ａ類に属するものとしては以下の10点がある。内６点は橋状把手の形状が多様で装飾的なもの（①）に属する。（1030）は胴部は不明であるが、口縁部の復元品である。口縁径は23cmで、装飾把手部での最大口径は30cmを測る。口縁部文様帯は８区画で、２種類の装飾的な橋状把手がそれぞれ対に位置する。その間に先端が波状に尖る橋状把手が入る。１区画内は中央を貼付隆帯で仕切り、眼鏡状を呈する。表面は左傾の沈線を充塡する。なお、装飾把手の一部に竹管による円形刺突を充塡する。また、装飾把手の間に位置する橋状把手の中央には縦に刺突列が入る。頸部から胴上部にかけては無文である。（1031）は口縁部の大破片である。他に同一個体片が15点ある。橋状把手を伴う方形区画部分は基本的に斜行沈線を充塡するが、貼付隆帯の上段には矢羽根状沈線を施す部分もある。また、一部に逆Ｓ字状沈線を横位に施す部分がある。橋状把手もおそらく１つおきに中央に縦位の逆Ｓ字状沈線を施文すると考えられる。以上の橋状把手を伴う方形区画部の下に、第２文様帯が位置し、隆帯区画の中央に沈線で円を描き、中を格子状沈線文で充塡する。頸部は無文である。（1032）は口縁が山形になる装飾把手を持つ。橋状把手は左右２本付くと考えられ、突起部中央に穿孔をもつ。また、アーチ状を呈せず仕切りになる隆帯もある。貼付隆帯および橋状把手上は、沈線で縁取りした中を集合沈線で充塡している。なお、突起口縁部内面に沈線で渦文を施文し、集合沈線を充塡する。全体に沈線は粗雑である。（1033）は口縁よりかなり立ち上がった装飾把手をもつ。となりにくる橋状把手は口端が尖り波状を呈する。隆帯および把手の各面をそうめん状の粘土紐を貼りつけて縁取りしている。その中は斜行沈線およびところによって矢羽根状沈線を充塡する。なお、縁取りの貼付が枝分かれして渦文を作り出している部分もある。（1034）の橋状把手は、左へ倒した形でついている。おそらく左右対照の２本の把手の右側と考えられる。そうめん状粘土紐の縁取りを施し、中は斜行沈線で充塡する。アーチ状を呈せず仕切りになる隆帯もある。（1035）は橋状装飾把手の口縁部がループ状になり、中央部に穿孔をもつ。そうめん状粘土紐の縁取りを施し、その中は斜行沈線を充塡する。（1036）は橋状把手部は不明であるが、貼付隆帯上はそうめん状粘



第19図　第１号住居跡出土土器(4)（扇形展開図のみＳ＝１/10　他はＳ＝１/５）

土紐による縁取りを施し、斜行沈線を充塡する。胴部は２本の懸垂文沈線で縦位分割し、間を上向きの細い矢羽根状沈線で充塡する。(1037)は橋状把手は破損しているが、把手取りつき部分が波頂部になる口縁部である。(1038)は口縁部分は不明だが、橋状把手と仕切りになる隆帯がつく。胴部文様は（1036）と同様であるが、矢羽根状沈線の方向が下向きになる。(1039) は口縁部方形区画が最も退化した形態を示していると考えられる。貼付隆帯は薄くなり、幅も小さくなる。橋状把手は見られなくなり縦位の仕切りのみとなる。仕切りの隆帯上には刺突を３個施し、全体に左傾の沈線を充塡している。胴部は残存部がわずかだが、懸垂文沈線で縦位分割し斜行沈線を充塡する。

Ｃ９群の土器（第20図　1040～1050、図版17）

（1040）・（1041）は、いずれも隆帯による楕円区画文の口縁部で、渦文部分の破片である。（1040）は区画内に縄文を充塡し、Ａ類に属する。（1041）は詳細は不明である。

（1042）は波状口縁あるいは箱状把手の波底部に取りつくと考えられる扇状突起の一部である。表面には沈線＋刺突を施す。(1043)は頸部に縦につく把手である。正面にＳ字形の沈線文を施文する。以上２点はＣ類に属する。

粘土を貼り付け肥厚させた口縁部文様帯をもち、隆帯あるいは沈線で文様を割り付け沈線文と刺突文を充塡した土器（Ｄ類）が３点ある。（1044）は非常に厚く粘土を貼り付け（最大器厚3.5cm)、肥厚した把手部をつくる部分の破片である。表面は集合沈線や刺突を施し、肥厚帯に囲まれる区画は刺突を充塡する。（1045）も肥厚した口縁部文様帯上に沈線と刺突を充塡する。なお、刺突は竹管状工具を垂直に押しあてている。(1046)は頸部から外反して開く口縁部器形をもつ。口縁部から頸部にかけ、肥厚させた文様帯をつくるが、粘土紐を貼り付け縁取りした大きな円形の凹面を配している。口縁は紐状の貼付を波状に施し、その間は中央に指頭大の刺突、周囲に棒状工具による刺突を施す。口縁部から頸部への隆帯上は沈線を引き回し、間に刺突を充塡する。これら３点はいずれも口縁部内面に蓋受け状の段をもつ。

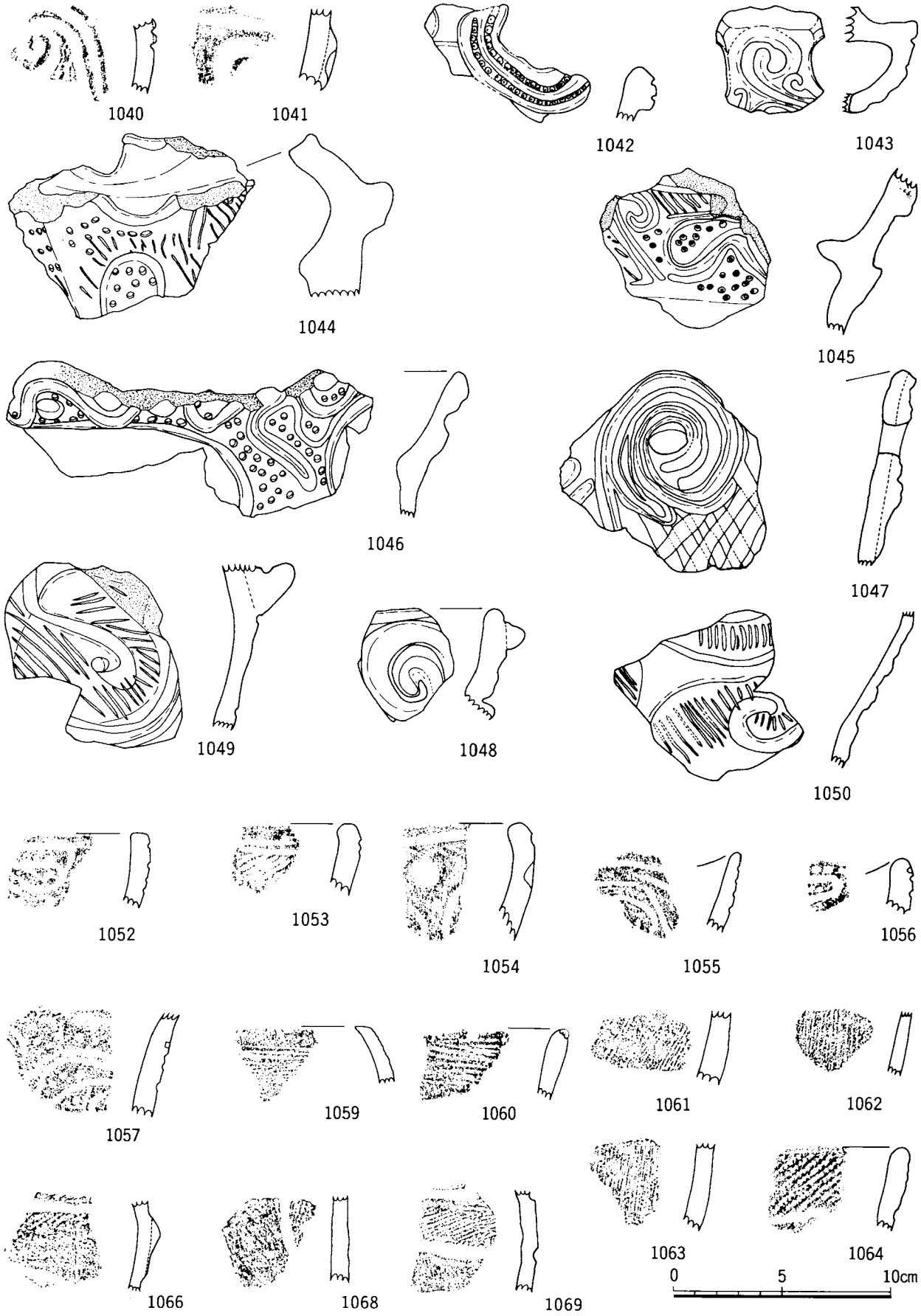
その他、Ｃ９群に属すると考えられるものに以下のものがある。

（1047）は波状口縁の波頂部中央を穿孔し、周囲に渦文を隆帯＋沈線で配する。その他は粘土紐を格子目状に貼り付けている。同一個体片が他に２点認められる。

（1048）は波状口縁の波頂部に隆帯で渦文を施すものの破片である。

（1049）は口縁部につくと考えられる耳状を呈した把手状の破片だが、口縁部隆帯区画の渦文部の変容したものかと思われる。把手上部から区画内にＳ字状沈線文を描き、区画内は集合沈線を充塡する。同一個体片が他に１点認められる。

（1050）は頸部から胴上部の破片だが、唐草文風の渦文を隆帯で描き、間は短沈線を充塡している。他の土器片よりやや薄手であるが、本群に属すると考えられる。同一個体片が他に４点認められる。



第20図　第１号住居跡出土土器(5)　Ｃ９・11～13群

Ｃ11群の土器（第19・20図　1051～1057、図版14・17）

（1051）は覆土上部出土の大型の深鉢である。口縁部文様帯は沈線による楕円区画文で６区画になる。楕円左上に連続して渦文がつく。口縁は波状を呈し、渦文部が波頂部にあたる。区画は二重の沈線で囲み、区画内は左傾の集合沈線を充塡する。胴部文様帯は沈線による逆Ｕ字の隅丸方形区画で縦位分割されている。区画の間に蕨手状沈線を入れるが、部分によっては蕨手になっていないところもある。区画内は矢羽根状沈線を充塡する。入れ方は不統一で、下向きの矢羽根を２列入れ、中央に蛇行懸垂文を垂下させるところもあれば、蛇行懸垂文を入れずに矢羽根が２列のところと、矢羽根１列のみの幅の狭い区画の３通りである。施文時に均等な分割がされていないことがわかる。本群Ａ類に属する。

（1052）・（1053）・（1054）はいずれも小片で詳細は不明であるが、沈線区画で集合沈線を充塡する。（1055）は沈線で渦文を施文する。波状口縁になる可能性がある。

（1056）・（1057）は沈線で円形区画や蕨手文・渦文などを描き、間を刺突や沈線で充塡するもので、このタイプは口縁部と胴部の文様帯の区分が不明瞭あるいは一体化してしまう。本群Ｂ類に属する。

Ｃ12群の土器（第19・20図　1058～1063）

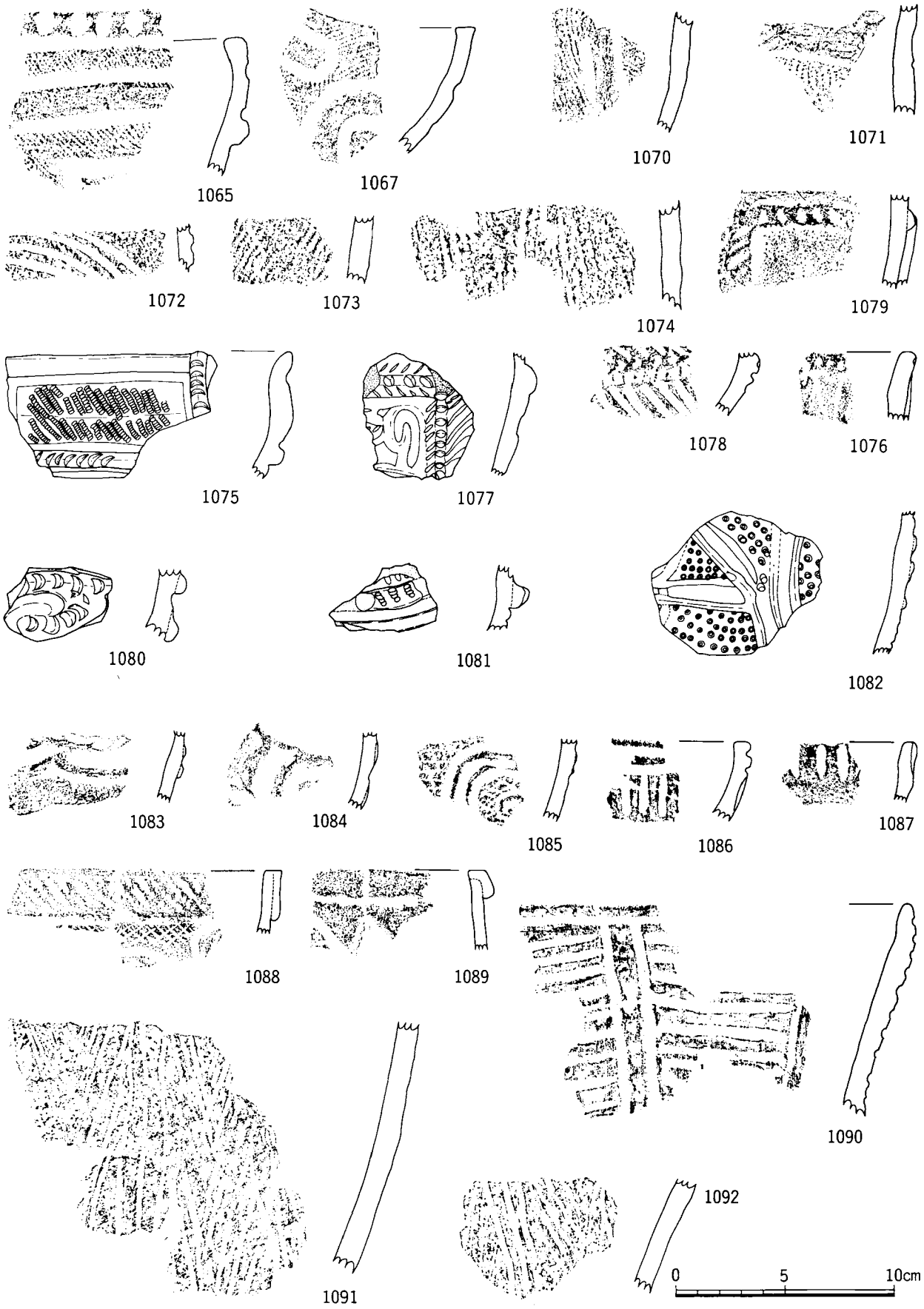
Ａ類にあたる無文土器では（1058）がある。胴中央部片で、器壁表面は縦方向にナデ調整を施し、1.7cm前後の間隔で条痕が縦走する。内面は横にナデ調整を施し、粘土の輪積み痕を残す。下部には炭化物が付着する。褐色を呈し、粘土に砂粒をやや多く含む。

Ｃ類にあたる櫛描沈線文土器は（1059）～（1063）がある。（1059）は口端を尖らせ内向させ、櫛描沈線を横位に引く。（1060）も横位に櫛描沈線を引く口縁部片である。（1061）以下の３点は胴部片で、縦位に櫛描沈線を引いている。

Ｃ13群の土器（第20～22図　1064～1101、図版17）

型式および小時期不明のものを一括して本群としているが、文様構成等による類別に従い記述する。

縄文を主体とするものでは、（1064）～（1074）がある。（1064）はＬＲの縄文を施し、横位の沈線が入る。（1065）は厚手の平口縁で、口端面に棒状工具による太い刻目を入れる。口縁に沿って２本の沈線が入り、沈線間は磨消の痕跡がある。その下に断面が三角形状の隆帯をもつ。沈線による方形区画を施すと推定されるが、区画内は不明である。隆帯および口唇部にＲＬの縄文を施す。（1066）は隆帯区画を施し、区画内に沈線が弧状に入る。隆帯上はＬＲの縄文を施す。（1067）は幅広の沈線による楕円文等を施し、区画外にＬＲの縄文を施す。（1068）以下の７点は胴部破片で、中期末から後期初頭の土器と考えられる。（1068）～（1071）は磨消縄文である。（1072）は縄文地に円弧状の沈線を４条引いている。（1073）は縦位帯縄文に結節縄文を施す。（1074）は全面縦位の縄文を施す。



第21図　第１号住居跡出土土器(6)　Ｃ13群

貼付隆帯を主体とする文様を構成するものでは、(1075) ～(1085) がある。(1075) は口縁部文様帯の下に半截竹管による隆起線を２条巡らし、そのうちの上には竹管による刺突が入る。口縁部文様帯には、竹管による刺突を加えた縦位の貼付隆帯がつき、区画内は沈線で縁取りして縄文を施す。(1076)は口唇部に刺突列が１条入り、その下に縦位の貼付が1.7cmおきに入る。(1077) 以下の９点は胴部破片で、３種類に分かれる。まず、(1077)・(1078) は刺突の入る隆帯をもつが、そうめん状貼付や押し引き沈線の手法があり、Ｃ７群に伴う破片と考えられる。次に、(1079) ～(1081) は貼付隆帯に刺突や刻目を加えている。(1080)・(1081) は北陸的な手法が感じられる。(1079) は刻目である。さらに、(1082) ～(1085) は平行する２本の貼付隆帯で幾何学的なモチーフを施すものである。(1082)は区画内を竹管状工具による刺突で充填する。(1085) は区画内を細沈線を格子目状に充填する。

沈線を主体とする文様を構成するものでは、(1086) ～(1101) がある。(1086)・(1087) は口縁部に縦位の短沈線を施文する。(1088)・(1089)は折返口縁をもつもので、ともに口端が角縁になる。(1088)は折返口縁にＲＬの縄文を施し、口縁部文様は沈線文で間を細沈線で格子目状に充填する。(1090)は口縁から沈線を２本垂下させ分割し、区画内に横位の竹管状工具による沈線を充填している。垂下した２本の沈線間には、竹管による刺突列が入る。(1091)以下は沈線文の胴部破片である。(1091) ～(1095) は懸垂文沈線による縦位分割を施し、間を矢羽根状沈線あるいは斜行沈線で充填するもので、Ｃ８群～Ｃ11群に伴う胴部片である。(1096)・(1097) も縦位に沈線を施すが詳細は不明である。(1098)は縦位に平行沈線を引いたあと、弧状の沈線が横断するが詳細は不明である。(1099)・(1100)は同心円状の沈線文を施し、その間に集合沈線を充填している。(1099) は矢羽根状沈線を充填する。(1101) は所々に渦がつく横位の集合沈線を口縁部に施文し、胴部は無文になる深鉢の破片であるが、ＳＢ４出土の (1278) と同一個体と考えられる。

Ｃ14群の土器（第22図　1102～1109、図版14）

台付鉢の脚台部（Ａ類）と底部（Ｂ類）である。

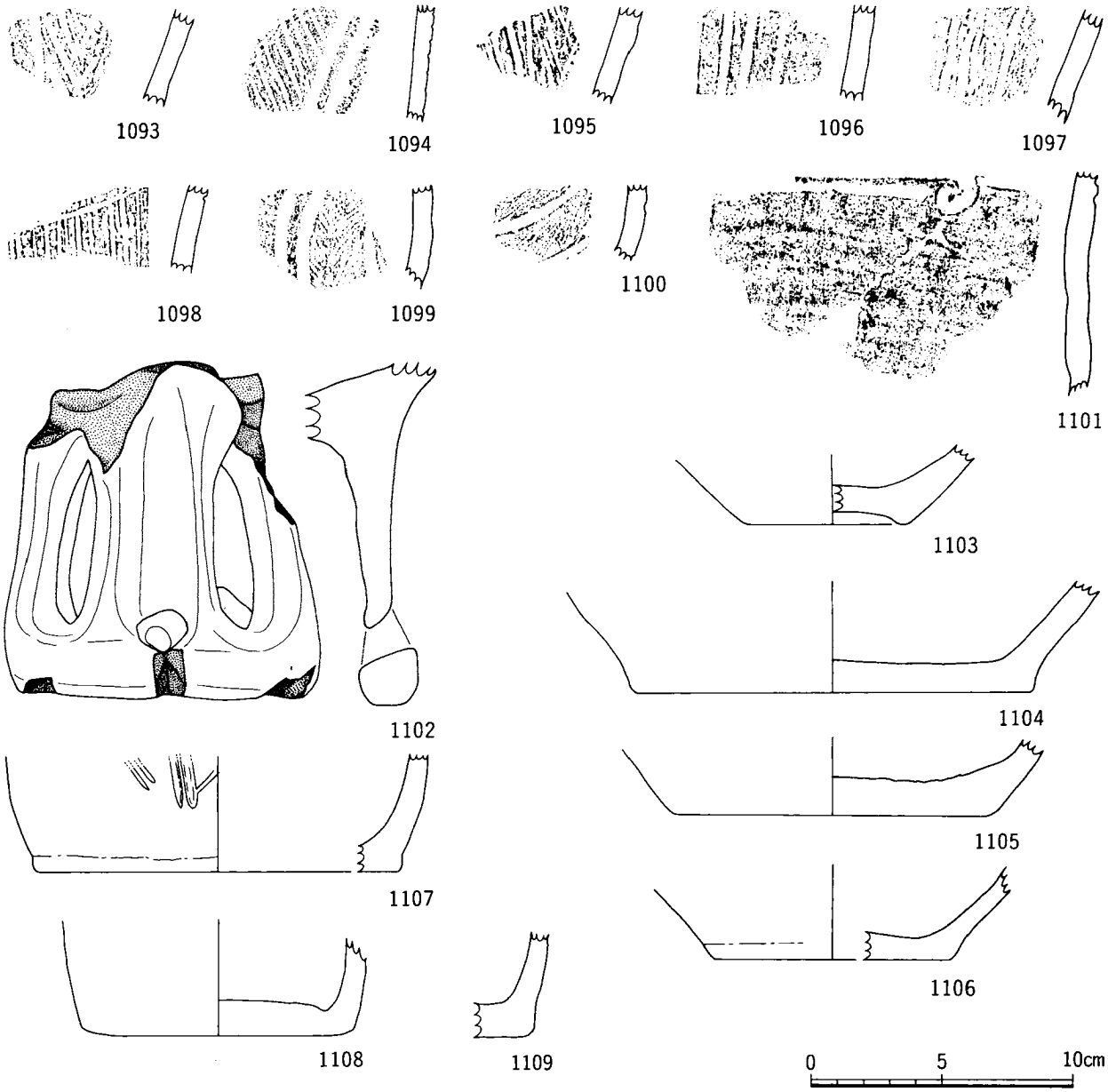
Ａ類は (1102) がある。脚台部の高さ12cm、裾部径11.5cmを測る。４本の脚をもち、間に楕円形の透かし孔をもつ。脚の下部に円孔を穿つ。Ｃ８群およびＣ９群Ｃ・Ｄ類に伴うものと考えられる。

Ｂ類のうち、(1103) が上げ底であるのを除き、(1104) ～(1109) の６点は平底である。網代痕等のあるものは見当らない。(1107) は胴部に縦位と斜行する沈線文が見られる。(1109) の胴部も懸垂文沈線で分割し、間を右傾の沈線で充填している。

（武藤貞昭）

後期の土器（第23図　1110～1120、図版17）

後期の土器は11点しかなく、いずれも破片資料である。すべて覆土から出土し、混入品と考えられる。所属する時期は後期初頭～後葉までと後期全般に及ぶ。後期初頭に比定できるものに（1110）があげられる。端部よりやや離れて横走する沈線と端部との間に、Ｒの縄文が施文される。端部内面が肥厚し、沈線が幅広であることから「中津式」に類似する資料であろう。後期前葉～中葉と考えられる資料の多くは、沈線による幾何学的文様をもつものが多い（1111～1114）。(1112)は端部を極端に拡張し、楕円状の文様と縄文が施文されている。(1114)は器形が鉢形になると考えられ、端部が内側に肥厚し、細線による沈線が３本認められる。後

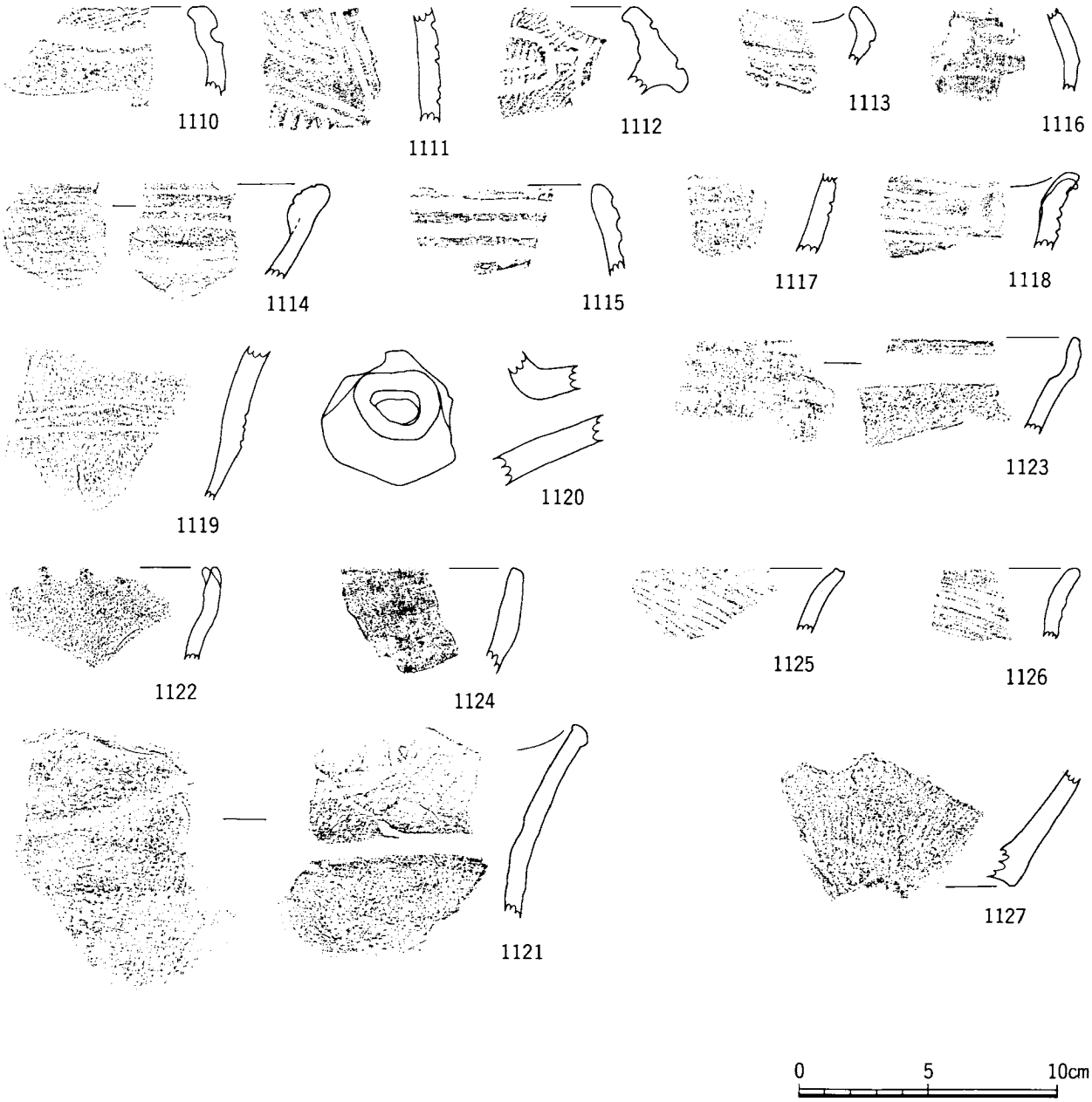


第22図　第１号住居跡出土土器(7)　C13・14群

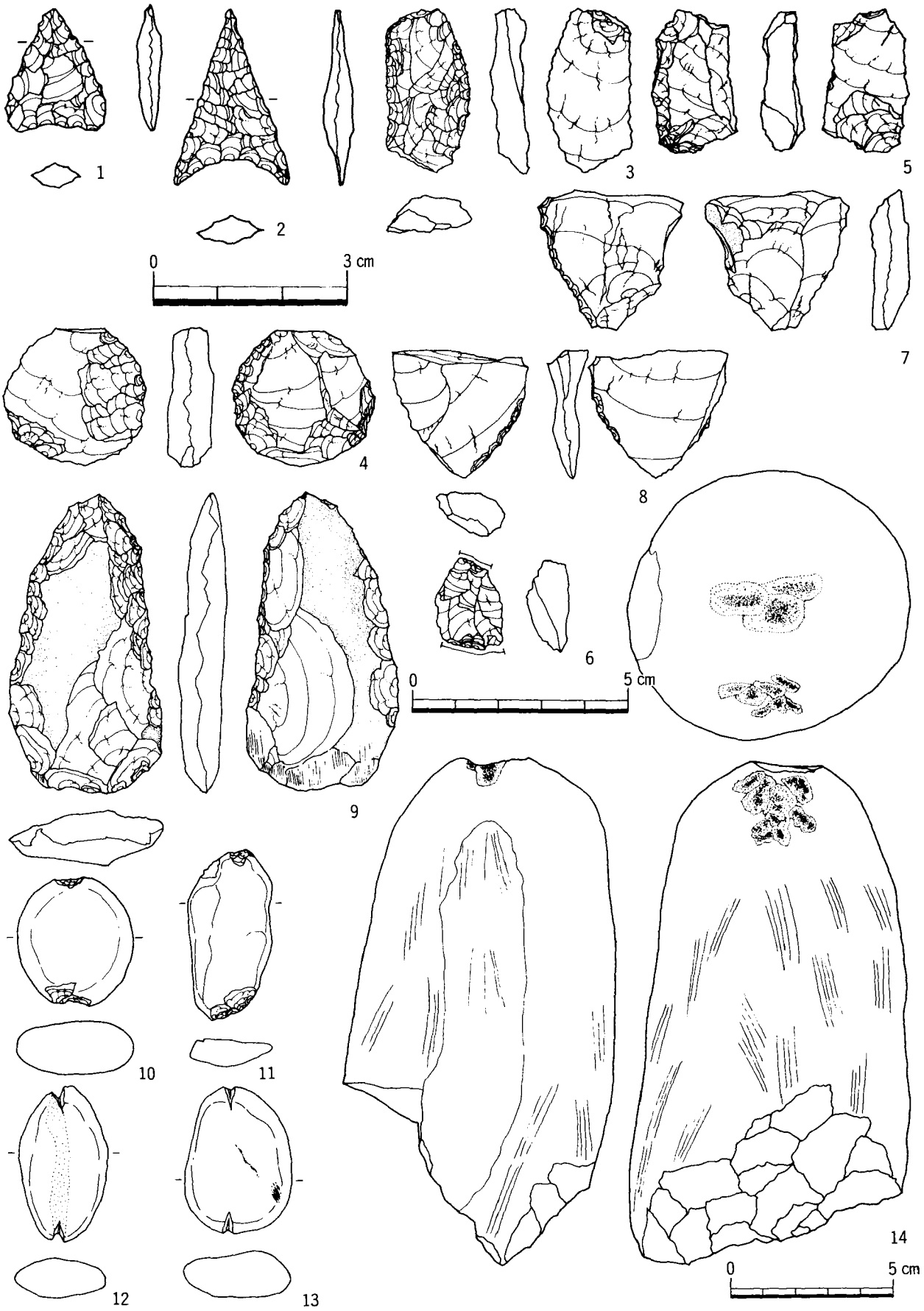
期後葉に所属するものとしては、(1115) ～(1119) がある。(1115)・(1116) は巻貝による凹線が引かれ、(1116)には巻貝の圧痕が認められることから「宮滝式」に比定できる。(1117)～(1119)は「八日市新保式」に類似し、短線連結文と三叉状の抉りが認められる。他に注口が１点(1120)認められる。

晩期の土器（第23図　1121～1127、図版17）

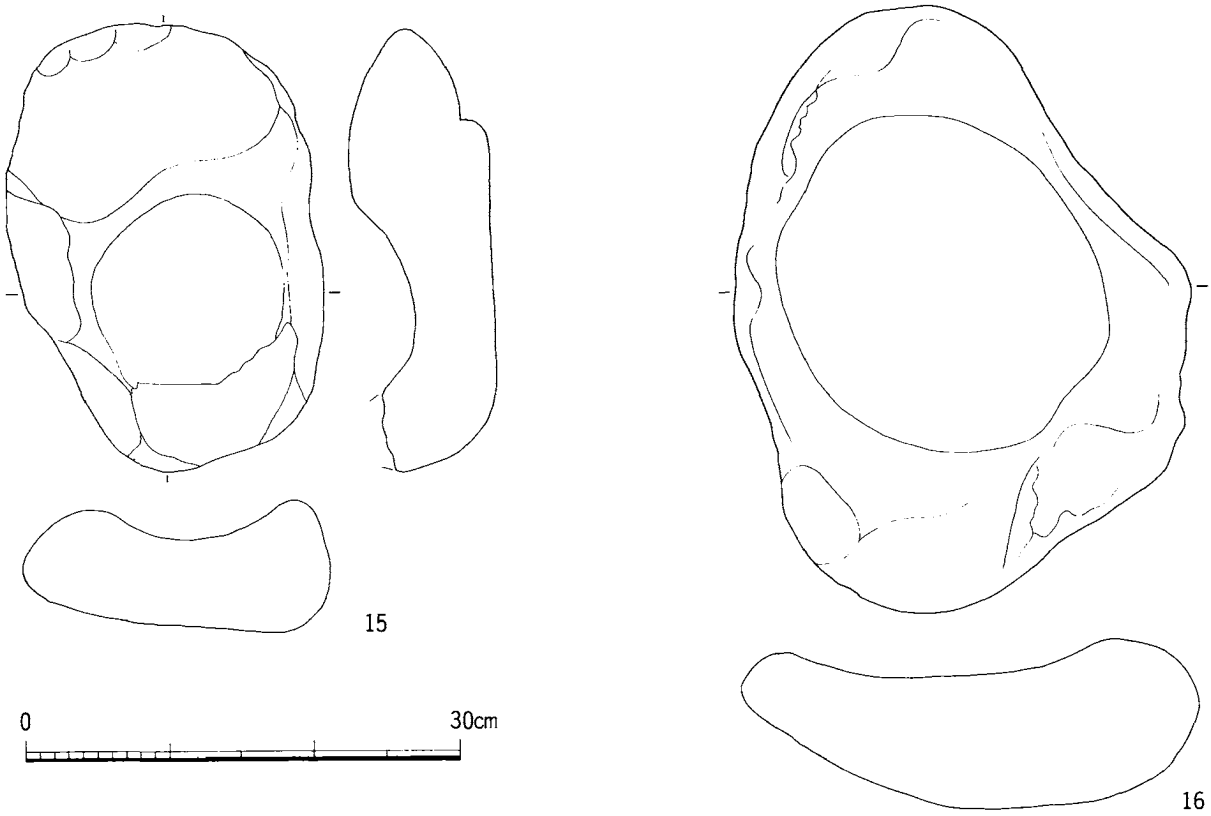
全て破片資料で10点が覆土から出土し、後期の土器と同様、混入品と考えられる。(1121)は口縁部が山形状の波状口縁を呈し、内面に１本の沈線がめぐるのが特徴的である。(1122)・



第23図　第１号住居跡出土土器(8)　後期・晩期



第24図　第1号住居跡出土石器(1)



第25図　第１号住居跡出土石器(2)

(1123)は口縁部が端部で内彎して立ち上がる。(1123)は内彎する部位が凹線状となり、(1122)の端部には棒状工具による押圧が認められる。(1124)は砲弾形を呈する深鉢と思われる。条痕をもつものに（1125)・(1126）があげられる。両方とも単斜状の条痕が施され、(1125）の口端部は明確な平坦面を呈している。(1127)は底部片で、底面は凹底となっている。多くの資料は後述する晩期の土器棺と近接する晩期中葉に相当するものと考えられるが、(1125)・(1126)は晩期中葉より新しい時期と考えられる。

（藤田英博）

②石器（第24・25図、図版35・36）

石鏃３点（1・2)、掻器１点（3)、削器１点（4)、ピエス・エスキーユ２点（5・6)、打製石斧２点（9)、２次加工のある剥片２点（7・8)、使用痕のある剥片５点、未製品３点、剥片・砕片67点、打欠石錘３点（10・11)、切目石錘３点（12・13)、凹石１点、石皿２点（15・16)、石棒１点（14）が出土した。このうち石皿は両方とも住居の床面に半分埋め込まれた形で出土している。それ以外の石器はすべて覆土からの出土である。

（千藤克彦）

２．第２号住居跡　（ＳＢ２）

(1)遺　構（第26・27図、図版３・４・８）

５－Ｍ～Ｎグリッドに位置する。炉跡の検出により住居跡とわかった。プランについては地山面への掘り込みが見られず、判然としないが、柱穴（支柱穴）が円形にめぐるという調査時の所見に基づけば、直径約5.5mの円形プランが推定できる。全体に遺存状態は良くない。床面は地山直上にあたるが、北側半分は20～25cm分床面が削平された上、山砂利を多く含む土が堆積していた。主軸方位は炉跡の位置を考慮すれば、ほぼＮ－Ｓ方向に一致する。

炉跡は中央やや南寄りに位置し、90×75cmの方形の石囲い炉である。掘り方は約125×95cmの不整円形で、地山へ30cm掘り込んでいる。川原石を使用した炉石はよく焼けて割れている。掘り方の底面には黄色粘質土を貼っており、炉床は焼けて赤褐色を呈する。炉床の焼土の下には南寄りに上面が平坦な石が５枚検出された。また、炉跡の南脇に石皿が床面に設置された状態で検出されている。

推定プラン内外には多くのピット・土坑が重複しているが、調査時の所見から、西側に５本の柱穴がまわる。北から順にＰ1195－Ｐ1194－Ｐ1193－Ｐ1190－Ｐ1198である。支柱穴の可能性があるが、主柱穴は確認できず、断定できない面がある。ＳＫ212・215・203、Ｐ1191・1204からは多くの中期後葉の土器片が出土している。ＳＫ203の南のピットは横穴のようにＳＫ203とつながって検出されている。ＳＫ213・214からは船元式の土器片が多く出土し、前時期の遺構である。また、ＳＫ216・217は後期と考えられる。

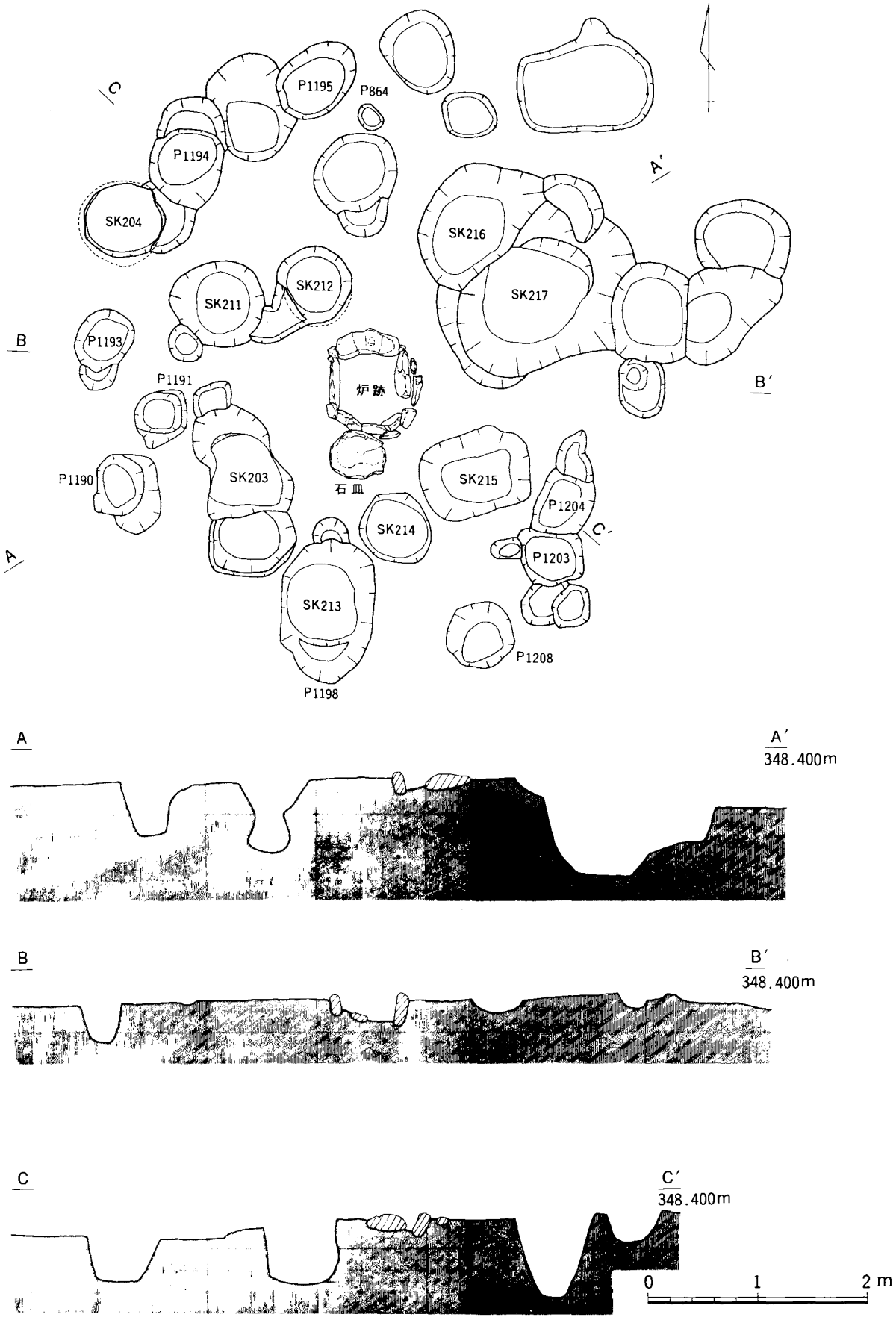
住居跡プランの北隅で埋甕が検出されている。Ｐ864が掘り方になる。地山を約30cm掘り込んで、正位に埋設されていた。底部ならびに口縁部は欠損している。発掘時の所見では埋甕とされていたが、掘り込みは上の山砂利層からされていることと、土器が中期末の様相を呈することから、本住居跡に伴うと見るには疑問がある。本住居の次時期の埋甕あるいは埋設土器と考えている。

本住居の時期については、中期後葉と考えられる。

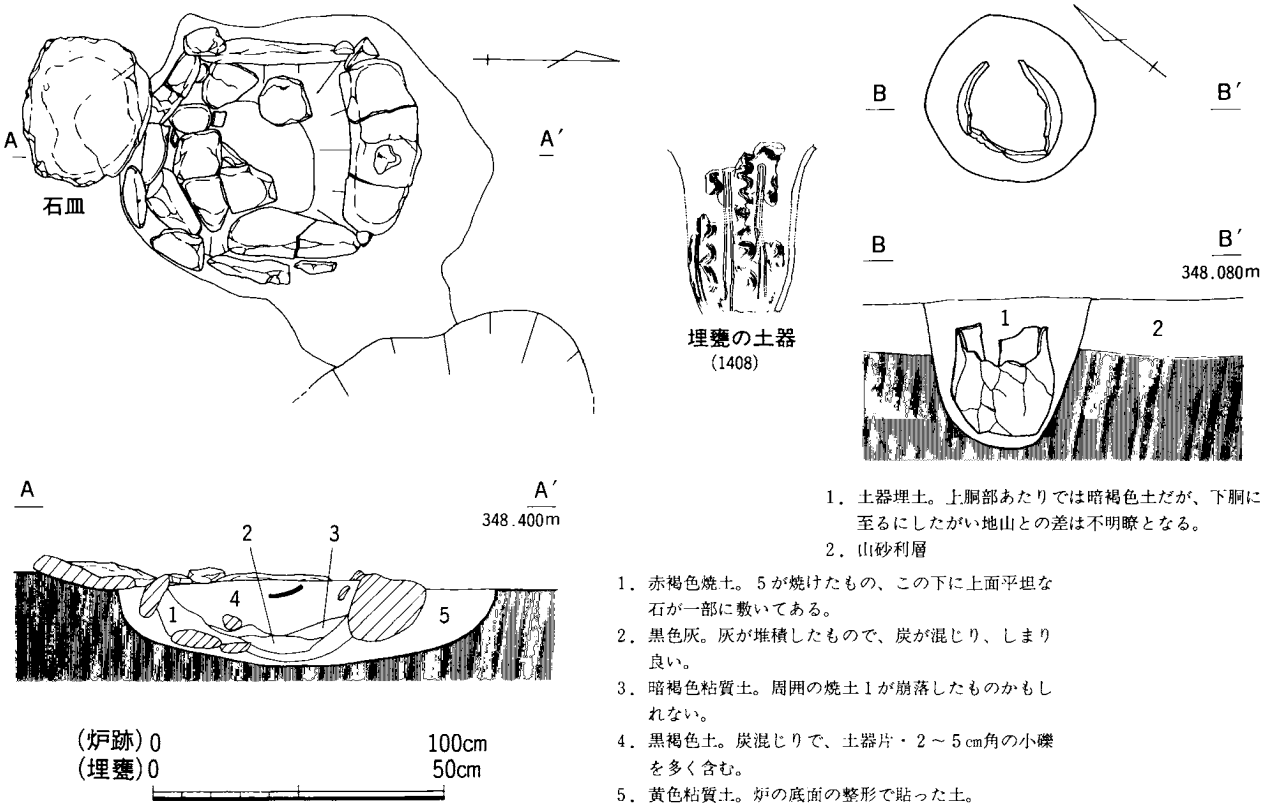
(2)遺　物

①縄文土器（第28～41図、図版14・15・18・19）

本住居跡の覆土からは、2,174点の土器が出土している。そのうち混入である後期の土器４点を除いて、ほとんどが中期後半のものである。有文系土器を中心に、前述した土器分類によりつつ、順に記述する。



第26図　第２号住居跡　（ＳＢ２）



1．土器埋土。上胴部あたりでは暗褐色土だが、下胴に至るにしたがい地山との差は不明瞭となる。
2．山砂利層

1．赤褐色焼土。5が焼けたもの、この下に上面平坦な石が一部に敷いてある。
2．黒色灰。灰が堆積したもので、炭が混じり、しまり良い。
3．暗褐色粘質土。周囲の焼土1が崩落したものかもしれない。
4．黒褐色土。炭混じりで、土器片・2～5cm角の小礫を多く含む。
5．黄色粘質土。炉の底面の整形で貼った土。

第27図　第2号住居跡炉跡および埋甕

C1群の土器（第28図　1128～1135、図版18）

本群に属する土器片は、不明瞭なものも含め13点しかなく、混入と考えられる。

（1128）は粗い撚りの縄文を地文とし、口縁から縦に伸びる隆帯に沿って平行沈線を引く。口端は丸く、口縁内面に幅1.2～1.3cmのやや肥厚した縄文帯をもつ。B類①種に属する。（1129）も隆帯や平行沈線がない破片であるが、粗い撚りの細い縄文からB類と考えられる。

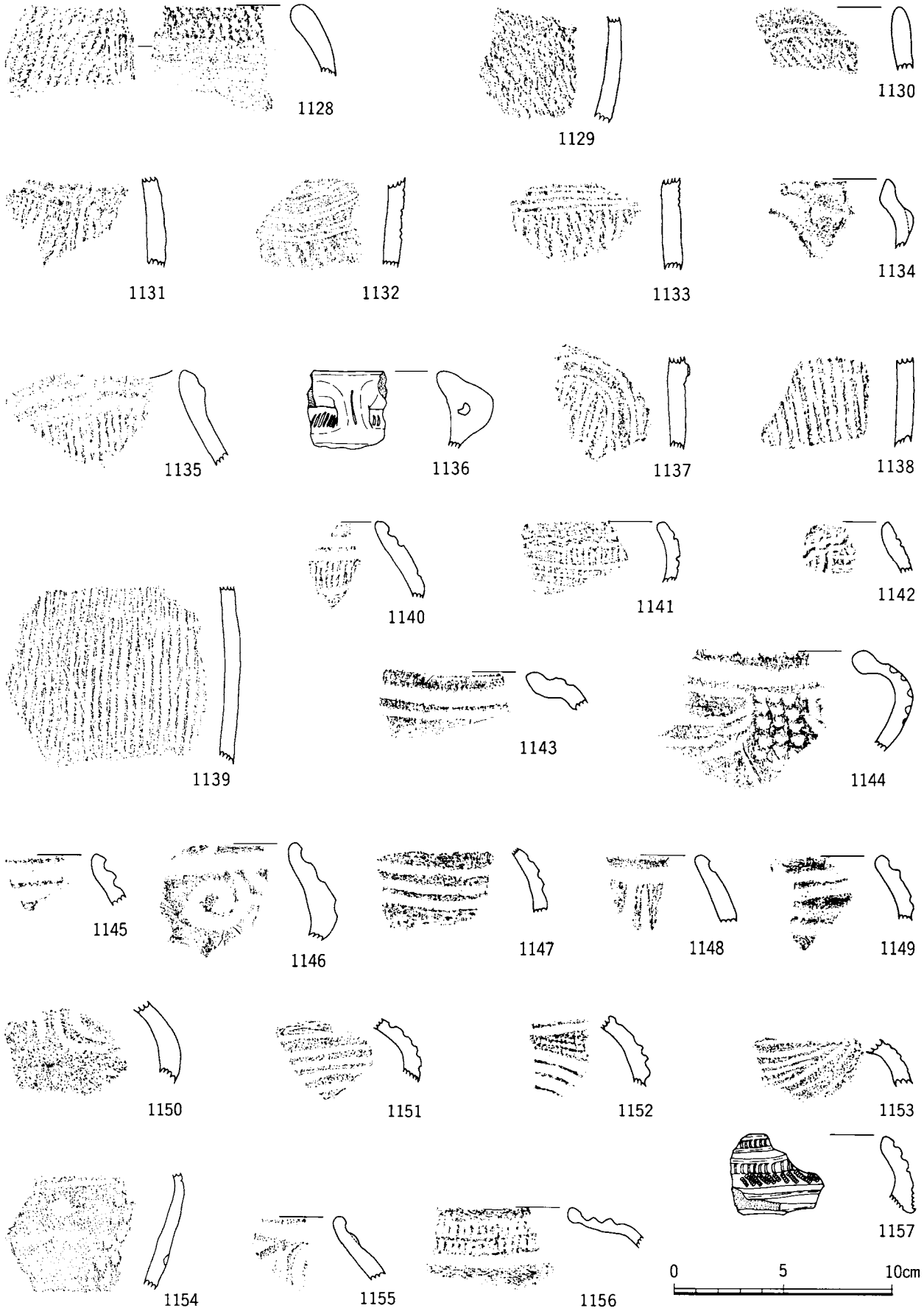
（1130）～（1133）は普通の縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線文を施す。（1130）は波状口縁で口端に刻目を施している。本群C類に属する。

（1134）は地文は無文で、幅狭の貼付素隆帯をもつ。器厚は薄手で、口端を外反させ、口縁にも剥落しているが貼付隆帯がつく。口縁内面は外反部分に縄文帯をもつ。外面と口縁内面の縄文帯部分に赤色顔料を施す。本群D類③種に属す。

（1135）は波状口縁で、普通の縄文を地文とし、口縁沿いに貼付素隆帯を施す。本群E類に属す。

C3群の土器（第28図　1136、図版18）

（1136）1点のみで、混入と考えられる。器厚は薄手で、口縁を貼付で肥厚させ、そこから中央に割れ目の入る小さな把手が縦位に付く。口縁肥厚帯の下に押し引きの連続刺突文を施している。



第28図　第２号住居跡出土土器(1)　Ｃ１・３・６・７群

Ｃ６群の土器（第28図　1137～1142、図版18）

（1137）～（1139）は地文が縄巻縄文で「船元Ⅳ式」に比定でき、Ａ類に属する。（1137）は円弧状の隆帯上に平行沈線を引く。他に本類に属する細片が５点ある。

（1140）は撚糸文を地文とし、棒状工具による幅広の沈線を引く。「里木Ⅱ式」に比定でき、本群Ｂ類②種に属する。（1141）・（1142）は撚糸文を地文とし、口縁沿いにコンパス文の２本の波状文を施す。「里木Ⅱ式」の範疇に入り、Ｂ類③種に属する。その他、本類に属すると考えられる撚糸文の土器片が36点出土しているが、いずれも細片である。

Ｃ７群の土器（第28・29図　1143～1172、図版18）

キャリパー形口縁をもち、沈線や貼付による渦文と円弧文が施される土器で、口縁部が強く内彎するもの（Ａ類）と、内彎した口縁部がさらに外反気味に立ち上がるもの（Ｂ類）とがある。本群に属すると考えられる破片は51点出土している。

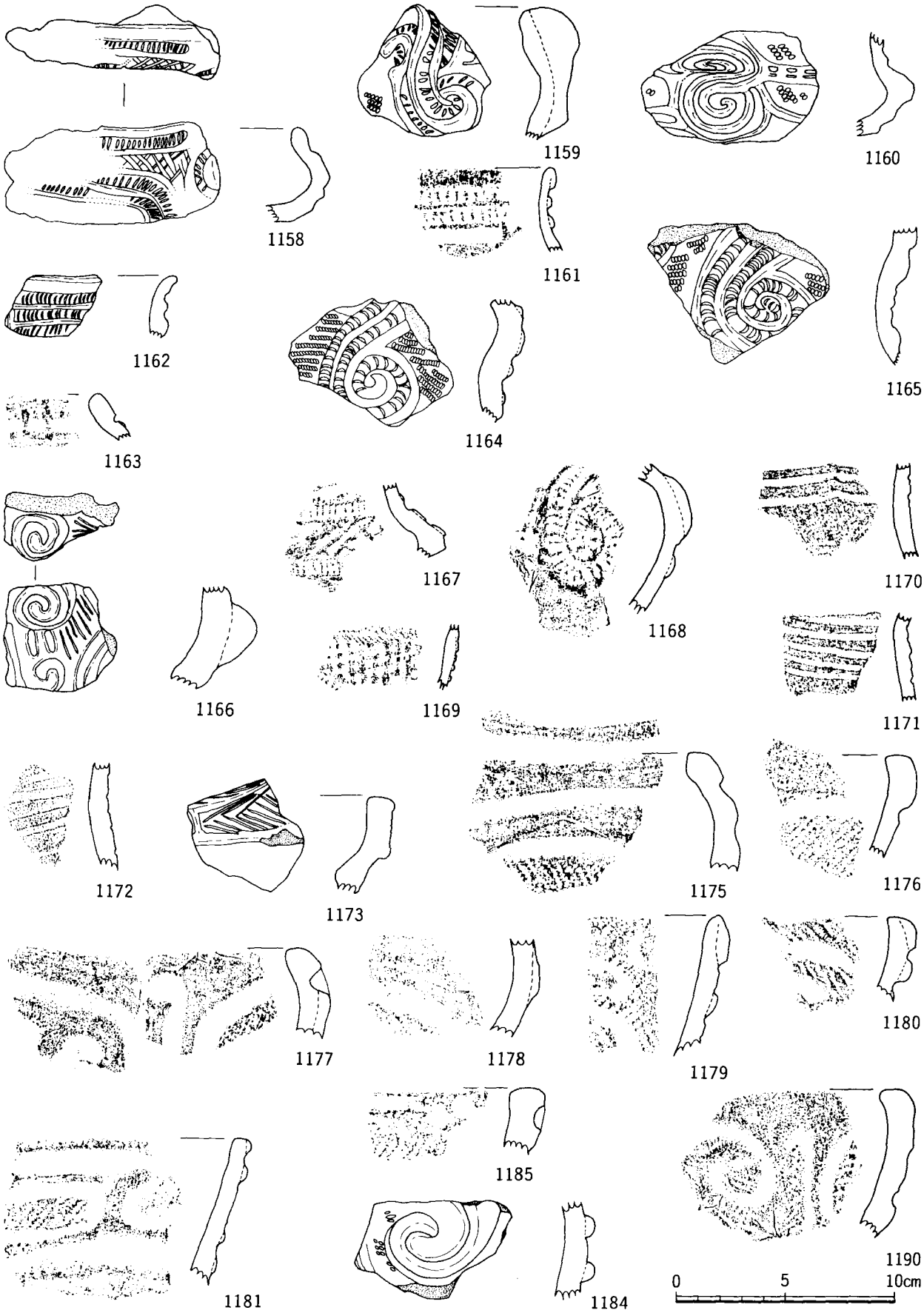
このうち、Ａ類に分類できるものが17点ある。（1143）～（1154）は沈線による施文（①）である。器厚は７～８㎜で、口端は丸くおさめ、（1149）を除いてやや上向きになる。（1144）は連弧状沈線が集合する間に３列の刺突を垂下させる。（1150）も刺突が垂下する。（1154）は同様に雨滴状の刺突列が垂下するが、地文が非常に細かな撚糸文である。（1148）は撚糸文の上に縦位の沈線を引いている。（1152）は地文が縄文で、沈線間が浮線状を呈する。（1146）はやや異質な感じで、渦文も含め沈線が幅広である。貼付による施文のもの（②）は（1155）がある。口端はやや上向きになり、貼付間に縄文を充塡する。貼付＋半截竹管状工具の外面による押し引きの施文のもの（③）が（1156）～（1159）である。（1158）は渦文の部分で肥厚し、角がつくタイプで、区画間はそうめん状粘土紐で格子目の貼付を充塡する。（1159）も渦文部で角がつくが、逆Ｓ字に連結する渦文の貼付が太く、区画が強調されている。（1157）は他の口縁部とやや異なり、内彎というより内屈という表現があたっている。押し引きと沈線の間に縄文を施文する。

Ｂ類に属するものは以下の７点がある。（1160）～（1165）は、キャリパー形口縁部分の平面形が円形あるいは多角形で、施文にそうめん状貼付と連続刺突文あるいは押し引きを多用するもの（①）である。（1160）は渦文連結部で肥厚して区画になる。貼付による区画間は格子目状の貼付部分と縄文の部分がある。（1162）は貼付の間は押し引きではなく、爪形の連続刺突文である。（1164）・（1165）は縄文を充塡する。（1166）は沈線による施文で、間を箆沈線で充塡しており、③種に属する。Ｂ類で口縁が残存しているものは３点であるが、口縁はすべて折り返しか貼付による複合口縁になる。

その他の破片はＡ・Ｂ類の区分が不可能なものである。（1170）～（1172）は本群土器の頸部から胴上部に特徴的な連弧文沈線を施文する土器片である。

Ｃ８群の土器（第29図　1173）

（1173）は波状口縁で、貼付隆帯を口唇部にもち、波頂部に縦位の橋状把手がつく痕跡があ



第29図　第２号住居跡出土土器(2)　Ｃ７～９群

る。隆帯上はそうめん状の粘土紐で縁取りし、中に矢羽根状沈線を充填する。口端部にも箆による沈線を斜めに引く。口縁内側に三角形断面の段をもつ。これらの特徴から、本群A類に属すると考えられる。

C９群の土器（第29～34図　1174～1248、図版14・15・18・19）

本群は、口縁部に隆帯による区画文を配するものが多く、区画内に縄文・刺突文・沈線文を充填する、厚手でキャリパー形口縁の器形を呈する土器である。

隆帯による楕円区画文を配し、縄文を充填するA類に属するものは（1174）～（1185）である。（1174）は底部を欠損しているが、口縁径24.5cmを測る復元品である。楕円区画は４単位であるが均一ではない。右上に口縁隆帯から伸びる渦文がつく。胴部は縄文を施文し、３本１組の懸垂文を沈線で引き縦位分割する。３本の懸垂文の間は縄文を磨り消している。分割された区画中央に蛇行懸垂文沈線を垂下させている。（1174）のほか（1175）～（1178）が区画内に縄文を充填する①種にあたる。楕円区画外にも縄文を施文するもの（②）に、（1179）・（1180）がある。また、口縁部文様帯の幅が狭くなるタイプ（③）に（1181）～（1183）がある。（1181）は楕円区画内に縄文を施文する。（1182）は区画内は無文で、区画外に縄文を施文する。さらにその下に刺突列風に縦位の短沈線を巡らし、縄文を施文する横位の隆帯で頸部と区分する。頸部は横位の沈線が３条確認できる。（1183）は口縁部が外反気味に開く小型の深鉢である。モチーフが簡略化しており、隆帯による楕円区画であるが、渦文は退化して区画上部に半島化して痕跡が残る。また、Ｓまたは逆Ｓ字形の沈線文も退化してなくなり、上下の刺突として痕跡を留める。胴部文様との境に刺突列を巡らせて区分し、胴部は沈線で逆Ｕ字に分割する。他の個体に比べ、時期的に下がると考えられる。その他、本類に属すると考えられるものに（1184）・（1185）がある。

隆帯による楕円区画文を配し、刺突文・沈線文を充填するＢ類に属するものは（1186）～（1224）である。充填する文様等により次のように細分した。

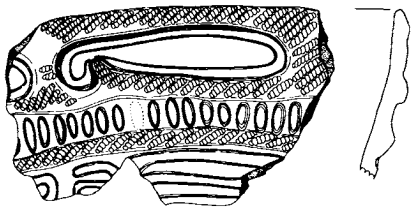
①種は斜行する集合沈線を充填するもので、ａ．隆帯すそを沈線で縁取るもの、ｂ．隆帯すそを沈線＋刺突あるいは刻目で縁取るもの、ｃ．隆帯上に刺突・刻目を有するものがある。

②種は矢羽根状沈線を充填するもので、ａ．隆帯すそを沈線で縁取るもの、ｂ．隆帯すそを沈線＋刺突あるいは刻目で縁取るもの、ｃ．隆帯上に刺突・刻目を有するもの、ｄ．縁取り等のないものがある。

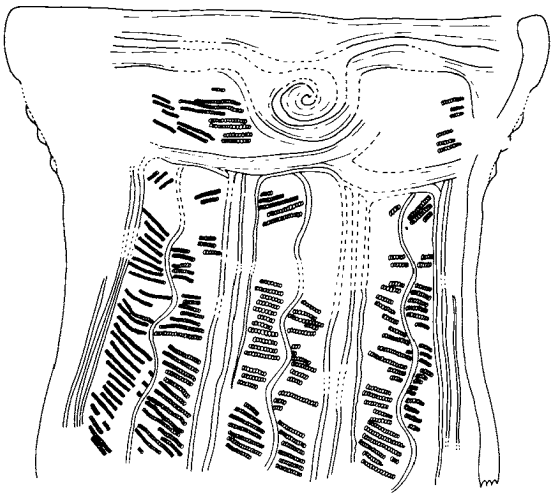
③種は刺突文を充填するもので、ａ．区画内に充填するものと、ｂ．区画外にも刺突を入れるものとがある。

④種は条線文を充填するものである。

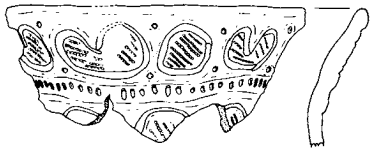
（1186）は①－ａ種の口縁部の復元品であり、口縁径37.5cmを測る。隆帯による楕円区画文６単位のモチーフで、楕円区画の左と右上に渦文をもつ。区画内および区画周囲を左傾する集合沈線で充填し、口唇部に沈線＋刻目状の刺突を２条有する。胴部は３本１組の懸垂文沈線を



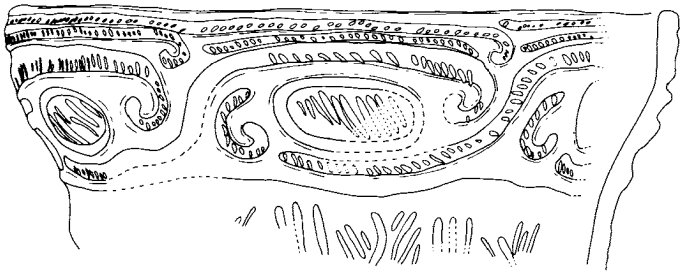
1182



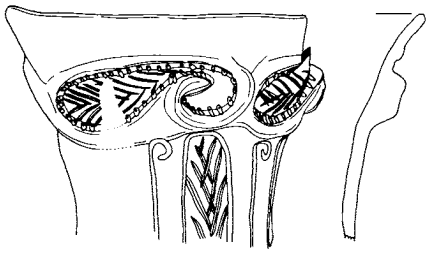
1174



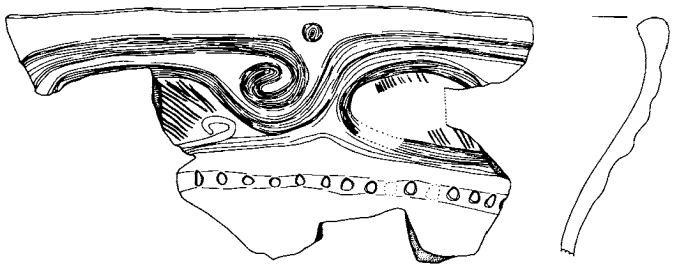
1183



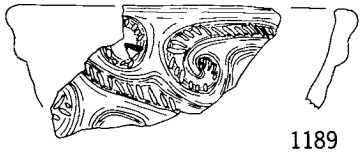
1186



1188



1187



1189

0　5　10　15cm

第30図　第２号住居跡出土土器(3)　Ｃ９群

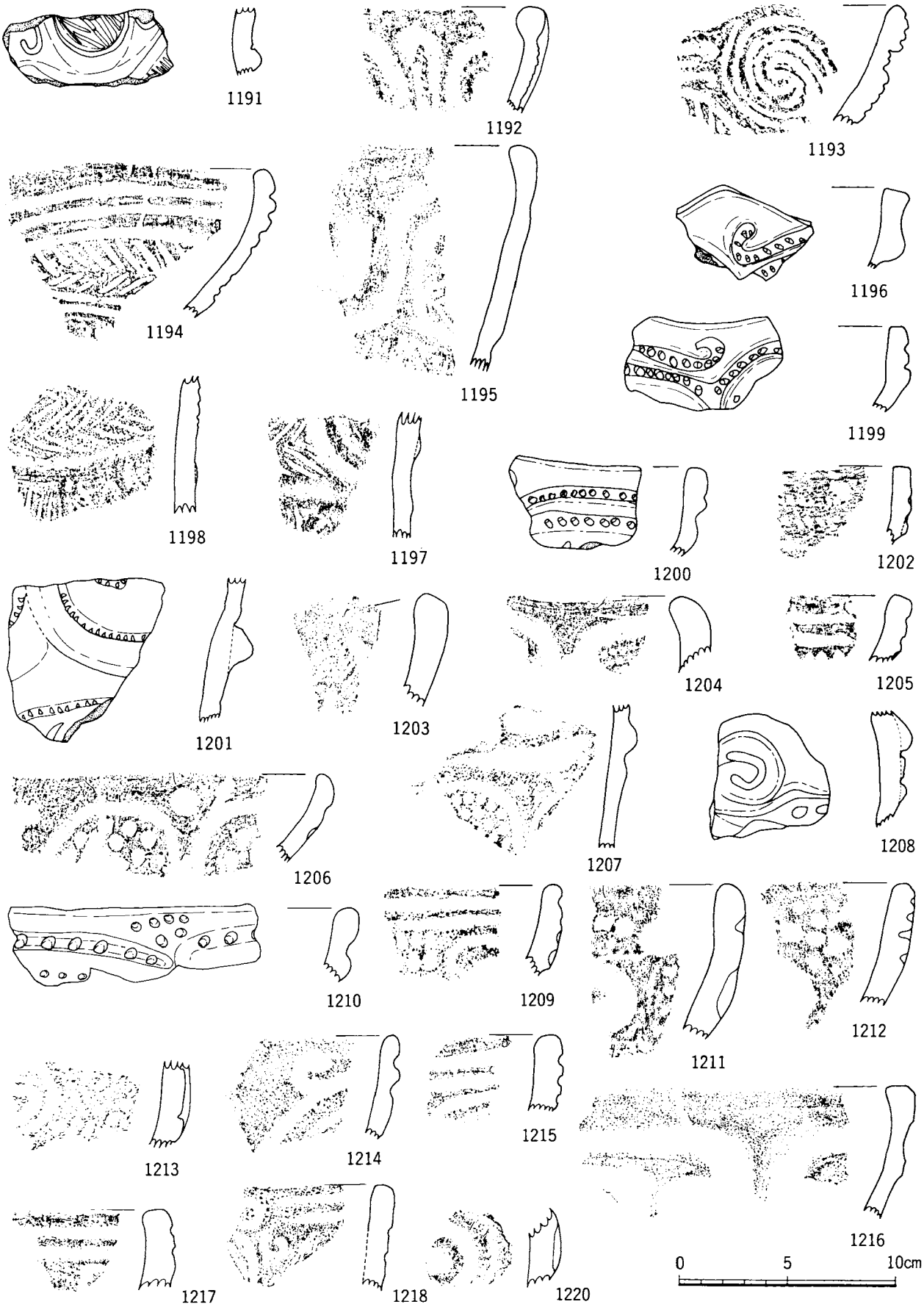
引き縦位分割する。区画内は中央に蛇行懸垂文を1条引き、それをはさんで下向きの矢羽根状沈線を充塡している。(1187)も①－a種に属し、隆帯による楕円区画文で、右上に渦文がつく。その右上の口唇部下に丸い指頭大の刺突がはいる。区画内は沈線で縁取りし、条線状の細沈線で充塡する。頸部に刺突を施した隆帯を有し、その下は無文である。(1188)は口縁径18.5cmの小型の深鉢で②－b種に属する。胴上部から外反気味に開きながら立ち上がった口縁部をもつ。隆帯による楕円区画文を4単位施し、右側に渦文をつける。区画内は渦文も含めて沈線＋刺突文で縁取りし、右向きの矢羽根状沈線文を充塡する。胴部は蕨手状の懸垂文を沈線で引き、6単位に縦位分割する。逆U字形の沈線区画文が間にはいり、区画内は下向きの矢羽根状沈線を充塡する。(1189)も②－b種に属する。隆帯による楕円区画文で、左に渦文がつく。区画内は沈線で縁取りし、左向きの矢羽根状沈線を充塡する。また、渦文を出発点にして隆帯すそに沈線＋刻目状刺突を有する。区画間の上に丸い凹みをもち、中に刺突がすそをめぐる。口端には刻目がはいる。

その他、①－a種に属するものに(1190)～(1193)があり、(1193)は波状口縁になる。②－a種に属するものには(1194)～(1197)がある。①種か②種かの詳細は不明であるが、bに属するものは(1198)～(1203)がある。(1203)は刻目であるが、他は刺突で縁取る。(1198)・(1203)は波状口縁になる。③－a種では(1204)～(1208)があり、(1208)は波状口縁である。③－b種は(1209)～(1212)があり、(1210)～(1212)の3点は同一個体と考えられる。(1213)は詳細不明だが③種と思われる。(1214)は区画外に条線を充塡し、④種に属すると考えられる。

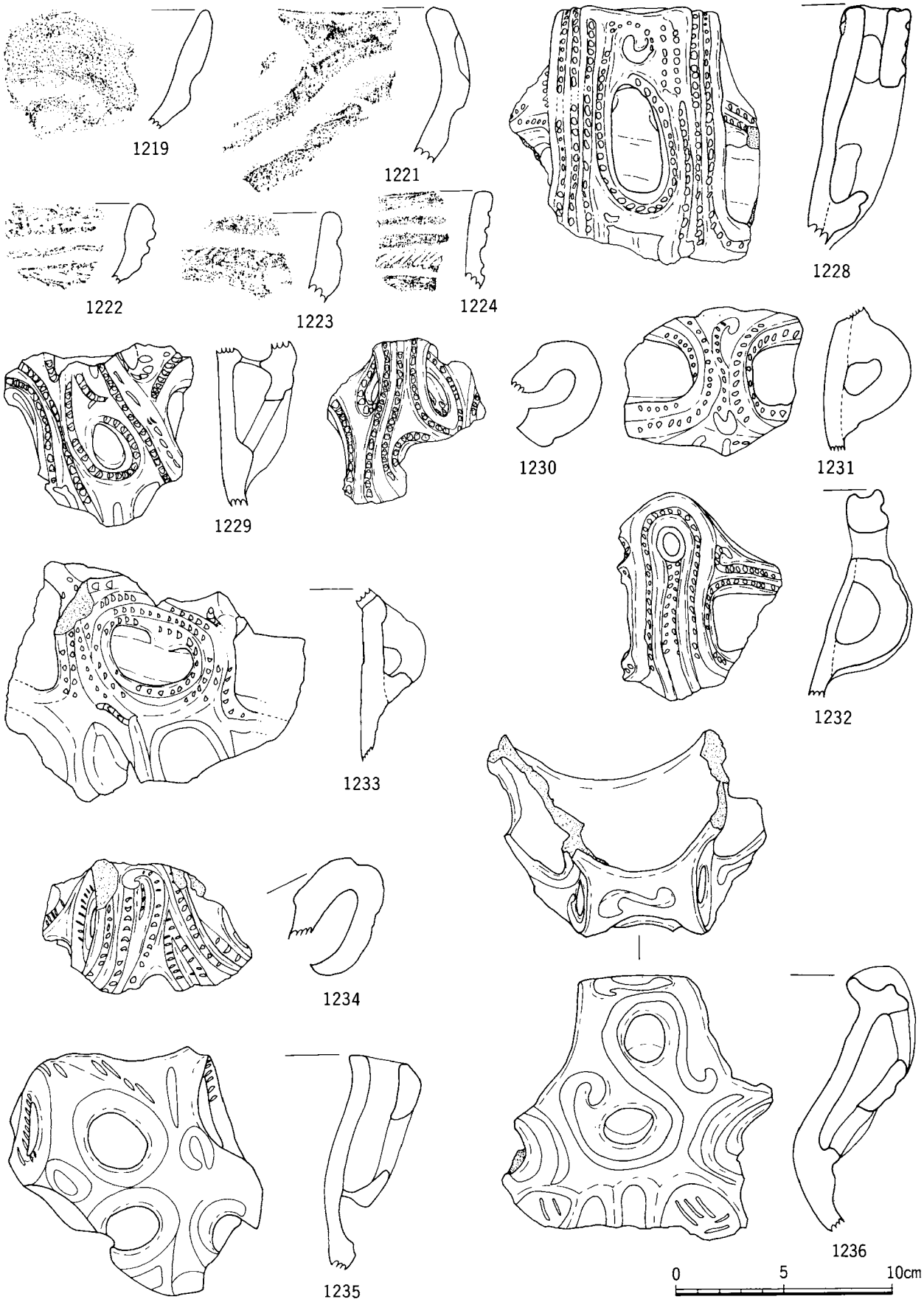
なお、細分は不明であるが、本類の口縁部破片と考えられるものに(1215)～(1224)がある。

口縁部の区画内に沈線文・刺突文を施し、突起・把手をもつ土器群をC類としている。器形・文様とも「曽利III式」の影響を色濃く受けている一群である。

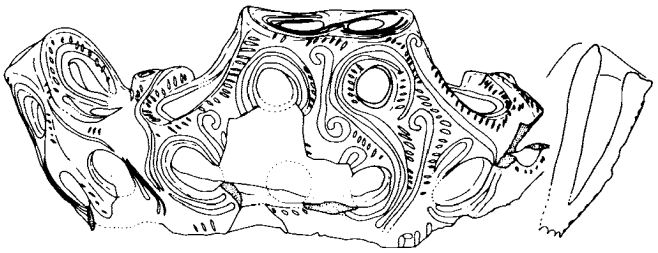
口縁部が箱状の把手になるもの(①種)は(1225)～(1238)がある。(1225)は口縁に箱状把手が2対4個つく。4個とも立面から見ると賽の目状に4個の円形の穿孔をもつが、平面から見た場合1対は穿孔が2つあるのに対し、1対は楕円形の穿孔が1つである。また、箱状把手の間に、それぞれ上部が筒状突起になる橋状把手を配している。把手・突起の表面は、沈線と刻目状の短沈線で施文する。また、穿孔の周囲や間にはS字あるいは逆S字を沈線で施文する。(1226)は同一個体の頸部～胴部破片である。頸部には筒状突起をもつ把手の下に位置すると考えられる縦の橋状把手を配している。胴部は低い二重の隆起線で唐草文を配し、間は斜行の集合沈線を充塡している。なお、(1227)は同一個体の箱状把手部分である。3点とも器壁表面は橙色(5YR6/6)を呈する。(1228)も(1225)と同様に口縁が富士山形を呈する箱状把手である。立面から見ると方形を呈し、中央に楕円の穿孔が位置する。楕円の上に沈線で渦文をつくり、それが延びて円周をめぐる。口端部の平面・側面にも穿孔がある。把手表面は沈線の上に刺突を加えた文様をえがく。同一個体と考えられる把手類に(1229)・(1230)があり、頸部



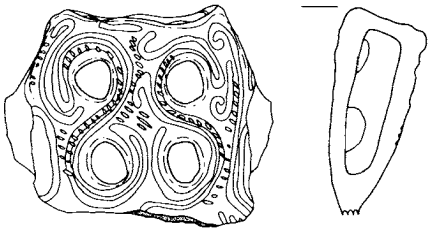
第31図　第２号住居跡出土土器(4)　Ｃ９群



第32図　第２号住居跡出土土器(5)　　Ｃ９群

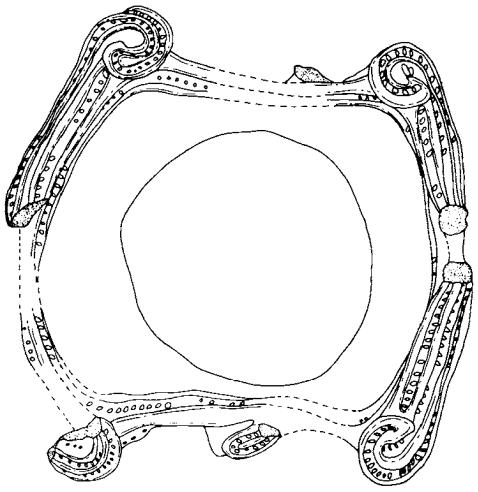


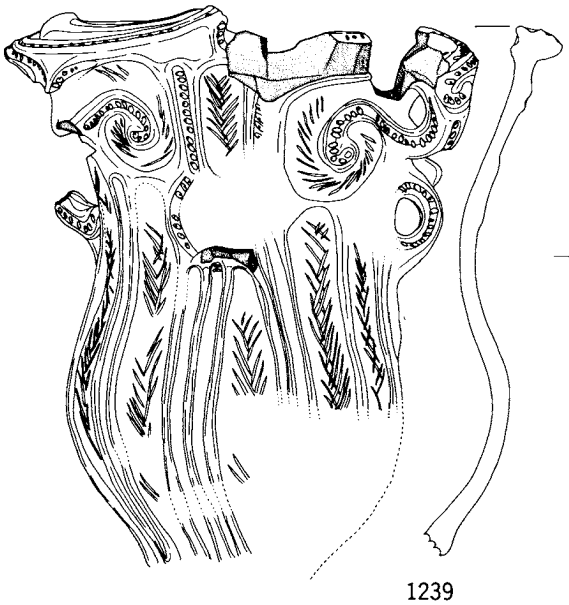
1225



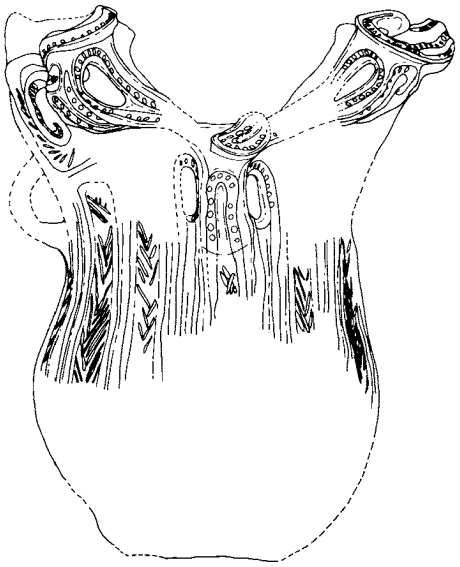
1227

1226





1239



1239

0　5　10　15cm

第33図　第２号住居跡出土土器(6)　Ｃ９群

に位置すると思われるものに（1231）がある。また、把手の形状や胎土にわずかな違いが見られるが、施文方法は同一（沈線＋刺突）であるものに（1232）～(1235）がある。(1236）は同様の富士山形の口縁を呈する箱状把手である。立面に縦に2個の円形の穿孔を施す。その周囲をめぐる形で、隆帯により沈線状にS字を施文し、側面も同様の施文である。波頂部口端には横S字形の文様を施す。胴部は縦位に隆帯分割し、区画内に下向きの矢羽根状沈線を充塡する。器面調整は良好で、橙色(2.5YR6/8)を呈する。(1237)は本種につく突起部と考えられる。

突起・把手を口縁部にもつもの（②種）は（1239）～(1245）がある。(1239）は脚台付の深鉢であるが、脚台部を欠損している。口縁の対になる2ヵ所を「襟刳り」状に切り取ったようなつくりをもつ。口縁部は「襟刳り」状切り取りをはさんで相対し、それぞれゆるやかな波状を呈する。波頂部口端に橋状把手がつくが、欠損していて形状は不明である。口端は波頂部把手より「襟刳り」状切り取りに向かって、隆帯で渦文をつくり、隆帯間に沈線＋刺突の施文をする。口縁内側は、口縁の形状に沿って少し下に隆帯がめぐり、口端内側との間に沈線＋刺突を入れる。口縁部文様は、波頂部下の隆帯区画に下向きの矢羽根状沈線を充塡し、その左右側縁の隆帯間は刺突列をつくる。また、それをはさんで両側に対照的に唐草文風の渦文を隆帯で施し、斜行する集合沈線や刺突を充塡している。立面の橋状把手はすべて縦方向で、「襟刳り」状の口縁の両脇に合わせて4ヵ所と、頸部にあたるくびれ部分に4ヵ所の、合計8ヵ所につく。胴部は中央部がふくらむ器形で、2本と3本をセットにした隆帯懸垂文で縦位分割する。区画内は下向きの矢羽根状沈線を充塡する。(1240)は口縁部に縦位の橋状把手をもつ。中央に橋脚が1本はいる。口端および口唇部から橋状把手に沈線＋刺突の施文を行い、把手両端部分にS字状の渦をもつ。口縁部表面の器壁には格子目状に粗雑な沈線を充塡する。口縁内側は口唇部がやや張り出し、7cmほど下がって肥厚し屈折部の段をつくっている。(1241)は口縁を内折させ幅2cmほどの口端面をつくる。口端面は（1240）に類似し、中央の隆帯をはさんで沈線＋刺突を施す。口縁部は粘土を貼り付けて肥厚させた隆帯区画で渦文を配置し、渦の間は短沈線状の刺突を施すが、その他の詳細は不明である。(1242）～(1244）は同一個体である。口唇部貼付隆帯とそれよりやや厚手の貼付隆帯を下段につける。間は無文で、ところによって橋状把手を縦につける。胴部は2本の沈線を垂下させて分割し、区画内に幅広で浅い左傾の沈線を充塡する。(1245)は口縁に取りつく突起で、(1239)のものと類似している。ただ、隆帯上に沈線＋刺突を施文している点が異なる。

なお、本類土器の頸部に付く把手類として（1246）がある。

小片で詳細は不明であるが、肥厚化した口縁部文様帯をもち、隆帯あるいは沈線で文様を割り付け、沈線文・刺突文を充塡するもの（D類）に、(1247)・(1248）がある。

C10群の土器（第34・35図　1249～1258、図版19）

本群は「北白川C式」に類似するものである。本住居跡からは、「深鉢C類」に類似する突起

状山形口縁をもつもの（Ａ類）と浅鉢（Ｃ類）が出土している。

Ａ類の縁帯部をもち地文が無文のもの（①種）は８点ある。(1249) は沈線による渦巻文を施すもので、縁帯部は２本の沈線を引いている。あとの７点は不整円形状区画内を刺突で充塡するものである。(1250)は沈線で不整円形の区画を施し、中に刺突を充塡する。その下に集合沈線や渦文が見られる。波頂部側縁は沈線に囲まれた刺突列を施す。口縁内側には段になる貼付隆帯が横位にめぐる。(1251)・(1252)は同一個体と考えられる。波頂部の不整円形区画内に刺突を充塡し、その下は３本の縦位沈線で分割し、刺突を密に充塡する。縁帯部は４条の沈線が平行に施文されるが、同一個体の小片から、山形口縁の間に小突起がつくと考えられ、小突起部分で折り返す平行沈線と推定される。(1253) は (1251) 等と類似するが、口縁沿いに２本の沈線を入れ、その下に刺突が充塡されている。口唇部にも刺突列がある。縁帯部は平行沈線で長楕円区画を施し、中を刺突で充塡している。

縁帯部のないもの（③種）は３点ある。(1254) は突起状山形口縁部にＪ字形の貼付隆帯をもつ。口縁も隆帯になり、隆帯上は縄文を施文する。山形口縁部の下も隆帯による区画を施し、中は縦位の沈線や縄文が見られる。(1255) も (1254) に類似する口縁部破片である。隆帯による渦状の施文が見られる。(1256) は沈線による渦巻文を施す。

Ｃ類の浅鉢類では、口縁部片が２点ある。(1257)は口縁部が内折し、胴部との境に貼付隆帯を施す。口縁部文様帯は縦の２本の隆帯で区画し、隅丸方形の沈線を引いている。(1258)は幅の狭い口縁部の上下が突帯状に肥厚し、橋状把手状の突起がつく。突起を横方向に穿孔して橋状把手状にしている。「北白川Ｃ式」の浅鉢Ｂ２類に類似している。

Ｃ11群の土器（第35図　1259～1277、図版19）

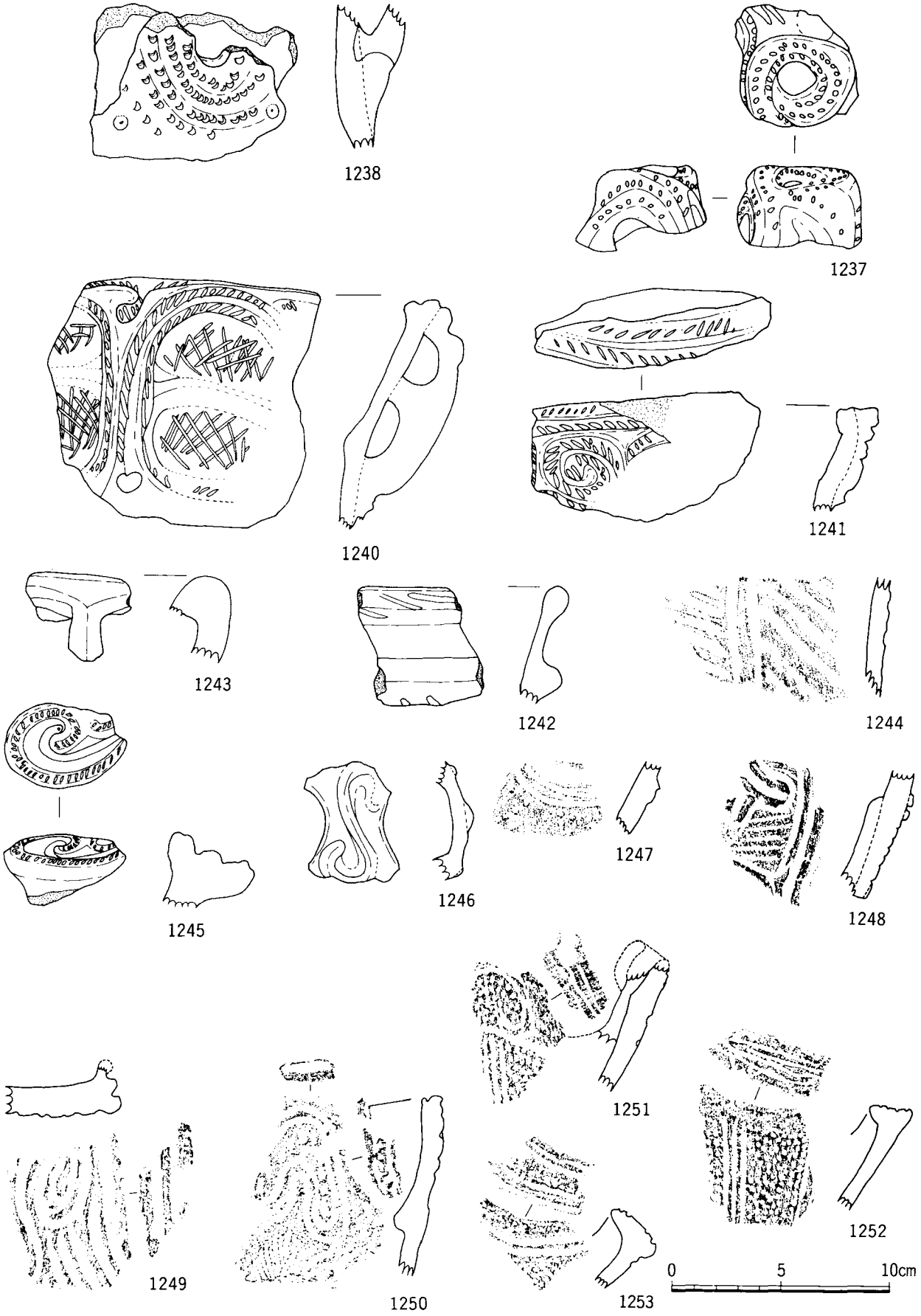
本群は口縁部に沈線による文様の割り付けを施す中期末の土器群である。

口縁部に沈線による楕円形の区画文を配するもの（Ａ類）に (1259) ～(1264) がある。(1259) は口唇部のすぐ下に太く浅い沈線で楕円区画文を配し、区画内にＲＬの縄文を充塡する。同様に縄文を充塡するものに (1260) があり、２本の沈線で区画している。(1261) は区画内にやや右傾の沈線を充塡する。口縁内側が肥厚し、口端部を尖らせている。(1263)・(1264)は区画内に刺突文を充塡する。

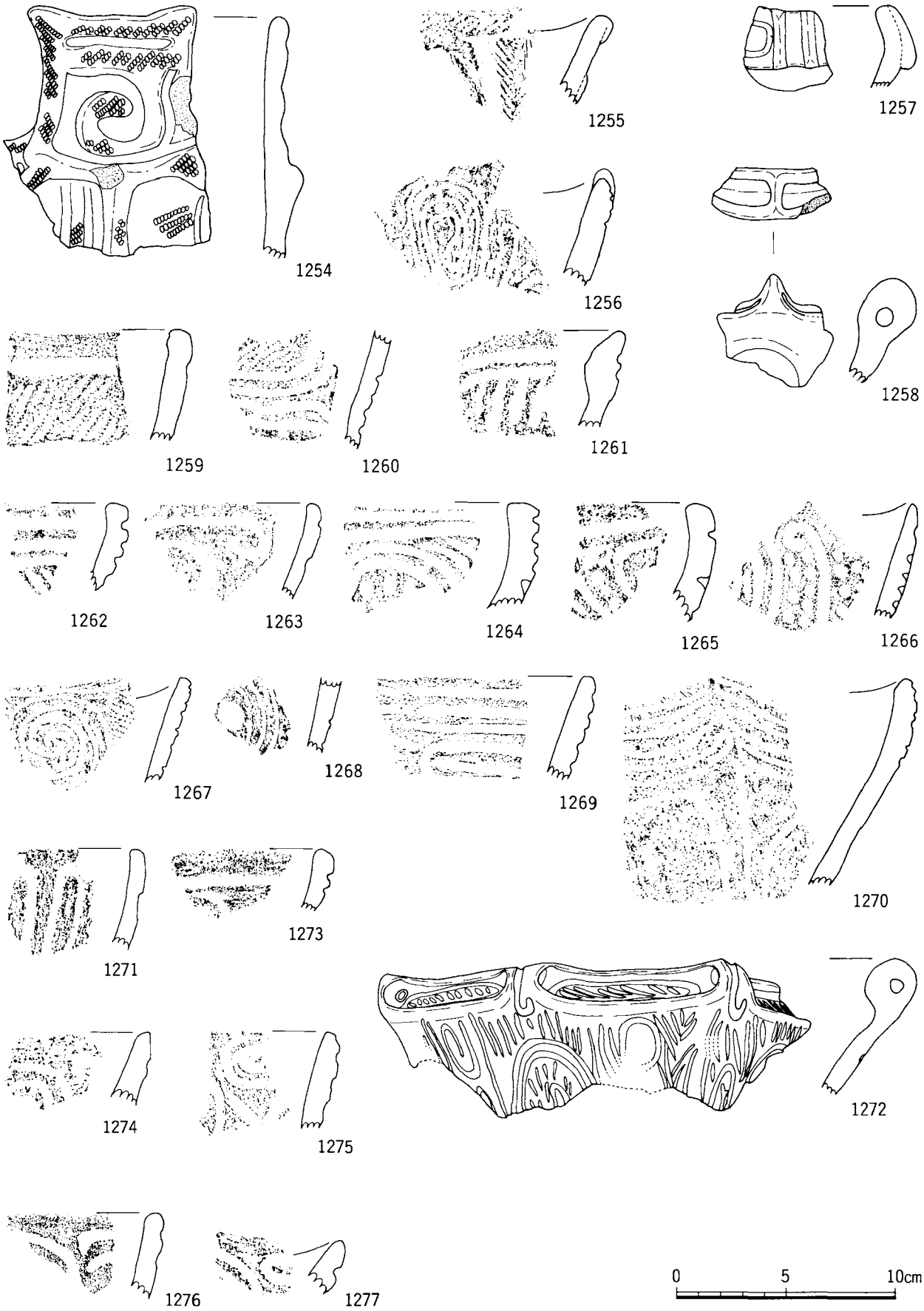
沈線で円形区画や蕨手文・渦文などを施文し、間に刺突や沈線を充塡するもの（Ｂ類）に (1265)・(1266) がある。(1266) は波状口縁になる。

渦巻文あるいは同心円文が口縁部文様の主体となり、波状口縁の波頂部を中心に位置することが多いもの（Ｃ類）に (1267)・(1268) がある。(1267) は渦文の外に縄文を施文する。(1268) は同心円状の細沈線の中央に指頭大の押圧が入る。

その他のもの（Ｄ類）では、(1269) は口縁に沿って横位の沈線を３本引き、それ以下はヘアピン状の沈線も入るが詳細は不明である。(1270)は波状口縁の土器で、口縁に沿って連弧文状



第34図　第２号住居跡出土土器(7)　　Ｃ９・10群



第35図　第２号住居跡出土土器(8)　　C10・11群

に6本の沈線を引き、波頂部で2本ずつがヘアピン状につながる。胴部は隅丸方形区画と考えられ、区画間に蕨手文沈線を垂下させている。(1271)は口縁部に縦位に逆U字形沈線を施文する。(1272)は幅狭の口縁部が内屈し橋状把手がつく。口縁部器形から見ると浅鉢に類するタイプであるが、胴部器形はバケツ型になると考えられ、内面も口縁屈折部まで炭化物が付着する。区画は6単位で、把手上に逆S字の沈線文を描く。沈線で縁取った横長の楕円形区画内は左傾の沈線を充塡する。胴部は沈線で不整円形区画や渦文を描き、間はやや細目の沈線ですべて充塡している。

その他、小片で詳細は不明であるが、本群に属すると考えられるものに（1273）～(1277）がある。

C8～11群土器の胴部（第36～40図　1280～1393、図版14・15・19）

C8群土器～C11群土器に含まれる土器の胴部片を一括した。本来は各群に対照させなければならないが、対応する口縁部片が輻湊するため、施文手法により概括するに留めた。

A　（第37図　1280～1286、図版19）

貼付隆帯により渦文など円形の文様を描くもので、(1280）～(1283）のように間に集合沈線を充塡するものが多い。

B　（第36～38図　1287～1324、図版14・15・19）

貼付隆帯の懸垂文で分割し、間を矢羽根状沈線で充塡する。分割する懸垂文が（1312）のように1本のものと、(1309)のように3本のものがある。また、間に貼付隆帯の蛇行懸垂文がはいるものとはいらないものとがある。その蛇行懸垂文も1本のものと（1309）のように2本のものとがある。矢羽根状沈線については、蛇行懸垂文が入る場合、(1312)のようにそれをはさんで1組の矢羽根を構成するものと、(1311)のように左右にそれぞれ矢羽根を構成するものとがある。蛇行懸垂文が入らない場合は、小片で詳細は不明であるが、(1293)のように中央に懸垂文を入れた矢羽根を描くものと、(1304)のように懸垂文の入らない描き方をするものとがある。

(1287)・(1288）は胴部の復元品である。(1287）は3本の貼付隆帯の懸垂文で8単位に分割する。間は中央に2本の蛇行懸垂文を貼り付け、左右にそれぞれ下向きの矢羽根状沈線を充塡している。(1288)も同様のモチーフであるが、分割する懸垂文も蛇行懸垂文も1本で、蛇行懸垂文をはさんで1組の上向きの矢羽根状沈線を充塡している。ともに胴部器形は中央部が膨らむ形で、脚台がつくタイプである。

(1323)・(1324）は貼付隆帯上に刺突を施すものである。

本類はC9群－C類の口縁部に対応することが多いが、C9群－B類・C8群の一部にも対応する。

C　（第38図　1325～1330、図版19）

貼付隆帯で分割・区画を施すその他のものを一括する。

(1325) は縦位の貼付隆帯から弧状に貼付隆帯が延び、区画間は矢羽根状沈線を充塡している。(1326)は頸部破片で、胴部は隆帯分割で縄文を充塡する。頸部隆帯上に指頭大の押圧を施している。(1327) は隆帯分割間に櫛描沈線を充塡する。(1328) は櫛描沈線を充塡し、隆帯上に刺突が入る。(1329)・(1330)は同一個体であるが、頸部の横位隆帯と胴部の縦位隆帯がともに両裾に刺突を施す。区画間は櫛描沈線を施している。

D　(第38・39図　1331～1353、図版19)

沈線の懸垂文で分割し、矢羽根状沈線や斜行する集合沈線を充塡するものを一括する。懸垂文の入れ方は２本のものが目立ち、(1340) のように間に刺突列を施すものもある。(1346) は３本の沈線を引く。矢羽根状沈線も中央に沈線を入れるものとそうでないものとがあるが、小片が多く詳細は不明である。(1341)のように蛇行懸垂文沈線がはいり、また、櫛描沈線文を充塡しているものもある。

E　(第39図　1354～1366、図版19)

沈線による不規則な区画文で、中を沈線文・刺突文で充塡するものを一括する。

(1360)・(1364)・(1365) などは、Ｃ11群－Ｂ類に対応すると思われる。(1354) ～(1356) などは口縁部に隣接する胴上部で、懸垂文あるいは区画文で分割される胴部破片と考えられる。

F　(第39・40図　1367～1393、図版19)

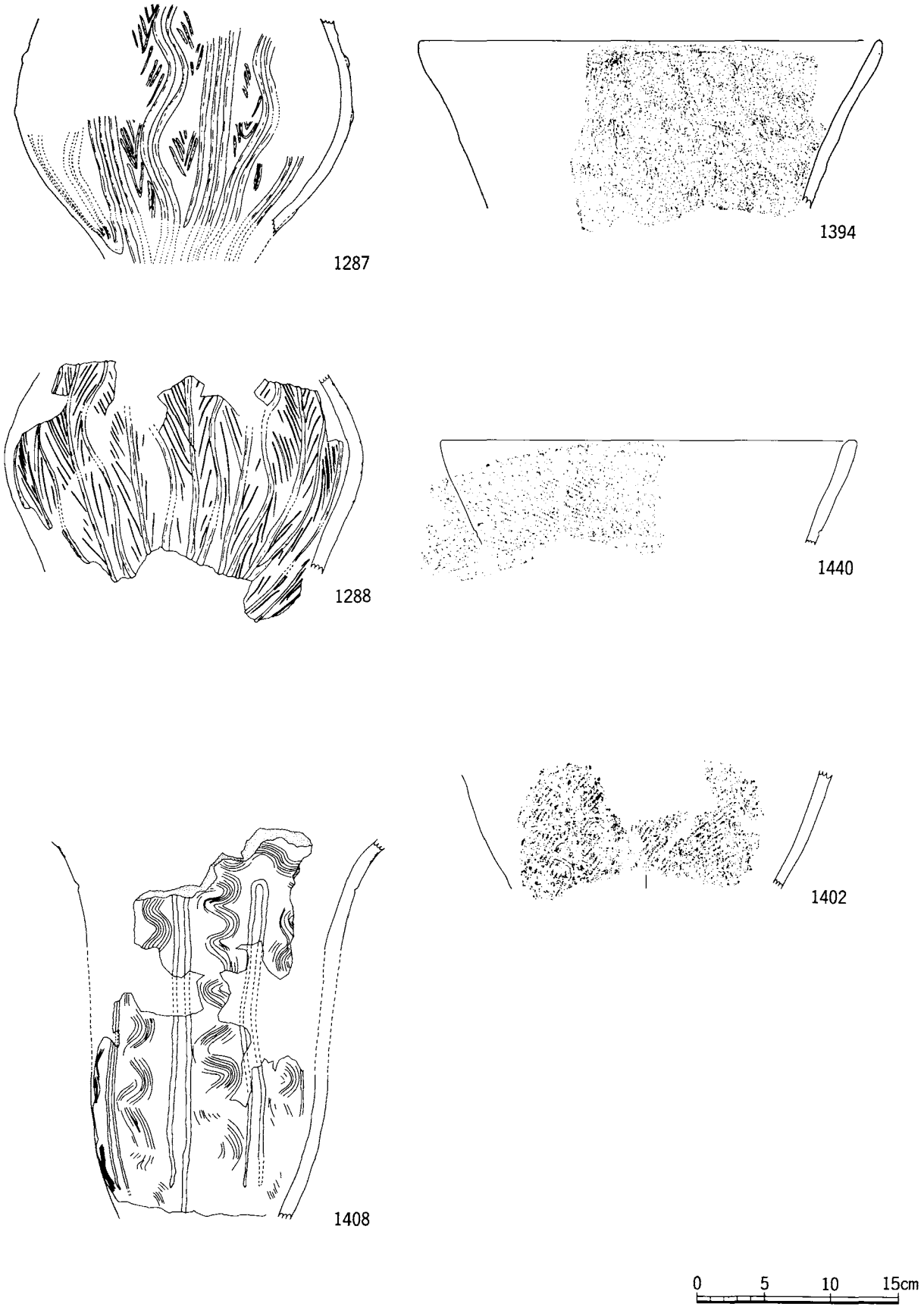
縄文を施すものを一括する。(1367) ～(1389) は斜縄文を施し、１～３本の沈線を垂下させたり、逆Ｕ字の沈線区画を施して分割した胴部片である。複数の沈線を垂下させるものは、間を磨り消す場合が多い。また、(1367) のように中央に蛇行懸垂文を垂下させたり、(1386) のように蕨手文を垂下させたりする。(1387)は垂下する２本の沈線間に縦長の楕円を沈線で描く。(1375) はＬＲの斜縄文を施し、波長の異なる３本の蛇行懸垂文が見られる。(1378) は薄手で分割沈線間に磨消部分をもたず、ＬＲの節の小さな縄文を地文とする。(1371)も薄手で３本の分割沈線を垂下させ、沈線間は磨り消している。ＬＲの節の大きな縄文を地文としている。

(1390) ～(1393) は斜縄文を施し、横位の沈線文を施文する破片である。(1390) は沈線の途中に渦文がはいる。(1393) は沈線の下に横位の蕨手文を引く。(1391)・(1392) は頸部直下にあたると考えられ、ちょうど沈線を施した粘土の輪積み部分で割れている。(1391)は沈線間に刺突列を施している。

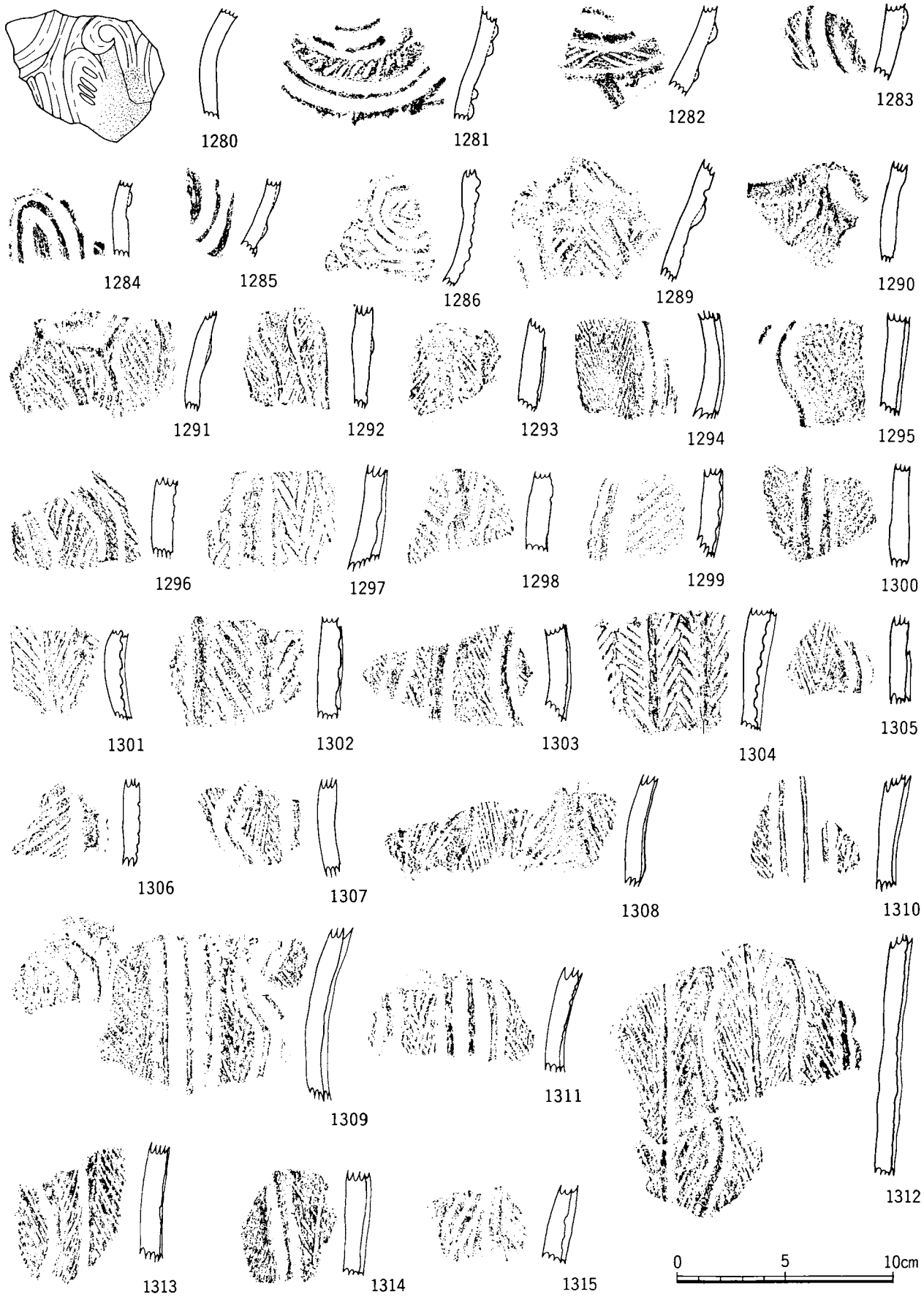
本類の多くは、口縁部に縄文を充塡する区画文を施す土器群に対応すると考えられ、Ｃ９群－Ａ類・Ｃ11群－Ａ類の胴部片と思われる。

Ｃ12群の土器（第36・40図　1394～1409、図版15・19)

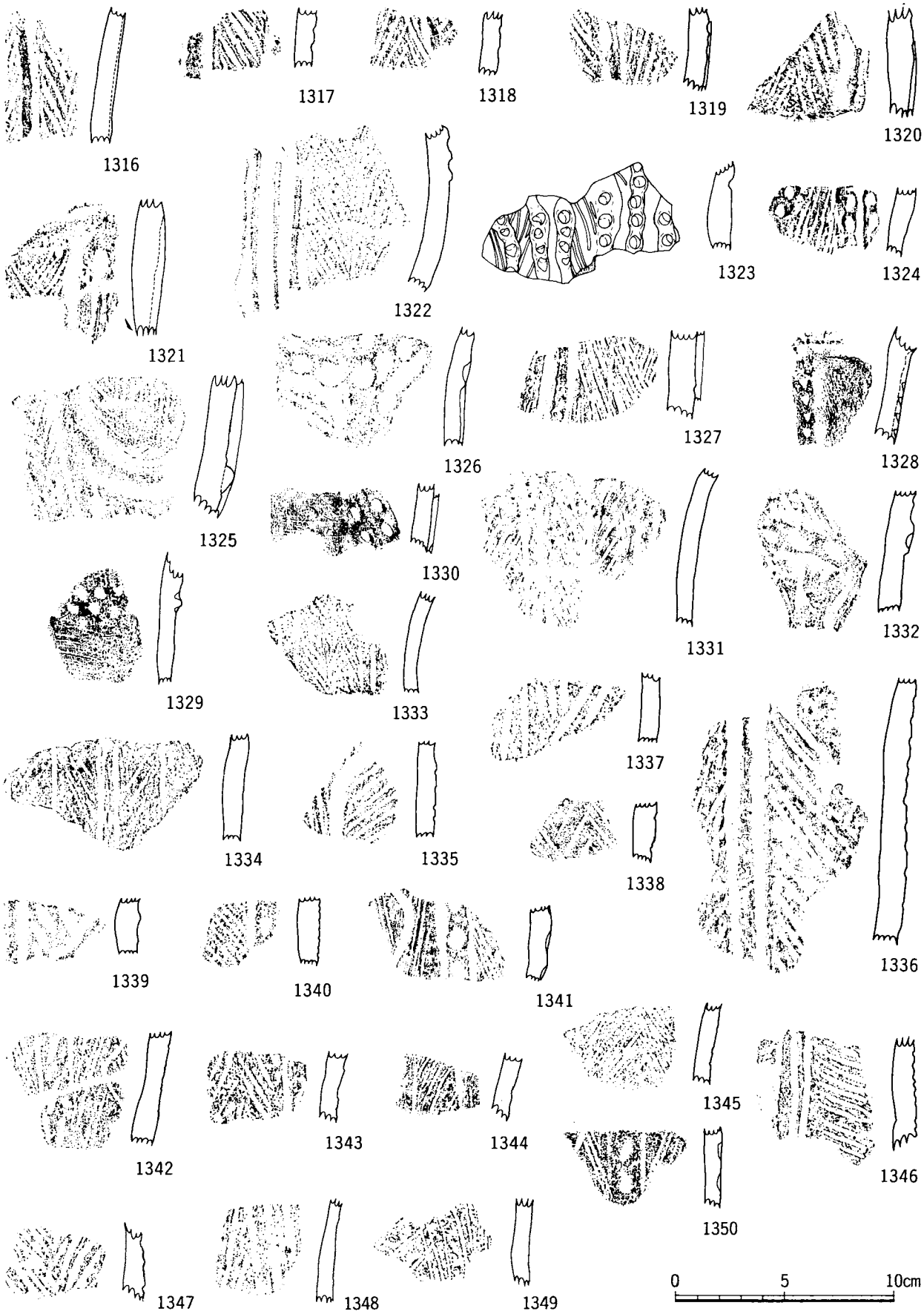
Ａ類にあたる無文土器では (1394) ～(1399) がある。(1397) を除いては器壁は粗雑なナデ調整を施す。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通である。(1398)は裏面に口縁まで炭化物が付



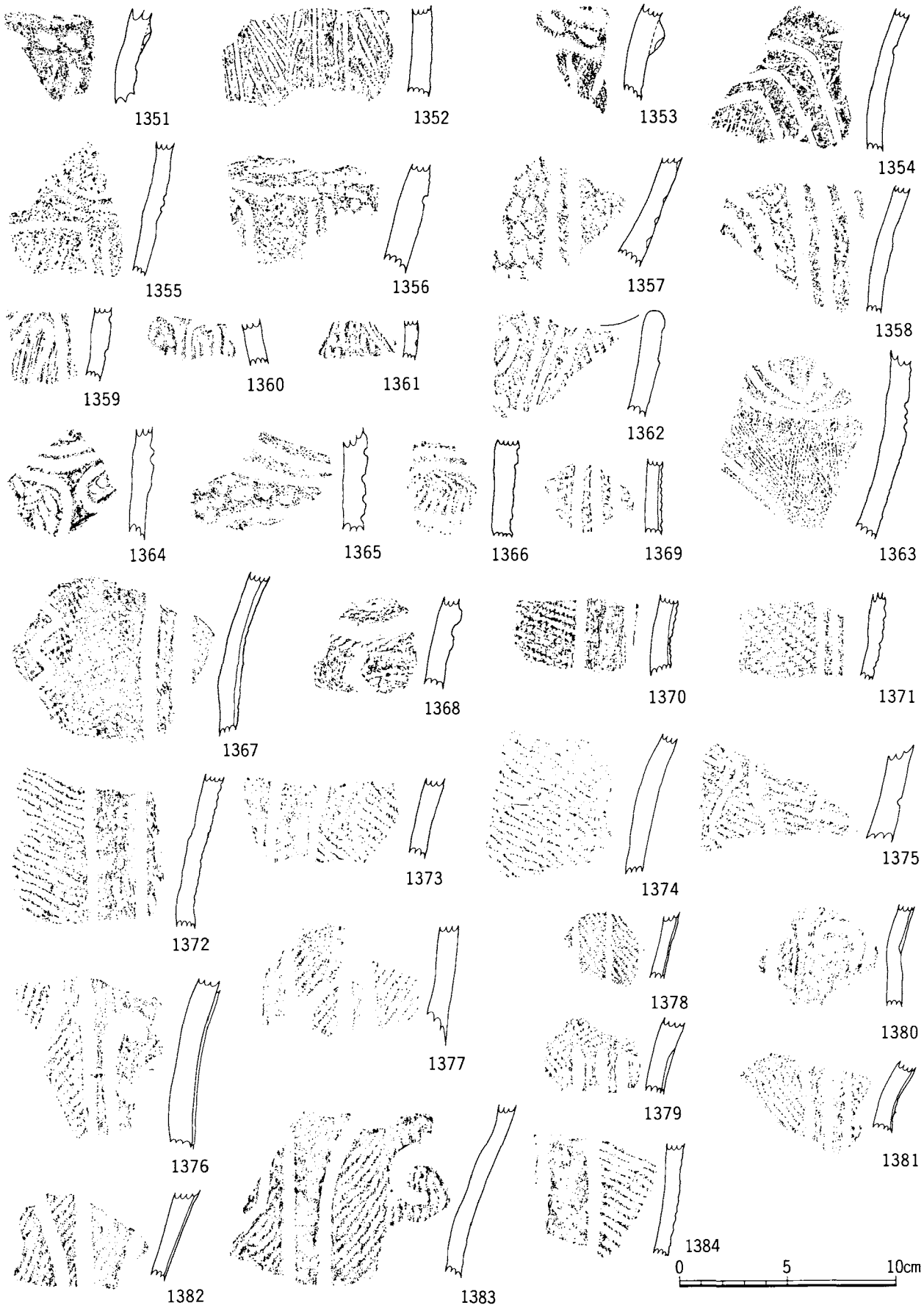
第36図　第2号住居跡出土土器(9)



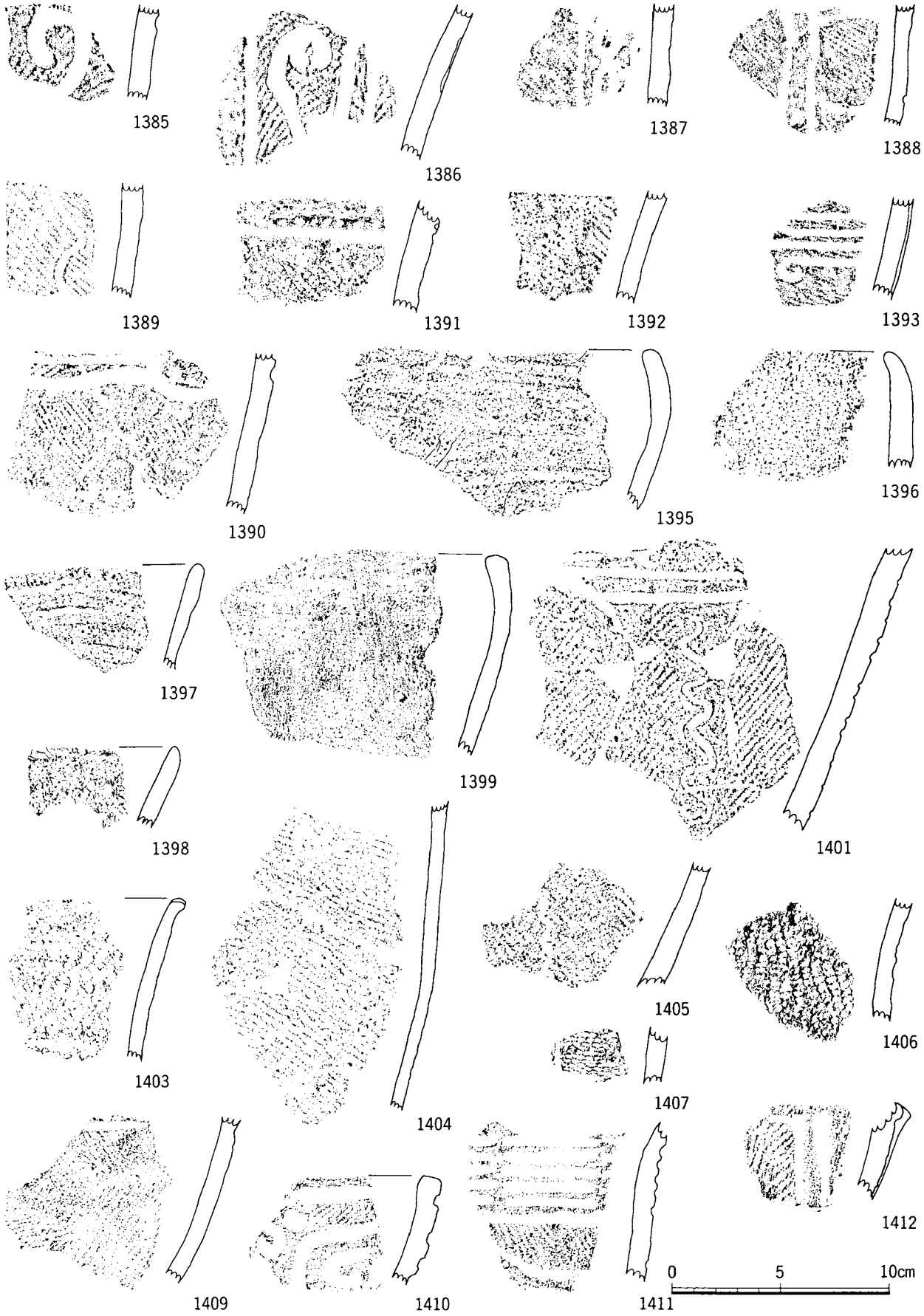
第37図　第２号住居跡出土土器⑽　Ｃ８～11群の胴部



第38図　第２号住居跡出土土器(11)　Ｃ８～11群の胴部



第39図　第２号住居跡出土土器(12)　Ｃ８～11群の胴部



第40図　第２号住居跡出土土器(13)　Ｃ８～11群の胴部・Ｃ12・13群

着している。口縁はいずれも丸くおさめるが、(1396) は口端をやや尖らせ内折気味になる。(1395) はキャリパー形口縁を呈する。(1397) は他に比べ、胎土・焼成とも良好で、ナデ調整を施す。

Ｂ類にあたる縄文土器では、口縁部は (1400)・(1403) の２点である。(1400) はバケツ型の器形の深鉢で、口縁部に胴部よりやや肥厚した幅7.2cmの縄文帯をもつ。横方向にＲＬの斜縄文を施文する。同一個体の胴部片が (1401) で、縦位帯縄文を施し、蛇行沈線を垂下させる。口縁部と胴部の境に横位の沈線が３～４本めぐり、文様帯を区分している。(1402)も同様の破片で、同一個体の可能性が高い。(1403)は外反気味に開く薄手の口縁部片で、撚りの粗い縄文を施す。口端に刻目を入れている。

(1404) ～(1406) は胴部片である。(1404) は赤褐色を呈し、ＬＲの縄文を施す。(1405) は結節縄文である。

このほか、(1407) は弧状沈線間に擬縄文を施している。原体は不明である。

Ｃ類にあたる櫛描沈線文土器では、(1408)・(1409) がある。(1408) は胴部の復元品である。無文地に、頸部でヘアピン状につながる２本の縦位沈線で分割し、区画間に蛇行する櫛描沈線を垂下させている。頸部には蛇行する櫛描沈線を横位に施文する。(1409)は施文方向は様々であるが、幅1.5cmほどの非常に雑な櫛描沈線を引いている。

Ｃ13群の土器（第40・41図　1410～1423、図版19）

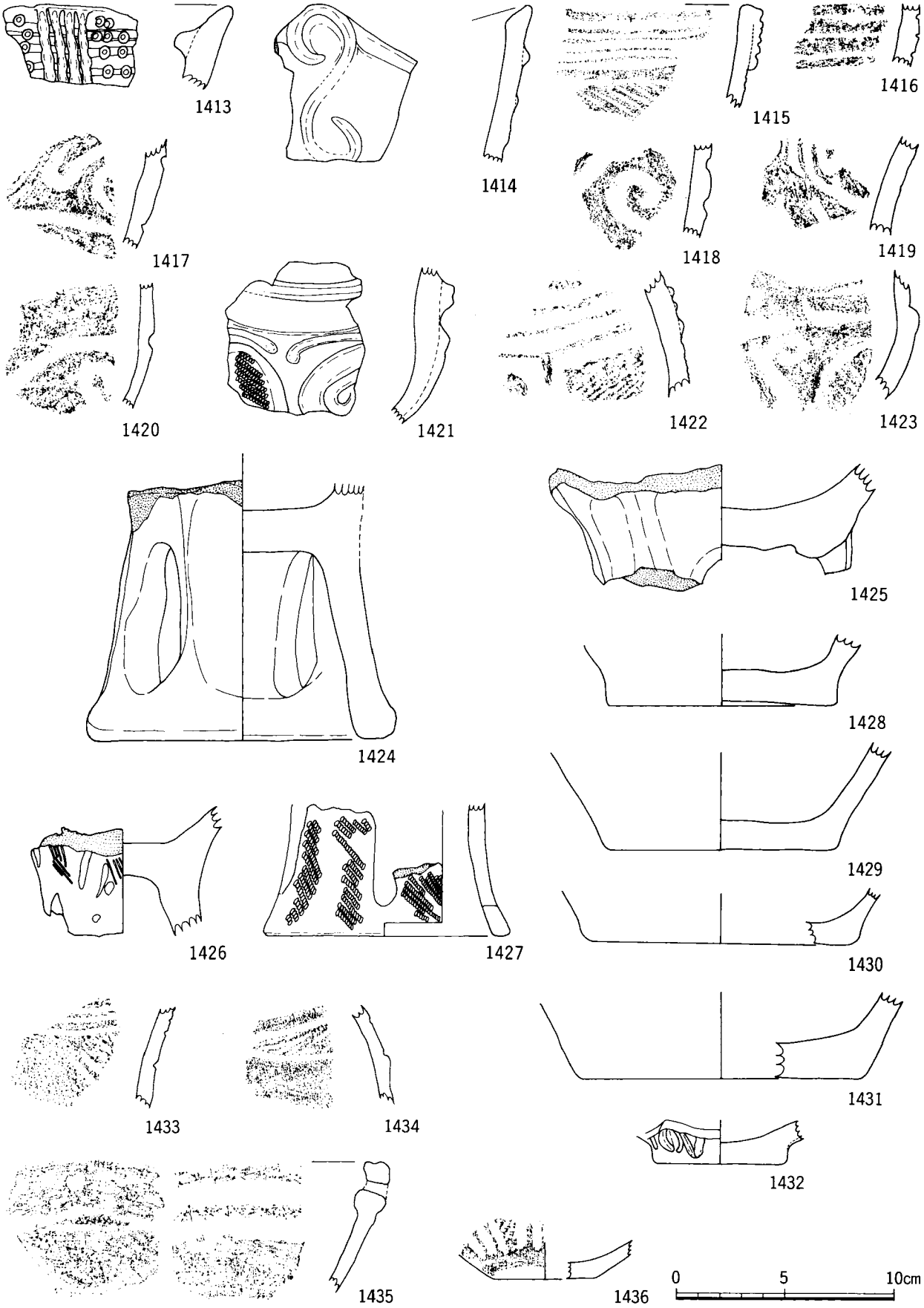
型式および小時期不明のものを一括して本群としているが、文様構成および器種等による類別に従い記述する。

縄文を施す深鉢類破片と考えられるものに、(1410) ～(1412) がある。(1410) はＬＲの縄文を地文とし、口縁部に沈線による区画文を施す。(1411)は頸部～胴上部の破片である。頸部に横位に５条の沈線を引くが、約４cm単位で切っている。その下に連弧文沈線で区画をつくり、斜縄文を充塡する。(1412) は隆帯で分割する胴上部片と思われる。

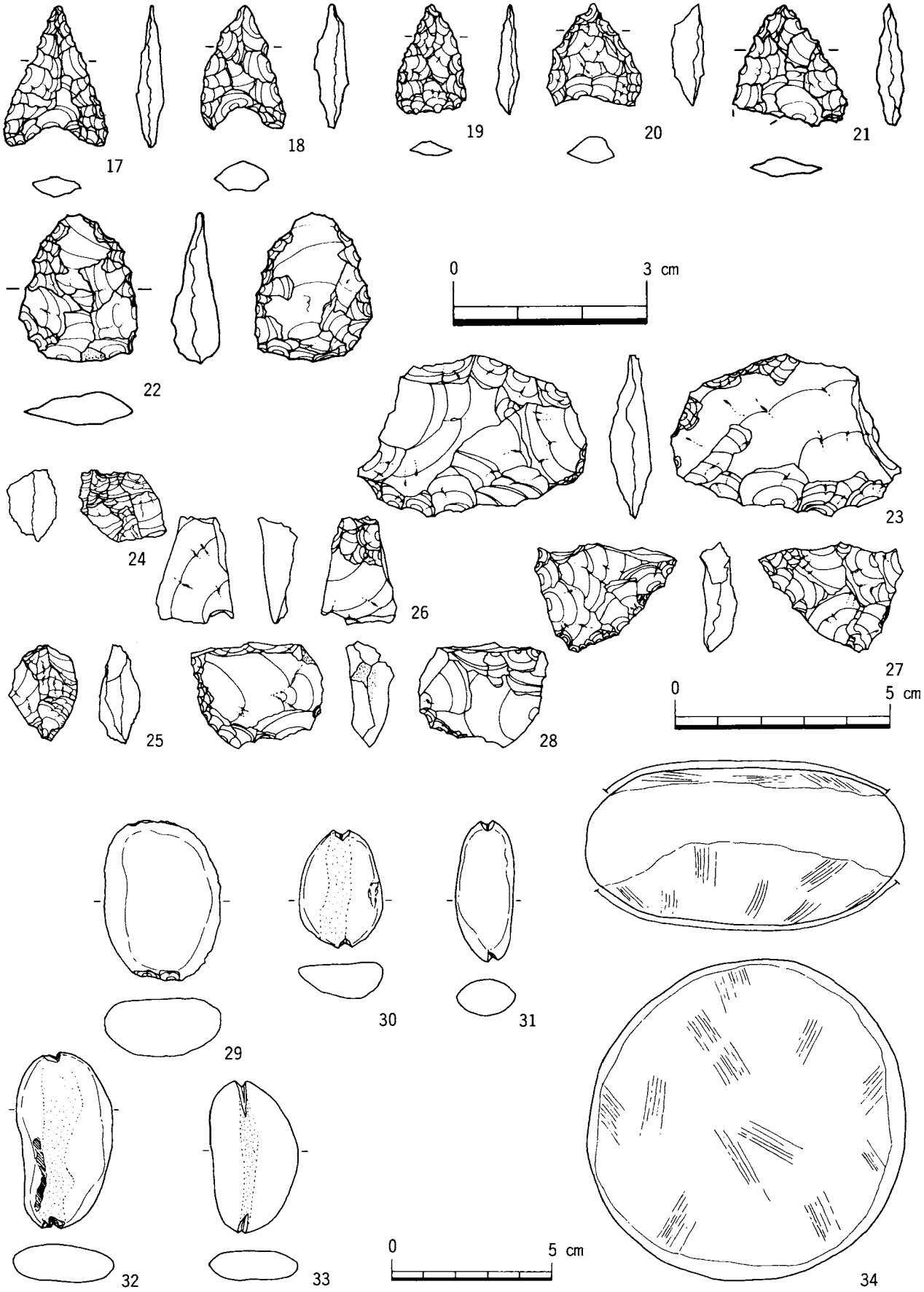
貼付隆帯をもつ深鉢類破片と考えられるものに、(1413)・(1414) がある。(1413) は外反する口縁部片で口端が尖る。口縁に平行に４本の貼付を施し、その上に縦位の貼付を４本クロスさせる。さらに横位の貼付間に竹管状工具による刺突列が入る。なお、口縁内側には貼付による段がつく。(1414)は波状口縁を呈し、口唇部に貼付隆帯を施す。さらに波頂部に口唇部より逆Ｓ字形の貼付を施している。

沈線を主体とする文様を構成する深鉢類破片と考えられるものに、(1415) ～(1420) がある。(1415)は幅広の折返口縁をもち、上に横位沈線を５条引く。下は左傾の集合沈線を施す。(1416)は細くて深い沈線が横位に５条確認できる。他の４点は無文地に渦文等のモチーフである。

壺形土器類の破片と考えられるものが (1421) ～(1423) である。(1421) は胴の肩部で、隆帯による区画文や渦文を描く。区画内に縄文を施す。また、肩部に幅広で深い溝が２本巡る。



第41図　第２号住居跡出土土器(14)　　C13・14群・後期



第42図　第２号住居跡出土石器

同一個体片が5点あるが、いずれも表面は赤褐色で、裏面は黒色を呈し、よく調整されている。(1422) も肩部の破片で、隆帯による区画文である。肩部に隆帯が2本巡る。区画内は沈線で縁取り、縄文を施文する。(1423)は胴部片で、渦文を伴う隆帯区画文を描き、区画内に集合沈線を充塡している。内外面とも赤色顔料が付着する。

C14群の土器（第41図　1424～1432）

台付鉢の脚台部（A類）と底部（B類）である。

A類は（1424）～(1427）がある。(1424）は脚台部の高さ11.5cmで、4本の脚をもち、間に楕円形の透かし孔をもつ。(1425)・(1426)も4本脚であるが、脚上部より下を欠損しており詳細は不明である。(1427)は他のものに比べて薄手で、やや異質である。裾が広がり、4ヵ所に入る透かし孔も狭い。LRの縄文を施文する。他に29点のA類破片が出土している。

B類は（1428）～(1432）がある。5点とも平底である。網代痕等のあるものは見当らない。(1432）は器壁に縦位の沈線が入る。他に19点のB類破片が出土している。ほとんど平底と思われるが、上げ底のものが1点ある。

（武藤貞昭）

後期の土器（第41図　1433～1436）

(1433）～(1436）の4点が出土している。4点とも覆土から出土し、混入品である。(1433)は沈線によって文様が施文される。(1434)にはよく研磨された磨消縄文が認められ、一部に赤色顔料が付着している。器形が内彎し、口縁部に近い部位の破片であろう。(1433)・(1434)は後期中葉に属すと考えられる。(1435)は中期にあまり類例を見ない資料であるために、後期の土器としたが、後期においても異質な形態をもち、時期比定には問題がある。器形は浅鉢にちかく、端部内面の肥厚および凹線をもつのが特徴的である。端部直下に穿孔が認められる。(1436）は浅鉢か壺形土器の底部片と考えられる。平底で、よく研磨された磨消縄文が認められる。

（藤田英博）

②石器（第42図、図版35）

石鏃6点(17～22)、削器1点(23)、ピエス・エスキーユ2点(24・25)、ヘラ形石器1点(26)、2次加工のある剥片2点(27・28)、剥片・砕片66点、打欠石錘1点(29)、切目石錘5点(30～33)、磨石1点（34）が出土した。これらは、すべて覆土からの出土である。

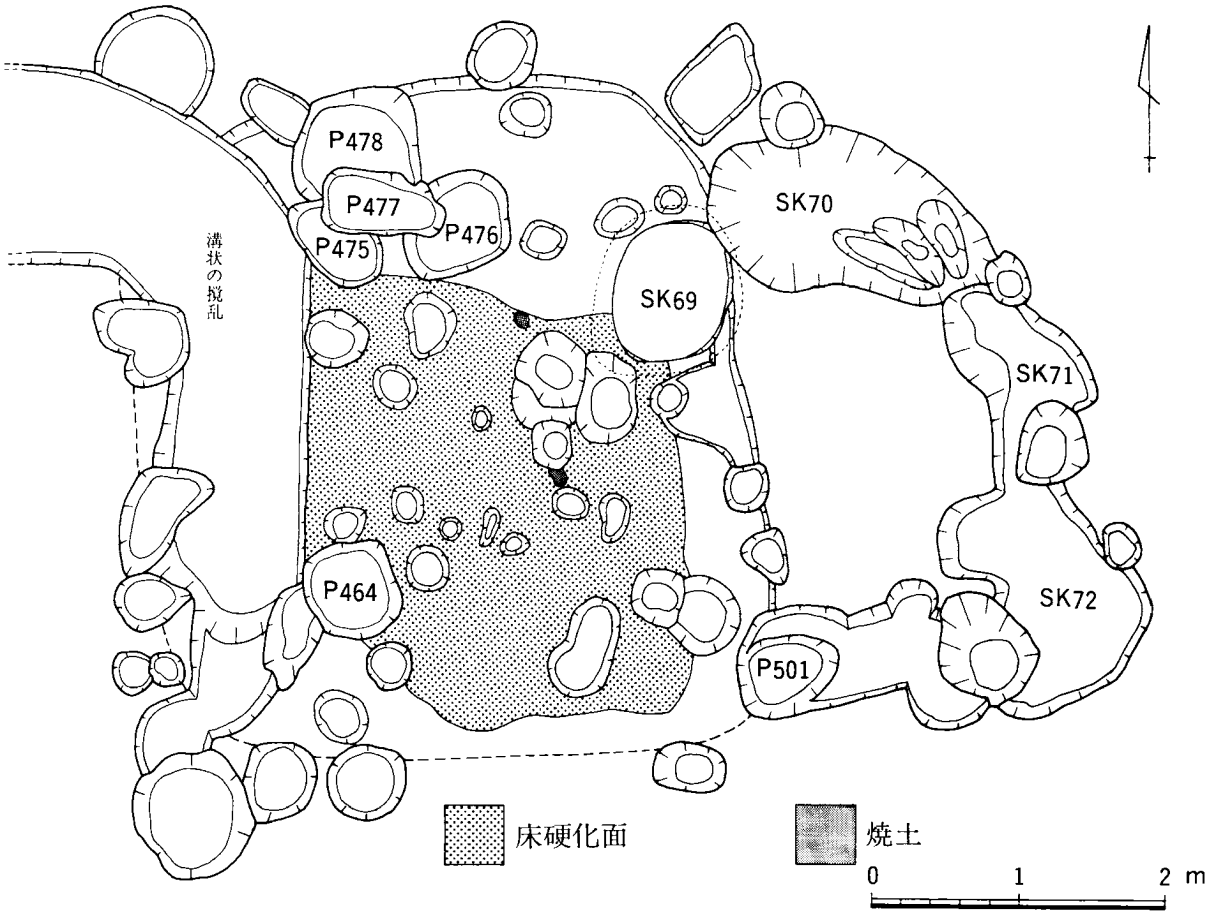
(23）の削器は、サヌカイト製で折れている側が熱を受けて赤化している。

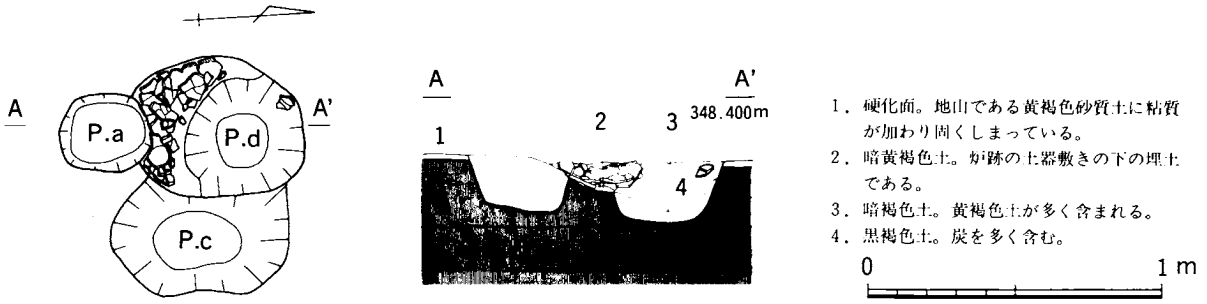
（千藤克彦）

３．第３号住居跡　（ＳＢ３）

(1)遺　　構（第43図、図版４・５）

７～８－Ｇ～Ｈグリッドに位置する。西側は現代の井戸から延びる溝状の攪乱がはいるほか、縄文時代後期から現代までの土坑・ピットが重複し、遺存状態はよくない。北および東側で５cm前後のわずかな壁の立ち上がりが確認できたが、南側は床面と地山面が同一面で判然としない。西側は攪乱のため不明である。推定プランは東西4.2m、南北4.6mの隅丸方形になる。





第43図　第３号住居跡　（ＳＢ３）

中央部の約2.4×3mの範囲で床面と考えられる硬化面が確認できた。地山である黄褐色砂質土がやや粘質になり、固く締まっている。３～４cmの厚さを持っている。中央やや東寄りで土器敷きの炉跡と思われる掘り込み（Ｐｄ）を検出している。ＰｄはＰａ・Ｐｂによって切られている。炉石あるいは抜き取りの痕跡は確認できていない。また、Ｐｄに火床らしき焼土は確認できていない。そのため炉跡と断定できない面もある。周辺の床には２ヵ所の焼土が確認できる。

柱穴と考えられるピットはいくつか掘り込まれているが、配置は判然としない。

その他、ＳＫ69は袋状土坑であるが、遺物は検出されなかった。北部のＰ475～478では晩期の土器片が40点ほど出土している。

本住居の時期については、覆土および炉跡と思われる掘り込みから出土した土器から、中期中葉と考えている。

⑵遺　　物

①縄文土器（第44図、図版27）

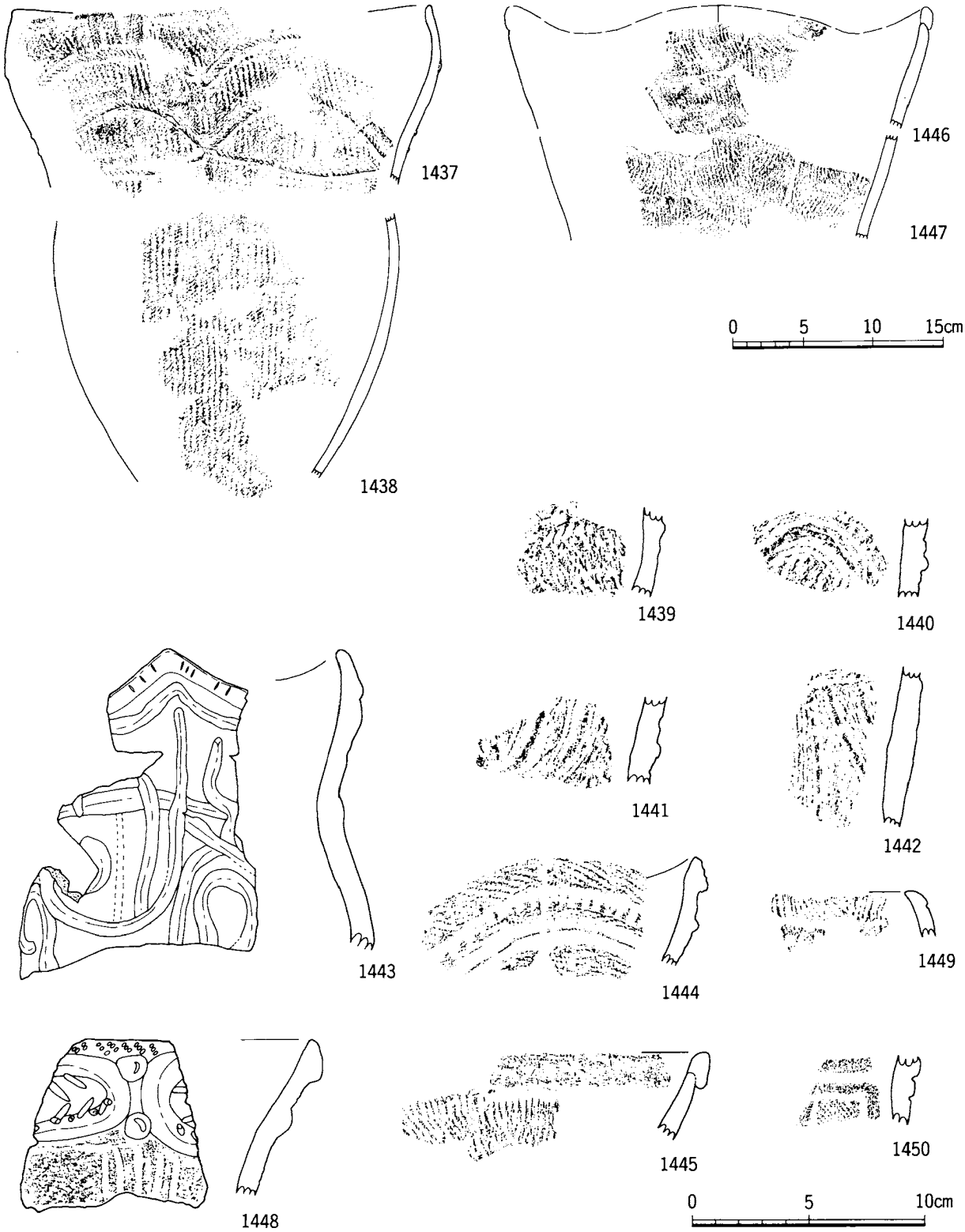
本住居跡からは、炉跡および覆土から、371点の土器が出土している。そのうち混入である一部の中期後葉のものを除いて、ほとんどが「船元式」およびそれに併行する土器である。有文系土器を中心に、前述した土器分類によりつつ、順に記述する。

Ｃ１群の土器（第44図　1437～1443、図版27）

（1437）・（1438）は、炉跡から出土した同一個体の口縁部と胴部片である。撚りの粗い縦走する縄文を地文とし、低い刻目隆帯によって文様を施す。刻目は縄文原体を隆帯に押しつけて施文している。横位の隆帯は上向きの連弧文状に２本、下向きのものが１本めぐる。そのうち１本ずつは頸部で連結して∞字状を呈する。縦位の隆帯は、一番上の連弧文隆帯の頂部から口縁に２本入るほか、∞字状の交叉部から垂下するものがある。器形はゆるいキャリパー形口縁を呈し、口縁はやや立ち上がり気味になる。また、ゆるやかな波状口縁になる。口縁内面には縄文を施文した幅1.6cmの肥厚帯がつく。口縁径は推定復元で30cmになり、器高は35cm強と考えられる。（1439）は小片であるが、同様な刻目隆帯をもち、地縄文は細く粗い。以上２個体は「船元II式」に類似し、本群Ａ類に属する。

（1440）～（1442）は、縄文を地文とし、幅の狭い貼付隆帯の両側に半截竹管による平行沈線文を施すものである。（1440）・（1441）は粗い撚りの縄文であるが、（1442）は普通の縄文である。以上３点は「船元III式」に類似し、本群Ｂ類に属する。

（1443）は波状口縁の比較的小型の深鉢と考えられる。器形は頸部から外反し、ゆるやかに内彎する。表面の磨耗が大きいが、地文が無文で、刻目のある幅狭の貼付隆帯によって文様を

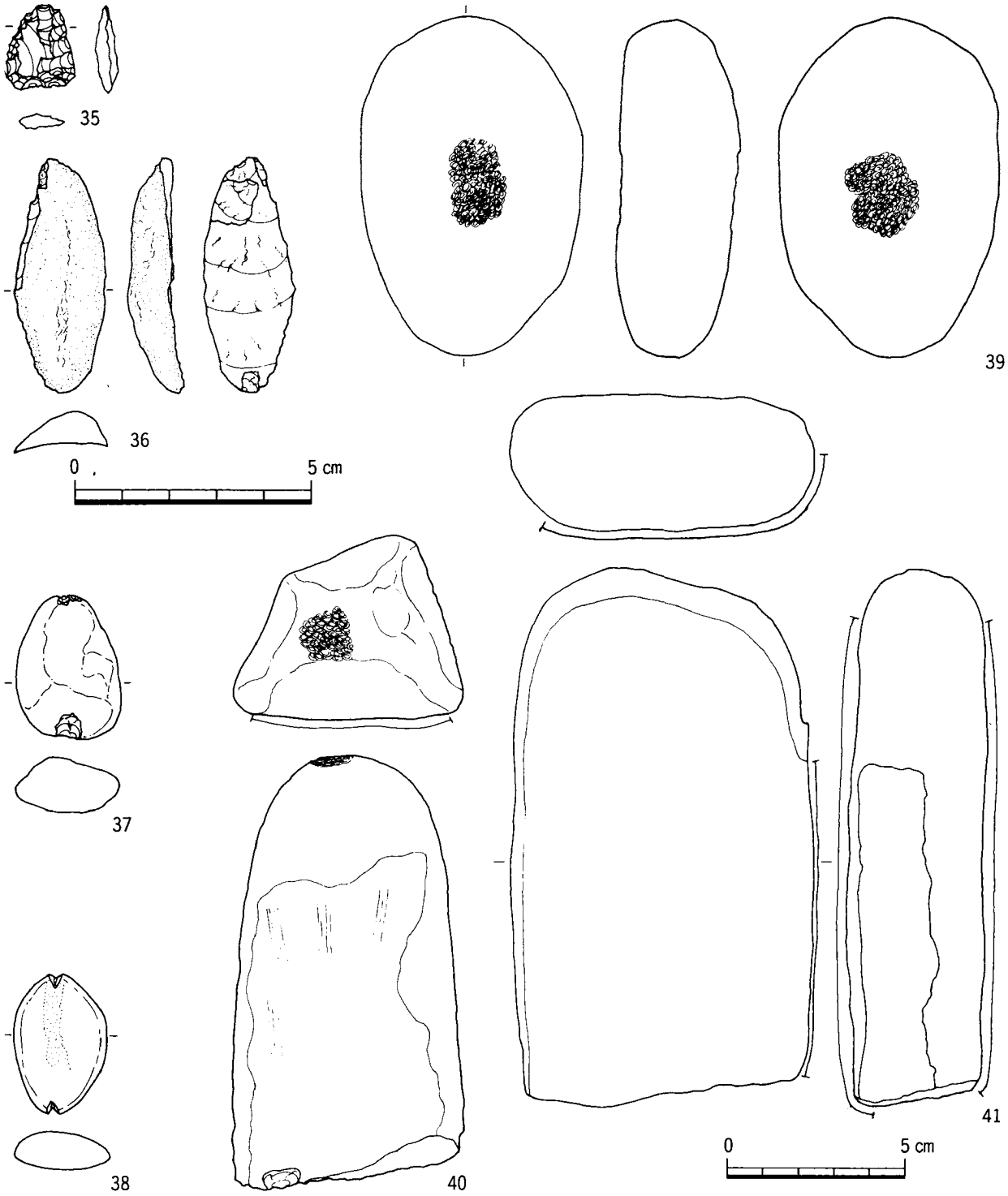


第44図　第３号住居跡出土土器

施す。隆帯は円文を含む複雑な幾何学的モチーフである。口唇部にも刻目を施している。「船元II式」に類似し、本群D類に属する。

Ｃ２群の土器（第44図　1444～1447、図版27）

（1444）は口縁が波状を呈し、折返状の複合口縁をもつ。地文は縄文を施している。口縁に平行に貼付隆帯をもち、複合口縁との間に押し引きを施す。複合口縁部と端部にも縄文を施文



第45図　第３号住居跡出土石器

している。「船元III式」に併行する土器と考えられ、本群Ｄ類に属する。

（1445）～（1447）は炉跡から出土した同一個体の口縁部と胴部である。傾きは様々ながら、おおむね縦走する櫛描条線文を全面に施文する。肥厚した複合口縁部は、口唇部に後から貼り付けたもので、貼り付け前の口端部には櫛状工具による刻目が認められ、貼り合わせの際の製作手法がうかがえる。なお、同一個体の小片が42点ある。本群Ｅ類に属する。

中期後葉の土器（第44図　1448、図版27）

（1448）は、口縁部文様帯が幅狭となり、隆帯による楕円区画を施すものである。区画内は刺突で縁取りし、右向きの矢羽根状沈線を充填する。区画の間に上下に指頭大の刺突をつけている。また、口縁には縄文を施す。胴部は縄文を地文とし、縦位の沈線を５本垂下させ分割している。Ｃ９群の新しい時期のものと考えられる。その他、沈線文の小片が６点認められるが、中期後葉に所属する。いずれも覆土への混入と考えられる。

Ｃ13群の土器（第44図　1449・1450、図版27）

（1449）は口縁がわずかに肥厚し、口端が尖る小片である。横位の沈線で仕切られた口縁には箆状工具による刻目を入れているが、刻目の傾きが漸移する。（1450）は非常に細かい砂を胎土に含み、赤褐色を呈する小片で、他の土器片に比べ異質である。半隆起線風の平行沈線で区画し、中に櫛描条線を斜めに施文する。

（武藤貞昭）

②石器（第45図、図版35・36）

石鏃１点（35）、剥片・砕片12点（36）、打欠石錘１点（37）、切目石錘１点（38）、磨石２点（40・41）、凹石１点（39）が出土した。すべて覆土からの出土である。

（36）の剥片の石材は下呂石で、円礫から取られたものとわかる表面を残している。

（千藤克彦）

４．第４号住居跡　（ＳＢ４）

(1)遺　　構（第46図、図版５・７）

９Ｆグリッドに位置する。平面プランは南北４ｍ20cm、東西４ｍ30cmの円形で、主軸方向はＮ20°Ｅである。壁は検出面（地山面）から30～40cm掘り込んでいる。周溝は全体としては認められないが、奥壁にあたる北から北東にかけて、幅８cm、深さ３～５cmの小規模な溝が1.8ｍ続く。また、その溝に平行に、20cm内側に幅６～10cm、深さ３cmの小規模な溝がある。その他、南壁に沿って50cm程にわたり、幅５～10cm、深さ４～５cmの溝状の落ち込みが認められる。

炉跡は中央やや奥寄りに位置する。住居廃絶後に掘り込まれたピットａ２により、南東側を

半分以上壊されており、炉石（川原石）は、北側の１個（被熱のため３個以上に割れたうちの２個）と西側の１個（被熱のため上部および南半分を欠損している）が残存していた。なお、西側の炉石の外側には裏込め石を詰めている。残存部から推定して、60cm前後の方形の石囲い炉と考えられる。炉石の上部がレベル的には床面より少し出る程度のつくりで、炉床は床面から26cm掘り込んでいる。

床面は、明黄褐色土を固くたたき締めた貼床が残存する。炉跡を含め、その北東部はピットが重複しており、残存しないが、住居跡中央部の半径約1.5mの範囲で検出した。掘り下げる際に、貼床と接する覆土が剝がれるように検出できた。南西部では貼床に囲まれて、石皿が床面に設置されている。なお、石皿は裏面も使用されていた。貼床が施されていない床面については、多くのピットが掘り込まれ、複雑な様相を呈している。南東部壁寄りの2.4m×0.9mの部分は貼床面に比べてやや高くなっている。また、炉跡を含め、中央から北東部にかけての範囲には、住居構築前のピットや廃絶時もしくは廃絶後の攪乱およびピット等が重複している。その結果、この部分は全体として土坑を形成している。なお、この土坑を囲むように、覆土から、廃棄された土器が集中して出土している。詳細は遺物の出土状況の項で述べる。

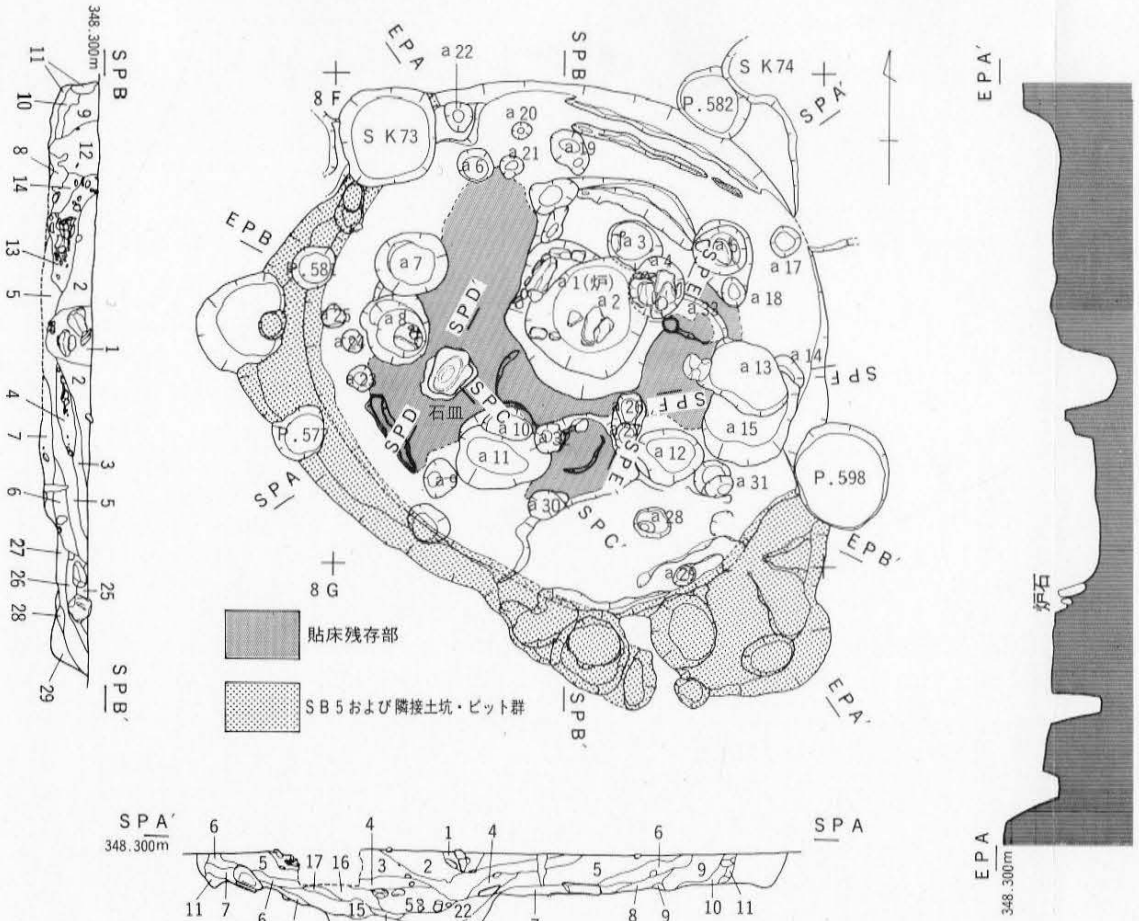
ピットは大小合わせて33本を数える。このうち、主柱穴と考えられるピットは、深さや配置から見て、ａ５・ａ６・ａ８・ａ12の４本になる。

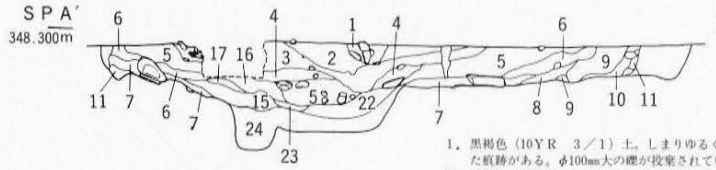
埋甕は、住居入口と推定される南南西の壁と炉跡との中間付近に位置するピットａ10に、逆位で埋設されていた。南に重複して掘られたピットａ11によって切られており、埋甕も南半分を欠いた状態で出土している。ピットａ11の南東にある浅いピットａ30から、埋甕の同一破片が出土している。埋甕として使用された土器（1503）は、咲畑式Ａ類の深鉢で、本報告書ではＣ７群Ｂ類に属する。復元の結果、底部を穿孔していることが確認できた。詳細は遺物の項で記述する。

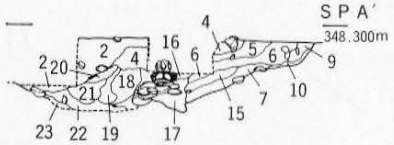
本住居跡については、いくつかの問題点をあげることができる。遺物に関しては別項にゆずるとして、遺構について述べておきたい。

まず第１に重複関係についてである。本住居跡はやや西寄りに存在する第５号住居跡の大部分と重複する。床面レベルはほとんど同一で見分けにくいが、本住居跡の西側の壁を検出しており、本住居跡の方が新しい。また、南から南東外側にも、張り出すように重複するプランが認められたので、精査した結果、いくつかのピットと土坑が検出された。当初は別の住居跡との重複かと予想していたが、壁が連続せず、床面も認められなかったため、住居跡ではないことが判明した。

第２は建て替え（拡張）の可能性についてである。本住居跡は、以下に述べる点から、拡張して建て替えている可能性がある。１つは、小規模で部分的ながら、北東部で周溝が２重になる形跡が認められる。その他に、南東部で壁より約30cm内側に、幅15cm、高さ４cmの高まりが、

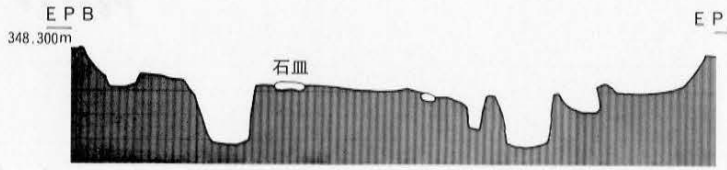




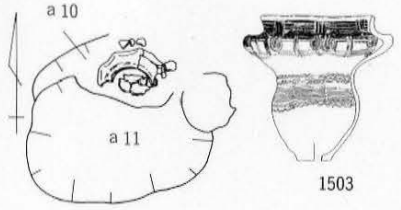


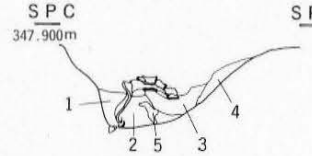
1．黒褐色（10YR　3／1）土。しまりゆるく粘性あり。当住居跡の覆土中へ2次的に掘り込まれた痕跡がある。φ100mm大の礫が投棄されている。
2．黒褐色（10YR　3／2）土。しまり強く粘性あり。φ2～3mmの炭化物片が均一に多くはいる。
3．黒褐色（10YR　3／1）土。しまりゆるく粘性ややあり。
4．黒色（7.5YR　2／1）土。しまりややゆるく粘性強い。炭化物粒多く含む。土器片多く包含。
5．黒褐色（10YR　2／3）土。しまり強く粘性やや劣る。砂質性に富み、黄味を帯びる。φ2～3mmの焼土粒・炭化物粒を多く含む。土器片を多く包含する。
6．灰褐色（7.5YR 4／2）土。しまり強く粘性ややあり。砂質である。炭化物粒・焼土粒をまばらに含む。
7．にぶい黄褐色（10YR　5／3）土。しまりややゆるく粘性ややあり。8と同様に床面に接する第1次堆積土である。φ2～3mmの焼土粒・炭化物粒をまばらに含む。
8．灰黄褐色（10YR　4／2）土。しまりゆるく粘性あり。φ1～2mmの焼土粒。炭化物粒を少量含む。
9．にぶい黄褐色（10YR　4／3）土。しまりややゆるく粘性あり。炭化物粒がまばらにはいるほか、φ1～2mmのロームブロックを多く含有する。
10．褐色（10YR 4／4）土。しまり強く粘性あり。均質である。φ2～3mmのロームブロックを含む。
11．にぶい黄褐色（10YR　4／3）土。しまりゆるく粘性あり。φ5～6mmのロームブロックが目立つ。
12．黒褐色（10YR　3／2）土。しまり強く粘性弱い。φ10mm大の円礫含む。当住居跡の埋没後の掘り込みと考えられる。
13．黒色（7.5YR　2／1）土。しまりややゆるく粘性強い。土器を多く包含する。4に対応する。

〈右上につづく〉※



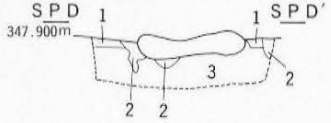
0　1　2m





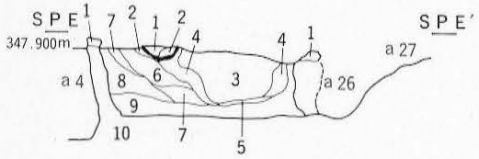
1．にぶい黄橙色（10YR　7／4）土。しまりややや強く、粘性あり。
2．にぶい黄橙色（10YR　7／4）土。1よりも粘土・シルトが多い。
3．褐灰色（10YR　6／1）土。しまり強く、粘性ややある。当埋甕を切るピットa11の埋土。
4．a11の埋土。3に比べ、しまり・粘性がやや弱い。　5．根痕と思われる腐植土。

〔石皿付近セクション〕



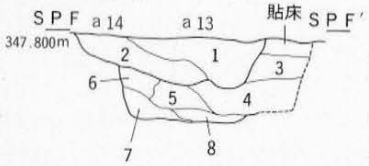
1．明黄褐色（10YR　7／6）土。貼床である。砂質ロームの硬化したもの。
2．灰黄褐色（10YR　6／2）土。しまりやや強く、粘性ややある。
3．にぶい黄橙色（10YR　7／4）土。砂質ローム。地山にあたる。

〔ピットa33セクション〕



1．明黄褐色（10YR　7／6）土。しまり極めて強く、粘性なし。貼床に使用されている砂質ロームの硬化したもの。
2．褐灰色（10YR　5／1）土。しまりやや強く、粘性ややある。シルト質の土塊に1がブロック状に混入。
3．褐灰色(10YR　6／1)土。しまりやや弱く、粘性ややある。砂質ロームブロックが50%ほど混じる。φ3～4mmの炭化物片をわずかに含む。
4．褐灰色（10YR　6／1）土。しまり弱く、粘性ある。均等なシルト質壌土。

〔ピットa13セクション〕



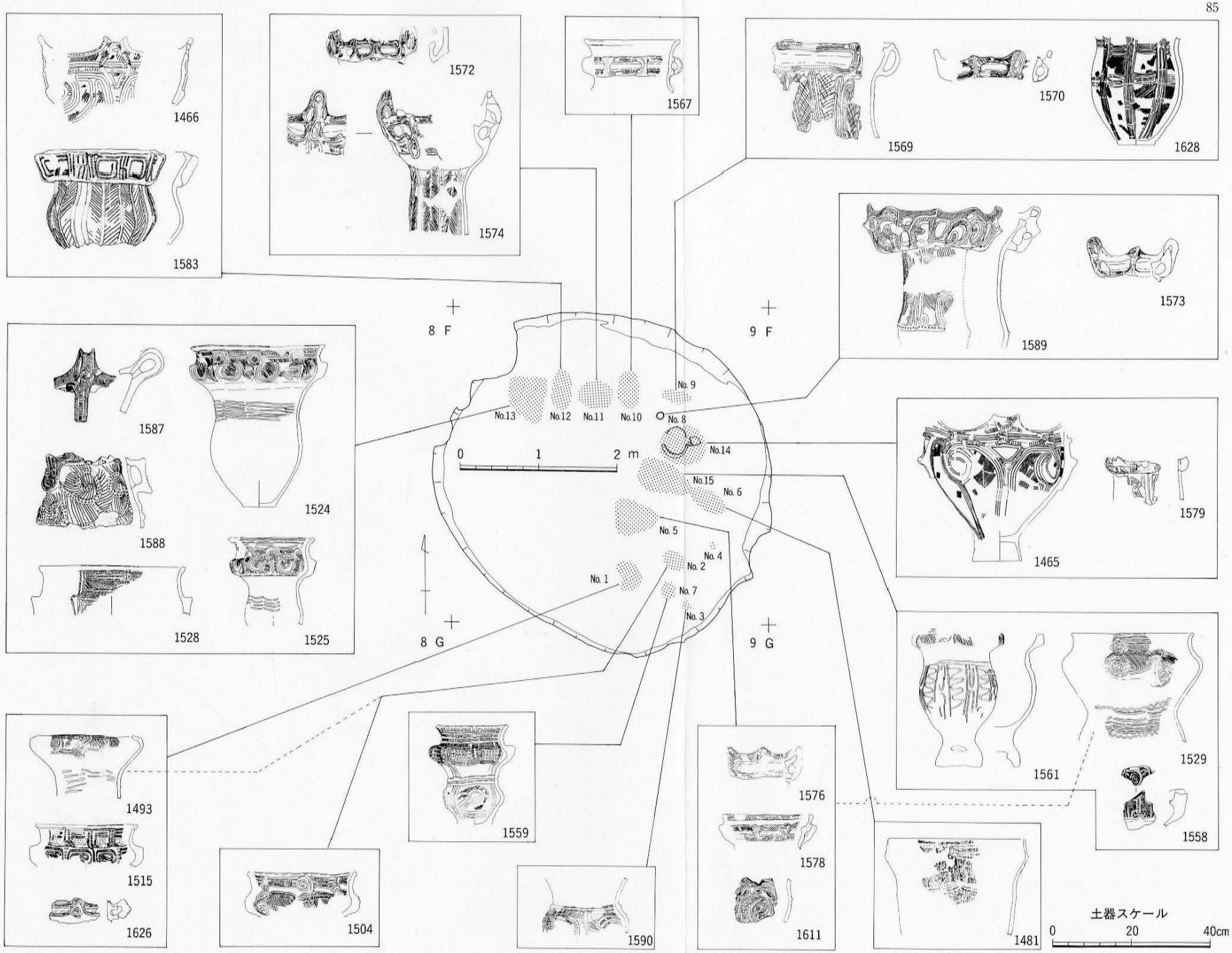
1．褐灰色（10YR　5／1）土。しまりややゆるく粘性ややある。シルト質で少し砂を混入する。
2．にぶい黄褐色（10YR　5／3）土。しまり強く、粘性ややある。砂質ロームブロックを30%ほど含有する。
3．褐灰色(10YR　4／1)土。シルト質で炭化物粒含む。
4．黒褐色（10YR　3／1）土。しまり・粘性とも強い。φ3～4mmの焼土粒が認められる。
5．にぶい黄橙色（10YR　6／4）土。しまり強く、粘性あり。砂質ロームブロック70%ほどで構成される。
6．灰黄褐色(10YR　5／2)土。しまり強く、粘性強い。
7．黒褐色（10YR　2／2）土。しまり強く、粘性ある。シルトは強いが、粘土化している。
8．にぶい黄橙色（10YR　6／4）土。黒色のシルトのブロックが下半部でその間を埋める。

0　1m

※14．暗褐色（10YR　3／4）土。しまり強く粘性弱い。砂質である。φ5～10mmの礫。3～5mmの炭化物粒含む。
15．黒褐色（10YR　2／2）土。しまりややゆるく粘性あり。φ1～2mmの焼土粒・炭化物粒を若干含む。
16．褐灰色（10YR　4／1）土。しまり強く粘性あり。シルトとロームブロックが混合。おそらく当住居跡の床面を掘り抜いた時の土と考えられる。
17．黒褐色(10YR　2／2土)。15より黄味が弱い。しまりゆるく粘性あり。φ10mmのロームブロックを少量含む。
18．黒褐色（10YR　3／1）土。しまりゆるく粘性弱い。気孔が多くぼそぼそしている。φ1mmのローム粒が目立つ。
19．灰黄褐色（10YR　4／2）土。しまり強く粘性あり。全体に砂質ロームの成分が強く、黄色を呈する。
20．黒褐色（10YR　2／2）土。しまりやや強く粘性弱い。気孔が目立つ。16・17の掘り込みの際の客土と推定することも不可能ではない。
21．黒色（10YR　2／1）土。しまり強く粘性弱い。φ5～6mmの炭化物片を含む。φ1mmの焼土粒を多く含む。
22．灰黄褐色（10YR　4／2）土。しまりやや弱く粘性ややあり。砂質性に富む。φ1～2mmの炭化物片が多い。
23．褐灰色（10YR　5／1）土。しまりゆるく粘性ややあり。砂質でロームブロックが多い。
24．褐灰色（10YR　4／1）土。しまりゆるく粘性強い。φ2～3mmの炭化物片・焼土粒がわずかに認められる。
25．褐灰色（7.5YR　4／1）土。しまりゆるく粘性あり。φ1～2mmの焼土粒・ローム粒をまばらに含む。
26．灰褐色(7.5YR　4／2)土。しまり強く粘性あり。φ3～4mmのローム粒・礫片多い。
27．褐灰色(7.5YR　4／1)土。しまり強く粘性あり。φ3～4mmの礫片を若干含む。
28．黒褐色（7.5YR　3／1）土。しまりゆるく粘性あり。砂質性が弱いシルト質埴壌土である。
29．褐色（7.5YR　4／3）土。しまりややゆるく粘性あり。ロームブロックと黒褐色シルトで構成される。

5．黒色（10YR　1.7／1）土。しまりやや弱く、粘性強い。4に黒色ブロックが混入した状態を示す。
6．明黄褐色（10YR　7／6）土。しまり・粘性とも弱い。砂質ロームが90%以上の層。
7．褐灰色（10YR　5／1）土。しまりやや弱く、粘性ある。
8．褐灰色（10YR　4／1）土。しまりやや弱く、粘性ややある。4・9に比べ砂質が若干強い。
9．黒褐色（10YR　3／1）土。しまり強く、粘性ややある。
10．にぶい黄橙色（10YR　7／4）土。地山である。

第46図　第4号住居跡　（SB4）



第47図　ＳＢ４　主要土器出土位置図

約70cmにわたって続く。内側の周溝および高まりが、拡張前の住居プランに付随する痕跡ととらえる見方ができる。２点目は、埋甕が検出されたピットａ10の掘り方の北東部に貼床がかかる点である。また、埋甕の位置についても、入口と考えられる南東壁からかなり奥に入っており、拡張前の住居に伴うのではないかと考えられる。ただし、この建て替え（拡張）については、あくまでも推測の域を出るものではない。建て替えに伴う柱穴の移動の有無については、ピットが繁雑に入っており確定できない。また、貼床面の下については、一部を除いて精査を実施していないので、状況はつかめていない。残存する炉跡については、貼床面レベルとの比較から、拡張後の新しい住居に伴うものと考えているが、移動の有無は中央部の攪乱のため不明である。

時期については、中期後葉の前半にあたる。土器から本住居跡の変遷を見ていくと次のようになる。

建て替え前の居住期（古）：埋甕に使用されていた深鉢は、「咲畑・醍醐式土器様式」[1]の第１様式のａにあたる。東海地方西部で使用されている土器編年の広義の「咲畑式」であり、細分すると「咲畑式Ａ類」・「中富Ⅳ・Ｖ式」・「炉畑式」の時期にあたる。後述するように、中央の攪乱部やピット等から「里木Ⅱ式」に類似する土器片も若干出土しているが、共伴と考えるか、流入と考えるか、判断できない。

建て替え後の居住期（新）：床面直上で検出した土器（1502）は、建て替え前とほぼ同時期である。口縁の形態および区画内の文様にちがいがあるものの、そうめん状貼付により渦巻文や区画を施す手法は共通する。器形はどちらかというと「加曽利ＥⅠ式」の新しい段階に近い。

住居廃絶後の埋没過程における一括廃棄の時期：第１次埋没土が堆積したあと、少なくとも２回以上の一括廃棄がなされたと考えられる。いわゆる「吹上パターン」を呈する出土状況については次項で述べるが、東海地方西部の編年の「中富Ⅳ・Ｖ式」・「神明式」のほか、北陸の「古府式」に類似する土器も共伴している。

(2)土器の出土状況（第47・48図、第４表、図版６・８）

本住居跡のプランを検出する以前の包含層掘削の段階で、９Ｆグリッドは、Ⅱ層およびⅢ層から多くの土器片が出土していた。

南北および東西にベルト（東西ベルトは東約40°北に振っており、正確には北東－南西ベルトである）を残し、覆土の掘り下げを実施した過程で、廃棄されていた土器を多数検出した。完形に近い個体および土器片の集中箇所の、位置と範囲を示したのが、第47図である。降雪期に入り、年度内の調査延長は不可能となり、調査終了直前に降雪の間をぬって遺物の測図・取り上げを行った。このような事情のため、それぞれの集中箇所のレベルを記録するのが精一杯で、詳細な実測図および写真記録は存在しない。

平成２年度に残務として住居跡の精査と完掘を実施した。その際に検出した遺物および礫の実測平面図が、第48図である。

「吹上パターン」を呈する土器の一括廃棄の平面分布の様相は、住居跡中央部の覆土に二次的に掘り込まれたピットを取り巻くように分布する。そのうち、(1560)・(1589)・(1465)の３個体の土器は、中央ピットの東北東際に、いずれも逆位で接するように出土している。対角にあたる西南西側は、集中した遺物の出土が見られず、全体として馬蹄形状に廃棄されているようにも見受けられる。そして、その馬蹄形の支点部分に逆位の３個体が位置しており、廃棄時の儀礼的な配置と解釈できないこともない。

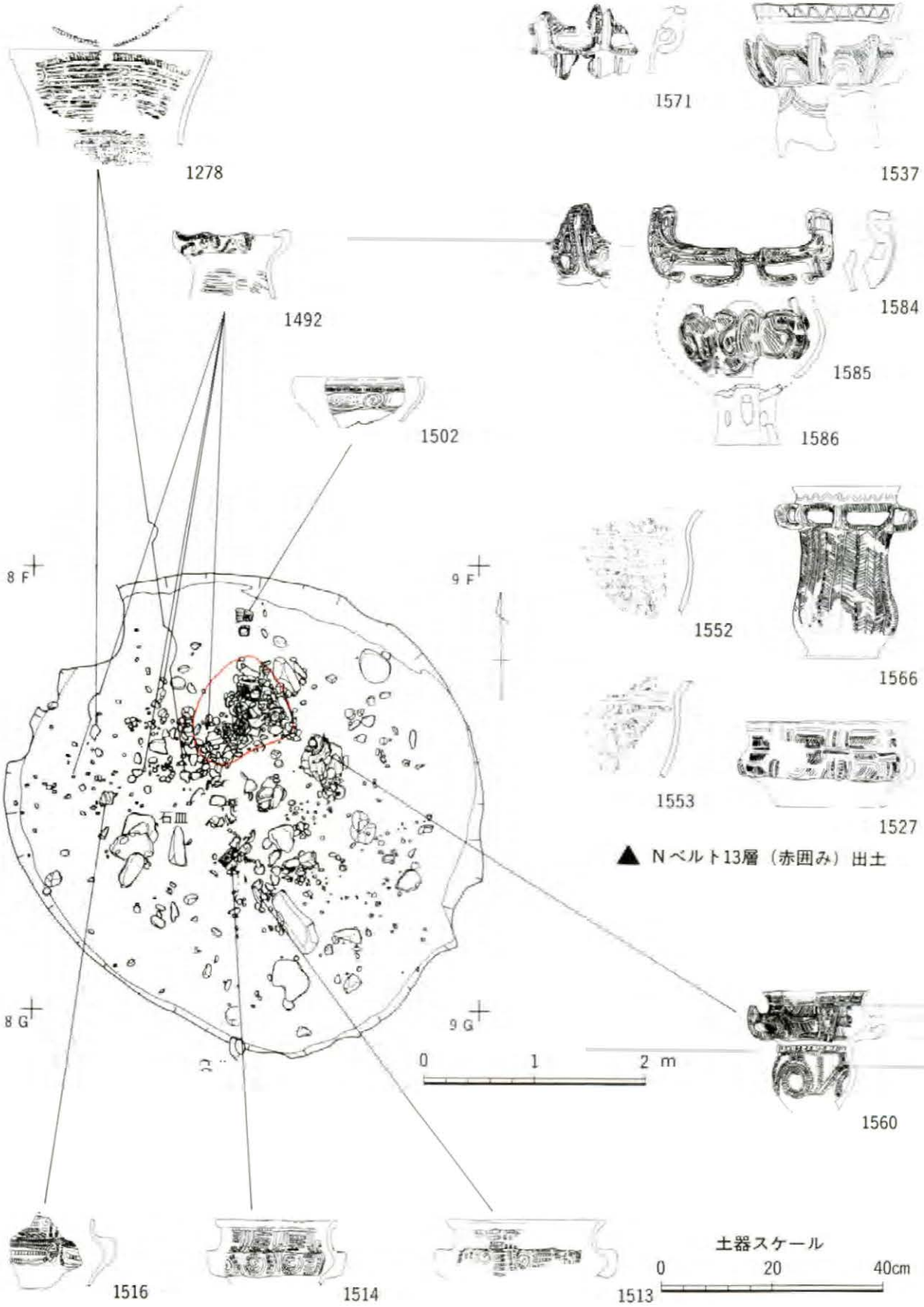
次に、廃棄土器の垂直分布の様相を、住居跡覆土の堆積過程と照らし合わせて見ておきたい。セクションベルトの断面については、第46図で示したとおりであるが、分層した堆積土を大別層に整理すると、第４表のようになる。

４層＝13層は、断面図においても廃棄土器の集中が見られるとおり、本住居跡の一括廃棄土器群の包含層である。南北ベルトの北側中央部分の13層（４層）では、図版６のような土器の出土状況を呈している。(1537)・(1584～1586)・(1574)の口縁部破片などが、埋没途中の窪地斜面裾に折り重なるように検出された。その一番下には（1566）が倒位で押しつぶされた状態で出土している。

平成元年度取り上げ分の、第47図No.１～No.15の集中箇所についても、レベルと住居跡中央からの距離をもとに、出土した覆土層位の照合を行った結果、４層（＝13層）と５層に該当すると考えられる。

第４表　ＳＢ４覆土分層とセクションベルト出土土器点数

大別層	分層	備考	ベルト出土土器点数	
覆土上層	2　層		117	178
	3　層		61	
	4層＝13層	一括廃棄土器包含層	358	427
	5　層	一括廃棄土器包含層	69	
覆土下層	6層＝14層		28	49
	7　層		16	
	8　層		4	
	15　層		1	
壁際流入土層	9　層		1	3
	10　層		1	
	11　層		1	
攪乱等	1・12・16・17層他		81	81



第48図　ＳＢ４　土器・礫出土状況図

4層（＝13層）と5層から出土した一括廃棄土器群については、覆土層位の違いに伴う時期差（時間差）を考えることができる。ただ、難点が2点ある。第1点は、セクションベルトに噛んでいる土器については明確であるが、その他の土器は前述のように、ベルト断面から推察した埋没の在り方に基づいて出土層を判断している点である。2点目は、土器廃棄の際に埋没土への人為的な改変が認められる点である。埋没土の改変は2ヵ所で認められる。1つは、北のセクションベルトにおいて、5層がとんでいる部分がある。中央に向かって傾斜しながら堆積した5層を削平したところへ、大量の一括廃棄を行った形跡がある。それが13層にあたる。もう1ヵ所は、炉跡東側に中心をもつ攪乱である。住居構築前にもピット（a33）が存在した部分に重なるが、廃絶後、炉の半壊も含め、3つのピット（a2・a3・a4）が相次いで掘り込まれ、全体としても床面がとんで1つの土坑の様相を呈している。埋没過程でも一番の窪地となり、その後も二次的な攪乱で、4層・5層とも削られている部分もある。このピットa2～a4を中心とする土坑状の攪乱部の埋土からは、4層・5層で出土している一括廃棄土器と接合する破片がいくつか確認できる。

また、ピットa4は、上部に炉石の一部と考えられる焼化礫も含めたφ10～20cmの礫を詰めているが、その上に（1560）が逆位で出土している。この掘り込みは、床面のほか6層以下の覆土を切っている。前述した逆位で隣接する3個体の土器のうちでは、最も下位で出土している。そして、平面分布では一部重なる状態で、上位から（1465）が出土している。

以上のような複雑な様相もあいまって、4層と5層の分層に伴う土器の差異を、出土状況から明確にすることには危険が伴う。

ただ、全体的に見て、5層出土と考えられる土器群（第47図No.1・2・6・7・15）には、咲畑式A類タイプ（中富Ⅳ・Ⅴ式、炉畑式）の器種が目立つ。とりわけその中でも、そうめん状貼付と押し引き沈線あるいは連続刺突文の充塡を施す土器は、5層中から出土している。それに比べ、4層（＝13層）出土と考えられる土器群には、咲畑式A類タイプも含め、多くのバラエティーが混在するが、神明式に類するタイプの比重が大きい。

(3)遺　物

①縄文土器（第49～66図　1451～1648・1278、図版20～26）

本住居跡からは、覆土を中心に7,010点にのぼる大量の土器片が出土した。そのうち混入と考えられる中期中葉の土器片33点と晩期の土器片2点を除いて、すべて中期後葉のものである。有文系土器を中心に、前述した土器分類によりつつ、順に記述する。

C1群の土器（第49図　1451～1459、図版20）

小片ばかり11点が出土しているが、混入品である。(1451)・(1452)は縄文を地文とし、低い

隆帯上に幅広の爪形文を施す。(1453) は刻目隆帯が交叉した文様が施される頸部片である。(1454) は粗い撚りの縄文を地文とし、隆帯に刺突状の刻目を施す頸部片である。以上４点は「船元II式」に類似し、本群Ａ類に属する。(1455) ～(1458) は縄文を地文とし、隆帯上に平行沈線を施すもので、「船元III式」に類似し、本群Ｂ類に属する。(1459) は詳細は不明だが、本群の胴部片と考えられる。

Ｃ２群の土器（第49図　1460～1462、図版20）

本群に属するものは次の３点で、混入品である。(1460)は貼付隆帯を施し、その間に縦位の櫛描沈線を充塡するもので、本群Ａ類に属する。(1461)はキャリパー形口縁で、口縁から縦位の太い短沈線文を施すもので、「船元III－Ｅ式」に分類されたものに類似する。本群Ｃ類に属する。(1462)は厚手のキャリパー形口縁をもち、口縁部に厚い貼付隆帯で区画を施し、区画内および口唇部から口縁内面の肥厚帯まで条線を施文する。本群Ｅ類に属する。

Ｃ３群の土器（第49図　1463・1464、図版20）

(1463)・(1464) は貼付あるいは折返による複合口縁で、口縁部文様帯に半截竹管を伏せて引いた見かけ隆帯状の集合沈線文を施す小片である。(1463) は集合沈線文が縦位で、(1464) は横位である。「北屋敷式」に類似し、本群Ｂ類に属する。混入品と考えられる。

Ｃ５群の土器（第49・50図　1465～1471、図版20・22）

半截竹管による半隆起線文を主文様とするもので、「上山田・古府式」に類似する。

(1465) は平面形が楕円になる舟形とよばれる台付鉢の完形復元品である。器高36cm、口縁の長径約37cm、短径29cmを測る。短径側に山形の口縁部突起がつく。長径側は両方とも欠損しているが、類似した山形口縁になると考えられる。山形口縁の突起部には逆三角形の貼付隆帯を施し、口縁に平行する横位の貼付隆帯に「ひねり」をつけて連結している。その下には突起部についたものより一回り大きな逆三角形の区画をつくるＹ字形の貼付隆帯を配する。このＹ字形の貼付を中心に対照的に渦文の貼付隆帯を配し、口縁とそれに平行の横位の貼付隆帯の間にも対照的な位置にＸ字形の貼付を配する。長径側の山形口縁の下にもＹ字形の貼付隆帯を配している。貼付隆帯上には半截竹管による刺突を施し、隆帯沿いには半隆起線文を引き回している。胴下部は口縁部文様帯の半隆起線文が垂下する形で台部近くまでのびる。地文にはＲＬの縄文を充塡する。台部は本体に比べて小さく、裾部径は10cmである。台部中央に４個の穿孔が入る。

(1466) も (1465) とほぼ同様な器形・文様をもつ口縁部片である。山形の口縁突起部の中央を穿孔し、周囲に貼付隆帯を施すが、隆帯は剥落している。その隆帯から左右下へ貼付を延ばし、横位隆帯を乗り越えてＹ字形貼付隆帯となっている。口縁にも隆帯を貼り付けている。その他の施文とモチーフは (1465) とまったく同じである。

この２点の土器は「古府式」の台付鉢であるが、地縄文が不鮮明である点、半隆起線が雑な

点、逆三角形およびY字形の貼付のモチーフなど、在地的な要素が多く認められる。

その他、(1467)～(1471)が本群に属するが、(1469)を除いて在地的な感じが強い。(1469)ははっきりした基隆帯上に連続刺突状の爪形が施され、胎土も北陸のものに類似する。

C6群の土器（第49図　1472～1480、図版20）

(1472)・(1473)の2点は、縄巻縄文を地文としている。「船元IV式」に比定でき、本群A類に属する。

(1474)は小片であるが、口縁沿いに波状の平行沈線を2回引き、口端は尖り、やや外反する。地文は縦走する撚糸文である。(1475)・(1476)も口縁部を欠くが同類の破片で、3点とも「里木II式」に比定でき、本群B類に属する。他に本類に属する撚糸文を施す胴部小片が10点出土している。

その他、「里木II式」の範疇に入ると思われる小片が3点ある。(1477)は頸部片で、文様の磨滅が大きいが、細い縦位の貼付が認められる。(1478)・(1479)は胴部片である。(1478)は細かい撚糸文を地文とし、縦位の沈線が入る。(1479)は絡条体が不安定で、波を打った撚糸文になっている。

(1480)は条線文を地文とし、横位に棒状工具か竹管の表で引いた幅広の沈線を施文する。「里木III式」と考えられ、本群F類に属する。

本群は出土点数の少なさなどから混入の可能性がある。

C7群の土器（第49～57図　1481～1565、図版20～23）

本群の土器は、後述するC8群の土器とともに、本住居跡出土の土器の大半を占める。キャリパー形口縁をもち、沈線や貼付による渦文と円弧文が施される土器で、胴上部に連弧文を施す。口縁部が強く内彎するもの（A類）と、内彎した口縁部がさらに外反気味に立ち上がるもの（B類）とがある。さらに、把手が発達したり、口縁部および胴部文様が異種のもの、脚台をもつものなどを、A・B類から分離してC類とした。

A類に属するものには(1481)～(1502)がある。施文方法により、沈線によるもの(①種)、貼付によるもの(②種)、貼付＋押し引きによるもの(③種)、その他のもの(④種)に分かれるが、本住居跡からは①・③・④種が出土している。

(1481)は、内彎する口縁部に横位沈線と連弧文沈線で区画文を施している。頸部には4条の連弧文沈線をめぐらせる。口縁部の区画境から頸部の連弧文沈線にかけて、縦位に涙滴状の刺突を施す。区画間あるいはその下に刺突を垂下させるものは、他に(1482)・(1483)がある。(1484)は波状口縁で、縄文を地文とする。口縁部は平行沈線による円弧文の区画を施すが、区画間に指の腹でナデ調整してつくったような、微隆帯に囲まれた楕円形の無文部をもつ。波頂部には3本の短い粘土紐を紡錘形に貼り付けている。(1485)は同一個体の胴部片で、頸部に連弧文沈線をめぐらせている。(1486)はRLの縄文を全面に施し、口縁沿いに波状沈線をめぐ

らせるのみで、他に比べてやや異質である。その他、①種に属する小片に（1487）～（1491）がある。

（1492）は口縁が非常に大きく内彎し、最も張り出した部分に貼付の渦文を配している。渦文部分で角がつき、全体として八角形の平面形を呈するが、辺の長さが交互に長短となり、四角形の角を切ったような変形８区画となっている。施文は全体として、貼付の渦文と押し引きによる渦文・Ｓ字文・円弧文などから構成されている。長辺区画部分は内彎した口縁平坦部分に幅狭の押し引きを斜めに充塡する。また、短辺の右側部分の渦文は口縁平坦部に延び、そこにも渦文をつくっている。口縁部文様帯の下から頸部にかけては、かなり火を受けており、赤褐色を呈し、文様も磨滅している。大きくくびれた頸部下に、幅広で浅い連弧文沈線が７条はいる。内面は、内彎した口縁内側のわずかな部分を除いて、ほぼ全面に炭化物が付着する。（1493）は口縁部から胴上部までの復元品である。口縁径23cm前後を測る。口縁部文様帯は渦文を連結した逆Ｓ字形を呈する貼付により８区画になるが、角はつかず平面形は円形である。口縁に平行に横位のそうめん状貼付を施し、その間に押し引きを施す。口縁部文様帯の下に横走する貼付によりできた区画内は、右向きの円弧状の貼付により二分され、それぞれ右下がりの幅狭の押し引きが充塡されている。頸部無文帯を経て、胴上部に５条の連弧文沈線がめぐっている。その他、③種に属する小片に（1494）・（1495）があるが、（1494）は押し引き手法ではなく沈線上への連続刺突である。

器形・文様等から見て、①～③種の範疇からやや逸脱するものを一括して④種とした。（1496）は内彎する口縁がやや立ち上がり気味に尖り、複合口縁上には節の繊維痕がはっきりしたＲＬの縄文を施文する。複合口縁の裾には間隔のある押し引きを施す。小片のため以下の口縁部の様子は不明である。（1497）～（1500）は同一個体もしくは２個体の破片と考えられる。器形は、頸部から大きく外反しゆるやかなキャリパー口縁を呈するが、口端部で内屈し、平らな口端面をつくる。縦位のそうめん状貼付を基本に、押し引き・箆による集合沈線などで文様を構成する。（1497）・（1498）は口縁に縄文を施す。（1499）は大小の渦文を配し、大きい渦文の間に押し引きを施す。（1500）は頸部～胴部の破片で、口縁部文様がそのまま縦位に続いている。縦位の貼付間は、梯子状の貼付になる列と斜行する集合沈線を充塡する列とがある。（1501）は他に比べ器厚があり、胎土・焼成とも良好な破片でやや異質である。波状口縁を呈し、沈線による文様を施す。波頂部に渦文を配し、沈線間は斜行する細沈線を充塡している。（1502）は本住居跡の床直で検出した資料である。キャリパー形口縁を呈し、そうめん状貼付による楕円区画と渦文を配する口縁部文様帯をもつ。口縁から1.2cm下がった２本の貼付間は、沈線で調整した上に連続刺突を施す。区画間は刺突を充塡している。大きくくびれる頸部は無文である。

Ｂ類に属するものは（1503）～（1536）・（1538）～（1545）がある。器形および施文方法により、キャリパー部分の平面形が円形あるいは多角形で、施文にそうめん状貼付と連続刺突文あ

るいは押し引きを多用するもの(①種)、キャリパー部分の平面形が多角形で、施文に押し引きを多用するもの(②種)、キャリパー部分の内彎度がややゆるやかで、箆沈線による施文が中心になるもの（③種)、その他のもの（④種）に細分した。以下、①種から順に記述する。

(1503) は本住居跡の南南西寄りのピット (Pit10) から倒立して出土したものである。南側のピット (Pit11) が掘り込まれた際に半個体分が失われているが、底部に穿孔の痕跡があり、埋甕と考えられる。口縁径26cm、器高34cmを測る。キャリパー部分の平面形は八角形になり、角の上に続く内彎した部位に貼付で渦文を施す。外反気味に立ち上がる口縁部は折返状の複合口縁で、渦文から口縁に縦位の貼付を4本つけ、その間に3本の押し引きを施している。区画間は横位の貼付を3本つけ、同様に間を押し引きで充塡する。内彎部は渦文による区画内を格子状に貼付で充塡する。キャリパー形に張り出す部分は、角の両側に上の渦文が延びてそれぞれ渦文を形成し、区画内の左右に対照的に渦文を配したモチーフとなる。中央には縦に押し引きを入れている。なお、すべて渦文の内側は押し引きを施す。大きくくびれた頸部から胴部は無文であるが、頸部から胴上部にかけて合計9条の連弧文沈線がめぐる。正確には上から順に波状沈線2条・連弧文沈線5条・波状沈線2条の構成である。

(1504) もキャリパー部分の平面形が八角形を呈する。角部分に貼付の渦文が逆S字状に連結するが、立ち上がる口縁部に上の渦文が位置するものと、縦位の3本貼付がつくものとが交互に配されている。キャリパー部の楕円区画内は左傾の箆沈線を充塡する。

その他、①種に属するものに (1505) ～(1512) がある。(1507) は複合口縁の直下に波状文のそうめん貼付を施す。(1510) ～(1512) は同一個体片で、貼付の渦文の上にV字形の貼付を配する。(1508) ～(1510) 他2点は区画間に幅の細い押し引きを集合沈線風に充塡する。なお、①種の口縁は折り返し状の複合口縁になる。

②種に属するものには (1513) ～(1523) がある。全体にキャリパー部分が形態的にも文様的にも区画が明確になる。口縁は①種と同様で原則的に複合口縁を呈する。

(1513) ～(1517) は、押し引きにより文様を描き、区画内も基本的に押し引きを充塡する。いずれも渦文は角部分には位置せず、角をはずれて区画内にはいり込むか、角部分の上に配置される。(1513)・(1514)・(1517) は方形区画の左に配置され、(1515) は角の上方に半円の同心円で描かれる。キャリパー部分の区画は、(1513) は12区画、(1514) は8区画、(1515) は10区画と推定される。その他、押し引きで区画された部分の施文には異なる要素も見受けられ、(1514) は方形区画の上の内彎部分に縄文を施文する。(1515) は立ち上がり部分の一部に爪形の刺突を充塡する。(1516) は幅の狭い押し引きを充塡する。(1517) は立ち上がり部の一部に縄文が見られる。

(1518) は渦文が連結する部分に角をつくり、区画間を縄文で充塡している。

(1519) ～(1523) は小片で詳細は不明であるが、(1519) は押し引き間に米粒大の刺突を充

塡する部分が見られる。また、(1520)は押し引き間に右傾の沈線を充塡する部分が見られるほか、本類にはめずらしく口縁に折り返し状の肥厚が見られない。

③種に属するものには（1524）～(1536）がある。

(1524）は口縁径34cm、器高43cmを測る完形復元品である。口縁部文様帯は二重の沈線による逆Ｓ字形の文様により10区画になる。キャリパー部分は、前述の逆Ｓ字沈線が立ち上がり部から下りる部分と渦文がくずれたような同心円沈線に挟まれて、10角形の角部分を形成している。これらの文様の間は、箆状工具による左傾の集合沈線を充塡する。頸部は口縁部との間の無文帯をはさんで、６～７本の連弧文沈線がめぐっている。底部は直径8.6cmの平底で、圧痕等は見られない。

(1525）は胴部中央から下を欠損しているが、口縁径24cmを測り、(1524）に類似した文様モチーフをもつ復元品である。キャリパー部分は８区画になる。

(1526）は明確な角は形成しないが、頸部無文帯との境に貼付隆帯が横走し、そこから上に縦位に隆帯を延ばし12区画の口縁部文様帯を形成している。立ち上がり部に描かれた渦文沈線がキャリパー部の区画に沿って逆Ｓ字を描き、間は条線風の細かい沈線で充塡する。複合口縁の肥厚部も条線を施文する。

(1527）は口縁径28cmを測る口縁部の復元品である。キャリパー部分は８区画になり、角部分には立ち上がり部分から３～４本の沈線を垂下させているが、その中の一部は押し引きになっている。概して中央に刺突列を入れる。立ち上がり部分の横位の沈線は中に連続刺突を施す。沈線間には箆沈線を充塡する。渦文はキャリパー部の区画内の左に取り込まれている。なおこの個体も本類にはめずらしく複合口縁を持たない。

(1528）～(1530）は口縁部の大破片で、全容は不明であるが、三者三様の施文が見受けられる。共通している点は区画境に配置される渦文モチーフが交互に異なる点である。(1528)は立ち上がり部分の区画が、３本の縦位の押し引きによる部分と、３本の縦位押し引き＋押し引きによる渦文による部分とが交互に配されている。区画間は横位の押し引きと箆沈線で充塡される。キャリパー部分は上部が尖る角部で区画され、区画内いっぱいに沈線による渦文あるいは同心円文を描いている。(1529)は立ち上がり部からキャリパー部分の角の右にかけて、逆Ｓ字状に沈線による連結渦文を施す。その他の横位の沈線や円弧状沈線の間に箆沈線を充塡している。２ヵ所残存している逆Ｓ字状の連結渦文は位置する高さが異なり、低く位置する右側は口縁が欠損しているため推定の域を出ないが、渦文の上に縦位の３本沈線がつく可能性が高いと考えられる。(1530)は口縁部文様帯の区画に、３本沈線を角部まで垂下させキャリパー部の角に渦文をつけるものと、角部までに３本沈線＋渦文を施しキャリパー部の角の左側にＳ字状の渦文を連結させるものと２種類ある。おそらく交互に配置されると推定される。本種のほとんどが、区画間に沈線文を充塡するのを特徴としているのに対して、本個体はＲＬの縄文を充塡

している。なお、(1528)・(1530) は口縁部の立ち上がり部分が長いのも特徴の一つである。

④種としては (1538) ～(1545) がある。

すべて口縁立ち上がり部の破片であるが、貼付による施文という点で一括した。(1538)は渦文を伴う。(1541) ～(1543) は同一個体片で、複合口縁の下にループが連続する貼付を施す。(1544) は複合口縁と横位の隆帯の間に波状の貼付を施す。(1545) は複合口縁の下に格子目状の貼付を施す。

C類に属するものには (1537)・(1554) ～(1565) がある。本類は、胴部文様の多様化および台付鉢の存在や把手の発達といった異質な要素をもつが、キャリパー形口縁という器形を重視して、本群に組み入れた。大きく内彎した口縁器形のもの (①種) と、内彎した口縁部が外反気味に立ち上がるもの (②種) に細分した。

①種には (1554) ～(1558) があるが、すべて把手部分の破片である。

(1554)・(1555) は同一個体片で、他に細片が8点ある。(1554) は大きく内彎した口縁付近の隆帯から上方に複雑な装飾把手がつく。また、口縁部隆帯から下方に頸部をまたいで胴上部へつなぐと考えられる橋状把手が確認できる。口縁部の隆帯区画は全周を囲むものではないが、区画内を竹管状工具による円環状刺突を充塡している。把手および隆帯部はそうめん状貼付で縁取りし、円弧ラインを押し引きするほか、面的部分には細い竹管状工具による押し引きを集合沈線風に充塡する。(1555)では、欠損して不明だが、3本の脚をもつ把手が付いていた痕跡が見られる。

(1556) は内彎した口縁に3本の脚をもつ把手をつける。把手上と左脚の下に渦文を貼付で描く。形状や胎土から見て、(1554) と同一個体の可能性もある。

(1557) は口縁に脚3本の把手をもつ。把手にはそうめん状の貼付が3本走り、把手先端と中央の脚の裾に渦文を形成している。貼付間は押し引きを施している。

(1558) は口縁部の区画境の角部分が斜めにせり上がったような把手である。斜めの把手上面に貼付により渦文が描かれるほか、角部分の左右にも渦文を配する。貼付と押し引きにより文様を描くが、区画内は幅狭の押し引きを集合沈線風に充塡する。

②種には (1537)・(1559) ～(1565) がある。

(1559) は覆土中より倒置した状態で検出された完形復元品で、脚台部を欠損している。おそらく、廃棄された時点ですでに脚台を欠いていたと考えられる。口縁径18cm、脚台部を除いた器高26cmを測る。キャリパー部分の平面形は八角形で、角の部分から口縁まで3本の貼付を縦位に施す。口縁部は全体に格子目のそうめん状貼付と押し引きでくまなく施文するが、渦文は見当らない。頸部は口縁部文様帯から無文帯をはさんで2本の隆帯がめぐる。胴部は口縁部文様帯直下から垂下する2本の貼付隆帯で4区画に分割し、区画内は隆帯による渦巻文を描き、縄文を充塡している。

(1560) は覆土中より倒立して検出された完形復元品で、(1559) と同様に脚台部を欠損している。口縁径19cm、脚台部を除いた器高22cmを測る。口縁部文様帯はそうめん状貼付で文様のアウトラインを描き、押し引きと箆沈線でくまなく施文する。文様は４単位で、キャリパー部分に２種類の把手が交互につく。把手および隆帯は、すべてそうめん状貼付で縁取りされ、横位の把手先端と隆帯上の瘤に渦文がつく。立ち上がり部には、横位の把手の位置に渦文を配している。頸部には刺突の入る隆帯がめぐる。胴部も口縁部と同じく４単位に区画される。貼付隆帯で分割された区画内に大きな渦巻文を貼付で配し、渦の上に３本の縦位の貼付がつく。貼付の裾はすべて押し引き状の連続刺突をめぐらせている。胴部の地文は縄文である。

(1537)・(1561)・(1562) は口縁キャリパー部に明確な方形区画をもつ点で類似する。

(1537) は胴下部以下を欠損しているが、口縁径27.5cmを測る復元品である。本群特有の器形を有し、頸部から胴上部にかけて３本の連弧文沈線がめぐる。ただ、口縁部の文様モチーフに異質のものがある。口縁部の立ち上がり部は、口縁より少し下がって貼付隆帯をめぐらし、その隆帯までの口縁に波状の貼付を施す。隆帯以下は無文である。キャリパー部分は８ヵ所に把手状の肥厚部分をつくり、把手間を粘土紐で方形に区画する。区画内は円弧状の貼付を２本中央に施し、その円弧外に左傾の箆沈線を充塡している。

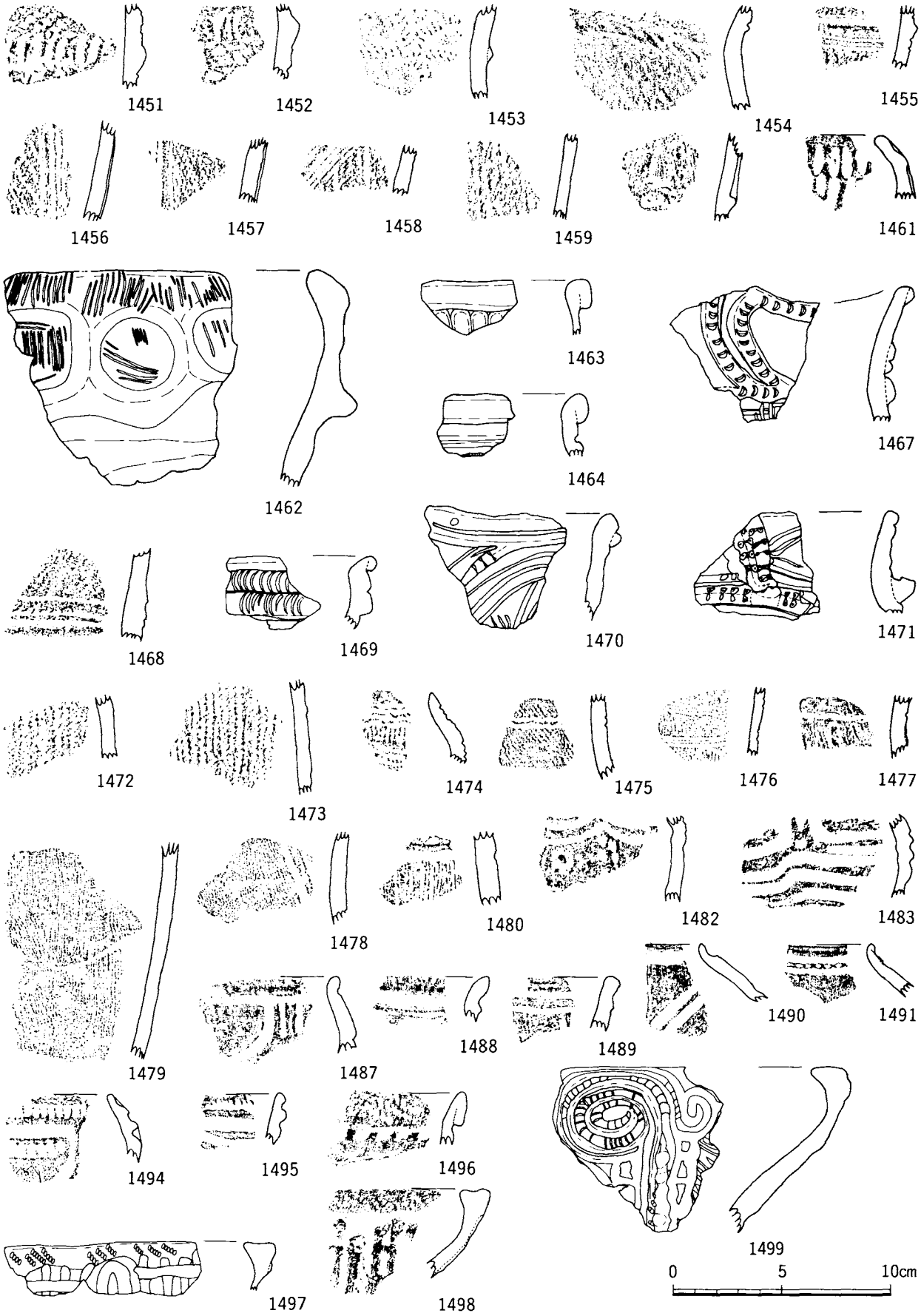
(1562) はキャリパー部が10区画になると推定でき、長方形の微隆帯で区画される。縦の区画隆帯上には円環状の刺突列を施し、上の横位の隆帯上には左傾の刻目を施す。区画内は沈線で縁取りし、左傾の沈線を充塡している。(1563)・(1564) は同一個体の立ち上がり部の破片で、折り返し状の複合口縁を呈するほかは無文である。

(1561) は口縁部を欠損しているが、脚台がつく復元品で、キャリパー部分の推定最大径24cm、現存の器高36cmを測る。キャリパー部分は８区画になると推定され、角に縦の沈線がはいる。区画は隅丸の長方形を沈線で描き、中を左傾の沈線で充塡する。胴部は無文の頸部をはさんで２本の沈線をめぐらして区分し、間に長円形の沈線文を挟む２本の垂下する沈線で分割し、分割された区画間に幅いっぱいに大きく蛇行する沈線文を施している。脚台部は非常に厚く粗雑なつくりで、３ヵ所に円形の透かし孔を入れている。なお、口縁の立ち上がり部の様相は不明である。胴部文様からは、時期的に下がると感じられる。

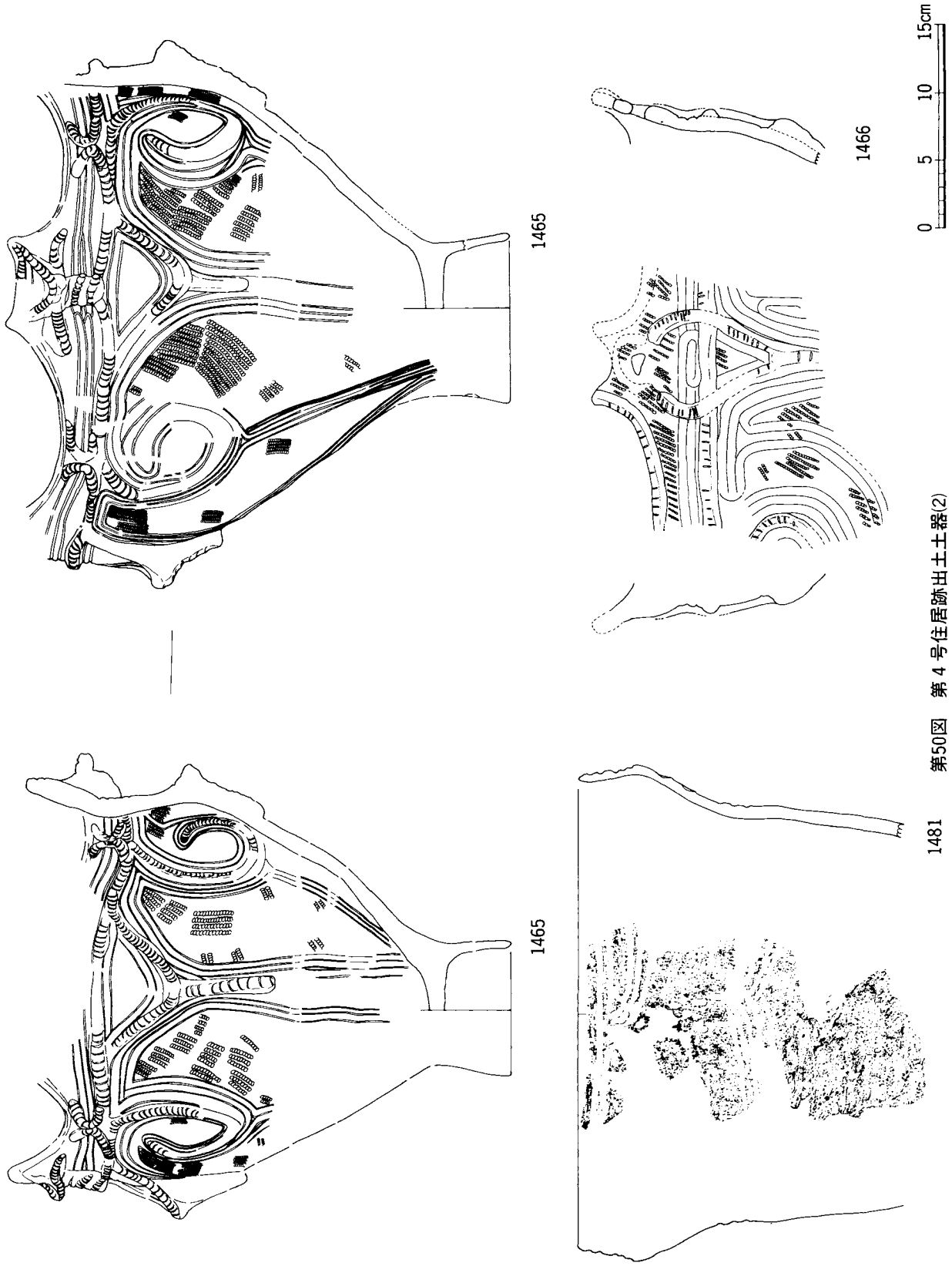
(1565) はキャリパー部分が厚い貼付隆帯と橋状把手で10単位の方形区画を形する。隆帯および把手には箆沈線を施すが、非常に雑な入れ方で部分的に交錯する。立ち上がり部分は刺突を伴う複合口縁で、キャリパー部同様10区画になり、１区画おきに貼付による方形区画をつくる。区画内は無文である。胴部文様は不明であるが、口縁部直下に胴部を区画すると考えられる縦位の沈線が一部確認できる。

Ｃ７群土器の胴部（第57図　1546・1548～1553、図版21）

Ｃ７群土器に伴う胴部の破片で、いわゆる連弧文沈線を頸部から胴上部に施すものである。

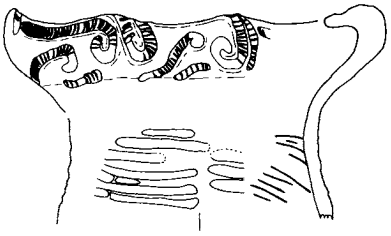


第49図　第４号住居跡出土土器(1)　Ｃ１～３・５～７群

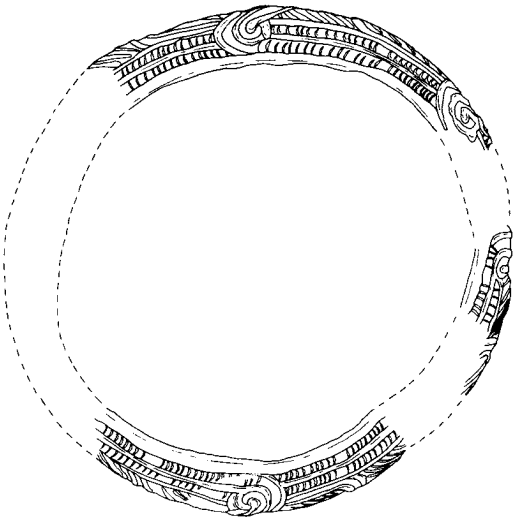


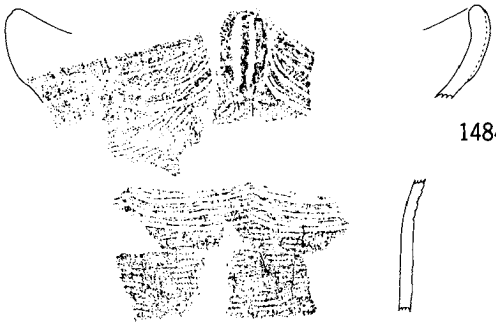
第50図　第４号住居跡出土土器(2)

1486



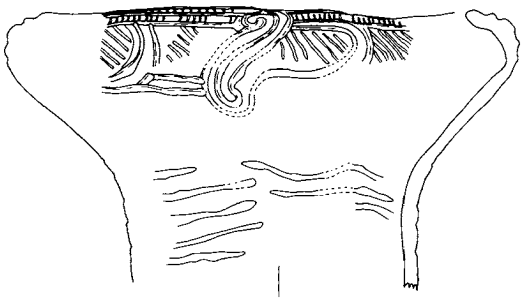
1492



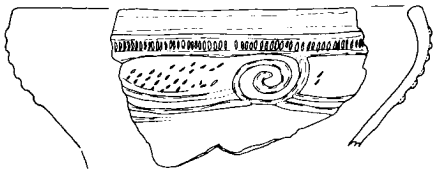


1484

1485



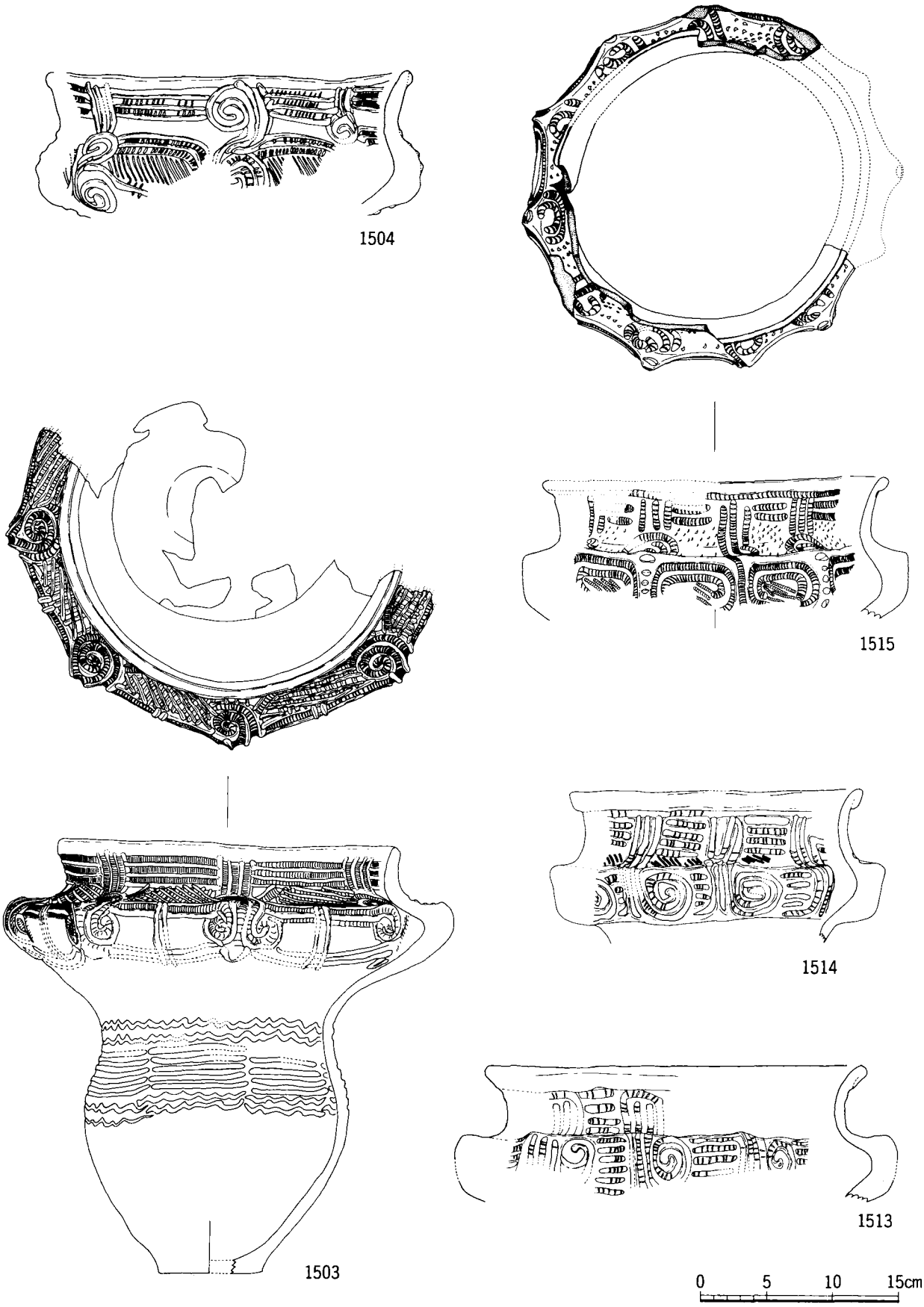
1493



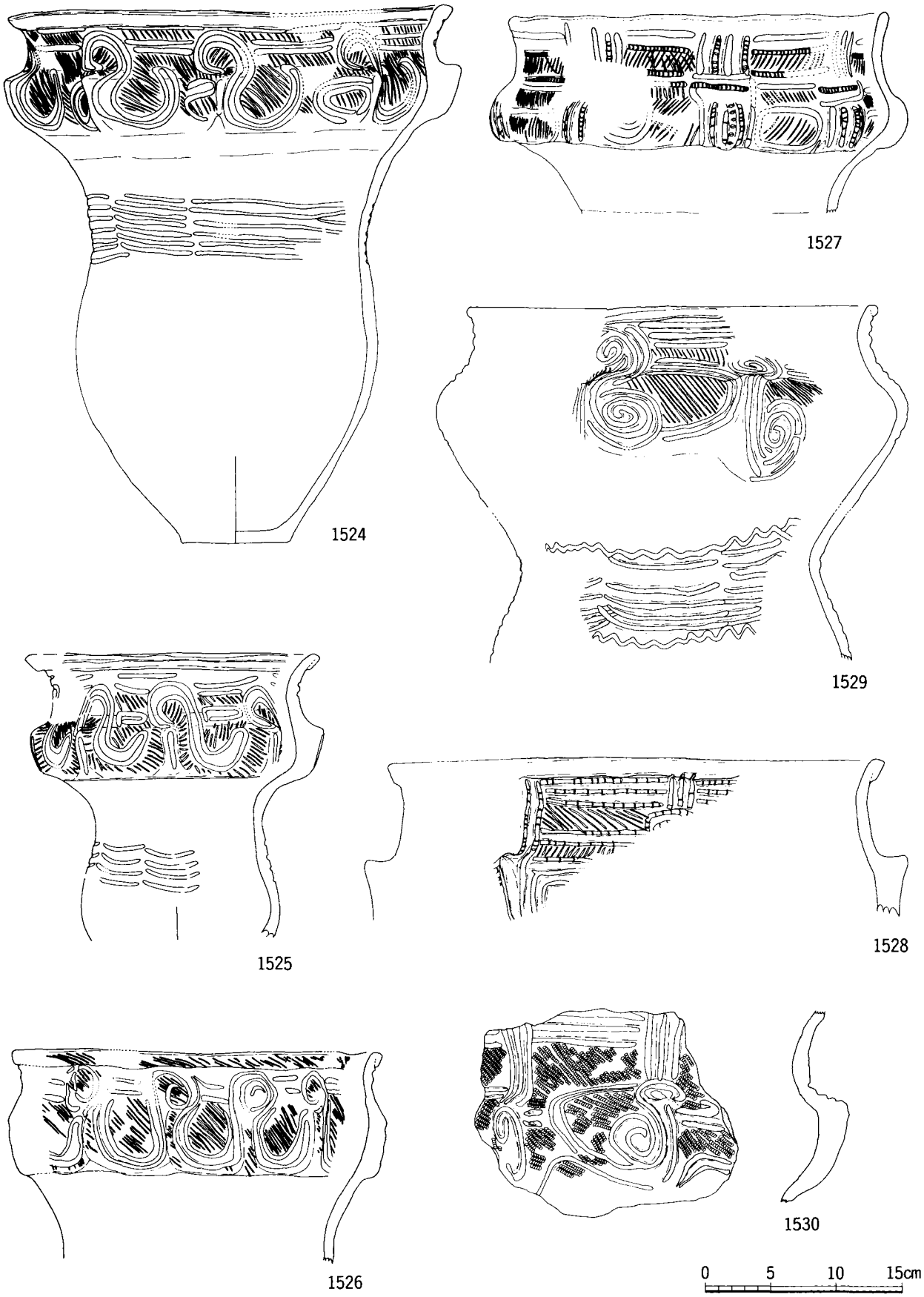
1502

0　5　10　15cm

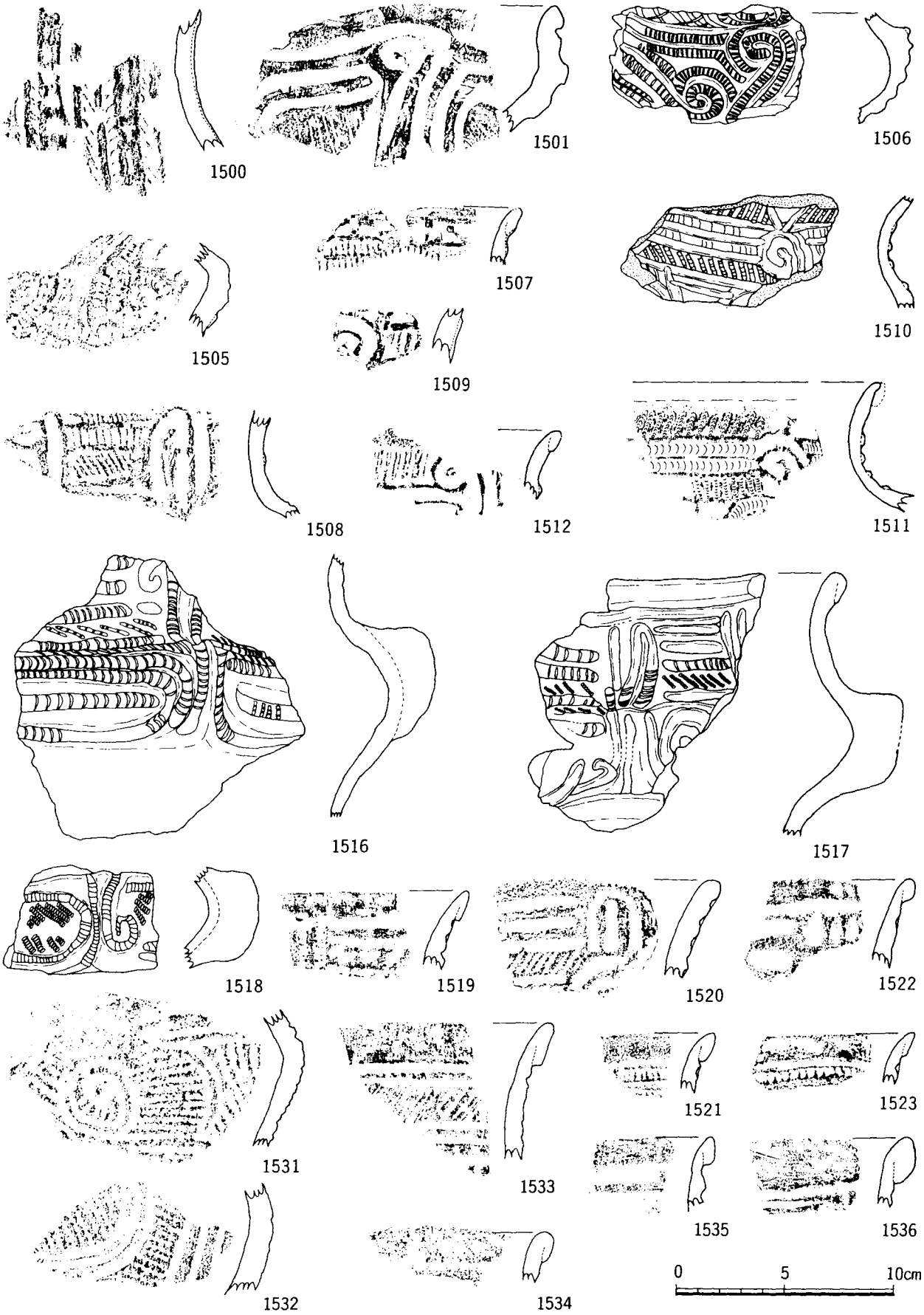
第51図　第４号住居跡出土土器(3)　Ｃ７群



第52図　第４号住居跡出土土器(4)　Ｃ７群

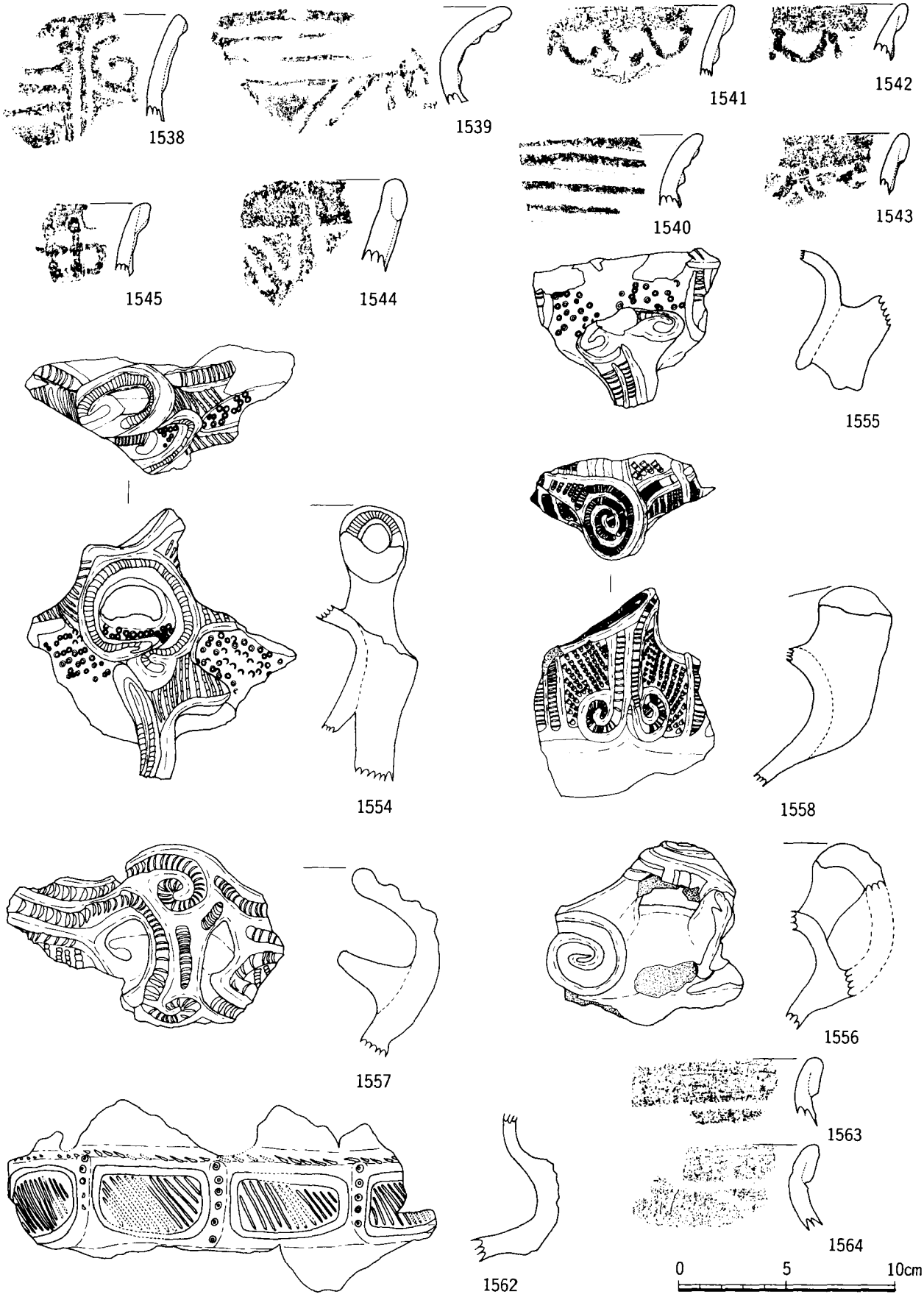


第53図　第４号住居跡出土土器(5)　Ｃ７群

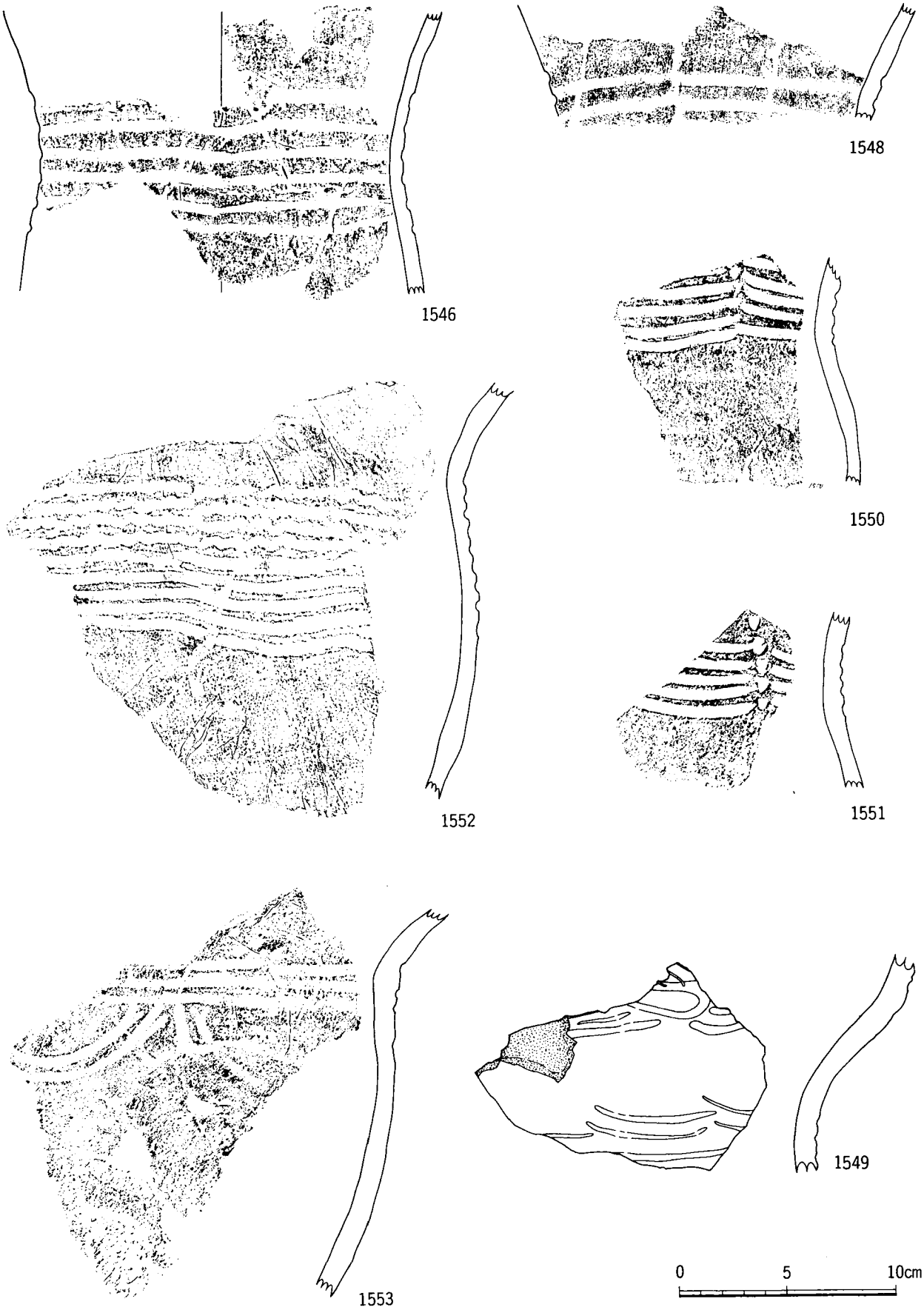


第54図　第４号住居跡出土土器(6)　Ｃ７群

第55図　第４号住居跡出土土器(7)　Ｃ７群



第56図　第４号住居跡出土土器(8)　Ｃ７群



第57図　第４号住居跡出土土器(9)　Ｃ７群

(1546)・(1548) はほとんど直線的な沈線を引くものである。(1549) ～(1551) はゆるやかな連弧文で、(1551)は連弧文の境に刺突を施す。(1550)にも一部その痕跡が認められる。(1552)は2種類の沈線を施す。上に粗雑な鋸歯状の沈線を4本施し、下に波長の長い緩やかな波状沈線を5本引く。(1553)は頸部に直線状の沈線を3本引き、その下に2本のカーブの大きな連弧文を施す。

C8群の土器（第58～64図　1566～1612、図版21・24～26）

本群の土器は、口縁部文様帯が前面に立体化したもので、口縁部上下2段の厚い貼付隆帯をベースにした橋状把手や装飾的な把手をもつ土器群である。口縁部文様帯の上に、やや外反気味に直立する口縁をもつもの(B類)、口縁部文様帯の上の貼付隆帯が口端にあたり、内側に蓋受け状の段をもつもの（A類)、A・B類にあてはまらないその他のもの（C類）がある。本住居跡からはA～C類のすべてが様々なバラエティーをもって出土している。

B類に属するものに (1566) ～(1571) がある。やや外反気味のバケツ形の口縁部に方形区画を呈する隆帯と橋状把手がつく。楕円形の隆帯区画が並ぶ①種と、橋状把手の先端がやや尖り気味になったり、装飾的で発達した把手をもつ②種とに細分した。

①種には (1566) ～(1568) がある。

(1566) は把手部分が8区画になり、隆帯および把手上に楕円形の放射状に箆沈線を施文している。一部は押し引き気味に引くところも見られるが、あとは面倒になりストレートな沈線にしたと考えられる。口縁の立ち上がり部は、折り返し状の肥厚がなく、口端直下に波状の貼付をめぐらす。胴部は、中央がややくびれたあと、胴下部で下膨れになり平底の底部へ終息する器形をもつ。縦位に貼付の懸垂文を施し、その間を1区画おきに左傾・右傾の集合沈線で充塡し、矢羽根状を呈する。縦位の貼付上には2～3本おきに刺突気味の短沈線を刻む。なお、底部圧痕は見られない。

(1567) も把手部分が8区画で、隆帯および把手上に箆沈線を縦に引く。口縁の立ち上がり部は無文で、複合口縁である。胴部は口縁部よりも径が大きくなるようで、胴中央部に向かって膨らむ傾向が見える。把手部に続く残存部は無文であるが、それ以下は不明である。

(1568) は把手部分が8区画で、隆帯および把手上には縄文を施す。立ち上がり部分は欠損していて不明である。把手部の下に中央部が「太鼓形」に膨らむ胴部が接続する。胴部文様は、上に刺突が並ぶ貼付の懸垂文で12区画に分割し、区画内は縦長の楕円区画を縦に3つ設け、円内や隙間を集合沈線で充塡している。同一個体と考えられる底部は、脚が6本ついた台付きになる。

②種には (1569) ～(1571) がある。3点とも立ち上がる口縁部は欠損していて詳細は不明である。

(1569) は、把手部は8区画の隆帯と橋状把手から成っている。そうめん状貼付で縁取りさ

れるが、把手上部に「の」の字形の渦文のなごりがつく。あとは集合沈線を充塡する。胴部は、ヘアピン状に連結したり、「の」の字形に渦文をつくる3本1組の貼付懸垂文で縦位分割し、区画間は格子目状に沈線を充塡している。

(1570) は、把手部が8区画になると推定される。隆帯および把手はそうめん状貼付で縁取りし、縄文を充塡している。把手は1つおきに上が横にアーチ状になる装飾把手がつき、下部にそうめん状貼付が渦文を形成する。

(1571) も8区画で、隆帯および把手部は貼付で縁取りし、中を刻目状の短沈線で充塡している。把手は、上方で横にアーチ状になり中央に穴をつくるものと、上方に延ばし耳状のものを2つ重ねた装飾把手の2種類が交互に位置する。胴部は3本1組の貼付懸垂文で縦位分割し、区画間は中央の貼付懸垂文を挟んで下向きの矢羽根状沈線文を充塡する。

A類に属するものに (1572) ～(1582)・(1584～1586)・(1589) がある。橋状把手の形状が多様で装飾的なもの (①種) と、均等に同じ形状の橋状把手をもち、方形区画が明確なもの (②種) とに細分した。

①種には (1572) ～(1574)・(1584～1586)・(1589) がある。

(1572) は口縁径16cmを測る口縁部の復元品である。口縁に対に2種類4個の装飾的で複雑な橋状把手が突起状につく。その間にもそれぞれ上部に貼付の渦文をもつ橋状把手を配するほか、高い対になる装飾把手に隣接して橋がかかる。方形区画という観点からは、均等な区画とはいえない。把手部はすべてそうめん状の貼付でふちどりを施し、箆状工具による細い沈線で充塡する。場所により矢羽根状になる部分もある。口縁部内側の蓋受け状の段の部分の内径は12cmを測る。胴部は口縁部文様帯に続く残存部から推定して、「太鼓形」に膨らむ器形をもつと考えられる。同一個体の胴部小片が7点あるが、貼付による縦位分割がなされ、矢羽根状沈線がはいる部分と、貼付による幾何学的文様を施し、中を集合沈線で充塡する部分とが確認できる。

(1573) は推定口縁径15.5cm、蓋受け状の段部分の内径9.7cmを測る。対に2種類4個の橋状把手がつく。一対は把手の上方にさらに橋がかかるもの (A) で、もう一対は把手の上が尖り波状口縁になるもの (B) である。把手および隆帯部分はそうめん状の貼付を施し、中を斜行する箆沈線で充塡している。渦文は (B) の把手の先端左部分にそうめん貼付が枝分かれして形成される。橋状把手間の中央部には、上下の区画隆帯に縦のそうめん貼付をつける。胴部は、口縁部文様帯のすぐ下から「太鼓形」に膨らむものと推定される。

(1574) は口縁部の全容は不明であるが、口縁より上にのびる装飾的な橋状把手がメインになる。その他、上端が尖る橋状把手が間にはいる。把手および隆帯にはそうめん状の貼付でふちどりが施され、間に細い集合沈線を充塡するが、上部の区画隆帯上には矢羽根状に入れている。渦文は下部の区画隆帯上につく瘤状の突起や橋状把手の途中などに、そうめん状貼付が枝

分かれして形成される。胴部は、口縁把手部の下に沈線による縦長の楕円区画を含む沈線区画の文様帯をもち、楕円の中は上向きの、それ以外は左向きの矢羽根状沈線を充塡する。その下からくびれて円筒形の胴部となる。2本単位と3本単位の沈線の懸垂文で交互に分割する。2本単位の懸垂文はその間に刺突を入れている。区画間は下向きと上向きの矢羽根状沈線を1区画おきに充塡している。

(1584)・(1585)・(1586) は接合部分はないが、出土状況および胎土等から見て同一個体の口縁部・胴部・脚台部である。口縁部には向かいあって一対の装飾的な橋状把手がつき、90°のところで対に口縁部隆帯を区切る口縁の落ち込みが位置する。口縁部隆帯は装飾把手とこの口縁落ち込みによって4区画され、下部中央に切り口をもつ楕円形の貼付隆帯で囲まれた形になる。見方によっては、装飾把手を中央に配した口縁部文様帯が対に向かいあう形をとる。把手および隆帯上はそうめん状貼付によってふちどりがされ、ところどころに貼付が枝分かれして渦文を形成する。隆帯上段は中央に貼付を施し矢羽根状に沈線文を施文する。その他は斜行する沈線を充塡する。口端にも斜めに沈線を入れる。口縁内面には蓋受け状の段を有する。胴部は「太鼓形」の器形を呈している。2本の平行する貼付により、円弧文様が複雑に連結する幾何学的文様を施し、それに囲まれた区画内はすべて左傾の集合沈線を充塡する。脚台部は楕円形の透かしを4個入れ、その間に円形の透かしが4個入る。

(1589) は底部を欠くが、口縁径34cm、現存器高36cmの復元品である。口縁部文様帯は、上下2段の厚い貼付隆帯をベースにして次々と橋を架け、連結させている。全体として複雑な鎖状の装飾把手帯を形成している。口端に渦文と格子目状の貼付を施す富士山形を呈する橋状把手が対に位置する。この橋状把手を起点と見た場合、鎖状の装飾把手帯のモチーフは半周分を1パターンとして、のこり半周を繰り返している。装飾把手帯は稜線部分にそうめん状貼付でふちどりを施し、中は斜行する集合沈線を充塡する。口縁内面には蓋受け状の段を有する。胴部は円筒状であるが、胴下部で「勝坂式」に見られるような屈折底の形状を呈している。屈折部までは3本あるいは4本を1組とする貼付を基本として縦位に施し、場所によっては弧状に引き回し、端あるいは途中を渦文にして終息させている。間は左傾の集合沈線を充塡する。屈折部には横位に貼付をめぐらし、その上に刺突を加える。以下は無文である。

以上①種に該当する5個体は、そうめん状貼付と渦文をもち、後述する②種に比べ古い要素が残っている。

②種には (1575) ～(1582) がある。

(1575) は把手のつく口縁部文様帯が8区画になると推定される。橋状把手は1つおきに口縁にもアーチが架かる形状を呈するが、方形区画をつくる橋状把手間は均等間隔である。ふちどりにそうめん状貼付が施され、中は斜行する集合沈線を充塡する。区画隆帯の一部に瘤状の部分を形成するが渦文は見られない。

(1576) は口縁の最大径が約21cm、蓋受け状の段の内径が約12cmの、六角形の平面形を呈する口縁部をもつ。区画隆帯および橋状把手上は箆状工具による沈線を施す。隆帯上段は左傾、下段は右傾、橋状把手部左は右傾、右は左傾と、沈線方向に統一が見られる。口縁は把手部分で波状を呈し、口端部に刻目を入れる。把手部口端には指頭による押圧が入る。

(1577)は口縁内面の蓋受け状の段の内径が約15cmで、口縁部平面形が六角形を呈し、全体の形状は(1576)に類似する。異なる点は1区画(橋状把手間)に中央に貼付隆帯の仕切りをつけ、眼鏡状を呈するところである。隆帯上は左傾に統一した沈線を施し、把手中央に刺突列が入る。

(1578) は他の個体とちがい、方形区画の上に少し器壁をのばして口縁をつくる。口縁は方形区画と同様の貼付隆帯で肥厚する。口縁径約23cm、蓋受け状の段の内径約16cmと推定される。把手部分は8区画になり、把手上には逆S字形の沈線文を施す。方形区画上は、上段が左傾、下段が右傾、口縁肥厚帯上は右傾の沈線を入れる。

(1579) ～(1582) は把手部の破片で詳細については不明な点が多い。(1579) は把手部の上半分が不明であるが、同じ形状の把手が均等に並ぶタイプではない。隆帯上には矢羽根状の沈線文を施す。胴部は円筒形を呈すると考えられ、懸垂文沈線で分割し、間は斜行する集合沈線を充塡する。

以上②種にはそうめん状貼付や渦文が見られなくなり、方形区画と橋状把手がシンプルなものが多い。

C類としては (1583)・(1587･1588)・(1590) がある。

(1583) は底部を欠くが、口縁径28cm、残存器高25cmを測る復元品である。口縁部文様帯は基本的には方形区画である。2本1組の把手状の縦の厚い貼付で4区画に分ける。2本の把手状貼付の間は縦3本をセットにした押し引き気味の刺突が施される。方形区画間は中央を把手間と同様の刺突文で仕切り、左右に方形の渦文を押し引き気味の刺突で描く。把手上も縦3本の刺突を入れる。外反する口縁は口端部で内屈する。胴部は「太鼓形」の器形を呈する。2本1組で間は無文になる貼付の懸垂文で4区分し、それぞれの区分は貼付懸垂文でさらに4分割されている。中は左傾と右傾の集合沈線を交互に充塡し、矢羽根状を呈している。

(1587) は口縁部の装飾的な橋状把手であるが、出土状況や胎土・文様から (1588) が胴部になると推定される。(1587)は口縁でループを形成した把手が、さらに下方へ長い把手となって伸びている。そうめん状貼付でふちどりし、中を沈線で充塡するが、ところによっては中央に貼付を入れ、矢羽根状沈線文になる。下に長く伸びる把手部分は、中央に2本の貼付を入れその間に押し引きを施す。渦文は口縁のループ状把手と下に伸びる長い把手の接点に入る。その他、把手左につく小突起にも貼付で渦文を施す。口縁部の内側に溝状に段があり、そこから立ち上がる器壁が認められる。(1588) では (1587) の装飾把手とは別に、おそらく90°のところに、口縁の貼付隆帯から下へ橋状把手を架ける。把手下部正面には貼付でその間を押し引きし

た渦文を施文する。胴部器面は、唐草文風に右回りの渦文を貼付で連結させ、上に丸い刺突を２列充塡している。間は斜行する沈線文を充塡する。

（1590）は口縁部と胴下部を欠損していて全容が不明であるが、胴部の最大径22cmを測る復元品である。胴部から外反気味に立ち上がる無文帯部分を口縁部と見るか頸部と見るかで異なるが、口縁部とみなすなら「曽利式」に類似する。頸部とすればキャリパー形の口縁部がつき、Ｃ７群に属する可能性がある。胴上部は、２本の平行する貼付で大柄な渦巻文状の円弧を垂下させ、貼付の裾に押し引きを施文する。この手法は、モチーフ的には若干異なるが、胴部器形も含めてＣ７群Ｃ類の（1560）の胴部と共通する。なお、隣接する単位文と横位に連結する貼付がある。全体として５単位のモチーフである。円弧内は無文とし、その他の間は幅狭の押し引き気味の沈線で充塡する。

その他、Ｃ８群土器に付属すると考えられる把手部分の破片に（1591）～(1594）がある。

Ｃ８群土器の胴部（第62・64図　1595～1612、図版21）

Ｃ８群土器の胴部と考えられるものに（1595）～(1612）がある。厳密にいうならＣ８群～Ｃ11群に伴うという幅を有するものだが、本住居跡からは後述するようにＣ９群以降の資料は激減し、混入と考えているので、Ｃ８群に伴うものとして一括した。

貼付隆帯の懸垂文で分割し、間を矢羽根状沈線あるいは一方向に斜行する沈線で充塡するものが（1595）～(1597）である。(1595）は胴下部片で底部近くに横位の肥厚帯がめぐり、以下は無文になる。一種の屈折底の形状を呈する。

懸垂文沈線で分割し、間を矢羽根状沈線あるいは一方向に斜行する沈線で充塡するものが（1598）～(1606）である。(1606）は円筒形の胴部で、中央部の径12cmを測る。２本１組の懸垂文沈線で13区画に分割し、斜行する細沈線を充塡している。口縁部に向かって開く頸部付近の内面には炭化物が付着する。

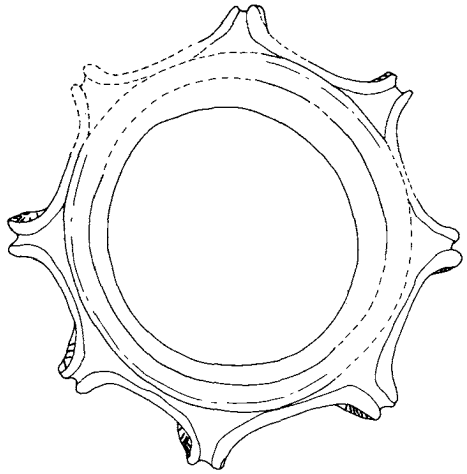
大柄な渦巻文をはじめ円弧を描く沈線で文様を構成し、間に斜行する沈線を充塡するものが（1607）～(1610）である。

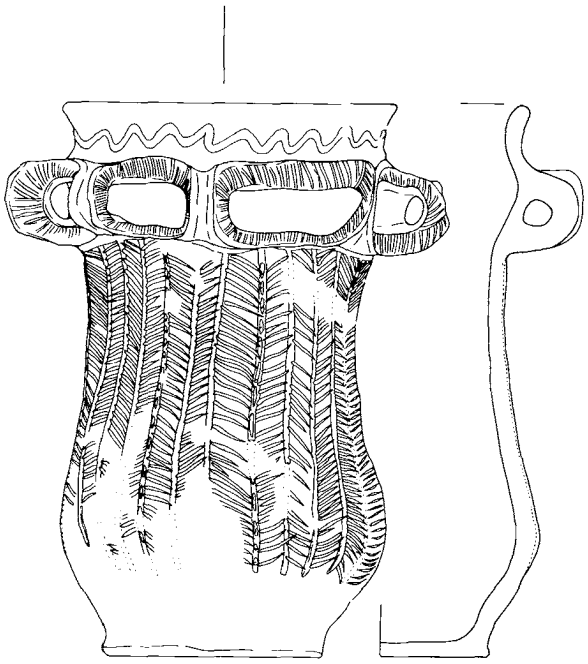
貼付隆帯により大柄な渦巻文をはじめ円弧文を描き、間に矢羽根状沈線などの集合沈線を充塡するものが（1611）・(1612）である。(1611）は大柄な渦巻文をベースにし、その区画内に不整円形状の区画をもつ。区画内は矢羽根状沈線あるいは一方向の集合沈線を充塡する。長野県下伊那地域に見られる唐草文系土器の胴部文様に類似している。

Ｃ９群の土器（第63・64図　1613～1623、図版21）

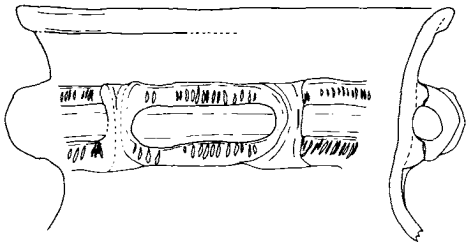
本群は、口縁部に隆帯による区画文を配するものが多く、区画内に縄文・刺突文・沈線文などを充塡する、厚手でキャリパー形口縁の器形を呈する土器である。本住居跡からは図示したものも含め17点が出土したのみで、覆土への混入と考えられる。

Ｂ類に属するものに（1613）～(1621）がある。(1613）～(1615）は斜行する沈線文を充塡す

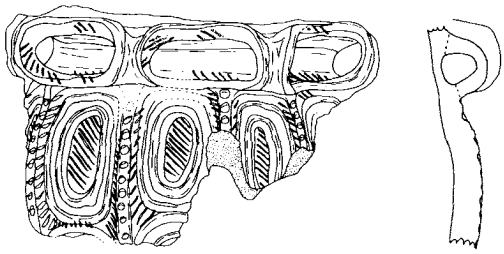




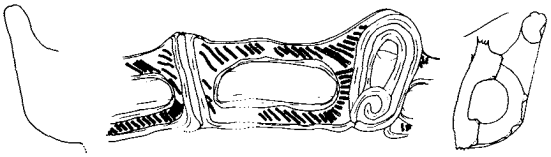
1566



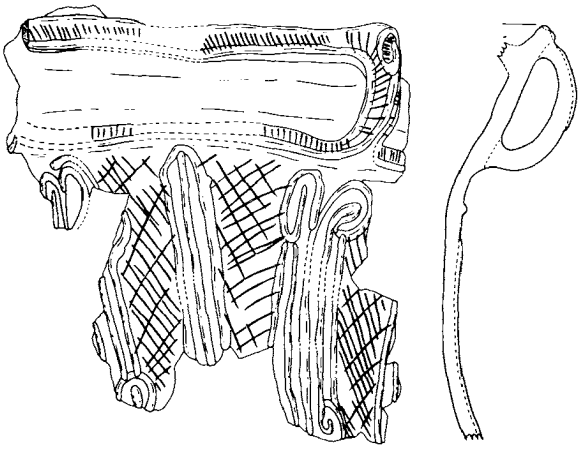
1567



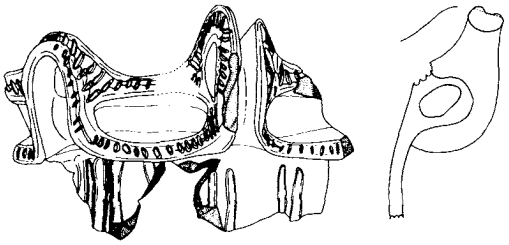
1568



1570



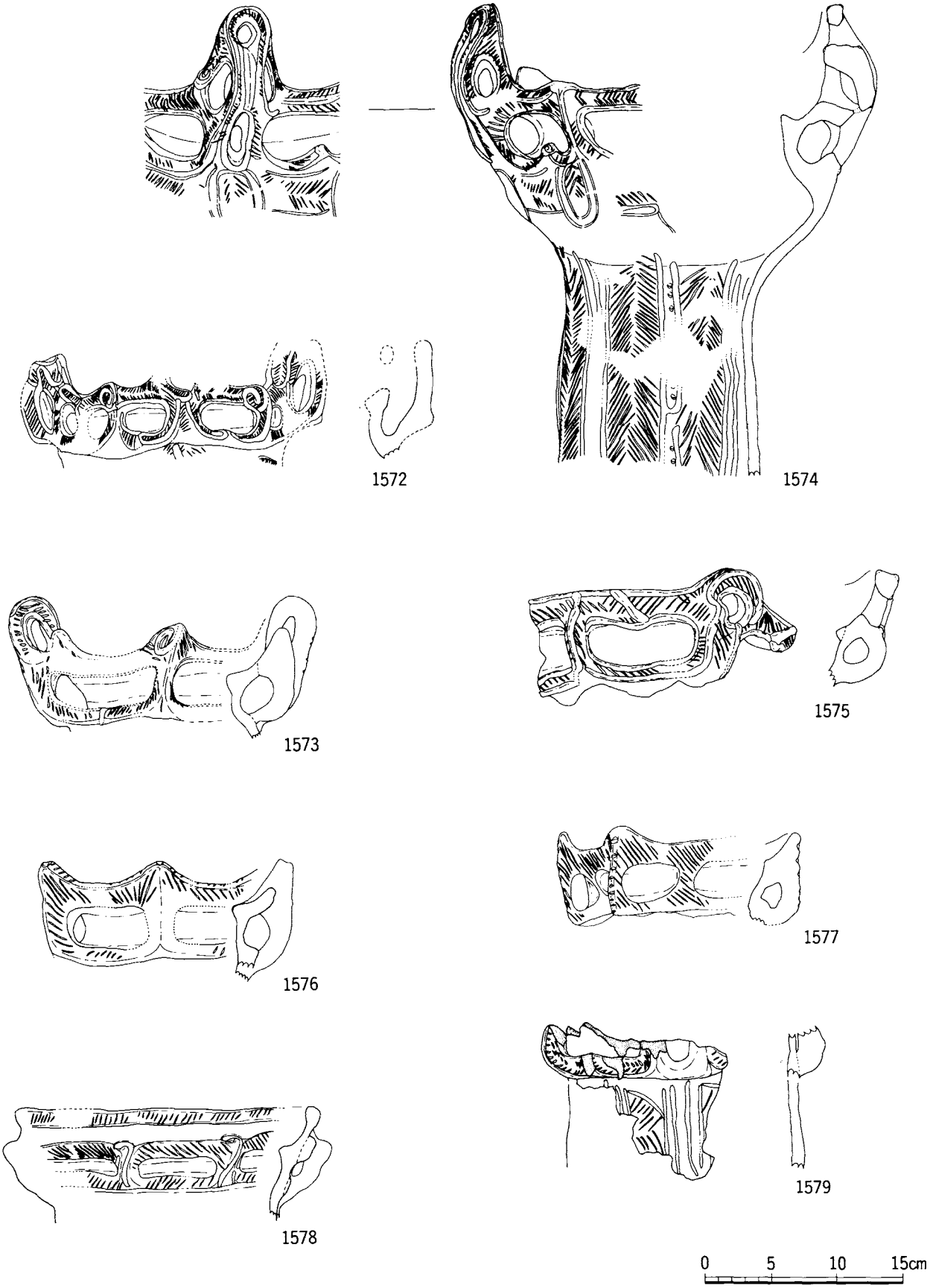
1569



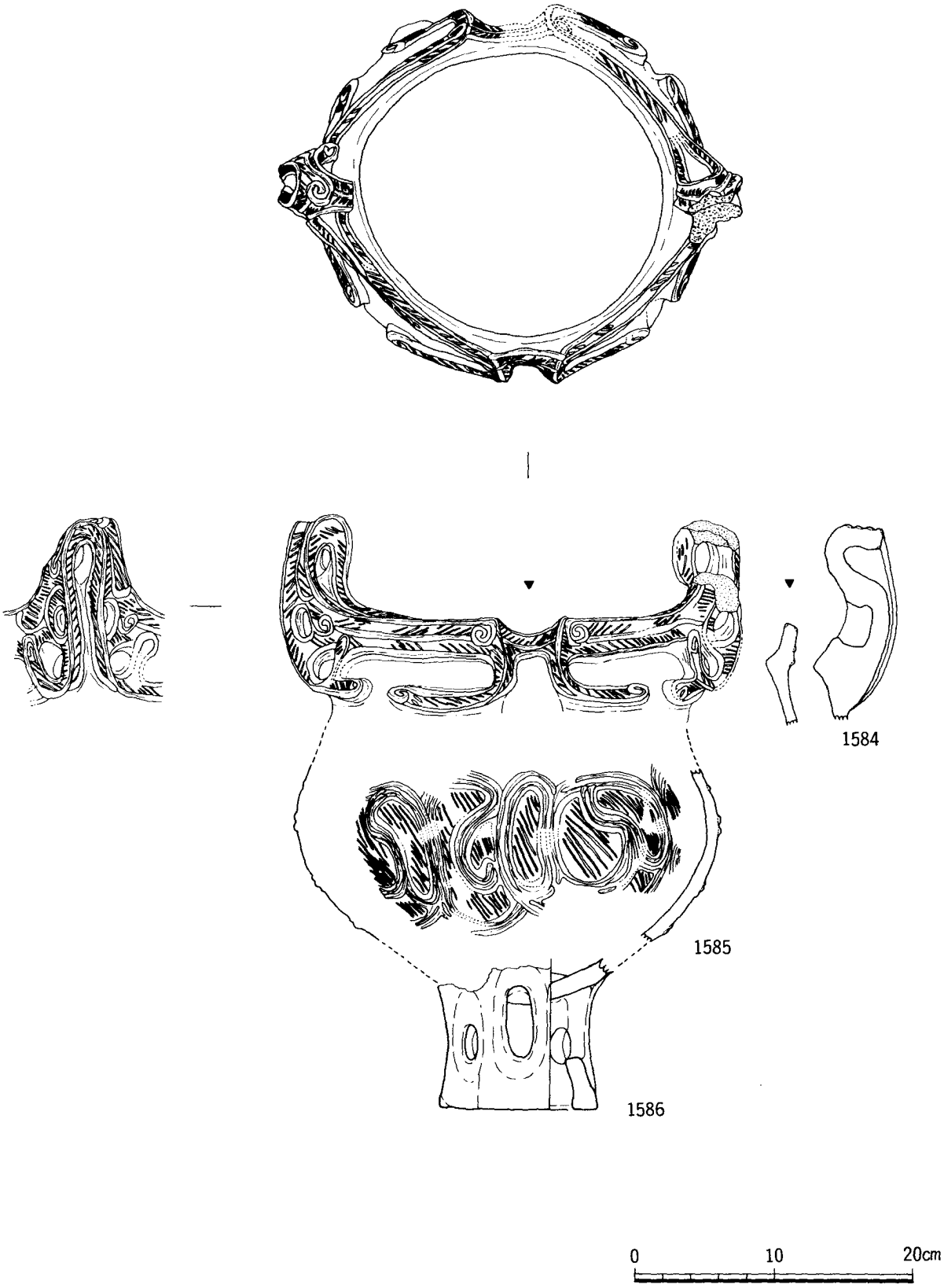
1571

0　5　10　15cm

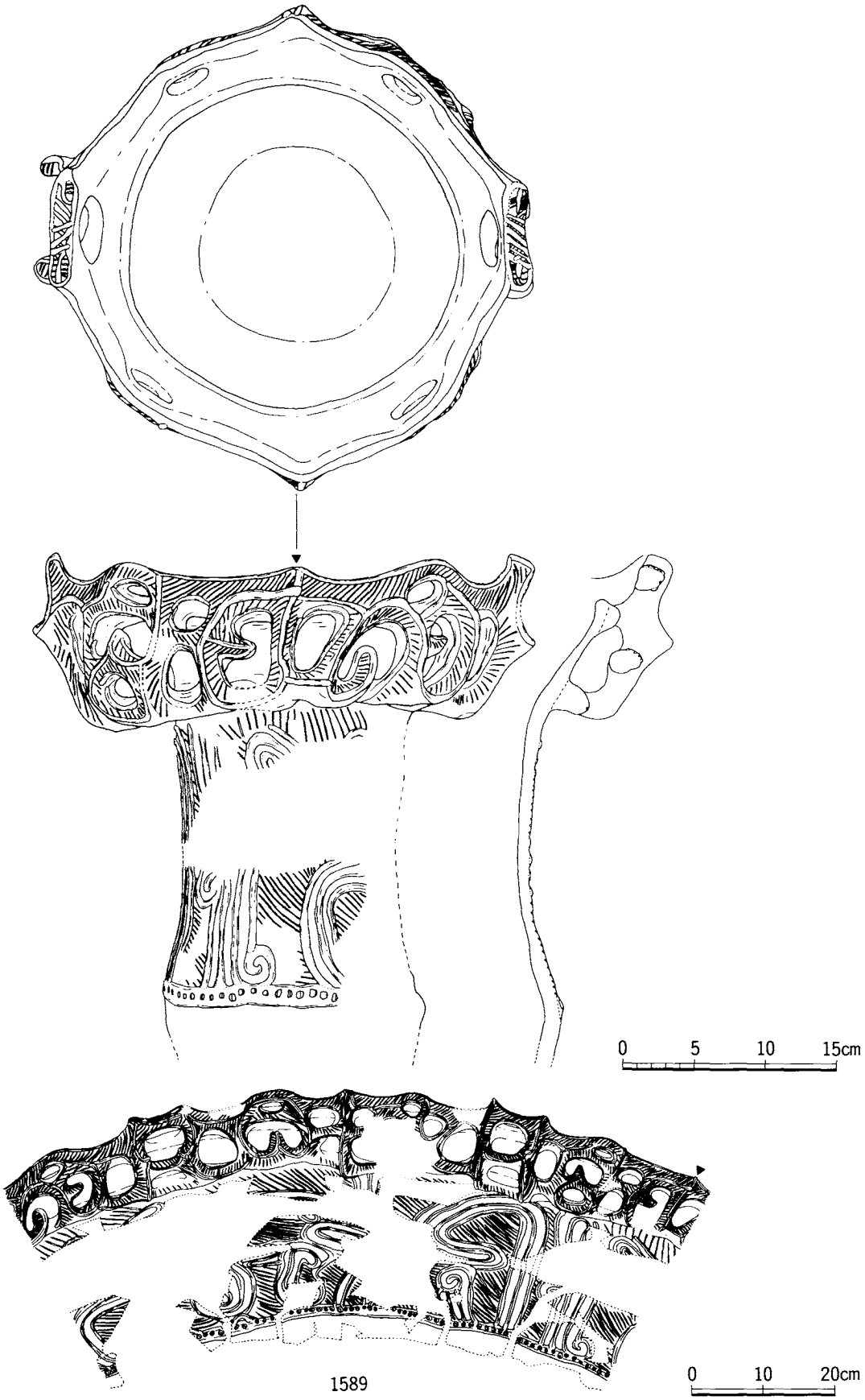
第58図　第４号住居跡出土土器(10)　Ｃ８群



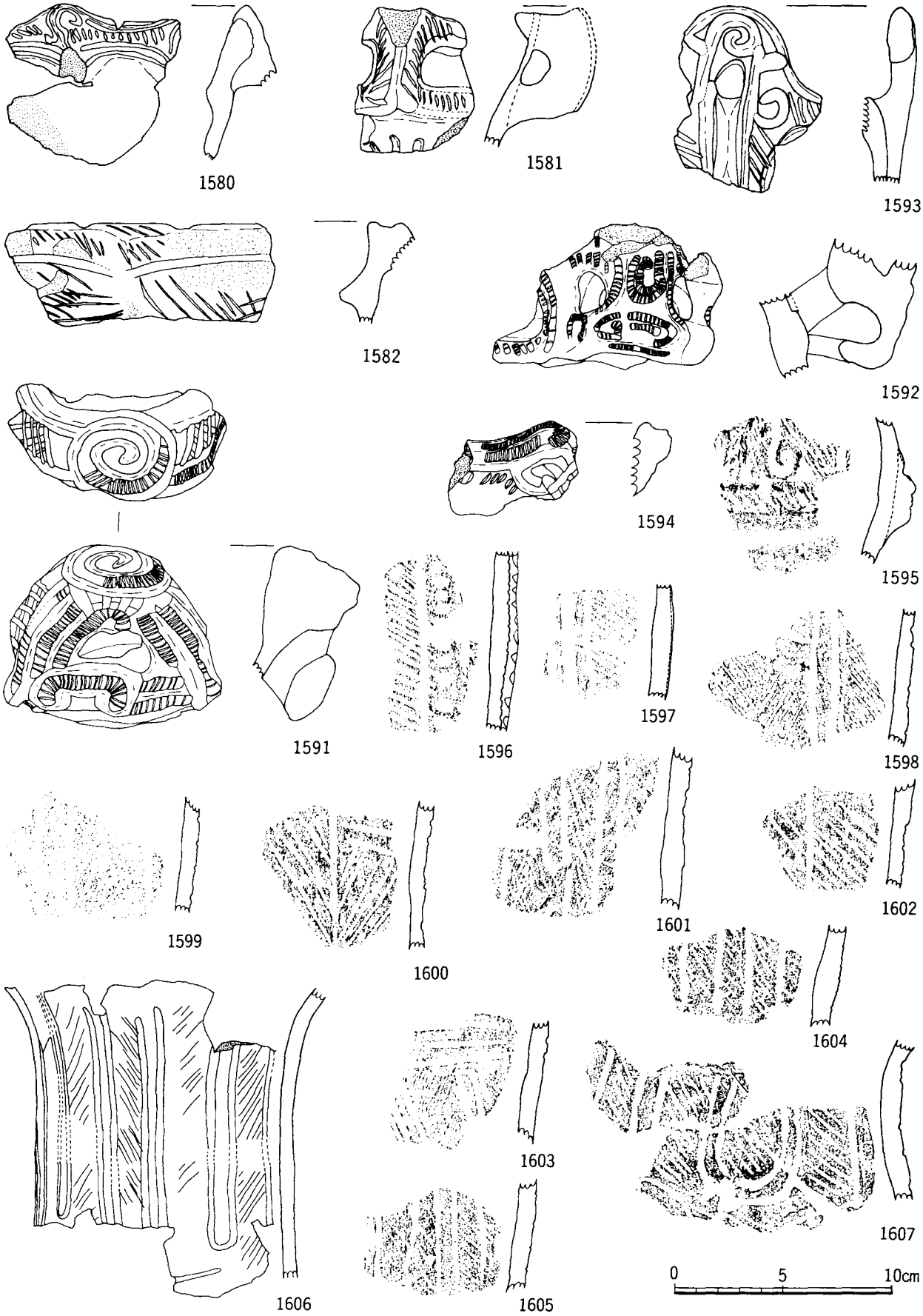
第59図　第４号住居跡出土土器(11)　Ｃ８群



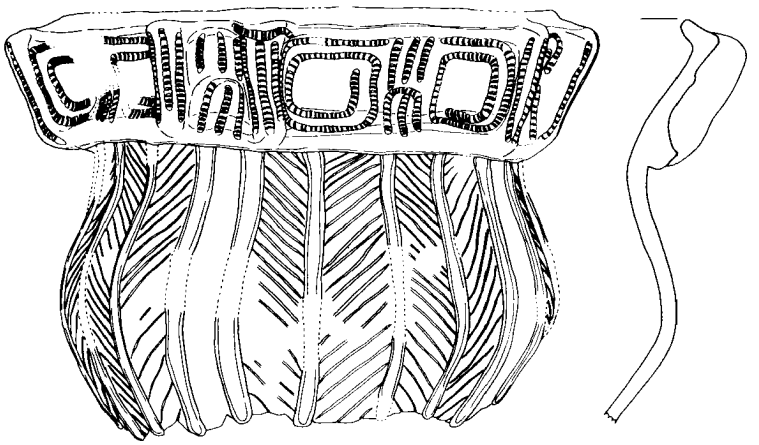
第60図　第４号住居跡出土土器(12)　Ｃ８群



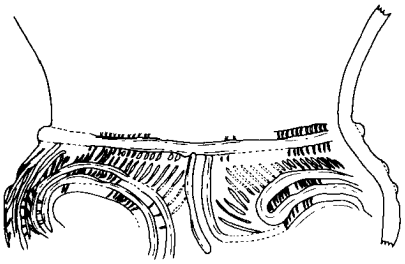
第61図　第４号住居跡出土土器(13)　Ｃ８群　（扇形展開図のみＳ＝１/10　他はＳ＝１/５）



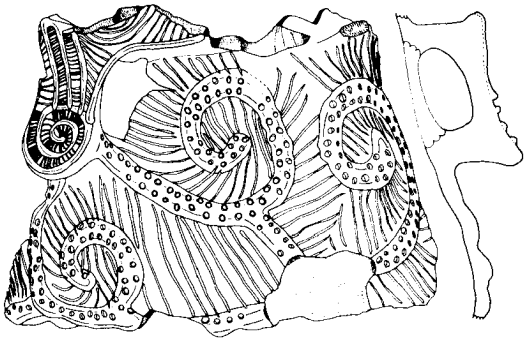
第62図　第４号住居跡出土土器(14)　Ｃ８群



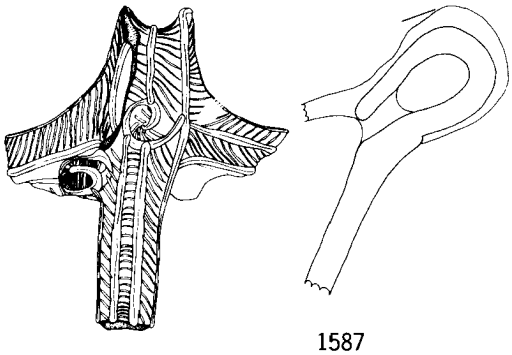
1583



1590

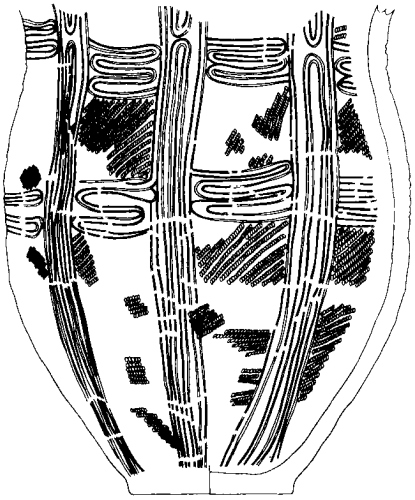


1588



1587

1620

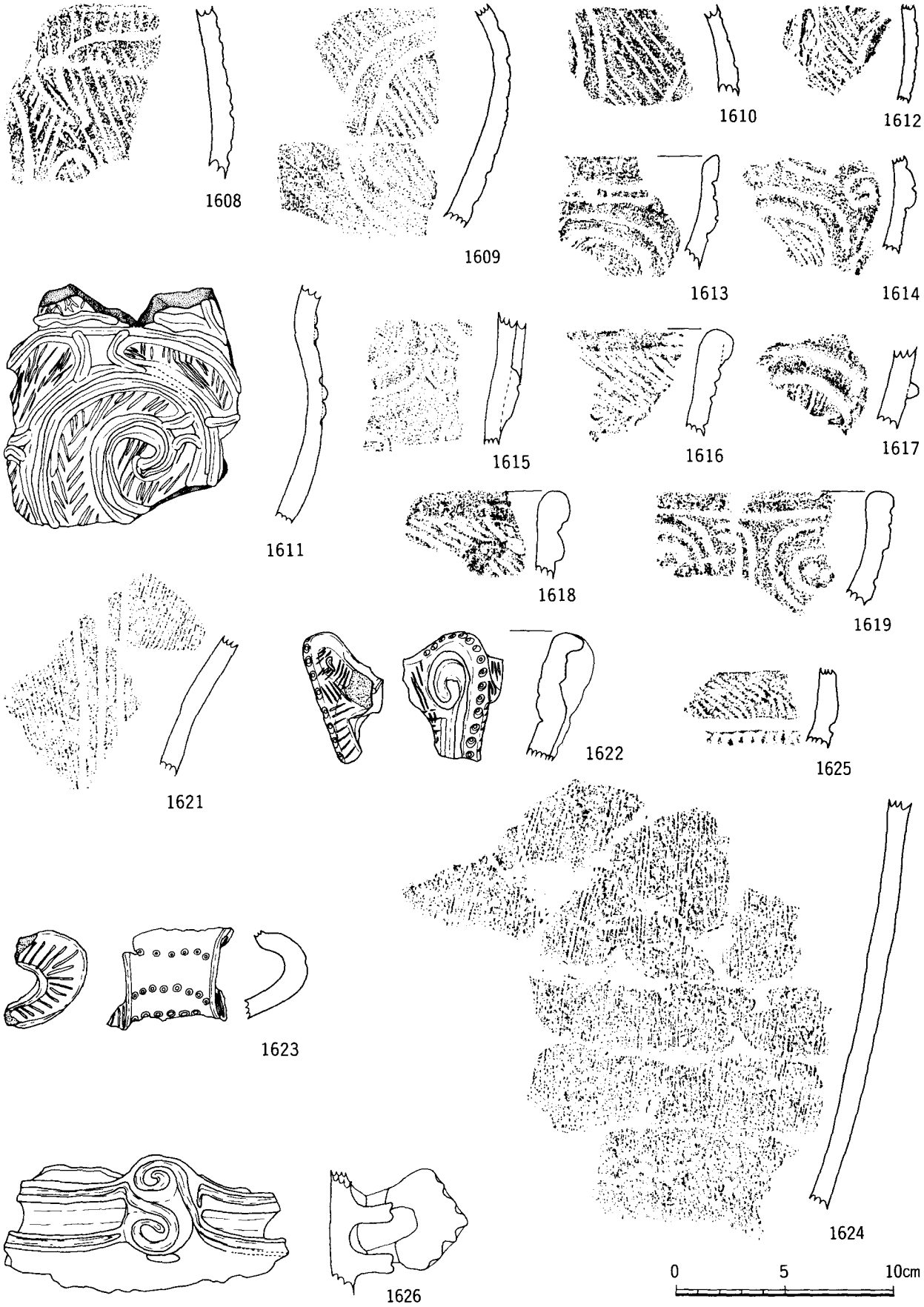


1628

1278

0　5　10　15cm

第63図　第４号住居跡出土土器(15)



第64図　第４号住居跡出土土器(16)　Ｃ８・12・13群

る①種に、(1616)～(1618)は矢羽根状沈線を充塡する②種に、(1619)は刺突文を充塡する③種にそれぞれ属する。(1620)は区画内に横位の櫛描沈線を充塡するもので、④種にあたり、胴部は３本沈線の懸垂文で分割し、間に５本単位の櫛描沈線を引いている。(1621)は同一個体の胴部片である。

(1622)・(1623)はＣ類の把手部分の破片と思われる。

Ｃ12群の土器（第64図　1624）

Ｃ類にあたる櫛描沈線文土器の胴部片が、図示した(1624)の他15点出土している。懸垂文沈線による区画は認められず、全面に縦位の櫛描沈線を引き下ろしている。

Ｃ13群の土器（第63～65図　1625～1630・1278、図版21・26）

型式および小時期不明のものを一括して本群としている。文様構成および器種等による類別に従い記述する。

貼付隆帯をもつ深鉢類破片と考えられるものに(1625)～(1627)がある。(1625)は第１号住居跡出土の(1075)と同一個体の可能性がある。半截竹管による半隆起線上に刻目を施し、区画内にＲＬの縄文を充塡する。(1626)・(1627)は把手部分の破片である。(1626)は口縁を欠損しているが、上下２段の鍔状の貼付隆帯が横位にめぐり、そこに瘤状の橋状把手をつけている。把手付根付近に上下に穿孔を施す。把手の正面上下を90°の角度で平坦に調整し、それぞれ鍔状隆帯の端面に入れた沈線を延ばして渦文を施文する。「大木８ｂ式」に様相が類似する。(1627)は幅の狭い隆帯から橋状把手がつくが、把手は一部を残して欠損しており詳細は不明である。器面には縦位を基本とする櫛描沈線文を施し、隆帯上にも刻目が入る。

沈線文を施す深鉢類に(1278)・(1628)がある。

(1278)は、器厚１cmのバケツ形を呈する深鉢である。口縁径37cmを測る。口縁部文様帯は幅３mmほどの横走する沈線を５mm前後の間隔をおいて平行に14本引く。４本に１本の割合で下向きの渦巻文を同じ位置に配している。頸部以下は無文である。口縁は複合口縁で、端部とともに刻目を入れている。同一個体の破片が15点あり、内１点はＳＢ１より出土している（第22図(1101)）。東海地方では類例が見当らないが、福井県栃川遺跡において、古府式のほか、里木Ⅱ式系土器群や咲畑式系土器群とともに、類似する土器が大量に出土している。越美山系に分布する中期後半の特有の土器と考えられる。[2)]

(1628)は、口縁部を欠損するが、胴部最大径21cm、現存の器高27.5cmを測る。地文は縄文で、半截竹管による半隆起線文に近い平行沈線で施文し、口縁部から胴部まで一体の文様と考えられる。縦位に４条の平行沈線を垂下させ分割するが、中央の２条は口縁部下のくびれ部分でヘアピン状につないでいる。分割された区画には、頸部下と胴部中央に、横位の平行沈線でヘアピンを４回つくるように引き回して施文し、再区画する。施文方法は北陸的であるが、類似するモチーフは類例を確認することができなかった。

浅鉢類の破片と考えられるものに(1629)・(1630)がある。(1629)は口縁部が「く」の字形に内屈し、口端が外反気味に立ち上がる。口縁部は口唇部と屈折部に横位の貼付隆帯を施す。貼付の渦文で区画しており、区画内は横位の沈線が見られる。(1630)は口縁部が「く」の字形に内屈する。横位に２本の沈線を引き、その間にＲＬの縄文を施す。内外面とも赤色顔料が付着する。

Ｃ14群の土器（第65・66図　1631～1646、図版26）

台付鉢の脚台部（Ａ類）と底部（Ｂ類）である。

Ａ類は(1631)～(1637)がある。(1631)～(1634)は脚台部を欠損する底部である。(1631)は胴部文様の一部が確認できるが、微隆帯で分割した区画内に大柄な渦文を微隆帯で描き、間にも不整形の区画をつくる。区画内は箆状工具による沈線文を充塡する。脚は(1631)・(1633)が４本、(1634)が６本、(1632)が７本つく。(1635)～(1637)は底部を欠損する脚台部である。(1635)は脚台部の高さ９㎝、裾部径11.5㎝を測る。４本の脚をもち、間に楕円形の透かし孔が入る。また、脚の下部に直径1.5㎝の円形の透かし孔を入れている。(1636)は脚台裾部径14㎝を測り、６本の脚をもつ。(1637)は脚台裾部径12㎝で、６本脚と推定される。なお、他に40点のＡ類破片が出土している。Ａ類については、本住居跡ではＣ８群土器で胴部器形が「太鼓形」を呈するものに付属すると推定される。

Ｂ類は(1638)～(1646)がある。(1638)のように胴部が大きく開いてつくものから、(1643)のように内傾気味に直立してつくものまである。(1638)～(1644)は、(1644)がわずかに上げ底気味であるのを除くと平底である。底部圧痕は見られない。(1645)・(1646)は上げ底である。(1645)は本住居跡の床面下に塗り込められたような状態で検出された。胴部に縄文の施文が見られ、底部の形態も考慮すれば、「船元式」系と考えられる。(1646)も胴部に縦位の縄文が見られる。なお、他に31点のＢ類破片が出土している。

1）　泉拓良「咲畑・醍醐式土器様式」(1988小学館『縄文土器大観 3 中期II』所収）による。

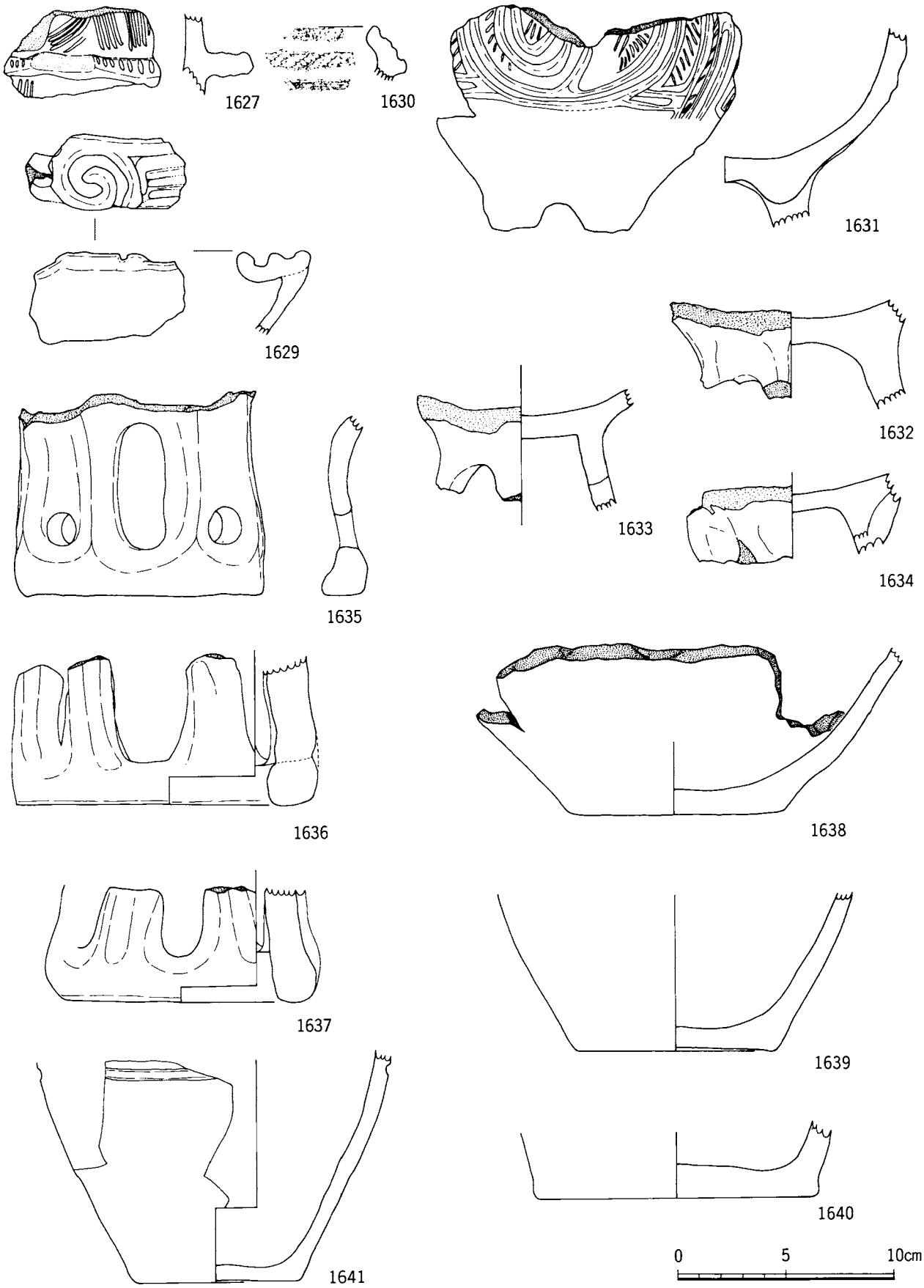
2）　工藤俊樹氏のご教示による。

（武藤貞昭）

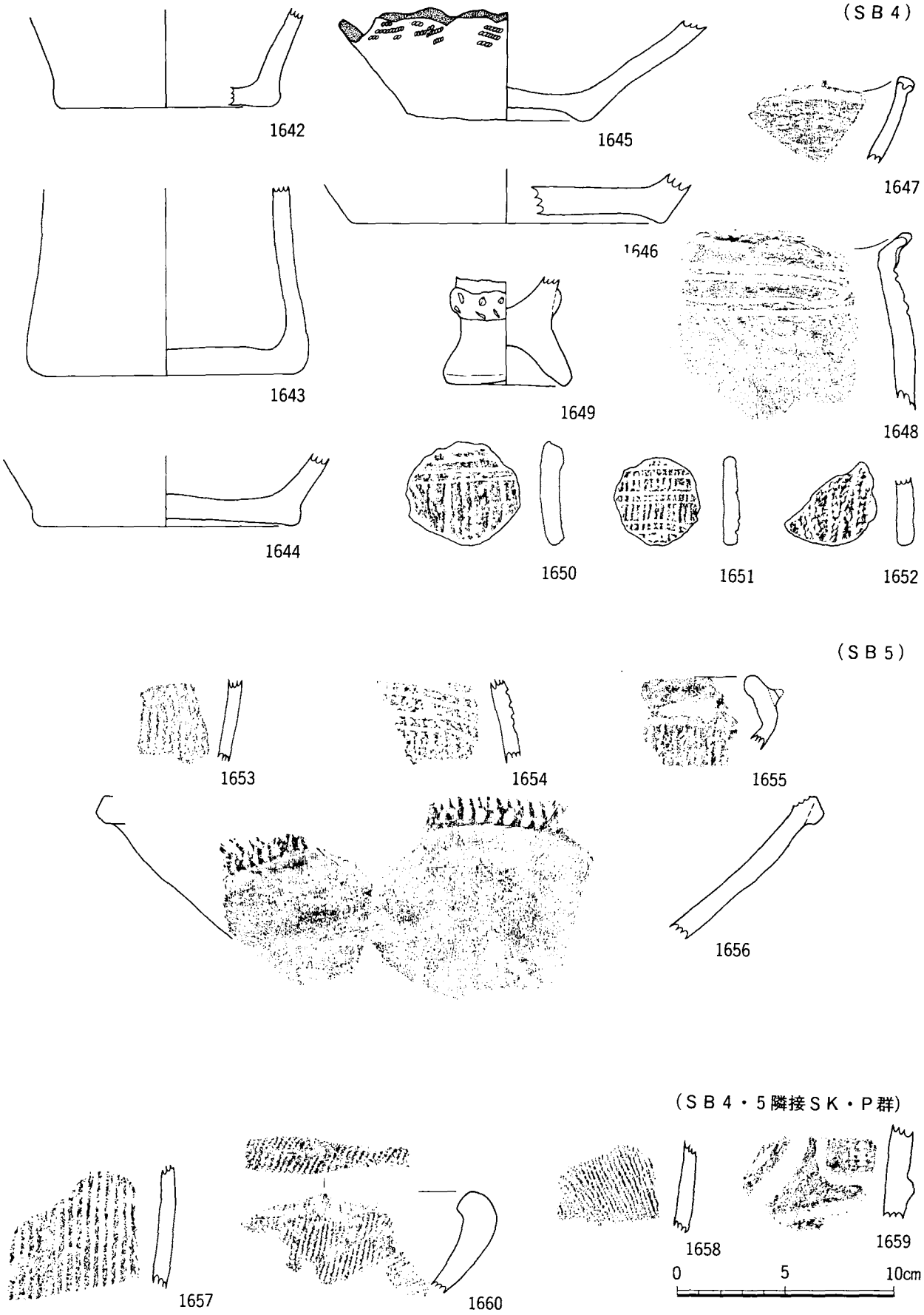
晩期の土器（第66図　1647・1648）

晩期前葉の土器片が２点覆土から出土している。２点とも混入品であろう。(1647)は端部に棒状の浮文と沈線によって加飾された浅鉢である。(1648)は頸部に横長の眼鏡状の文様が認められ、器形は鉢であろう。２点はその形態から「御経塚式」に類似する。

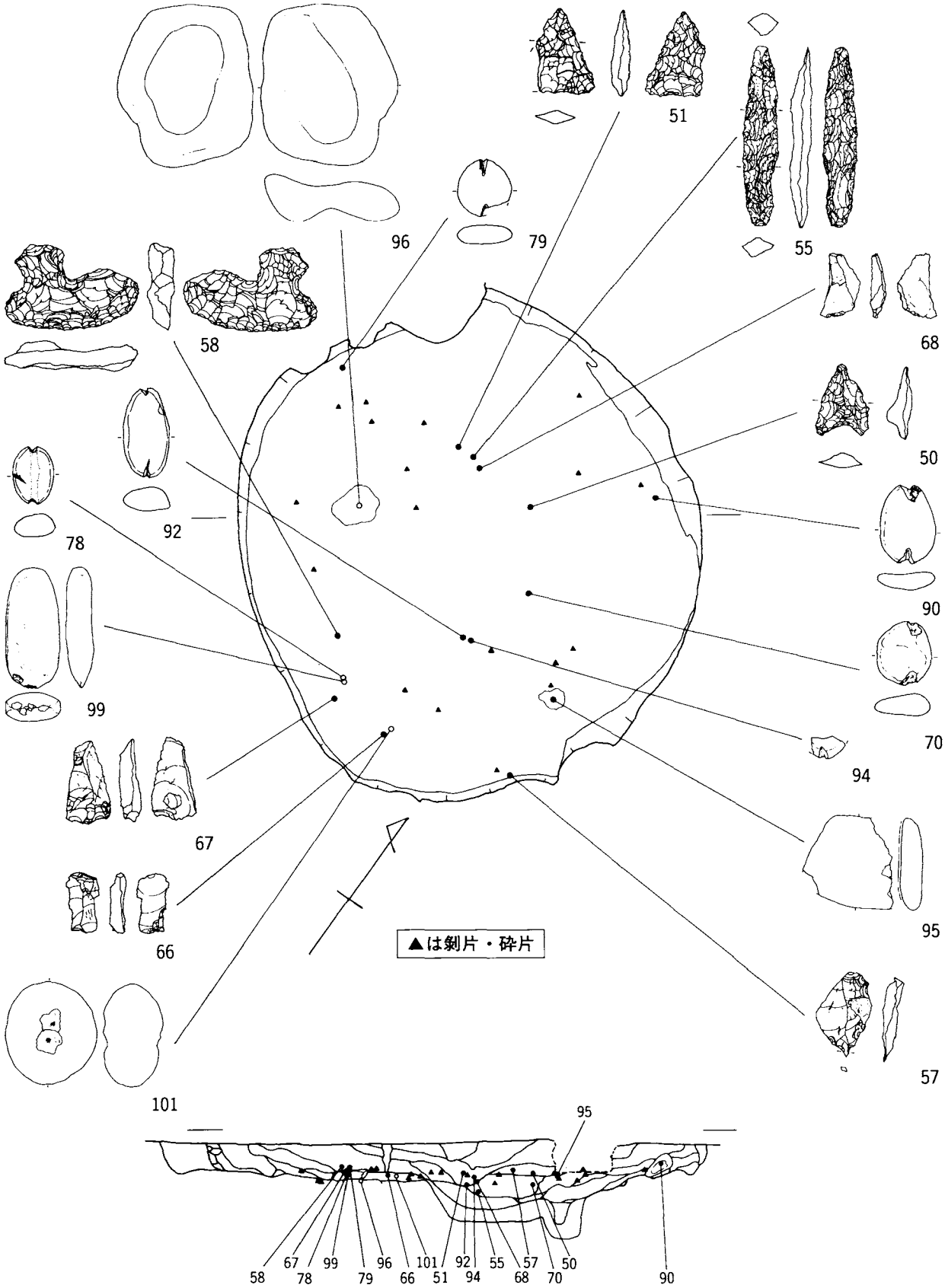
（藤田英博）



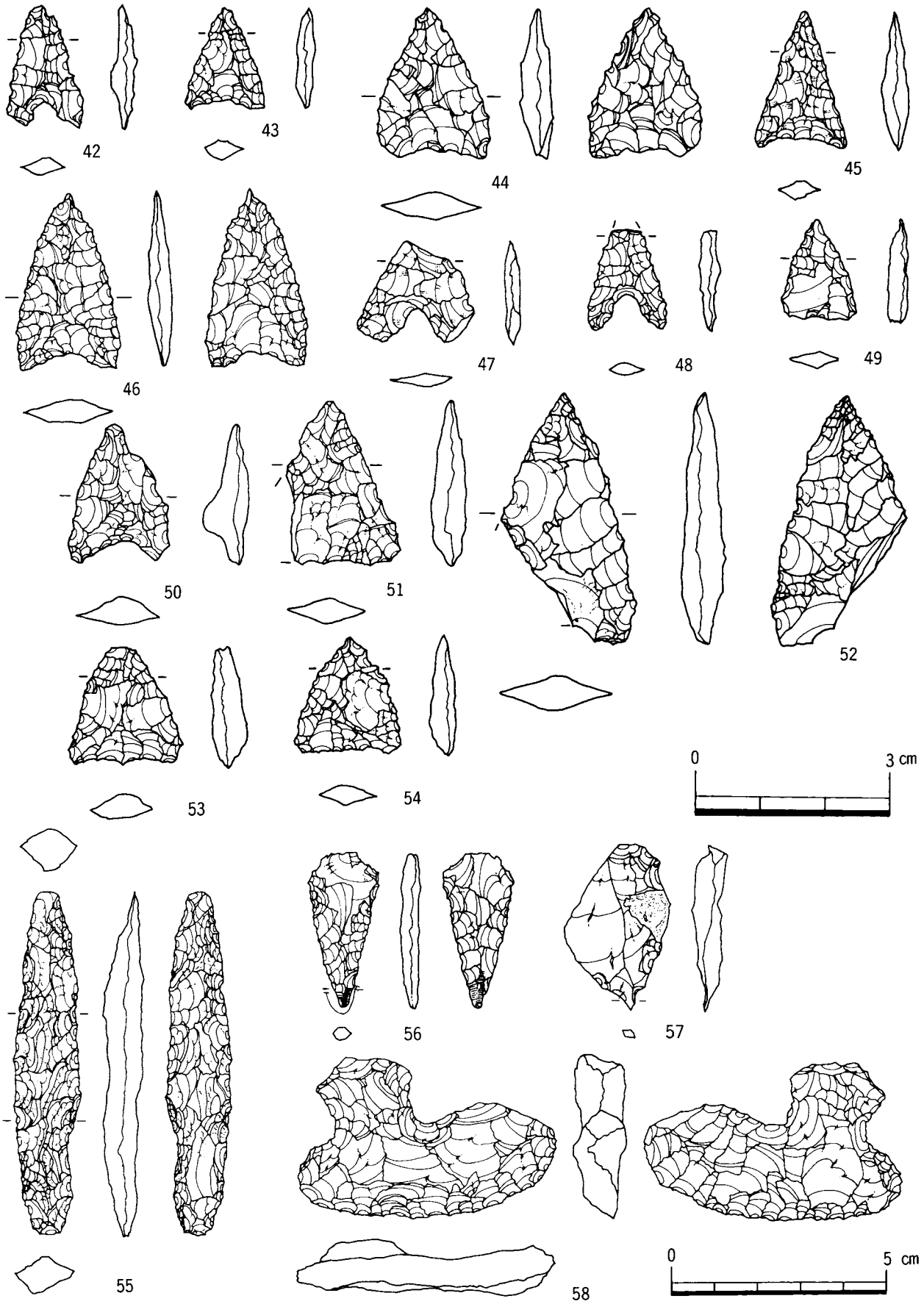
第65図　第４号住居跡出土土器(17)　C13・14群



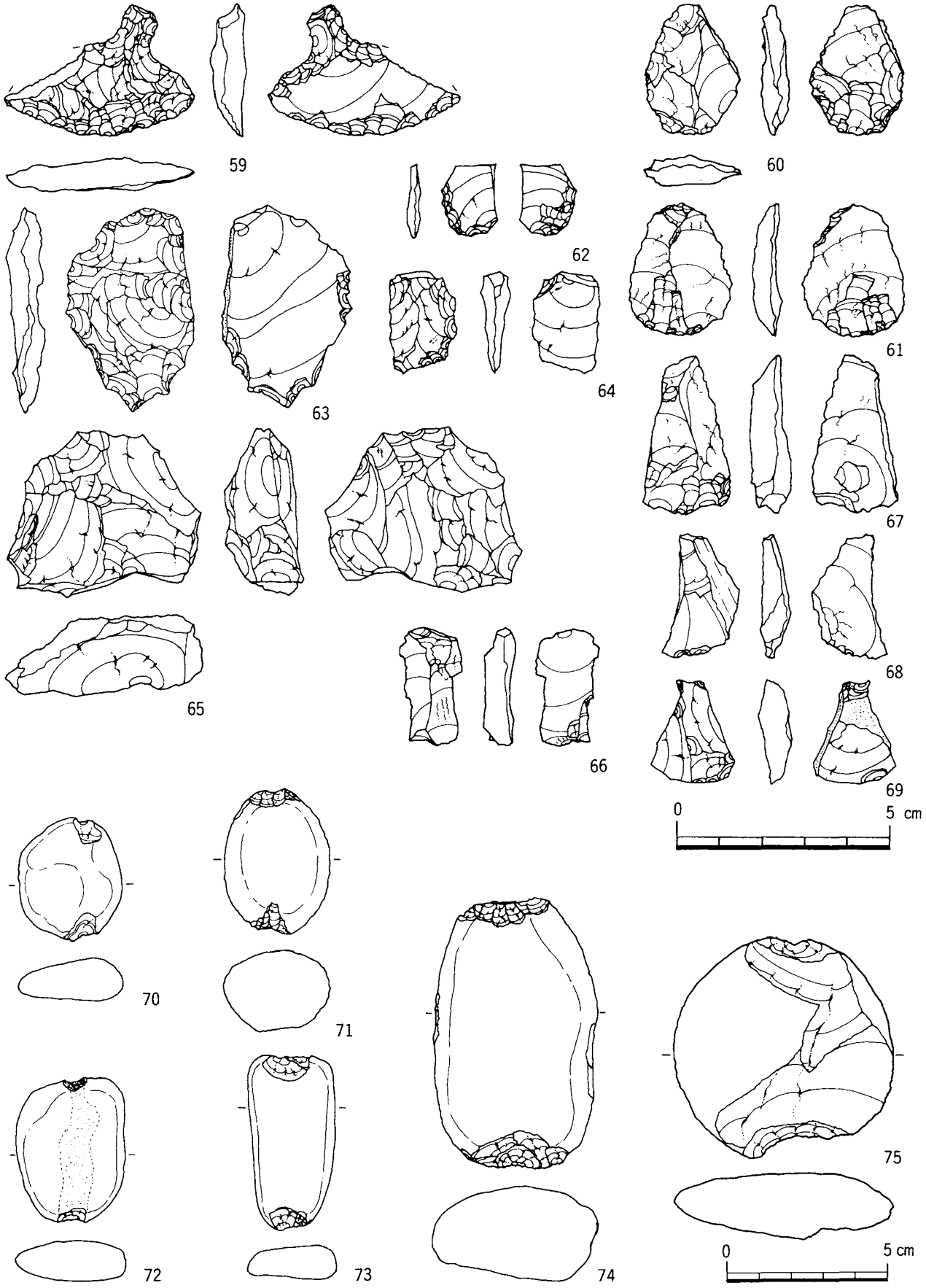
第66図　第４・５号住居跡等出土土器・土製品



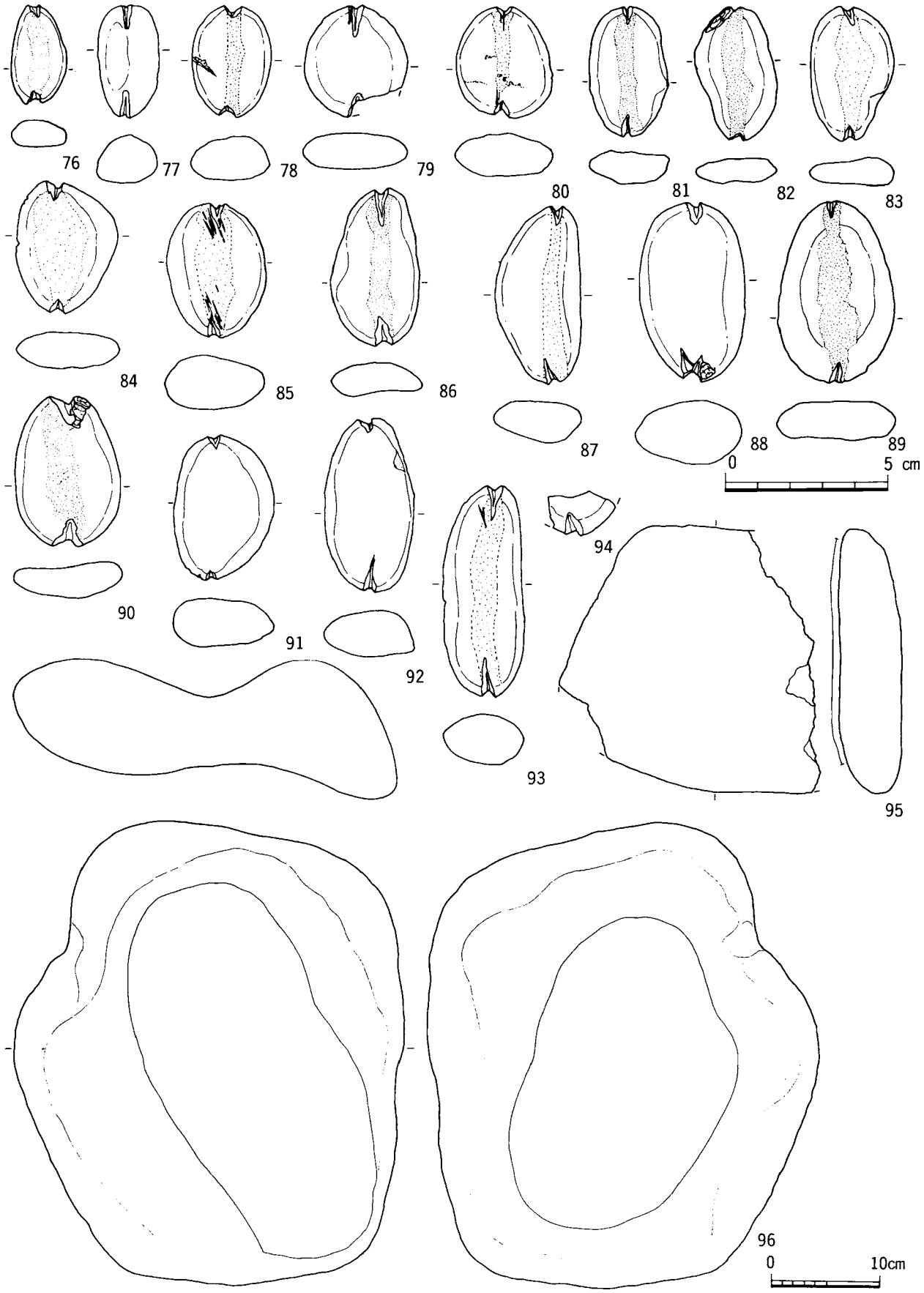
第67図　ＳＢ４　石器出土状況図



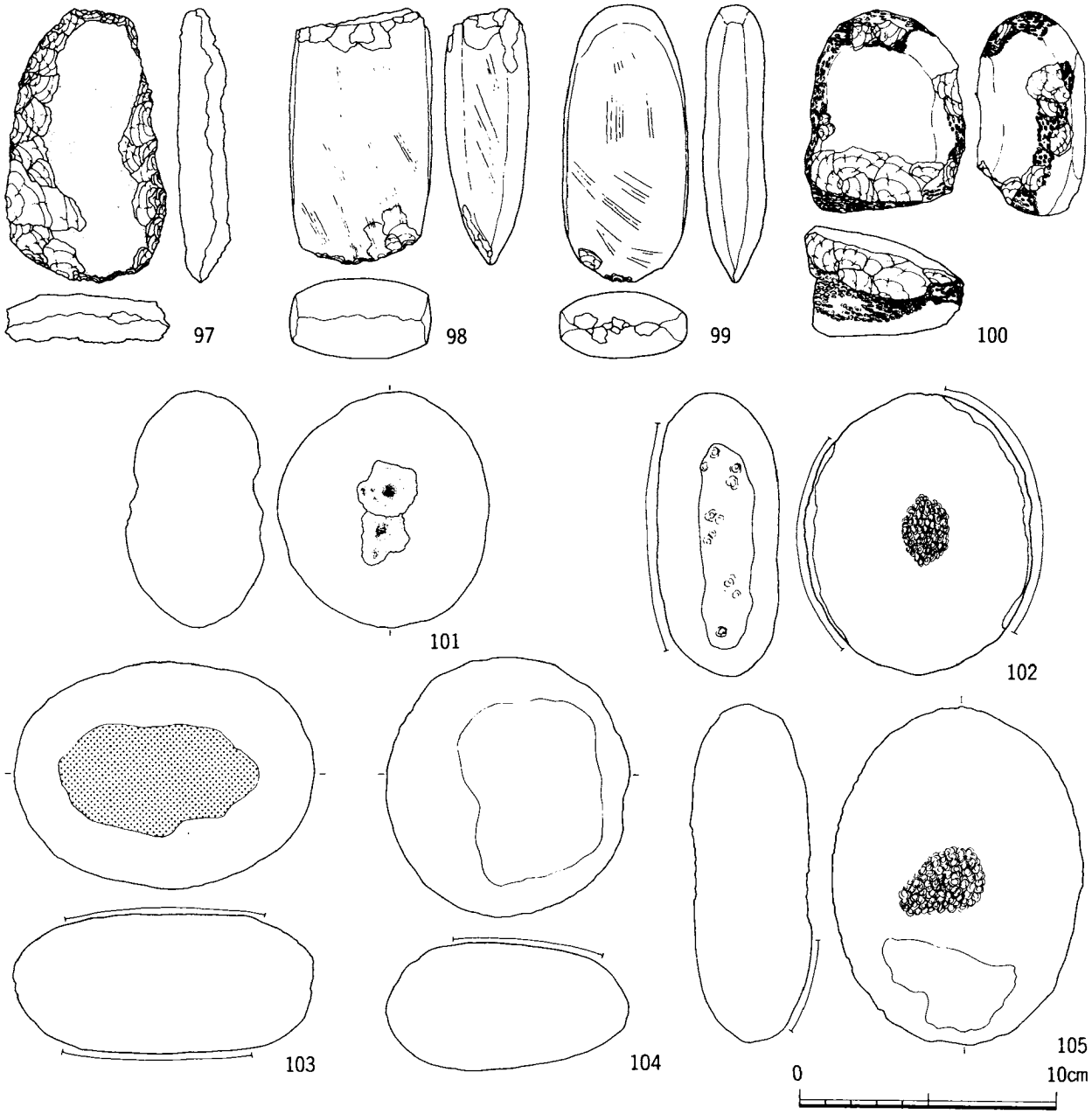
第68図　第４号住居跡出土石器(1)



第69図　第４号住居跡出土石器(2)



第70図　第4号住居跡出土石器(3)



第71図　第４号住居跡出土石器(4)

②土製品

小型土器（第66図　1649、図版26）

(1649)は非常に小型の台付鉢の台部と考えられる。台の取り付け部に貼付隆帯をめぐらし、隆帯上には交互２列の刺突を施す。台部に透かし孔はない。底部を含む現高4.5cm、台裾部径約６cmを測る。

土製円盤（第66図　1650～1652、図版21）

土器片を円盤状に打ち欠き、側縁を磨き整えたものであり、３点が出土している。(1650)は、最大長4.7cm、最大幅5.2cm、最大厚1.05cm、重量25gを測る。土器片は「船元IV式」である。(1651)は、最大長4.0cm、最大幅3.9cm、最大厚0.71cm、重量13gを測る。土器片は「里木II式」である。

(1652)は約半分を欠損しているが、長さ・幅の推定最大値が約4.5cm、最大厚0.79cm、現存重量12gを測る。土器片は縄文を施文している。

（武藤貞昭）

③石器（第67～71図、図版37～39）

今回調査された住居跡の中で、最も多くの石器が出土している。その内訳は、石鏃16点(42～54)、石槍1点(55)、石錐2点(56・57)、石匙2点(58・59)、削器3点(60～62)、ピエス・エスキーユ2点、ヘラ形石器5点(67～69)、打製石斧1点(97)、磨製石斧2点(98・99)、石核1点(65)、2次加工の見られる剥片4点(63・64)、使用痕の見られる剥片9点、未製品4点、剥片・砕片248点(66)、打欠石錘9点(70～75)、切目石錘27点(76～94)、磨石・凹石6点(100～105)、石皿2点(95・96)である。

出土状況を第67図に示した。図では覆土の上層から出土した石器は省略した。図示した石器のうち、(78)の切目石錘・(99)の磨製石斧・(101)の凹石は住居跡の床面直上から出土している。また、(96)の石皿は床に埋め込まれた形で出土している。(55)の石槍は、出土位置が第4号住居跡の下の土坑であり、第4号住居の時代よりも古いものであると考えられる。

（千藤克彦）

(4)C7・8群土器について

第4号住居跡（SB4）出土土器の主体的存在であるC7群およびC8群土器について、若干の検討を加えておきたい。

両群の大別

両土器群の資料は、増子康真氏による東海西部地域の中期後半の編年[1]によれば、中富III式（B類）から神明式までの諸型式に相当する。ただ、徳山という地域的特性と出土資料の複雑な様相も考慮しながら、共通要素や異質要素を検討することで、2群に大別した。

両群土器は、本来の系統は別ではないかと考えられるものの、異質と考えられる要素と共通する要素が複雑な組み合わせをもって混在している。しかし、原則的な器形および文様モチーフを重視すると、次のようになる。

C7群は、口縁部付近が極端に張り出し、頸部がくびれるキャリパー形の深鉢である。口縁部に渦巻文を中心に円弧文を細い隆線（そうめん状貼付）や沈線で描く文様帯をもつ。頸部から胴上部にかけて連弧文沈線を数本引く。名称の浸透度からいえば、広義の咲畑式土器であり、狭義の咲畑式A類土器に該当する。増子氏の編年では、中富III式B類・IV式・V式・神明式1

類Ａの各型式に類似する。

Ｃ８群は、口縁部の文様帯が前面に立体化したもので、口縁部上下２段の厚い貼付隆帯をベースにした橋状把手や装飾的な把手を発達させた深鉢である。胴部文様は、基本的に縦位に展開し、隆線あるいは沈線の懸垂文で分割し、矢羽根状沈線を充塡するものと、唐草文系の大柄渦巻文が展開するものとの２種類がある。増子氏の編年では、神明式１類Ｂに類似する。

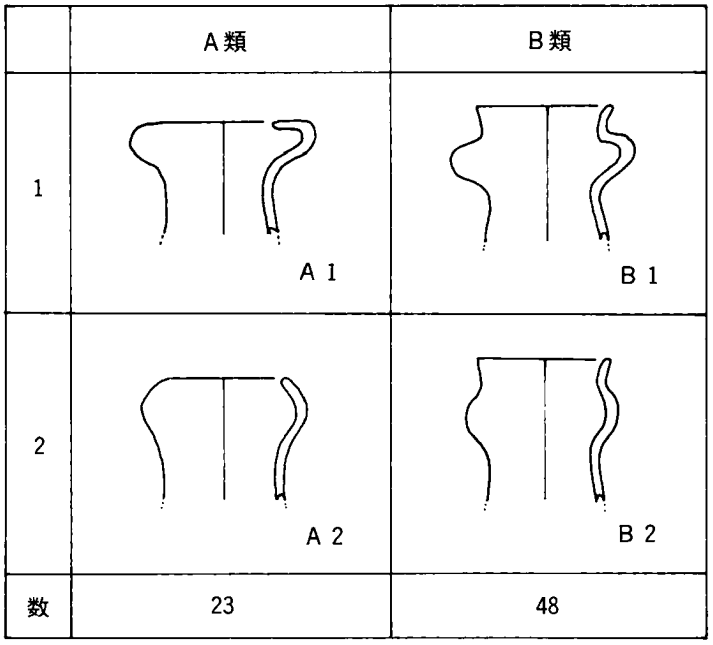
器形と文様モチーフから大別した両群について、要素別に見ていくことにする。

Ｃ７群土器の要素別概要

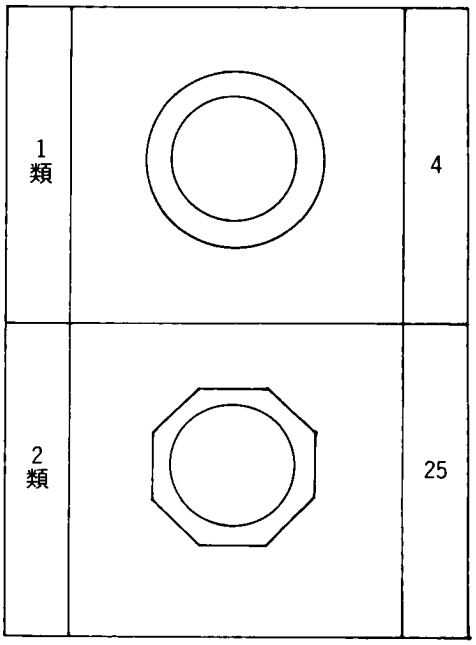
①　器形

本報告の分類では、張り出した口縁部が内彎するもの（Ａ類）と、内彎した口縁部が外反気味に立ち上がるもの（Ｂ類）に分けた。Ｃ類も口縁部の器形ではＡ・Ｂどちらかの類に二分できる。

さらに口縁部の張り出し方の強弱によって細分すると、第72図のようになる。Ａ類・Ｂ類とも張り出し方の強いものと弱いものとがあるが、文様や施文方法などを検討する（後述）と、両類とも張り出しの強いものから弱いものへ変遷すると考えられる。ただ、Ａ類では、里木II式系の影響が強い土器については、全体に張り出しは弱い。しかし、個体数も少なく小片が中心であるため、段階の区別は困難であった。(1481)は沈線も雑で渦巻文がなく、水滴状の刺突列を垂下させる点を退化ととらえるなら、Ａ２段階と考えたい。



第72図　Ｃ７群土器の立面形分類



第73図　Ｃ７群土器の平面形分類

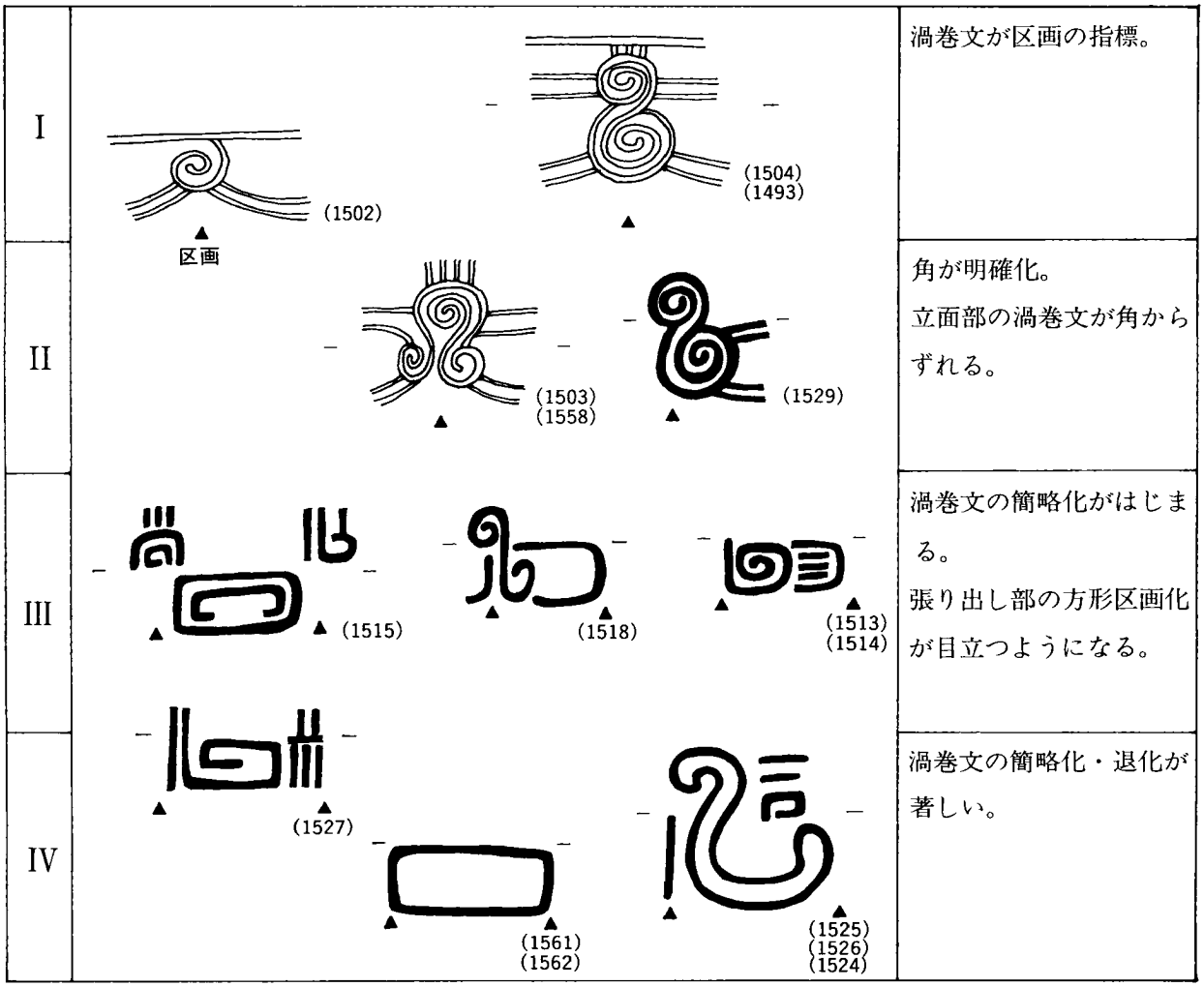
全体的に、徳山の地域的特性から考えて、Ａ類よりもＢ類が中心になっていったと考えられる。ちなみにＡ類とＢ類の割合は１：２である。

一方、視点を口縁張り出し部の平面形に移すと、円形を呈するもの（１類）と多角形を呈するもの（２類）とがある。（第73図）

平面形が確認できる個体数で見ると、29個体中25個体が２類で、多角形化は地域的特性を示すものと考えられる。なお、角数が確認できる16個体で見ると、８角形が10個体と多数を占め、10角形が４個体、12角形が２個体ある。

②　口縁部文様の構成

器形を検討した際に、本群の多数派においては、口縁部の張り出し部が多角形であることに大きな特徴があった。角をもつということは、口縁部の文様を単位に区切るという意図がある。そのとき文様として何を位置づけているかであるが、１つの指標となるのが渦巻文である。ＳＢ４出土のＣ７群土器に表現されている渦巻文の主なものを、模式図として変遷をふまえて示



第74図　Ｃ７群土器の渦巻文の変遷模式図　（白ヌキは貼付、ベタは押し引きを含む沈線）

したのが、第74図である。

渦巻文については、従来から指摘されているように、１本の凸帯あるいは沈線で表現されるものと、２本の凸帯あるいは沈線がからむ形で表現されるものの両者が見られる[2)]。

また、渦巻が１つの場合と、２つの渦巻がＳ字状（逆Ｓ字状が多い）に連結している場合がある。本群では内彎した口縁部がさらに立ち上がるタイプ（Ｂ類）が多いせいか、渦文を配し得る箇所が、直立部・張り出し部の平面（テラス部分）・張り出し部の立面の３ヵ所があり、必然的に連結渦巻文が多くなっている。中には、交互に渦巻の大きさや文様パターンを変えた意匠も見られる（1504・1515・1530）。

器形が多角形の場合、角が先鋭であるほど、渦文の配置にズレが生じている。

角のつかない円形の(1493)や角がさほど鋭くない(1504)においては、ちょうど角部分に縦に逆Ｓ字状の連結渦巻文が配置される。しかし、角がはっきりしている個体においては、張り出し部の平面（テラス部分）の渦巻は角部分に描き、それに連結する立面部分の渦巻を横にずらしている。(1503)・(1558)のように、角をはさんで左右に２つの渦巻文を対置させるものと、(1529)・(1518)のように、角の右へ配するもの、そして(1530)のように角の左へ配するものの３種類が見られる。

その後の渦巻文の簡略化から見ていくと、以下のようになる。

１つは、渦巻文が口縁張り出し部の方形区画への組み入れと消滅化であり、最終的には(1561)・(1562)のような、神明式１類Ａのタイプになる。もう１つは、(1524)～(1526)に見られるような、簡略化した逆Ｓ字文への変化である。このタイプは、器形から見ると、口縁部の張り出しはゆるやか（段階２）になる。なお、後者の、方形区画化とやや異なる連結渦巻文のくずれた逆Ｓ字文は、各務原市炉畑遺跡のＳＢ６炉跡出土土器に類似する。また、関市塚原遺跡のＳＢ13・ＳＢ17出土の、島崎Ⅲ式とされる土器群の口縁部文様とも類似性（関連性）が感じられる。

③　施文手法

まず第１に、口縁部文様帯のモチーフがどのような施文方法によってなされているかである。施文方法の差異が、時間的な先後関係を反映すると考えるか、同時期のバラエティーととらえるか、むずかしい問題である。

まず、Ｃ７群土器の文様モチーフが、細い粘土紐を貼り付けた隆帯（本報告では「そうめん状貼付」とよんでいる）で描かれるか、沈線で描かれるかがポイントである。さらに付随して、爪形のような連続刺突文が密接な関連をもつと考えられる。

そうめん状貼付と沈線の問題は、他の遺跡においても報告されているとおり、両手法が同時に存在すると思われる。ただ、器形や手法から判断して、そうめん状貼付の方が、沈線より早く姿を消しているように感じられる。器形でいえば段階２から、渦文の変遷でいえば段階Ⅲか

らは、そうめん状貼付による文様モチーフのものは見当らなくなる。

そうめん状貼付と密接な関連をもつのが、連続刺突文である。観察の結果、大別すると2種類の形態がある。1つは、貼付の裾に沈線を引き、その上から爪形の刺突を連続させるもの(手法a)である。もう1つは、「押し引き」とよんでいる手法で、施文具を器壁に密着させたまま小刻みに押したり引いたりして、爪形を連続させるもの（手法b）である。ともに半截竹管状工具の外側を利用して施文している。

手法aを施すものには、(1493)・(1502)・(1527)などがある。手法bは多く、(1503)・(1504)・(1506)・(1513)・(1514)・(1515)・(1528)・(1558)などがある。手法の違いによる先後関係はないと思われるが、手法bの場合、(1558)のように非常に小刻みで密な施文のしかたをする方が、(1528)のように間隔のある粗い施文のしかたをするものより、古いのではないかと考えられる。器形から見ると、(1558)は段階1であり、(1528)は段階2である。総じて押し引きが丁寧なものは、そうめん状貼付を施す土器に見受けられる。

本来、爪形の連続刺突文は、貼付を器壁に密着させる目的で施されたのが、1つの文様として発達したと考えられる。必然的に、そうめん状貼付に伴って多用されるが、貼付ではなく、押し引きによる沈線でモチーフを描く(1513)・(1514)・(1518)・(1528)などもある。

第2に、口縁部文様帯の区画内にどのような文様を充塡しているかである。

充塡文様は多種にわたり、主なものをまとめると次のようになる。

・縄文を施すもの；(1514)・(1518)・(1530)

・刺突を施すもの；(1502)・(1515)

・格子目状に貼付を施すもの；(1503)・(1559)

・細い半截竹管状工具で押し引きするもの；(1492)・(1493)・(1504)・(1510)・(1516)・(1531)・(1558)・(1559)・(1560)

・押し引きによる文様を施すもの；(1513)・(1514)・(1515)・(1516)・(1528)

・ヘラ状工具による沈線を施すもの；(1524)・(1525)・(1527)・(1528)・(1529)・(1537)

・条線を施すもの；(1526)

複数の文様を採用している土器も数点あり、多様な展開を示している。時間的な先後関係は明確にし得ないが、器形や文様モチーフから、ヘラ状工具による沈線および条線を充塡する土器は、他に比べ新しいタイプと考えられる。また、[そうめん状貼付＋連続刺突文(押し引き)＋格子目状のそうめん状貼付] の土器や [そうめん状貼付＋連続刺突文（押し引き)＋細い半截竹管状工具による押し引き] の土器は、本遺跡の地域的特性を最もよく示す施文と考えられ、段階1の代表的な一群ととらえることができよう。

④　その他の要素

器形・文様構成・施文手法といった口縁部の諸要素から、ＳＢ４のＣ７群土器を検討してき

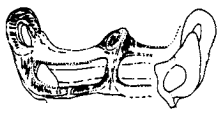
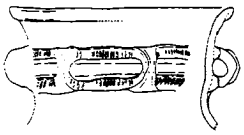
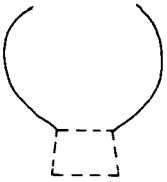
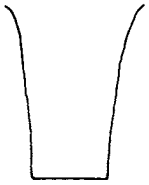
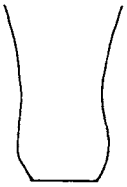
たが、その他の要素でやや異質と考えられる特徴についてふれておきたい。

１つは、胴部文様である。Ｃ７群土器には、頸部から胴上部にかけて、連弧文沈線を典型とする沈線が横走するというメルクマールが存在する。しかし、Ｃ７群Ｃ類として分類した(1559)・(1560)・(1561)は、大柄な渦巻文が胴部に施されたり、縦位分割の胴部文様であったりする。(1561)は口縁部文様からも新しくなると考えられるが、(1559)・(1560)は、口縁部器形や文様からＣ７群の中心的な段階と考えられる。また、３点ともＣ８群から顕著になる脚台が付く台付鉢である。(1560)は把手が発達し、Ｃ８群に近い特徴も合わせもっている。こういった事実は、バラエティーの存在という、この時期の徳山の地域的特性をあらわしているのではないかと考える。

第２は、口縁部文様帯において発達した把手である。(1554)～(1558)は、形態や施文において、Ｃ８群の把手とはやや趣きを異にしている。Ｃ７群土器の段階的変遷の過程において出現した１つのバリエーションととらえたい。

それに比べ、(1565)は、Ｃ７群の器形にＣ８群の把手がついた土器である。(1565)に近い形態をもつのが(1537)であるが、ともにＣ７群とＣ８群の折衷的な存在と考えられ、Ｃ７群の後半はＣ８群と併行関係にあることが裏付けられる。

Ｃ８群土器の要素別概要

口縁部形態		胴部器形		
Ａ類	Ｂ類	Ⅰ	Ⅱ	(Ⅱ′)
 1573	 1567			
Ａ－Ⅰ	(1572)・(1573)・(1584＋1585＋1586)			
Ａ－Ⅱ	(1574)・(1576)・(1589)			
Ｂ－Ⅰ	(1567)・(1568)			
Ｂ－Ⅱ	(1566)・(1569)・(1571)			

第75図　Ｃ８群土器の器形分類

①　器形　（第75図）

本報告では、３類に分けたが、口縁部の様相で見た場合、基本的には把手を中心に前面に立体化した口縁部文様帯の上に、外反気味に直立する口縁をもつ土器（Ｂ類）と、もたない土器（Ａ類）に二分できる。

胴部の器形で見た場合は、胴中央部が大きく張る「太鼓形」の土器（Ｉ）とストレートな筒状の土器（II）に二分できる[3]。(1566)・(1589)は胴下部で下ぶくれする特異な器形であるが、ひとまずIIタイプのバリエーションと考えておきたい。また、Ｉタイプには(1584＋1585＋1586)のように台付鉢になる土器がかなりあると考えられる。

口縁部形態と胴部器形の組み合わせは、すべてのパターンが存在する。

Ａ類とＢ類のもう１つの異なる点は、Ａ類の土器には、口縁部の内側に「蓋受け状の段」をめぐらせている点である。段は粘土紐を貼りつけて裾を調整し、三角形の断面を呈するものが多い。

②　口縁部文様帯の形態

立体化した口縁部文様帯の形態は多様である。把手のつき方で大別すれば、均等でシンプルな橋状把手の形態（Ｉ）と、装飾的な橋状把手の形態（II）になる。

タイプＩには(1566)・(1567)・(1568)・(1569)・(1576)・(1577)・(1578)などがある。

タイプIIは多様で、(1572)・(1573)・(1574)・(1584～1586)などは、一対の装飾的な把手が対峙する形態をとる。(1570)・(1571)・(1575)は、１つおきに形態の異なる把手を配置するものと考えられる。特異なものに(1587＋1588)・(1589)がある。概して、タイプIIの方がそうめん状貼付や渦文の存在から古手の印象を受ける。

③　口縁部文様帯の施文手法

大別すると２種類ある。

１つは、そうめん状貼付によって縁取りを施し、その中にヘラ沈線を充塡するものである。把手の角あるいは途中につくられる瘤状の部分などに、縁取りのそうめん状貼付が渦文を形成するものが多い。

それに対して、そうめん状貼付による縁取りを施さず、ヘラ沈線を引くだけのものは、渦文が存在しない。

(1587＋1588)は、形態的にも特異であったが、施文手法においても、Ｃ７群に見られる押し引きによる連続刺突文がそうめん状貼付間に施される。

施文手法の違いが、時間的な先後関係を示している可能性もある。

なお、胴部文様については様々で、口縁部文様帯の形態および施文手法との関連性はつかめない。概して古手の印象を受けるものは、貼付（隆帯）によるモチーフをもつが、それ以上は言及できない。

両群の関係

ＳＢ４のＣ７群およびＣ８群土器について、不十分ながらいくつかの要素から検討を加えてみた。ＳＢ４への土器廃棄が何回かにわたることはまちがいなく、土器の微妙な差異はその時間差を反映している面も少なからずあると考えられる。最初にもふれたとおり、両群土器は祖系となる土器は別のものと判断したが、時期的に共存したものと考えられる。Ｃ７群の方がＣ８群より早く出現したことはまちがいないが、モチーフ的にはまったく異なるものの、そうめん状貼付を施す共通要素に注目したい。

両群の土器は、折衷的な土器もつくりながら、それぞれの祖系的要素を守りながら、形態・施文手法・文様などの簡略化（退化）の歩みをたどっている。

なお、今回の検討は、力量不足はもちろんのこと、出土状況の把握に不十分な点もある。そのため出土土器の変遷図を提示することはさしひかえた。今後の調査例および各方面からのご指摘をもとに、再検討しなければならない部分が多々あると考えている。

1）　参考文献に記載したように、長年にわたるいくつかの論考があるが、現段階では、「近畿地方縄文中期後半土器編年の問題点－東海西部との対比から－」（1988『求心能道・巽三郎先生古希記念論集』所収）の編年試案による。

2）　泉拓良「西日本縄文土器再考－近畿地方縄文中期後半を中心に－」（1982『考古学論考・小林行雄博士古希記念論文集』所収）による。

3）　神明式については、最近、吉田英敏氏により、可児市宮之脇遺跡Ｂ地点の出土資料について、器形からの分析・考察がなされている（1994可児市教育委員会『川合遺跡群』）。

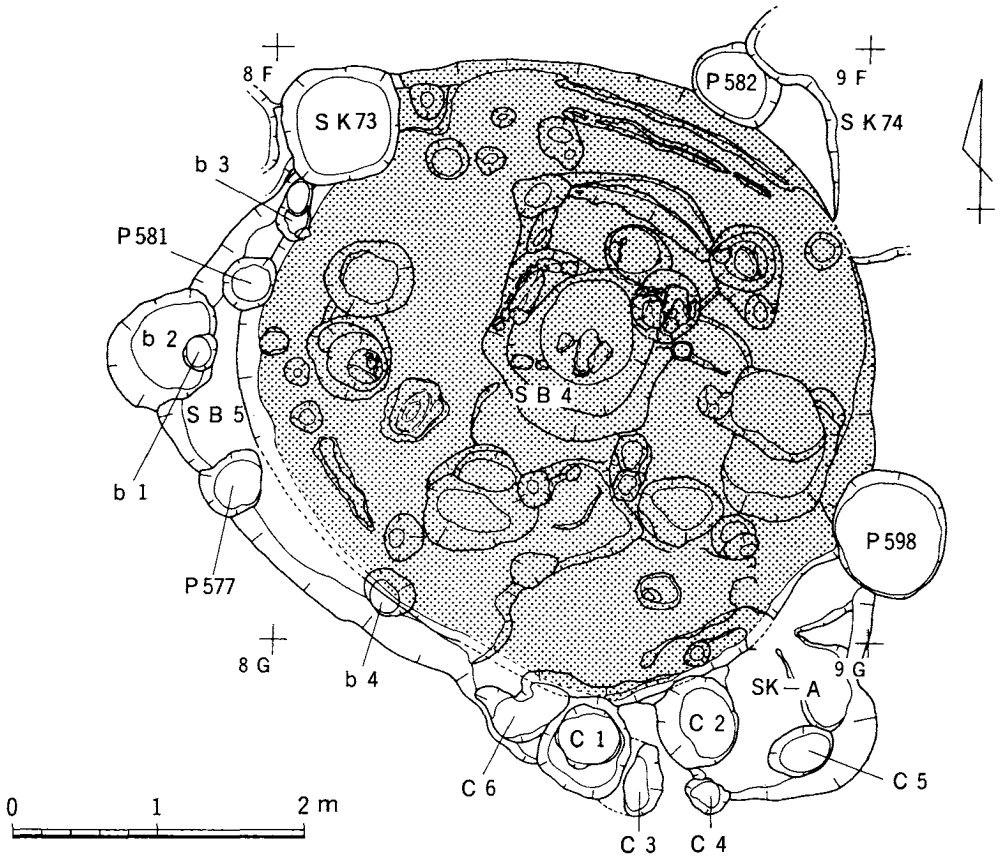
（武藤貞昭）

５．第５号住居跡　（ＳＢ５）

(1)遺　　構（第76図）

８～９－Ｆグリッドに位置する。本住居跡は大部分が第４号住居跡と重複する。また、本住居の方が先に構築されたため、西側の一部を除いて大部分を損失している。南西の壁で約25cm地山を掘り込んでいる。床面は第４号住居跡と同一レベルである。第４号住居跡との重複や南側に隣接する土坑・ピット群との重複のため、規模はつかみにくいが、一辺3.2mほどの隅丸方形プランが推定できる。

柱穴と思われるピットはｂ１・ｂ３・ｂ４がある。ｂ２・ＳＫ73・Ｐ581・Ｐ577は後に掘り込まれたものである。そのほかに第４号住居跡のプラン内のピット等で、本住居跡に所属するものがあるかどうかは不明である。



第76図　第５号住居跡（ＳＢ５）

本住居の時期については、覆土からの遺物が少なく判然としない。ピットｂ１から出土している土器片から判断するなら、中期中葉の後半から後葉にかけての時期と考えられる。

本住居跡と第４号住居跡の南側に、重複するように土坑・ピットが存在する。第76図のＳＫ－Ａおよびピットｃ１～６である。出土遺物からＳＫ－Ａとｃ６は本住居と同時期と推定できる。ｃ１・ｃ２は新しいピットである。

(2)遺　　物（第66図　1653～1660）

縄文土器の小片のみで、今回提示したのは次の４点である。すべてピットｂ１からの出土である。

(1653)は「船元式」に特有の粗い撚りの縄文を施した胴部片である。Ｃ１群に属する。

(1654)は縄巻縄文を地文とし、半截竹管状工具による平行沈線を引いている。「船元Ⅳ式」に比定でき、Ｃ６群Ａ類に属する。

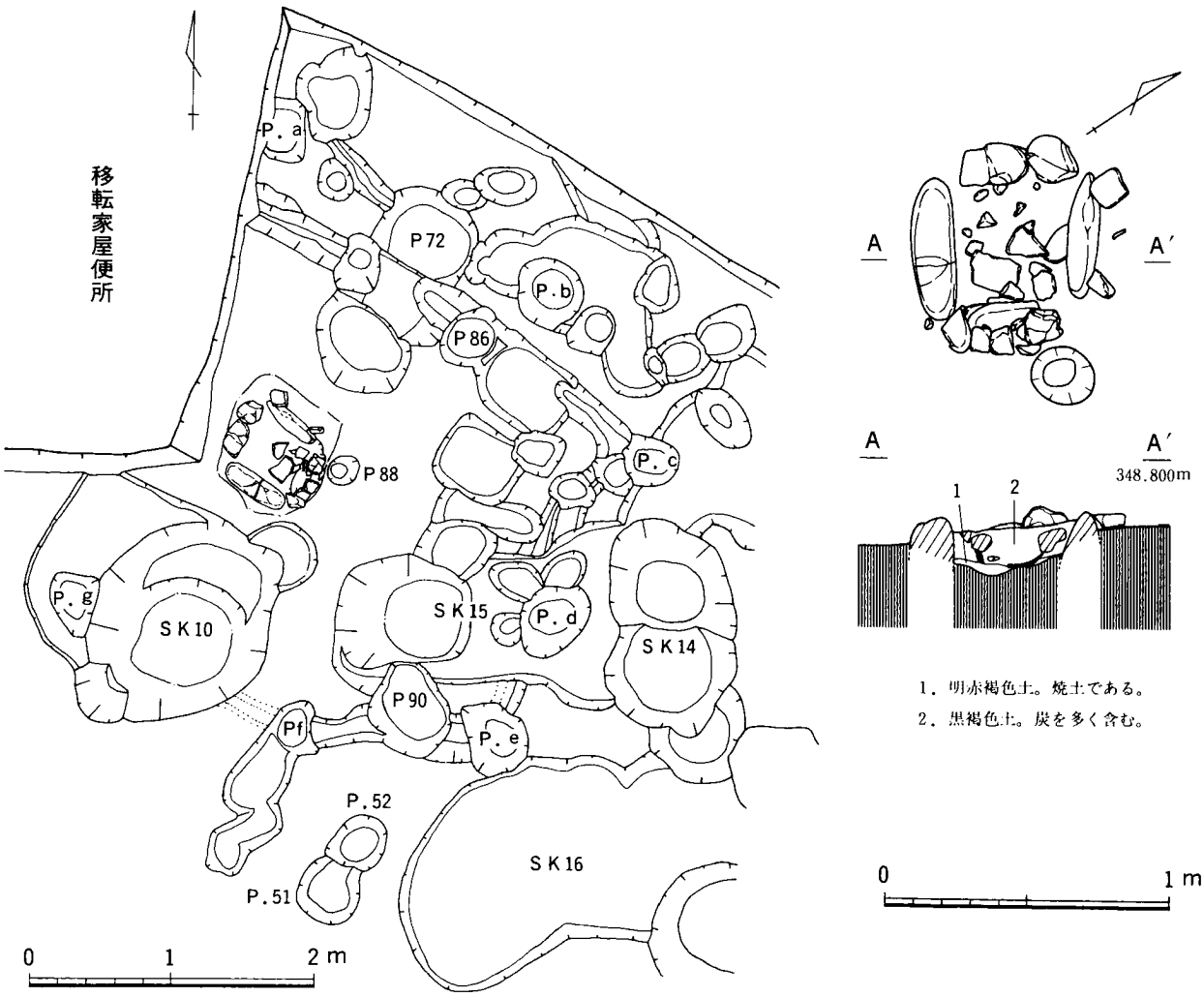
(1655)は内彎する口縁部片で、口縁に平行に横位の貼付隆帯がめぐる。地文は撚糸文で「里木II式」の範疇に入ると考えられる。Ｃ６群Ｂ類に属する。

(1656)は浅鉢である。口縁部を欠損しているが、胴部との境で内屈すると考えられる。境に貼付隆帯を施し、その上に刻目を傾きを変えて上下２列施文している。内外面ともヨコナデ調整を施す。時期については不明のため、Ｃ13群とした。

南側に隣接する土坑・ピットからの遺物についてもここでふれておく。小片が多く、提示したのは次の４点である。

(1657)は胴部片で太い撚糸文を施す。(1658)は条線文を施す。２点ともＳＫ－Ａからの出土で、Ｃ６群に属する。

(1659)は口縁部に楕円の隆帯区画をもち、Ｃ９群に属する。区画内には縄文を施す。文様の磨滅が著しく混入と考えられる。ＳＫ－Ａからの出土である。



第77図　第６号住居跡（ＳＢ６）

(1660)はｃ１から出土した。波状口縁で口縁内側を肥厚させる。表面および口端にＲＬの縄文を施す。暗褐色を呈し、胎土は非常に細かい砂粒を含み密で、焼成も良好であり、徳山在地の土器と異なる。搬入品の可能性がある。器形についても不明で、浅鉢の可能性もある。時期の判断に困り、Ｃ13群に入れている。

６．第６号住居跡　（ＳＢ６）

(1)遺　　構（第77図、図版８）

３－Ｂ～Ｃグリッドに位置する。プランは黒褐色土のため確認できず、炉跡と周辺の硬化面の検出により住居跡とわかった。北西部分は、移転家屋の便所が所在するため掘削しなかった。床面は地山直上にあたり、後世の攪乱も含め多くの土坑・ピットが重複していることも災いして、平面形や規模については確認ができなかった。ただ、北側から東側を経て南東部分に至る周溝状のプランが検出されている。途中いくつかのピット・土坑で分断されているが、壁沿いの周溝と仮定するならば、平面形は一辺3.3～3.5mの隅丸方形を呈し、主軸方位はおおむねN 60°Wになる。

炉跡は中央やや西寄りに位置し、70×65cmの方形の石囲い炉である。掘り方は長軸80cm、短軸75cmの隅丸長方形で、地山へ10cm強掘り込んでいる。川原石を使用した炉石は住居跡の平面形に軸を合わせて設置してあり、掘り方との隙間には暗褐色土を充塡している。炉石はよく焼けており、東と西のものはそれぞれ数個ずつに割れている。東側の炉石の下やや内側には、もう１つの川原石を設置している。炉内の埋土は炭混じりの黒褐色土で、礫片や土器片が混入している。焼土の堆積は薄いが、火床面は明赤褐色を呈し、よく焼けていた。

推定プラン内外には多くのピット・土坑が重複し、本住居跡に伴うものの確定が困難である。調査時の所見では、ＳＫ10・15・16およびＰ85・87は後世のもので、Ｐａ～ｆが埋土および深さ・規則性などから判断して柱穴と考えられるとの記録がある。

覆土については、炉跡および床面検出までの過程を包含層の掘り下げとして実施しているため、実測図の記録がないが、西側の壁の観察から２層に分かれる。上層が暗褐色土で、下層は黒褐色土である。

時期については、後述のように本住居跡覆土として取り上げた遺物がなく、確定の資料に欠けるが、推定プラン周辺の土坑・ピットから出土した遺物から見て、中期後葉の後半と考えられる。

(2)遺　　物

地山面まで掘り下げた段階で住居跡と確認したため、覆土の遺物と考えられるものも包含層出土として処理されている。また、炉内埋土中に土器片が数片確認できるが、第１次整理時に作成した遺物登録簿には本住居跡出土の遺物の記載は確認できなかった。遺物取り上げ時から整理に至る遺物処理および管理の失態を反省している。その他、確実に住居跡に伴うと考えられるピットからは遺物は検出されなかった。

７．第７号住居跡　（ＳＢ７）

(1)遺　　構（第10図）

９－Ｄ～Ｅグリッドに位置する。北東部分は村道にかかり未調査である。地山面までの掘り下げの段階で、一辺が約3.5m四方と推定できる区域で床面と考えられる明黄褐色土の硬化面が確認された。地山面と同レベルで、壁の立ち上がりは検出できなかった。硬化面を切る土坑・ピットは、いずれも後世のものと考えられ、中央部では炉跡・柱穴等は確認されていない。また、全体平面図以外の記録がなく、詳細については不明である。

住居跡と明確に断定できる資料に欠ける部分はあるが、調査時の所見から推定すれば、平面形は隅丸方形を呈する可能性がある。時期は、覆土から出土した土器が「船元Ⅳ式」であることから、中期中葉の後半と考えられる。

(2)遺　　物（第78・79図　1661～1669、図版26・27）

①縄文土器

本住居跡の覆土からは、321点の土器が出土している。その大半は、後述する「船元Ⅳ式」にあたる大型の深鉢の１個体が占める。

Ｃ２群の土器

２点出土しており、(1661)を図示した。貼付隆帯を縦位に密に施し、その間に平行沈線を引いているもので、本群Ａ類に属する。

Ｃ６群の土器

出土状況については不明であるが、条が深浅となる縄巻縄文を地文とする深鉢の同一個体片が多数出土している。接合の結果、口縁部から頸部の資料・胴部中央の資料・胴下部の資料がそろった。(1662)～(1664)がそれにあたる。その他、(1665)・(1666)も同一個体の口縁部片である。口縁部文様は、口縁から２条の低い貼付隆帯を連弧文状に施し、隆帯の両脇に半截竹管

による平行沈線を引いている。口縁沿いにも平行沈線を２本施す。口縁は内側を肥厚したあと、口端内外を面取りして尖らせ、内外面に地文と同様の縄巻縄文を施文する。本個体は縄文原体から見れば「船元Ⅳ式」に相当し、本群Ａ類に属する。

なお、この資料については興味深い点がある。(1667)・(1668)は同一個体の破片であるが、器壁表面が剥がれ落ちている部分がある。下から現われた器面にも縄巻縄文が施文されている。あくまでも推測であるが次の２点を考えている。１つは、土器製作の成形の段階で器厚を厚くするために新たな粘土を足していく際に、貼付面の強度を増すために縄巻縄文を施したという考えである。もう１つは、一度成形・施文を終えた段階で、深鉢全体の大きさに対して器厚が不十分であると判断して、粘土を足して厚くし、施文をやり直したという考えである。意図的であるか偶然であるかという問題であるが、それ以上のことは不明である。このような痕跡のある破片が他にも多数確認できる。

Ｃ12群の土器

(1669)は斜縄文を施した胴部片である。詳細は不明なため本群Ｂ類として扱った。

８．第８号住居跡　（ＳＢ８）

(1)遺　　構（第10図）

８－Ｅグリッドに位置する。第７号住居跡と同様、地山面までの掘り下げの段階で、東西2.5m、南北３ｍの範囲で明黄褐色の床面と考えられる硬化面を検出した。硬化面は地山面と同レベルで、壁の立ち上がりは確認できなかった。硬化面のプランは、南側は後世の大きな攪乱（SK42)により削られているが、隅丸方形を呈している。プランの西端に近いＰ298の北側で、直径15cm程の円形プランで焼土が検出されているが、炉跡は確認できなかった。硬化面を切るピットは第10図のようにいくつか検出されているが、柱穴の確認はできなかった。全体平面図以外の記録がなく、その他詳細については不明である。

住居跡と明確に断定できる資料に欠ける部分があるが、調査時の所見から推定すれば、平面形が隅丸方形になる可能性がある。時期については、硬化面直上やピットなどから出土した土器の多くが、「船元Ⅲ式」あるいはそれに併行する資料であることから、中期中葉と考えている。

(2)遺　　物（第78・79図　1670～1684、図版27）

①縄文土器

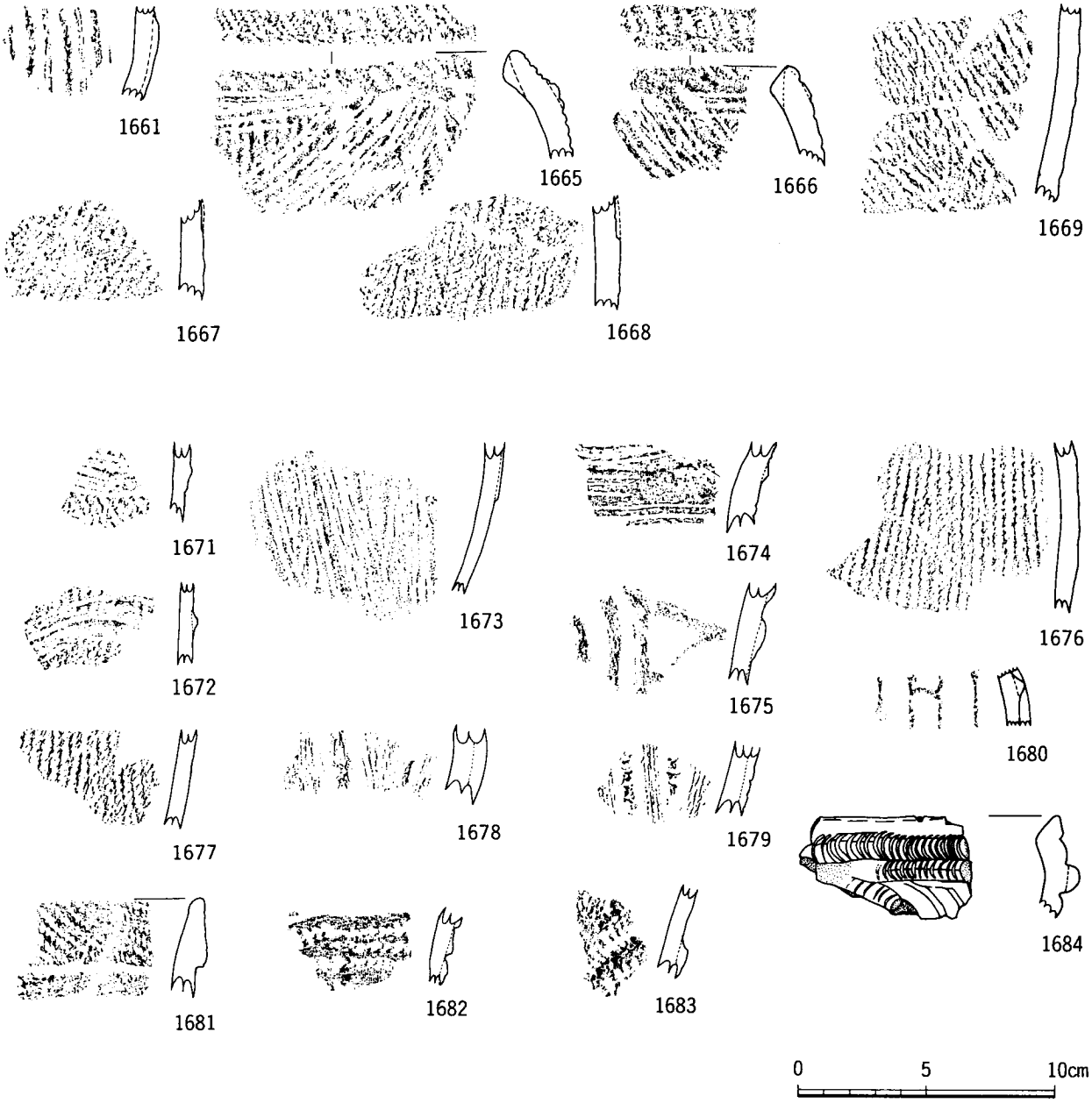
本住居跡出土として取り上げてある土器は、硬化面直上と一部の覆土から検出された21点である。なお、覆土の遺物を含むと考えられる８－ＥグリッドのⅢ層からは、多くの土器が出土

第78図　第７・８号住居跡出土土器(1)

しているが、攪乱が入っていたり、抽出が恣意的になるおそれもあり、包含層出土として処理している。

Ｃ１群の土器

(1670)は波状口縁を呈し、粗い縄文を地文とするキャリパー形口縁の深鉢で、高い貼付隆帯上に爪形文を施す。口縁径は35cmを測る。貼付隆帯は口縁から頸部にかけて、円文・三角文とそれらをつなぐ隆帯も含め多様なモチーフの組み合わせで構成される。「船元III式」に類似し、本群Ａ類③に属する。



第79図　第７・８号住居跡出土土器(2)

(1671)・(1672)・(1673)は、縄文を地文とし低い貼付隆帯の両側に半截竹管による平行沈線を施す。Ｂ類①に属する。

(1674)は地文が無文で、幅狭で低い隆帯の両側に平行沈線を施す。(1675)は同じく無文地であるが、素隆帯のみ施す。ともにＤ類に属する。

その他、(1676)・(1677)は本群特有の粗い縄文を施す胴部片である。

Ｃ２群の土器

(1678)は幅狭で高い貼付隆帯を縦位に施し、隆帯間に櫛描沈線を充塡する。本群Ａ類に属する。(1679)も同様であるが、貼付隆帯上に刻目を入れている。

(1680)は貼付隆帯はＡ類と同様だが、隆帯間が無文である。Ｂ類に属する。

(1681)は縄文を地文とし、幅2.5cmの複合口縁をもつ。複合口縁部分にも縄文を施す。本群に属する前述の３点と同様、「船元III式」に併行する土器と考えられる。

Ｃ３群の土器

「北屋敷式」に類似するもので、貼付隆帯に沿って「く」の字状の押し引きの刺突を施している。(1682)・(1683)とも本群Ａ類に属する。

Ｃ５群の土器

(1684)は口縁に沿って２本の半隆起線を引き、その下は円弧状の半隆起線を引く。横位の２本と円弧状の１本は基隆線で、上にＣ字形の爪形文を施している。キャリパー形を呈する口縁部は口唇部で外反させている。「古府式」に類似し、本群Ａ類に属する。

９．住居跡の先後関係について

「戸入村平遺跡」において検出した８軒の縄文時代中期の住居跡について、その先後関係について簡単にまとめておきたい。

中期中葉の住居跡は、ＳＢ３・ＳＢ７・ＳＢ８の３軒になる。いずれも近接して構築されているが、炉跡あるいは覆土から出土している土器により、ＳＢ３（船元II）→ＳＢ８（船元III）→ＳＢ７（船元IV）の順になる。

中期後葉の住居跡は、ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ４・ＳＢ５・ＳＢ６の５軒である。時期的にはＳＢ１・ＳＢ４・ＳＢ５が加曽利ＥＩ～ＥII式期にあたる。順序では、ＳＢ５→ＳＢ４→ＳＢ１となるが、ＳＢ４とＳＢ１は同時期に存在した可能性がある。

次にＳＢ２・ＳＢ６が加曽利ＥII式期の新しい段階からIII式期にあたる。

なお、住居跡の平面形について、隅丸方形のものと円形のものと時期的に二分できる可能性がある。中期中葉の３軒とＳＢ５・ＳＢ６は、隅丸方形を呈すると考えられるのに対し、ＳＢ５・ＳＢ６を除く中期後葉の３軒は円形を呈すると考えられる。　（武藤貞昭）

第３節　　土器棺墓と出土土器

本遺跡の縄文時代後晩期の遺構として、13基におよぶ土器棺墓が検出された。「土器棺墓」の名称を使うにあたっては、後期に一般的に見られる「埋甕」・「土器埋設遺構」、あるいは晩期における「土器棺墓」・「甕棺墓」などの呼称が使われ、最近では「壺棺墓」という呼称も見られるが、その区分が不明瞭となっている。実際に骨片が出土し、墓として認識できたものは本遺跡では認められない。しかし、土器を埋設した遺構が、縄文時代後晩期にわたって認められ、その形態から埋葬方法は別として、墓と一般的に考えられていることから、便宜的に「土器棺墓」として呼称することにした。

また、本遺跡の場合、後晩期の遺構は黒色土中に存在し、その検出が困難な状況にあった。土器棺墓の検出も同様の状況で、明確に掘り方が検出された例は少ない。さらに、検出面が地表から浅いために土器棺墓がかなり破壊を受けている場合もある。調査中に検出面より掘りすぎてから、その土器の出土状況によって土器棺墓として認定することが多かった。本来、掘り方のプランと土器の出土状況が一体となって土器棺墓を認定するべきだが、その条件を満たすものは少ない。とくに出土状況から見ての状況証拠によって、土器棺墓としたにすぎない。土器棺墓に使用された土器を復元してみると、思いのほか遺存状態の悪い土器も存在するが、調査当時の所見を優先して、そのまま土器棺墓として報告する。なお、掘り方の法量は、土器棺墓がそれぞれ検出されたレベルが違うため、それぞれの土器棺墓の検出時の状況とする。

１．後期の土器棺墓と出土土器

第１・３・６・10号土器棺墓が後期に属する土器棺墓で、計４個体分の土器が認められる。第１号土器棺墓を除けば、残存状態は悪い。このために明確に所属時期を知り得るものは限られた土器だけである。大方、縄文時代後期前葉の中には収まるものと考えられる。

(1)第１号土器棺墓　［ＳＺ１］　（第80・83図、図版９・28）

３Ｄグリッド南西隅に位置する。地山面に達してから土器棺墓として認識することができた。掘り方は地山にも掘り込まれ、明確に確認することができた。平面プランは径65cmのほぼ円形を呈し、深さは検出面から31cmである。土器はこの掘り方に立位で設置されていたが、底部の部分は破損してその器形を保っておらず、途中で折れて水平な状態で検出された。底部より上位の部分は当初の器形をとどめているのと対照的である。棺底の部分には板状の石が敷かれていることから、この石を棺底として使用し、底部を意識的に破損したものと考えられる。また、

埋設した土器の上部にも石が認められるが、これについては、混入したものか意図的に配置したものかは分からない。

土器棺墓に使用された土器(501)は、口径49.2cm、器高54.5cmを測る大型の深鉢である。ほぼ完形にちかく復元できた良好な資料である。底部には穿孔がみられる。土器棺墓として転用される際に穿孔されたと考えられる。弱く外反しながら、直線的に伸びる口縁部と肩部が強く張る胴部をもつ。最大径は肩部にあり、51.2cmにもおよぶ。口縁端部は内面に若干肥厚しているのが認められる。

文様は口縁部にはなく、胴部にのみ認められ、底部には及んでいない。文様構成は９単位で構成され、それぞれの単位ごとの文様構成は、３本沈線によって区切られた狭い磨消縄文帯を逆Ｌ字状に連結して横走させる。これを区画文として使用し、さらに内側にも逆Ｌ字状の磨消縄文帯を重ね、逆Ｌ字状の文様帯が文様単位として多用されている。多用している逆Ｌ字状の磨消縄文帯のなかには、逆Ｌ字状にならずに逆Ｕ字状を呈し、これを横位の沈線で連結している部分も認められる。外側の逆Ｌ字状の磨消縄文帯の内側にみられる逆Ｌ字状磨消縄文帯はその方向が左右で逆転するものや、さらに内側に半円形や逆Ｊ字状の磨消縄文帯がみられる。逆Ｌ字状の磨消縄文帯の屈曲部分の形態は、上方に凸状に突出するものや、鍵の手状となるものがあり、多様である。磨消縄文帯のそれぞれの単位における文様構成は、外側の逆Ｌ字状の部分については類似性が強い。内側については、細かな点で相違する点が認められ、単純に共通する文様構成をもつ単位を連結しているわけではない。使用されている縄文はＲＬである。

調整手法は、磨消縄文帯以外の部分を精緻に研磨しており、本遺跡出土土器のなかでは、非常に丁寧なつくりの土器といえる。また、胎土には多くの雲母片が含まれ、他の土器と比して大きく異なる。大型品であることも加えて、搬入品である可能性を示しているのかもしれない。

所属時期は、文様構成から考えて、福田Ｋ２式の範疇に属す。

(2)第３号土器棺墓　［ＳＺ３］　(第80・83図、図版10・28)

７Ｌグリッド北西部に位置する。棺身の土器(502)は単棺で出土し、立位で使用されていた。棺身の土器は口縁部の破損が著しい。これは本土器棺墓が地表面から浅かったことによるものと考えられる。掘り方は不明瞭ながらも確認することができ、平面プランは径45cmの円形を呈し、深さは21cmと浅い。底面で地山と接する。

(502)は口径30.0cm、器高31.5cmの深鉢形の土器である。口縁部は頸部で屈折して「く」の字状に外反し、端部は内彎気味に丸くおさめている。端部内面には、やや内傾面を残している。肩部は比較的強く張り出し、径29.4cmを測る。肩部から底部にかけては直線的にすぼまる形状を示している。底部は大きな平底を呈し、網代痕が認められる。

文様は口縁部の中位と胴部の上半に限られる。口縁部の磨消縄文帯については縄文を施文後、沈線を引き直し、胴部上半の磨消縄文帯は沈線で区画した後、縄文を施文するという逆の手順によって文様を形成している。口縁部の文様帯は縄文帯を横位の２本の沈線で区画し、さらにその間を縦位の沈線を充塡することで斜格子状の文様帯となっている。胴部文様帯は上下２段の無文帯と縄文帯で構成され、それぞれを沈線によって区切っている。文様の中心となるのが上段の縄文帯で、やや横長のＪ字文的な効果をあげ、下段の無文帯は裾広がりの連結された「ハ」の字状を呈している。下段の無文帯は各々が連結されていないために、上下段の縄文帯が「ハ」の字状の無文帯が途切れる部分で連結している。欠損部位が大きいため、全体の文様構成に不明な部分もあるものの、５単位で文様が構成されると推測している。施文されている縄文はＲＬである。

所属時期については、器形あるいは文様構成から中津式に類似する要素が認められ、これに併行する時期に属すると考えられる。

(3)第６号土器棺墓　［ＳＺ６］　（第80・83図、図版11・28）

９Ｆグリッドと９Ｇグリッドの境界付近に位置する。棺身の土器(503)は単棺で立位に置かれ、口縁部はほとんど残存しないが、胴部下半は大半が残存する。口縁部を意図的に打ち欠き、胴部下半のみを棺身として利用したのか、あるいは攪乱を受けたのかは検証することができなかった。掘り方は褐色土中に掘り込まれているために検出が困難で、断面でのみ確認したにすぎない。断面では掘り方は幅26cm・深さ27cmを測る。土器の底部に接するようにして石が認められ、棺底の安定のために置かれたのかもしれないが、確証を得るまでには至らなかった。

棺身の土器(503)は胴部はほぼ完存だが、口縁部はわずかしか残存しない。口径28.6cm・器高40.6cm（いずれも推定）を測り、器形全面に縄文が認められる粗製の深鉢である。口縁部は直線的にわずかに外方に開きながら立ち上がり、端部はやや肥厚した平坦面をなし、ここにも縄文が施文される。胴部は頸部で弱く屈折して肩部が大きく張る。肩部の位置が胴部上半よりもやや下がった位置にあるためか、やや胴長な器形を呈している。底部は平底で網代痕が認められる。施文されている縄文はＲＬである。

(4)第10号土器棺墓　［ＳＺ10］　（第80・86図、図版12・28）

４Ｅグリッド北部に位置する。棺身の土器(504)は単棺で斜位に置かれていた。方位はＳ27°Ｅを向く。掘り方は断面で長軸51cm・深さ19cmを測る。平面では明瞭には確認することができなかった。本土器棺墓は他の後期の土器棺墓と異なり、唯一斜位に置かれた例である。後期の

土器棺墓は一般的に立位のものが多い。この点からすれば土器棺墓にするにはやや疑問な点も認められる。

棺身の土器(504)は残存状態が悪かったために、検出時のようには復元することができなかった。棺身の土器は胴部および底部の一部しか残存していない。このため、文様構成・器形など不明な点が多い。残存する胴部片の肩部が比較的強く張ることから、ＳＺ３の(502)にちかい器形を呈すると考えられる。文様構成はＪ字文状の磨消縄文帯とこれに挟入する無文帯が認められるものと、渦巻文風のものと２種類が認められるが、どのように連結するかは分からない。前者は横走的にみえることから、(502)と同じく全体の文様構成が横走する構造をもつのかもしれない。

時期的には中津式に近いと考えられる。縄文はＲＬである。

２．晩期の土器棺墓と出土土器

第２・４・５・７～９・13号土器棺墓が晩期の土器棺墓に属する。ほとんどが粗製土器で構成され、東海地方では稲荷山式～西之山式、畿内では滋賀里Ⅲｂ式に併行する資料と考えられる。器形は深鉢形が大半で、口縁部が「く」の字状に屈折して立ち上がる、いわゆる甕形を呈するものと、単純な深鉢形を呈するものが多い。前者は無突帯刻目系土器と呼ばれているものに類似する。後者は口縁端部を少し肥厚させ、内彎気味となるのが特徴的である。調整手法では、棒状・ヘラ状工具による一見、条痕様にもみえる粗いミガキの痕跡が顕著に認められる。この手法はいわゆる精製土器に使用されるミガキ調整とは大きな隔たりがみられ、丁寧に研磨された様子や器面が平滑で、なおかつ光沢が認められるといった様子は全く観察されない。精製土器で使用されるミガキ調整とは別の手法と想定され、当該期の粗製土器に多用される調整手法であることが予察される。ここでは、仮にこれを粗いミガキ調整と呼称することにする。粗いミガキ調整が用いられた土器は、概して器壁が他の土器に比して薄くなっていることも、その特徴として指摘できる。

(1)第２号土器棺墓　［ＳＺ２］　(第81・84図、図版９・28)

４Ｇグリッド北部に位置し、掘りすぎた状態で検出された。このため掘り方は不明である。棺身に使用された土器(SZ2-A、505)は、斜位に置かれ、方位はほぼWである。棺身の土器とは別の土器(SZ2-B、506)も出土した。遺存状況は悪いが、棺身の土器の口縁部と接するようにして出土したため、破損した大きな破片を棺身の蓋として利用した可能性もある。

棺身として使用した土器(505)は、口径33.3cm、器高41.3cmを測る。口縁部は頸部で弱く屈折

し、外反気味に立ち上がる甕形の器形を呈する。最大径は肩部に位置し、34.0cmを測り、わずかに口径を上回る。胴部は肩部が張り、矮小な底部がつく。底部はやや上げ底となる。口縁端部にはヘラによる押圧が認められる。調整手法は粗いミガキ調整が胴部外面に認められ、頸部付近で横位に、頸部以下では若干の不整方向のものを除けば縦位に施されている。口縁部には粗いミガキ調整が観察されない。内面は輪積み痕が観察され、丁寧な調整を行っていないことがうかがわれる。

棺身の土器とは別個体の土器（SZ2-B、506）は、口径29.6cmを測る。口縁部・胴部・底部の各部位の一部しか残存せず、互いの部位は接合しない。器形は口縁部が強く「く」の字状に外反する器形と思われ、端部には棒状工具による押圧が認められる。底部は平底を呈する。

調整手法は、外面調整には口縁部から胴部上半では棒束状工具による条痕、胴部下半から底部ではケズリを施す。内面調整にはナデが多いが、一部にケズリも認められる。

⑵第４号土器棺墓　［ＳＺ４］　（第81・84図、図版10・29）

７Ｇグリッド南西部に位置し、棺身の土器は横位に据えられていた。方位はＮ44°Ｅである。周囲の攪乱が激しく、土器・掘り方の遺存状態は悪い。このため、掘り方は不明瞭だが、平面プランはおおよそ長軸77cm・短軸38cmの楕円形を呈すると考えられ、深さは22cmと浅い。棺身の土器（SZ4-A、507）にかぶさるようにして、別の土器（SZ4-B、508）も検出した。これについては、棺身の土器に対して大破片を蓋として利用したものと考えられる。

(507)は棺身の土器として使用された土器で、口径32.2cmを測る。最大径は口縁部にあり、胴部下半を欠損する。口縁部が弱く外反し、わずかに肩部が張る器形を呈する。口縁端部にはヘラによる押し引きが認められる。調整手法は粗く、ナデ調整である。肩部内面にはわずかに指頭圧痕を残す。

(508)は(507)の蓋として使用された土器である。口径22.0cmを測る。胴部下半を欠損する。口縁端部は若干内彎し、口縁部から胴部下半にいたるまで緩やかなカーブをもつ深鉢形土器である。最大径は口縁部に位置する。口縁端部には棒状工具による押圧が認められる。

調整手法は、外面では粗いミガキ・ケズリの両方が認められる。粗いミガキは口縁部でしか認められず、ケズリ調整後の二次調整として使用されている。内面はナデ調整である。

⑶第５号土器棺墓　［ＳＺ５］　（第81・84図、図版11・29）

８Ｈグリッドの中央やや西に位置する。棺身の土器(509)は立位に置かれ、単棺で出土した。胴部下半が欠損し、意図的に打ち欠いたものと考えられる。掘り方は不明瞭だが、径33cm・深

さ13cmの平面プランは円形を呈すると推定できる。底面は棺身の土器に対応してか平坦である。

棺身の土器(509)は、口径23.2cmを測り、胴部下半は欠損する。頸部に屈折する部位が若干認められるが、口縁部が垂直に近い状態で立ち上がり、壺形に近似する器形を示す。器形は他の土器と比較すると異質な形状を呈している。口縁端部は丸く調整し、強いナデを施したためか、やや肥厚気味になっている。胴部は緩やかな曲線を描き、中位に最大径(27.2cm)が位置する。

調整手法は、外面は粗いミガキが中心である。とくに口縁端部では内面にまで横位の粗いミガキがおよび、他の部位に比して入念に調整されている。その他、頸部では斜位、胴部では横位の粗いミガキが使用されている。内面はナデで調整されたと考えられるが、磨滅が激しい。

(4)第７号土器棺墓　［ＳＺ７］　(第81・85図、図版12・29)

３個体分の土器が検出されたが、検出状況からみて、横位に置かれたいわゆる合口棺に近似する。３個体の土器は、完形近くまで復元できるもの（SZ7-A、510)、胴部下半を欠損するもの（SZ7-B、511)、口縁部の大きな破片（SZ7-C、512）と、それぞれ遺存状態が異なるが、もともとこのように３個体分の土器を組み合せることによって、構成されていたと思われる。完形に近い土器と胴部下半を欠損する土器の口縁部側を合わせ、さらに胴部下半を欠損する土器の足りない部分を補うために、口縁部の大破片を使用したと推測される。掘り方は褐色土中に掘り込まれ、平面プランは明確には確認できなかった。断面では長軸97cmを測り、深さは13cmである。底面は地山面に達し、わずかに地山を掘り込んでいる。方位はＳ40°Ｅを向く。

(510)は口径27.8cm、器高35.2cmを測る。最大径は口縁部に位置するが、胴部中位で膨らみ、次第に弧を描いて底部に至る。底部は下方に突出気味で、中央がくぼむ上げ底を呈している。器形は口縁部と胴部の境が明確には認識できないが、胴部の膨らみと口縁部の外反する傾向から甕形に近い。調整手法も、口縁部と胴部でその方向を変えていることからも、甕形の要素が認められる。口縁部は端部で内彎し凹面が認められ、粗いミガキ調整が観察される。また、他の部分にも粗いミガキ調整は多用されている。しかし、口縁部の外面には二枚貝による条痕が観察でき、粗いミガキは二次調整として使用されている。内面についても、口縁部には横位の粗いミガキ調整を施している。それ以下では顕著な輪積み痕および指頭圧痕が残り、丁寧な調整は施されていない。

(511)は口径24.6cmを測り、胴部下半を欠損する。最大径が口縁部にあり、胴部は膨らまず底部に向かって逆ハの字状を呈す深鉢形となる。口縁部は外方に一度ゆるく湾曲してから垂直に立ち上がる部位が特徴的である。この部位から口縁部はやや肥厚しており、端部は内傾し尖り気味におさめている。湾曲部分の内面には、指の押圧による１本の凹線が認められる。

(512)は口径28.8cmを測り、胴部下半は欠損する。形状・調整手法ともに(511)と類似した特

徴を示す。最大径は口縁部に位置し、底部に向かって直線的に径を縮小する逆ハの字形を呈し、胴部がほとんど膨らまないのが特徴である。また、(511)と同じく口縁部には湾曲部分が認められ、そこから口縁部を肥厚させている。端部は外方に向かって若干尖らせておさめており、湾曲部分の内面には指の押圧による凹線が観察される。粗いミガキ調整は内外面ともに認められ、内面は口縁部に限って認められ、外面は全面で認められる。外面においては口縁部では横位、胴部下半になるに従いその方向を変え縦位に施される。口縁部以外の内面の調整手法についてはナデが主体的だが、部分的にヘラケズリが施されている。(511)と類似性の極めて高い土器であるが、条痕が残存する点を相違点として指摘できる。

⑸第8号土器棺墓　［ＳＺ８］　（第81・83図、図版12・28）

５Ｅグリッド南端に位置する。口縁部を欠損する土器が単棺で出土し、立位に置かれていた。褐色土中に掘り込まれているために、掘り方を明確に認識することはできず、その出土状況から土器棺墓と認定した。表土から浅いために、口縁部の欠損が意図的な破損によるものか、攪乱によるものか不明である。

棺身の土器(513)は、胴部下半・底部のみが残存する。底部は平底ではなく、尖底状を呈し、この形状を作出するために、底部外面のみ横位のケズリ調整が認められる。他の部位の調整はナデである。底部からの立ち上がりは直線的に外反する。

⑹第9号土器棺墓　［ＳＺ９］　（第82・86図、図版12・30）

10Ｊグリッド南西部に位置する。表土下の浅いレベルに存在するために、棺身の土器(SZ9-A、514)の上半分は耕作のために破損している。さらに、本土器棺墓より新しいピットによって、土器・掘り方ともにその一部が破壊され、遺存状態は悪い。調査当初は、土器が横位に近い斜位で置かれていたことと２個体分が認められたために、合口棺と理解していたが、整理・復元の結果、４個体分であることが判明した。いくつかの個体の大破片を利用した合口棺なのかもしれないが、状況証拠にすぎず、断定を下すわけにはいかない。掘り方は平面では確認できず、断面でしか観察できなかった。断面では長軸49cm・深さ13cmを測る。主軸方位はＮ20°Ｅである。

棺身の土器であるＡ(514)は、口径34.0cmを測る。接合はしないが底部も残存する。口縁部が大きく外反し、「く」の字形となる。最大径は口径にある。肩部はわずかに湾曲し、器形は甕形になると思われる。底部は平底ではなく、中央がくぼんでいる。口縁端部にはヘラによる押し引きが認められるが、その形状は押し引きというよりは横長のレンズ状の押圧に近い。

調整手法はナデが主だが、口縁部から肩部にかけての外面調整には粗いミガキ、内面調整にはわずかにケズリの痕跡をとどめ、部位によってはナデは二次調整として使用されたと考えられる。底部の外面には横方向のケズリが認められる。

ＳＺ９－Ｂ(515)は口縁部の一部のみ残存する。口縁部は比較的強く外反し、外面調整には横位の粗いミガキが認められる。口縁端部には粘土が一部外方に突出し、肥厚気味になっている。他にも口縁部と同様の調整手法を残す胴部片も認められる。

ＳＺ９－Ｃ(516)は(515)と同じく口縁部と胴部片の一部のみ残存する。やや受け口気味に立ち上がる口縁端部を呈し、ここには横長のレンズ状の押圧が認められる。外面にはやや幅広の工具による粗いミガキ調整の痕跡が顕著である。

ＳＺ９－Ｄ(517)は短く外反する口縁部が特徴的で、口縁部と胴部の一部しか残存しない。端部は尖り気味で、非連続的な押圧が認められる。外面調整はケズリが主で、口縁部には二次調整として粗いミガキが認められる。内面調整は雑で輪積み痕をそのまま残す部位も存在する。

(7)第13号土器棺墓　［ＳＺ13］　（第82・85図、図版13・30）

８Ｈ杭のすぐ西に位置する。棺身の土器（SZ13-A、518）を斜位に据え、別の土器の大きな破片（SZ13-B、519）を蓋として利用していた。本遺跡の中では比較的遺存状態がよい。掘り方は断面で長軸64cm・深さ18cmを測る。主軸方位はＮ59°Ｗである。

蓋として利用されていた土器Ｂ(519)は、口径32.9cmを測り、最大径は口縁部にある。粗いミガキ調整が用いられず、波状口縁を呈すことから、晩期所属の土器棺墓のなかでは例外的な存在である。胴部以下が欠損して、全形は不明である。口縁はやや外反気味に立ち上がるが、肩部があまり張らないことから、深鉢形をなすと考えられる。調整手法は丁寧なミガキ調整が観察され、外面では縦位、内面では横位に施されている。波頂部は欠損部位が大きいため正確なことは分からないが、５単位になるものと考えられる。

棺身の土器Ａ(518)は、口径31.4cm、器高41.0cmを測る砲弾形の深鉢である。口縁部はやや内彎気味で、端部は平坦面をなす。最大径は胴部上半に位置し、33.2cmを測る。底部は上げ底とならずに突出気味の狭小な底部がつく。調整手法は粗いミガキ調整が顕著である。外面では口縁端部から下５cmほどで横位に、それ以下では縦位に施される。内面も同様で、口縁部付近は横位、胴部では不整方向の粗いミガキ手法が観察される。(518)における粗いミガキ手法は他の土器棺墓の土器に比べて、それぞれの痕跡の間隔があまりみられないことから、比較的丁寧におこなわれた様子がうかがわれる。また、器壁が厚いことも他の土器とは異なる。

３．その他の土器棺墓

詳細不明の土器棺墓についてふれておく。

前項までにおいて報告してきた土器棺墓のほかに、本遺跡からは２基の土器棺墓が検出されている。第11・12号土器棺墓である（第82図、図版13）。

第11号土器棺墓（ＳＺ11）は、５Ｅグリッド東畦から検出した。検出面での掘り方は長軸43cm・深さ10cmを測る。黒褐色土中に掘り込まれ、棺身の土器は斜位に据えられている。単棺と考えられる。主軸方位はＮ21°Ｅである。攪乱により上部がとんだ状態で検出されている。棺身の土器は細片となって取り上げてあり、整理段階での接合・復元は困難であった。土器片のなかに磨消縄文帯をもつものがあるほか、底部片は平底である。後期の土器棺墓と推測できるが詳細は不明である。

第12号土器棺墓（ＳＺ12）は、10Ｉグリッド東畦から検出した。土器はほぼ立位に置かれ、単棺である。掘り方は楕円形を呈し、長軸25cm前後と推定される。検出面からの深さは18cmで地山を12cm掘り込んでいる。土器は所在不明であるが、写真で見るかぎり、胴部文様は縦位帯縄文であり、中期末から後期初頭の土器と考えられる。発掘時の所見を優先して土器棺墓として遺構名を付しているが、埋甕あるいは埋設土器と理解したほうが妥当かもしれない。

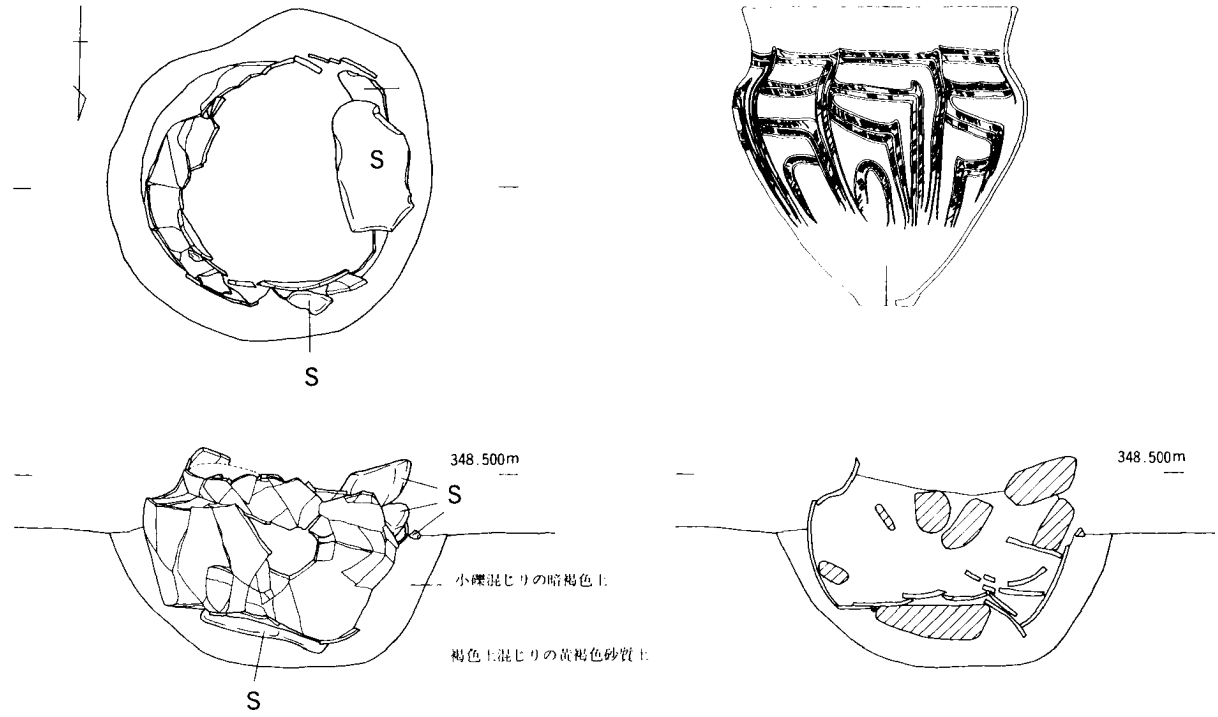
以上の他に、出土場所不明の晩期土器が２個体復元されている。土器棺墓に使用された土器と推測することも可能であり、良好な資料であるので、本節で報告しておく（第87図）。

(520)は口径28.2cm、器高40.6cmを測る。頸部で弱く屈折して、短くやや外反気味に立ち上がる口縁部をもつ。端部には棒状工具による押し引きが認められる。胴部は砲弾形に近い形状を呈すが、肩部は強く張らず口径を上回らない。底部は尖底状で上げ底を呈している。調整手法は磨滅が激しく詳細は不明だが、粗いミガキ調整が顕著に用いられている。外面では、口縁部で横位、胴部で縦位である。内面では口縁部で横位に施されているのが認められ、残りの部分は磨滅のために観察できなかった。とくに口縁部における粗いミガキの痕跡は、内外面とも条痕様ともいえるほど、凹面が著しい。なお、２穴１組の補修孔が２組穿孔されている。

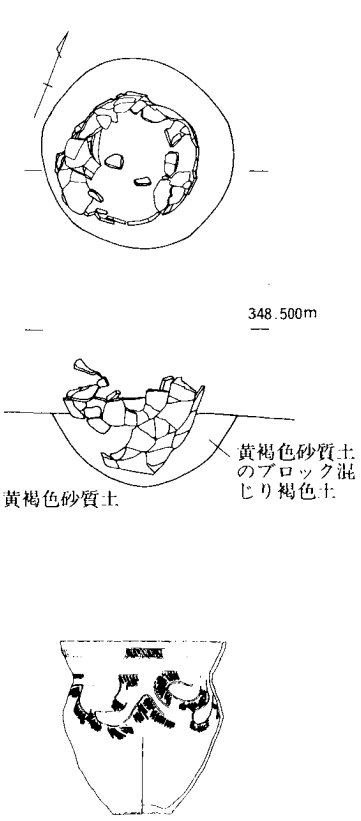
(521)は口径29.6cm、器高37.1cmを測る。口縁部・胴部ともに一部を欠損するものの、ほぼ全形が明らかとなる資料である。胴部は膨らむ部分がなく、口縁部からしだいに内彎しながら矮小な底部に至る。口縁端部は、直立気味に立ち上がり、底部は尖底状で中央が大きくくぼむ。調整は内外面ともに粗いミガキが顕著で、口縁部の内外面と胴部の外面に認められる。粗いミガキは部位によってその方向が違い、口縁部では横方向、胴部では斜めおよび縦方向である。胴部の内面はナデ調整である。

（藤田英博）

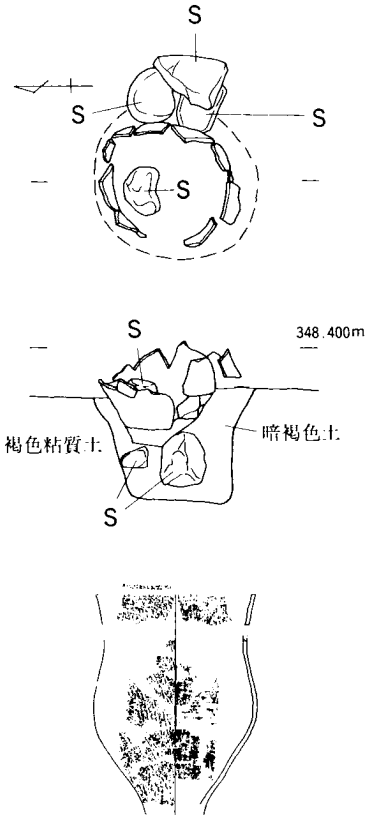
第１号土器棺墓



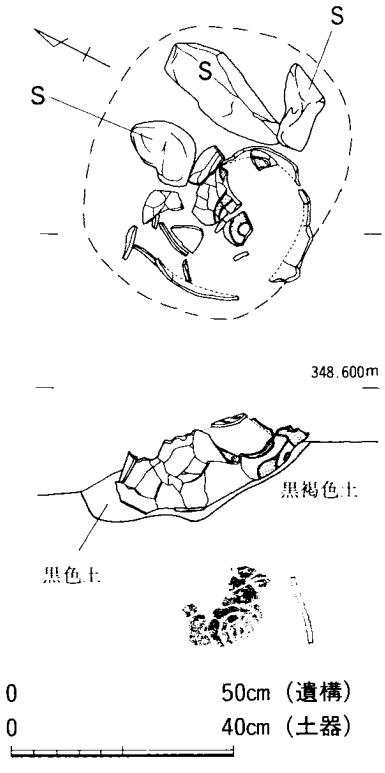
第３号土器棺墓



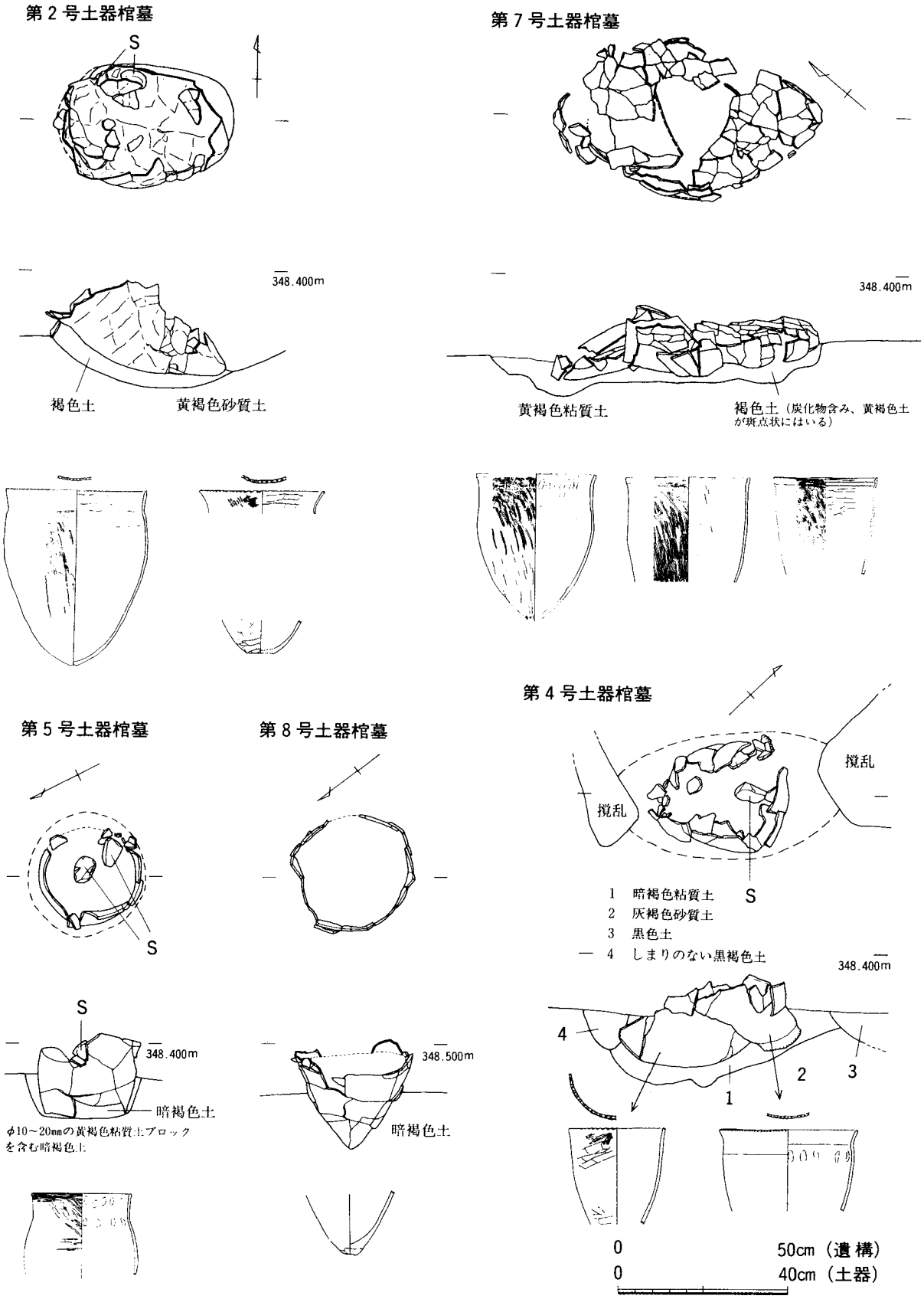
第６号土器棺墓



第10号土器棺墓

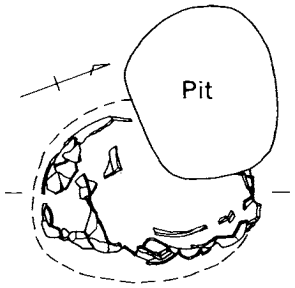


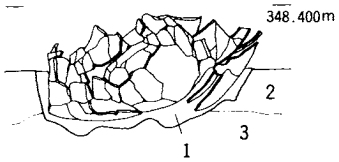
第80図　土器棺墓(1)


第2号土器棺墓
S
348.400m
褐色土
黄褐色砂質土
第7号土器棺墓
348.400m
黄褐色粘質土
褐色土（炭化物含み、黄褐色土が斑点状にはいる）
第5号土器棺墓
S
S
348.400m
暗褐色土
φ10～20mmの黄褐色粘質土ブロックを含む暗褐色土
第8号土器棺墓
348.500m
暗褐色土
第4号土器棺墓
撹乱
撹乱
S
1　暗褐色粘質土
2　灰褐色砂質土
3　黒色土
4　しまりのない黒褐色土
348.400m
4
1
2
3
0　50cm（遺構）
0　40cm（土器）

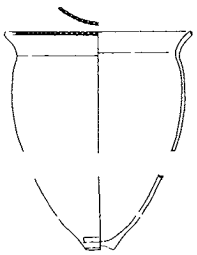
第81図　土器棺墓(2)

第９号土器棺墓

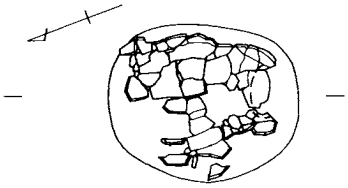


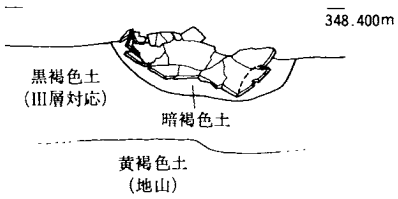


1　暗褐色土
2　黒褐色土（III層対応）
3　黄褐色土（地山）

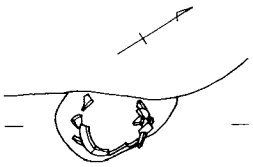


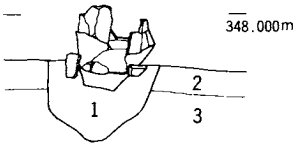
第11号土器棺墓





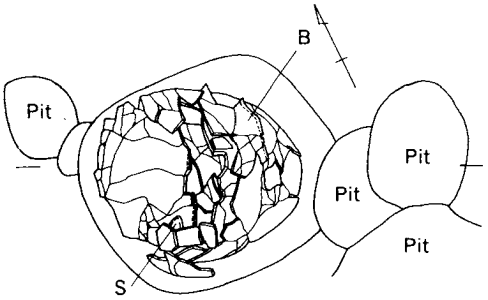
第12号土器棺墓



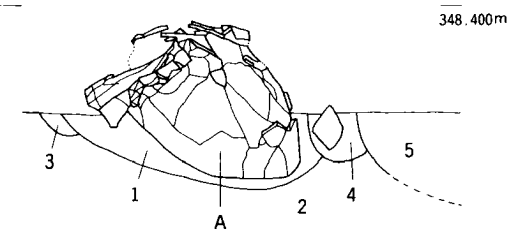


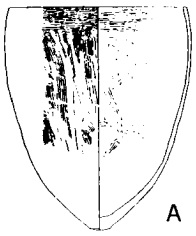
1　黄褐色土
2　黒褐色土（III層対応）
3　黄褐色土（地山）

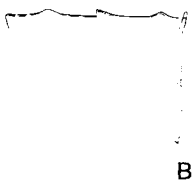
第13号土器棺墓



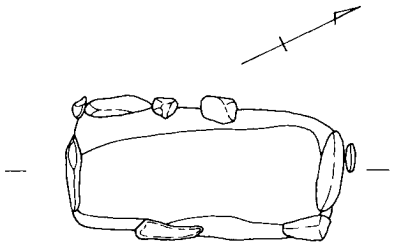
1　黄色粒混じりの暗褐色土
2　暗黄褐色粘質土　（地山）
3　礫混じりの褐色土
4　炭粒混じりの暗褐色粘質土
5　炭混じりの黒褐色土

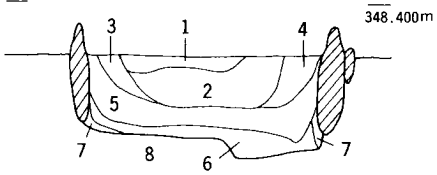






配石土坑



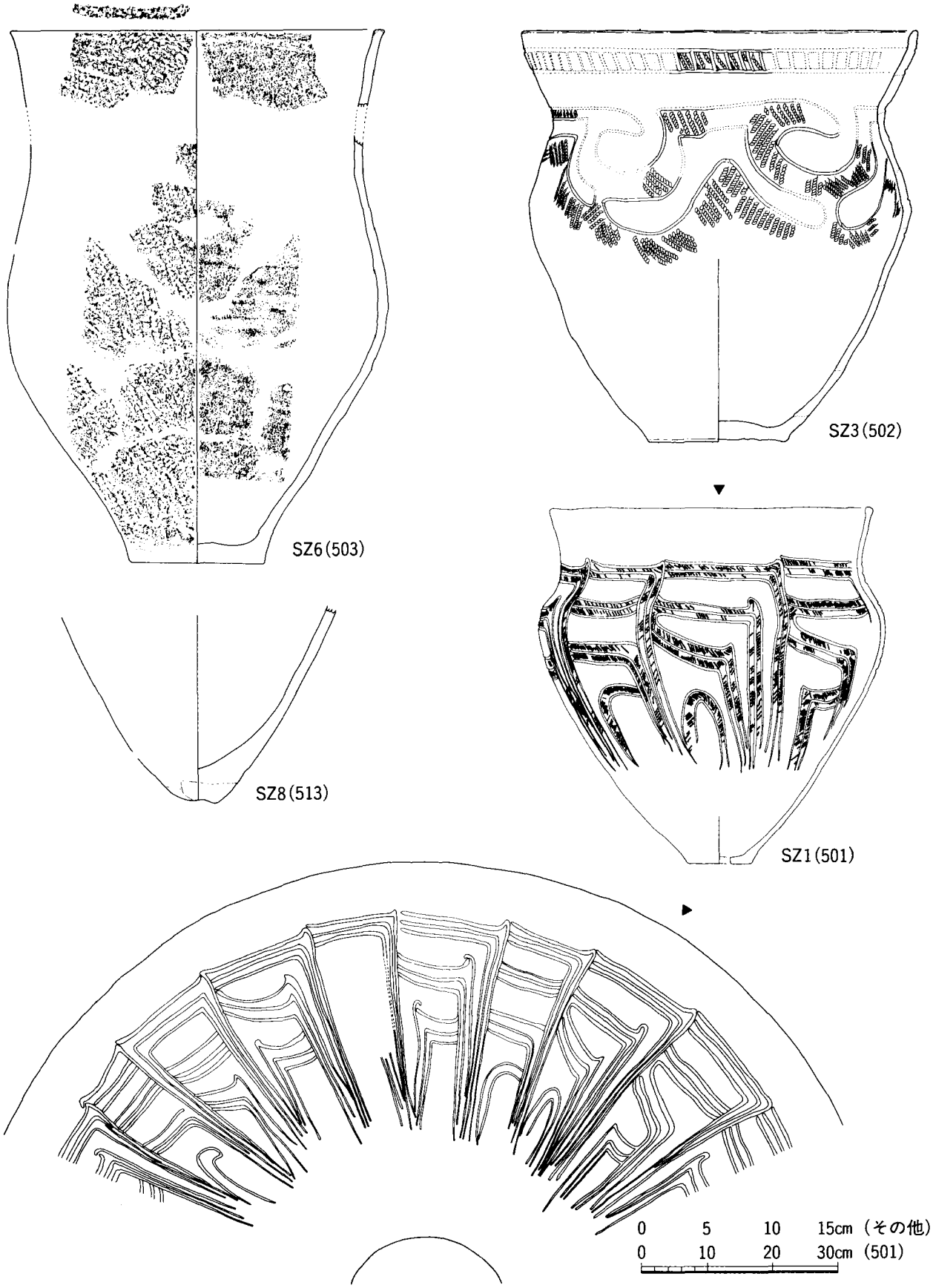


1　明褐色土
2　黄褐色粘質土
3　暗褐色土（しまり悪い）
4　褐色土
5　暗褐色土（しまりあり）
6　礫混じりの褐色粘質土
7　黄色粘質土
8　黄褐色砂質土（地山）

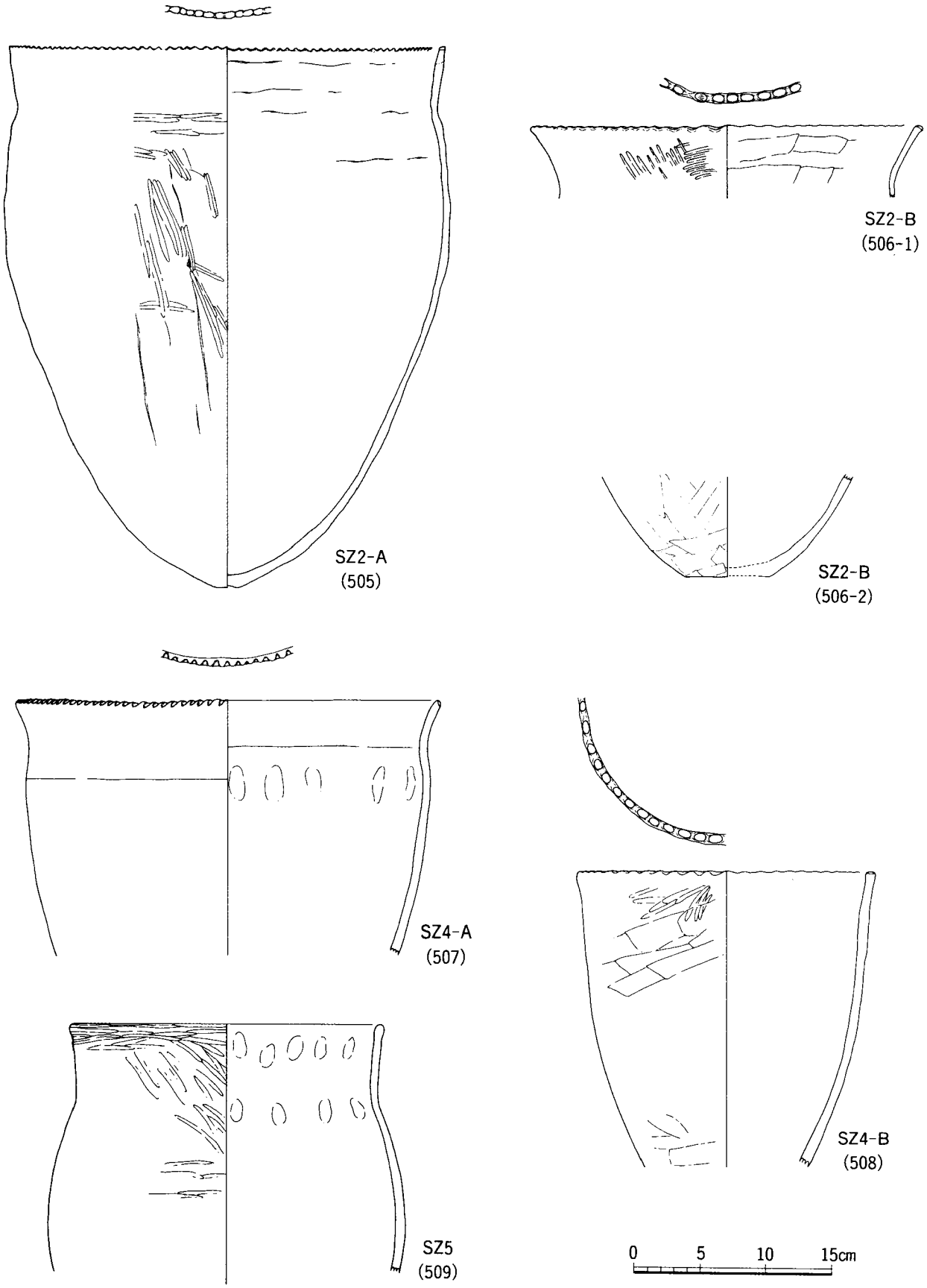
0　50　100m

0　50cm（遺構）
0　40cm（土器）

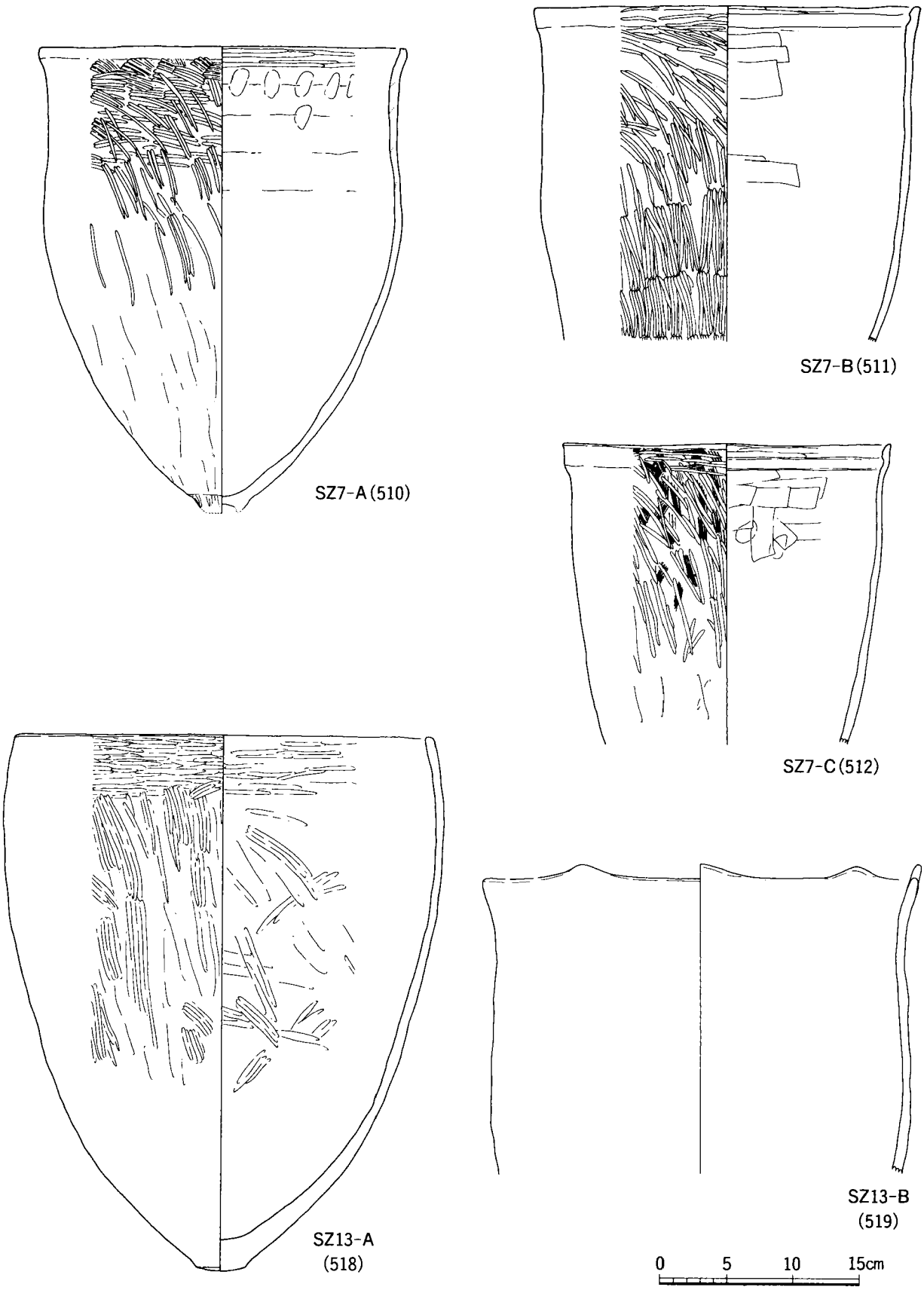
第82図　土器棺墓(3)・配石土坑



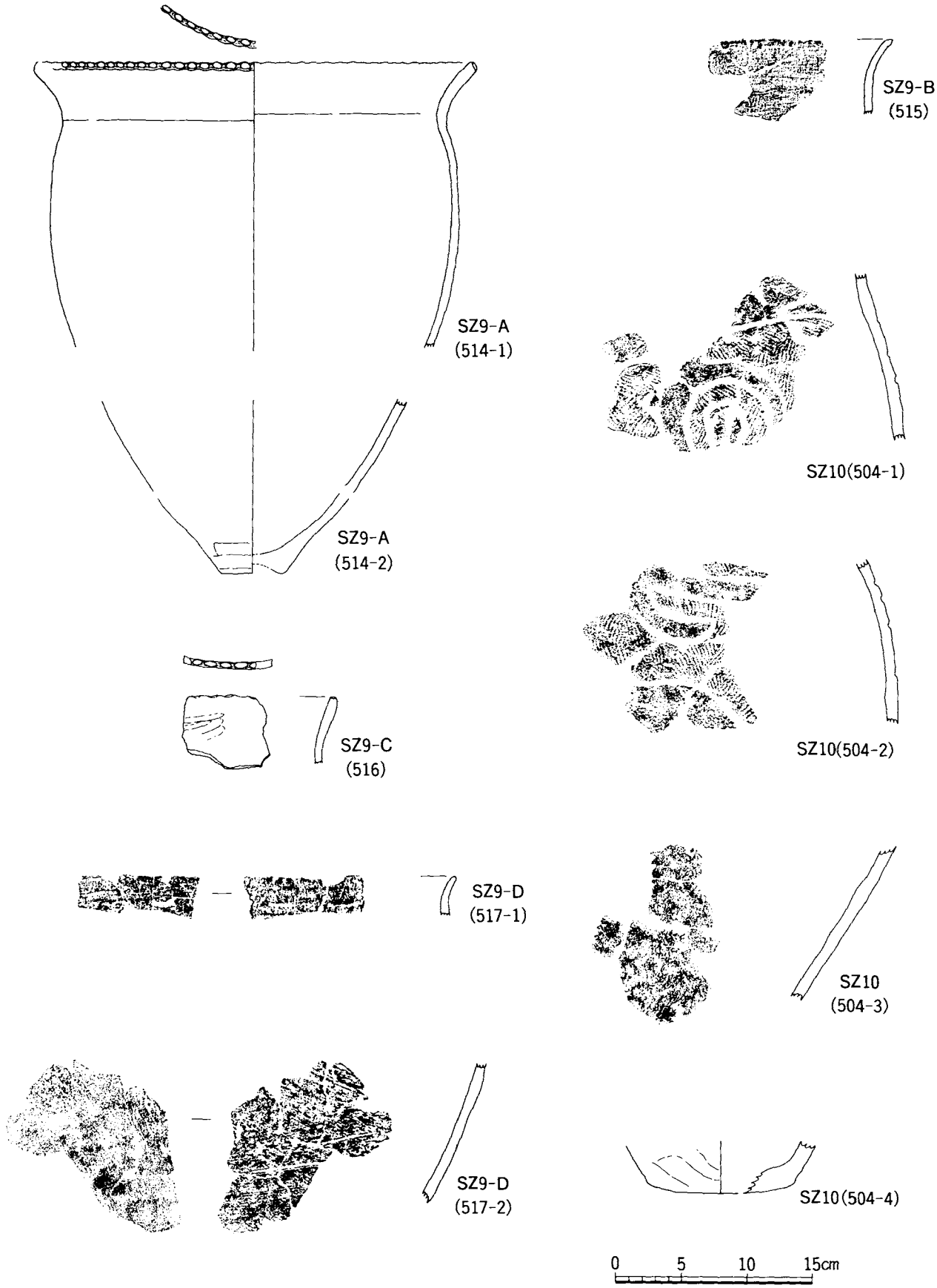
第83図　土器棺墓出土土器(1)



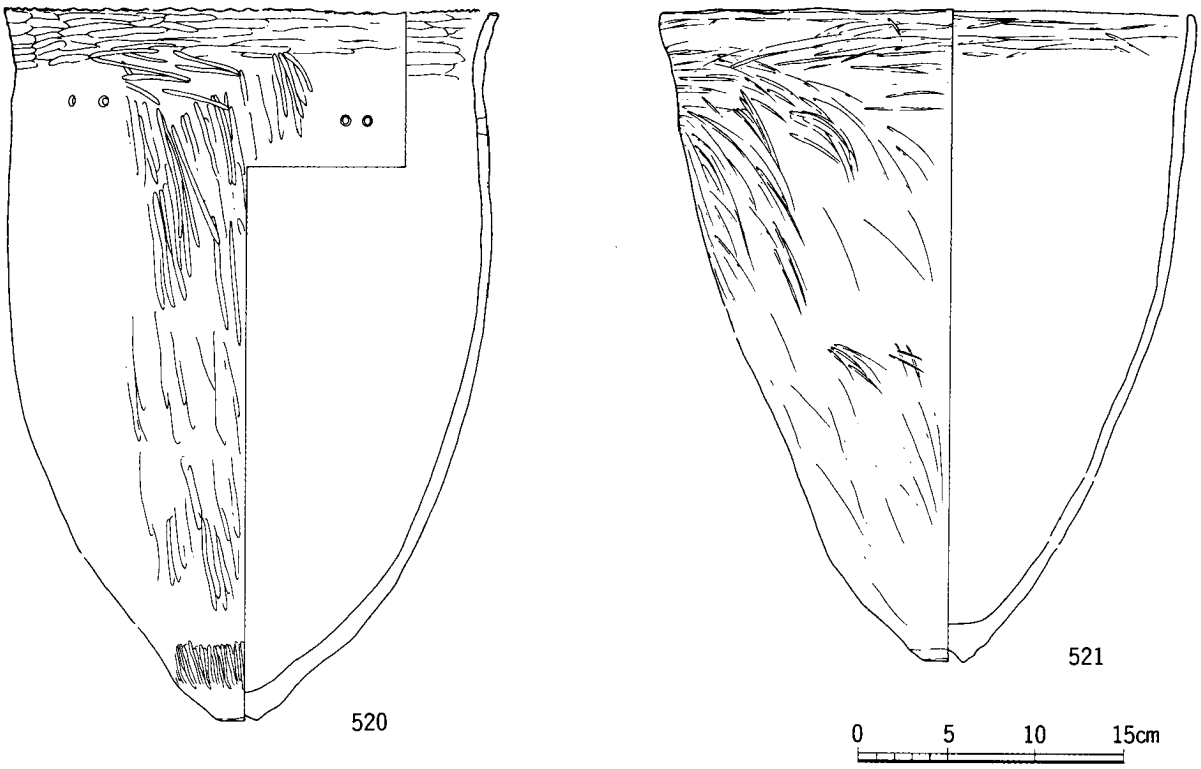
第84図　土器棺墓出土土器(2)



第85図　土器棺墓出土土器(3)



第86図　土器棺墓出土土器(4)



第87図　土器棺墓出土土器(5)

第４節　配　石　土　坑　（第82図、図版13）

各地の縄文時代遺跡から意図的に石を配した土坑が報告されており、様々な形態が存在することが知られている。本遺跡では長方形の掘り方に沿って扁平な川原石を立てて並べた「配石土坑」が１基検出されている。

９Ｋの杭の西に位置し、９Ｊグリッドと９Ｋグリッドにまたがっている。平面形は長軸125cm、短軸60cmの長方形を呈し、地山を浅いところで35cm、深いところで45cm掘り込んでいる。本来は掘り方を囲むように、くまなく石を配したと考えられるが、長辺側の石の一部は抜き取られたり、流失したりして現存しない。比較的扁平な川原石が４枚確認できるが、長軸に対峙する２枚に最も大きい石が使用されている。35×45cmと37×50cmを測り、30～35cmが地山面以下に埋設されていた。石の基部付近には黄色粘質土を敷いている。埋土は暗褐色土がすり鉢状に入り、中央付近に黄褐色粘質土が入る。遺物は検出されず、性格は不明であるが、土壙墓の可能性もある。なお、長軸方向はN27°Eである。

この他、詳細は確認できていないが、ＳＫ55・ＳＫ61・ＳＫ137が同様の配石土坑の可能性がある。

本遺構に類似するものは、旧徳山村地内では「はいづめ遺跡」で１基検出されており、「石囲

い遺構」として報告されている。その他、未報告であるが、「いんべ遺跡」・「上原遺跡」でも発見されている。「いんべ遺跡」の配石土坑では、長軸側の石に石皿を転用している。

（武藤貞昭）

第５節　その他の土坑・ピットと出土遺物

１．概　要

今回の調査で検出した土坑は223基、ピットは1,208本である。検出後すべてにそれぞれ通し番号をつけ、掘り下げを行った。攪乱と考えられるものも含まれるが、番号はそのままにしてある。住居跡等のプランや床面検出の状況からいっても、包含層としたII層・III層から掘り込まれたものが大部分であろうが、識別の困難さから、検出面をIV層に下げている。その結果、規模はIV層面における数値である。おおむね直径80cm以上のものを土坑で統一し、それ以下のものをピットとしている。また、現場作業の遅れと数の多さから、前述した土器棺墓、配石を伴うものを除いて、半割による埋土の記録および断面図の作成は行うことができなかった。そのため、遺物が出土した土坑に限り、データを一覧表（第５～７表）で一括して示し、形態等による分類を行うにとどめている。埋土の所見と深さ・断面形は記録がすべてそろっていないため、一覧表から除いた。ピットの一覧表は紙面の関係で割愛した。

検出された土坑・ピットは時期でみると、縄文時代中期～晩期、中近世、近代～現代のものに分けられる。また、中世以降の継続した集落が存在したため、多くの攪乱も含まれる。前述のようにIV層まで掘り込んだ痕跡があるものを対象としているため、多くは縄文時代のものと考えられる。縄文時代のものは、ほとんどが複数の小時期のものをふくんでいるため、中期、後期、晩期という大まかな区分にとどめ、それ以上の細分が可能なものは一覧表に明記したとおりである。時期別では中期のものが最も多く、縄文時代の約７割を占める。残りの３割が後晩期で、晩期のものが後期のものよりやや多い。

２．一覧表の表記について

本遺跡では磁北に合わせて４ｍメッシュでグリッドを設定した。それぞれのグリッド名は北東の杭の番号でよんでいる。土坑が複数のグリッドにかかるときは、多くかかっているグリッド名を使い、均等にかかるときは、北または東側のグリッド名を使っている。

規模は、長軸・短軸の長さを平面図上で測ったものである。

平面形は、次の５種類に分類した。

・円形　　（短径と長径の比が1：1.2以下）

第5表　土坑一覧表(1)

No.	グリッド	大きさ	平面形	切り合い	時期	備考	No.	グリッド	大きさ	平面形	切り合い	時期	備考
		長軸×短軸		＞切る、＜切られる					長軸×短軸		＞切る、＜切られる		
1	2 C	170＜×170	(楕円形)	＜P 1	晩期		32	5 E	130×80	楕円形	＜P 211＜P 212＜SB 1	中期	
3	2 D	100×80	楕円形	＜P 7＜SK 4	中期		33	6 E	189×104	不整形	＜P 218＜P 219＜P 229		
4	2 D	180＜×80	(楕円形)	＜P 11	中期？		36	6 E	129×78	楕円形	＜P 266＞P 267＞SK 63		
5	3 D	160×78	不整形	＜P 25＜P 27	後期？		37	7 E	154×136	円形	＜P 268＞SK 38		
6	2 E	130×70	不整形	＜SK 7			38	7 E	232×114＜	(不整形)	＜P 268＜P 303＜P 408	中期	
7	2 E	118×99	楕円形	＞SK 6＞P 33	中期？		39	8 E	170×114	不整形	＞P 300		土製円盤
8	3 E	91×62＜	(楕円形)		中期		40	8 E	130×69	不整形		中期	
10	3 C	190×170	不整形	＜P 89＞SB 6			41	8 E	140×89	隅丸方形			
11	3 D	115×60	不整形				42	8 F	530×286	不整形	＞SK 73＜P 414＜便所＜P 415		攪乱
12	3 D	160×90	楕円形	＜P 63＜P 64＞P 65	中期		43	9 E	126×80	隅丸方形	＜P 313＞SK 44	中期？	
13	4 B	169×103	楕円形	＜P 81＜P 82＞P 83＞P 84＞P 113	晩期		44	9 E	152×89	不整形	＜P 314＜P 315＜SK 43	中期	
14	4 C	150＜×80	(楕円形)	＞P 84＞SK 15＜P 118			45	10 E	90＜×56＜	(不整形)	＜P 330＜旧電柱	中期	
15	4 C	200＜×98	(不整形)	＜SK 14＜P 90＞SB 6			48	4 F	70＜×36＜	(不整形)	＜SK 27＜SK 47		
16	4 C	310×125	不整形	＜P 118＜P 119＜P 133＜SK 21			49	4 G	130×124	円形			
18	3 E	130＜×82	(不整形)	＜P 109＜SK 19	晩期		51	3 I	132×70	楕円形			
19	4 E	138＜×70	(不整形)	＞SK 18＞SB 1			52	4 I	140×82	隅丸方形			
20	4 E	108×80	隅丸方形	＞SB 1			53	4 I	240×59＜	(不整形)	＜SK 55		
21	4 C	102×101	円形	＞SK 16			56	4 H	256×34	不整形		晩期	
22	5 C	184×112	不整形	＞P 134＞P 135＞井戸＜P 136		攪乱？	57	5 H	210×98＜	(不整形)	＜井戸＞SK 58＞SK 59	晩期？	
24	4 D	214＜×59	(不整形)	＞P 144＞P 145＞P 146＜P 150＜井戸		攪乱？	59	5 H	260×30＜	(不整形)	＜SK 57＜SK 58＜P 374＜P 376	晩期？	
25	4 D	144×130	楕円形	＜P 149＜P 150＜P 151＜SB 1	中期？		60	6 F	142×100	楕円形	＜P 392＜P 394	中期	
26	4 E	126×50	不整形	＞SK 27			61	5 F	170×79	隅丸方形	＞SK 62	後期？	配石土坑
27	4 E	140＜×64	(不整形)	＜SK 26＞SB 1			62	5 F	160×49	(不整形)	＜SK 61	中期？	
28	6 C	216×42	不整形	＜P 165＜P 168＜P 169＜P 180＞P 167	中期		64	7 F	120×96	(隅丸方形)	＜P 406＜P 407	中期？	
29	6 D	114×56＜	(不整形)	＜P 170	中期		65	6 H	154×86	楕円形	＜P 452＜P 453＞溝状攪乱	現代	
30	5 D	121×82	楕円形	＞P 188＞P 189＞P 190＞P 192＞P 194			66	6 H	150×131	円形	＞便所	現代	
31	5 D	114×104	円形	＜P 212	中期		71	8 G	180＜×58	不整形	＜P 503		

第6表　土坑一覧表(2)

No.	グリッド	大きさ 長軸×短軸	平面形	切り合い ＞切る、＜切られる	時期	備考	No.	グリッド	大きさ 長軸×短軸	平面形	切り合い ＞切る、＜切られる	時期	備考
72	8 H	198×42	(不整形)	＜P 502＜P 503＜P 504			111	4 J	110×72	隅丸方形			
73	9 F	100＜×84	(楕円形)	＞SK 42＞SB 4	中期		112	3 K	234×114	不整形		晩期	
74	10 F	126×62	隅丸方形	＞SB 4	中期		113	3 K	120×104	不整形		晩期？	
75	10 F	168×62	不整形	＜P 595＜P 596	中期		115	3 K	96×62	楕円形		晩期？	
76	10 F	430＜	(不整形)	＜SK 75＜SK 78＜SK 79＜P 592＜P 593			116	2 L	100×69	楕円形		晩期？	
				＜P 594＜P 595＜P 596＜P 597＜P 598			117	2 L	180＜×80	不整形	＜溝		
				＜P 599＜P 601＜P 603			118	2 M	140×92	不整形			
77	10 F	204×30	不整形	＜P 587＜P 588＜P 589	中期		119	3 M	100×100	円形	＜P 800＞P 802	中期	
81	11 G	178×66＜	(不整形)	＜SK 890＜P 608＜P 689＜P 691	中期		120	3 L	74×64	不整形			
				＜P 692＜P 693			121	3 L	80×62	不整形		中期？	
83	10 H	124×66＜	(楕円形)	＜P 622＜P 629			123	3 M	96×79	楕円形	＞P 803	中期？	
84	9 H	140×65	不整形		中期？		124	3 M	80×78	円形	＞P 802＞P 803	中期？	
85	9 I	156＜×80	(不整形)	＜P 643＜P 644＜P 645＜P 647	中期		125	3 M	140×26	不整形	＞P 795	晩期？	
86	9 I	188×44	不整形	＜P 642＜P 643＜P 646	中期		126	3 M	92×64	楕円形	＜P 798＜P 799	中期	
87	11 I	106×80	(楕円形)	＜P 746＜たちわり			128	4 M	94×60	隅丸方形	＜P 805	中期	
88	11 F	282＜×140	(不整形)	＜SK 89	中期		129	4 M	89×86	円形		中期	
89	11 F	112×20＜	(不整形)	＞SK 88	中期		130	4 M	129×80	楕円形	＜P 806		
91	11 G	130＜×62	(楕円形)	＜P 695＜P 699＜P 694＞P 696			131	4 M	106×60	楕円形			
93	11 H	136×90	(楕円形)	＜P 724＜SK 94	中期？		133	4 J	129＜×79	隅丸方形	＜溝	後期？	
96	12 H	320＜×75	(不整形)	＞SK 95＞P 726＞便所＞SK 108	現代		134	5 J	100×94	円形			
100	12 H	110×54	不整形		中期		135	5 J	110×90	楕円形		後期？	
101	12 H	172×66	不整形	＞SK 102	中期		136	5 L	250×119	不整形	＜P 850＜P 851、SK 137＜SK 138		
102	11 H	114＜×58	不整形	＜P 743＜SK 101	中期		138	5 L	100×84	円形	＜P 849＜P 852	中期？	
103	11 I	300×92	楕円形	＞P 751			140	5 M	100×90	(円形)	＜P 861＜P 862	中期？	
105	11 I	168×110	不整形	＜P 754＜P 755＜P 756			141	5 L	240×120	不整形	＜P 846＜P 848	後期	
107	11 G	100×52	楕円形	＜P 704	中期？		143	6 K	140×59	不整形	＜P 840＞SK 142		
109	12 G	84×82	円形		中期		144	6 L	110×49	楕円形	＞SK 142	晩期？	

第7表　土坑一覧表(3)

No.	グリッド	大きさ 長軸×短軸	平面形	切り合い ＞切る、＜切られる	時期	備考	No.	グリッド	大きさ 長軸×短軸	平面形	切り合い ＞切る、＜切られる	時期	備考
145	6 L	180×98	楕円形				186	11 L	180×46＜	(楕円形)	＜P 1093＞SK 187		
146	6 M	249×90	不整形				188	11 L	159＜×46＜	(楕円形)	＜P 1088＞SK 187	中期？	
149	6 K	266＜×104	(不整形)	＜溝			189	11 L	160×74＜	(楕円形)	＞SK 190	中期末	
150	7 K	139×69	隅丸方形				190	10 L	162×39＜	(不整形)	＜SK 189	中期？	
155	8 K	130×84	楕円形				191	10 M	176＜×70	楕円形	＜溝	中期	
156	9 K	142×84	不整形	＞P 951			192	11 L	92×60	隅丸方形	＜P 1107		
157	9 J	350×59	不整形	＜井戸＞P 909＞P 918			193	11 M	138×64	不整形		中期？	
159	10 J	110×30	不整形	＞P 914			194	12 L	96×70	隅丸方形	＜P 1109		
161	10 K	280×68	楕円形	＞P 926＞P 927＞P 928			195	12 M	84×69	(楕円形)	＜溝		
162	10 K	110×54	楕円形				202	4 N	124×80	楕円形	＜SK 201	中期	
163	10 K	120×39	楕円形		中期？		203	5 N	160×59	楕円形	＜P 1192	中期後葉	
164	10 L	110×62	不整形		中期？		204	4 M	74＜×71	円形	＞SK 205	中期	袋状土坑
165	10 J	82＜×58	(隅丸方形)	＜P 1014＜P 1015			208	5 M	100×59	楕円形	＞SK 206＞SK 207＞SK 209＞SK 210		
166	12 J	138×72	楕円形		中期？						＜P 1195		
168	11 J	90×44	楕円形	＞SK 169＞SK 172			212	5 N	80×78	円形	＞P 1196	中期	
170	11 K	182×70	楕円形	＞P 1033＞SK 169＞SK 171			213	5 N	110×88	楕円形	＞P 1198＜P 1199	中期	
172	11 K	129×54	不整形	＞SK 171＞SK 173＞SK 168			214	5 N	70×38	楕円形		中期	
173	11 K	130＜×54	(不整形)	＜SK 172	中期？		215	5 N	110×89	楕円形		中期	
174	12 K	168＜×39	(楕円形)	＜P 1059			216	5 M	119×72	楕円形	＞SK 217＞SB 2	後期？	
175	12 K	140×64	不整形				217	5 N	194×100	楕円形	＜SK 216＞SB 2	後期	
176	11 K	114×62	楕円形		中期？		218	6 N	168×112	楕円形	＞SK 219		
177	11 K	150×140	隅丸方形	＜P 1092＜P 1095			220	6 N	60×39	楕円形	＞SK 222		炭化種子
178	11 K	90×59	炭丸方形	＞P 1098	中期？		221	6 N	120×70	楕円形	＞SK 222	中期	
179	12 K	380×44	不整形	＜P 1056＜P 1057＜P 1058			223	6 M	90×82	(円形)	＜SK 222＜SK 220		
180	13 K	204×202	円形	＜SK 181	中期？								
182	12 K	132＜×60	(不整形)	＜P 1119＜P 1120									
183	12 K	139×50	不整形										

・楕円形　（短径と長径の比が1：1.2以上）

・双円形　（円形が２つつながった形、繭玉形）

・隅丸方形

・不整形

時期については、出土した土器の時期とした。複数の時期の土器片が出土している場合は、明らかに混入と推定される場合を除き、最も新しい遺物の時期をとった。

平面形の分類をはじめ、一覧表の様式については、『松本市坪ノ内遺跡』（1990松本市教育委員会）を参考にした。

３．遺　　物

その他の土坑・ピットから出土した遺物については、それぞれの遺構の性格がつかみにくいうえ、遺構数および出土点数も多いため、遺構別に記述する方法は避けた。その他の土坑・ピット出土の遺物として一括して分類し、報告する。なお、中近世の遺物については、包含層出土遺物と一括し、次章で報告する。また、石器類については図示のみとし、包含層出土のものと一括して、次節で報告する。

(1)縄文時代の土器

その他の土坑・ピットから出土した縄文時代の土器は、土坑4,850点、ピット3,867点で、合計8,717点にのぼる。時期は、ほとんどが中期中葉から晩期中葉までのものである。

①中期の土器（第88～103図、図版31～33）

前述した中期土器分類によりつつ、順に記述する。

Ｃ１群の土器（第88・89図　1685～1737、図版31）

本群は「船元II・III式」に類似する土器群である。Ａ～Ｅの５類に細分した。

Ａ類（1685～1696）　縄文を地文とし、貼付隆帯上に爪形文や刺突文・刻目を施すものである。撚りの粗い縄文を地文とし、貼付隆帯がなく、爪形文を施すもの（①）に(1685)がある。口縁沿いに幅１cmの爪形文を施し、その下に幅９mmの押し引き状の刺突で円文を描く。口端に刻目を施し、口縁内面に幅６～７mmのわずかな縄文肥厚帯をもつ。(1686)～(1689)は、撚りの粗い縄文を地文とし、低い貼付隆帯上に爪形文を施すもの（②）である。(1686)は口縁内面に幅７mmのわずかな縄文肥厚帯をもつ。(1690)・(1691)は、撚りの粗い縄文を地文とし、高い貼付隆帯上に爪形文を施すもの（③）である。(1690)は口縁内面に幅2.7cmの縄文帯をもつ。原体

は外面のものと同じである。(1692)～(1694)は、地文が普通の縄文で、低く幅の広い隆帯上に大きな爪形文を施すもの（④）である。爪形の幅は1.4～1.8cmある。(1692)は口縁内面に爪形文帯をもつ。(1695)・(1696)は、篦状工具による刻目隆帯のもの（⑤）である。(1695)は普通の縄文を地文とし、幅8㎜の刻目隆帯をもつ。(1694)は撚りの粗い縄文を地文とし、隆帯の幅は狭い。口縁内面に幅1.2cmの縄文帯をもつ。

B類（1697～1714）　縄文を地文とし、幅の狭い貼付隆帯の両側に半截竹管による平行沈線文を施すものである。(1697)～(1709)は、撚りの粗い縄文が地文のもの（①）である。(1697)～(1700)は、口端から口縁内面にかけて縄文帯をもつ。(1709)は隆帯による三角または紡錘形の区画内に、半截竹管による刺突を充塡している。(1710)～(1713)は、普通の縄文が地文のもの（②）である。(1713)は隆帯による区画の一部に平行沈線を充塡する部分をもつ。

C類(1715～1723)　縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線文を施すものである。(1715)～(1718)は、撚りの粗い縄文が地文のもの（①）である。(1715)は口端が角ばったもので、口端および口縁内面に縄文を施文する。口縁内面はわずかに肥厚帯になる。(1719)は、普通の縄文が地文のもの（②）である。(1720)～(1723)は、縄文の種類が判別できないが、本類に属する。いずれも口縁内面に縄文帯をもつ。(1721)は口端が尖り、口縁内面の縄文帯もわずかに肥厚し、幅3.5cmを有する。

D類（1724～1728）　地文が無文のものを一括して本類としている。(1724)～(1727)は、幅狭の隆帯の両側に平行沈線を施すもの（①）である。(1724)は口端が尖り、口縁内面に縄文帯をもつ。(1728)は、幅狭の貼付隆帯の上に刻目を施すもの（②）で、波状口縁を呈し、口唇部にも刻目を施している。

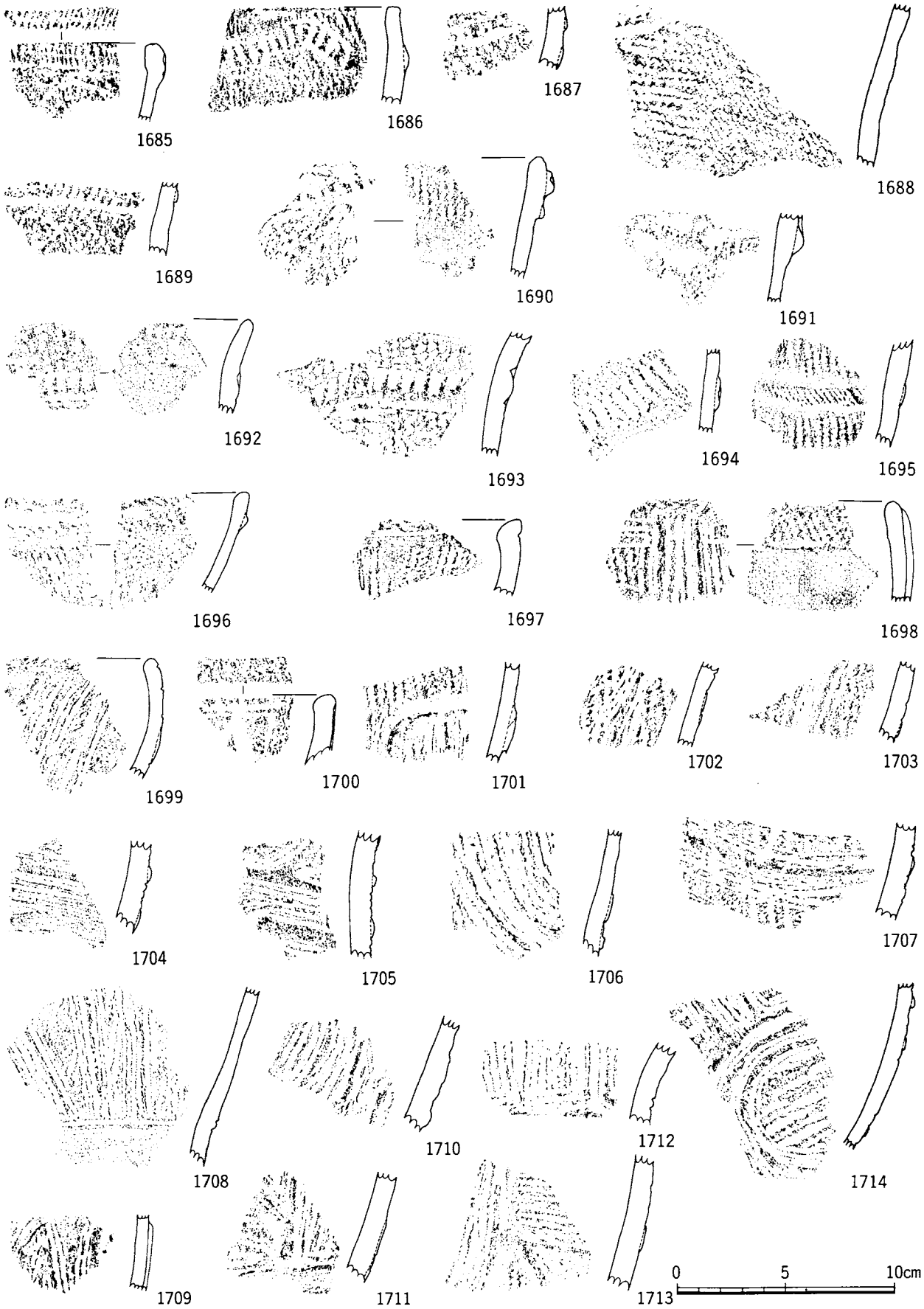
E類（1729）　縄文を地文とし、素隆帯をもつものである。(1729)は口縁を内側に折り返している。貼付隆帯には一部剝落しているが円文がある。

その他、本群に属するものに(1730)～(1737)がある。(1730)は撚りが粗く節の細長い縄文を地文とし、口縁内面に縄文帯をもつ。(1732)～(1737)は胴部片である。いずれも撚りが粗く節の細長い「船元式」特有の縄文を施すものである。

C2群の土器（第89～91図　1738～1778、図版31）

本群は「船元III式」が在地化したと考えられるもので、貼付隆帯による施文を基調とするキャリパー形口縁をもつ器形の土器群である。A～Eの5類に細分した。

A類（1738～1748）　縦位の貼付隆帯を比較的密に施し、隆帯間に櫛描沈線を引くものである。(1738)は、約1.5cmごとに縦位の隆帯を口縁から頸部まで貼り付け、頸部には横位の貼付隆帯がめぐる。口縁近くに部分的に横位の隆帯を施すところもある。全体に貼付隆帯の剝落が激しい。内面は口端部直下から頸部近くまでの範囲に炭化物が付着する。(1739)・(1740)は同一個体片である。(1741)や(1742)のように隆帯がヘアピン状になったり、紡錘形を呈するものも



第88図　その他の土坑・ピット出土土器(1)　Ｃ１群

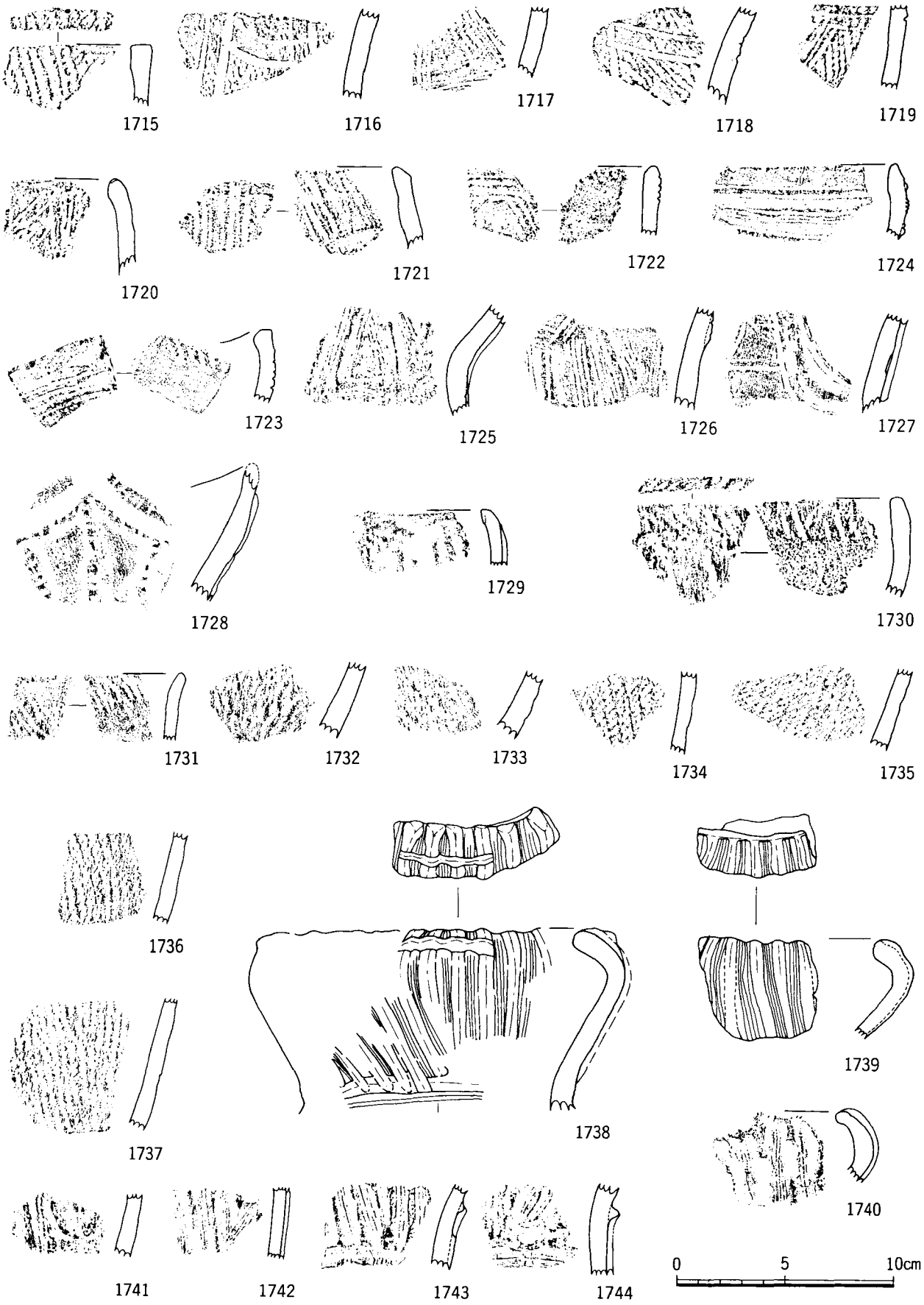
ある。(1743)・(1744)は頸部片であるが、頸部には貼付隆帯を横位に施し、口縁部との区分を示している。(1743)はその下は縦位の隆帯がなく、縦位の櫛描沈線のみが確認できる。(1744)は横位の櫛描沈線を施している。本類の胴部は、基本的には口縁部と同様の施文であるが、頸部が無文帯になったり、横位の櫛描沈線を施す文様帯になったりするものがあると考えられる。(1743)のように、縦位の櫛描沈線のみの部分が頸部文様帯か胴部文様帯かは不明である。(1748)はやや異質であり、波状口縁を呈し、角ばった端部にも沈線を施す。

Ｂ類（1749～1758）　縦位の貼付隆帯を比較的密に施し、隆帯間に櫛描沈線が見られないものである。(1749)～(1751)は口縁部片である。(1749)は、貼付隆帯による紡錘形か三角形のモチーフがあり、その間にＶ字形の貼付が重なる。貼付は口端部から施し、左端のやや太い隆帯上には刻目を施す。(1750)も口縁にＶ字形の貼付がつく。(1751)は折返口縁を呈する。(1752)・(1753)は、基本的には縦位の隆帯であるが、一部円環状のモチーフになると思われる。(1754)は頸部片であるが、口縁部文様帯との境に横位の貼付隆帯をめぐらし、頸部は無文である。Ａ類と同様に、本類の胴部も基本的には口縁部と同様の施文である。

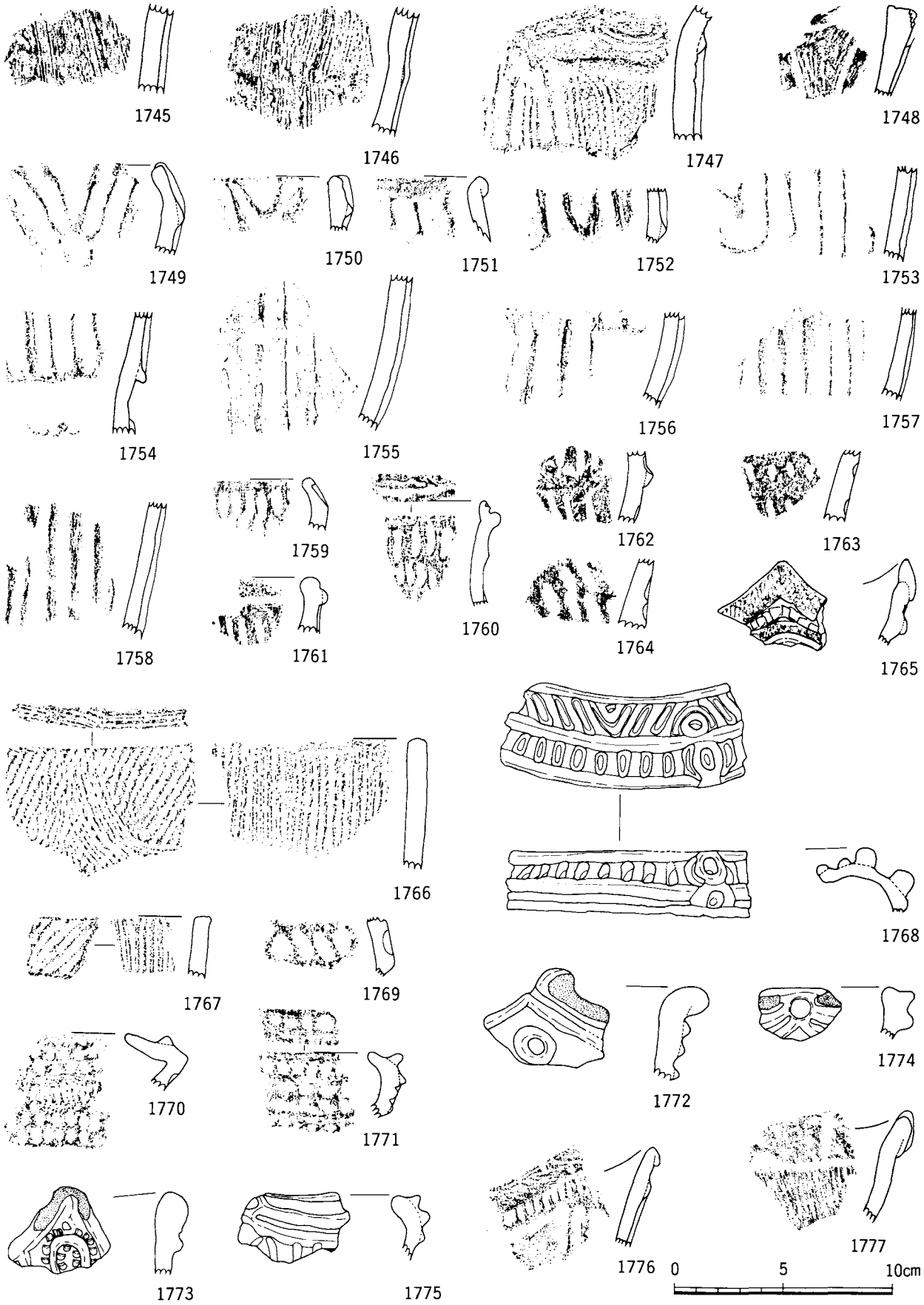
Ｃ類（1759～1764）　縦位の短沈線をくまなく施すもので、「船元III式Ｅ類」に分類されたものに類似する。口縁部は、(1759)のように内彎するものと、(1760)・(1761)のように外反するものとがある。(1759)は、胎土・焼成とも良好で、２列目の短沈線は１列目の短沈線の間に位置するように施されている。(1760)・(1761)は口縁がやや肥厚し、端部に沈線が入る。(1762)は内彎する口縁近くの破片と思われるが、Ｖ字形を呈する貼付隆帯がある。

Ｄ類（1765～1767）　縄文を地文とするその他のものを一括した。(1765)は波状口縁を呈する複合口縁の土器である。口縁に沿って貼付隆帯を施し、複合口縁部との間に押し引きを入れている。複合口縁部と貼付隆帯には縄文を施す。口縁内面は面取り状の調整を施し、口端を尖らせている。小片のため詳細は不明であるが、類似する資料から推測すると、地文は縄文を施すと考えられる。(1766)はＬＲの縄文を地文とし、口縁部に５本１単位の櫛描沈線を連弧文状に引く。口端には口縁に沿って櫛描沈線を施す。口縁内面は、外面に施文したものとは異なる５本１単位の工具により、破片全面に縦位の櫛描沈線を引いている。

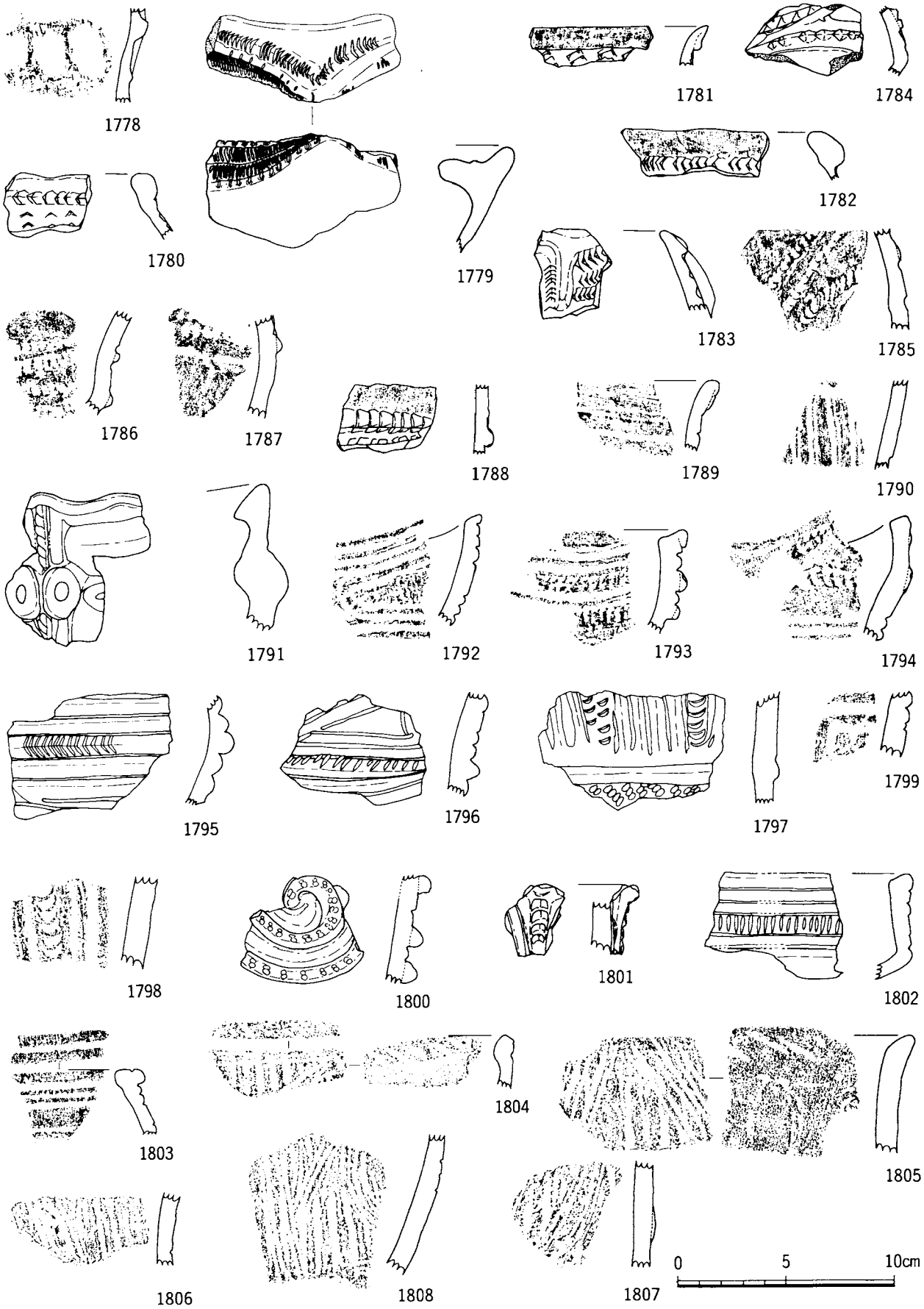
Ｅ類（1768～1778）　縄文を施さないその他のものを一括した。(1768)～(1771)は口縁が大きく内彎するもの（①）である。(1768)は外面に赤色顔料を施し、浅鉢の可能性がある。屈曲部に２ヵ所、横位の貼付隆帯をめぐらせ、縦位の貼付隆帯で細かく仕切る。平面部分は上下交互に円環の貼付を中心に同心円的モチーフをもつ。立面部分は一定間隔で円環の貼付を入れている。(1770)は口縁が「く」の字形に屈折する。屈折部に隆帯をつくり、爪形文を施す。その他の部分は刺突を充填する。内面は屈折部の上まで炭化物が付着する。(1771)も類似したタイプで、口縁部に横位の隆帯を貼り付け、端部および隆帯間に刺突を充填する。内面は口縁まで炭化物が付着する。その他のもの（②）には様々なバリエーションがある。(1772)は左右非対



第89図　その他の土坑・ピット出土土器(2)　Ｃ１・２群



第90図　その他の土坑・ピット出土土器(3)　　Ｃ２群



第91図　その他の土坑・ピット出土土器(4)　Ｃ２～６群

照の波状口縁で、向かって右側の口唇部に太い貼付がつく。波頂部よりやや左にずれて波状と円環状の貼付が位置する。(1773)も波状口縁で、波頂部に円環状の貼付が位置するが、貼付沿いに刺突が入る。(1774)・(1775)は口縁部分が肥厚するキャリパー形口縁の土器で、口縁沿いに連弧文状に貼付隆帯を施す。貼付の集約部に指頭大の刺突を入れている。その下は縦位の沈線あるいは短沈線を施す。(1776)は波状口縁で、口縁から1.5cm離れて低い貼付隆帯を施す。口唇部は肥厚させ縄文を施している。口唇部と貼付隆帯の間にＩ字形の爪形文を入れ、波頂部下には２本の縦位の低い貼付を施す。地文は無文である。(1777)は地文が縦位の条線文で、複合口縁である。複合口縁部に雑な刻目が入る部分がある。(1778)は貼付隆帯の間を指腹で押さえ調整しているが、雑な感じがする。Ｂ類に近いタイプと思われる。

Ｃ３群の土器（第91図　1779～1790、図版31）

本群は、貼付隆帯に沿って「く」の字状の連続刺突文を施した土器が特徴的で、「北屋敷式」に類似する土器群である。その他の土坑・ピットから出土しているものは、２点を除いてすべてＡ類に属する。

(1779)は、胴部から大きく外反した器形が口縁で大きく内彎し、角口縁とよばれる平面形が多角形を呈する口縁部をもつものである。角部に挟まれた区画はレンズ状を呈し、上下２段に非常に密な連続刺突を施す。周囲の縁には刻目を入れている。内彎した平面形部分にも角口縁に沿って「く」の字状の連続刺突を施文する。(1780)～(1783)の４点も口縁部片であるが、いずれも肥厚した複合口縁をもつ。(1780)は肥厚した口縁沿いに横位の刺突をめぐらせるが、その下は縦位に刺突列を充塡している。(1781)は、折返状の複合口縁部は比較的薄手で、口縁は外反し、縦位に刺突列を充塡している。(1783)は肥厚した口縁から縦に隆帯がのび、隆帯の左側は隆帯沿いに、右側は横位に刺突列を施す。

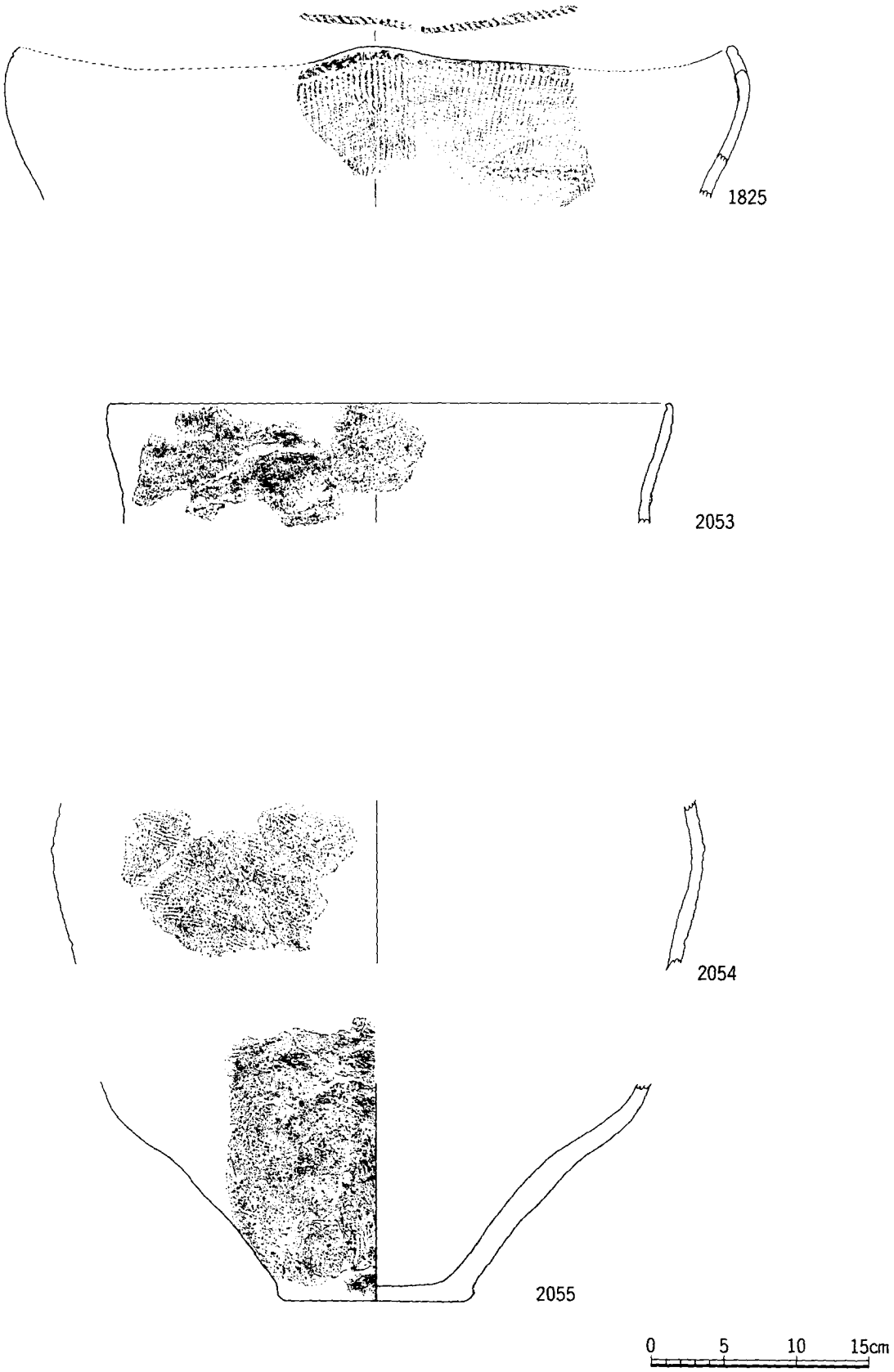
(1789)・(1790)の２点は、半截竹管を伏せて引いたような見かけ隆帯状の集合沈線を施すもので、Ｂ類に属する。(1789)は肥厚した複合口縁をもち、横位に集合沈線を施している。(1790)は縦位に集合沈線を施す。

Ｃ４群の土器（第91図　1791、図版31）

中期中葉の信州系の土器群で、Ｐ157からＡ類にあたる「勝坂式」系の土器片が１点出土している。(1791)は、暗赤褐色を呈する堅緻な精製土器で、搬入品と考えられる。内外面とも赤色顔料が認められる。波状口縁の小突起部から「ねじり棒」状の隆帯を中央にして隆帯が垂下し、途中に眼鏡状の把手を配する。

Ｃ５群の土器（第91図　1792～1803、図版31）

中期中葉の北陸系の土器群で、半截竹管による半隆起線文を主文様とする土器である。「古府式」に類似する深鉢および台付鉢類をＡ類とし、「上山田式」～「古府式」に類似する浅鉢類をＢ類とした。



第92図　その他の土坑・ピット出土土器(5)

Ａ類(1792～1801)　(1792)～(1794)は口縁部片である。いずれも波状口縁を呈する。(1792)は半隆起線を横位に引くが、中央にヘアピン状に引いて区画をつくる。区画内は縄文を充塡する。(1793)・(1794)は基隆線上に半截竹管の内面による押し引きを施すが、(1794)の場合は、半截竹管の中央に切り込みを入れて引いた時に生じるような細い浮線が残る。(1795)も口縁部近くの破片である。横位の半隆起線を密に引く。中央の基隆線上に爪形の連続刺突が施されるが、中央に刺突の残存部が節のように残る。(1797)・(1798)は「古府式」の新しい部類の胴部片である。胴上部と胴下部を横位の半隆起線で区分する。上は縦位の半隆起線を引き、数条おきに爪形の刺突を充塡する区画をつくる。下は縄文を充塡する。(1799)は半隆起線に囲まれた区画内に抉りを入れる部分がある。(1800)は貼付の渦文部分であるが、上に縄文原体を押圧している。(1801)は口縁部の縦位の貼付破片で、(1794)の同一個体である。

Ｂ類 (1802～1803)　(1802)・(1803)とも内面の調整がしっかりしており、赤色顔料が付着している。ともに口唇部に基隆帯がつく。半隆起線文に挟まれた口縁部文様帯は、(1802)は縦の刻目を充塡するが、(1803)は無文である。

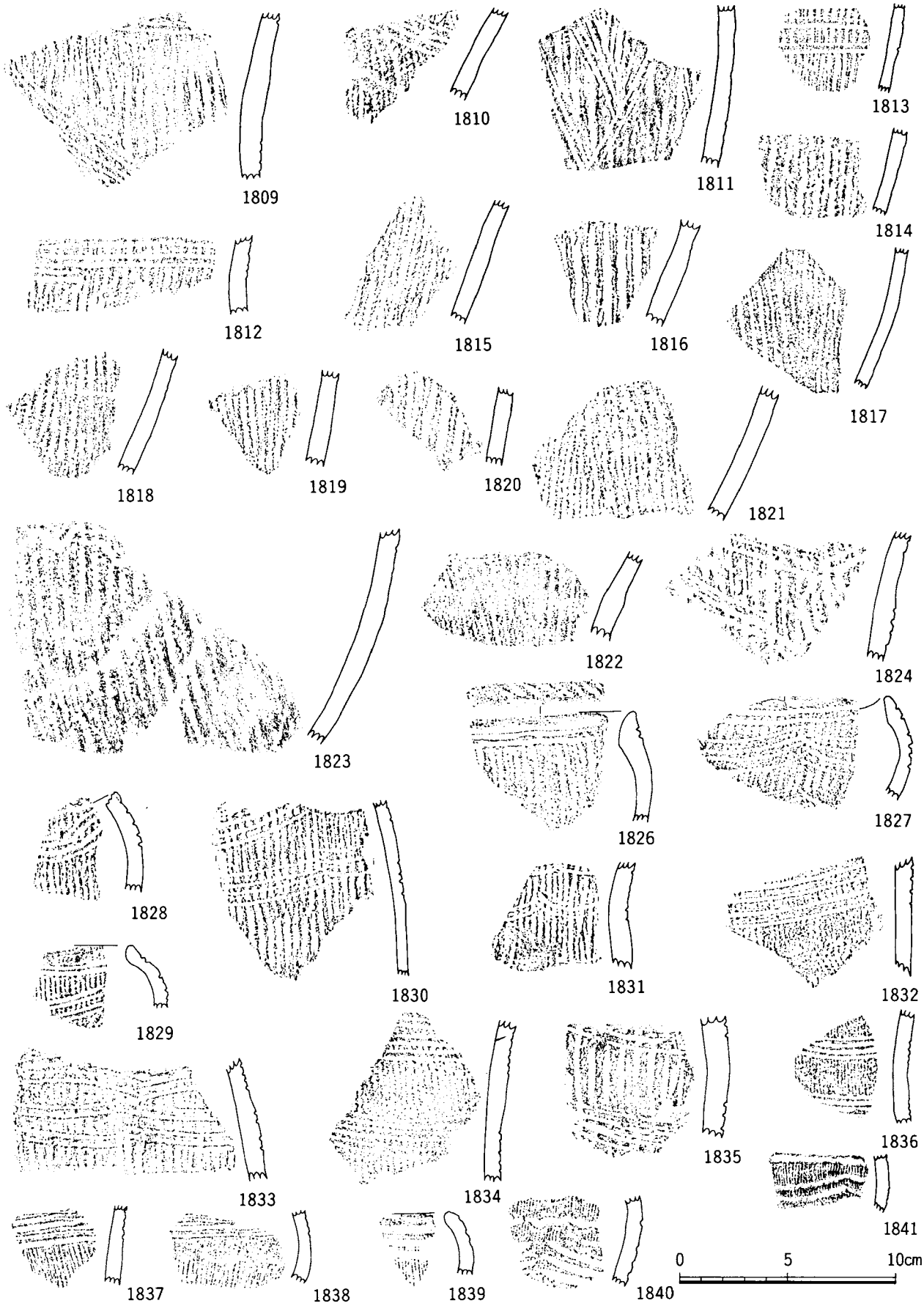
Ｃ６群の土器（第91～94図　1804～1858、図版31・32）

本群は、縄巻縄文や撚糸文を地文とし、平行沈線文あるいは沈線文を施すキャリパー形口縁の土器群で、「船元Ⅳ式」・「里木Ⅱ式」に類似する土器を一括している。Ａ～Ｆの６類に細分した。

Ａ類 (1804～1824)　縄文の条が交互に深浅に押捺された縄巻縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線文を施すものである。「船元Ⅳ式」に比定できる。(1804)・(1805)は口縁部片である。(1804)は口縁沿いに平行沈線を引き、その下に連弧文状に平行沈線を引く。端部外面と口縁内面にも縄巻縄文を施文し、口縁内面は幅1.2cmのやや肥厚した縄文帯となる。(1805)は端部内面を面取りして口端が外反気味に尖る。面取りした口縁内面を縄文帯とする。外面は口縁から左傾・右傾の平行沈線をそれぞれ数条引いている。(1806)～(1824)は頸部あるいは胴部片である。(1806)・(1807)は低い隆帯を伴い、隆帯に沿って平行沈線を引く。(1824)は波状や円弧状の平行沈線文を施す前に、地文の縄文の上に縦位の平行沈線を全面に引いており、やや特異なものである。

Ｂ類 (1825～1845)　撚糸文を地文とし、平行沈線文あるいは沈線文を施すものである。「里木Ⅱ式」に比定できる。半截竹管による平行沈線文を施すものを①種とし、やや幅のある沈線文を施すものを②種とした。さらにコンパス文状の波状文を施すものを③種とした。

①種には(1825)～(1838)がある。(1825)はゆるやかな波状口縁を呈する。地文は比較的太い縄文の絡条体を転がしている。口縁沿いと頸部無文帯の境に細かい波状の平行沈線を施すが、非常に雑である。連弧文を呈する平行沈線の連結部には８の字形と紡錘形を平行沈線で描く。口端内面には縄文を施す。(1826)は端部を外反気味に尖らし、口端内面に縄文を施す。(1827)



第93図　その他の土坑・ピット出土土器(6)　Ｃ６群

も端部が尖るが、口端内面への施文はない。ともに比較的太い撚糸文を地文とする。(1828)・(1829)は比較的細かい撚糸文を地文とする。端部はともに尖るが、(1828)の口端内面には撚糸文が施される。胴部片では、(1830)～(1835)が比較的太い撚糸文を地文とし、(1836)～(1838)は比較的細かい撚糸文を地文とするものである。

②種には(1839)～(1844)がある。細かい撚糸文が地文になるが、(1844)はやや太めで巻き方の粗い絡条体を転がしている。

③種には(1845)がある。端部は丸くおさめ、口縁沿いにコンパス文で波状文を引く。地文は磨滅が激しいが、非常に細かい撚糸文を施している。

Ｃ類（1846～1850）　撚糸文を地文とし、口縁沿いに交互刺突による浮線状の見かけ波状文をもつものである。(1846)は比較的波状文が強調されているが、(1849)では刺突の方が目立つようになり、(1850)では波状文は意識されなくなる。地文は概して細かい撚糸文を施し、横位の沈線は半截竹管で平行沈線を引くものと、細い棒状工具を用いるものとがある。器厚は概して薄手になる。(1849)は内彎度も大きく、Ｃ７群Ａ類に近い。

Ｄ類(1851～1855)　撚糸文を地文とし、Ｂ・Ｃ類にあてはまらないものを本類とした。(1851)～(1853)は、口縁沿いに刺突を入れる。(1852)は撚糸文が左傾する。(1853)は沈線の渦文を伴う。(1852)・(1853)は、器厚も薄手で口縁の内彎度が大きく、Ｃ７群Ａ類に近いタイプである。(1854)は口縁沿いの波状文を貼付で施す。(1855)は口縁沿いの平行沈線が押し引きに近い引き方である。

Ｅ類（1856～1857）　撚糸文を施すだけのものである。(1856)は、キャリパー形を呈する口縁部分に、やや右上がり気味ではあるが横位に撚糸文を施す。頸部付近からはやや左傾気味の縦位の撚糸文を施す。(1857)は端部がやや外反気味に尖り、口縁内面に横位に撚糸文を施す。外面は縦位の撚糸文である。

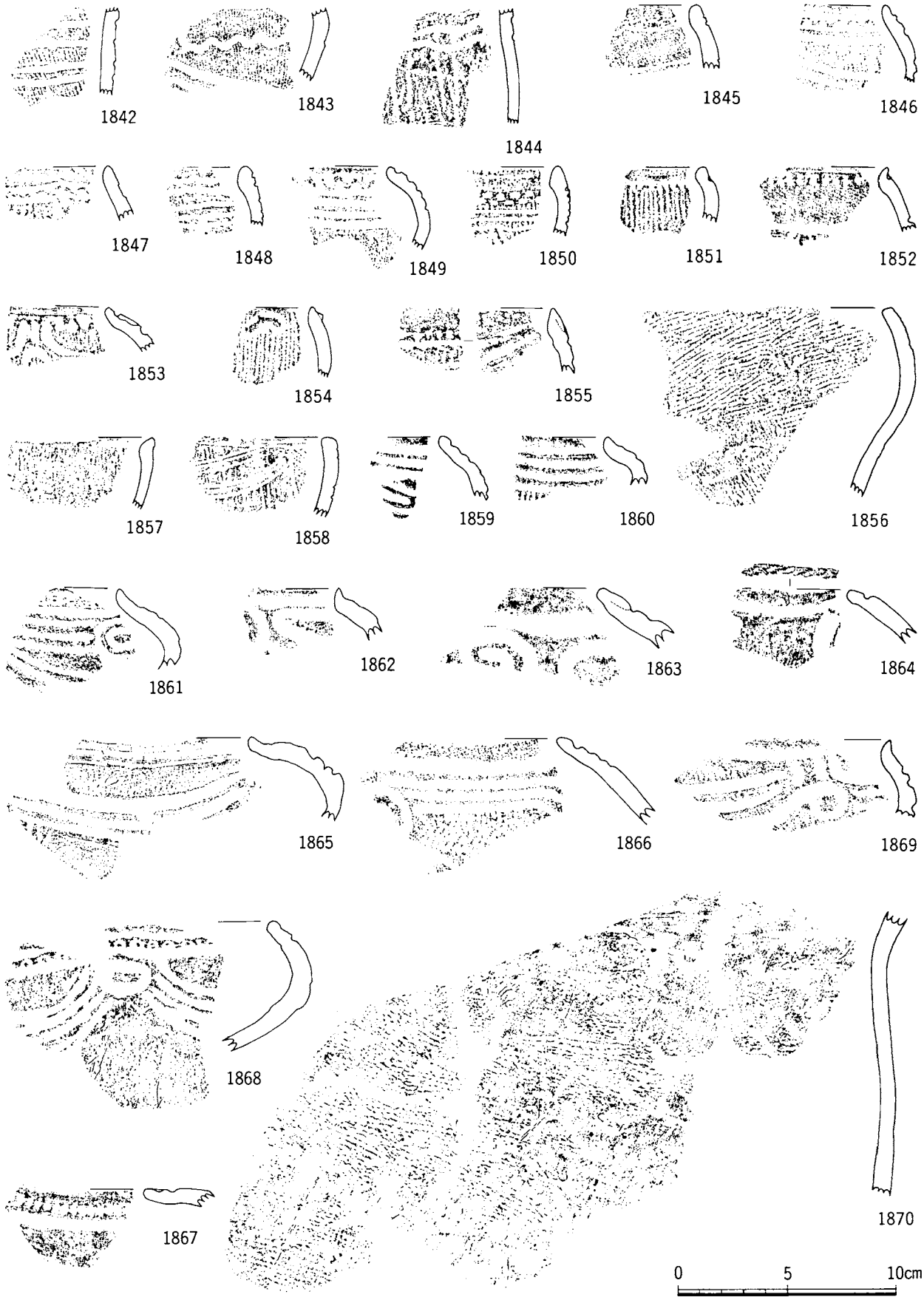
Ｆ類（1858）　地文が条線文で、「里木III式」に類似するものである。(1858)は縦位の条線文を地文とし、連弧文状の平行沈線を引く。端部にも口縁に沿って条線を引く。

Ｃ７群の土器（第94・95図　1859～1903、図版32）

本群は、キャリパー形口縁をもち、沈線や貼付による渦文と円弧文が施される土器群で、「咲畑式Ａ類」あるいは「中富IV・Ｖ式」として報告されているものである。まとまった資料は第４号住居跡において紹介したとおりである。口縁部が強く内彎するもの（Ａ類）と、内彎した口縁部がさらに外反気味に立ち上がるもの（Ｂ類）とに分類した。

Ａ類（1859～1886）　本類は口縁部が強く内彎するものであるが、施文により、沈線によるモチーフのもの（①種）、そうめん状貼付によるモチーフのもの（②種）、そうめん状貼付＋押し引きによるモチーフのもの（③種）に細分した。

①種には(1859)～(1871)がある。大部分は小片で、詳細については把握しにくいが、口縁に



第94図　その他の土坑・ピット出土土器(7)　　Ｃ６・７群

沿っての沈線と連弧文状の沈線に渦文の組み合わせが主流を占める。沈線間は無文のものが多いが、(1866)は縄文を充塡し、(1865)は縄文を地文とする。(1860)は撚糸文が確認できる。(1867)は口縁沿いの沈線に刺突を加える。(1868)は口縁がゆるやかな波状になり、口縁沿いに竹管状工具を垂直に押した刺突を施す。連弧文沈線が集約する波頂部に、横長の円環文を沈線で施している。その他は平口縁と思われるが、(1863)・(1866)は折り返し状の複合口縁をもつ。

(1869)・(1870)は同一個体の大破片である。内彎した口縁部は、口唇部で外反して立ち上がる。撚糸文を縦位に施して地文とし、沈線で連弧文を描くが、連結部分に縦位3本の短沈線を伴う渦文を配置する。頸部は無文になるが、胴部は横位に撚糸文を施している。本群に特徴的な、頸部から胴上部に配する連弧文沈線は見られない。

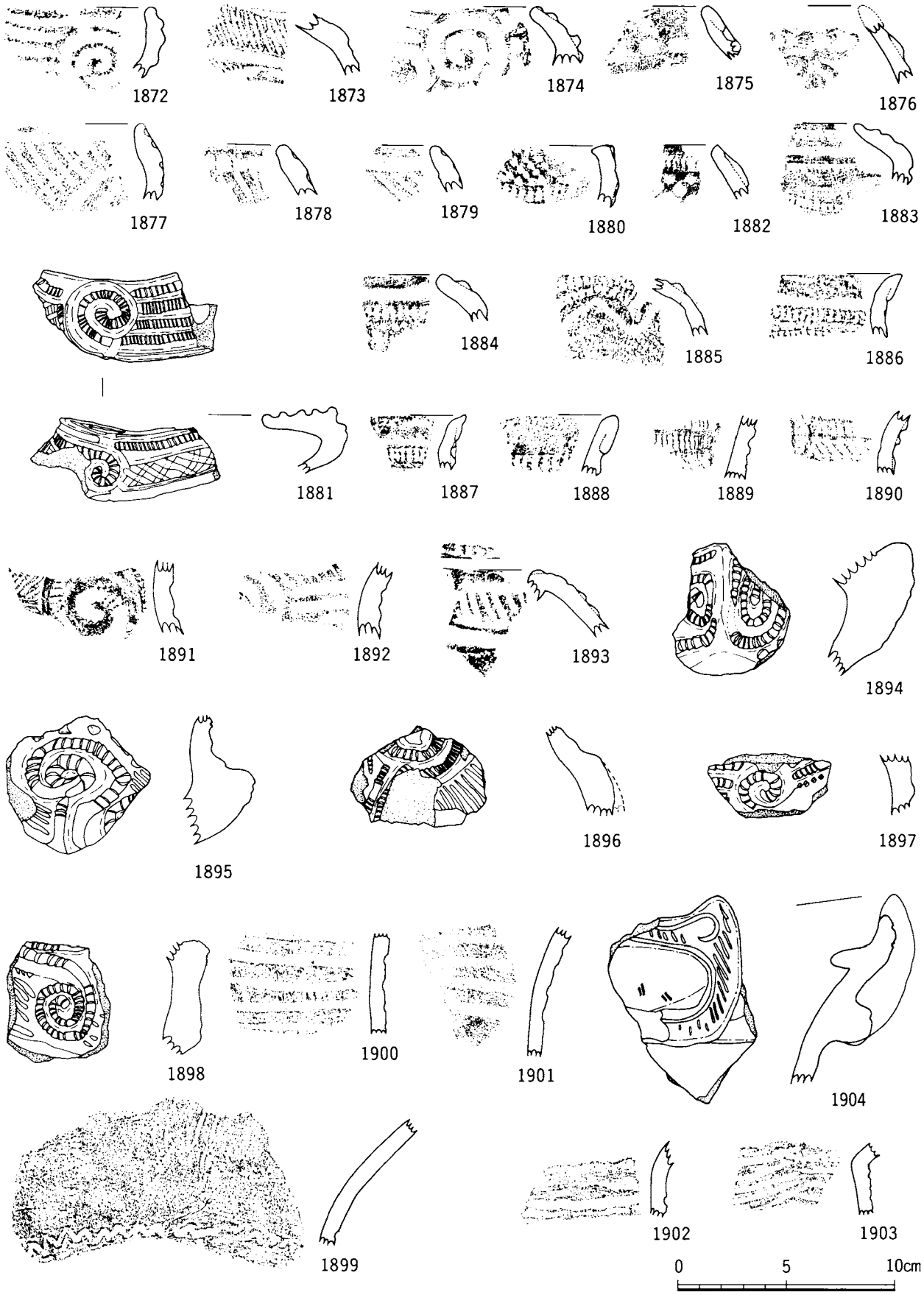
②種には(1872)～(1874)がある。(1872)はゆるやかな波状口縁を呈し、渦文の位置が波頂部となる。(1874)は胎土・焼成とも良好で、渦文の右は格子目状の貼付になる。(1873)は3本単位の櫛描沈線を充塡する。部位がやや曖昧であり、B類になる可能性もある。

③種には(1875)～(1885)がある。(1875)・(1876)は同一個体片で、折り返し口縁沿いに粗い押し引きを施す。(1877)～(1880)は細い半截竹管による押し引きを充塡する。(1880)は他の3点とはやや異なり、貼付間に連続刺突を入れ、角張った口縁端部にも連続刺突が入る。(1881)・(1882)はそうめん状貼付を格子目状に充塡する。(1881)は渦文部分が斜めに肥厚し、貼付間は押し引きを施す。(1882)は口縁沿いの沈線に連続刺突を加える。(1883)・(1884)は貼付沿いに連続刺突を施すが、充塡文様が(1883)は無文で、(1884)は丸い刺突である。(1885)は地文が縄文であるが、部位がやや曖昧で、B類になる可能性もある。

B類（1886～1899）　内彎した口縁部がさらに外反気味に立ち上がるもので、口縁部の器形や施文により、キャリパー部分の平面形が円形あるいは多角形で、そうめん状貼付と連続刺突文あるいは押し引きを多用するもの(①種)、キャリパー部分の平面形が多角形で、押し引きを多用するもの(②種)、キャリパー部分の内彎度がゆるやかで、箆描沈線による施文が中心になるもの（③種)、その他のもの（④種）の4種に細分しているが、土坑・ピット出土分は小片のため一括した。

(1886)～(1892)は口縁立ち上がり部分の破片である。(1886)～(1888)はいずれも折り返し状の複合口縁であるが、(1886)・(1887)は端部が外反して尖るもので、(1888)は丸くおさめる。(1889)・(1890)は①種に特徴的な施文である。(1893)は内彎部分の破片である。そうめん状貼付による区画内は幅狭の押し引きを充塡している。①種に伴う破片と考えられる。(1894)～(1898)は、内彎部の角がつく肥厚部分の破片である。(1894)・(1895)は角部がやや上向きの突起状を呈する。(1896)・(1897)は①種に、(1894)・(1895)・(1898)は②種に、それぞれ伴う破片と考えられる。

頸部（1899～1903）　本群に特有の無文地に連弧文沈線をめぐらす頸部片である。(1899)は



第95図　その他の土坑・ピット出土土器(8)　Ｃ７・８群

波長の短い蛇行沈線を施す。(1900)～(1903)は連弧文沈線あるいは直線状の沈線と考えられる。

C 8群の土器（第95・96図　1904～1906、図版32）

本群は、口縁部の文様帯が前面に立体化し、口縁部上下2段の厚い貼付隆帯をベースにした橋状把手や装飾的な把手をもつ土器群で、「神明式」に類似する。A～Cの3類に分類し、まとまった資料は第4号住居跡において紹介したとおりである。土坑・ピット出土分では小片がほとんどで、資料として提示できるものは、次に示すA類に属する3点である。

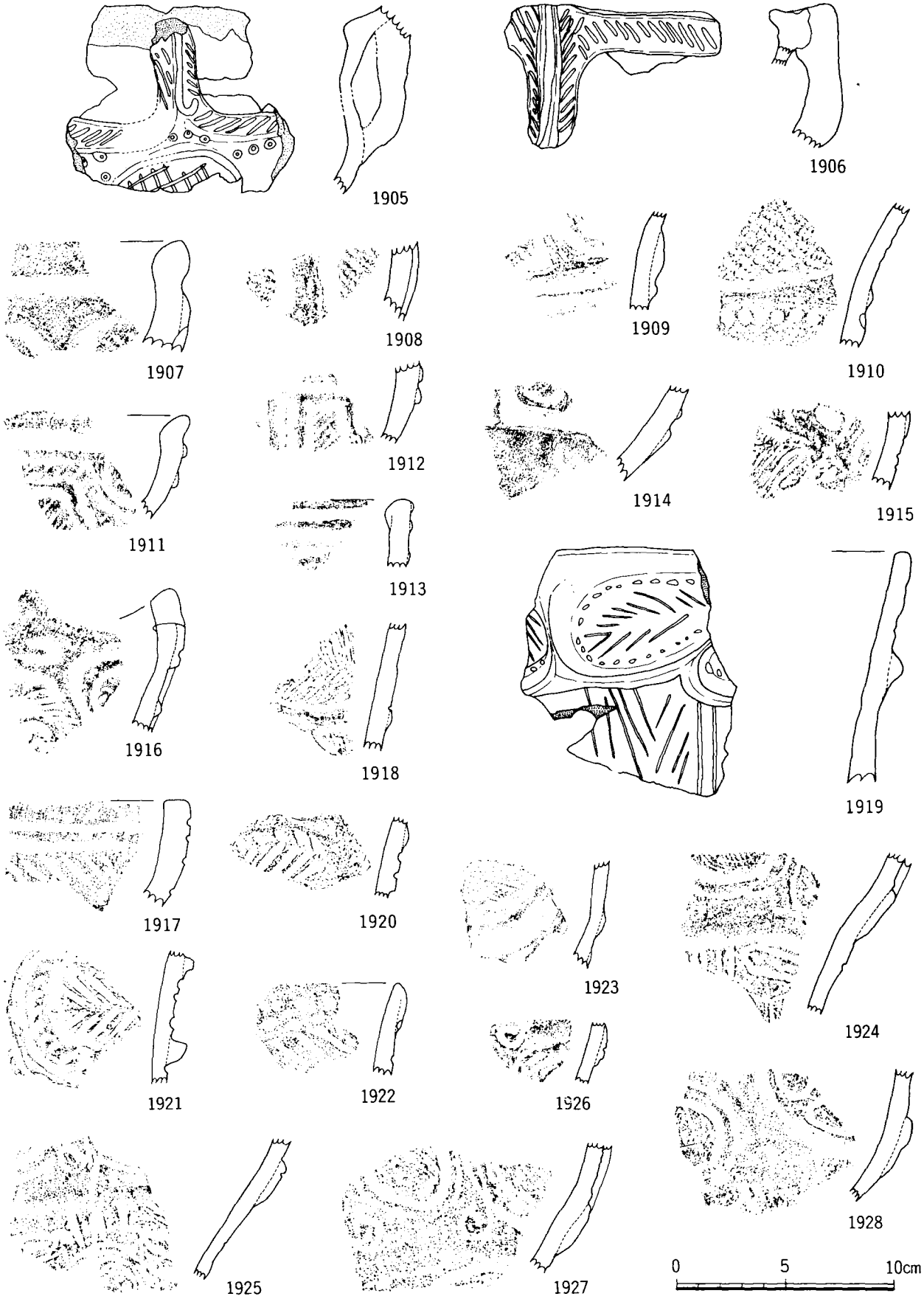
(1904)は、区画をつくる把手がやや右倒れした角度でつく。先端が尖り、アーチ状にはならない。おそらく、右側に対照的な把手が位置すると考えられる。隆帯区画の内側を沈線で囲み、隆帯および把手面に左傾の沈線を施す。上段に蕨手の沈線が横に入る。(1905)は、上下2段の口縁部文様帯をもつと考えられる。上段は橋状把手をもつ方形区画部分で、把手および隆帯上には斜行する沈線を施す。把手中央には縦に逆S字沈線が入る。下段の第二文様帯は、沈線による円形区画が横位に並ぶと考えられる。区画内は沈線で格子目文を充填する。円形区画の間に竹管状工具による円環の刺突を施している。(1906)は、隆帯上には左傾の沈線を施し、橋状把手には中央の縦位沈線をはさんで下向きの矢羽根状に沈線を施す。(1904)・(1905)は、口縁部内面に蓋受け状の段がめぐり、(1906)は端部が段になると考えられる。細分すれば、(1904)が①種に該当すると予想される。

C 9群の土器（第96・97図　1907～1942、図版32）

本群は、口縁部に隆帯による区画文を配するものが多く、区画内に縄文・刺突文・沈線文を充填する、厚手でキャリパー形口縁の器形を呈する土器群である。A～Eの5類に分類したが、土坑・ピット出土分にはA～C類が確認できる。

A類（1907～1914）　隆帯による楕円区画文を配し、縄文を充填する。(1907)～(1910)は、区画内に縄文を充填し、①種に属する。(1911)～(1914)は同一個体片で、口縁部文様帯に深浅2段の縄文を施し、その上に貼付隆帯をクランク状に施す特異な土器である。胎土が密で、焼成も良好であり、搬入品と思われる。本類④種に属する。

B類（1915～1932）　隆帯による楕円区画文を配し、区画内に刺突文や沈線文を充填する。①種である斜行する沈線文を充填するものに、(1915)・(1916)がある。②種は矢羽根状沈線文を充填するもので、(1917)～(1923)がある。(1917)・(1918)のように区画を沈線で縁取るもの（a）、(1919)・(1920)のように沈線＋刺突または刺突のみで縁取るもの（b）、(1921)・(1922)のように隆帯上に刺突を加えるもの（c）、(1923)のように縁取りのないもの（d）に細分できる。③種の刺突文を充填するものは確認できなかった。④種は区画内に条線を引くもので、(1924)～(1928)がある。(1924)～(1927)の4点は同一個体片で、口縁部の円形区画の周囲は沈線で縁取り、区画間に縦にS字あるいは逆S字の沈線文が配置される。区画内は雑な条線風の細沈線を左傾に充填している。胴部文様は沈線文で、渦文の上に3本の短沈線を縦位につけた



第96図　その他の土坑・ピット出土土器(9)　　Ｃ８・９群

文様が入る。その他は幾何学的な円弧文を施すが、詳細は不明である。

他に、小片のため詳細は不明ながら、Ｂ類に属すると考えられるものに、(1929)～(1932)がある。

Ｃ類（1933～1942）　口縁部の区画内に沈線文・刺突文を施し、突起・把手をもつ土器群で、器形・文様とも「曽利Ⅲ式」の影響を色濃く受けている。(1933)は口縁につく突起部分の破片である。突起の中央を穿孔し、上はラッパ状を呈する。②種に属する。(1934)も口縁に突起をもつ。突起部分は破損しているが、中央に穿孔する可能性もある。口縁部は隆帯による円形の区画をつくり、区画内を沈線で縁取りした上、下向きの矢羽根状沈線文を２列充塡している。口縁突起部の下は、隆帯に挟まれた円弧状部分に斜行する短沈線を施文する。②種に属すると考えられる。(1935)は山形口縁をもち、③種に属する。口縁部文様帯は隆帯で区画し、山形口縁の口唇部に指頭大の刺突を入れる。その直下に上下の隆帯を結んで「ひねり粘土紐」を縦位に貼り付けている。区画は変形の楕円区画となり、矢羽根状沈線を充塡する。胴部は部分から推察して、縦位分割し、矢羽根状沈線文を施すと考えられる。(1936)も③種の山形口縁の破片である。中央に円形を呈する沈線区画を配し、縄文を充塡する。口縁側縁に竹管による刺突を入れる。

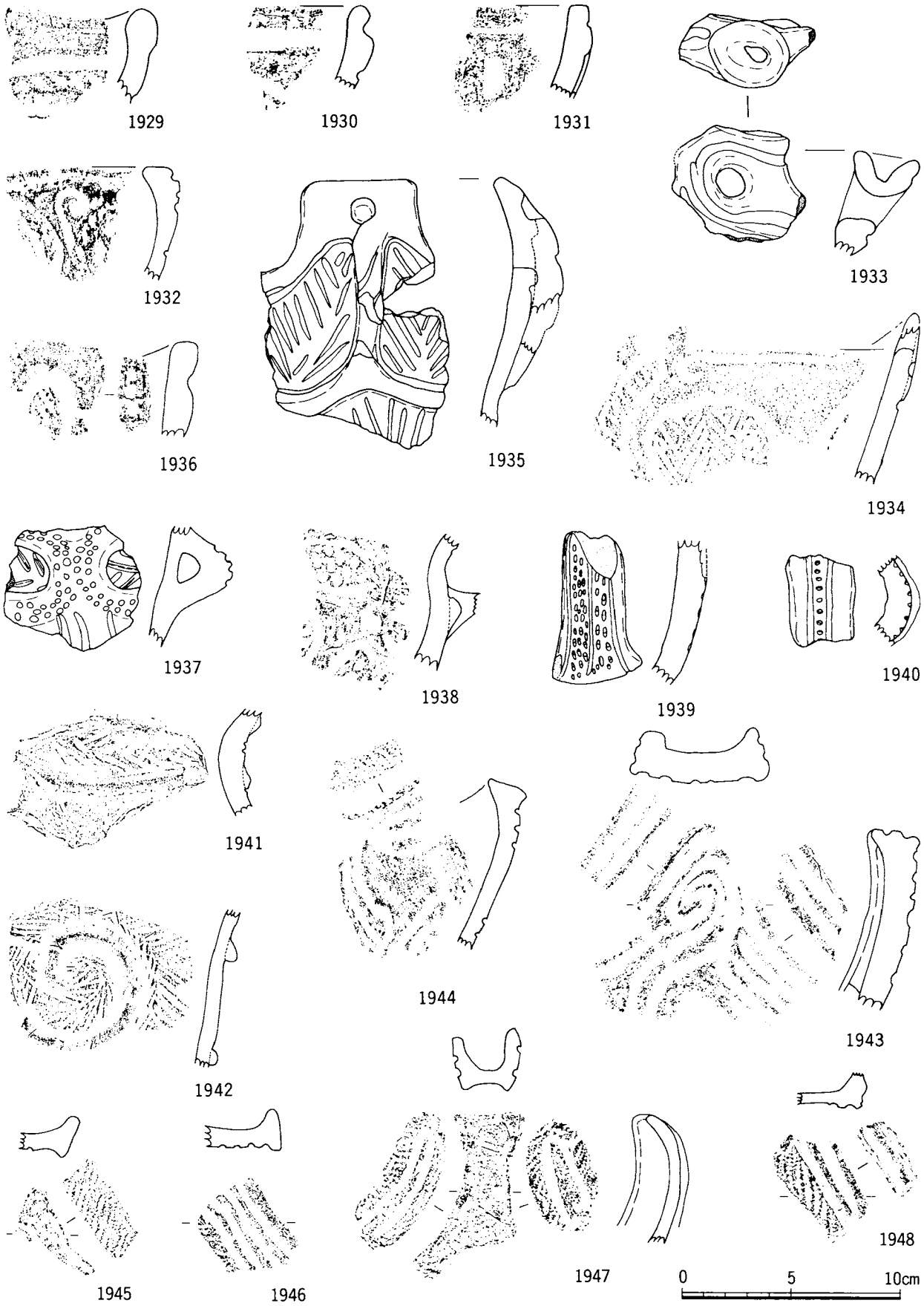
その他、本類に属すると考えられるものに(1937)～(1942)がある。(1937)～(1940)は頸部につく把手類である。いずれも沈線文に刺突を充塡する文様で、(1937)は頸部に矢羽根状沈線を施す。(1941)は頸部か口縁部か部位が断定できないが、隆帯区画内に矢羽根状沈線を充塡する。(1942)も口縁部か胴部か部位が断定できないが、貼付による渦文に沿って矢羽根状沈線を充塡している。

Ｃ10群の土器（第97・98図　1943～1960、図版32）

本群は、「北白川Ｃ式」に類似する土器である。Ａ～Ｃの３類に分類した。

Ａ類は、北白川Ｃ式土器の深鉢Ｃ類に類似するもので、突起状山形口縁をもつ土器である。縁帯部をもち、地文が無文のもの（①種）には、(1943)～(1946)がある。(1943)は沈線による渦巻文を施し、縁帯部に２本の沈線が入る。(1944)は沈線による不整楕円形をいくつか描き、楕円の長軸に沈線を入れる。縁帯部にはＲＬの縄文を施文する。(1946)は口縁に沿って４条の沈線が確認できるが、渦巻文につながるものと推測される。縁帯部は無文である。縁帯部をもち、地文が縄文のもの（②種）には、(1947)・(1948)がある。(1947)は縁帯部も縄文を施し、突起頂部付近でヘアピン状につながる２本の沈線が入る。(1948)は口縁沿いに２本の微隆帯が走り、縁帯部は２本の半截竹管の背による沈線を引き、間が微隆帯状になる。

Ｂ類は、北白川Ｃ式土器の深鉢Ａ２類に類似し、口縁部の幅が狭く、口縁部と胴部との境を外面へ肥厚させる土器である。口縁部に沈線による楕円区画が残り、口縁部と胴部が比較的直線的につながるもの（①種）には、(1949)～(1951)がある。いずれも地文は縄文であるが、磨



第97図　その他の土坑・ピット出土土器(10)　Ｃ９・10群

り消している部分がある。口縁部に横位に沈線を引くもので、口縁部と胴部とが比較的直線的につながるもの（②種）には、(1952)～(1954)がある。(1952)は口縁部が縄文地に横位の沈線を2本引く。胴部は沈線を垂下させ、間に縦位帯縄文を施す。(1953)は口縁部は同様で、胴部は地縄文に円弧状の沈線が認められる。(1954)は口縁部に4本の沈線を引いている。胴部は地縄文に3本の沈線を垂下させている。その他のもの（③種）では、(1955)は地縄文で、口縁に平行に沈線が1本走り、連弧文状の貼付隆帯に沿って沈線を引く。(1956)は口縁部に縦沈線を引くもので、北白川C式土器の深鉢A1類fに類似する。

C類は浅鉢類で、(1957)～(1960)がある。いずれも口縁部が「く」の字に内屈する器形である。(1957)は縄文を地文とし、口縁部に縦の貼付隆帯がつく。貼付の右側は横位の沈線を引き、左側には沈線による楕円文を描く。他の3点は無文地の口縁部に、横位の沈線を引くものであるが、(1960)は粗い押し引き状の沈線である。

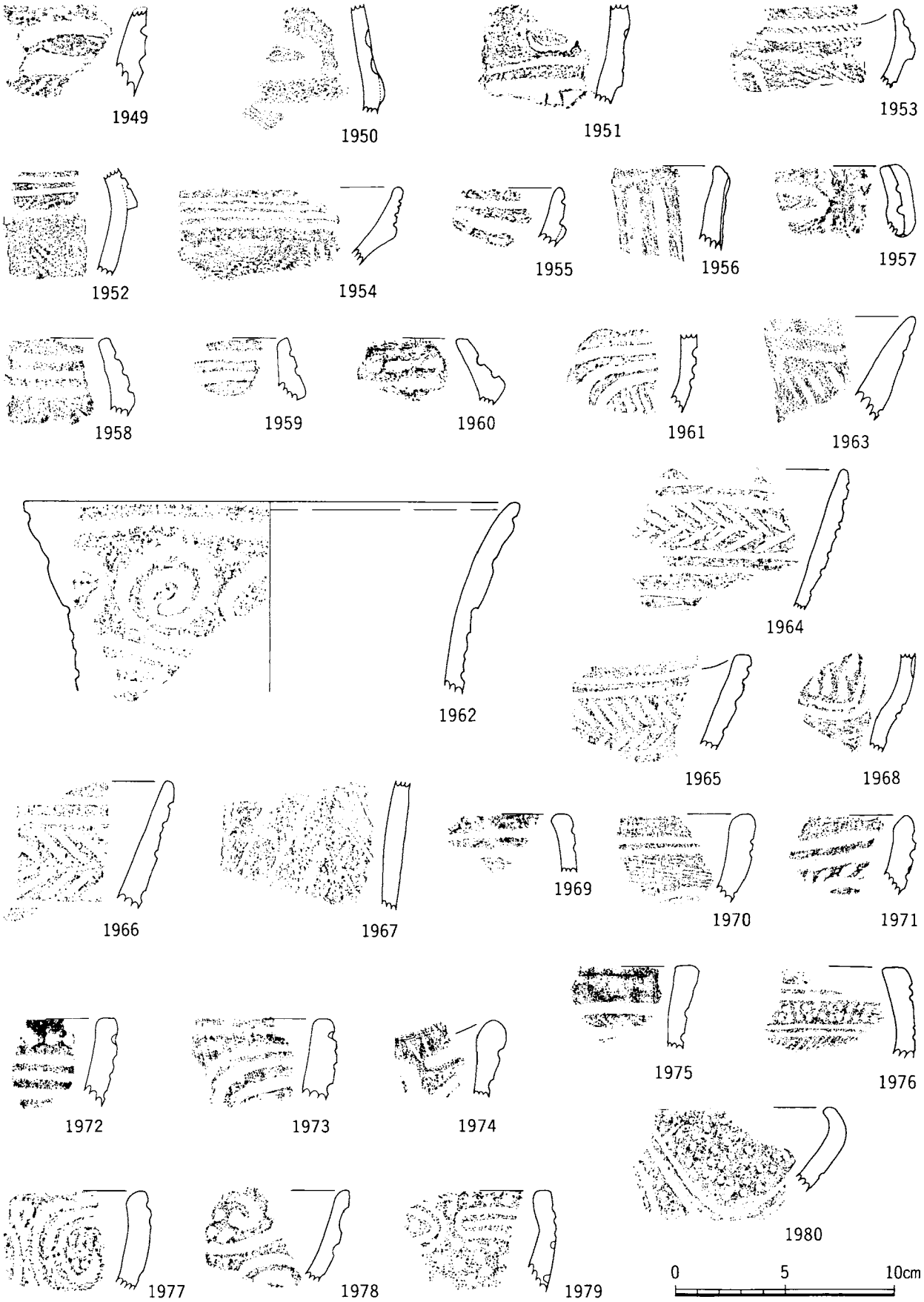
C11群の土器（第98・99図　1961～2000、図版32・33）

本群は、口縁部に沈線による文様の割り付けを施す中期末の土器群である。A～Dの4群に分類した。これらの土器は、中期末という時期に収まらず、後期初頭までの時間幅を有するものを含む。

A類は、口縁部に沈線による楕円形の区画文を配するもので、(1961)～(1975)がある。(1961)～(1963）は集合沈線を充塡すると思われるもの（②種）である。(1962）は口縁がゆるやかに外反して開くもので、口縁部には渦文と楕円区画を沈線で施す。渦文の左の区画内に沈線が確認できるが、右の区画は無文である。(1963)は口縁ほど器厚が薄くなる。矢羽根状沈線を充塡する③種には（1964)～(1966）がある。(1964）は胎土・焼成とも良好で、器厚が0.7～0.9cmの堅緻なつくりである。(1967）は同一個体の胴部片である。(1965）は波状口縁である。刺突文を充塡する④種には（1968）がある。器厚0.7cmで、米粒状の刺突を充塡する。その他、小片のため詳細は不明であるが、本類に属すると考えられるものに（1969)～(1975）がある。

B類は、沈線で円形区画や蕨手文・渦文などを施文し、間に刺突や沈線を充塡するもので、(1976)～(1982)がある。(1976)～(1980)は刺突文を充塡する①種に属する。(1976)・(1977)は器厚が1～1.2cmと中厚であるが、他の3点はやや薄手になる。(1980)は口縁がやや内彎する。(1981）は縦長の楕円区画を並べ、矢羽根状沈線文を充塡し、②種に属する。口縁は波状口縁を呈する。その他、細分については不明確だが、本類に属すと考えられるものに(1982)がある。

C類は、渦巻文あるいは同心円文が口縁部文様の主体となり、波状口縁の波頂部を中心に位置することが多いものである。(1983）～(1988）が本類に属する。(1983）は波状口縁で、波頂部に渦文を配置し、その下には縦位の短沈線や円弧状の沈線による文様がある。器厚は1～1.1cmで他の土器片に比べ中厚である。(1984)・(1985）は同心円文で中央に指頭大の押圧を施す。(1987）は口縁が細く尖る複合口縁で、上に刺突列を施す。(1988）は平口縁で、渦文部は磨り



第98図　その他の土坑・ピット出土土器(11)　C10・11群

消されているが、地文にＬＲの縄文を施している。

その他のものを一括してＤ類とした。(1989) ～(1994) は口縁部に横位の沈線を数条引くもので、本群で扱っているが、後期に属するかもしれない。(1989)は縄文を地文とし、４本の沈線が確認できる。口端部にも縄文を施文する。(1990)は波状口縁で、縄文地に狭い間隔で確認できるところ６本の沈線を引く。(1991)は、口縁に横位の沈線を１本入れ、その下にヘアピン状に横位の沈線が入るが、左右の沈線の状態から、おそらく蛇行沈線を描くものと考えられる。口縁部文様帯の下は縄文を施す。(1992)は、口縁が大きく外反し、無文地に２本の横位沈線が入る。胎土に白色粒と金雲母を含む。(1993) ～(1995) は幅狭の口縁部文様帯に特異な沈線文を施すものである。(1993)は胎土に砂を多く含み、磨滅が激しいが、口縁部にコンパス文状の連弧文沈線を巡らしている。(1994)は口縁部に連続するＪ字形の沈線文を巡らす。胴部は懸垂文沈線で分割し、縄文を施す。(1995)は口縁を欠損しているが、縄文を地文とした口縁部にＪ字状の沈線文を施し、中は磨り消している。(1996)は波状口縁で、縄文地に円形または楕円の沈線文を描く。波頂部に縦に２個の指頭大の刺突を施している。(1997)は口縁を欠損しているが、口縁部に巡る２本の横位沈線間に刻目状の縦位の短沈線を施している。地は無文である。(1998) は口縁沿いに１本の沈線が巡り、その下のやや微隆帯の口縁部文様帯に矢羽根状沈線を施す。矢羽根状沈線には条痕が確認でき、貝殻による施文の可能性もある。口縁部文様帯の上下端部に擬縄文を施している。原体については不明である。(1999)はゆるやかな波状口縁を呈すると考えられ、波頂部に逆Ｓ字状の沈線文が位置し、中に上下に指頭大の押圧刺突が入る。逆Ｓ字状沈線文を挟んで両側は横位の沈線を４本引いている。(2000)は口縁部文様帯が消滅したタイプである。口縁部は大きく外反し、端部に刻目が入る。縦位の細長い円形の沈線文で分割し、下向きの矢羽根状沈線文を充填する。長円形の沈線文の中は刺突を縦に施す。

Ｃ８～11群土器の胴部（第99～101図　2001～2052、図版33）

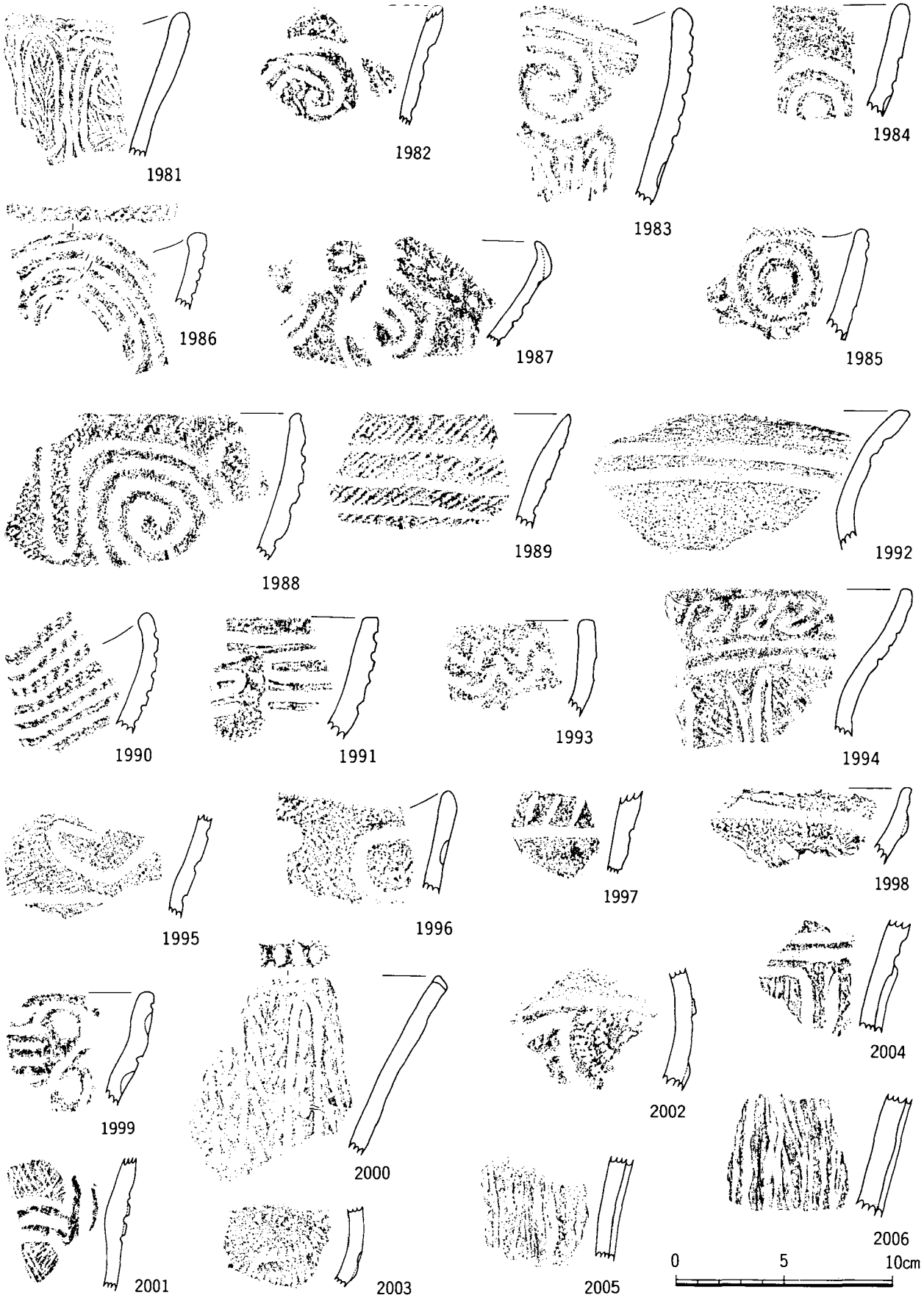
Ｃ８群土器～Ｃ11群土器に含まれる土器の胴部片を一括した。本来は各群に対照させなければならないが、対応する口縁部片が輻湊するため、施文方法により概括するに留めた。

Ａ　（第99図　2001～2003）

貼付隆帯により渦文など円形の文様を描くもので、(2001)は円弧状の二重の貼付で区画を作り、左傾および右傾の沈線を充填する。(2002) は貼付隆帯の裾に刻目状の刺突を施す部分と、裾に沈線を引き、区画内に刺突を入れる部分とがある。(2003)は貼付による渦文沿いに両側に連続刺突を施す。

Ｂ　（第99・100図　2004～2015）

貼付隆帯の懸垂文で分割し、間を集合沈線で充填する。(2004) ～(2010) は、分割する懸垂文が１本で、分割された区画内の沈線も縦位を基調とする雑な入れ方である。(2011)は右下がりの沈線を充填する。(2012)・(2013) は格子目の沈線を充填する。(2012) はSK42出土で、隣



第99図　その他の土坑・ピット出土土器(12)　Ｃ11群・Ｃ８～11群の胴部

接するＳＢ４出土の（1569）の同一破片と考えられる。(2013）は頸部下の破片と思われ、貼付隆帯が逆Ｕ字形の区画をつくる。懸垂文は剝落しているものがあるが３本と考えられ、間に縦位の刺突列が２本施されている。(2014)も頸部付近の破片である。(2015)は貼付隆帯上に刺突列が入り、比較的細かい下向きの矢羽根状沈線を施しているが、小片のため詳細は不明である。

Ｃ　（第100図　2016～2034）

沈線の懸垂文で分割し、矢羽根状沈線や斜行する集合沈線を充填するものを一括する。胴部を分割する懸垂文沈線は２本のものと３本のものがある。

分割された区画内を矢羽根状沈線で充填するものにおいては、ハの字またはＶの字を１単位とした時、１単位のもの・1.5単位のもの・２単位のものの３種類がある。なお、矢羽根状沈線の中央に垂線を引き、分割するものは見当らなかった。(2023)・(2024)は同一個体片で、ともに胴部資料として扱っているが、(2023)は口唇部を欠くが無文の口縁部をもち、横走する沈線により胴部文様帯の上限を画する。口縁部が外反気味に開くバケツ型の器形を呈し、Ｃ11群に属する。

分割された区画内を斜行する集合沈線で充填するものにおいては、(2028)などのように区画ごとに交互に傾きを変えるものが目立つ。同一の傾きで統一するものもあってよいはずだが、小片のため確認が不可能である。(2031)は同一区画内で沈線の傾きが交互になっている。なお、（2028）～(2031）は集合沈線を櫛状工具によって施文する。

（2032）は分割する垂線が櫛状工具により、矢羽根状沈線も櫛描でしかも雑である。(2033)は集合沈線の入れ方が雑である。(2034）は分割する垂線間にヘアピン状の沈線文を施す。

Ｄ　（第100・101図　2035～2041）

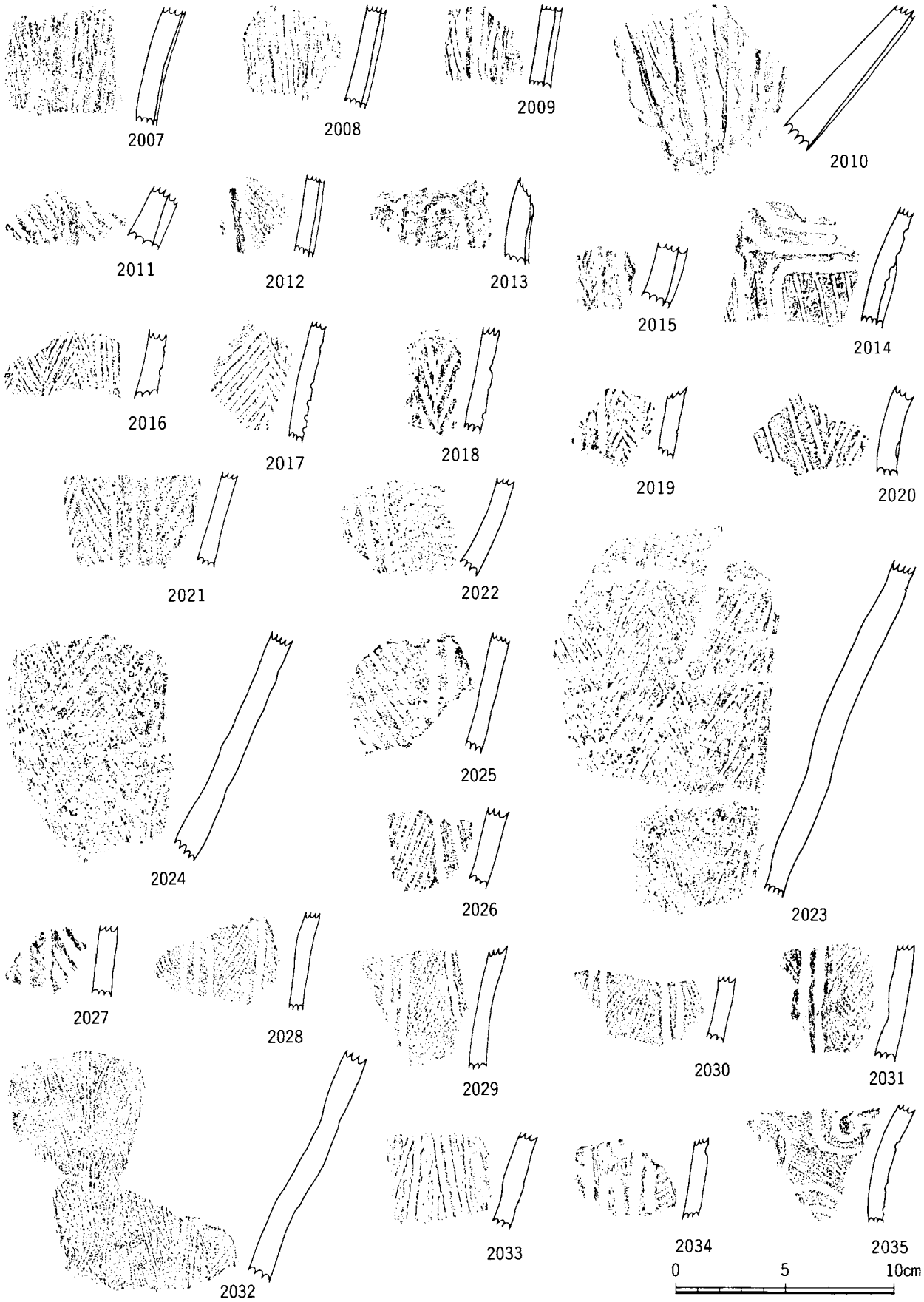
沈線による渦文や円形の区画文を不規則に配する。(2035）～(2039）は区画内や間に斜行する細い集合沈線を充填する。５点とも同一土坑からの出土で、胎土からも同一個体片の可能性がある。Ｃ11群－Ｂ類の胴部片と思われる。(2040)は弧状沈線の間に集合沈線を充填しているが、やや厚手の土器片である。(2041）は区画内に縄文を施す。

Ｅ　（第101図　2042～2052）

縄文を施すものを一括する。

（2042）～(2050）は斜縄文を施し、沈線を垂下させる。(2042）～(2047）は２～３本の垂線で胴部を分割し、複数の垂線の間は磨り消している。厳密にいうと、(2042）～(2046）は磨消縄文であり、(2047）は充填縄文である。縄文は（2044)・(2046）がＬＲであるが、他の４点はＲＬである。なお、(2046)は分割垂線による区画中央に蛇行沈線を垂下させる。(2048)～(2050)は垂線の間を磨り消さないものである。縄文は３点ともＬＲである。

(2051)・(2052)は頸部付近の破片である。(2051)は頸部から口縁部にかけて大きく外反し、頸部に４本の沈線が横走する。口縁部は無文である。(2052)は胴部が膨らみ、縄文のみの施文



第100図　その他の土坑・ピット出土土器(13)　Ｃ８～11群の胴部

と考えられる。口縁部文様帯とを区画する隆帯が横走する。

本類の大部分は口縁部に縄文を充塡する区画文を施す土器群に対応すると考えられ、Ｃ９群－Ａ類・Ｃ11群－Ａ類の胴部片と思われる。

Ｃ12群の土器（第92・101図　2053～2063）

本群は無文系深鉢形土器で、無文土器（Ａ類）・縄文土器（Ｂ類）・櫛描沈線文土器（Ｃ類）を一括した。これらの土器は、一部の有文系深鉢形土器と同様、中期末から後期初頭の時間幅を有するものを含む。なお、比較的大きな破片を選択して図示した。

Ａ類の無文土器は、細片のみで、図示できるものはない。

Ｂ類の縄文土器に施される縄文には、大きく分けて、縦位帯縄文を施すもの（2053～2057）、斜縄文を施すもの（2058～2061）、条の縦走する縄文を施すもの（2062）の３種がある。

（2053）～（2055）は同一個体で、やや張りのある胴部から外反する口縁部に到る器形を呈する大型の深鉢である。幅６cm程の口縁部は無文で、頸部に隆帯が横走する。胴部は縦位帯縄文と結節縄文を分けて規則的に施す。底部は平底で、圧痕は見られない。（2056）も縦位帯縄文と結節縄文を施す胴部片であるが、不規則に縦位の沈線を施している。

斜縄文を施す土器では、（2058）は器厚1.1cmを測る厚手の口縁部片である。黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好で、ＬＲの縄文を施す。（2059）は頸部から口縁部付近の破片で、黒褐色を呈し、ＬＲの縄文を横あるいは斜め方向に転がし施文する。（2060）も頸部の破片で、黒褐色を呈し、ＲＬの縄文をやや斜め方向に転がし施文する。（2061）は口縁部近くの破片と思われ、灰褐色を呈し、ＬＲの縄文を横方向に転がし施文する。

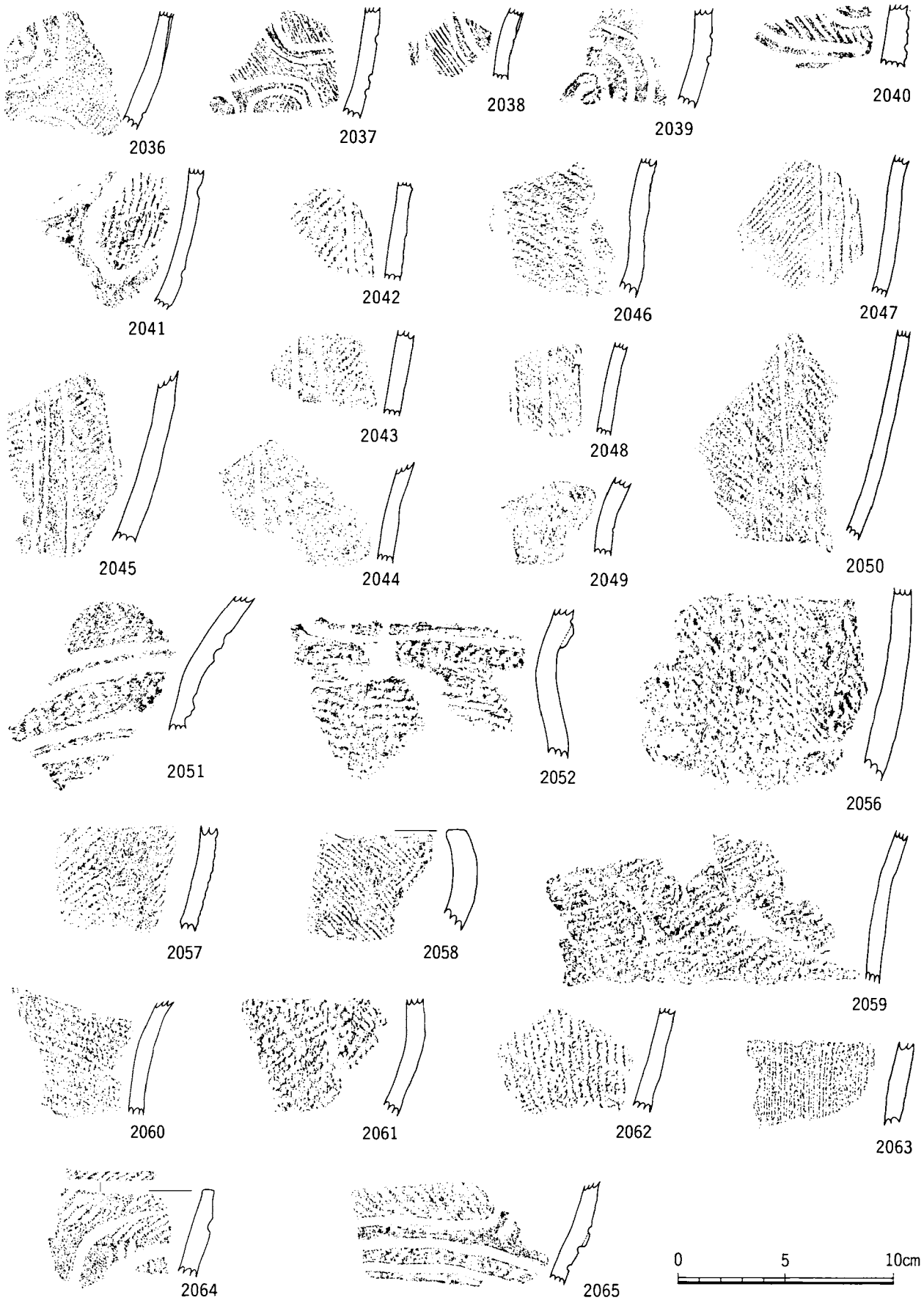
（2062）は明褐色を呈する胴部片で、ＲＬの縄文が縦走する。

Ｃ類の櫛描沈線文土器には（2063）がある。胴部片で全容は不明であるが、櫛描沈線を全面に縦走させる。

Ｃ13群の土器（第101・102図　2064～2091、図版33）

型式および小時期あるいは部位等が不明のものを一括して本群としているが、文様構成および器種等による類別に従い記述する。

縄文を施す深鉢類の破片には（2064）～（2071）がある。（2064）はＬの無節縄文を施し、そこへ弧状の沈線を描く。口端部にも縄文を施す。（2065）は区画文を配する口縁部の破片として図示した。低い隆帯区画を施し、区画内および頸部はＲＬの縄文を施す。Ｃ９群あるいはＣ11群のＡ類に類似するが、やや異質な感がある。内部をいくつかの楕円区画に区切る大きな渦文を配する胴部片、あるいは壺形土器の肩部片の可能性も考えられるが、いずれにしても疑問が残る。（2066）はわずかに肥厚した口縁部の区画文帯の一部と考えられる。ＬＲの縄文を施すが、区画内は磨り消している。（2067）は波状口縁で、波頂部にＲの無節縄文を施し、縦位の沈線を入れる。波頂部にピークをもつ波形の微隆帯上と口端部にも縄文を施す。（2068）・（2069）は縄



第101図　その他の土坑・ピット出土土器⒁　Ｃ８～11群の胴部・Ｃ12・13群

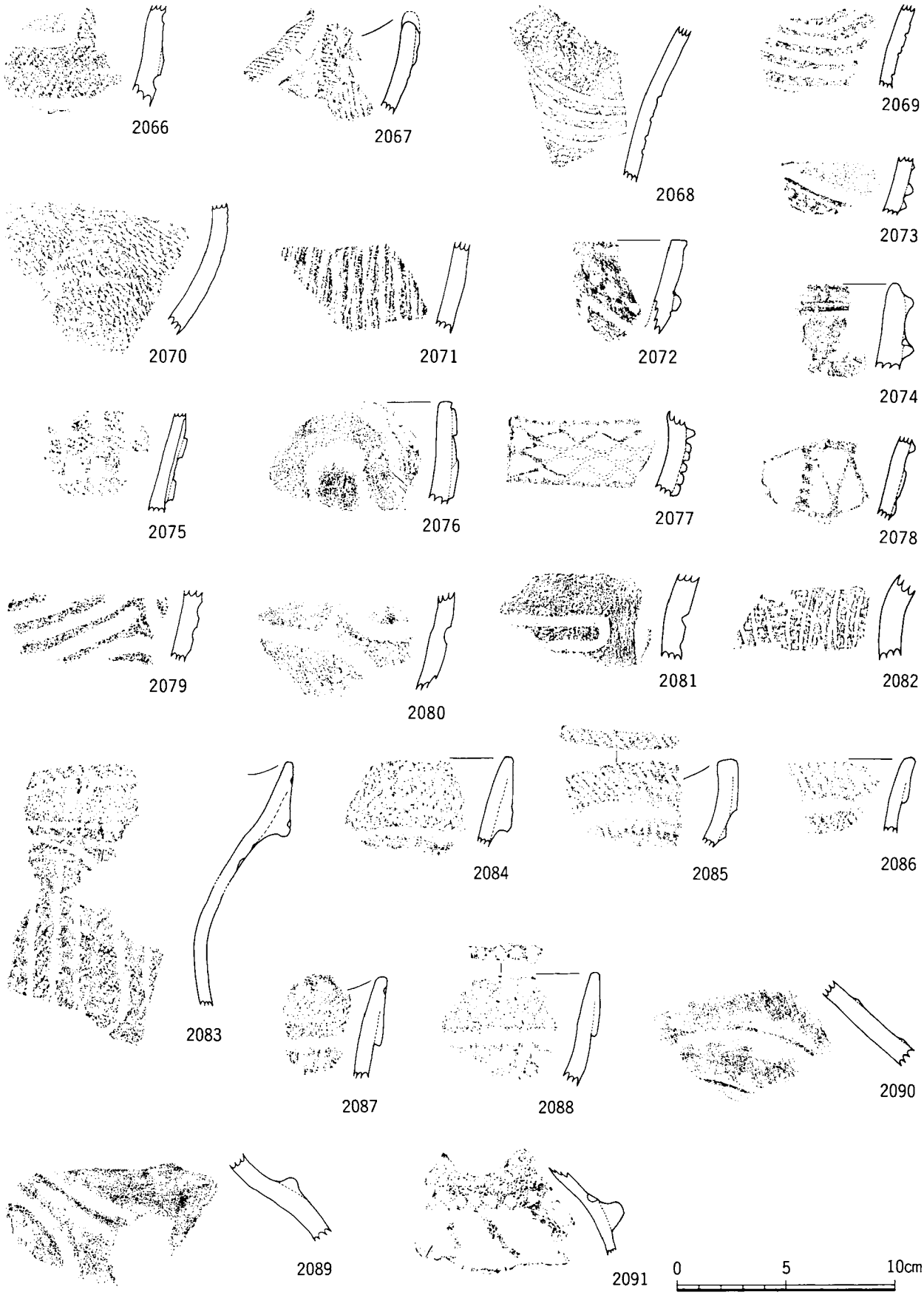
文地に弧状の沈線を施している破片である。(2068)は頸部付近と考えられ、沈線は連弧文である。(2069) は部位不明で、弧状沈線は渦文かもしれない。(2070)・(2071) は撚糸文土器である。(2070)は内彎気味の口縁部付近の破片と思われる。やや右下がりの横位の撚糸文を施している。(2071)は縦位の撚糸文を施す胴部片であるが、７㎜間隔で巻いた絡条体を強く転がし施文した上で、弱く何度も転がしたと考えられる。

貼付隆帯をもつ深鉢類の破片には (2072) ～(2078) がある。(2072) は口縁部に連弧文状に貼付隆帯を施すと考えられ、貼付の上側裾に刺突列を施す。胎土に金雲母を含む。(2073)も弧状に二重の貼付隆帯がのび、間に刺突列を施す。(2074)は口縁に沿って２本の貼付隆帯が横走し、その間にそれぞれ隆帯裾に刺突列を施す。(2075)は外反する口縁部片で、縄文を施した貼付隆帯が２本横走する。縦位に太い沈線を入れ、全体として格子目状のモチーフを作り出している。(2076) は無文地に蛇行する幅広の貼付隆帯が横走する。(2077) は貼付による方形区画の中に、そうめん状貼付で波形を４本並べ、全体として格子目状に見えるモチーフをつくる。部位は口縁部付近と思われる。(2078)は貼付により三角形の区画が並ぶ。無文部との境の縦位の１本はやや隆帯が大きく、上に刻目を施す。部位は特定できないが、胴部と思われる。

沈線文を施す深鉢類の破片には (2079) ～(2082) がある。(2079)・(2080) は太い沈線を円弧状に施すが、部位等の詳細は不明である。(2081)は頸部の破片と思われるが、横位のヘアピン状の沈線と縦位の沈線を施す。(2082)も頸部と思われるが、縄文地に縦位の集合沈線を施している。

複合口縁の破片を一括した。(2083) ～(2088) があるが、(2083)・(2084) は口端が尖り、複合口縁部の下ほど厚くなる、楔形の形状を呈する。(2083)は複合口縁部に縄文を施し、さらに上下２列の刺突を施すが、刺突列の間を磨り消している。複合口縁部の下は大きくくびれたのち膨らむ。頸部から胴部はＲＬの縄文を施し、縦位の刺突列を垂下させているが、一部はＵ字形を呈する。縄文も刺突列による区画おきに磨り消す部分がある。複合口縁に見える部分が口縁部文様帯になる器形といったほうが適切な土器である。(2084)は口縁部分のみで詳細は不明であるが、ＬＲの粗い縄文を施す。(2085) は波状口縁で、複合口縁部にはＲＬの縄文を施す。角縁の端部にも同じ縄文を施す。複合口縁に沿って両裾に刻目を入れる隆帯が走る。(2086)は薄手の縄文土器で、幅２㎝の複合口縁部も含めて、ＲＬの縄文を施す。(2087)は幅３㎝の複合口縁部にＬＲの縄文を施し、口端近くに横位の刺突列を入れる。複合口縁部の下に２本の短沈線が入る。(2088)は端部に刻目を入れた幅３㎝の複合口縁をもつ。複合口縁部は無文であるが、口縁部に連弧文状の沈線を施す。

壺形土器類の破片と考えられるものが (2089)～(2091) である。(2089) は無文地に裾がゆるやかな断面が三角形の隆帯や肥厚帯で文様をつくる。壺形土器の肩部にあたる。(2090)も無文地に断面が三角形の微隆帯が弧状に施され、同様の部位と考えられる。(2091)も壺形土器の

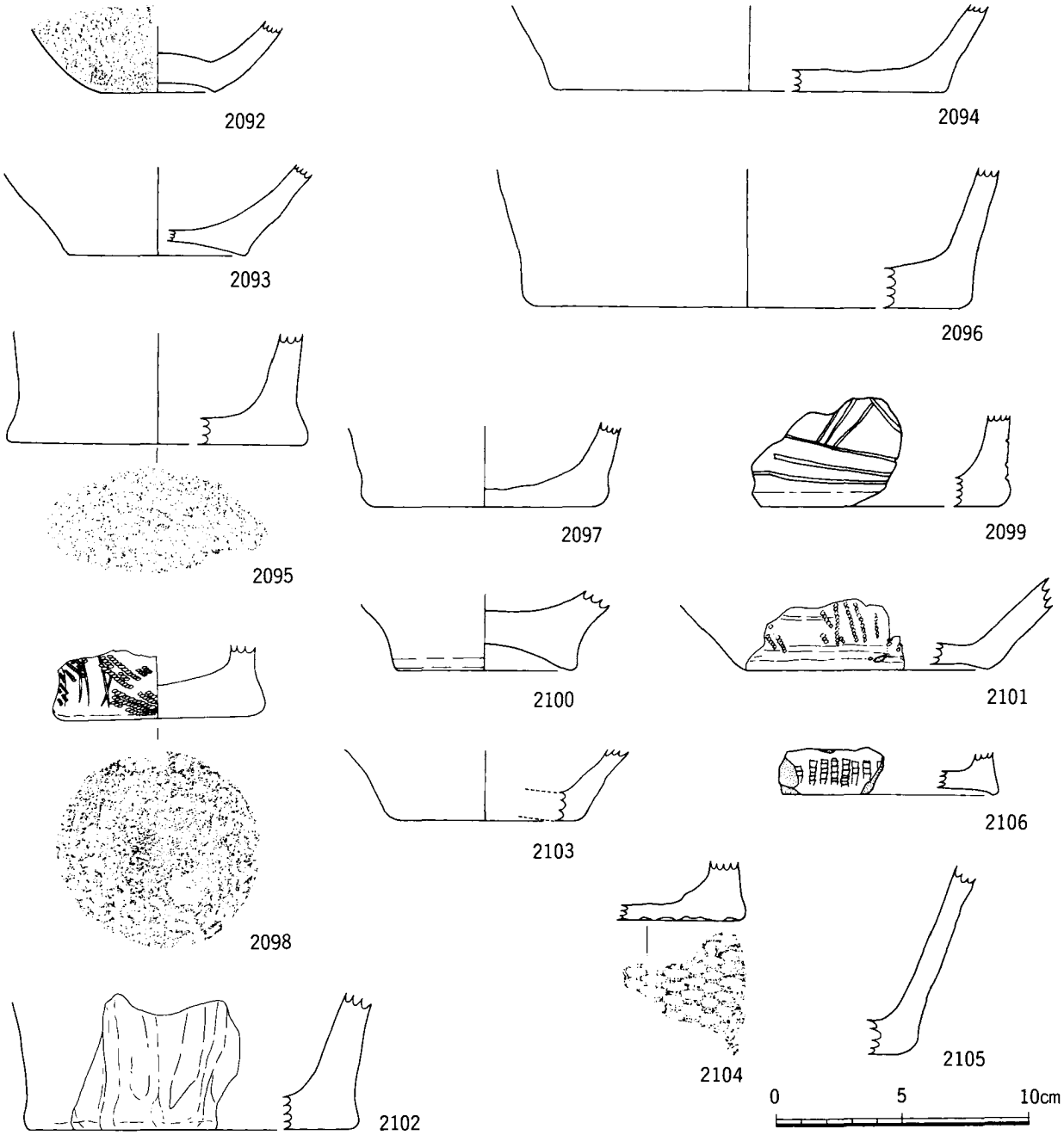


第102図　その他の土坑・ピット出土土器(15)　C 13群

肩部と思われる。肩部に一周する隆帯を貼り付け、斜めに指で押さえ、瘤を作り、全体として縄状の形態を呈している。隆帯には縄文を施文している。また、隆帯の上部裾に丸い刺突列をめぐらす。３点とも中期末から後期初頭に位置づけられると思われる。

Ｃ14群の土器（第103図　2092～2106、図版33）

台付鉢の脚台部（Ａ類）と底部（Ｂ類）を本群としているが、Ａ類は小片ばかりで図示できるものはない。Ｂ類は図示できるものに（2092）～(2106）がある。



第103図　その他の土坑・ピット出土土器⑯　　Ｃ14群

底部は平底のものが多く、上げ底は（2092）・（2093）・（2100）の３点が顕著である。胴部への立ち上がり角は、直立に近いもの（2098）から大きく開くもの（2093）まで多様である。また、胴部下半の形態は、内彎するもの（2092）と外反するもの（2103）がある。

（2092）は、胴部文様の縄文と底部形態から、Ｃ１群土器との共通性が認められる。（2101）の胴部は撚糸文を施す。（2098）の胴部は不規則に沈線を垂下させ、ＬＲの斜縄文を施す。Ｃ11群土器に伴うものと思われる。（2099）の胴部は沈線文を施すが、詳細は不明である。（2106）の胴部裾には縦位の押し引きが施される。

底部圧痕は、ほとんどが無文であるが、（2098）・（2104）には網代痕が認められる。

（武藤貞昭）

②後期の土器（第104～108図、図版33・34）

ほとんどが細片でかつ磨滅が激しいことや一括資料にも恵まれなかったため、各型式ごとの細別ができず、大まかな時期ごとの大別でしか分類できなかった。以下、後期初頭の土器群をＫ１群、後期前葉から中葉にかけての土器群をＫ２群、後期後葉の土器群をＫ３群として記述する。なお、注口土器・粗製土器・無文精製土器は一括して分類し、Ｋ４・Ｋ５・Ｋ６群とした。

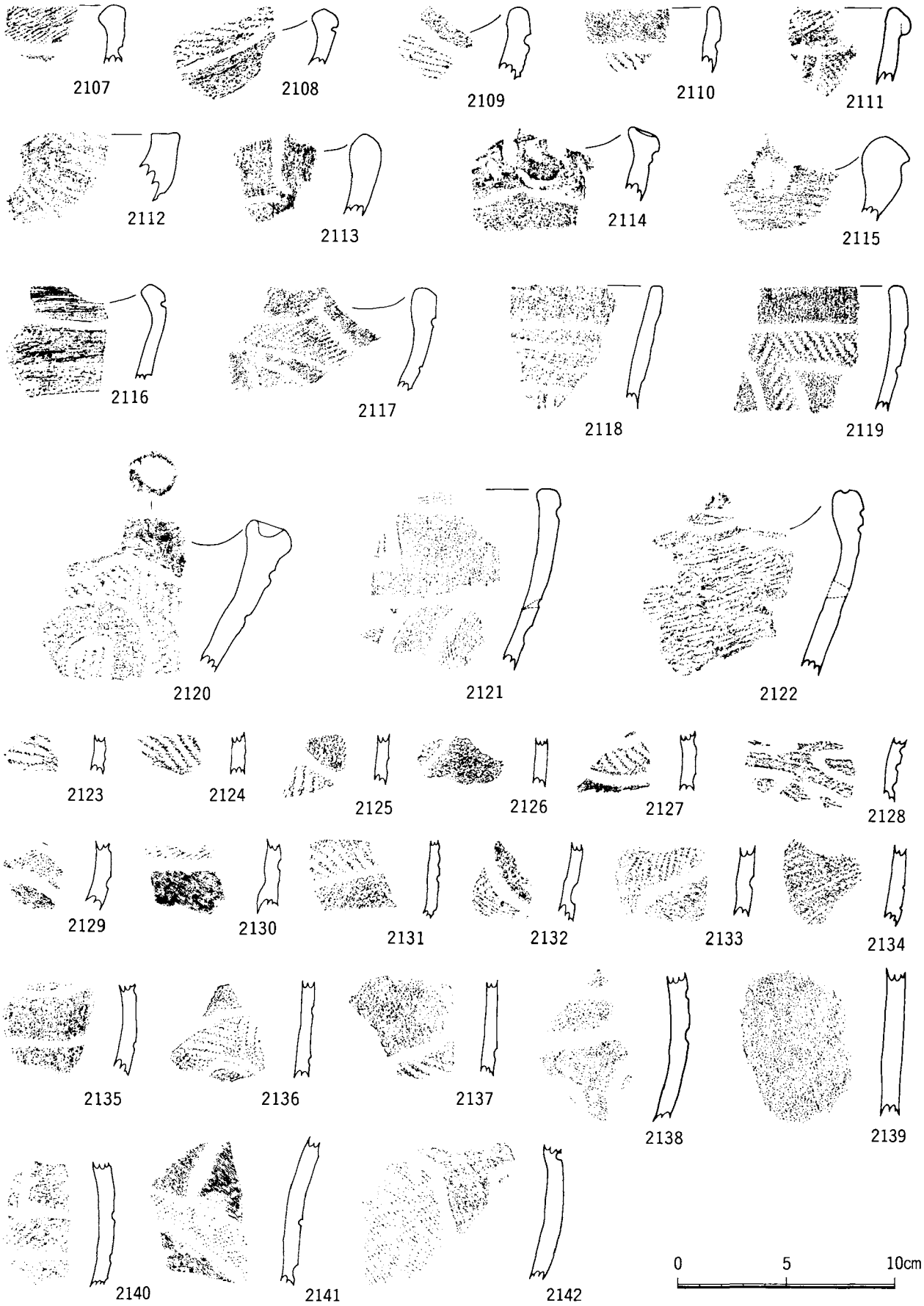
Ｋ１群の土器（第104・105図　2107～2148）

後期初頭の土器群。その大半は中津式に類似するもので占められ、一部に後続する福田Ｋ２式・四ツ池式段階に併行する資料も含んでいる。これに中期からの系譜を引くような土器も本類に含めた。中津式～四ツ池式に併行するものをＡ類、Ａ類種以外のものはＢ類として一括した。

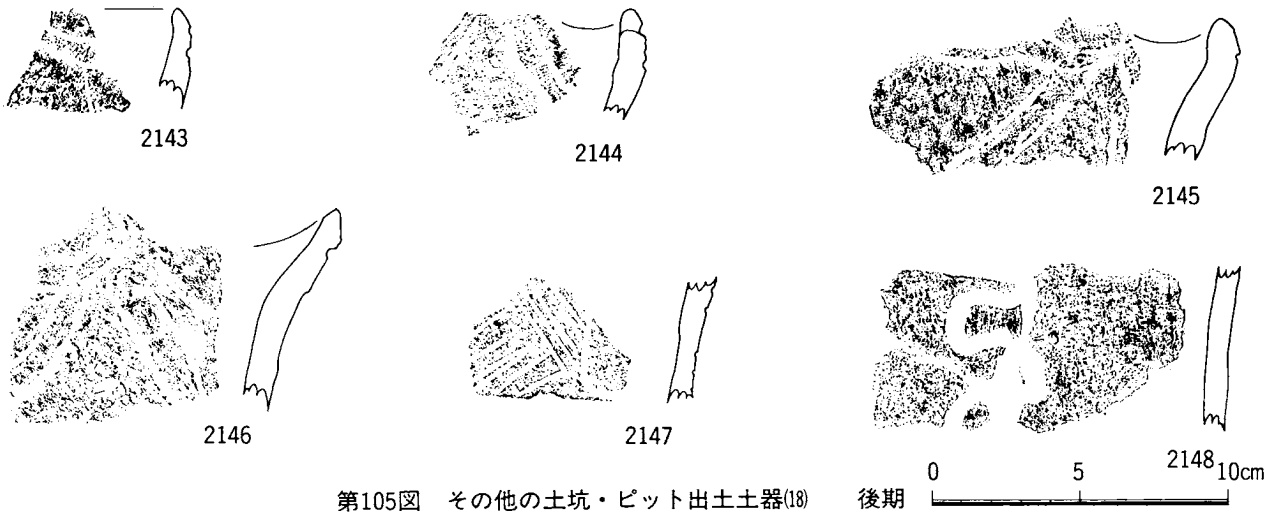
Ａ類（第104図　2107～2142）

沈線文区画内に縄文を施文する中津式系またはこれに類似する一群。器形は深鉢形になると思われる。文様のモチーフの多くはＪ字文的（2120・2117）および渦巻文状の幾何学的な構成をもち、いずれの文様も横に流れる傾向が強い。なかには縄文帯が横走するものも認められる（2118）。沈線が幅広で縄文の施文が粗いのも特徴の１つである。

口縁部にはいくつかの形状が認められ、台形ないしは山形の突起をもち、その上に円形の刺突を施すもの（2120・2122）、波状口縁をなすもの（2108・2109・2113・2117）、平口縁をなすもの（2107・2110・2111・2118・2119・2121）の３種が認められる。口縁端部も多様な形状をもち、内面を中心に肥厚して丸くおさめるもの（2107～2109・2113・2116・2117・2121）、平坦な面をもつもの（2118）、単純に丸くおさめるもの（2110・2119）が認められ、端部を肥厚させ



第104図　その他の土坑・ピット出土土器(17)　後期



第105図　その他の土坑・ピット出土土器(18)　後期

る例が多くを占める。

波状口縁をなす（2113）・（2117）は、横走する沈線が波頂部で口縁部直下にまで抉入する。沈線は口縁端部に抉入はしていないが、同時期の包含層出土の土器のなかには端部にまで抉入するものも認められる。口縁直下の文様については横走する磨消縄文帯をもつもの（2107・2108・2121）と、口縁部直下は無文帯として残し、その下に横走する磨消縄文帯をもつもの（2109・2110・2118・2119）とが認められる。（2108）は口縁端部内面への肥厚がかなり強調され、端部にまで縄文が施文される例である。中津式よりむしろ、福田Ｋ２式ないしは四ツ池式に類似する。(2116)は磨消縄文帯がなく、口縁下に沈線が横走するが、精緻なミガキが施されている。口縁の形状が（2108）と近いため、本類に含めた。（2138）は他の土器と比べて、細かな縄文を使用しているのが特徴的である。(2122)は突起部外面に沈線が２本引かれ、その沈線直下から縄文が施されている。本類のなかでは例外的な存在で、別の分類にすべきかもしれないが、胎土が近似していることや突起の形状からみて本類に含めた。(2112)は断面が半円形を呈す突起をもち、沈線を斜方に施している。（2115）は山形の突起を口縁部に付すのとともに、端部内外面をやや肥厚させて端部に幅広の沈線を施文し、波頂部には刺突が認められる。(2114)も端部に沈線による文様が認められる。（2112）・（2114）・（2115）はいずれも磨消縄文帯は認められないが、四ツ池式段階に併行する資料と考えられることから本類に含めた。

施文されている縄文は、Ｌ３点・ＲＬ10点・ＬＲ14点である。

Ｂ類（第105図　2143～2148）

Ａ類以外の特徴をもつものを一括して本類とした。このため、所属時期の検討が将来必要となる。ここでは前段階の要素の退化的な部分が認められるため、当該期に設定した。(2148)は垂下する蛇行沈線をもち、これの両側には破片で見る限りにおいて文様は認められない。

(2143)・(2144)・(2146)はＳＫ21から出土した同一個体の破片で、口縁部は波状口縁を呈す。文様は細い沈線によるもので、波頂部から口縁にそって引かれるものと、胴部に向かって斜めに引かれるものとが認められる。(2143)・(2144)・(2146)は文様構成の特徴から後述するＫ２群と近似する特徴が認められ、時期的に下がる可能性もある。

Ｋ２群の土器（第106図　2149～2182）

後期前葉から中葉にかけての土器群。北白川上層式に類似するものが多く認められ、この他に後続する一乗寺Ｋ・元住吉式に類似する資料も散見する。また、加曽利Ｂ式に類似するものも認められる。出土点数もそれほど多くないことから本類に一括した。

磨消縄文をもつものをＡ類、沈線・刺突による文様をもつものをＢ類として大別した。

Ａ類（第106図　2149～2172）

沈線区画内に縄文をもつものを本類とした。器形は大半が深鉢もしくは鉢になると想定される。大別すれば、沈線が多条化しているもの（2151・2156・2161・2168）と、２本１組のもの（2158～2160）に分けられ、さらにいくつかの分類が可能であると思われる。

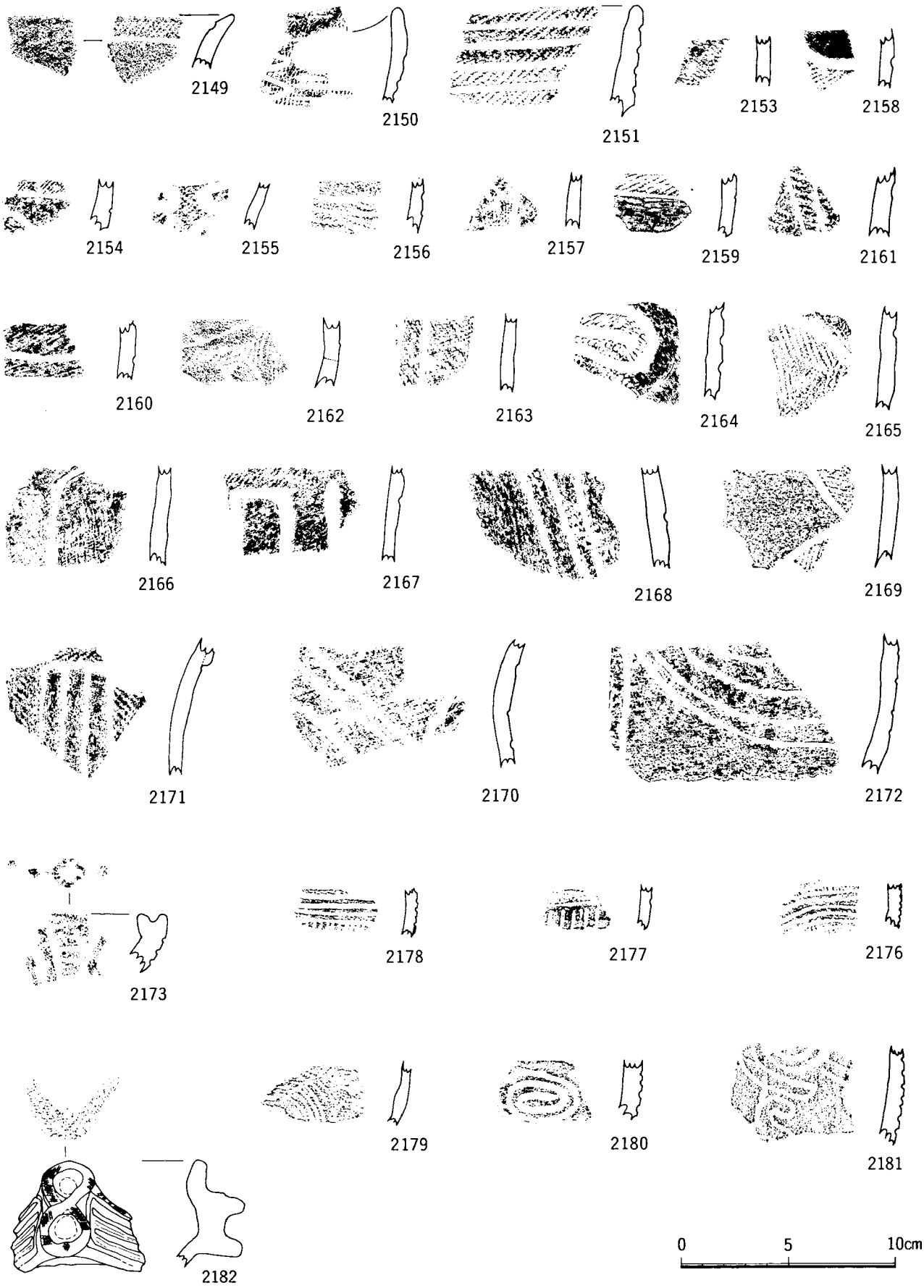
前者は沈線が多条化し、北白川上層式に近似した特徴をもつ。沈線の断面が細く浅いのが特徴で、Ｋ１群Ａ類における沈線の断面が幅広く深いのとは対照的である。いずれも縄文施文後に沈線を引いている。(2151)は横走する縄文帯をもつ口縁部の破片だが、最下位に位置する縄文帯が幅広の貼付文状の隆帯上に施文され、この部位で器形が屈折して内傾する。当該期に所属するかはやや不明な点もある。(2150)は横走する沈線を区切るようにして蛇行沈線を垂下させている。

また、(2167)・(2171)のように横走する縄文帯で屈折部位が認められ、この部位以下に長方形を呈する区画文がみられるものもある。(2167)・(2171)は(2151)の胴部資料となる可能性がある。(2164)は楕円の区画文内に沈線を充塡している。沈線は巻貝によって引かれている。(2155)は文様帯が放射状に伸びるような感があり、おそらく各文様帯の連結部位にあたると思われる。

施文されている縄文は、ＲＬ３点・ＬＲ13点である。(2153)は疑似縄文である。

Ｂ類（第106図　2173～2182）

沈線および刺突等で文様構成の主体的な構成要素とするものを一括して本類とした。各土器片の特徴における差が大きく、Ａ類と同様、相当の時期幅をもつものと考えられる。(2182)は口縁部が逆Ｌ字形に屈折して立ち上がり、この部位に沈線が施される。また、波状口縁を呈し、その波頂部には８の字形の貼付文と縄文が認められる。端部にも縄文が認められる。(2180)・(2181)は渦巻き状の文様をもち、(2181)はその下に蛇行沈線を垂下させている。(2181)は北白川上層２式に比定できる。(2173)はＣ字状の文様を櫛状の工具によって施している。(2173)



第106図　その他の土坑・ピット出土土器(19)　後期

は台形状の突起を口縁部に付し、突起の両側には縦位の貼付文を加え、その間に沈線を２本引いている。時期的に遡る資料かもしれない。

Ｋ３群の土器（第107図　2183～2209）

凹線文・沈線を主体とする後期後葉の土器群。凹線文を施し宮滝式に類似する一群と、沈線による文様が施される八日市新保式に類似する一群とに分類できる。それぞれをＡ類、Ｂ類として記述する。

Ａ類（第107図　2183～2199）

凹線のほとんどは巻貝によって施文されているが、磨滅が著しい。口縁部は、平口縁をなすもの（2184～2186・2188・2189）と、波状口縁をなすもの（2183・2187・2190）との２種が認められる。それぞれ口縁直下には２～３本の凹線が横走し、凹線が施文される部位で屈曲して、口縁は内彎しながら立ち上がる。端部の形態は丸くおさめるものが多い。(2184)はやや平坦な面を残している。(2190)は波頂部では凹線が口縁部にしたがって緩やかに弧を描き、その下に短い沈線を付している。(2183)・(2187)も波状口縁を呈し、波頂部には貝殻押圧痕があり、これによって凹線が区切られている。(2199)も同様に波状口縁を呈す。波頂部にさらに山形の突起を加飾し、頸部に２本の沈線が加えられている。沈線は棒状工具を使用しており、口縁部の形態も本類の土器群としてはやや異質であるため、本類とするには疑問な点もある。

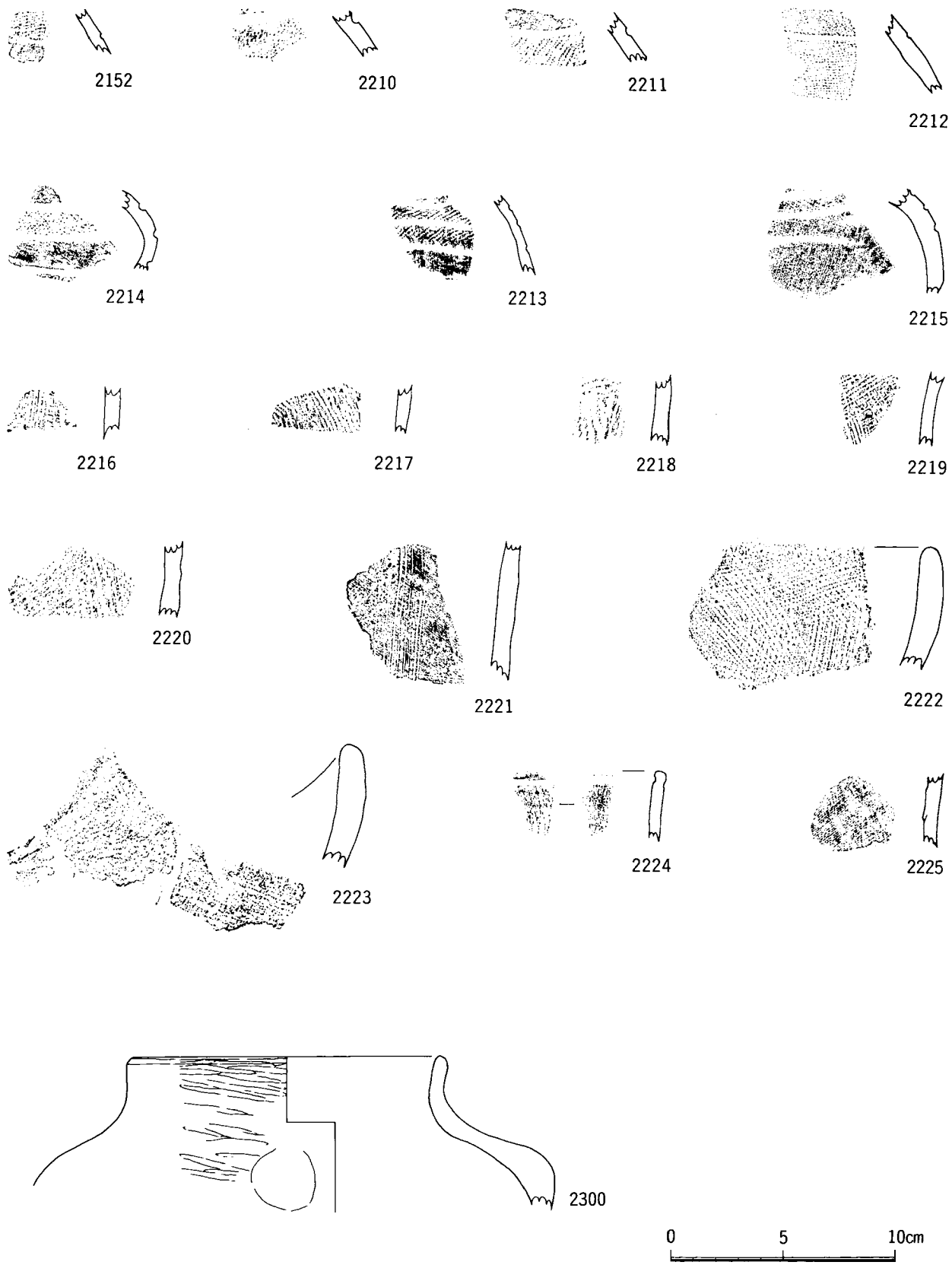
頸部の破片も認められ、その傾きの程度は個々に異なるものの、この部位で「く」の字状に屈曲し、２本程度の凹線が加えられる（2191～2195・2198)。(2194）には凹線間に貝殻押圧痕が認められる。器形はその多くが深鉢を呈すと思われる。

Ｂ類（第107図　2200～2209）

沈線による短線連結文などを施す八日市新保式の特徴を示す一群を本類とした。短線連結文の上下を、さらに沈線で連結するものが多い。(2201)・(2202)・(2206)の連結部には三叉状に抉りが認められる。(2200)は中央の沈線が連結されておらず、沈線間に縄文が施文されている。（2209）は山の字文が認められ、沈線間に斜方向の沈線を加えている。山の字文の連結部には抉りが観察される。(2204)・(2207）には楔形文が認められる。(2205）は破片の一部に連結三叉文的な文様が認められたので本類としたが、細片のため三叉文ではないかもしれない。(2208)は本類における頸部の破片と思われ、２本の沈線が引かれている。Ａ類の可能性もあるが、凹線ではなく細い沈線のため、本類の土器とした。

器形はほとんどが深鉢形をなすと想定されるが、(2205)は椀形を呈すと推測される。本類の土器群は八日市新保式のなかでも、山の字文が見られるなど新しい様相が看取され、八日市新保II式に相当するものが多いと考えられる。

第107図　その他の土坑・ピット出土土器(20)　後期



第108図　その他の土坑・ピット出土土器(21)　後期

Ｋ４群の土器（第108図　2210～2215）

注口土器を一括して本群とした。いずれも胴部の破片で、その形状により注口土器と判断したものである。横走する沈線内に縄文を施文している。(2212)は非常に細かな縄文原体を使用している。時期的にはＫ２群の土器群に併行するものが多いと考えられる。施文されている縄文はＲＬ１点・ＬＲ５点である。

Ｋ５群の土器（第108図　2216～2222）

櫛状工具による条線を残す土器を粗製土器と一括して本群とした。「く」の字状あるいは格子状に条線が残るものが多く（2219・2221・2222)、斜方向のもの（2216・2217）も存在する。その方向は均一ではなく、部位によってはその方向を変化させている。(2222)は内彎する口縁をもち、条線は格子状を呈するが、一部では縦方向のものも認められる。器形は深鉢形になると思われる。時期的には後期全般にわたって認められる土器群と考えられ、おそらく本遺跡においてはＫ１～Ｋ２群に併行すると推測される。

Ｋ６群の土器（第108図　2223～2225）

図示したのは３点で、無文精製土器を一括した。(2225)は胴部破片で全形は知り得ない。その外面は丁寧に研磨されている。(2223)はやや端部外面を肥厚した口縁部をもち、山形の波状口縁を呈す。(2224)は口縁端部内面に沈線が認められる。３点ともＫ１～Ｋ３群のいずれかの時期に所属すると想定される。

③晩期の土器（第109～111図、図版34）

多くのものは晩期中葉頃の所産のものと考えられる。胴部の破片が多く、口縁部の破片が少ないため、細かな時期の同定ができないものが大半である。おおむね、晩期の土器棺墓と近接した時期が考えられる。図示した資料は口縁部を中心に抽出したものである。晩期前葉頃に比定できる土器片もごく少量出土し、これをＢ１群とし、中葉頃に比定できるものをＢ２群として、以下に記述する。

Ｂ１群の土器（第109図　2226～2231）

北陸系の御経塚式に類似するものをＡ類、東海系の本刈谷式に類似するものをＢ類とした。また、１点のみだが大洞系のものをＣ類として分類した。

Ａ類（第109図　2226～2228）

３点出土し、図示したもの全てである。いずれも精緻な磨消縄文を施文し、北陸地方におけ

る御経塚式に類似する資料である。小片のため文様構成は明らかでないが、(2227)は磨消縄文帯が横走し、(2228) は入組み文風の文様が認められる。本類は土坑･ピットからの出土は少ないが、包含層出土土器には数多くの資料が存在する。

Ｂ類（第109図　2229・2230）

口縁部の破片２点のみが出土し、同一個体である。肥厚した口縁部に波状文が認められる。しかし、施文工具が半截竹管でない点や、肥厚した部位より下位に垂下する沈線が認められるなど、本刈谷式にあまり顕著でない要素も認められるが、口縁部の肥厚と波状文を本刈谷式に類似するものと判断して、本類とした。

Ｃ類（第109図　2231）

口縁部の破片１点のみである。縄文を地文として、口縁部に文様が認められる大洞系の土器である。文様は２本の横走する沈線間に縦に刺突を加えるものと、さらにその下位を横走する１本の沈線によって構成される。時期は大洞ＢＣ式段階と考えられる。

Ｂ２群の土器（第109～111図　2232～2289）

晩期中葉に併行する土器群で、その多くは前述したように胴部片で占められている。おそらく土器棺墓の資料と同様、東海地方における稲荷山式～西之山式、畿内における滋賀里Ⅲｂ式頃に併行する資料であろう。単純な深鉢形となるものをＡ類、口縁部が頸部で「く」の字状に屈折して立ち上がるいわゆる甕形となるものをＢ類として分類した。

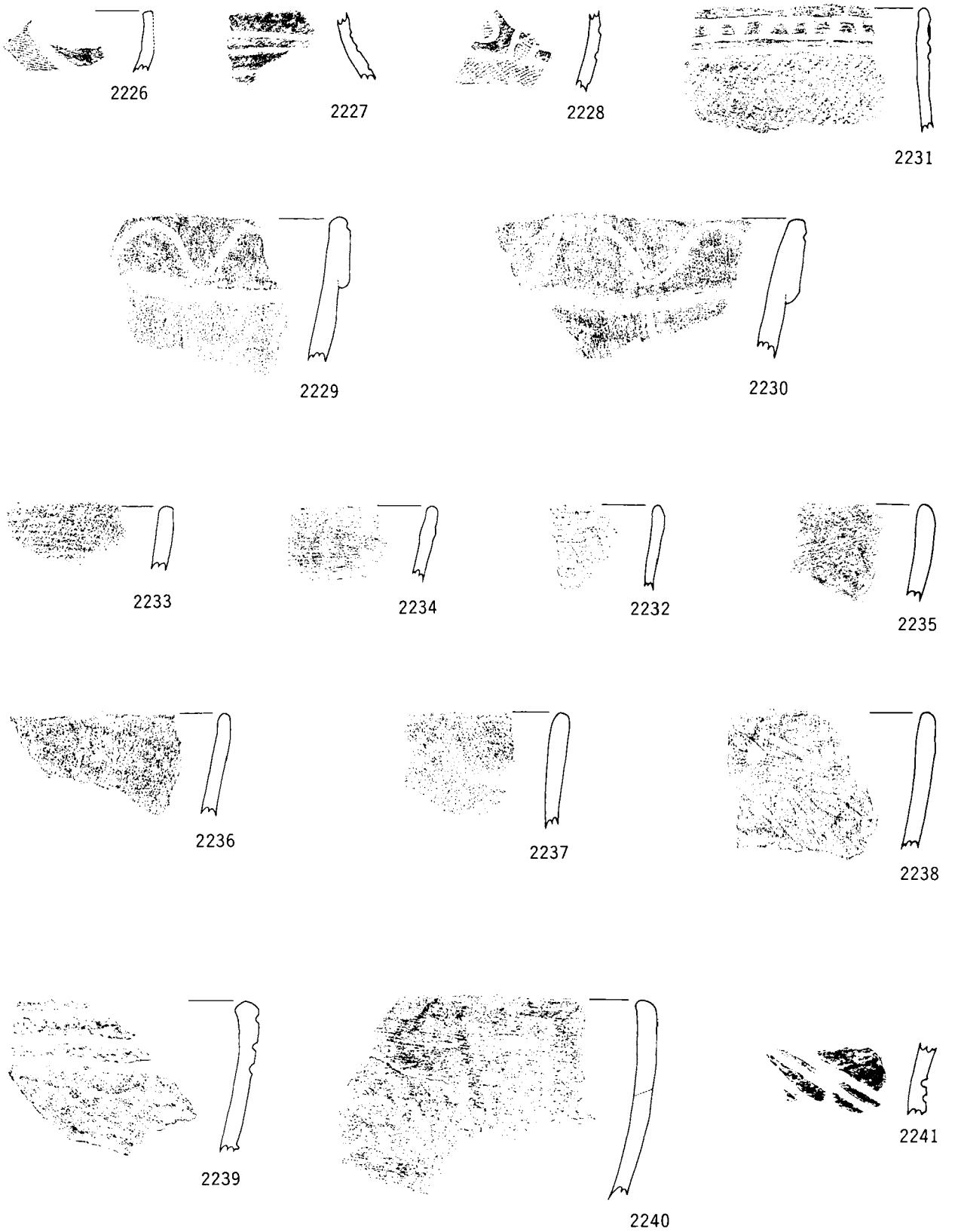
なお、胴部の破片は口縁部とは別に取り扱い、代表的な大きな破片のみを提示した。

Ａ類（第109・110図　2232～2241・2288）

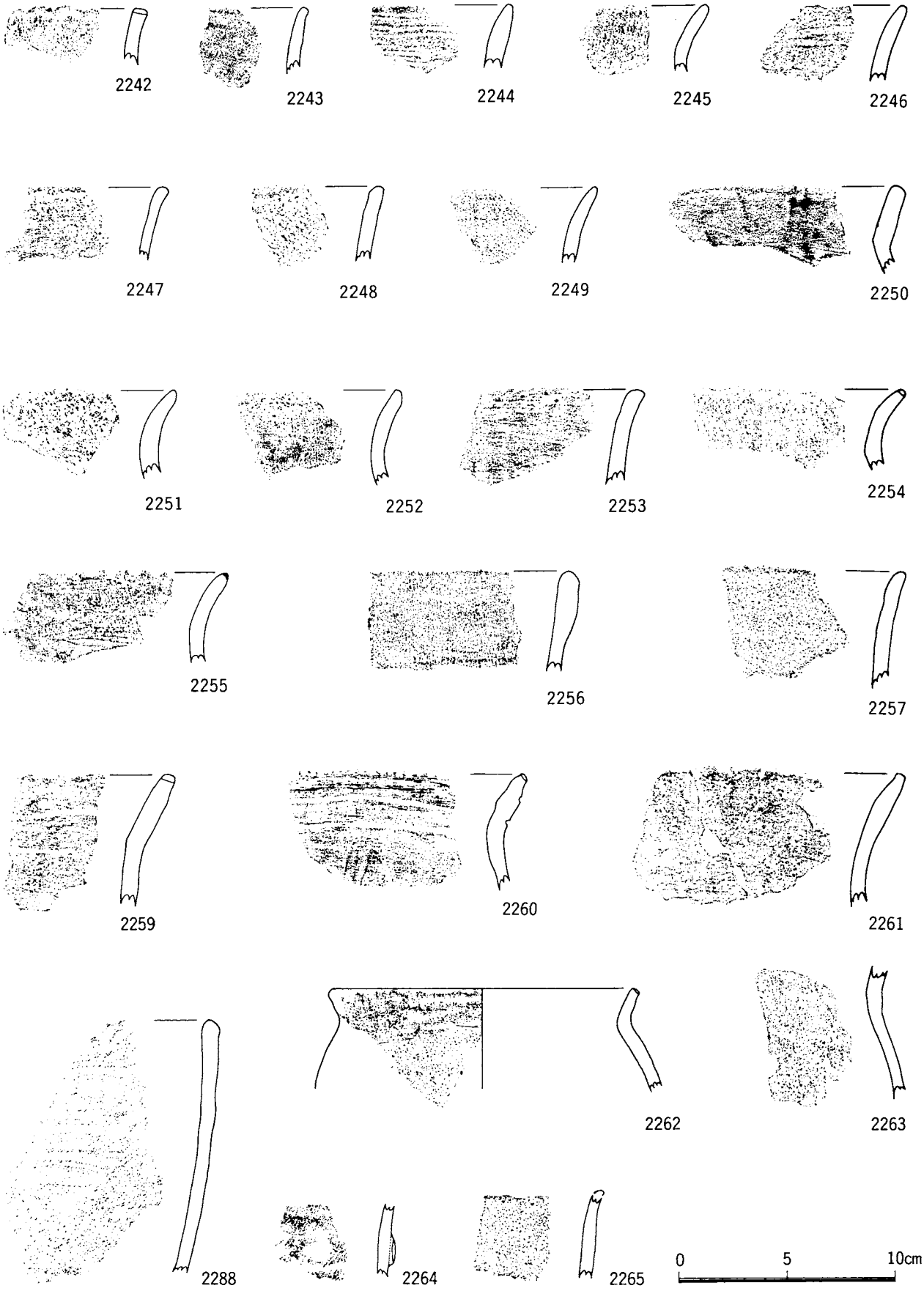
深鉢形をなす土器である。やや内傾しながら内彎気味に立ち上がる口縁をもち、胴部以下はおそらく砲弾形を呈すと考えられる。なかには（2232）のように内傾せず、外方に湾曲する部分が認められるものがある。これは、土器棺墓ＳＺ７の（511）・(512）に認められる口縁部と類似した手法を用いていると想定できる。端部は丸くおさめるものが多いが、若干の平坦面を残すものもある（2240)。(2239）には横走する沈線が２本認められる。調整方法は粗いミガキ手法が多用され、口縁部で横位に、口縁部以下では斜位に施される。(2288)は粗いミガキが施されず、ケズリ調整が認められる。

Ｂ類（第110図　2242～2263・2265）

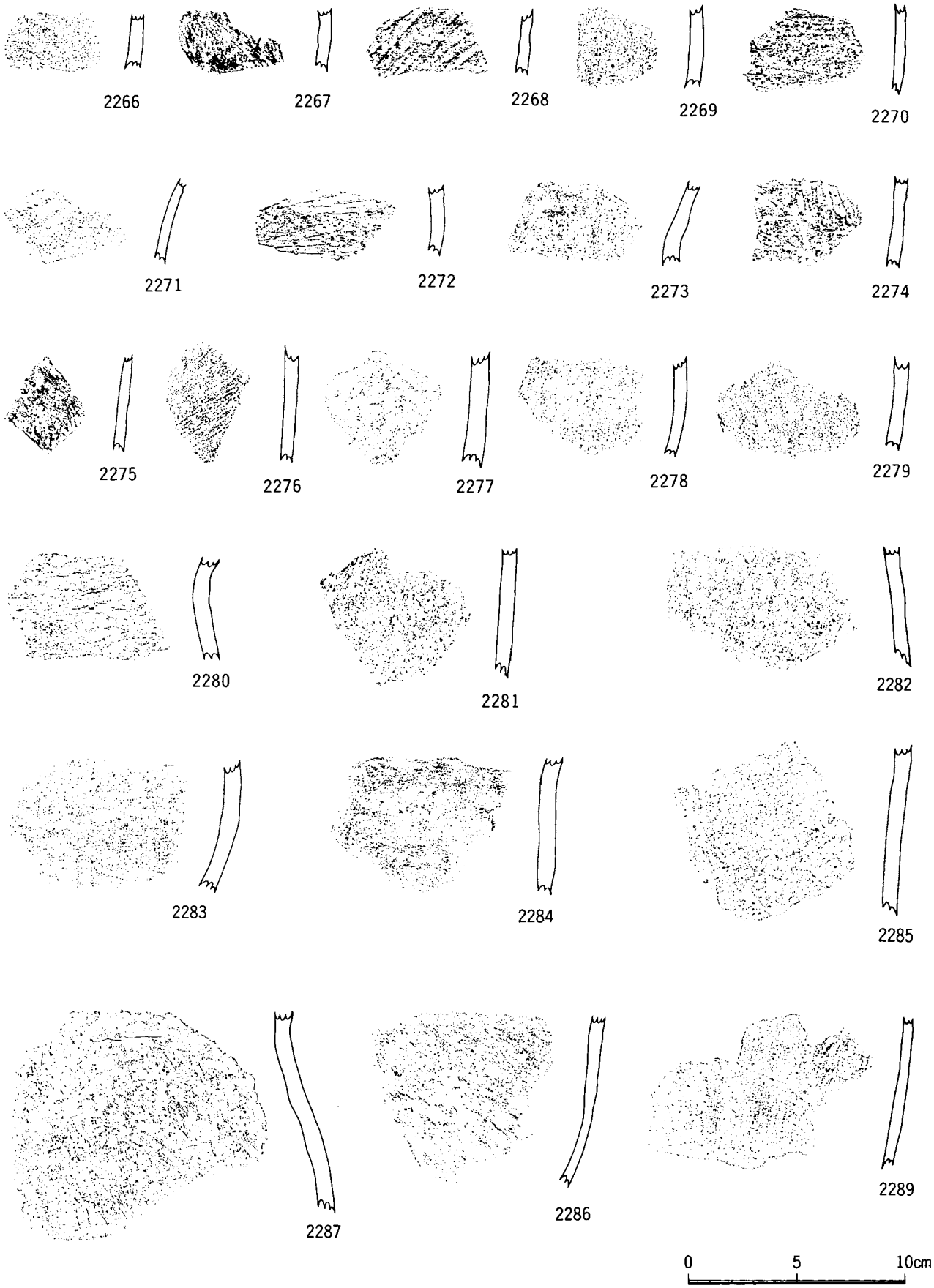
いわゆる甕形土器で、無突帯刻目土器に類似する。頸部から弱く「く」の字状に屈折して、短く外反する口縁部をもつことを特徴とする。屈曲の度合いや口縁部の長さは個々の土器片での個体差が著しい。端部は外方に向かってやや尖り気味あるいは丸くおさめるのが一般的である。(2250)には平坦面が観察される。また、端部にはヘラおよび棒状工具による押し引き(2242・2254・2259・2260）や刺突（2255・2262）が認められることが多い。(2260）には横走する２本



第109図　その他の土坑・ピット出土土器(22)　晩期



第110図　その他の土坑・ピット出土土器(23)　晩期



第111図　その他の土坑・ピット出土土器(24)　晩期

の沈線が認められ、無文を基調とする本類の土器にあってはやや異質で、本類とは違う時期に属するのかもしれない。(2244)は微妙ながら貝殻条痕が観察できる。二枚貝による調整手法が認められる口縁部片は図示した1点のみで、本類の土器が所属する時期のなかでは後続する時期の要素を唯一示し得るものである。

調整手法はA類と同様、粗いミガキ調整の使用が内外面とも顕著で、これ以外のものはナデ調整がほとんどである。

胴部（第110・111図　2264・2266～2287・2289）

器形に区別なく同手法の調整を多用していることから、胴部片からの器形の判別が難しいため、一括して取り扱うことにする。小片が多いため、正確に器形を知り得るものが少なく、ここでは調整手法を中心に言及する。

B2群に属する胴部片は125点認められる。小片が多く、破片の大きさ・出土量において問題が残るが、単純に出土した125点について調整手法を観察した。その結果は、外面については粗いミガキ76点・ナデ8点・ヘラケズリ5点・条痕3点・磨滅33点、内面についてはナデ49点・粗いミガキ20点・ヘラケズリ3点・磨滅53点であった。さらにつけ加えて、口縁部片は29点が出土したにすぎないが、そのうち外面では18点に粗いミガキ調整が用いられ、胴部同様、本類における調整手法の主体的位置を占めている。内面についても同じ傾向が認められ、粗いミガキ12点・ナデ5点である。胴部においては外面では粗いミガキ、内面ではナデが主流を占めたが、口縁部では内外面とも粗いミガキが顕著である。土器棺墓の資料の観察から、口縁部では内外面については胴部内面とは違って粗いミガキを用いている例が目立つ。この点からすれば外面は基本的に粗いミガキ、口縁内面には粗いミガキ、胴部にはナデといった手法が想定できるが、今後の資料の増加を待って検討せねばならない。

(2264) は唯一の突帯文をもつ資料である。突帯上にO字状の押圧が加えられている。

調整手法において貝殻条痕がほとんど認められないことは、本群の土器において粗いミガキが多用されていることとともに大きな意味をもつ。貝殻条痕が晩期後葉に主流をなすとすれば、本群の土器群はそれ以前の段階にあることを意味しているかのようである。貝殻条痕同様、突帯文が顕著でない点も、突帯文土器以前の段階にあることの状況証拠として把握することも可能である。このことは、粗いミガキの使用が当該期の1つの大きな特徴となる可能性があることを示している。

④晩期の土器について

本遺跡出土の縄文時代晩期の土器の多くは、中葉までの資料と考えられる。粗製土器が圧倒的に多いため、時期の判断には難しい面も存在するが、晩期後葉に特徴的な突帯文や貝殻条痕

が認められないため、突帯文以前の段階として理解したい。また、晩期前葉に比定できる資料はほんのわずかであり、前段階の土器の量と比較すれば、まるで断絶したかのようである。しかし、一部に存在する北陸系の土器によって、八日市新保式系の土器に代表される後期後葉の土器の傾向を継続していることを垣間見ることができる。

晩期中葉に比定される資料の多くは、稲荷山式～西之山式の時間幅を想定しているが、西之山式を刻目突帯文土器の出現をもって定義するなら、本遺跡の資料の多くは稲荷山式に併行する段階にあると考えられる。県内でまとまって稲荷山式の資料を確認しているのは、「北裏遺跡」しか見当らない。本遺跡の資料は量的には多くはないが、現状では良好な資料といえる。しかし、調整方法に粗いミガキが特徴的に使用されていることは、稲荷山式の特徴が輪積み痕を残すような粗いナデ調整にあると理解されるなら、異なる面も存在する。このため、現状では稲荷山式～西之山式と時間の幅をもたせて理解したい。また、ＳＺ７の（511）・（512）にみる口縁部が肥厚し湾曲するタイプは、晩期前葉の晩期縁帯文系土器の残存的要素とも考えられ、前段階からの空白を埋める資料になるのかもしれない。いずれにせよ、今後の資料の増加によってさらに検証せねばならない。

本遺跡の対岸には、「はいづめ遺跡」・「小の原遺跡」があり、すでに報告書は刊行済である。これらの遺跡は河川を挟んで対峙する段丘上に立地し、互いの関係を無視することはできない。河川単位を１つの地域の単位として認めるなら、この３遺跡はその中でも最も小さな単位として把握することが可能である。

この３遺跡の営まれた時期は、「小の原遺跡」が縄文早期～前期、「戸入村平遺跡」が縄文中期～晩期中葉、「はいづめ遺跡」が縄文晩期後葉～弥生前期と、時期の細別は別として、大きくは３遺跡で縄文時代を完結し、互いにその役割を交換している。３遺跡の関係は互い離れた存在として考えるのではなく、むしろ１つの遺跡として把握すべきなのかもしれない。とくに対岸に位置する「はいづめ遺跡」が晩期後葉から始まることを考え合わせると、小地域での動向を追求するうえで大きな手がかりを提供しているとも考えられる。

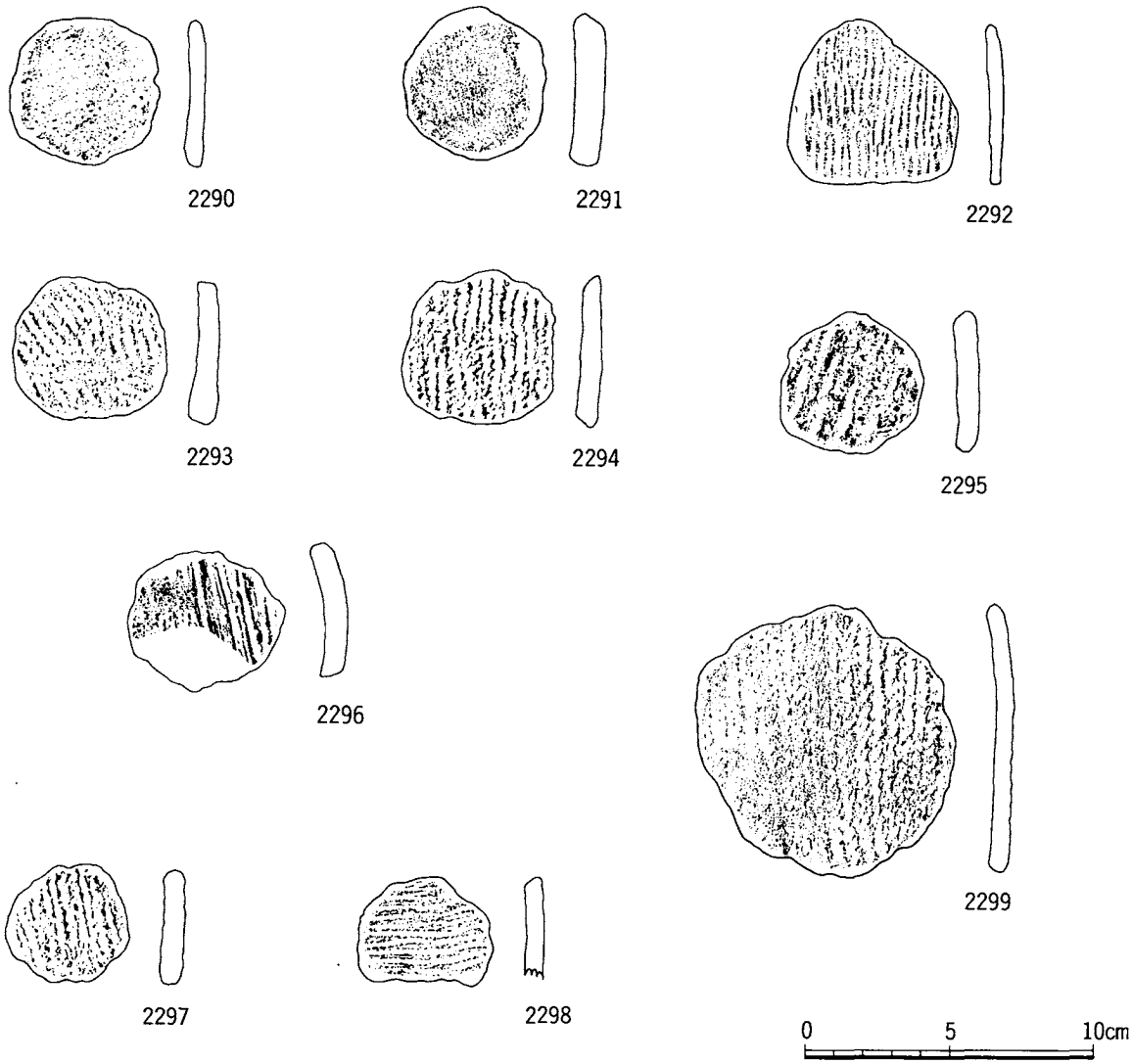
このような各々の遺跡の関連性の追求は、旧徳山村地内の調査の性格上はじめて可能なのであり、さらなる調査の積み重ねによってより一層、縄文時代の生活の具体的な様相が明らかにできると考えられる。

（藤田英博）

(2)縄文時代の土製品（第112図、図版33）

土製円盤（第112図　2290～2299）

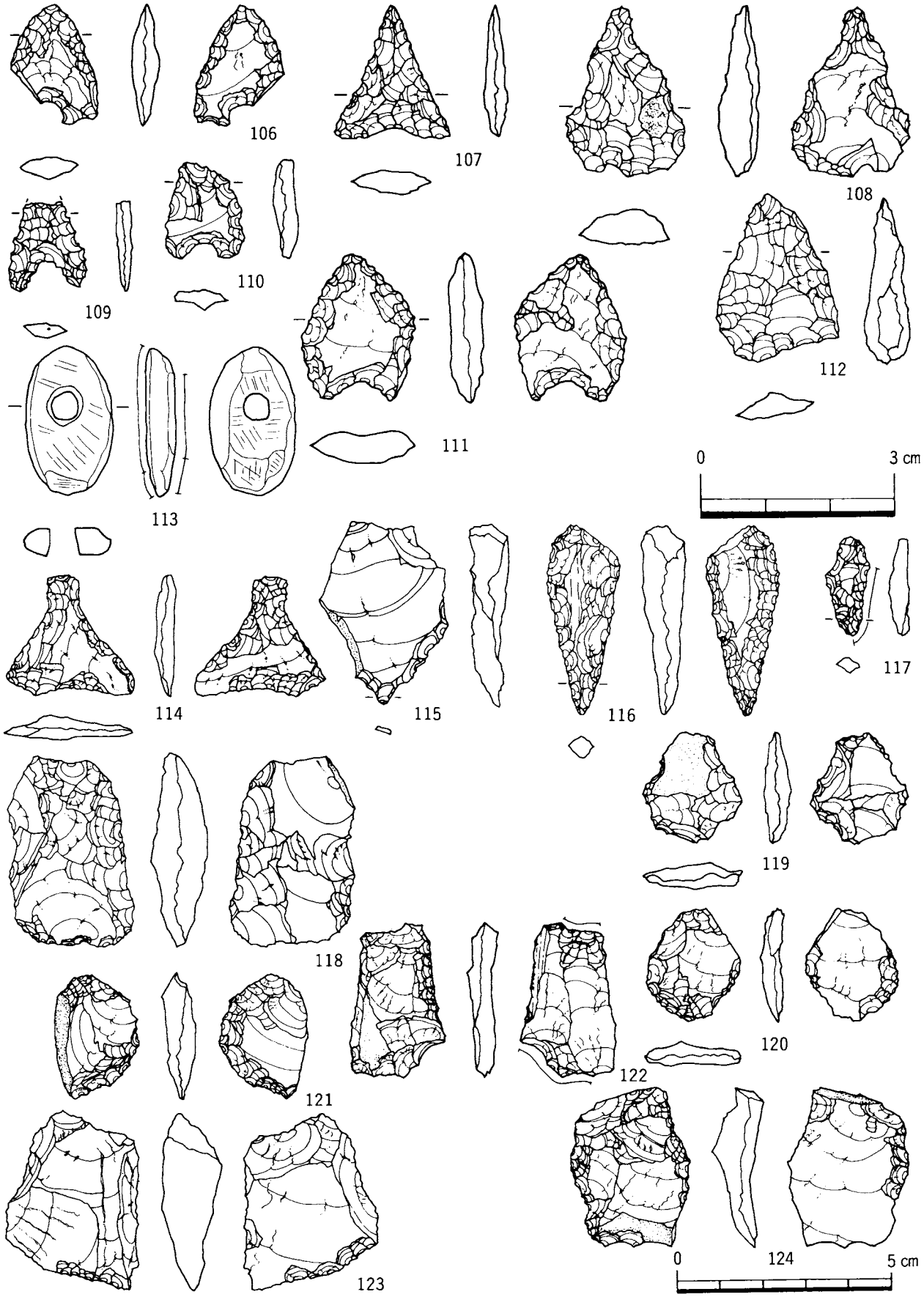
土器片を円盤状に打ち欠き、側縁を磨き整えたものである。その他の土坑・ピットからは、



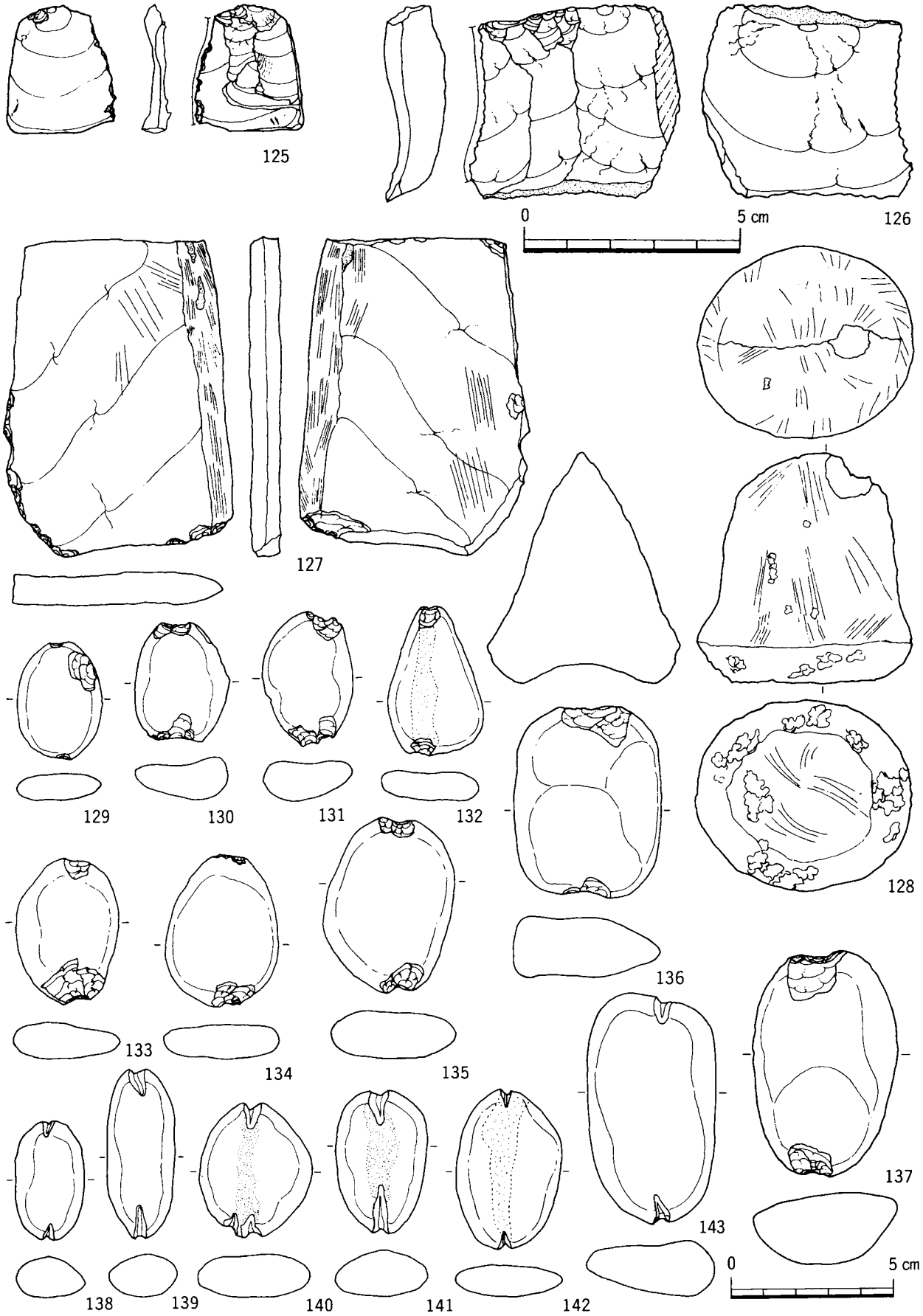
第112図　その他の土坑・ピット出土土製品

10点が出土している。最大のものは（2299）で、最大長9.2cm、最大幅8.8cm、最大厚0.65cm、重量67.9ｇを測る。最小のものは（2297）で、最大長3.9cm、最大幅4.2cm、最大厚0.81cm、重量17.0ｇを測る。他に比べて大きい（2299）と、一部を欠損している（2298）を除くと、平均的には長さ･幅とも約5.0cmの円形で、平均重量は25.3ｇである。使用している土器は、(2292)・(2298）が撚糸文を施す。残りの８点は縄文を施す。(2296）は「船元III式」であり、(2293)・(2294)・(2297)・(2299）も「船元式」特有の粗い撚りの縄文である。ＳＢ４で出土している３点も含め、船元・里木様式の土器片を使用しており、この時期の所産であると考えられる。

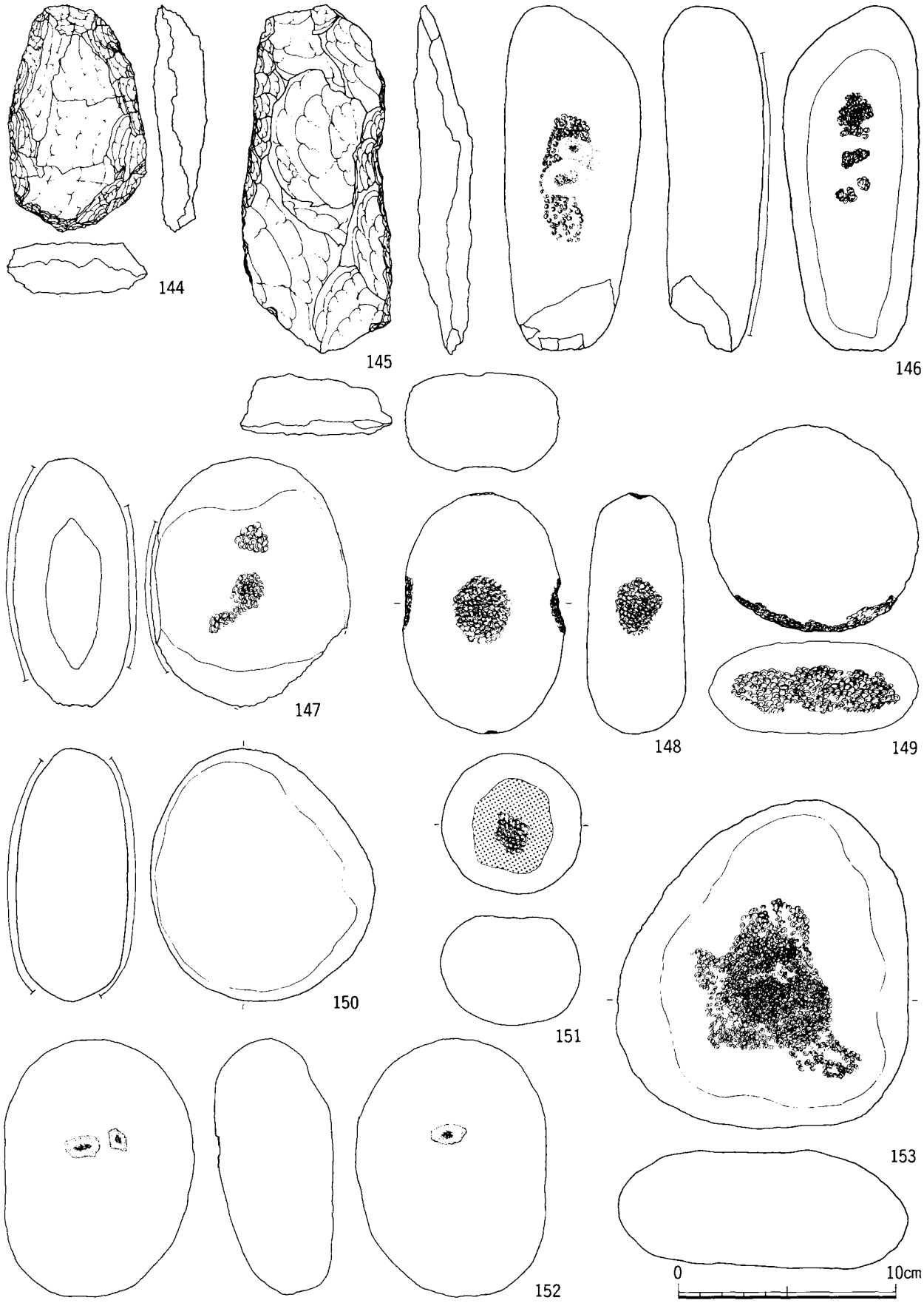
（武藤貞昭）



第113図　その他の土坑・ピット出土石器(1)



第114図　その他の土坑・ピット出土石器(2)



第115図　その他の土坑・ピット出土石器(3)

第6節　石　器　類

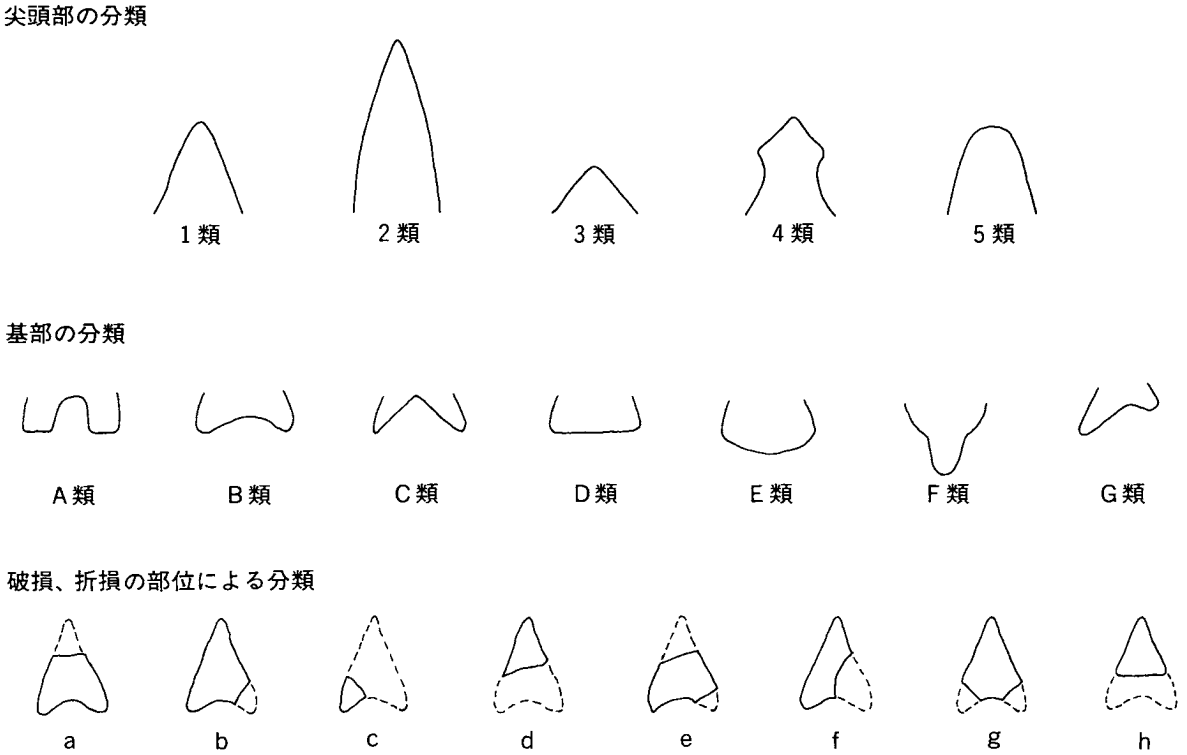
本遺跡から出土した石器群は、合計11,384点である。これらの石器群は、併出している土器形式より、ほとんどが縄文時代中期から晩期にかけての製作・使用・廃棄されたものと考えられる。しかし包含層の明確な時期区分ができなかったため、各石器の時期的な限定はできなかった。

以下に器種ごとに分類を中心に説明する。

石鏃（1、2、17～22、35、42～52、106～112、154～209）

349点出土した。石材は、サヌカイト23点、下呂石14点、チャート 312点で、徳山地域で手に入りやすいチャートが断然多いが、サヌカイト、下呂石[1)]といった搬入された石材のものも小量ながら存在する。

石鏃の矢先としての機能を考えて、尖頭部と、矢柄との装着部である基部に着目してそれぞれ以下のように分類した（第116図）。そして、それぞれの石鏃を尖頭部と基部との組み合わせで分類した。



第116図　石 鏃 の 分 類

尖頭部の分類

１類；鋭角な尖頭部を持つもの。

２類；１類と同じだが、全長が長い（全長が全幅の２倍以上）もの。

３類；鈍角な尖頭部を持つもの。

４類；先端が小さく尖り、側縁部の肩が張った形状を持つもの。

５類；先端が尖らず、丸いカーブを描くもの。

基部の分類

Ａ類；基部の中央部がＵ字型にえぐられているもの。

Ｂ類；凹状のわずかなえぐりの入るもの。

Ｃ類；深いえぐりの入るもの。

Ｄ類；いわゆる平基鏃で、基部が直線状になるもの。

Ｅ類；いわゆる円基鏃で、基部が丸みを帯びて突出するもの。

Ｆ類；いわゆる有茎鏃で、基部に茎を持つもの。

Ｇ類；いわゆる片足鏃で、基部に片方しか足がないもの。もしくは片方の足が、非常に小さいもの。足の折れたものとの区別が困難であるが、足のない側に調整がみられるかどうかで区分した。

折損等で形態がわからないものをのぞいた各類の点数を第８表に示した。

１Ａ類（42、106、154～158）15点出土。１Ｂ類（1、2、17、43～46、50、107、159～172）109点出土。１Ｃ類（18、48、109、173～183）42点出土。１Ｄ類（19、49、51、184～190）41点出土。

１Ｅ類（108、191～196）25点出土。１Ｆ類（197）１点出土。１Ｇ類　４点出土。

２Ａ類（198）２点出土。２Ｂ類　１点出土。

３Ａ類（110）２点出土。

３Ｂ類（20、21、111、199～201）27点出土。

３Ｃ類（47、202）４点出土。

３Ｄ類（53、54、203）11点出土。

３Ｅ類（112、204）12点出土。

４Ｂ類（207、208）３点出土。

４Ｇ類（205）１点出土。

５Ｂ類　１点出土。

５Ｄ類（35、209）５点出土。

第８表　石鏃の分類別出土点数

	Ａ類	Ｂ類	Ｃ類	Ｄ類	Ｅ類	Ｆ類	Ｇ類
１類	15	109	42	41	25	1	4
２類	2	1	0	0	0	0	0
３類	2	27	4	11	12	0	0
４類	0	3	0	0	0	0	1
５類	0	1	0	5	1	0	0

5Ｅ類（22）１点出土

破損や折損の見られるものは総計150点であった。破損、折損の部位によって第116図のように分類した。

それぞれの点数は次の通りである。

ａ　49点、ｂ　44点、ｃ　５点、ｄ　11点、ｅ　18点、ｆ10点、ｇ　11点、ｈ　２点

石　槍（55、210）

２点出土した。55は４号住居跡からで、サヌカイト製である。210は尖頭部側に折れたあとがみられ、両側縁部がつぶれているので、折れた後ピエス・エスキーユとして使われたものと考えられる。チャート製で表面に丁寧な剥離による調整がみられる。

石　錐（56、57、115～117、211～230）

139点出土した。石材はチャートが 133点、サヌカイトが５点、下呂石が１点である。形態と尖頭部の数により、次の４つに分類した。

１類：（57、115、211～213）剥片の一端を尖らせて尖頭部を作り出したもの。素材の形を大きく変えることがなく多様な形態となり、他と比較して尖頭部が短い。39点出土した。

２類：剥片の全体を整形して尖頭部を作り出したもの。基部と尖頭部の区分は、はっきりしている。尖頭部が一端にあるもの（ａ類）と、両端にあるもの（ｂ類）とがある。２ｂ類については、石鏃と形態的に区別が困難なものもあるが、尖頭部に摩耗痕が認められることを一つの目安として区分した。

２ａ：（56、116、214～215）42点出土

２ｂ：（117、216～222）　8点出土

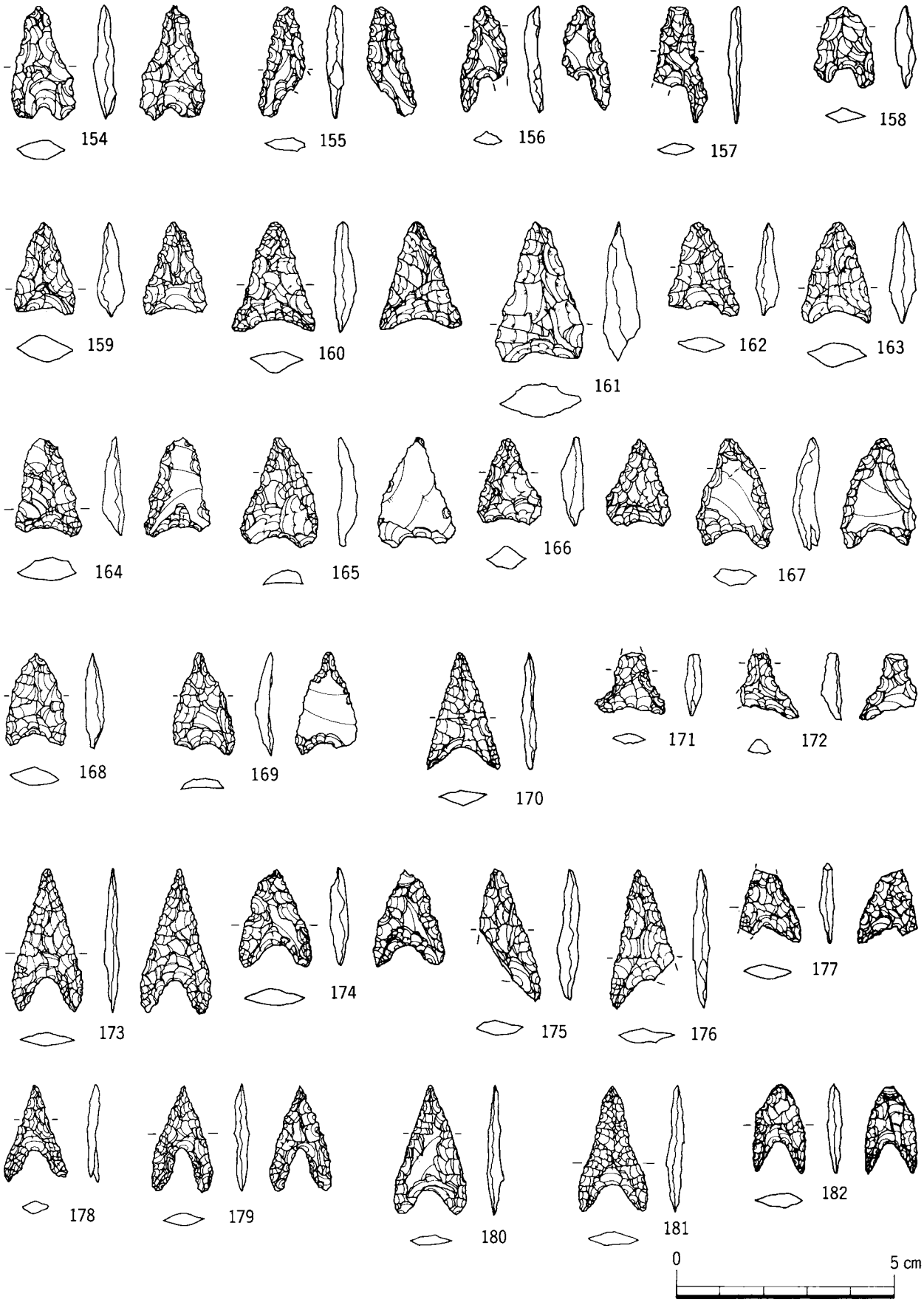
３類：長い棒状の形態を呈し、基部と尖頭部の区分が不明瞭なもの。調整が全体に及び、形態に統一性がみられる。尖頭部が一端にあるもの（ａ類）と、両端にあるもの（ｂ類）とがある。

３ａ：（223～226）18点出土

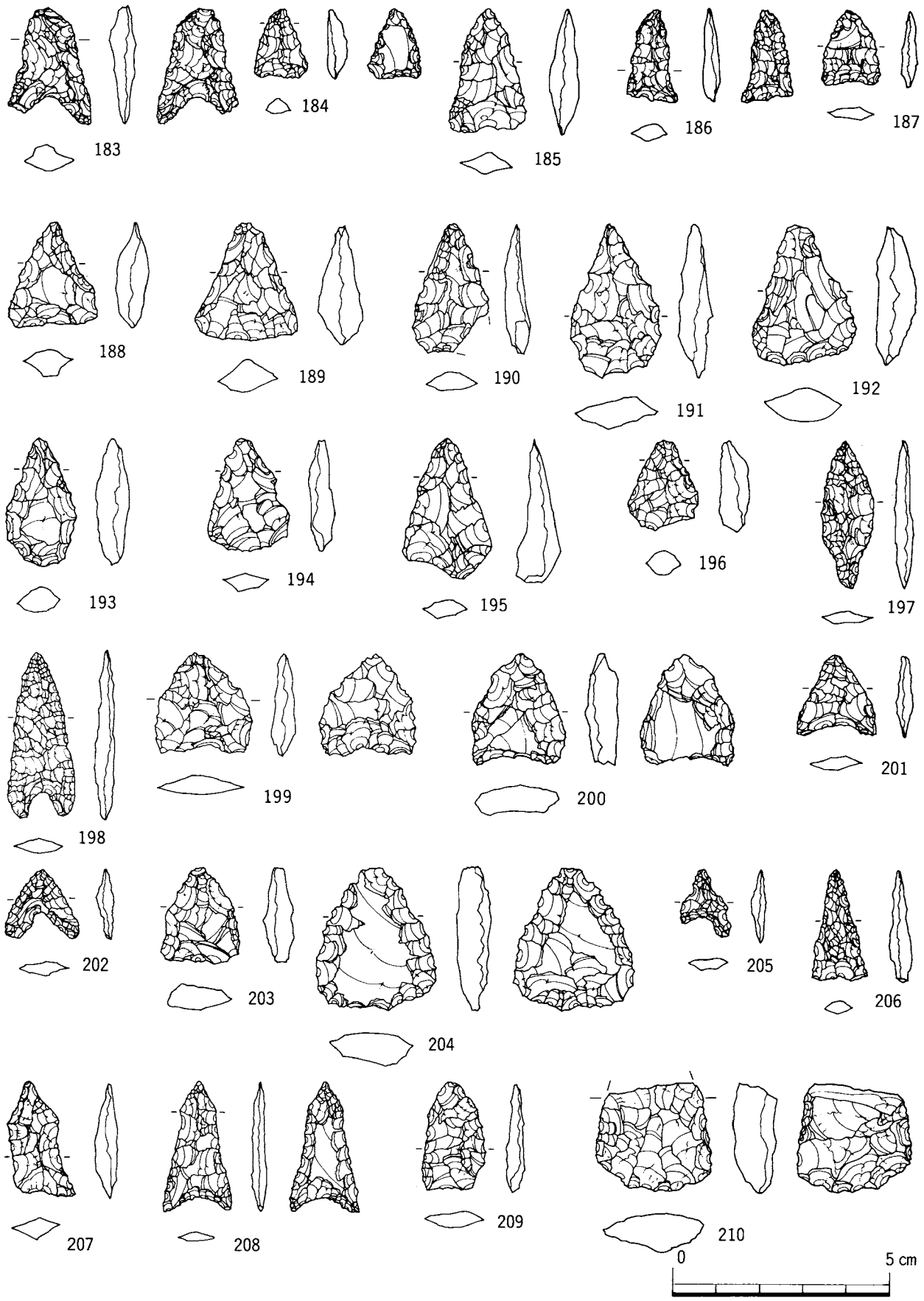
３ｂ：（227～231）32点出土

石　匙　（60、114、232、233、234～239）

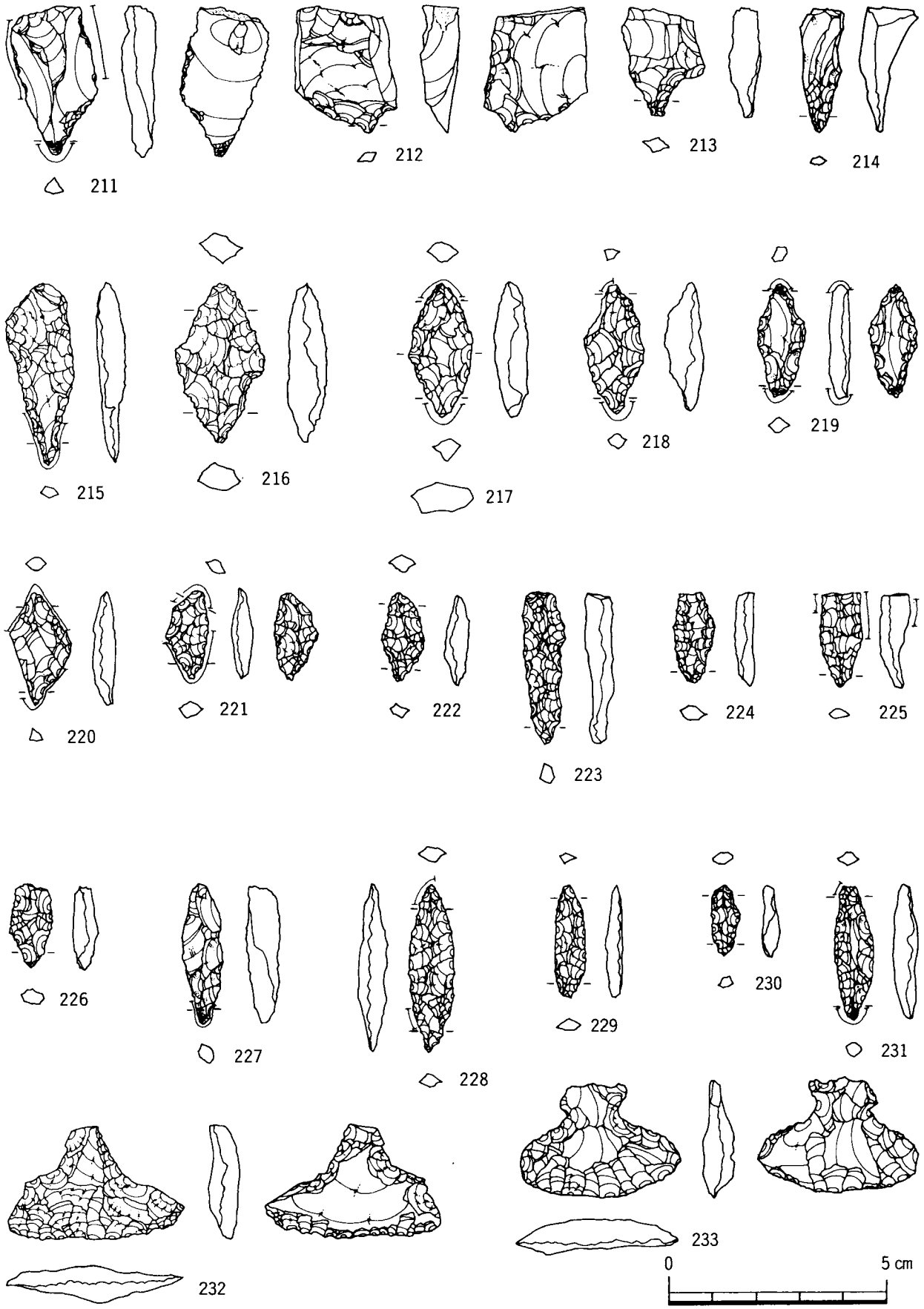
14点出土した。サヌカイト製が３点（114、236、237）で、残り11点はチャート製である。つまみ部分と刃部との位置関係により次の２つに分類した。



第117図　包含層出土石器(1)　石鏃



第118図　包含層出土石器(2)　石鏃、石槍



第119図　包含層出土石器(3)　石錐、石匙

1類：つまみを上方においたとき、平行する側縁が刃部となるもの。いわゆる縦形。(237～240)
5点出土。両側に刃部がつけられているが、238だけは片側だけつけられている。

2類：つまみを上方においたとき、直交するその下端の縁部が刃部となるもの。いわゆる横形。
(58、59、114、232～236) 9点出土。

掻　器　(3、241～246)

急角度に調整された刃部を持つ石器を掻器とした。19点出土しているが、すべてチャート製である。どれも剥片の1～2辺の、片方の面に刃部を作り出している。通常の剥離によるものが多いが、樋状剥離によって作出されたものもある。(244、245)刃部の位置により、次の2つに分類した。

1類：片面の1ヶ所に刃部をつけたもの。(3、241～245) 16点出土。242は石核を転用している。

2類：表裏に、一ヶ所ずつ反対側の位置になるように刃部がつけられたもの。(246) 3点出土。
片方の刃部で作業していたときに、これを裏返すともう1方の作業面が現れるようにできている。どれも小さな砕片を用いている。

削　器　(4、23、60～62、118～121、247～259)

剥片の縁辺に連続的な調整によって刃部を作り出した石器を削器とした。47点出土している。素材となった剥片は不定形なものが多く、刃部を作り出している調整加工もさまざまである。刃部の作出方法により、次のように分類する。

1類：縦長（横長）剥片を素材とし、片面加工により刃部を作出したもの。(247)

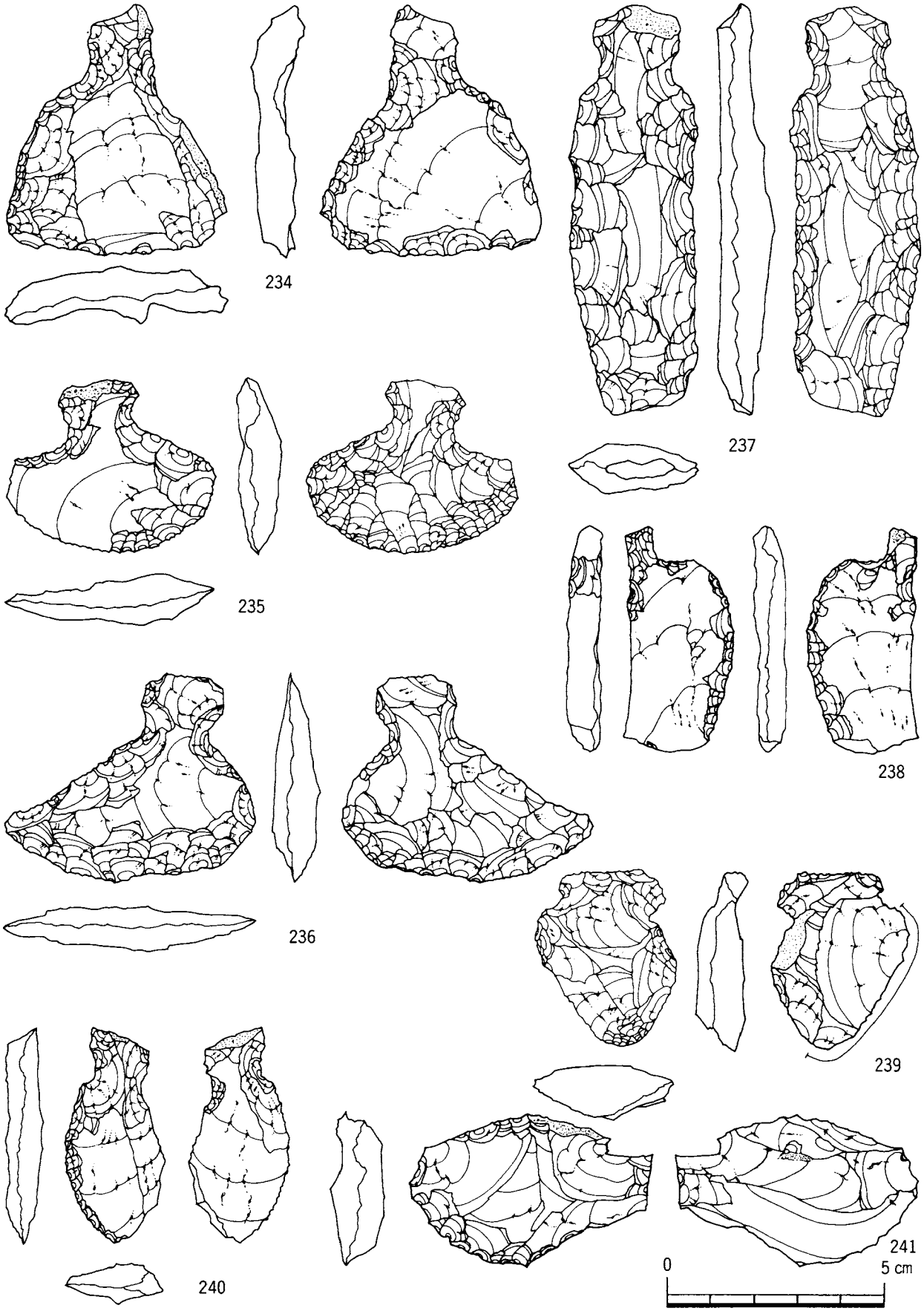
2類：縦長（横長）剥片を素材とし、両面加工により刃部を作出したもの。(4、23、60～62、118～121、248～259)

使用された石材は、チャートが43点と多い。ほかはサヌカイト (23、250) が4点、頁岩が1点である。頁岩のものは、円礫から取った剥片を素材としているので、河原石を利用したものと思われる。

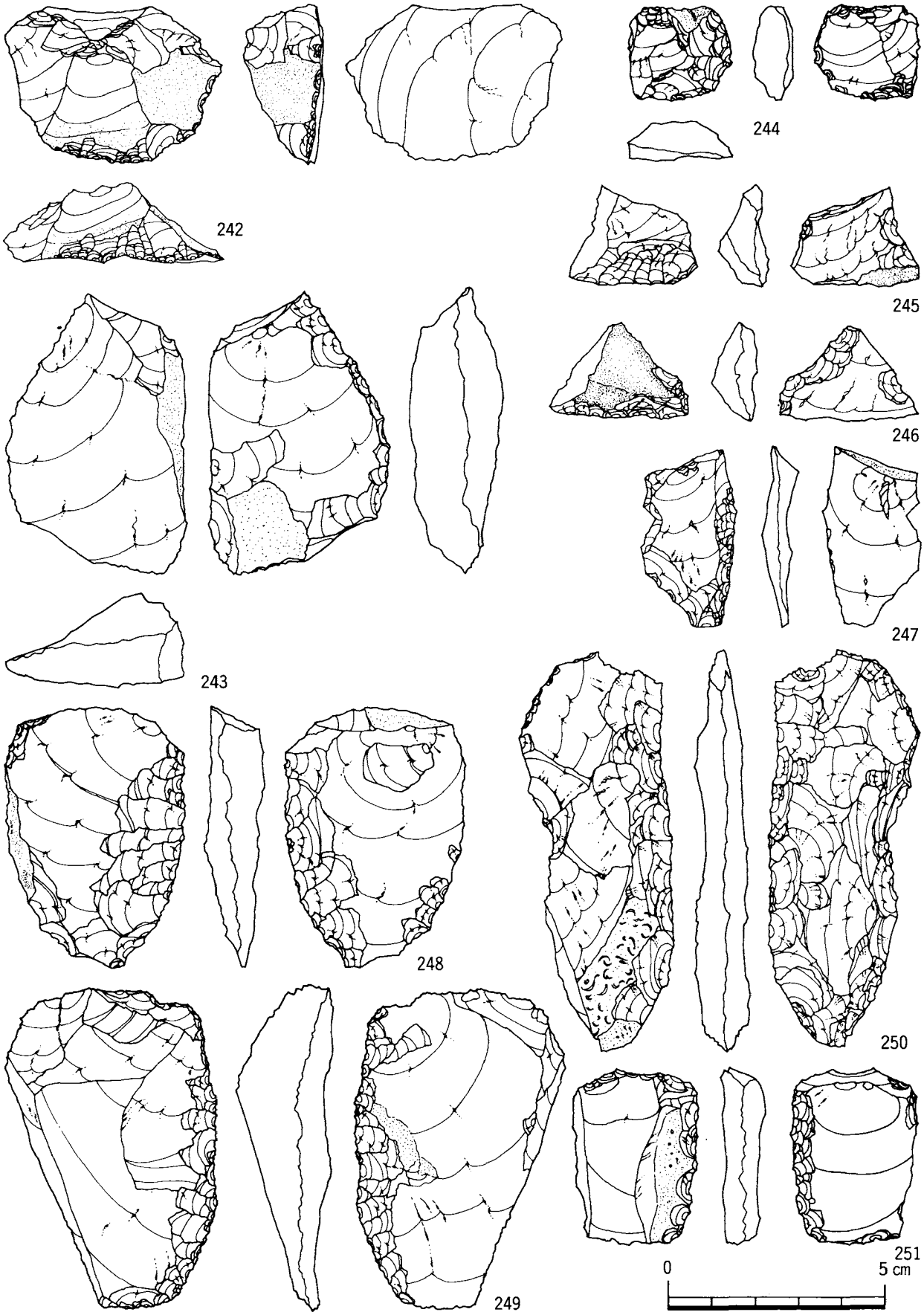
4号住居跡の覆土から出土した60、61の削器は、小さな剥片もしくは剥片を折ったり裁断して整形した、紡錘形の縦長剥片の下部に刃部を作出したものである。この部分は、打点側なので刃部が作出しにくい位置であるが、あえてこの位置につけられている。これとほぼ同じ大きさで同じつくりのものが全部で4点出土している。(119、120)

ピエス・エスキーユ　(5、6、24、25、122、261～271)

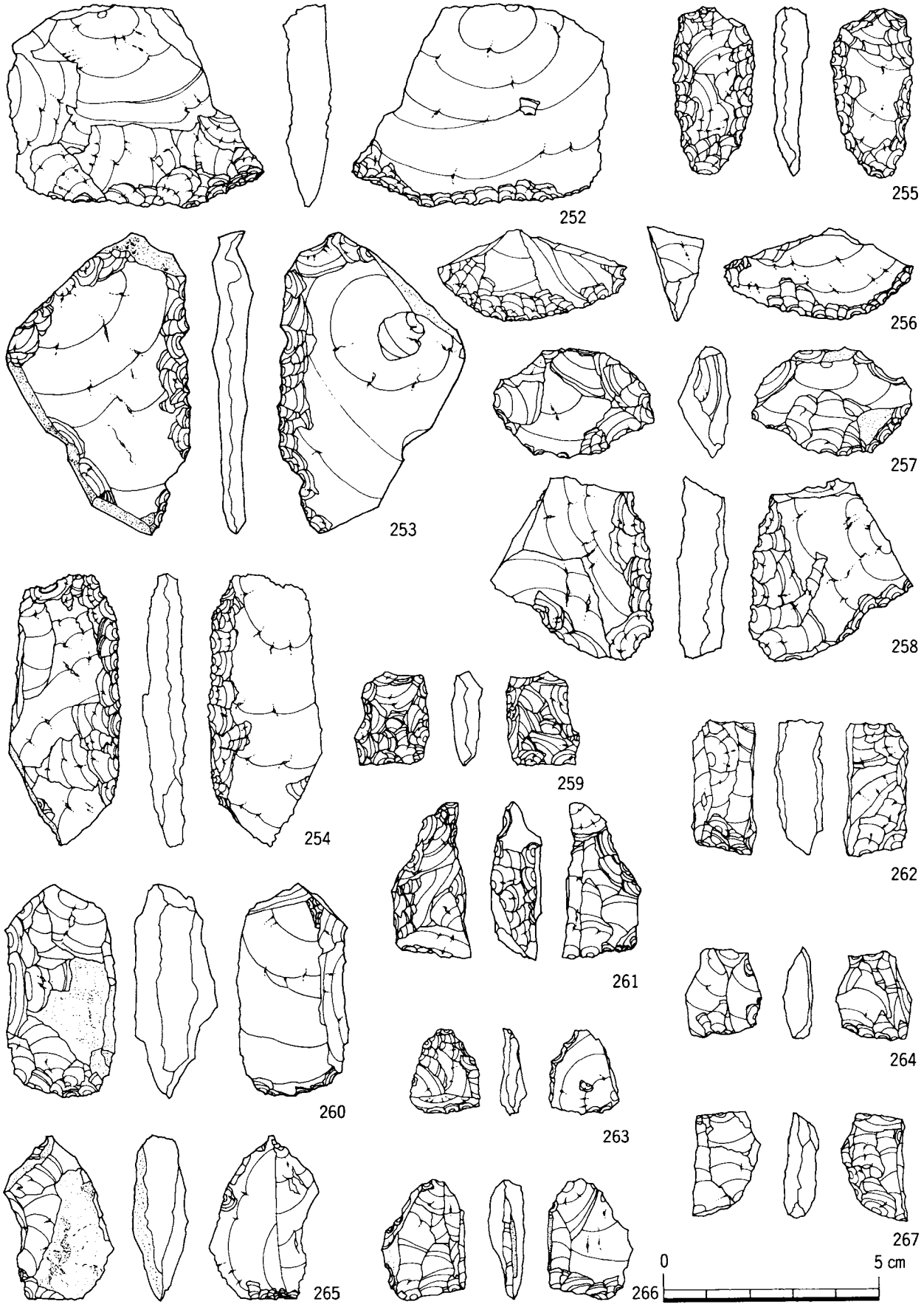
向かい合った二辺ないしは四辺の縁辺部に、剥離痕やつぶれが認められる石器をピエス・エ



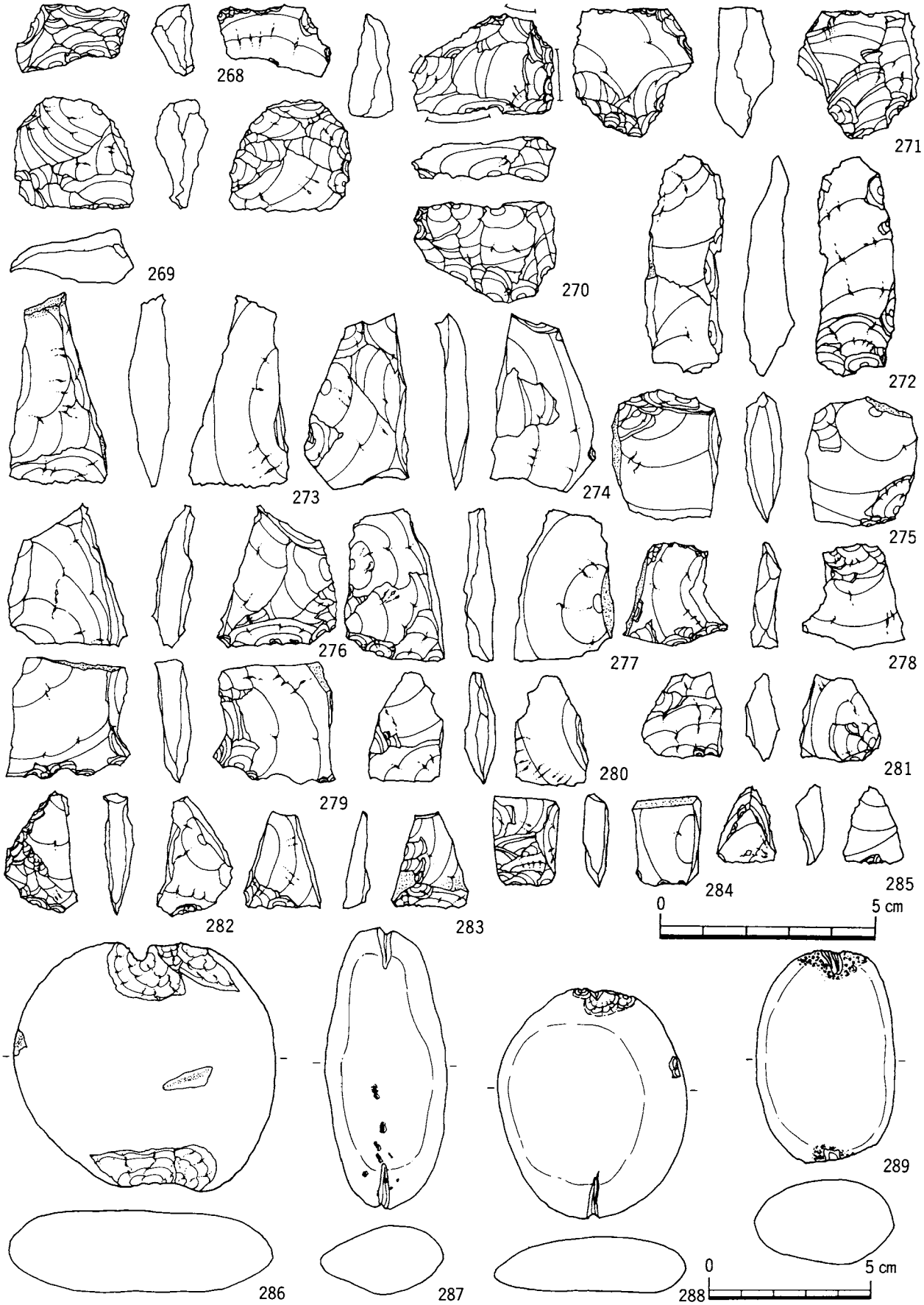
第120図　包含層出土石器(4)　石匙、掻器



第121図　包含層出土土器(5)　掻器、削器



第122図　包含層出土石器(6)　削器、ピエス・エスキーユ



第123図　包含層出土石器(7)　ピエス・エスキーユ、ヘラ形石器、石錘

スキーユとした。211点出土した。石材は、サヌカイトが１点でそれ以外はすべてチャートである。剥離痕の見られる部位と長さ・幅を比較して次の三つに分類した。

１類：縦長で縦に１対の剥離痕の見られるもの。（5、6、122、260～267）144点。

２類：１類以外で、１対の剥離痕の見られるもの。（24、25、268）29点。

３類：２対以上の複合的な剥離痕の見られるもの。（269～271）38点。

ヘラ形石器　（26、67～69、272～285）

剥片の両側を折り取り、長軸方向一端に刃部を持つ石器をヘラ形石器とした。60点出土している。層理面や表皮が残っているものもあり、その場合は、その面をそのまま利用して狭小な面を持っている。刃部は剥片を剥離した際の鋭利な刃部を利用しているものと、細かい数回の剥離を加えているものとがある。大きさは、全長が11～45mm、全幅が10～28mm、厚さが 5～13mmで８mm前後のものが多い。重量は、10ｇ以下である。全てチャート製である。

打製石斧　（9、97、144、145、290～296）

93点出土している。各石材ごとの点数は、ホルンフェルス８点、砂岩22点、安山岩60点、礫岩２点、ひん岩１点である。砂岩や安山岩を用いたものは、河原石を用いたとわかる表皮を残しているものがある。（9、97、290～294）どの石材も徳山地域で普通にみられる石材で、在地のものを使っていると考えられる。

打製石斧の形状から次の３つに分類した。

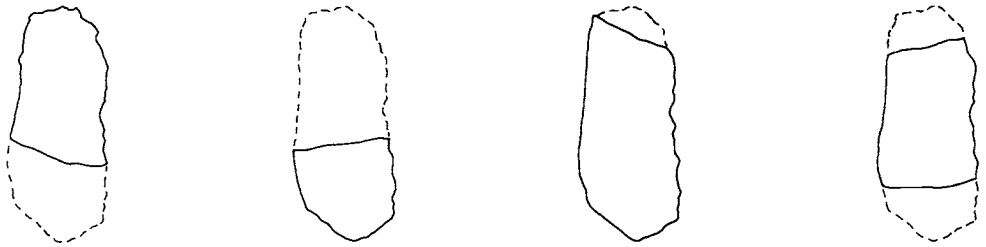
１類：胴部がほぼ平行な、いわゆる短冊型と呼ばれるもの。（145、290～292）38点出土。

２類：胴部がくびれる、いわゆる分銅型と呼ばれるもの。（293、294）７点出土。

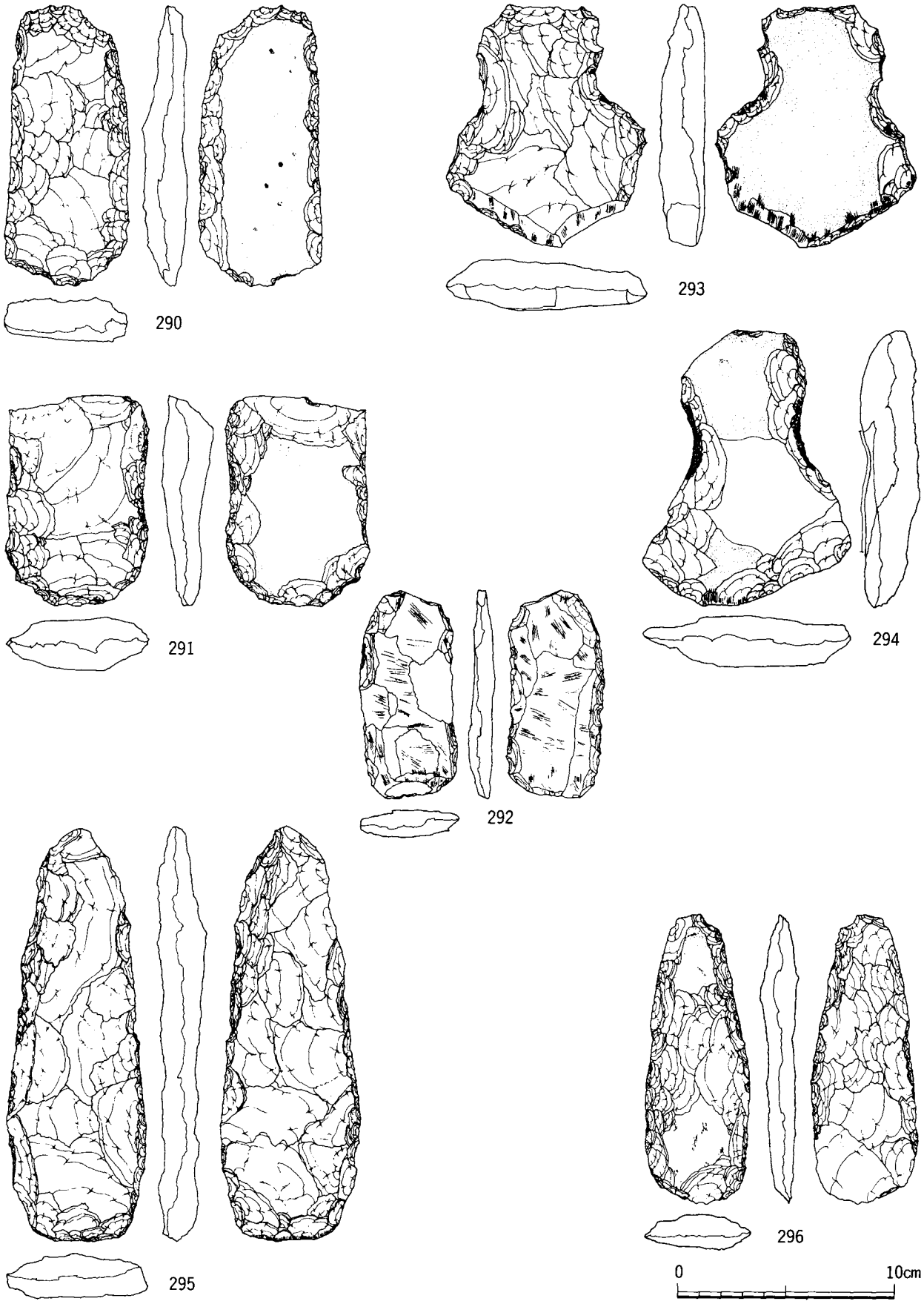
３類：形状が基部に向かってやや収束する、いわゆるバチ型と呼ばれるもの。

（9、97、144、295、296）24点出土。

９や293～295などでは刃部に擦痕が観察された。また292では、全体に擦ったあとがみられる。294では、くびれの部分に敲打のあとがみられ、くびれの調整を施したとものと思われる。293



第124図　打製石斧の折損の部位による分類



第125図　包含層出土石器(8)　打製石斧

などの分銅型のものには、くびれ部分に擦痕が見られるものがあり、この部分に柄を装着したためにできたものと思われる。

93点のうち52点は、明らかに欠損していると思われる。その欠損の部位によって第124図のように分類した。それぞれの点数は、次の通りである。

ａ：14点、ｂ：22点、ｃ：９点、ｄ：６点、不明：１点。

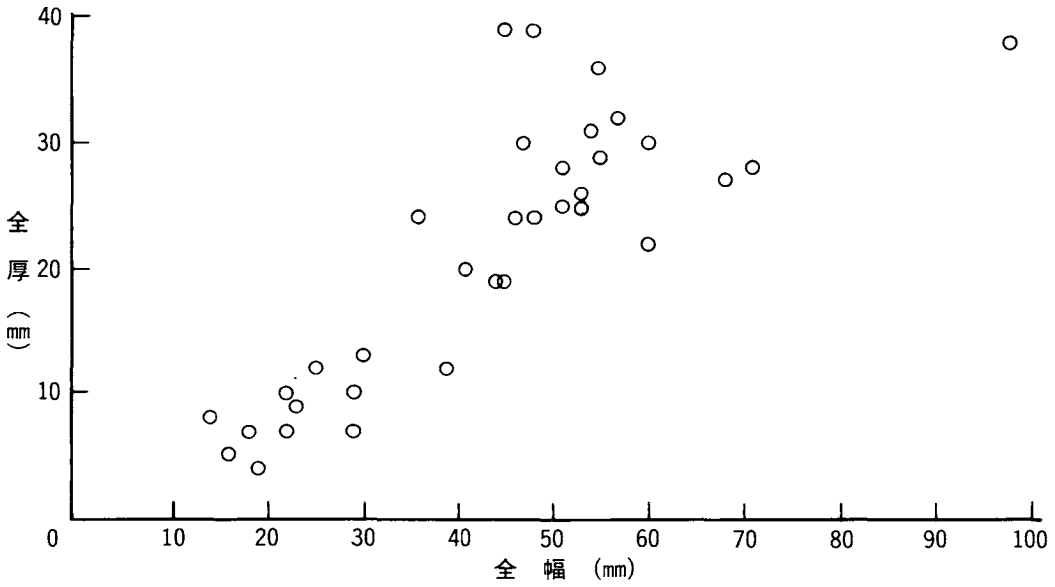
磨製石斧　(98、99、297～314)

49点出土した。石材は、細粒花崗岩、ひん岩、安山岩、蛇紋岩、流紋岩、凝灰岩・はんれい岩等で石器のなかでもっとも種類が多い。このうち、明らかに搬入している石材は蛇紋岩である。

磨製石斧の形態を見ると、大きく断面が円形になるものと長方形になるものの２つに分けられる。後者のものは、大きさが 163mm～26mmまでといろいろなものがある。大きなものは、柄につけて斧として使われたと考えられ、柄に装着痕を残すものもあるが、小さなものについてはそのような使用は考えにくい。したがって形態的に似ていても大きさによって使い方や、用途が異なることが考えられる。

磨製石斧は、刃部をくり返し研いで使用されたと考えられる。そのため全長は使用によって長さが短くなっていくはずで、磨製石斧のサイズを比較する材料にはしにくい。

そこで、第126図のように断面形が長方形の磨製石斧を幅と厚さで比較したところ、大きく３



第126図　磨製石斧の全幅と全厚の関係

つのグループに分けることができそうなことがわかった。

以上のことから分類が可能なもの40点を、形態と石斧の大きさから次の4つに分類した。

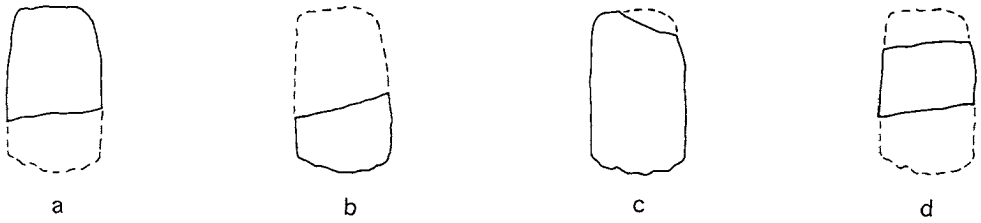
1類：全幅と全厚がほとんど変わらず、基部の断面が円形になるもの。(302、303) 8点。

2類：1類以外のもののうち、全幅が14mm～30mmのもの。(306、309～314) 12点。

3類：1類以外のもののうち、全幅が40mm～70mmのもの。(98、99、298～301、304、305、307、308) 20点。

4類：1類以外のもののうち、全幅が 100mmのもの。(297) 1点。

折損したものは25点あり、それぞれ折れた位置で第127図のように分類した。それぞれの内訳は次の通りである。a類：10点、b類：11点、c類：1点、d類：1点、e類：2点（eは破片のもの）



第127図　磨製石斧の折損の部位による分類

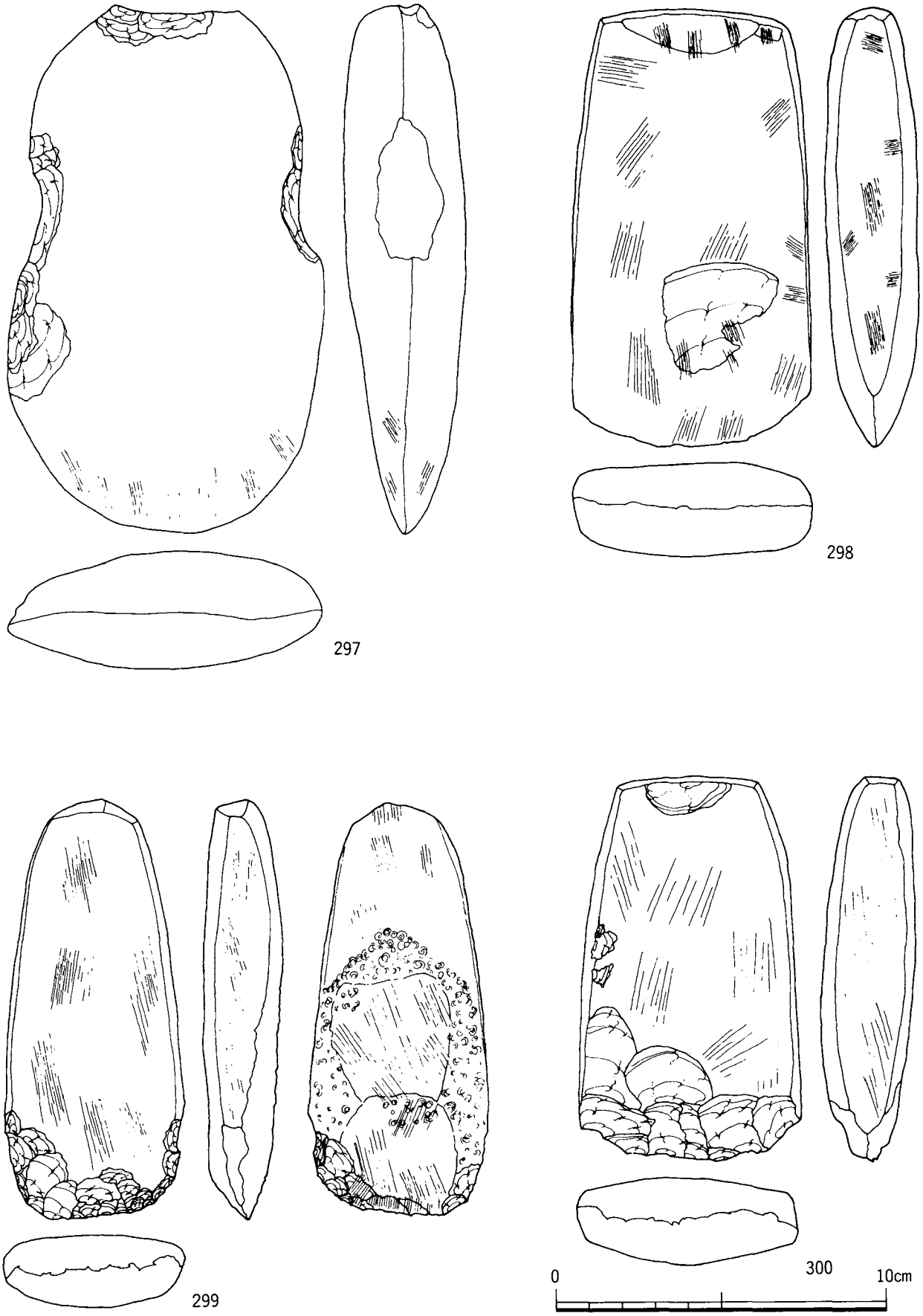
1類の大きさは、3類に属すもので、3類の中の1つの群としてとらえても良いかもしれない。すべて石材としてやや黒く緻密なはんれい岩を使用している。これは2類以下の磨製石斧の使用石材に統一性がみられないので注目に値する。どれも基部から中心にかけてていねいに敲打した痕がみられる。したがって、この敲打した部分に丸い穴をあけた柄を装着して使用したものと考えられる。

2類はサイズの小さなグループである。12点あり、全幅が11mm～30mm、全厚が 4mm～13mmである。このグループのものではっきり柄を装着していたと思われる痕を残すものはみられなかった。サイズが小さいので柄に装着されなかった可能性がある。

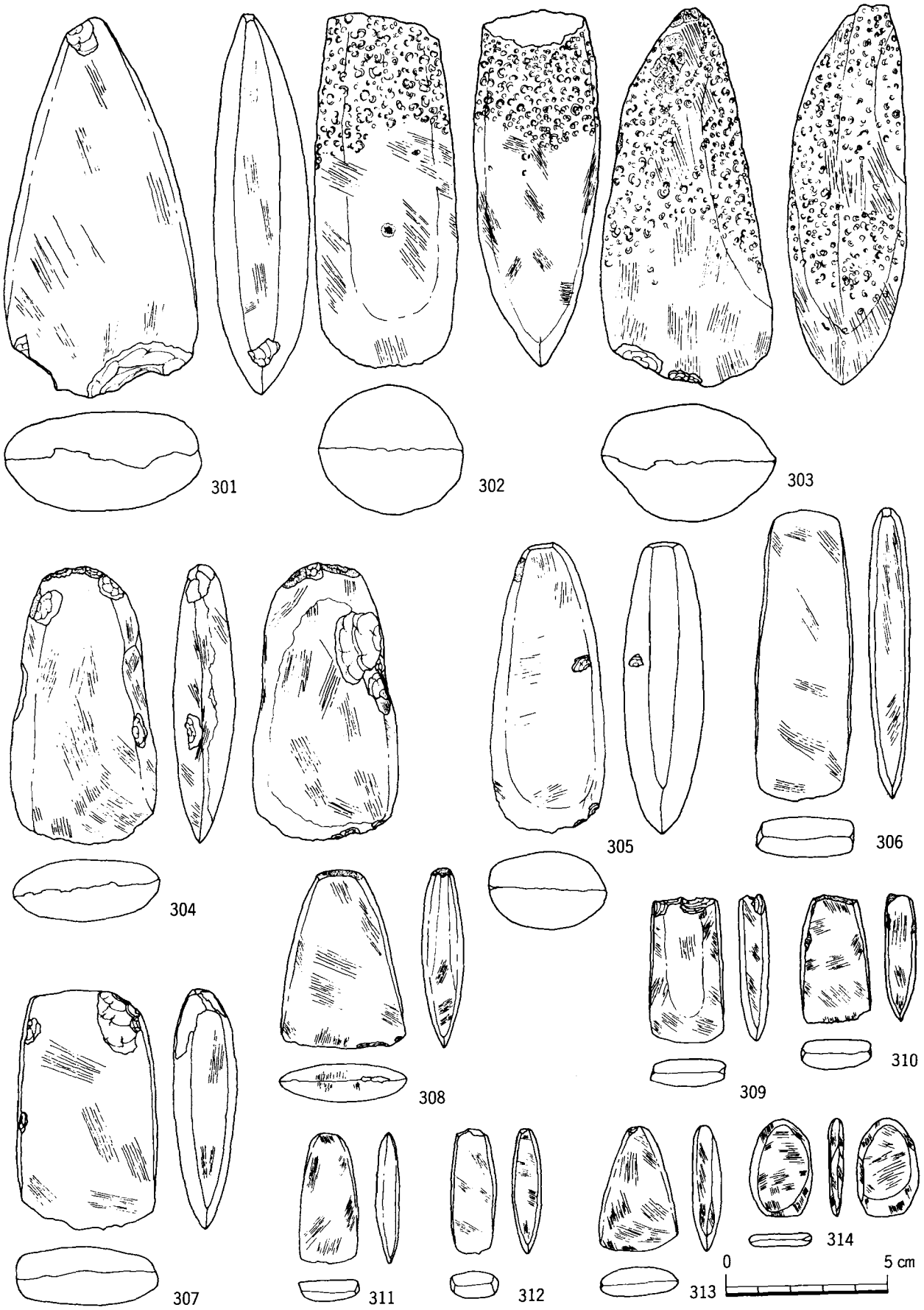
これらのうち基部に叩き痕があるものが6点 (310、312、313)、ないものが5点 (311、314) ある。もし柄を装着しないで利用していた場合、叩き痕のあるものについては木などの対象物に当てて基部をたたいて割るなどの使用法が想定される。しかし叩き痕のないものについてはどのような使用をしていたか想定し難い。

折損しているものは1点、b類に属するものがある。

3類は20点あり、全幅は39mm～71mm、全厚は12mm～32mmである。300や304のように胴部に装着痕とみられるあとを持つものがある。基部に叩き痕のあるものが4点、ないものが6



第128図　包含層出土石器(9)　磨製石斧(1)



第129図　包含層出土石器(10)　磨製石斧(2)

点ある。このグループのものとわかる折損品は11点で、ａ類が１点、ｂ類が９点、ｃ類が１点である。

４類は１点のみである。徳山地域の川原でよく見かける軟らかい安山岩でできている。胴部に大きくくびれを持っていて、その部分に柄をつけたものと思われる。

なお、２類、３類に分類したものの中には、301、308、313のように基部の幅が狭く、全体の形が三角形になるものがある。この形態の相違は時期差による可能性があるが、出土状況からは把握できなかった。

ここで行った分類は、あくまで全幅のサイズの分布が大きく３つのグループに分かれたことに基づくものである。しかしこれ以外の観察でこの分類の考え方を補強する事実は見つかっておらず、これが本当に意味があるのか疑問が残るところである。したがってここでは、このような分類ができるという可能性を指摘するだけにとどめたい。

石　核　(65、315～327)

49点出土した。石材はすべてチャートである。代表的な15点を図示した。

315、317、319、321は、打面が１つだけのものである。315は、層理にはさまれた板状のチャートを片方の層理を打面としている。作業面は１面のみである。319も同様であるが、作業面が両側の２面である。317は表皮の観察から径４cmを越えないと思われる礫を打ち欠き、打面をつくりそこから３方向に剥片を剥離している。321は大きな剥片のポジ面を打面として四方から剥片を剥離している。

316、318、320、322、325は打面が２つあるもので、316は大きな剥片を側面から剥離し、打面が180°移転している。318は、厚さ１cmの板状のチャートの側面を打点としている。打点は90°移転して両面から剥片を剥離している。320はチャートの河原石からとった大きな剥片を側面から剥離し、打点を90°移転させている。325も、318と同様なつくりをしている。322は側面の１方向を打面とした後、90°打面を移動し、底面から３方向に剥離している。

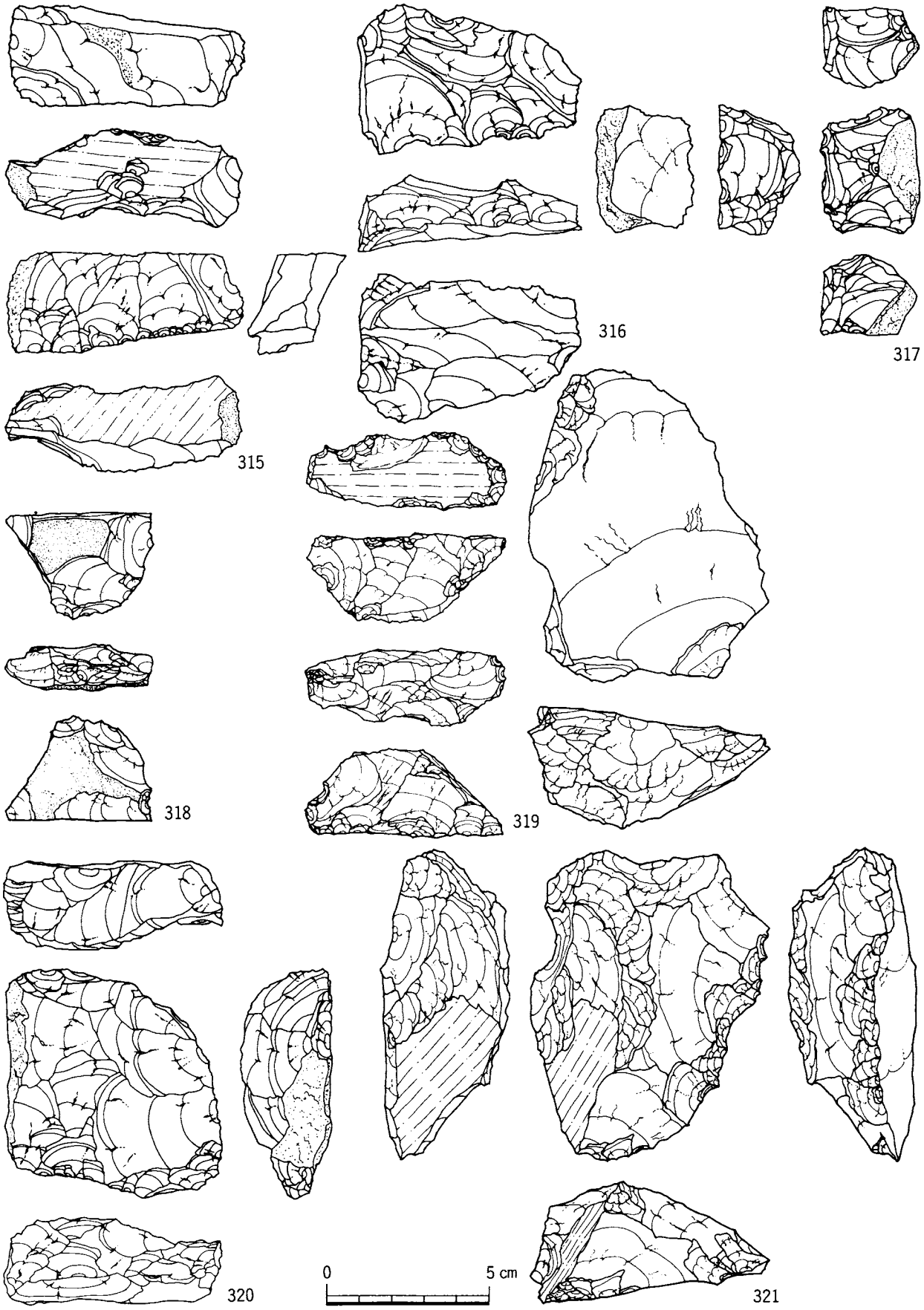
65、323、324、327は打面が３つあるもので、65、323、324は側面の３方向から表裏面両面から剥片を剥離している。327は剥片を利用していて、縦位に剥離した後、180°打面を転移し、その後90°転移して横から剥離している。

326は打面が４つあるものである。剥片を素材としており、側面の４方向から剥離している。

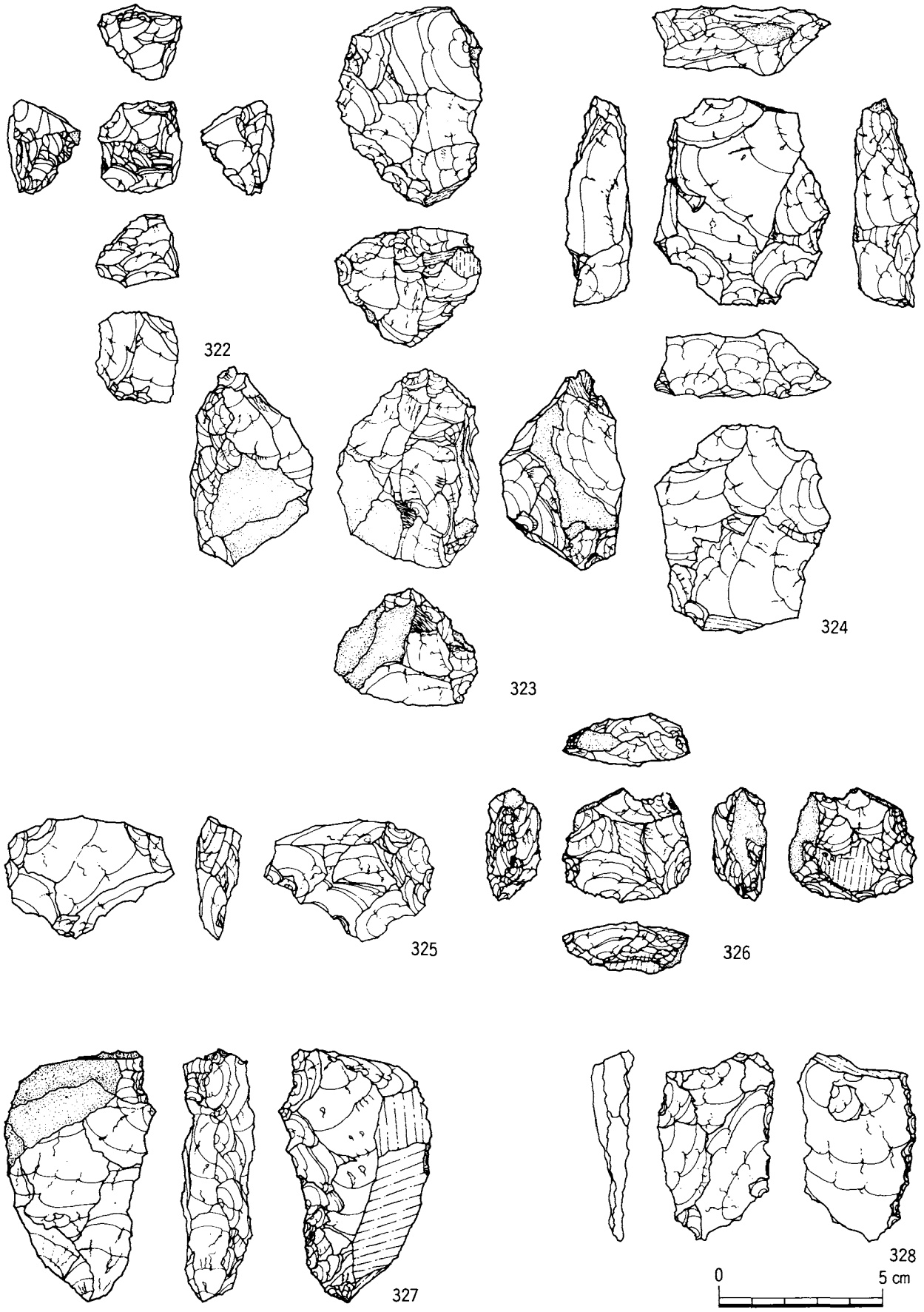
ここから出土している石器や剥片の数を考えると石核の数は多くない。この遺跡で剥片をとった後、石核は他所に持ち出している可能性が考えられる。

２次加工のある剥片　(7、8、27、28、63、64、123、124、328～335)

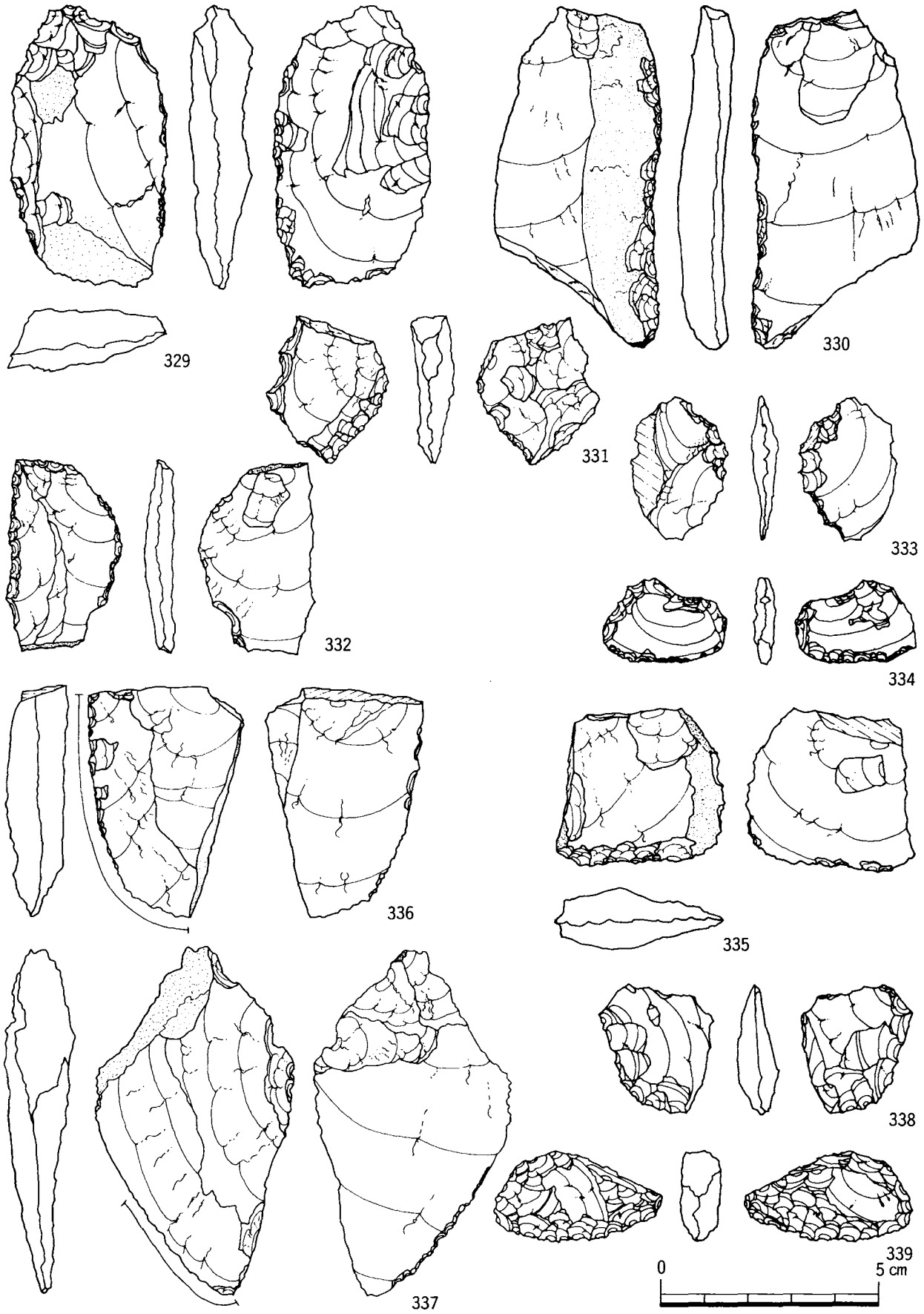
剥片の側縁に大小の剥離痕を連続して施したものを２次加工のある剥片とした。合計80点が



第130図　包含層出土石器(11)　石核



第131図　包含層出土石器(12)　石核、二次加工のある剝片



第132図　包含層出土石器(13)　二次加工のある剥片
使用痕のある剥片
未製品

出土した。石材はチャートがほとんどで、サヌカイト製が2点ある。

使用痕のある剥片　(125、126、336、337)

剥片の側縁に微細な剥離痕が密接して、あるいは不規則に観察されるものを使用痕のある剥片とした。170点出土した。うちサヌカイト製が3点あるほかは、すべてチャート製である。337は使用痕のある剥片の中でもっとも大きいものである。

剥片・砕片

総数 7,440余点ある。石片の内、第一次剥離の打点部が残るものを剥片、打点部が欠落したものを砕片とした。

石材はチャートが最も多く、全体の90%以上を占める。その他には、凝灰岩が12点、下呂石43点、サヌカイト 135点、不明の安山岩4点、黒曜石9点がある。凝灰岩のうち、美濃市付近に産地のあるいわゆる「奥美濃酸性岩」が3点ある。ホルンフェルスの剥片は打製石斧の製作に伴うものと思われる。このうち製品としては1点もなかったが、黒曜石の剥片・砕片(66)が出ていることは注目される。

下呂石については、3号住居跡覆土から円礫の表皮を残す剥片が検出されている(36)。その剥片から判断して、もとの礫は、直径が約10cmだと推定される。このことより下呂石は、その産地の岐阜県下呂町湯ヶ峰からではなく、それよりも下流の益田川か木曽川の河原で採取したものを持ち込んでいることが考えられる。

未製品　(338、339)

163点出土した。

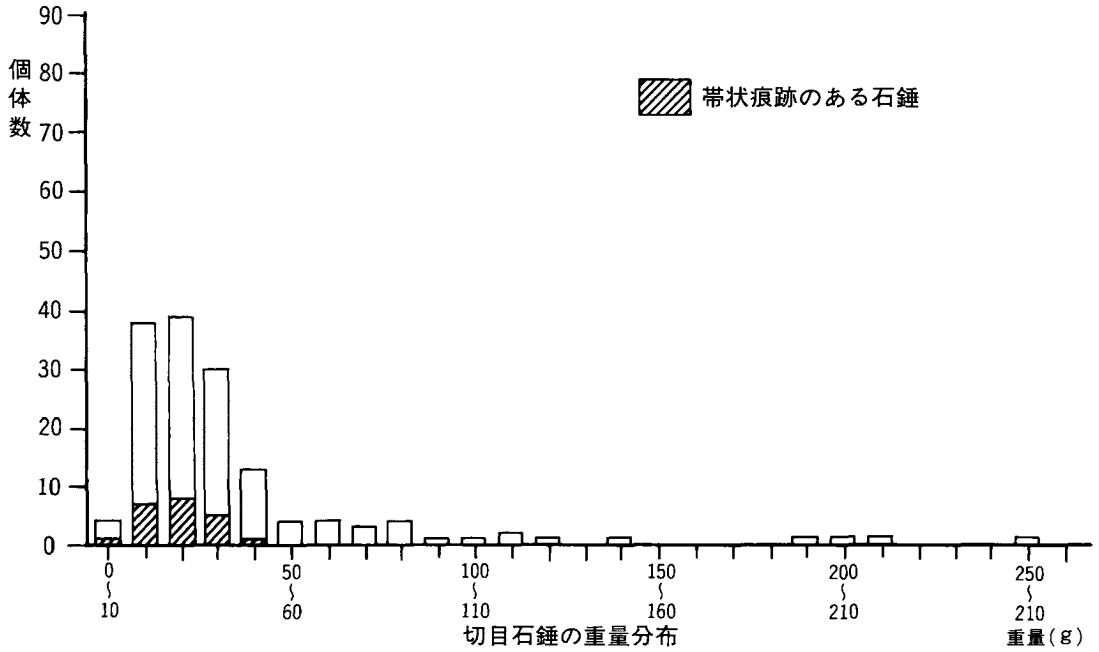
打欠石錘　(10,11、29、37、72～74、129～137、286～289)

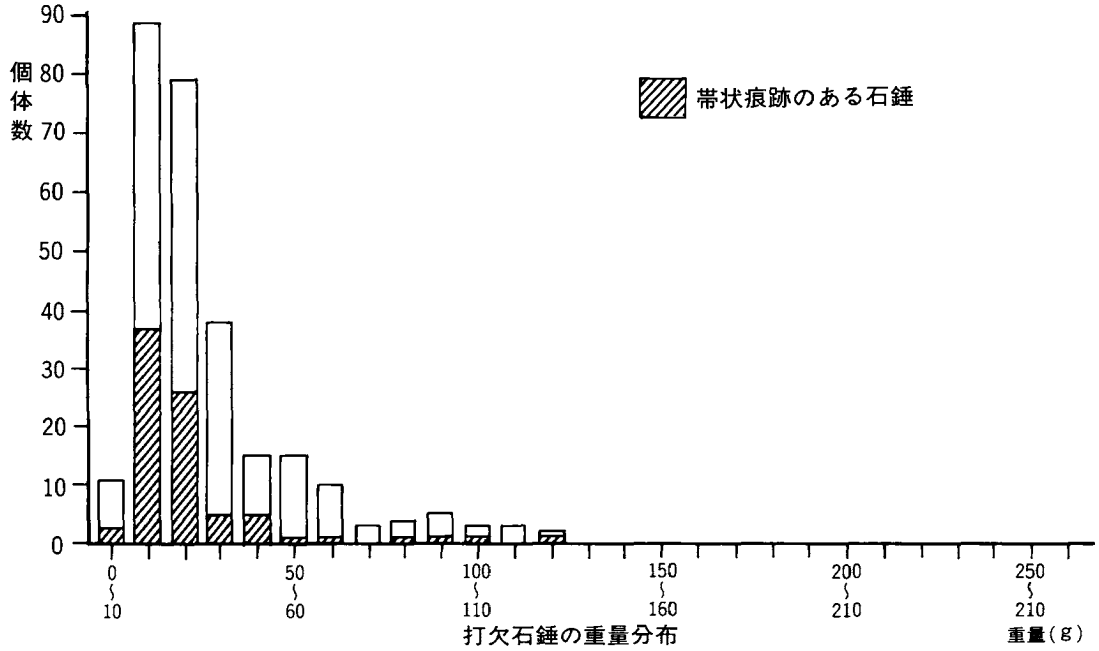
150点出土している。石材は砂岩が多く、ホルンフェルス・ひん岩・安山岩・閃緑岩等を使用している。いずれも現在の徳山地域の河原でよく見かける石材である。糸をかけたと思われる凹部は、すべて楕円礫の長軸の両端に1～3枚程度の剥離によって作出している。

重量分布を第133図に示した。10g～40gに石錘全体の約70%が集中する。しかし 200g以上のものも少ないながら見られる (286)。

砂岩製の石錘の中には、表面が摩滅しており、糸をかけたと思われる部分のみ摩滅されずに自然面が残っているものが観察された(72など)。これは、縄文時代中期の岐阜県関市の塚原遺跡（吉田　1989）や川合遺跡群（吉田　1994）からも報告され、吉田氏はこれを糸巻きの帯状痕跡と呼んでいる。この帯状痕跡がみられるものは、計22点あり、その内片面だけにみられた

のが18点、両面にみられたのは4点である。また住居跡や土坑などの遺構から出土したものから帯状痕跡がみられる割合は17.5%で、包含層からは13.6%とわずかながら遺構から出土する率が高い。帯状痕跡の見られる石錘の重量分布を見ると、20g前後に多く、50g以上にはみられない。これは、重量の重い石錘と20g前後の石錘とで用途が違う可能性を示していると思われる。





第133図　石錘の重量分布

そのほかタールの付着しているものが12点（遺構２点、包含層10点）表面が焼けて被熱されていると思われるものが４点（すべて包含層）見られる。タールの量は、ほんのわずかで痕跡的にみられるだけである。そのうち焼けてタールが付着しているものは２点である。

切目石錘　(12、13、30～33、38、76～94、138～143、287～289)

356点出土している。石材は打欠石錘とほぼ同じであるが、１点だけ「奥美濃酸性岩」と呼ばれる溶結凝灰岩製のものがある。これは岐阜県美濃市付近からとれる石材である。

すべて長軸側に切目があるものばかりである。切目は、ほとんどのものが直接切り込みが入れられているが、打ち欠いた後に切目を入れているものが３点あり（288)、切り込み部分に敲打痕のあるものもある（289)。そのほか片方しか切目のないものが２点、１方に切目が２つあるものが１点ある（140)。

重量分布を第133図に示した。10ｇ～20ｇのものが非常に多く、打欠石錘よりも重量分布のピークの値が小さい。

打欠石錘と同じように糸巻き帯状痕跡が見られるものが多く(80～84など)、片面に見られるものが74点、両面に見られるものが21点である。そのうち帯状痕跡が見られる割合は、遺構内から出土したもの42％、包含層から出土したもの21％で、はるかに遺構から出土したものに見られる割合が高い。帯状痕跡の見られるものの重量分布を見ると、どの重量のものにも見られることがわかる。このことは、打欠石錘の帯状痕跡が重量が20ｇ～50ｇの間でしか見られなかったことから、切り目石錘と打欠石錘の性格の違いを考える上で重要な特徴であると思われる。

タールの付着しているものが48点、表面が焼けていると思われるものが12点ある。焼けていてタールの付着しているものは無い。タールの付着量は打欠石錘と同じようにほんのわずかである。

磨石・凹石・敲石・叩石・台石　(340～394)

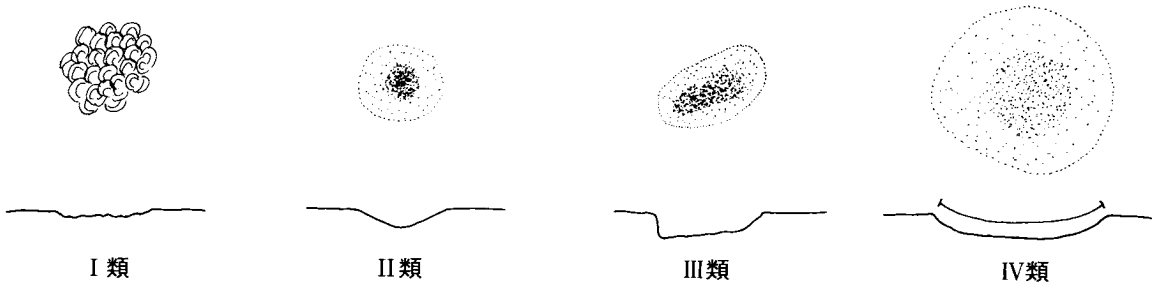
合わせて 255点出土している。これらの石器は、どれも円形または楕円形で、やや偏平な河原石を利用し、いくつかの機能を併せ持つものが多い。分類に当たっては単一の機能ごとで分類した。そのため石器によっては、いくつかの分類群にはいるものも存在する。

凹石の分類

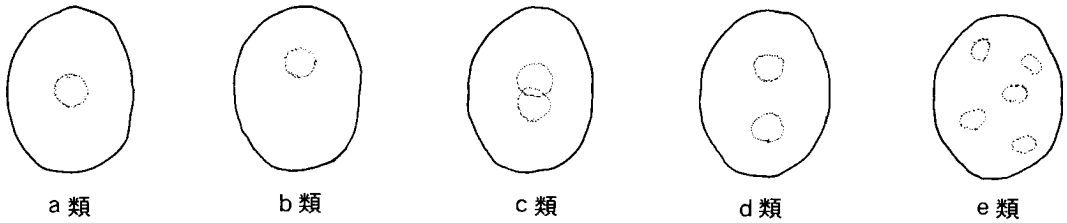
河原石の片面あるいは両面に凹みを持つものを凹石とした。

凹みの形状と、凹みの位置を第134図のように分類した。

凹みの形状による分類



凹みの位置による分類



第134図　凹石の分類

形状による分類　（実測図での凹みの表現は基本的にこの模式図に合わせた。）

I類：細かい敲打痕が集中して凹みをつくっているもの。

II類：擦り鉢状に凹みができているもの。敲打によるものでなく擦られたものと思われる。

III類：右上がりの大きな凹みを有するもの。

IV類：径が4cmの大きな凹みを有し、凹みの表面に磨痕が見られるもの。

凹みの位置による分類

a類：中心に凹みが1つあるもの。

b類：中心からずれて凹みが1つあるもの。

c類：2つ以上の凹みが、中心付近で重なってあるもの。

d類：2つ以上の凹みが、中心付近で離れてあるもの。

e類：3つ以上の凹みが不規則にあるもの。

Ⅰa類：340、342、343は凹みのみのものである。他に磨面を伴うもの(105、151、357～361、365～367)、敲打痕を伴うもの（148、341、344、358、360、365、367）がある。357は赤色顔料の付着した磨石である。

Ⅰb類：凹みのみのもの（344）磨面を伴うもの（364）がある。344の裏側は、IIIb類であるが、短軸方向に回転させると裏面の凹みがほぼ表と同じ位置にくる。それに対して364は、長軸方向に回転させると裏面の凹みが表とほぼ同じ位置にくる。

Ｉｃ類：凹みだけのもの（39）、叩石と兼用しているもの（345、346）がある。345は裏面がＩｄ類となっている。

Ｉｄ類：磨面を伴うもの（147、363）、磨面・敲打痕を伴うもの（369、376）がある。

Ｉｅ類：磨面・敲打痕を伴うもの（365）がある。裏面はＩａ類の凹みである。

IIａ類：凹みのみのもの（348）がある。

IIｂ類：凹みのみのもの（152）がある。短軸側に一回転させると裏の凹みがほぼ表と同じ位置にくるようになっている。

IIｃ類：磨面を伴うもの（362）がある。

IIｄ類：凹みのみのもの（350、351）、敲打痕を伴うもの（352）がある。どれも細長い河原石を利用している。

IIIｂ類：凹みのみのもの（344）がある。裏面はＩｂ類の凹みを持っている。

IIIｃ類：凹みのみのもの（354）がある。

IIIｄ類：敲打痕を伴うもの（353）、磨面を伴うもの（363、372）がある。363は裏面に磨面とＩｄ類の凹みを持つ。

IVａ類：磨面･敲打面を伴うもの（370）がある。

それぞれの分類の凹みを１面だけでも持っている個体数を第９表に示した。表裏で違う種類の凹みを持っているものは別々に数えた。

凹みの形態ごとの使用石材を第10表に示した。

これを見るとＩ類は幅広く石材を使用しているが、II類は砂岩を使用しているものが全体の90％と石材を選択していることが伺われる。III類は砂岩使用率が69％、IV類は、２点とも安山岩を使用している。ちなみにここで使用している石材は、徳山地域の河原で普通にみられるものであり、ひん岩・安山岩はややもろく、礫岩・砂岩は堅い。

また両面に凹みがあるものが84点あるが、表裏の凹みの種類の組み合わせは第11表の通

第９表　凹石の分類別出土点数

	ａ類	ｂ類	ｃ類	ｄ類	ｅ類
Ｉ類	70	19	20	9	6
II類	13	3	12	5	1
III類	2	8	4	5	1
IV類	2	0	0	0	0

第10表　凹石の凹みの分類別使用石材

	ひん岩	礫　岩	安山岩	凝灰岩	砂　岩	閃緑岩
Ｉ　類	10	12	19	2	43	12
II　類	0	2	1	0	28	0
III　類	1	1	3	0	11	1
IV　類	0	0	2	0	0	1

第11表　凹石の表裏面の凹みの組み合わせ

	Ｉ　類	II　類	III　類	IV　類
Ｉ　類	47	11	12	0
II　類		9	0	0
III　類			4	0
IV　類				1

りであった。

ここでⅠ：Ⅱ、Ⅰ：Ⅲの組み合わせはたくさんあるのに対してⅡ：Ⅲの組み合わせが1点もないことは、凹石の用途を考える上で注目すべき事実である。

磨石の分類

河原石の表面のどこかに明瞭な磨面のあるものを磨石とした。磨面の検出は、石の表面が風化していたり、わずかなものもあり困難を極め、何回も見直しを行った。河原石の表面を磨面としているものの場合、ただ1～2度の使用で放棄されたものの磨面の検出は不可能に近いと思われる。したがって除外したものの中に磨石が混入している可能性は否定できない。

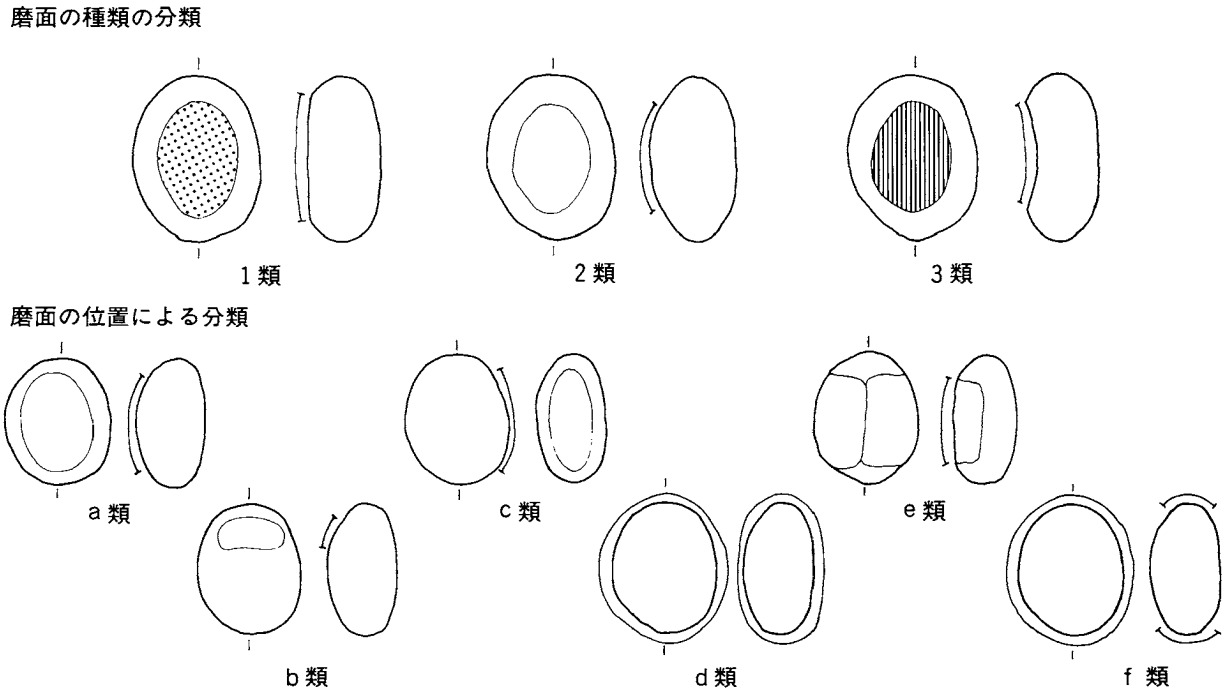
磨面の種類と、磨面の位置によりそれぞれ第135図のように分類した。

磨面の種類の分類（実測図での磨面の表現は基本的にこの模式図に合わせた。）

1類：敲打によって一定の面を作出した後に使用され、ザラザラとした感触のある磨面。

2類：自然面を加工することなくそのまま使用し、ツルツルした磨面。

3類：面の作出は1類と同じであるが、面の中央部分が凹んでいるもの。



第135図　磨石の分類

磨面の位置による分類

ａ類：河原石の片面もしくは両面のほぼ全面を使用しているもの。

ｂ類：河原石の片面もしくは両面の一部分を使用しているもの。

ｃ類：石の長軸側側面を使用しているもの。

ｄ類：石の全面を使用しているもの。

ｅ類：一つの面に異なる磨面がいくつかつくられているもの。

ｆ類：石の側面ほぼ全周を使用しているもの。

図示したものは次の通りである。

１ａ類　：９点出土した。103は磨面のみを持つもの。151は中央に凹みを持つ。358、368は中央に凹みと側面部に敲打面を持つ。

１ａ１ｃ類　：表面と側面に１類の磨面を持つもので、３点出土した。

１ａ１ｃ３ａ類：１点出土した。(386) 表面と側面に１類の磨面を持ち、裏面に３類の磨面を持つ。

１ａ２ｆ類　：２点出土した。389は、表裏に１類の磨面を持ち、側面のほぼ全周が２類の磨面になっている。側面全周は、よく磨られてツルツルである。

１ｃ類　：15点出土した。102は側面が、敲打によって整形された後、磨られている。他の１ｃ類に比べて磨面に凹凸があり、１類の使用初期のものかもしれない。370、394は重量が2000ｇを越す大型のものである。

１ｃ２ａ類　：３点出土した。147、372はともに片面に２類の磨面を持ち、側面に１類の磨面を持つ。どちらも磨面上に凹みを持つ。

１ｃ２ａ３ｃ類：１点出土した。(377) 表面に２類の磨面があり、側面に１類と３類の磨面をもつ。また表裏の中央と短軸側両面に敲打痕を持つ。

１ｃ３ｃ類　：側面にそれぞれ１類と３類の磨面を持つもので１点出土した。細長い河原石を利用している。

１ｅ類　：３点出土した。391は、表裏面に１類の面がそれぞれ２面存在する。

１ｆ２ａ類　：１点出土した。(357)「赤色顔料の付着した磨石」を参照。

２ａ類　：47点出土した。34、104、150、382～ 384は磨面のみを持つ。359～365は凹みを伴う。40、374、375、379は細長い河原石を用いており、短軸側の両側面に敲打痕がある。

２ａ２ｃ類　：５点出土した。41は表面から長軸側の側面にかけて磨面がある。両方の面は連続しており、２つの面を一体化して磨面としたものと考えられる。

２ｂ類　：21点出土した。105、366、367は、表面の短軸側側面の一部分のみを磨面として利用しており、その部分だけツルツルになっている。388は、長軸側の一部

に磨面が表裏とも同じ方向にあり、角がちょうど刃のように尖っている。意図的に刃部を作出したものと思われ、他の２ｂ類とは違うものである。このタイプのものは１点のみである。

２ｃ類　：側面に２類の磨面を持つもので４点出土した。

２ｄ類　：表面全面がツルツルになっているもので、２点出土した。387は磨面のみで、371は片面にⅢｂ類の小さな凹みを持つ。

３ａ類　：８点出土した。373は、細長い河原石の両面が磨られて凹んでいる。393は、片面に３類の磨面を持つ。面はかなり凹んでおり、敲打によって整形したものと思われるが、表面は敲打痕が残らないほど磨かれている。

３ａ３ｃ類　：表面と側面に３類の磨面を持つもので、１点出土した。

３ｅ類　：３類の磨面が２つ以上あるものは他の磨面を持っていてもすべて３ｅ類とした。２点出土した。390は片面に３類の面が２つあり、長軸側の両面と短軸側の片面が１類の磨面になっている。裏面はＩａ型の凹みになっている。392は１類の磨面と３類の磨面が隣り合わせてあり、裏面にも３類の磨面がある。

第12表　磨石の磨面の分類別使用石材

	ひん岩	礫　岩	安山岩	凝灰岩	砂　岩	閃緑岩
1 類	1	5	11	0	18	4
2 類	10	6	12	1	53	4
3 類	2	1	4	1	8	0

それぞれの磨面の種類ごとの使用石材の点数を第12表に示した。これも複数の種類に属しているものについては重複して数えてある。これを見ると２類の磨石にひん岩が用いられるのが多いことがわかる。どの磨石ももっともよく使われているのは砂岩で、全体の半数以上に使われている。

赤色顔料の付着した磨石

磨石のうち、１ｆ２ａ類とした磨石１点（357）の側面の片方に赤色顔料が付着しているのが確認された。この磨石は、側面全辺を敲打などで整形してほぼ円形にしている。側面の表面は、かなり摩耗を受け、ツルツルの状態になっている。表裏面には中心に敲打による凹みがあり、Ｉａ類に分類される。凹みの周りは自然面であるがここも磨られている。顔料は、ところどころに痕跡的に付着している。また表面の石の凹みにも顔料が付着している。赤色顔料の成

分について蛍光X線分析を依頼したところ、Feが検出された。したがってこの赤色顔料は、ベンガラであると思われる。この磨石は包含層からの出土なので、時代決定はできないが、この遺跡から赤色顔料の付着した縄文時代中期後葉・晩期の土器も出土していることからそれらと同じ時代のものと思われる。この磨石はベンガラを製作する際に使用されたものと思われる。

叩　石・敲　石

河原石の側面に、敲打痕を持つもので、打痕が一部に集中しているものを叩石とした。また、敲打痕が1箇所に集中せず、ある程度の広がりを持つものを敲石として区別した。叩石はハンマーのようなものを叩く使用が想定でき、敲石はものをすりつぶすような使用が想定できよう。

叩石は、それのみの機能しか持たないものが7点(100、378、380)、凹みを持つものが16点(148、345、346、352)、磨面を持つものが6点(40、375、379)、凹み・磨面両方持つものが10点(372、374、376、377)出土した。

敲石は、それのみの機能しか持たないものが1点(149)、凹・磨面を持つものが5点(347、358、365、367、368)出土した。

台　石

表面に凹みを持ち、重量が1,500g以上で持って使うには重すぎるものを台石とした。4点出土した。(153、355、356) 355は側面に敲打痕があるので持って使用した(凹石・叩石)可能性もある。

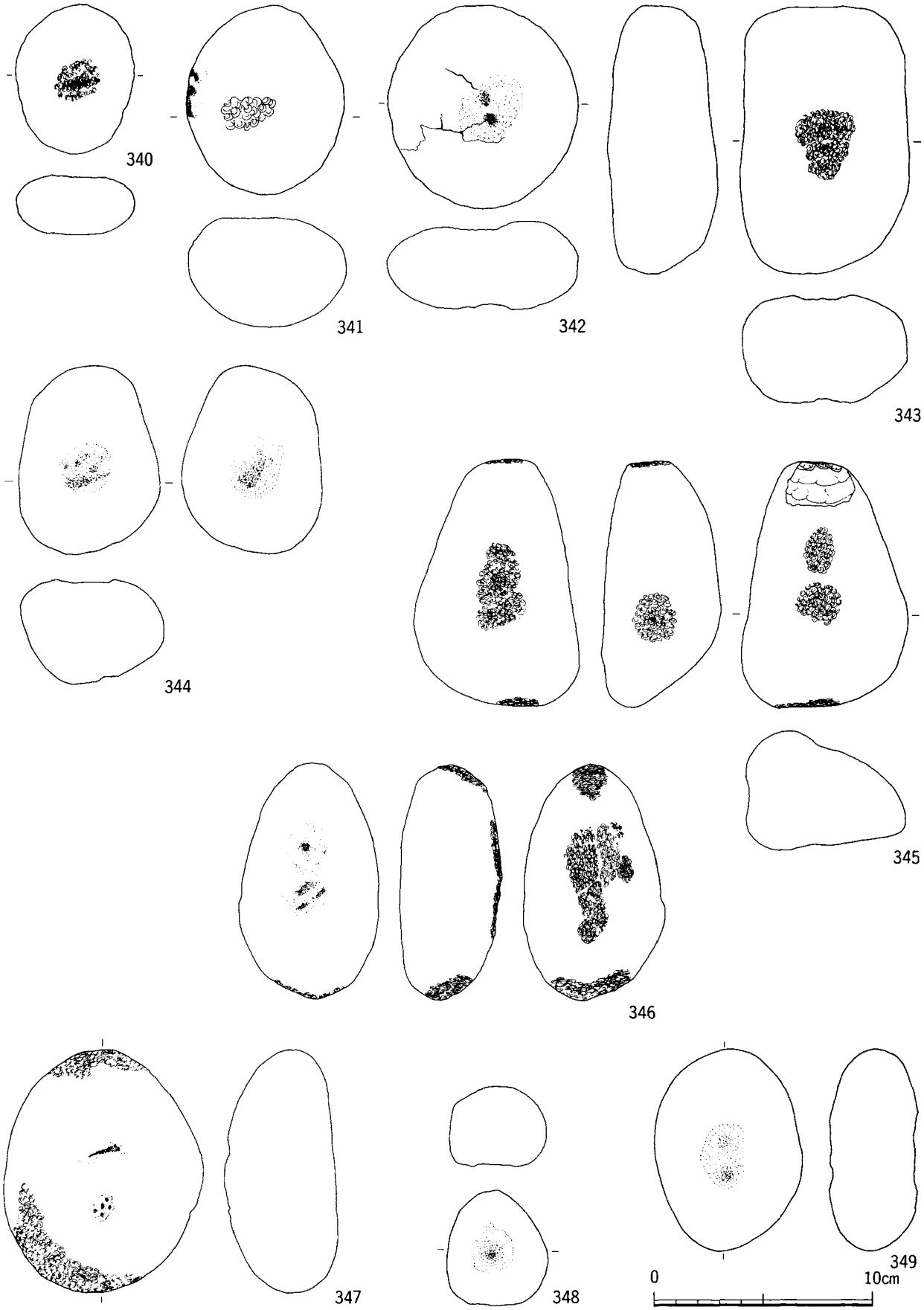
石　皿(15、16、95、96、395～401)

15点出土した。そのうち2点が1号住居跡の床上から出土し(15、16)、4号住居跡の覆土から1点(95)、床上から1点出土した(96)。395は平たい細長い河原石で、表面に磨痕がある。形状から砥石の可能性もあるが、磨面がそれほど擦り減っていないのでこの中に含めた。

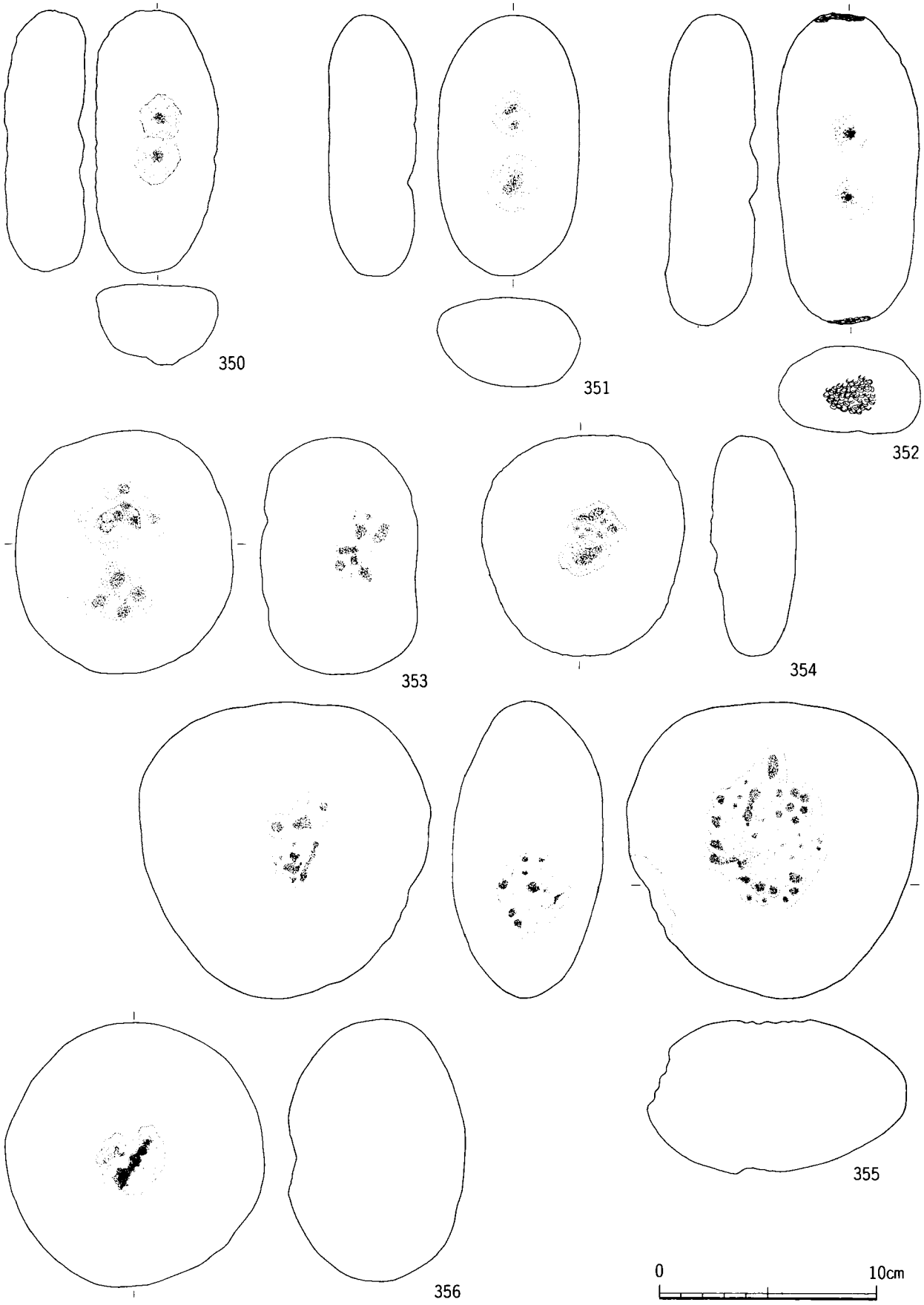
大きさを見ると1,000gを越える大型のものと1,000g以下の小型のものがある。小型のものは、偏平な河原石をそのまま利用している(397～401)。大型のものは、中央に凹みを持つもの(15、16、96)と、偏平な河原石をそのまま利用しているもの(95、396)がある。石材は砂岩が多く、安山岩・ひん岩のものが少し見られる。

砥　石(402)

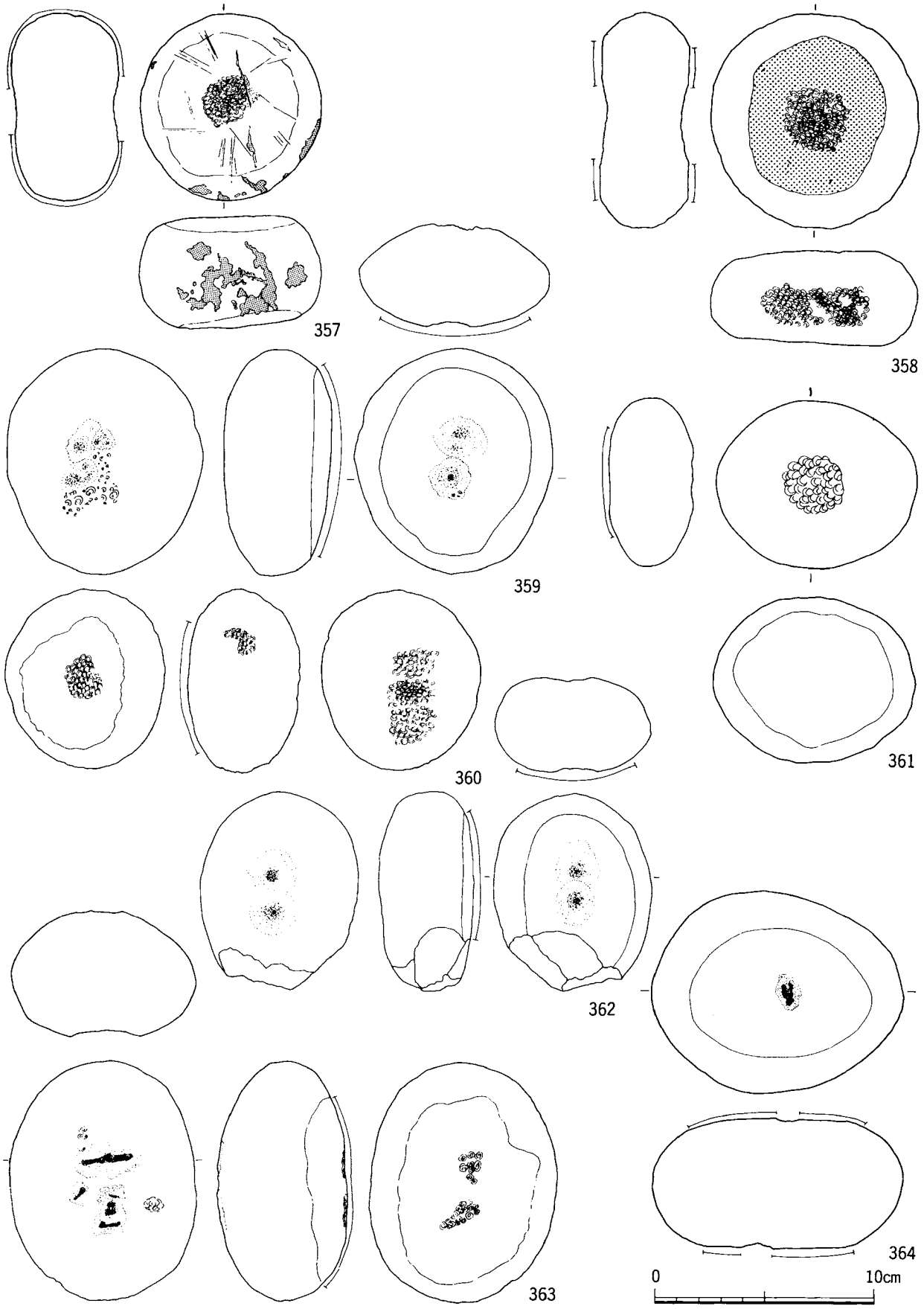
4点出土した。遺跡からは、明らかに近現代のものと思われるものが出土しているが、それらは除外してある。欠損しているものがほとんどである。石材は、凝灰岩や砂岩・ホルンフェルス・安山岩など様々である。402は凝灰岩製である。



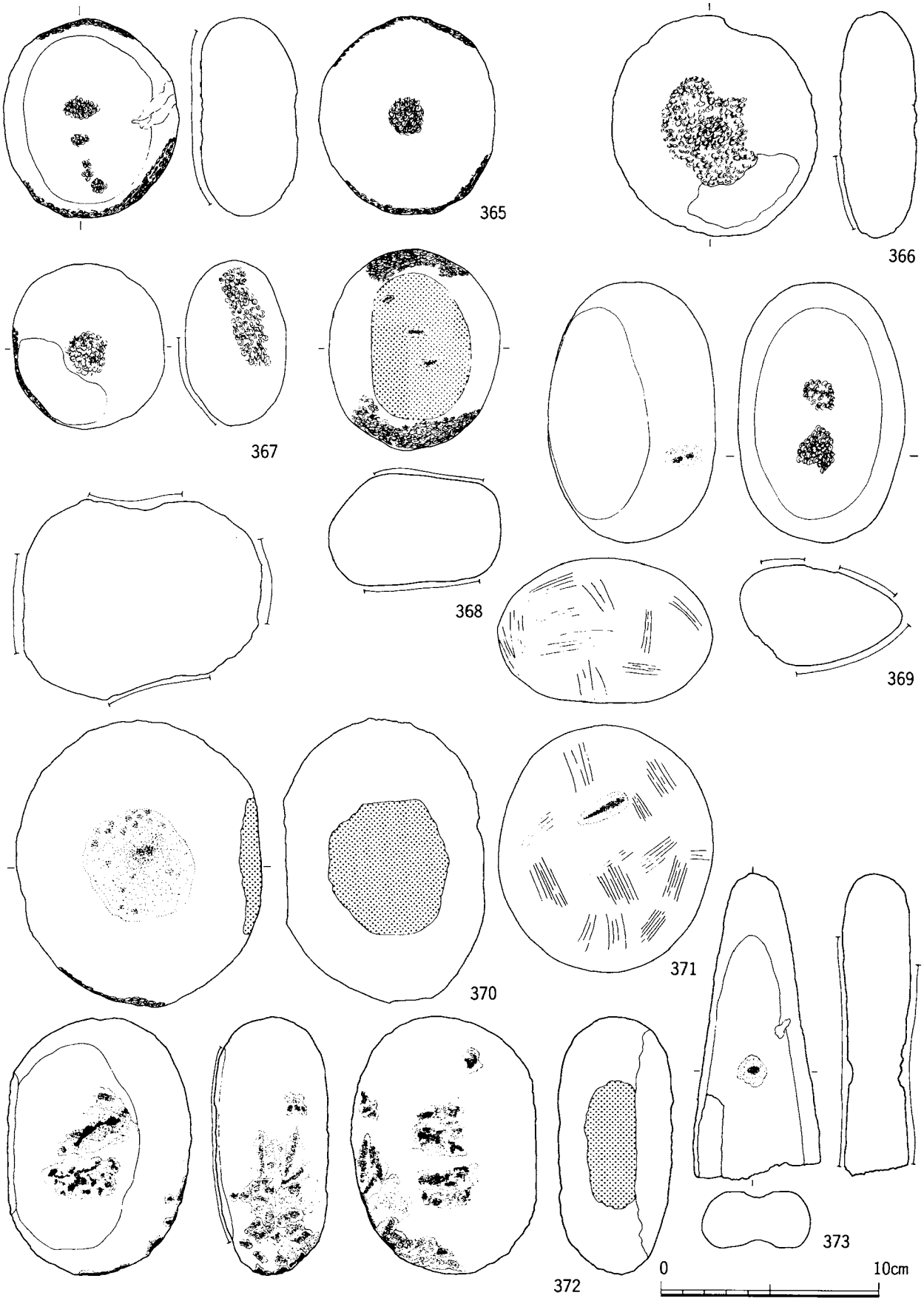
第136図　包含層出土石器(14)　凹石



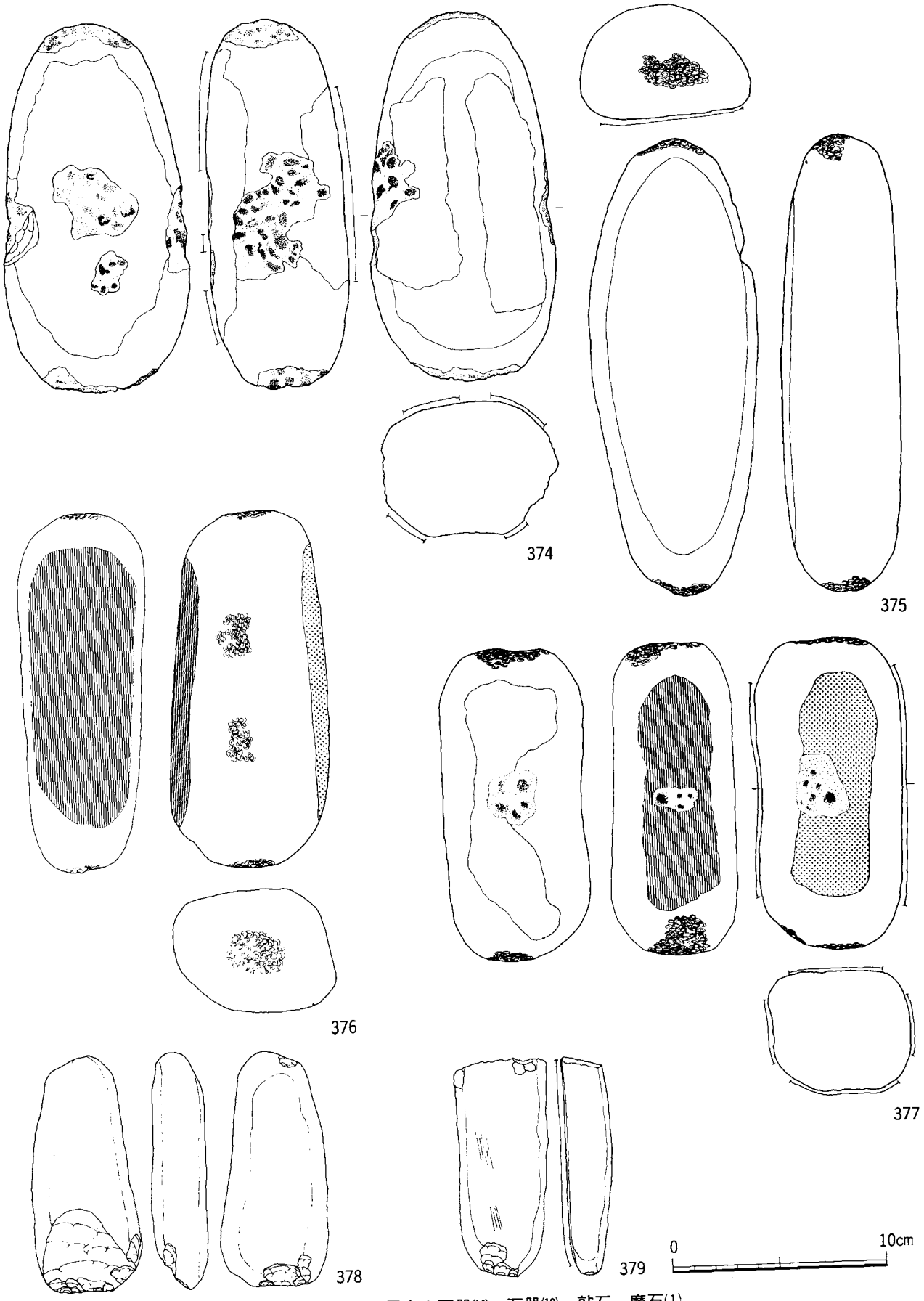
第137図　包含層出土石器⒂　凹石、磨石(1)



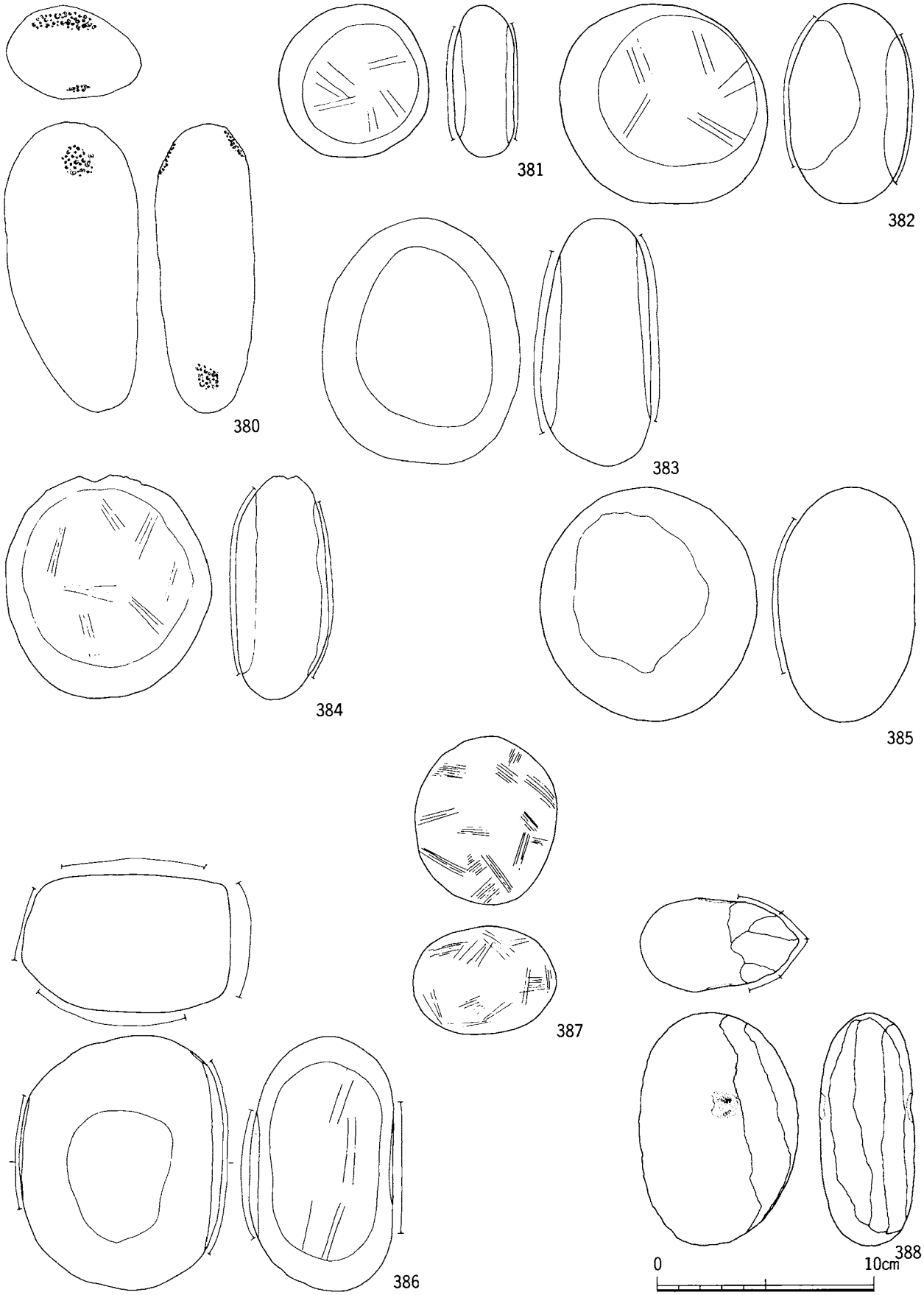
第138図　包含層出土石器(16)　凹石、磨石(2)



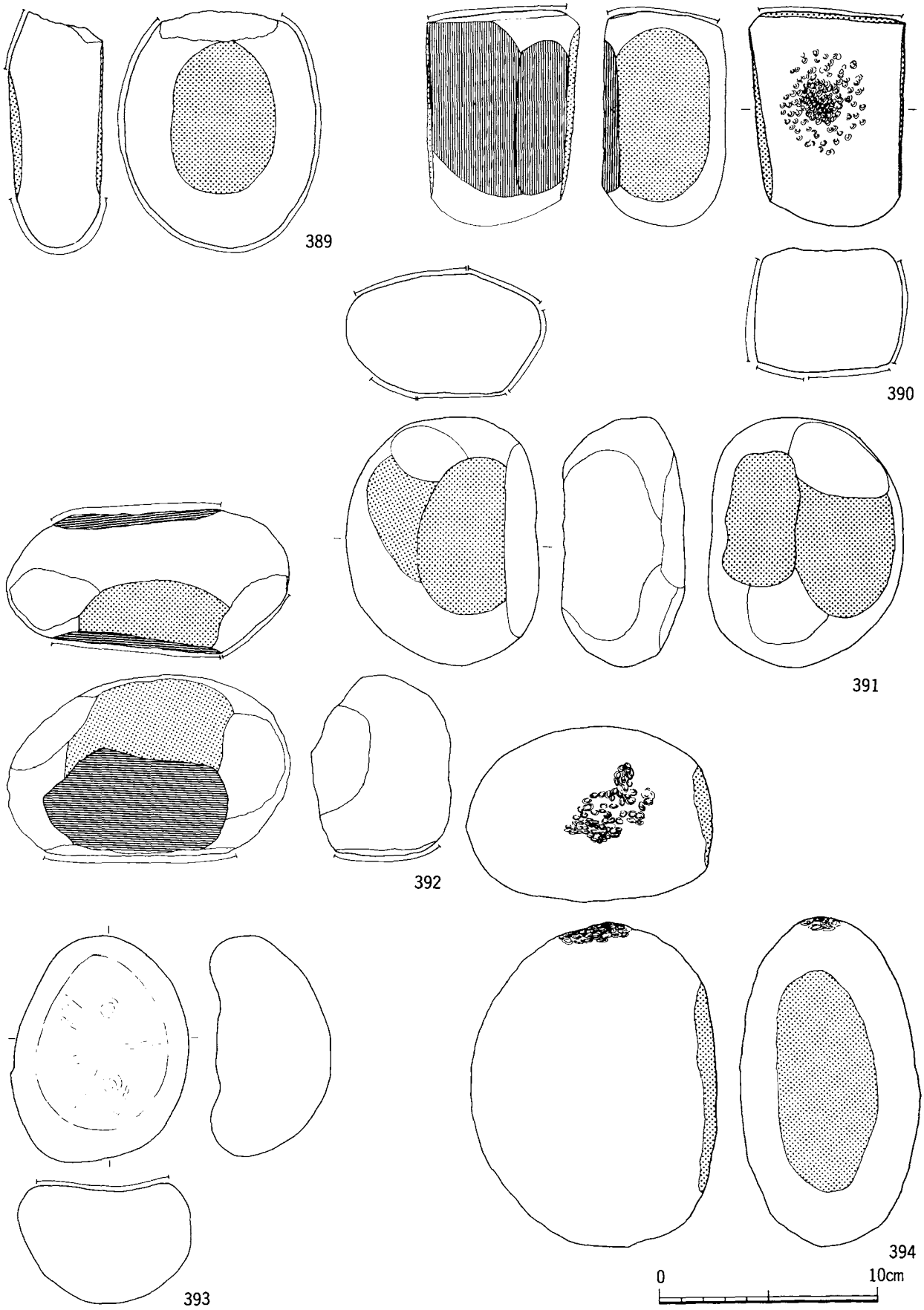
第139図　包含層出土石器(17)　凹石、磨石(3)



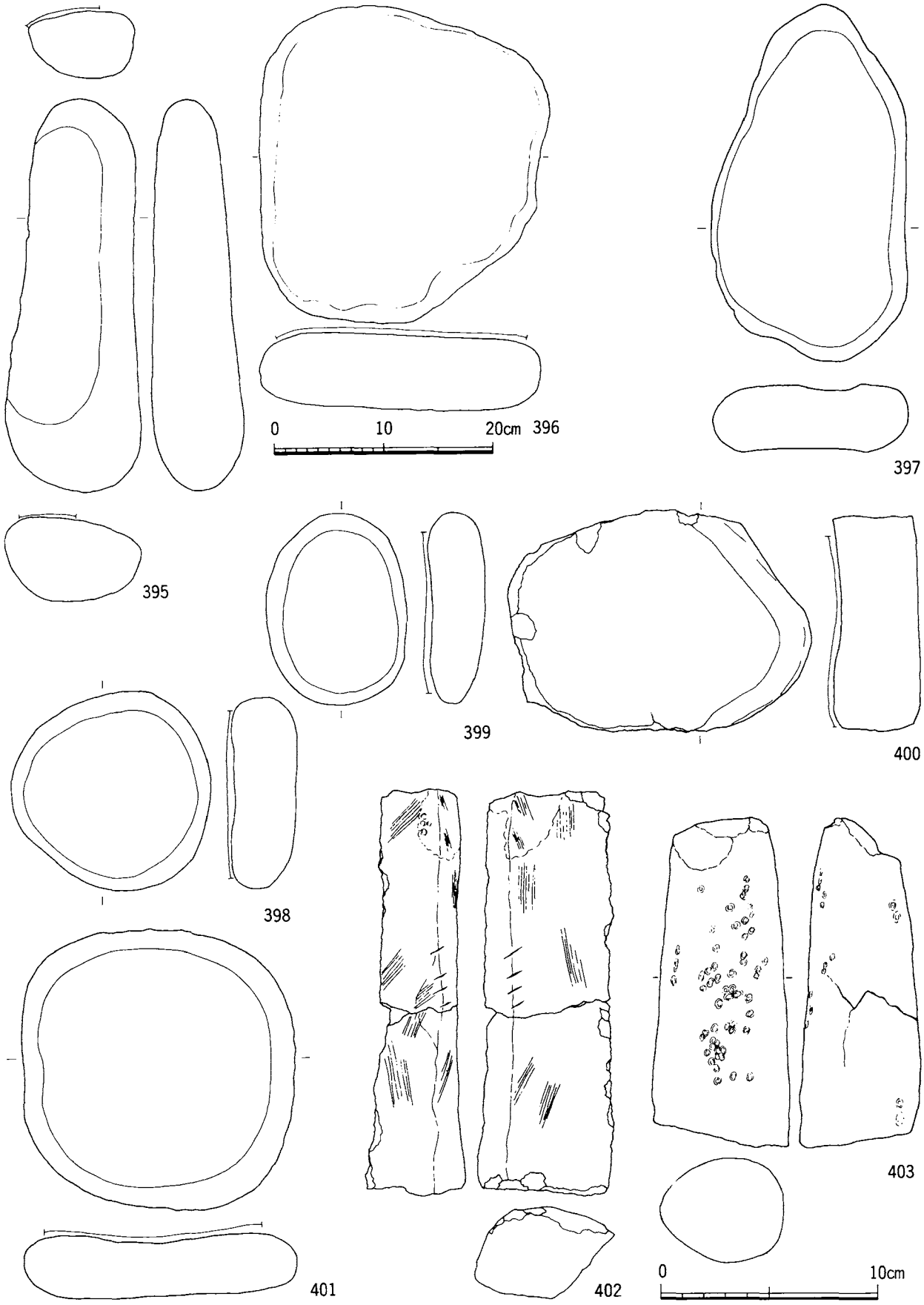
第140図　包含層出土石器(18)　石器(18)、敲石、磨石(1)



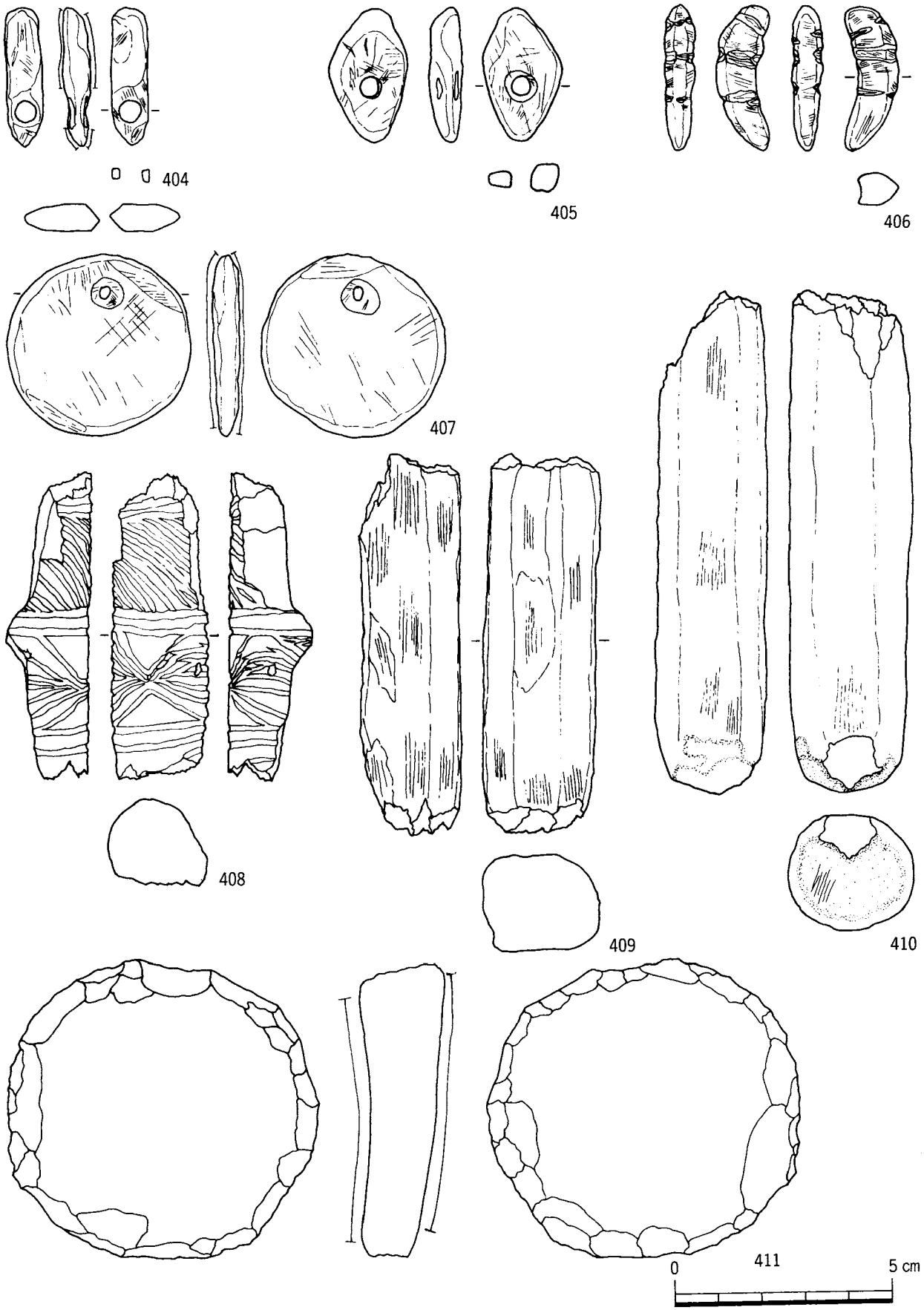
第141図　包含層出土石器(19)　敲石、磨石(2)



第142図　包含層出土の石器(20)　磨石



第143図　包含層出土の石器(21)　石皿、砥石・石棒



第144図　包含層出土石器(22)　石製品

石　棒（14、403、408～410）

9点出土した。1点が1号住居址の覆土から出土している(14)。すべて折損しているか破片である。大別して、14・403のような大型のものと408～410のような小型のものがある。大型のものは凝灰岩製のものが多く、小型のものは緑色片岩やホルンフェルスを石材としている。

1点のみ線刻入りのものがみられる（408)。

垂飾類　(113、404、405、407)

4点検出した。113は、414号ピットから出ている。ヒスイ製で表裏面を磨って整形した後、穿孔している。404は結晶片岩製で表裏面を磨って整形している。405はメノウ製で、表面に荒い磨痕がいろいろな方向から入っている。407は砂粒の細かな砂岩製で表裏面や側面に磨って整形した痕が見られる。

石　冠　(128)

1点、25号土坑から出土した。磨石に使用されていたものと同じ閃緑岩を使っている。表面を丁寧に敲打によって整形した後、磨って仕上げている。

石　刀（127)

1点、26号土坑から出土した。シルト製で軟らかく加工しやすい素材を用いている。薄くはがしとって板状にした後、片方の側面を擦って刃部をつけている。時期は不明である。

鈎形石製品　(406)

1点出土した。細粒の硬い砂岩を使用している。三日月形をしており、3ヶ所表裏両面から溝をつけている。全面に磨痕が見られる。

円盤状石製品　(411)

1点出土した。砂岩の薄い板状の石の側面全縁を打ち欠いて整形している。表裏面には磨痕がある。磨面を打ち欠き面が切っていることから磨石などに使用していたものを打ち欠いて作出したものと思われる。

石器群の考察

戸入村平遺跡から検出された石器は、11,000点以上に及ぶ膨大な数量である。そのため、器種ごとの統計学的な分析も可能と思われる。ここでは、いくつかの点について若干ながら考察をしておきたい。

・石器の石質と石器圏

戸入村平遺跡の所在する徳山地区の地質は、ほとんどが中古生層と呼ばれるチャート・砂岩・礫岩などの堆積岩である。そのため、石鏃・石錐・石匙・掻器・削器等の打製石器は在地のチャートを使用しているものがほとんどである。しかし、黒曜石・サヌカイト・下呂石のような石器に適した搬入石材も多くはないが存在する。

この黒曜石・サヌカイト・下呂石について蛍光線分析による産地推定を京都大学原子炉実験所の藁科哲男氏に依頼した。その結果、黒曜石9点の内長野県霧が峰産と推定されたものが7点、東京都神津島産と推定されたものが1点、静岡県柏峠西産と推定されたものが1点であった。サヌカイトは、13点分析した内、11点が奈良県二上山産、2点が四国の香川県金山産と推定された。下呂石は、表面観察から下呂石と認識していたものすべてが、岐阜県下呂産と推定された。なお、福井県の勝山市法恩寺山と、織田町越智山にガラス質の安山岩が産する。研究者の中には、徳山地域との距離が近いことから、そこから石材を搬入している可能性があるという意見がある。そのため上記2カ所のガラス質安山岩との比較も依頼した。その結果、この2つの産と推定されるものはなかった。

これらの石材を用いた石器数はわずかであることと、石材を採取できる場所までの距離が下呂石を除いて、直線距離で150km以上あることを考えると、ここに当時住んでいた人々が直接採取してきたとは考えにくい。したがってこれらの石材は、何らかの交易によってこの地にやってきたものと思われる。特に神津島産や柏峠産と推定される黒曜石は、どのような流通経路を経てここまできているのか興味深い。

また、これら3種類の石材の他に、美濃市付近に産する「奥美濃酸性岩」と呼ばれる凝灰岩のフレークと石錘1点が検出されている。ここは、現在の岐阜県根尾村、美山町と尾根伝いに行けばかなり徳山地域から近い距離であるにもかかわらず点数はほんのわずかである。また下呂石についてもサヌカイトと比べて近距離で手に入るにもかかわらず、点数は少ない。これらのことから石材からみる限り戸入村平遺跡では、当時「西」とのつながりが強かったことが伺われる。

上記以外に、搬入石材を使用していると思われる石器に、磨製石斧と垂飾などの装飾品があげられる。これらの石器に搬入石材を使用する頻度の高いことは北陸地方の縄文遺跡でも指摘されている（藤　1984）。

磨製石斧によく使用されている蛇紋岩は、岐阜県内では、清美村大原や上宝村が産地として有名で、徳山地域の付近では、揖斐郡坂内村・久瀬村・春日村にまたがる貝月山周辺でわずかながら産することが知られている。徳山地域からの距離を考えると、貝月山から石材を持ち込んでいる可能性が高いが、産地を特定できない現在の段階ではなんともいえない。

垂飾類の中で1点出ていたヒスイも、京都大学原子炉実験所の藁科哲男氏に産地同定分析を

依頼した。その結果、新潟県糸魚川産であるという結果を得た。詳細は自然科学分析の藁科氏の報告を参照されたい。

・切目石錘、打欠石錘について

ここでは、石錘類の一部に見られた糸巻きの帯状痕跡と重量分布について考察してみたい。渡辺誠氏は、切目石錘の用途としては、漁網錘としての利用ということが考えられるが、打欠石錘については、重量が平均 100ｇ以上と縄文時代の各種漁網錘とかけ離れていることから漁網錘とは認め難く、民俗事例でいうところの「もじりあみ」のような編み物の錘具としての利用を考えた(渡辺　1973)。また、縄文時代のいくつかの遺跡で主に偶数で４～43点の打欠石錘がまとまって出土したことは、この見解を補強するものであるという(渡辺　1991)。ところが、関市塚原遺跡や可児市川合遺跡群、揖斐郡藤橋村の旧徳山村の各遺跡など、岐阜県内の縄文時代遺跡から大量に切目石錘とほぼ同重量の打欠石錘が出土しており、これらについては漁網錘であるという見方が強い（吉田　1989、1994、伊藤・篠田　1982)。渡辺氏自身も岐阜県下で切目石錘程度に軽い打欠石錘が出現する事に注目しており、これについては漁網錘である可能性を否定していない（渡辺　1973)。

戸入村平遺跡から出土した切目石錘や打欠石錘には、表面に糸巻きの帯状痕跡が観察できるものがあった。その割合は切目石錘が27％、打欠石錘が15％である。糸巻きの帯状痕跡ができる過程については吉田英敏氏が考察しており、漁網錘として使用され、漁場での作業中、ローリングによって表皮が摩滅、変化して糸の巻いた部分のみに当初の表皮面を残すような結果となったのであろうとしている（吉田　1994)。

打欠石錘と、そのうち糸巻き痕のあるものの重量分布を見ると糸巻き痕のあるものは10～50ｇの間できれいな正規分布をしていることがわかる。しかしそれより重いものの中で糸巻き痕のあるものは１点もない。このことから、打欠石錘の中に、漁網錘として使われたものと、それ以外の用途のものと少なくとも２種類が存在する可能性が考えられる。すなわち、糸巻き痕の見られる50ｇまでのものは漁網錘に使用されたため、糸巻き痕の残っているものが存在するが、それ以上の重さのものは他の用途に使われたために糸巻き痕がつくほどの摩滅を受けなかったということである。

切目石錘にも帯状痕跡をもつものが計95点見られる。しかし帯状痕跡のある石錘の重量分布を見ると、打欠石錘の分布と若干の相違があることがわかる（第133図)。それは、切目石錘の重量分布は、10～ 140ｇの間であるが、すべての重量のものに帯状痕跡がみられるということである。この２種類の石錘の帯状痕跡をもつものの重量分布から、２つの網の構造について次の可能性が考えられる。それは、打欠石錘の使用された漁網は10～50ｇの錘具を使用した、重量が一定な錘具だけでつくられている構造をもつということである。対して切目石錘を使用し

た漁網は、10～40ｇの錘具を多く使いながらも、一部で 100ｇ以上の重い錘具も組み合わせられた構造をもつということである。

この切目石錘の重量配分について考える時、後藤信幸・吉田英敏両氏の河川のハゼ科の魚を捕獲する「ゴリ捕獲漁」の漁具を製作実験した報告がきわめて示唆的である。これは、ハゼ科魚類を追い込むために、「シラツナ」と呼ばれる追い込み用具を、自作した打欠石錘で製作し、実験したものである。これを岐阜県武儀郡洞戸村の板取川で使用実験したところ、流れによる浮力を防ぐためには、石錘は平均60ｇの他に60～70cmの間隔で 120ｇ以上の重いものをつける必要があったという問題点が指摘されている（後藤・吉田　1984)。

切目石錘を使用した漁網が一部重量の重い石錘を使用しているのは、後藤・吉田両氏の実験で指摘されたように流れによる浮力を防ぐためであった可能性があると考えられる。

・凹石について

戸入村平遺跡では 200点を越える磨石・凹石類が検出された。また資料を観察して目を引いたのが、種類が多いことと磨面と凹みが一緒にある資料が多いということである。そのため分類作業は困難を極めた。ここでは、凹石の凹みの種類ついての問題と磨石の磨面の種類の問題、さらに磨面と凹みの関係についての問題について考えてみたい。

凹石の凹みをここでは４種類に分類した。そのうちⅣ類については磨面を作出した石皿のような使用が想定できると考える。Ⅲ類は長軸に対して斜め右上がりの形状で、敲打によってできたと思われ、桃野真晃氏がハンマーとして想定している打ち欠き凹み痕の凹石(桃野　1982)と一致すると考えられる。Ⅱ類は円錐形の凹みで、回転によってできたものと思われ、回転磨痕（桃野　前述）とか揉擦り痕（野村他　1983）という名称で報告されているものと一致すると思われる。藤森栄一氏らが発火用の杵の上置きの重し石と想定している（藤森　1965）のもこの類の凹石だと思われる。しかし藤森氏も指摘しているように、凹みの穴の数が２個あるもの（Ⅱｃ、Ⅱｄ類）や表裏のあるものが多く、その理由は不明である。いずれにしろⅡ類の裏にⅢ類の凹みがある凹石が１点も検出されなかったことから、Ⅱ類とⅢ類は相容れない（使う機会がまったく異なる）ものであったろうと考えられる。

Ⅰ類については、Ⅱ類、Ⅲ類と表裏で隣り合わせになるものが多く検出されている。このことから、Ⅰ類のものの中に、Ⅱ類、Ⅲ類の凹石になる途中のものが含まれていることが考えられる。

・磨石について

ここでは中央が凹んだ磨面をもつ３類の磨石について考察してみたい。１類や２類の磨石は、その形状と石皿の形状とが対応することから、石皿とセットで使用された磨石である可能性が高い。しかし３類の磨石は石皿とのセットとは考え難い。

３類の磨面を持つ磨石は、大きく分けると２種類になる。１つは、楕円形の河原石の１つの面に２つの面が作出されるタイプのものであり、もう１つは、細長い河原石の長軸側の側面に磨面があるタイプのものである。３類の磨面は中央が凹んでいて、水平な面に置くと中心部は、面と接しない。このように中心が凹むような使われ方には、２種類の使われ方が考えられる。１つは、その石を置いた状態で何かをその面で磨る使い方である。もう一つは、何か凸型の物体の表面をその石で磨るという方法である。

この使用方法を想定して３類の磨石を観察すると、置いて使用したとする場合、１つの面に２種類の面がある磨石では、必ずしも磨面が上にこない。細長い河原石を素材とするものも置いて使用したとすると幅の狭い側面に磨面がくるのは不自然であるし、磨面の短軸側の断面は凸状になっているので、そのような形態にはならないだろう。これらのことから３類の磨石は持って使用したと考えられる。

では３類の磨石を使用した対象物は何か。ここからは推測の域を出ないが、石棒や木製品の表面研磨であれば、凹んだ磨面が出来るであろうと思われる。ただし、戸入村平遺跡は、３類の磨石の量と比べて石棒の量はほんのわずかである。

福井県三方町の鳥浜貝塚で木製品を多く検出した森川正和・山田昌久両氏は、「石器のなかで従来、磨石と言われていた石器の中でも木器の仕上げ段階で、砥石として利用したものがあると思われ、磨石の検討がなされるべきである」（森川・山田　1976）と述べている。３類の磨石は、これにあたる可能性があると思われる。

・凹みと磨面の関係について

本遺跡では、凹みに磨面が重なった資料がたくさん見つかった。しかし磨面を切って凹みを作出されているものがほとんどであった。また、磨面を伴わない凹石と比較して、凹みの形態が異なる資料はほとんどなかった。そのため、磨面を伴う凹石のほとんどは、磨石として使用後に、凹石に転用したものと思われる。しかし、357と358は、他のＩ類の凹みと比較して敲打痕がきれいに配列しており、全体の凹の形もきれいな円形で意図的に作出したことが伺える。そのため、凹みが磨る作業に関係している可能性があると考えられる。

388も磨面の反対側を持つと、親指と人差し指の位置に凹みがあるので持ちやすい。そのため、この凹みは、磨石を持ちやすくするために作出した可能性もあると思われる。なお、この凹みの表面を観察すると、表面が少し摩耗しているのがわかるが、これがこの石器を持つ際についたものかは不明である。　（千藤　克彦）

１）下呂石については、ガラス質石英安山岩とか、黒雲母石英安山岩などいろいろな名称で呼ばれているが、最近では安山岩ではなく流紋岩に分類する報告もある（岩田　1993）。本書では混乱を避けるため下呂石と呼ぶことにする。

第13表　石鏃計測表(1)

No.	出土区	層位	番号	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	形態	折損	挿図
1	5G	I	002	チャート	19	12	3	0.7	1A		158
2	5I	III	026	チャート	20	11	3	0.5	1A		
3	6L	III	041	チャート	28	15	4	1.7	1A		154
4	9F	II	002	チャート	19	12	4	0.6	1A		
5	SB4	19-282	001	チャート	19	12	3	0.5	1A		42
6	10H	I	011	チャート	24	11	2	0.5	1A	b	156
7	3F		108	チャート	19	14	3	0.6	1A	b	
8	5H	III	023	チャート	17	8	3	0.5	1A	b	
9	6L E		001	下呂石	17	9	3	0.3	1A	b	
10	SK38		008	チャート	17	13	3.5	1	1A	b	106
11	11H	II	009	サヌカイト	23	14	2	0.7	1A	c	
12	4E	III	021	チャート	25	9	3	0.8	1A	c	155
13	6E	III	032	チャート	26	13	3	0.7	1A	c	
14	2C		009	チャート	(21)	(12)	(4)	(0.7)	1A	f	
15	4H	I	006	チャート	(23)	(14)	3	(1.1)	1A	g	
16	10		010	下呂石	24	15	5	1.5	1B		
17	10		019	チャート	20	11	3	0.9	1B		
18	10E S		046	サヌカイト	18	15	3	0.8	1B		
19	10F	III	009	チャート	23	16	4	1.2	1B		
20	10F	II	002	チャート	11	17	3	0.7	1B		
21	10I	I	027	チャート	(16)	13	4	(0.7)	1B		
22	10K A		011	サヌカイト	23	14	3	0.6	1B		
23	10L	II	005	チャート	16	18	3	0.7	1B		
24	10M	II	032	チャート	18	12	3	0.6	1B		
25	10M	I	003	チャート	18	11	4	0.7	1B		
26	11H	II	039	サヌカイト	20	14	4	1.0	1B		
27	11J	II	001	チャート	20	13	4	1.3	1B		
28	12L	I	001	サヌカイト	17	12	3	0.6	1B		
29	13G	I	001	チャート	33	27	7	8.0	1B		
30	13I	I	012	チャート	21	13	3	1.0	1B		
31	13M	III	001	チャート	31	32	8	5.6	1B		
32	14I	II	001	チャート	22	14	4	1.0	1B		
33	14J	III	005	チャート	22	19	6	2.1	1B		
34	170	III	002	チャート	16	13	2	0.4	1B		
35	2H	I	001	チャート	20	14	4	1.1	1B		166
36	3D	II	002	チャート	14	15	5	0.7	1B		
37	3D	II	001	チャート	20	11	4	0.7	1B		
38	3G	I	001	チャート	16	10	3	0.4	1B		
39	3G	I	002	チャート	15	11	4	0.6	1B		
40	3K	III	022	チャート	21	12	3	0.6	1B		
41	4E	III	020	チャート	22	14	4	1.1	1B		168
42	4G	II	010	チャート	26	18	4	1.6	1B		
43	5E	II	001	チャート	16	17	4	1.6	1B		165
44	5G	I	001	サヌカイト	22	12	3	0.8	1B		
45	5I	III	028	下呂石	23	12	5	1.0	1B		
46	5I	I	002	サヌカイト	19	17	3	1.0	1B		
47	5L	II	017	チャート	17	12	3	0.7	1B		187
48	5L	III	003	チャート	18	12	4	1.0	1B		
49	5L A		001	チャート	22	15	5	1.2	1B		
50	5N	II	170	チャート	27	17	4	2.0	1B		167
51	6F	II	102	チャート	18	15	3	0.8	1B		
52	6L	II	004	チャート	22	14	5	1.3	1B		159
53	6L	III	004	チャート	15	19	5	1.6	1B		160
54	7E		007	チャート	19	16	5	1.4	1B		
55	7E	II	046	チャート	18	16	3	0.8	1B		
56	7E	II	032	サヌカイト	22	16	5	1.8	1B		
57	7E	II	045	チャート	18	14	4	0.9	1B		
58	7E	III	023	下呂石	27	17	5	1.5	1B		
59	7E	II	001	チャート	18	12	4	0.7	1B		
60	7E S		002	チャート	21	14	3	1.0	1B		
61	7M	III	017	チャート	22	12	3	0.8	1B		
62	7M	II	018	チャート	25	19	6	2.2	1B		
63	8		001	チャート	18	16	3	0.8	1B		170
64	8L		004	チャート	33	20	7	3.2	1B		161
65	9F S	I	001	チャート	22	15	5	1.3	1B		163
66	9H		005	チャート	16	14	3	0.5	1B		
67	9I	III	002	チャート	21	16	3	1.0	1B		
68	9K N		001	チャート	19	13	3	0.7	1B		
69	9K N		003	チャート	19	16	5	1.1	1B		
70	P582			チャート	25	17	5	1.9	1B		

第14表　石鏃計測表(2)

No.	出土区	層位	番号	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	形態	折損	挿図
71	SB1	III	002	チャート	28	18	4	1.2	1B		2
72	SB1 NE		015	チャート	22	15	5	1.2	1B		
73	SB1 NW		009	チャート	19	15	3	0.9	1B		1
74	SB2		001	チャート	22	15	3	0.9	1B		17
75	SB4		003	チャート	27	15	3	1.3	1B		46
76	SB4		013	下呂石	21	12	4	0.7	1B		45
77	SB4	14-114	001	チャート	21	15	6.7	1.4	1B		50
78	SB4 SE		020	チャート	23	16	4	1.5	1B		44
79	SB4 N		014	チャート	15	12	2	0.5	1B		43
80	SK217		003	チャート	24	15	5.1	1.3	1B		
81	SK75		001	チャート	20	12.5	3	0.8	1B		107
82	10G	I	003	チャート	15	10	2	0.6	1B	a	
83	10H	III	055	チャート	(17)	15	3	0.6	1B	a	
84	10L	I	001	チャート	18	12	3	0.9	1B	a	
85	10M	II	001	チャート	18	17	3	0.9	1B	a	
86	11F		001	チャート	(17)	13	3	(0.7)	1B	a	
87	11H	II	026	チャート	25	19	6	2.9	1B	a	
88	11H	II	062	チャート	(17)	15	4	(1.0)	1B	a	
89	13G	I	001	チャート	17	11	5	0.8	1B	a	
90	13I	I	016	チャート	(23)	16	5	(1.8)	1B	a	
91	5F	II	001	チャート	15	15	3	0.6	1B	a	171
92	5M	III	013	下呂石	22	13	5	1.1	1B	a	
93	6F	II	100	チャート	(12)	11	2	(0.4)	1B	a	
94	6M	III	003	チャート	18	22	4	0.9	1B	a	
95	8K	III	061	チャート	(16)	14	3	(0.6)	1B	a	
96	P448		001	チャート	19	18.5	5	1.9	1B	a	
97	SK3J		006	チャート	15	10	2	0.3	1B	a	
98	10		018	チャート	19	14	4	1.0	1B	b	
99	11M		001	チャート	(16)	13	3	(0.6)	1B	b	
100	12J	I	003	チャート	18	12	3	0.4	1B	b	
101	3E	杭	002	チャート	18	12	3	0.8	1B	b	
102	3F	I	008	チャート	23	17	4	1.4	1B	b	
103	3H	III	013	チャート	22	13	4	1.1	1B	b	
104	3K	III	001	チャート	26	(15)	3	1.4	1B	b	
105	3K	III	016	チャート	25	17	4	1.1	1B	b	
106	4H	I	001	チャート	19	13	2	0.3	1B	b	
107	6N	I	010	チャート	22	14	4	1.1	1B	b	
108	7E	II	013	チャート	19	(14)	4	0.9	1B	b	
109	7M	II	052	チャート	23	15	4	1.0	1B	b	162
110	8		002	チャート	15	10	2	0.3	1B	b	
111	8D		001	チャート	19	14	2	0.5	1B	b	
112	8D N		002	チャート	15	14	3	1.0	1B	b	169
113	8G A		005	チャート	22	14	3	1.0	1B	b	
114	9F	III	009	チャート	18	11	2	0.5	1B	b	
115	SB4		004	チャート	24	15	4	1.3	1B	b	164
116	10I	I	002	チャート	(22)	9	2	(0.4)	1B	e	
117	12M	I	001	チャート	23	15	4	1.2	1B	e	
118	5M		037	チャート	(14)	14	3	(0.7)	1B	e	
119	6E	III	033	チャート	14	10	2	0.2	1B	e	
120	8F	III	035	チャート	15	11	2	0.5	1B	e	
121	8F N	I	009	チャート	16	12	4	0.6	1B	e	172
122	6E	III	029	サヌカイト	32	11	3	1	1B	f	
123	10L	II	001	チャート	14	10	2	0.3	1C		
124	11L E		002	チャート	34	15	3	1.0	1C		173
125	2E		001	チャート	25	14	2	0.6	1C		179
126	2M		002	チャート	21	12	3	0.6	1C		182
127	3M	I	001	チャート	18	11	2	0.3	1C		
128	4L	II	015	チャート	23	18	6	2.4	1C		
129	5M	III	012	チャート	30	15	3	0.9	1C		181
130	5N	II	171	チャート	29	16	3	1.2	1C		
131	6K	III	036	チャート	(15)	10	3	(0.5)	1C		
132	7E S		048	チャート	23	15	2	0.4	1C		178
133	7E S		001	チャート	22	11	3	0.7	1C		
134	8K	III	034	チャート	21	14	2	0.6	1C		
135	P114		001	チャート	23	11	3	0.8	1C		
136	P568			下呂石	23.5	15	3	1.3	1C		
137	SB2		002	チャート	21	11	4	0.8	1C		18
138	SK141		001	チャート	17	12.5	2	0.5	1C		
139	10H	III	084	チャート	(12)	11	2	(0.4)	1C	a	
140	11I	II	001	サヌカイト	19	15	3	0.8	1C	a	

第15表　石鏃計測表(3)

No.	出土区	層位	番号	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	形態	折損	挿図
141	2L	II	001	チャート	23	16	3	1.1	1C	a	174
142	7E	II	082	サヌカイト	30	16	2	1.1	1C	a	180
143	SB4	19-282	001	チャート	(16)	11	3	(0.4)	1C	a	48
144	SK1		008	チャート	(14)	12	2	(0.3)	1C	a	109
145	10G	III	040	チャート	20	12	2	0.5	1C	b	
146	13U	I	001	チャート	17	12	4	0.5	1C	b	
147	15M	II	005	チャート	23	12	3	0.5	1C	b	
148	4E	III	001	チャート	18	16	4	0.9	1C	b	
149	5F	II	002	チャート	18	12	3	0.5	1C	b	
150	5I	III	027	チャート	16	11	2	0.4	1C	b	
151	5M	II	004	チャート	32	15	3	1.0	1C	b	176
152	6K	III	007	チャート	26	25	4	1.3	1C	b	
153	SB4		030	チャート	22	12	3	0.8	1C	b	
154	11I	III	008	チャート	22	14	2	0.7	1C	c	
155	17P	I	003	下呂石	29	14	3	0.9	1C	c	
156	12K E	I	001	チャート	15	14	4	1.0	1C	e	
157	2C		001	チャート	27	18	4	1.7	1C	e	183
158	4C	III	031	チャート	(16)	17	3	(1.0)	1C	e	
159	4C W		005	チャート	(23)	13	3	(0.8)	1C	e	
160	5N		025	チャート	(27)	12	3	(0.5)	1C	e	157
161	6M N		004	チャート	(11)	(12)	(3)	(0.4)	1C	e	
162	IG	I	001	チャート	18	13	3	0.7	1C	e	177
163	9F		002	チャート	(31)	(12)	(4)	(1.3)	1C	f	175
164	4H N		001	チャート	14	8	2	0.2	1C	g	
165	10E	III	104	サヌカイト	19	16	5	1.3	1D		
166	10E	II	067	チャート	24	16	4	1.5	1D		
167	14J	II	063	チャート	19	15	4	1.3	1D		
168	14J	III	004	チャート	21	13	5	1.4	1D		
169	2G	I	005	チャート	17	14	5	0.9	1D		
170	2M		003	チャート	20	11	3	0.8	1D		186
171	3D E		001	チャート	25	20	6	3	1D		188
172	3D	II	001	チャート	15	12	4	0.6	1D		
173	4D		003	チャート	21	17	3	1.4	1D		
174	4D	I	002	チャート	25	22	10	4.8	1D		189
175	4F	III	004	チャート	22	14	3	1.5	1D		
176	4M	II	001	サヌカイト	19	15	5	1.4	1D		
177	4N	II	004	チャート	15	9	2	0.3	1D		
178	5		020	チャート	24	17	5	2	1D		
179	5E		014	チャート	22	13	4	1.1	1D		
180	5G	II	003	チャート	16	12	3	0.9	1D		
181	5K	II	009	サヌカイト	12	16	2	0.5	1D		
182	5L	III	004	チャート	17	13	3	0.6	1D		
183	5N	II	163	チャート	24	18	6	2.3	1D		
184	6L	III	042	チャート	17	11	3	0.5	1D		
185	6N	II	023	チャート	(12)	12	3	(0.4)	1D		
186	6N	II	035	チャート	27	17	3	1.3	1D		
187	7E		020	チャート	26	19	8	3.7	1D		
188	8F	II	149	チャート	21	11	4	1.1	1D		
189	8F	III	037	チャート	24	11	3	1.1	1D		
190	SB2		062	チャート	17	10	3	0.5	1D		19
191	SB4 E	I	001	チャート	16	11	2	0.4	1D		49
192	排土			チャート	17	11	5	1.1	1D		
193	5G	II	003	チャート	23	19	4	1.6	1D		184
194	10H	I	009	チャート	20	15	3	1.1	1D	a	
195	12K	I	002	チャート	(13)	12	3	(0.4)	1D	a	
196	4C	III	034	チャート	(20)	8	4	1.7	1D	a	
197	9F	II	001	チャート	22	12	3	1.1	1D	a	
198	9F E		009	チャート	(18)	15	4	1.4	1D	a	
199	7	III	027	チャート	(22)	20	4	2.1	1D	a	
200	10F	III	001	チャート	29	17	5	2.3	1D	b	190
201	9F	III	003	チャート	29	17	6	2.4	1D	b	185
202	13J	I	004	チャート	15	10	3	0.7	1D	e	
203	6?		003	チャート	27	(10)	4	1.5	1D	f	
204	SB4	18-51	001	チャート	26	16	5	2.0	1D	f	51
205	10J E		003	チャート	28	16	4	2.4	1E		
206	10K		001	チャート	32	20	8	3.9	1E		195
207	12L N		002	チャート	26	12	3	1.0	1E		
208	1K	III	012	チャート	27	14	4	1.9	1E		
209	2C	II	021	チャート	35	20	6	4.3	1E		191
210	2L	II	007	チャート	25	18	5	2.3	1E		194

第16表　石鏃計測表(4)

No.	出土区	層位	番号	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	形態	折損	挿図
211	3M	III	001	チャート	23	12	3	0.8	1E		192
212	3M	I	003	チャート	29	16	6	3.3	1E		193
213	5?		017	チャート	10	6	5	3	1E		
214	5J N		002	チャート	20	13	4	1.5	1E		
215	5N	I	023	チャート	20	14	5	1.5	1E		
216	6N	II	016	チャート	27	12	5	1.7	1E		
217	7E	II	047	サヌカイト	26	14	5	2.1	1E		
218	7H	III	002	チャート	21	15	6	2.0	1E		196
219	8E W		007	チャート	19	13	3	0.9	1E		
220	8F	II	046	チャート	18	12	3	0.8	1E		
221	9F S	III	004	チャート	24	16	5	1.4	1E		
222	P349		003	チャート	23	14.5	4	1.3	1E		108
223	排土			チャート	27	15	6	2.3	1E		
224	12I	III	024	チャート	22	15	4	1.3	1E		
225	4C	III	033	チャート	24	15	6	2.4	1E		
226	1G	I	004	チャート	20	16	4	1.8	1E	a	
227	4C		005	チャート	(20)	15	4	1.2	1E	a	
228	10H	I	010	チャート	25	12	4	1.3	1E	b	
229	9F	III	008	チャート	32	15	7	3.8	1E	f	
230	7F	II	030	サヌカイト	35	11	3	1.2	1F		197
231	10		017	チャート	(15)	10	3	(0.5)	1G		
232	1D		016	チャート	17	10	3	0.5	1G		
233	8D N		001	チャート	20	12	2	0.5	1G		
234	9F	III	001	チャート	20	11	3	0.4	1G		
235	7E		001	下呂石	39	15	4	2.1	2A		198
236	2C	I	003	チャート	(24)	9	3	(0.7)	2A	e	
237	5M	II	001	下呂石	32	16	4	1.4	2B		
238	SK29		002	チャート	15	11	2	0.6	3A		110
239	12I	III	036	チャート	17	15	3	0.7	3A	b	
240	10F	III	037	チャート	9	12	3	0.6	3B		
241	10G	III	038	チャート	17	13	3	0.8	3B		
242	10L	II	002	下呂石	12	12	2	0.3	3B		
243	13K	III	001	チャート	19	12	3	0.7	3B		
244	2C	I	002	チャート	13	14	2	0.5	3B		
245	4C	III	036	チャート	20	16	3	1.3	3B		
246	4I A		004	チャート	19	18	4	0.9	3B		
247	5G	I	020	チャート	15	12	4	0.7	3B		
248	5N	II	241	チャート	18	17	3	1.0	3B		201
249	8		003	チャート	13	15	4	0.6	3B		
250	8F	I	006	チャート	15	14	2	0.4	3B		
251	9F	II	003	チャート	26	21	7	4.3	3B		200
252	9L	II	007	チャート	25	22	5	2.4	3B		199
253	P241		003	チャート	23	16	5	2.3	3B		111
254	SB2		078	チャート	16	13	4	0.8	3B		20
255	SB4 NW		001	チャート	16	15	5	1.1	3B		
256	SK57		003	チャート	14	14	4.4	0.7	3B		
257	5E	II	001	チャート	15	12	3	0.6	3B		
258	12K E		001	チャート	(12)	12	2	(0.3)	3B	a	
259	130 U	I	001	チャート	17	14	4	0.9	3B	a	
260	4I A		009	チャート	(20)	19	6	(1.8)	3B	a	
261	8G A		002	チャート	12	15	4	0.8	3B	a	
262	12M	I	007	サヌカイト	(13)	18	4	(0.8)	3B	b	
263	4C	III	054	チャート	20	15	4	1.2	3B	b	
264	SB2		040	チャート	(18)	(17)	(3)	(1.0)	3B	b	21
265	SK75		002	チャート	20	12	3	0.9	3B	b	
266	5G	II	002	チャート	(18)	(14)	2	(0.7)	3B	e	
267	SK 3J		005	チャート	16	17	3	0.5	3C		202
268	9K N		002	チャート	11	11	2	0.2	3C		
269	SB4		060	サヌカイト	(16)	17	2	(0.5)	3C		47
270	16G	II	026	チャート	18	14	4	0.6	3C	b	
271	10H	I	045	チャート	22	22	8	4.2	3D		
272	4L	II	015	チャート	23	14	3	0.8	3D		203
273	5E		012	チャート	19	14	5	1.5	3D		
274	8E	杭	001	サヌカイト	22	20	6	2.4	3D		
275	8H	I	023	チャート	21	21	7	3.2	3D		
276	9F	II	059	チャート	17	14	4	0.9	3D		
277	9K	杭	002	チャート	15	14	3	0.9	3D		
278	8F	II	007	チャート	15	20	6	2.5	3D		
279	SB4 NW		014	チャート	18	16	3	0.9	3D		54
280	SB4	III	045	チャート	4	6	5	1.3	3D	a	53

第17表　石鏃計測表(5)

No.	出土区	層位	番号	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	形態	折損	挿図
281	7E	II	056	下呂石	(22)	(12)	(3)	(0.5)	3D	b	
282	10E	II	029	チャート	26	20	8	4.8	3E		
283	13G	III	001	チャート	22	14	4	1.0	3E		204
284	16G	II	049	チャート	19	17	5	2.3	3E		
285	2D	II	003	チャート	(18)	15	4	(1.1)	3E		
286	3L	III	006	チャート	31	28	10	7	3E		
287	3M	II	006	チャート	26	19	5	3.1	3E		
288	4C	III	055	チャート	20	14	4	1	3E		
289	5J	III	004	チャート	22	15	5	1.9	3E		
290	6N	II	034	チャート	19	16	4	1.4	3E		
291	SB2		061	チャート	23	18	7.1	2.8	3E		22
292	SK6		001	チャート	15	17	6	2.9	3E		112
293	7E	II	067	チャート	22	17	5	1.6	3E		
294	11K	III	008	サヌカイト	28	14	5	1.5	4B		207
295	3L	III	002	チャート	30	15	3	1.2	4B		208
296	10G	III	039	チャート	24	14	3	1.1	4B	b	
297	4H	I	001	チャート	16	11	2	0.3	4G		205
298	P844			チャート	25	17	5	2.3	5	d	
299	9F		031	チャート	27	19	7	4	5B		
300	5M	I	010	チャート	21	18	6	2.4	5D		
301	6L E		002	チャート	35	20	4	4.0	5D		
302	9H	III	001	チャート	31	19	7	5.3	5D		
303	SB3		005	チャート	8	4	3	1.1	5D		35
304	4M	II	010	チャート	25	14	3	1.4	5D	b	209
305	6I	I	007	チャート	23	20	7	3.7	5E		
306	13I	II	014	チャート	(21)	13	3	(1.0)	A	a	
307	6I SZ	II	015	チャート	(16)	(10)	(4)	(0.8)	A	e	
308	4D	I	001	チャート	(14)	14	3	(0.7)	A	a	
309	SK 3J		002	サヌカイト	(12)	16	3	(0.5)	B	a	
310	5N	I	024	チャート	(16)	(11)	(7)	(2.0)	B	a	
311	9F S	I	002	チャート	(17)	17	3	0.8	B	a	
312	10H	III	085	チャート	(12)	(6)	3	(0.4)	B	h	
313	5E	II	037	チャート	(19)	(19)	(4)	(1.3)	B	h	
314	8K	III	018	チャート	(12)	12	3	(0.5)	B	a	
315	10H	II	014	チャート	(17)	13	2	(0.6)	C	a	
316	3M	II	005	チャート	19	17	4	(1.0)	C	a	
317	4K	I	005	チャート	(12)	15	5	(0.7)	C	a	
318	3H	II	030	下呂石	(16)	22	6	2.1	D	a	
319	7E	II	096	チャート	(19)	16	5	(1.7)	D	a	
320	8F	II	168	チャート	(16)	14	4	0.9	D	a	
321	2B	II	001	チャート	(17)	13	4	(1.1)	D	e	
322	P416		001	チャート	19	15	7	2.1	D	f	
323	3D	II	012	チャート	(18)	15	5	(1.6)	D	a	
324	8H	I	008	チャート	(22)	21	6	3.6	E	a	
325	11I	III	024	チャート	22	14	4	0.9	1B		
326	7H	III	001	サヌカイト	17	12	2	0.4	1D		
327	10K	II	035	チャート	(159)	(9)	(2)	(0.4)	1	d	
328	10N	II	001	チャート	19	14	3	0.8	1	d	
329	12F	III	002	チャート	14	11	3	0.6	1	d	
330	3L	III	018	チャート	18	13	3	0.9	1	d	
331	5列		034	チャート	14	10	2	0.4	1	d	
332	5E	III	010	チャート	(22)	(11)	(3)	(0.6)	1	d	
333	5I	I	040	チャート	(16)	11	3	0.5	1	d	
334	5M	II	006	チャート	19	16	4	1.1	1	d	
335	9F	III	135	チャート	(22)	(7)	(2)	(0.4)	1	d	
336	P557			チャート	16	9	2	0.4	1	d	
337	1I	I	027	チャート	28	14	5	1.7	1	f	
338	3M		013	チャート	27	(19)	5	1	1	f	
339	SB4 N12		001	チャート	28	(7)	5	(3.6)	1	f	52
340	10E	III	062	チャート	(15)	(9)	(2)	(0.4)	1	g	
341	10L	II	004	チャート	17	8	3	0.6	1	g	
342	11H	II	040	チャート	(18)	13	4	0.7	1	g	
343	14J	II	089	チャート	(24)	(11)	(4)	(1.0)	1	g	206
344	5K	I	005	チャート	(11)	(10)	(3)	(0.4)	1	g	
345	8F	III	024	チャート	22	11	4	0.7	1	g	
346	9F	III	004	下呂石	(12)	(11)	(2)	(0.4)	1	g	
347	9J	III	013	チャート	(14)	(9)	(3)	(0.4)	1	g	
348	P52		006	チャート	22	9	3	(0.6)	1	g	
349	SB4	NO15	001	サヌカイト	26	14	3	0.8	1B		

第18表　石槍計測表

No.	出土区	層位	番号	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	折損	挿図
1	SB4	18-270	001	サヌカイト	80	15	9	10.6		55
2	1K		017	チャート	(14)	15	10	(7.8)	有	210

第19表　石錐計測表(1)

No.	出土区	層位	番号	石材	大きさ(mm) 長	幅	厚	重量(g)	尖頭部(mm) 長	幅	厚	断面形	折損	分類	挿図
1	P170		001	チャート	25	7	7	4	5.5	4	3.5	菱形		1	
2	SK42		015	チャート	42	29	7	8.5	3.8	3.5	1.5	四角		1	115
3	SK42		018	チャート	39	23	7	6.7	5	3	1.5	四角		1	
4	SB4		024	チャート	23	18	6	1.6	5	3	2.2	三角		1	
5	SB4	19-49	001	チャート	38	25	7.6	5.4	4	2.7	1.6	菱形		1	57
6	1G	I	009	チャート	26	19	6	3.3	1.0	3.6	2.0	菱形	有	1	213
7	3G	II	009	チャート	27	14	9	3.7	2.1	5.3	4.8	三角		1	
8	4C	W	011	チャート	27	13	6	2.1	3.4	4.8	3.3	四角		1	
9	4E	III	009	チャート	23	19	4	0.7	2.2	2.5	2.5	四角		1	
10	4L	II	022	チャート	20	9	6	2.9	2.0	3.0	2.8	五角		1	
11	6G	I	004	チャート	24	14	4	1.2	2.5	3.7	2.6	三角		1	
12	6M	II	026	チャート	22	11	5	1.4	5.2	4.9	3.4	三角		1	
13	7K		001	チャート	26	20	7	2.8	3.0	5.3	2.9	三角		1	
14	8E	III	044	チャート	34	19	7	4.2	1.8	3.2	2.9	三角		1	211
15	8F	II	040	チャート	23	12	4	1.0	1.8	2.5	1.0	四角		1	
16	8I	II	018	チャート	18	10	5	1.1	4.9	5.0	4.1	四角		1	
17	8K	III	015	チャート	30	19	5	4.5	5.0	6.5	2.8	三角		1	
18	8L	I	004	チャート	25	16	7	2.1	3.1	5.0	3.4	四角		1	
19	8L	I	005	チャート	19	14	4	1.2	1.1	4.6	2.4	不明	有	1	
20	9I	II	005	チャート	19	10	9	1.9	3.1	4.0	4.0	菱形		1	
21	9J	II	027	チャート	19	10	6	1.4	1.5	2.8	1.2	三角		1	
22	9K	III	011	チャート	30	27	11	1.0	9.2	8.2	8.0	四角		1	
23	9K	II	018	チャート	26	13	9	3.2	3.5	6.8	5.5	菱形		1	
24	9I	II	003	チャート	19	12	3	0.9	1.5	4.5	2.0	四角		1	
25	10F	II	027	チャート	28	20	4	2.3	2.6	5,0	3.7	三角		1	
26	10L	I	012	チャート	28	22	9	4.4	5	4.5	4	三角		1	
27	10H	I	019	チャート	20	7	5	0.8	3.4	5.2	5.0	三角		1	
28	10M	II	004	チャート	24	17	6	1.6	2.2	4.1	1.4	三角		1	
29	11J	III	002	チャート	21	13	5	1.3	2.0	3.0	2.3	四角		1	
30	11K	III	004	チャート	35	9	5	2.2	1.0	2.2	2.5	菱形		1	212
31	11LN		002	チャート	32	14	10	3.7	2.6	4.5	5.0	三角		1	
32	12G	I	005	チャート	26	11	6	1.6	2.3	5.4	3.0	菱形		1	
33	12I	I	021	チャート	20	8	3	0.6	6.4	5.0	2.2	四角	有	1	
34	13I	II	009	チャート	30	13	10	4.5	2.4	4.2	4.0	三角		1	
35	13J	I	027	チャート	28	12	9	2.8	3.6	7.2	6.0	四角		1	
36	16G	II	022	チャート	22	13	3	1.0	4.5	4.9	2.9	四角		1	
37	16G	II	054	チャート	23	15	7	2.0	3.7	3.3	3.4	菱形		1	
38	17I	III	005	チャート	26	18	9	4.2	4.3	5.3	3.7	三角		1	
39	排土			チャート	15	10	3	0.5	3.0	3.1	2.9	三角	有	1	
40	P29		002	チャート	43	13.5	9	5.8	14.5	7.5	4	菱形		2a	116
41	P410		001	チャート	26	14	6	1.9	8.5	4	2	四角		2a	
42	SB4		021	チャート	37	16	4	2.6	3.0	2.4	2.0	菱形		2a	56
43	1G	I	002	チャート	34	15	6	3.4	4.8	6.5	4.0	三角		2a	
44	1I	I	028	チャート	31	13	6	2.3	4.5	4.4	3.8	菱形		2a	
45	2C	II	014	チャート	30	14	6	2.7	3.4	3.8	4.0	菱形		2a	
46	2I N		002	サヌカイト	29	12	7	2.0	3.3	3.5	1.5	菱形		2a	214
47	3F	I	004	チャート	34	21	8	6.1	10	7	5	菱形		2a	
48	3G	I	004	チャート	30	14	6	2.5	3.0	4.6	1.9	三角		2a	
49	3K		001	チャート	42	14	6	3.3	5.0	4.0	2.2	三角		2a	215
50	3M	III	002	チャート	32	11	5	1.7	3.0	3.0	4.0	三角	有	2a	
51	4C	I	032	チャート	22	17	4	1.4	3.7	6.0	2.8	菱形		2a	
52	4H	III	009	チャート	41	16	6	4.4	2.6	4.3	2.5	三角		2a	
53	4H N		004	チャート	30	18	5	2.5	1.8	2.0	3.3	三角		2a	
54	4K	II	007	チャート	27	17	7	4.1	2.5	8.2	6.0	菱形		2a	
55	4M	II	002	チャート	33	14	6	3.1	2.6	5.3	2.8	三角		2a	
56	5G	I	019	チャート	34	17	6	4.0	7.1	7.0	3.9	菱形		2a	
57	5L	II	034	チャート	31	16	4	3.6	1.6	4.6	2.5	三角		2a	
58	6E	III	077	チャート	24	16	4	1.8	2.7	7.0	1.6	菱形		2a	
59	6H	II	018	チャート	21	18	7	1.7	3.0	5.0	3.3	三角		2a	
60	6H	杭	001	サヌカイト	45	18	10	7.9	12.5	11	6	三角		2a	
61	6L	III	046	チャート	25	17	7	3.0	3.5	7.5	4.0	菱形		2a	
62	6L E		009	チャート	26	10	5	1.2	2.8	3.3	2.6	三角		2a	
63	6M	II	044	チャート	26	12	6	1.7	1.9	3.3	2.4	三角		2a	
64	7E		057	チャート	34	35	7	3.2	4.7	3.8	4.0	菱形	有	2a	
65	7L	III	007	チャート	33	13	7	3.0	1.5	4.2	2.0	菱形	有	2a	
66	8F	II	033	チャート	20	11	5	1.5	3.0	4.7	5.8	菱形	有	2a	
67	8F	II	085	チャート	29	13	4	1.4	5.2	3.5	2.2	三角		2a	
68	8F	II	186	チャート	31	14	6	3.7	5.0	7.2	4.0	三角	有	2a	
69	8L	I	011	チャート	33	12	6	2.6	2.3	3.0	2.2	三角		2a	

第20表　石錐計測表(2)

No.	出土区	層位	番号	石材	大きさ(mm) 長	幅	厚	重量(g)	尖頭部(mm) 長	幅	厚	断面形	折損	分類	挿図
70	8F	I	031	チャート	28	11	7	2.2	2.0	3.0	3.7	三角		2a	
71	9F	III	154	チャート	26	11	5	1.8	2.5	3.7	2.8	菱形	有	2a	
72	9F E		006	チャート	32	12	5	2.1	3.2	5.0	1.8	菱形		2a	
73	9I	II	001	チャート	32	15	6	3.0	4.0	6.0	3.0	三角		2a	
74	9K	杭	024	チャート	24	17	6	2.7	1.5	3.7	2.2	三角		2a	
75	10K	III	008	チャート	26	19	3	1.7	(6.2)	(7.5)	(2.6)	菱形	有	2a	
76	10L	I	010	チャート	25	11	5	1.7	2.8	6.7	3.5	菱形		2a	
77	10M	I	010	チャート	24	17	7	3.0		(6.7)	(2.4)	三角		2a	
78	11L	杭	001	チャート	18	15	3	1.1	2.2	4.3	2.2	菱形		2a	
79	13G	III	005	チャート	26	16	7	2.7	2.9	4.4	2.8	菱形		2a	
80	13J	III	009	チャート	34	17	5	1.1	1.0	3.2	1.9	四角		2a	
81	14J	II	027	チャート	28	12	7	2.4	3.5	5.0	2.8	菱形	有	2a	
82	P316		001	チャート	31	14	6	3.3	7	6	4	四角		2b	
83	SK42	034		チャート	22	9	4	1	8	6	4	菱形		2b	117
84	6J E		001	チャート	26	14	5	1.6	1.4	3.5	1.8	菱形		2b	220
85	7E		022	チャート	21	11	3	0.8	3.4	5.9	2.7	菱形		2b	
86	8E	I	004	チャート	30	13	7	2.7	1.4	3.7	2.4	菱形		2b	218
87	8L	I	001	チャート	36	20	8	5.1	4.5	3.5	3	菱形		2b	216
88	14H	II	041	チャート	21	12	5	1.5	2.0	4.1	2.4	三角		2b	
89	排土			チャート	31	15	7	3.5	1.9	4.3	3.9	菱形		2b	217
90	3F	I	019	下呂石	26	9	4	0.8	3.4	3.2	2.8	菱形	有	3a	
91	5G E		011	チャート	23	9	5	1.4	3.0	4.6	2.4	菱形		3a	225
92	5J	I	015	チャート	21	9	5	1.2	2.2	2.5	2.5	菱形		3a	
93	6N	I	026	チャート	25	9	5	1.1	3.2	3.3	2.5	三角		3a	
94	7E	II	089	チャート	25	10	5	1.4	5.1	6.8	4.5	菱形	有	3a	
95	7J N		002	サヌカイト	32	9	5	2.0	2.0	3.3	3.6	菱形		3a	227
96	7L	III	004	チャート	32	13	10	4.1	2.8	7.0	3.5	菱形		3a	
97	8E	III	061	チャート	29	45	5	1.1	1.5	4.3	3.7	菱形	有	3a	226
98	8F	II	154	チャート	21	9	6	1.3	2.6	5.3	2.9	菱形	有	3a	
99	8F A		013	チャート	28	13	7	3.1	1.5	9.0	5.7	菱形	有	3a	
100	8Gアゼ		001	チャート	21	8	3	0.6	4.5	4.1	3.0	菱形		3a	
101	8I	II	014	チャート	24	9	5	1.3		(6.2)	(3.3)	菱形	有	3a	
102	9F		030	チャート	31	12	7	2.5	1.5	5.5	4.3	菱形	有	3a	
103	10K	III	015	チャート	28	9	4	1.6	2.8	3.7	3.5	三角		3a	
104	10K	II	022	チャート	25	10	4	1.3	1.3	4.2	2.2	菱形		3a	
105	10L	II	003	チャート	25	13	5	2.0	1.4	7.5	4.3	菱形	有	3a	
106	10L	II	013	チャート	22	9	4	1.0		(5.4)	(3.5)	菱形	有	3a	224
107	11K	III	004	チャート	31	23	9	8.0	7.8	7.5	3.4	菱形		3a	223
108	P838		001	チャート	26	10.5	6.5	1.8	8.5	6.5	4	菱形		3b	
109	1C N		011	サヌカイト	32	9	5	1.4	3.2	4.5	3.0	菱形		3b	230
110	4C	I	014	チャート	21	7	5	0.7	1.4	3.9	2.9	菱形		3b	
111	5H	II	231	チャート	22	9	5	0.9	2.3	4.7	3.4	菱形		3b	
112	5I	III	049	チャート	24	9	5	1.3	2.2	4.5	4.0	菱形	有	3b	
113	5I E		005	チャート	26	7	4	0.6	1.0	3.0	2.1	菱形		3b	229
114	6G N		003	チャート	26	11	5	1.4	1.9	3.6	3.2	四角		3b	
115	6H	III	007	チャート	25	8	4	0.8	4.6	5.8	3.6	菱形	有	3b	
116	6L	II	005	チャート	24	7	4	0.7	2.1	3.2	2.1	菱形	有	3b	228
117	6L	II	017	チャート	31	21	10	6.5	1.5	4.6	2.6	三角		3b	
118	6L	III	023	チャート	32	10	5	2.3	4.8	4.4	3.8	菱形		3b	
119	7F	II	025	チャート	26	7	6	1.1	4.7	3.8	3.5	菱形		3b	
120	7F	III	025	チャート	19	6	4	0.4	3.2	4.2	3.4	菱形		3b	
121	7K	III	008	チャート	21	9	4	0.9	2.3	5.1	2.6	菱形		3b	221
122	7K	III	009	チャート	16	7	4	0.4	2.8	5.2	3.4	菱形		3b	231
123	7L	III	015	サヌカイト	27	11	4	1.3	2.3	3.4	3.3	三角		3b	219
124	8F N	I	023	チャート	28	11	6	2.0	2.3	5.9	3.8	菱形		3b	
125	8F	I	028	チャート	31	9	1.6	1.6	4.0	5.3	3.2	菱形	有	3b	
126	8F	II	179	チャート	25	8	4	0.8	2.4	4.6	1.9	菱形		3b	
127	8H	I	005	チャート	28	9	5	1.4	3.3	4.4	4.1	菱形		3b	
128	9I N		004	チャート	43	11	5	2.9	5.0	6.3	4.0	菱形		3b	
129	9J	III	011	チャート	29	10	5	1.6	5.5	6.6	4.0	菱形	有	3b	
130	10E	II	075	チャート	21	9	5	0.9	3.0	2.9	2.6	菱形		3b	222
131	10G	III	006	チャート	25	24	8	1.5	1.0	2.9	1.8	菱形		3b	
132	10H	III	060	チャート	41	44	10	14.3	1.8	2.3	2.5	三角		3b	
133	10I	I	011	チャート	29	19	7	4.5	1.9	4.0	2.7	三角		3b	
134	10K	III	024	チャート	33	12	7	2.8	2.6	4.5	3.2	三角		3b	
135	12H		001	チャート	39	10	5	2.2	2.5	4.0	2.5	菱形		3b	
136	12L	杭下	001	チャート	18	15	5	5.0	1.7	4.0	3.2	三角		3b	
137	13H	II	008	チャート	20	11	4	3.6	1.1	1.6	1.4	三角		3b	
138	13J	I	011	チャート	22	9	6	1.5	1.0	2.4	1.5	三角		3b	
139	14J	II	083	チャート	36	24	6	5.1	2.0	2.7	2.3	四角		3b	

第21表　石匙計測表

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	分類	備　考
1	4I	I	008	チャート	(30)	22	4	(4.2)		1	一部欠損
2	7E	II	103	チャート	25	9	8.2	2		1	
3	10E	III	037	サヌカイト	94	27	10.9	35.9	237	1	
4	10G	I	027	チャート	40	28	10.8	12	239	1	
5	13M	II	007	チャート	49	23	7.2	(8.1)	240	1	一部欠損
6	SK22		001	サヌカイト	26	(29)	5.1	(2.7)	114	2	一部欠損
7	SB4	19-81	001	チャート	35	60	11.9	23.5	58	2	
8	SB4	SW	020	チャート	31	45	7.6	7.9	59	2	
9	4K	I	002	チャート	26	36	6.8	6.2	233	2	
10	6M N		001	チャート	40	(48)	9.8	(16.9)	235	2	一部欠損
11	10E	III	053	チャート	25	50	5.3	10.1	238	2	
12	10I E		005	チャート	57	51	8.1	23.2	234	2	
13	13G	III	017	チャート	26	40	8	6.5	232	2	
14	14J	III	014	サヌカイト	46	58	10.3	20.7	236	2	

第22表　掻器計測表

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	分類	挿図
1	SB1 SW		009	チャート	37	19	8	6.2	1	3
2	10E	III	001	チャート	36	20	13	7.7	1	
3	10E	II	058	チャート	49	37	19	30.6	1	242
4	12J	I	010	チャート	26	22	4	2.7	1	
5	17O	II	007	チャート	17	32	7	3.1	1	
6	2E	III	002	チャート	22	29	11	5.8	1	245
7	2L	I	005	チャート	30	19	11	8	1	
8	2M		010	チャート	40	30	9	18.8	1	
9	3N	III	001	チャート	34	22	8	7.6	1	
10	5E	—	017	チャート	33	21	12	8.6	1	
11	6I	I	004	チャート	22	25	9	5.1	1	244
12	8E	III	076	チャート	23	38	14	13.3	1	
13	8E W	—	011	チャート	62	45	17	51.9	1	243
14	9F	—	031	チャート	55	37	13	23.7	1	241
15	9K	II	028	チャート	26	28	10	5.7	1	
16	排土			チャート	31	27	8	7.1	1	
17	11F	III	016	チャート	19	17	9	2.7	2	
18	6H	II	003	チャート	21	31	10	5.7	2	246
19	7K	III	032	チャート	26	11	6	2.2	2	

第23表　削器計測表(1)

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	分類	挿図
1	4L	II	021	チャート	21	18	6	2.3	1	
2	5E	III	022	チャート	19	22	7	2.7	1	
3	5M	III	045	チャート	26	52	8	11	1	
4	7E	III	043	チャート	28	36	8	8.6	1	
5	7M	III	002	サヌカイト	34	91	11	34	1	250
6	7M	III	010	チャート	37	56	14	25.9	1	
7	8E	I	021	チャート	33	36	12	17.7	1	
8	10E	II	012	チャート	23	22	7	3.1	1	
9	13K		011	チャート	42	23	6	6.3	1	247
10	P60		001	チャート	25	22.5	6	3	2	119
11	P105		001	チャート	25	21	5.5	2.9	2	120
12	P253		001	チャート	44.5	29	10	12.8	2	
13	SK28		001	チャート	44	27	12.5	14.5	2	118
14	SK42		019	チャート	29	20	7	4.3	2	121
15	SK190		001	チャート	42	41	8.6	14	2	
16	SB1		003	チャート	31	32	10	11.6	2	4
17	SB2		043	サヌカイト	53	36	9	16.9	2	23
18	SB4		005	チャート	30	22	6.5	4.2	2	60
19	SB4		049	チャート	30.5	23.5	6	3.8	2	61
20	SB4 SE		003	チャート	17	13	3	0.8	2	62
21	2C	I	012	チャート	26	28	10	8.7	2	
22	2C	II	009	チャート	31	26	7	5.2	2	
23	2E	II	002	チャート	19	30	7	4.9	2	
24	3J A		004	チャート	62	25	9	17.9	2	254
25	4C	I	005	チャート	21	34	6	4.8	2	
26	4G	I	001	チャート	42	30	10	15	2	251
27	5E		014	チャート	39	38	10	18.8	2	258
28	5E	II	051	チャート	38	18	6	6.2	2	255
29	5N	I	008	チャート	39	26	10	11.2	2	
30	6E	III	026	チャート	37	28	12	14.3	2	

第24表　削器計測表(2)

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	分類	挿図
31	6G	III	002	サヌカイト	44	32	9	12.5	2	
32	6J	III	003	チャート	21	30	7	4.3	2	
33	7J	III	009	頁岩	34	45	14	21.8	2	
34	8I	III	003	チャート	69	47	10	24.2	2	253
35	8K	III	031	チャート	19	18	7	2.7	2	
36	9F	II	012	チャート	36	21	7	6.7	2	
37	9F		018	サヌカイト	53	33	5	11	2	
38	9I		002	チャート	75	46	20	62.5	2	249
39	10G	I	041	チャート	48	56	9	29.4	2	252
40	10G	III	042	チャート	23	18	7	3.3	2	259
41	10H	I	006	チャート	28	36	12	10.7	2	257
42	11J	III	001	チャート	59	40	12	33.7	2	248
43	13K	I	010	チャート	47	26	12	16.1	2	
44	13L	III	009	チャート	29	24	8	6.5	2	
45	14J	II	057	チャート	23	19	6	2.9	2	
46	排土			チャート	22	42	11	7.7	2	256
47	排土			チャート	35	62	12	31.8	2	

第25表　ピエス・エスキーユ計測表(1)

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	分類
1	P483		003	チャート	35	21	9	5.2		1
2	P767		003	チャート	22	6	6	1		1
3	P1190		002	チャート	35	17	10	5.7		1
4	SK1		006	チャート	31	21	9	7.7		1
5	SK10		001	チャート	26	8	8	2.5		1
6	SB1	—	007	チャート	33	18	9	6	5	1
7	SB1 NW		004	チャート	20	15	10	3.2	6	1
8	SB2		028	チャート	20	17	10	3.8	24	1
9	SB2		064	チャート	18	17	9	2.9	25	1
10	SB4 NW		053	チャート	25	18	11	5.6		1
11	SB4 SW		019	サヌカイト	27	16.3	9	4		1
12	1C N	—	005	チャート	26	17	7	3.7		1
13	24		002	チャート	20	17	7	2.2		1
14	2C	I	002	チャート	30	27	11	11.1		1
15	2C	III	002	チャート	26	24	6.5	5		1
16	2F N		001	チャート	29	16	9	4.1		1
17	2J	II	001	チャート	26	20	8	4.3		1
18	2J	III	002	チャート	29	19	8	5.5	267	1
19	3C	II	003	チャート	32	27	8	6.3		1
20	3E	II	007	チャート	28	19	7.5	3.9		1
21	3H	II	019	チャート	15	14.5	4	1.3		1
22	3K	III	008	チャート	25	19	8	4.4		1
23	3L	III	006	チャート	32	18	11	9.1		1
24	3M		012	チャート	29	10	13	3.2		1
25	4Cトレ	—	022	チャート	26	15	7	3.6	268	1
26	4C	I	010	チャート	34	24	7	7		1
27	4C	I	015	チャート	41	26	10	9.9		1
28	4C	I	003	チャート	32	28	8	9		1
29	4F	I	006	チャート	25	26	10	7.3		1
30	4G N	—	015	チャート	31	29	11	7.2		1
31	4H	II	018	チャート	28	24	10	7.2		1
32	4H A		002	チャート	26	19	6	3.3		1
33	4I	I	009	チャート	28	22	6	4.4		1
34	4L A	—	010	チャート	27	10	8	2.6		1
35	5E	II	071	チャート	21	18	6	2.3	265	1
36	5F	II	012	チャート	28	20	13	7.7		1
37	5H	I	009	チャート	33	20	13	10.3		1
38	5I	III	019	チャート	20	17	8	3		1
39	5J	I	002	チャート	18	13	6	1.9		1
40	5L	I	002	チャート	26	21	6	4.2		1
41	5M	II	026	チャート	23	20	6	4.4		1
42	5N	II	183	チャート	27	21	7	3.2		1
43	5N	I	012	チャート	28	27	14	11.6		1
44	6H	II	019	チャート	28	13	13	5.6		1
45	6H	II	002	チャート	20.5	15	9	3.7		1
46	6L	II	021	チャート	24	20	5	2.8		1
47	6L	III	019	チャート	32	12	11	3.1		1
49	6M	II	081	チャート	26	18	9	3.4		1
50	6N	I	014	チャート	31	25	10	10.2		1
51	7E	II	058	チャート	35	25	11	10.7		1
52	7E	III	007	チャート	18	16	7	2.7		1

第26表　ピエス・エスキーユ計測表(2)

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	分類
53	7E	II	103	チャート	25	9	8	2		1
54	7E	II	010	チャート	17	14	4	1.4		1
55	7F		004	チャート	19	11	6	1.4		1
56	7F A	—	015	チャート	27	26	13	8.2		1
57	7J	III	010	チャート	19	15	6	1.8		1
58	7L	II	006	チャート	17	16.5	3.5	1.3		1
59	8F	II	079	チャート	30	11	13	4.6		1
60	8F	I	016	チャート	25	22	10	4.4		1
61	8F	II	061	チャート	27	19	11	5.4		1
62	8I	II	002	チャート	30	20	14	11.4		1
63	8I N	—	008	チャート	22	11	7	2.1		1
64	8K	III	044	チャート	18	14	7	2.1		1
65	8K E		001	チャート	22	11	7	1.7		1
66	8K E	—	005	チャート	38	22	16	11.6		1
67	8L	II	005	チャート	17	13	4	1.4		1
68	9F	III	049	チャート	29	17	16.5	4.2		1
69	9F	I	007	チャート	26	17	9	5.1		1
70	9F	II	032	チャート	27	19	9	5.5		1
71	9F	III	037	チャート	31	15	10	6.5	263	1
72	9F	III	068	チャート	36	20	11	7.5		1
73	9F E		003	チャート	30	24.5	11	8.5		1
74	9F S	I	008	チャート	30	20	9	4.8		1
75	9F S	III	009	チャート	23	24	9	5		1
76	9H	II	015	チャート	26.5	17	7	2.8		1
77	9H	III	003	チャート	22	16	5	2.7		1
78	9I N		007	チャート	24	13	6.5	2.8		1
79	9I W		007	チャート	20	19	8	2.6		1
80	9K	III	017	チャート	16.5	15	8	1.8		1
81	9K N	—	007	チャート	20	16	6	1.9	263	1
82	10E	II	071	チャート	26	23	9	5.3		1
83	10E	II	063	チャート	29	20	7	5.2		1
84	10E	III	032	チャート	27	25	12	7.1	269	1
85	10Eトレ	II	009	チャート	38	24	12	11	265	1
86	10F	II	013	チャート	28	25	12	9.5		1
87	10F	III	024	チャート	21	16	5	1.7		1
88	10F	II	017	チャート	28	19	8	3.4		1
89	10F	III	005	チャート	26	17	16	6.4		1
90	10G	I	035	チャート	30	24	10	7.2		1
91	10G	II	039	チャート	20	14	8	2.1		1
92	10H	II	029	チャート	24	23	8	5.9		1
93	10H	I	031	チャート	26	12	6	2.1		1
94	10H	I	037	チャート	23	19	7	2.8		1
95	10H E	—	008	チャート	28	25	14	10.8		1
96	10I	II	012	チャート	26	18	5.5	3.2		1
97	10I	II	009	チャート	28	24	7	6.5		1
98	10I	I	008	チャート	26	11	5	3.2		1
99	10I	III	002	チャート	19	18.5	13	5.1		1
100	10I N		010	チャート	25	10	7	2.3		1
101	10I N		009	チャート	24	11	10	2.6		1
102	10J	II	004	チャート	24	17	7	3.3		1
103	10K	II	004	チャート	38	31	14	19.2		1
104	10K	II	037	チャート	32	25	8	7.3		1
105	10K	—	004	チャート	35	22	8	6.8		1
106	10K	II	003	チャート	37	23	16	10.8		1
107	10K	II	044	チャート	31	18	7	4.7		1
108	10K	III	009	チャート	25	22	13	5.7		1
109	10L	II	016	チャート	22	17	10	3.6		1
110	10L	II	018	チャート	26	26	7	7.2		1
111	10M	I	007	チャート	34	25	9	8.7		1
112	11Fトレ	I	002	チャート	36	18	13	8.1	261	1
113	11H	I	005	チャート	27	19	8	5.1		1
114	11I	II	010	チャート	19	12	7	1.5		1
115	11I	II	015	チャート	23	19.5	16	7.1		1
116	11I	II	019	チャート	25	20	11	6.5		1
117	11I	II	006	チャート	28	13	8	3.4		1
118	11K	III	010	チャート	26	25	7	2.6		1
119	11K		005	チャート	37	27	13	13.7		1
120	12	—	006	チャート	23	12	8	2.1		1
121	12G	III	016	チャート	35	36	11	16.9		1
122	12H	I	013	チャート	32	21	9	6		1

第27表　ピエス・エスキーユ計測表(3)

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	分類
123	12I	III	023	チャート	19	18	7	3		1
124	12J	II	004	チャート	25	20	7	4		1
125	13I	II	008	チャート	10	15	10	4		1
126	13I	I	011	チャート	24	22	6	3.7		1
127	13K	I	005	チャート	28	16	9	3.8		1
128	13L	II	001	チャート	37	29	11	11.7		1
129	13L A		001	チャート	24	13	10.5	3.7		1
130	13N		004	チャート	29	15	10	5.3		1
131	13Q	II	010	チャート	24	14	9	4.1		1
132	13U	I	008	チャート	17	14	8	1.9		1
133	14,16L	III	001	チャート	46	24	19	22.9		1
134	14.16L	I	009	チャート	35	26	12	10.8	271	1
135	14J	II	065	チャート	25	15	6	2.5		1
136	16G	II	037	チャート	22	17	8	3		1
137	17P	I	010	チャート	24	12	9	3.3		1
138	17P	II	004	チャート	25	19	7	4.1		1
139	19,20L	III	010	チャート	22	20	7	3.4		1
140	19,20L		007	チャート	37	22	11	8.9		1
141	19L N		005	チャート	22.5	16	6	2.5		1
142	排土	—		チャート	27	22	7	4.6		1
143	排土	—		チャート	51	24	18	24.6	260	1
144	排土	—		チャート	20	18	7	2.8		1
145	3F	I	006	チャート	31	25	6	5.5		2
146	4C	—	013	チャート	26	21	6	5.1		2
147	5G	I	007	チャート	23	13.5	6	1.7		2
148	5G	I	021	チャート	16	17	5	1.6		2
149	5I	I	070	チャート	19	15	14.5	1.4		2
150	5I	I	081	チャート	24	17.5	5	2.9		2
151	5L A		002	チャート	31	25	16	12.9		2
152	6I	III	012	チャート	17	15	10	2.8		2
153	6L	II	040	チャート	21	9	8	1.9		2
154	7E		013	チャート	24	17	6	3		2
155	8F A	—	012	チャート	18	19	6	2.1		2
156	9F N		021	チャート	21.5	17	6	2.6		2
157	10E	III	075	チャート	16	15	6	1.6		2
158	10F	II	039	チャート	17.5	12	14.5	1		2
159	10G	I	016	チャート	26	17	7	4.3		2
160	10G	II	041	チャート	21	16	8	2.9		2
161	10I	I	018	チャート	28	14	7	2.9		2
162	10I	I	012	チャート	29	21	12	7.1		2
163	10K	II	004	チャート	25	14	10	3.9		2
164	10K	II	011	チャート	33	24	12	8.3		2
165	10L	I	006	チャート	39	28	18	16.2		2
166	12H	I	014	チャート	27.5	22	9.5	5.6		2
167	12K	I	020	チャート	32	25	15	11.3		2
168	13G	II	004	チャート	19	18	5	2.5		2
169	13K	I	009	チャート	27	19	6	2.7		2
170	13L	I	018	チャート	26	20	11.5	7.8		2
171	13L A		003	チャート	25.5	17	10	3		2
172	14J	II	023	チャート	18	26	9	4.8	268	2
173	16G	III	009	チャート	29	21	11	6.3		2
174	SB1 SW		006	チャート	27	23	10	6.1		3
175	SB2		005	チャート	30.5	24	9	7.7		3
176	1K	III	007	チャート	28	10.5	11	6.7		3
177	1K	III	001	チャート	37	33	13	17		3
178	2C	II	009	チャート	30	24	8	6		3
179	3F	I	015	チャート	21	15	7	3.4		3
180	3H	II	029	チャート	23	18	4	2.1		3
181	4C		009	チャート	22	21	5	3.4		3
182	4E	II	028	チャート	23	13	4	1.7		3
183	4M	II	009	チャート	25	15	9	3.9		3
184	5L	II	001	チャート	33	27	8	6.3		3
185	5N	II	177	チャート	26	21	8	5.2		3
186	7J	III	034	チャート	23	20	7	4.2		3
187	8E	I	020	チャート	22	19	10	4.7		3
188	8K	I	014	チャート	18	16	10	3.1		3
189	8L	I	027	チャート	26	17	11	6.4		3
190	8L	I	027	チャート	26	21	11	6.4		3
191	9J	II	021	チャート	19	11	7	1.6		3
192	10E	II	035	チャート	30	22	7	7.3		3

第28表　ピエス・エスキーユ計測表(4)

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	分類
193	10H	I	026	チャート	20	14	5.5	1.8		3
194	10H	I	044	チャート	25	24	7	5.8		3
195	10H	III	004	チャート	33	30	9	8.1		3
196	10H	III	056	チャート	17	14	5	1.5		3
197	10H	II	005	チャート	29	26	10	8.5		3
198	10K	II	043	チャート	27	20	8	4.7		3
199	10L	III	006	チャート	15	23	8	3.1		3
200	11I	II	016	チャート	20	23	10	4.9		3
201	11K	III	003	チャート	28.5	25	11	8.4		3
202	12J	I	006	チャート	24.5	24	9	5.2		3
203	12L	III	004	チャート	18	17	5	1.9		3
204	13J	I	042	チャート	40	25	9	10.2		3
205	13K		012	チャート	30	28	10	11.1		3
206	13O	I	005	チャート	25	23	9	6.2		3
207	14J	I	003	チャート	33	23	9	7.6	270	3
208	16G	I	007	チャート	21	17	8	3.8		3
209	16G	II	062	チャート	26	19	6.5	3.8		3
210	17P	II	003	チャート	22	19	5	3.1		3
211	排土			チャート	21	16	9	3.1		3

第29表　ヘラ形石器計測表(1)

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図
1	P1190		003	チャート	31	20	8	6.3	
2	SK146		003	チャート	33	22	8	6	
3	SK38		006	チャート	26	17	8	2.4	
4	SB2		021	チャート	25	18	8	3.8	26
5	SB4		019	チャート	25	19	8	3.5	69
6	SB4	18-	206-001	チャート	28	15	7	3.2	68
7	SB4	19-	275-001	チャート	37	19	9	6.7	67
8	SB4 SE		005	チャート	27	13	10	4	
9	SB4 SE		014	チャート	22	13	5	1.9	
10	2C	I	004	チャート	29	20	10	7.7	
11	2C	II	027	チャート	32	20	9	8.3	
12	2G	I	001	チャート	29	22	12	9.8	
13	2L	II	032	チャート	34	24	7	4.9	
14	3G N		004	チャート	23	18	6	3.3	
15	3H	I	004	チャート	11	11	7	2.2	
16	3H	III	007	チャート	26	14	7	3.1	
17	3K	III	003	チャート	19	18	7	3.4	281
18	4C	III	006	チャート	29	20	8	3.4	282
19	4C	I	008	チャート	30	17	7	3.7	
20	4C	III	075	チャート	27	15	8	4.3	
21	4G	I	015	チャート	24	13	9	3.1	
22	4H	III	003	チャート	30	26	9	9.1	
23	4H	III	003	チャート	30	26	9	9.1	275
24	4H A		019	チャート	28	13	6	2.6	
25	4L	III	006	チャート	27	18	7	3.4	
26	4L	III	018	チャート	21	18	6	2.9	
27	5E	III	035	チャート	23	17	6	2.3	283
28	5E	II	057	チャート	23	18	6	2.3	
29	5F	III	012	チャート	22	18	10	3.1	
30	5F		014	チャート	25	18	9	4.3	
31	5M	I	014	チャート	26	16	7	3	280
32	6E	II	005	チャート	25	20	5	3	
33	6G	II	011	チャート	19	15	5	2	
34	6K	III	005	チャート	34	28	8	8.5	
35	6M	II	016	チャート	18	17	4	2	
36	6M	III	030	チャート	17	9	4	0.9	
37	6M	III	039	チャート	27	24	9	6.8	
38	6M	II	067	チャート	44	22	9	7.8	273
39	7C	II	028	チャート	22	21	8	4.9	
40	7E	III	013	チャート	30	17	8	3.3	
41	7E	II	099	チャート	25	15	6	2.7	
42	7K	III	035	チャート	19	13	10	2.8	
43	8E	III	073	チャート	33	27	8	8.3	276
44	8K	I	014	チャート	18.5	16	10	3.2	
45	8L	I	030	チャート	20	15	6	2.8	284
46	8L	I	030	チャート	20	14	5	2.7	
47	8L E		005	チャート	50	17	11	11.1	272
48	9H	II	014	チャート	21	14	6	2.2	
49	9H A		022	チャート	20	13	6	1.2	
50	9M	II	002	チャート	22	14	6	3.3	

第30表　ヘラ形石器計測表(2)

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図
51	10E S		003	チャート	39	22	9	7.6	
52	10E	III	009	チャート	38	21	5	6.3	
53	10H	I	017	チャート	25	25	6	4.4	278
54	10H	III	066	チャート	36	22	6	5	277
55	10K	II	053	チャート	22	20	5	2.9	
56	13L	II	005	チャート	26	17	4	2	
57	14J	II	014	チャート	42	26	7	8.4	274
58	14J	II	036	チャート	26.5	18	8	5.7	
59	19,20L	II	011	チャート	18	12	5	1.1	285
60	5E	II	026	チャート	28	28	7	9.3	279

第31表　打製石斧計測表(1)

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	分類	挿図	折損
1	P244		001	砂岩	125	45	23.5	189	1		
2	P405		003	安山岩	149	59	22	272	1	145	
3	P572		001	砂岩	99	44	14	87	1		c
4	SB1 NW		001	ホルンフェルス	104	68	12	126	1		b
5	12J	II	002	安山岩	40	23	8	8.3	1		b
6	2C	II	020	安山岩	149	51	20	180	1		c
7	2C E		004	安山岩	109	53	23	159	1		
8	3C		001	安山岩	99	43	17	80	1		
9	3J	III	001	安山岩	97	65	23	204	1	291	
10	5E	III	004	ホルンフェルス	70	59	13	68	1		b
11	5E	II	023	安山岩	79	53	10	59	1		d
12	5E	III	040	安山岩	102	55	22	176	1		
13	5H	I	028	安山岩	92	48	14	95	1		c
14	5I	I	003	ホルンフェルス	96	42	12	73	1	292	c
15	5I	III	014	安山岩	102	49	15	103	1		
16	7E	II	026	安山岩	69	45	10	44	1		b
17	7E	II	019	安山岩	67	59	17	92	1		b
18	7E	II	083	安山岩	89	51	11	79	1		a
19	7E	II	078	安山岩	73	44	15	58	1		不明
20	7E		064	安山岩	80	46	14	69	1		
21	7E S	II	018	安山岩	95	44	13	69	1		c
22	7K	III	007	ホルンフェルス	103	57	24	217	1		
23	7L	III	002	安山岩	84	51	17	86	1		
24	8E	I	002	礫岩	130	56	21	201	1	290	
25	8E	III	014	ホルンフェルス	93	45	22	124	1		a
26	8F	II	133	安山岩	131	42	21	153	1		
27	8F	II	132	安山岩	82	42	16	70	1		a
28	8F A		031	安山岩	114	54	15	160	1		
29	8H	II	019	砂岩	95	57	28	198	1		d
30	10M	I	004	安山岩	63	51	12	58	1		b
31	11F	III	035	安山岩	99	51	21	135	1		
32	11H	II	041	安山岩	85	52	17	97	1		a
33	11H	II	064	安山岩	53	50	10	39	1		b
34	12L W		002	安山岩	107	36	16	86	1		
35	12M	II	001	安山岩	98	50	15	114	1		
36	12M	II	002	安山岩	62	45	11	39	1		a
37	13I	II	011	ホルンフェルス	89	44	11	59	1		b
38	14J	II	039	安山岩	83	60	10	69	1		b
39	3J A		003	安山岩	77	51	12	61	2		a
40	5H	I	029	砂岩	113	92	22	270	2	293	
41	6E	II	014	砂岩	127	77	24	295	2		a
42	6J	II	031	砂岩	151	82	27	348	2		
43	9F	III	096	安山岩	120	66	22	225	2		
44	12H	III	005	砂岩	178	71	37	414	2		
45	排土			砂岩	126	94	26	335	2	294	
46	P405		001	安山岩	124	64	13	131	3		
47	P823		001	砂岩	83	67	21.5	151	3		b
48	SB1 SF	III	003	安山岩	91	49	14	80	3	9	
49	SB4		059	礫岩	108	63	19	166	3	97	
50	SK20		002	安山岩	105	62	22	198	3	144	
51	1C N		001	安山岩	135	49	17	120	3	295	
52	2C	II	002	安山岩	136	47	16	127	3		
53	3E E		001	安山岩	111	53	17	125	3		
54	3J	II	004	安山岩	122	52	21	122	3		
55	3K	III	009	安山岩	116	53	27	211	3		
56	5E	I	002	安山岩	98	47	15	97	3		
57	5E	I	001	安山岩	112	46	13	75	3		

第32表　打製石斧計測表(2)

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	分類	挿図	折損
58	6E	III	003	安山岩	95	42	17	90	3		
59	6E	II	015	砂岩	112	70	25	197	3		
60	7E		028	安山岩	90	41	14	73	3		
61	7F	II	001	砂岩	102	80	27	199	3		a
62	7M	II	058	安山岩	99	47	17	91	3		
63	8E	III	013	ホルンフェルス	71	34	9	29	3		
64	9H	II	030	ひん岩	131	75	30	337	3		c
65	9K	II	003	安山岩	84	47	11	60	3		
66	9L A		012	安山岩	102	52	24	146	3		
67	10K	III	014	安山岩	194	65	22	340	3	296	
68	11K E		001	砂岩	122	85	23	264	3		
69	排土			砂岩	96	67	17	143	3		a
70	3G E		002	安山岩	83	61	23	171	不明		b
71	3G N		001	砂岩	75	50	16	78	不明		a
72	3J	II	005	安山岩	56	38	15	46	不明		b
73	3J A		006	砂岩	70	55	21	151	不明		d
74	4C		002	ホルンフェルス	64	47	5	28	不明		d
75	5E	II	022	安山岩	59	47	10	37	不明		b
76	5E	II	002	安山岩	87	56	20	149	不明		d
77	5E S		007	砂岩	94	61	38	254	不明		a
78	6J	II	030	安山岩	77	56	15	82	不明		c
79	6K	III	003	砂岩	68	59	10	61	不明		b
80	6L	III	057	砂岩	60	77	13	92	不明		b
81	7E		057	砂岩	107	60	23	176	不明		c
82	7E	II	011	安山岩	51	49	13	49	不明		d
83	7E S		032	安山岩	59	40	11	39	不明		a
84	7K	III	005	安山岩	59	36	14	35	不明		b
85	8E	I	001	砂岩	179	123	48	1038	不明		b
86	9F	III	005	安山岩	134	41	16	103	不明		c
87	9H	III	007	安山岩	54	55	10	38	不明		b
88	9H	II	028	安山岩	65	57	17	83	不明		b
89	9K	II	002	安山岩	66	55	16	89	不明		b
90	9K	III	003	砂岩	47	52	18	51	不明		b
91	10E	II	001	安山岩	95	62	23	189	不明		b
92	11T A		003	砂岩	101	72	39	366	不明		a
93	排土			安山岩	66	40	6	22	不明		a

第33表　磨製石斧計測表(1)

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	分類	折損	基部ツブレ	挿図
1	4E	II	003	はんれい岩	(80)	(38)	29	142	1	a		
2	6J	II	002	はんれい岩	(79)	(27)	28	98	1	e		
3	8L	II	003	凝灰岩	(84)	48	39	239	1	a	有	
4	9F	II	058	はんれい岩	88	36	24	108	3		無	305
5	10		009	はんれい岩	111	45	39	330	1	b		302
6	10H	III	028	はんれい岩	(61)	(39)	32	119	1	a	有	
7	10I		013	ホルンフェルス	118	55	36	340	1		一部有	303
8	10I N		002	はんれい岩	117	60	30	300	3		有	301
9	P265		001	砂岩	26	16	5	3	2		無	
10	1K	III	002	凝灰岩	51	29	7	19	2		有	
11	3K	III	014	砂岩	30	19	4	6	2		無	314
12	4E	II	022	蛇紋岩	39	14	8	9	2		有	312
13	7E	III	007	砂岩	40	22	10	15	2		有	310
14	7M	II	062	凝灰岩	(45)	23	9	19	2	b		309
15	8K	I	057	ホルンフェルス	(40)	18	7	8	2		無	311
16	9J N		001	凝灰岩	52	22	7	17	2		無	
17	10G	II	002	凝灰岩	47	25	12	23	2		有	
18	10H	III	057	凝灰岩	39	29	10	22	2		有	
19	11K	III	001	凝灰岩	89	30	13	66	2		無	306
20	排土			蛇紋岩	38	23	9	12	2		有	313
21	SB4	19-279	001	ひん岩	118	48	24	217	3		無	99
22	SB4	N07	001	ひん岩	(97)	54	31	280	3	b		98
23	1I	I	033	細粒花崗岩	118	68	27	373	3		無	300
24	1K	III	001	ひん岩	129	53	25	252	3		無	299
25	4L	III	015	はんれい岩	(75)	51	25	173	3	b		
26	5E	II	019	ひん岩	(93)	55	29	228	3	b		
27	5J N		011	安山岩	(119)	47	30	233	3	a		
28	5N	II	168	凝灰岩	(73)	68	27	211	3	b		
29	6G	II	003	凝灰岩	55	39	12	41	3		有	308
30	7J	III	002	安山岩	(62)	60	22	139	3	b		
31	8F	II	134	安山岩	(81)	53	26	180	3	b		
32	8K	III	064	凝灰岩	(60)	41	20	95	3	b		

第34表　磨製石斧計測表(2)

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	分類	折損	基部ツブレ	挿図
33	9F N		003	凝灰岩	(85)	45	19	113	3	b	有	304
34	10E	II	020	ホルンフェルス	97	51	28	235	3		無	
35	10E	II	019	ひん岩	(99)	45	(25)	(164)	3	c		
36	10G	II	001	ひん岩	159	57	32	473	3		無	
37	10L E		001	ひん岩	135	71	28	487	3		一部有	298
38	11L	III	006	凝灰岩	76	44	19	115	3		有	307
39	12H	II	002	ひん岩	(66)	46	24	107	3	b		
40	10H E		011	安山岩	163	98	38	814	4		有	297
41	3N	III	003	砂岩	(55)	(53)	19	95		a	無	
42	4C	III	053	凝灰岩	(71)	(51)	23	100		a		
43	4E	II	001	ひん岩	(91)	(49)	(26)	(171)		a	無	
44	6L	II	003	凝灰岩	101	(51)	19	186	3		無	
45	6L	III	002	凝灰岩	(37)	(23)	10	11		a	無	
46	7M	III	045	蛇紋岩	(102)	(76)	30	364		d		
47	9F	III	059	ひん岩	(40)	(38)	22	50		a	無	
48	9F	II	083	凝灰岩	(72)	(47)	23	81		e		
49	9K	II	001	蛇紋岩	(57)	(42)	23	91		a	無	

第35表　打欠石錘計測表(1)

No.	出土区	層位	番号	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	挿図
1	P78		003	砂岩	53	28	12.5	30.7		
2	P180		001	砂岩	39.5	29.5	16.5	27.8	帯痕（両）	
3	P305		001	砂岩	60	44.5	19	81.3		
4	P305		004	砂岩	46	28.5	15	27.3		
5	P305		006	砂岩	69	41	23.5	74.2		137
6	P638		001	安山岩	49	29	12.5	27.5		
7	P783		001	砂岩	70	42	19.5	81.5	タール	
8	P1145		001	ひん岩	37	29	11.5	19.9		130
9	SK		001	砂岩	53	40	14.7	46.2		135
10	SK27		002	砂岩	40	34.5	13	26.1		
11	SK29		007	砂岩	43	32	10.8	21.3		133
12	SK32		001	ホルンフェルス	39	31	8.6	14.8		
13	SK37		003	砂岩	46	29	8.4	15.7	帯痕（片）	132
14	SK40		002	砂岩	61	30	17.8	43.7	帯痕（両）	
15	SK40		004	ホルンフェルス	46	34	14.1	25.9		134
16	SK42		020	安山岩	46	31	11.8	19		
17	SK51		003	安山岩	30.5	29	8	12.7		
18	SK74		002	砂岩	40	27	12	17.4		
19	SK75		009	砂岩	49	28	11.5	26.3		
20	SK81		001	砂岩	42	27	12	21.7		131
21	SK140		001	砂岩	37	30.5	12.5	21.1	帯痕（両）	
22	SK145		003		36	26	8.5	12.1		129
23	SK146		001	砂岩	40	32	10	19.1	帯痕（片）	
24	SK203		023	閃緑岩	82	45.5	16	115.5		
25	SK214		001	砂岩	60	32	13	36	帯痕（片）	
26	SK215		001	安山岩	108	67	33	408		
27	SB1		030	砂岩	53	28	10.7	18.9		
28	SB1 NE		030	砂岩	52.5	27.5	10	18.8		11
29	SB1 SF		001	砂岩	44	36	16.4	32.5	タール	10
30	SB2		076	砂岩	50	36	17.7	47.2		29
31	SB3		017	ひん岩	40	29	14.8	20.3		37
32	SB4		001	砂岩	45	33	12.5	31.4	帯痕（片）	72
33	SB4		002	砂岩	70	68	16.8	97.5	欠損	75
34	SB4		062	凝灰岩	35	25	13.2	19.2		
35	SB4	19-167	001	砂岩	37	31.5	13	19.7		70
36	SB4 N	III	001	砂岩	56	27	12.1	29.2		73
37	SB4 NW		005	砂岩	85	49	28.9	192.2		74
38	SB4 NW		010	砂岩	47	31	24.8	47.9		
39	SB4 NW		054	れき岩	55	41	22.1	69		71
40	SB4P36		001	砂岩	49	24	15	27.4		
41	2C	II	004	砂岩	60	30	13.7	36.3	タール	
42	3E	I	003	閃緑岩	50	43	18	63.9		
43	3H	I	017	砂岩	61	33	12.2	37		
44	3L	III	022	砂岩	44	32	13.6	24.2	帯痕（片）	
45	3M		001	砂岩	50	37	13	33.1		
46	3M	III	004	ホルンフェルス	56	24	9.9	17.1	欠損	
47	4L		003	砂岩	83	46	17.9	113.2		
48	5E	III	030	ホルンフェルス	42	38	7.7	18.8	タール	
49	5I	I	001	砂岩	70	45	29.7	143.3	焼	
50	5L	III	012	砂岩	111	60	25.1	251.6	欠損	

第36表　打欠石錘計測表(2)

No.	出土区	層位	番号	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	挿図
51	5M	III	015	砂岩	73	34	17	58.5		
52	5N	I	036	砂岩	48	33	12.7	26.7		
53	5N	II	165	ホルンフェルス	50	41	13.7	37.2		
54	6I	III	001	安山岩	108	79	19.6	205.5		
55	6I E		002	ホルンフェルス	50	41	10.7	33.4	欠損	
56	6J	II	001	砂岩	63	38	20.6	60		
57	6L	I	001	ホルンフェルス	46	28	13.7	24.3		
58	6L N		042	ホルンフェルス	37	15	8.2	7.3	帯痕（片）	
59	6M	III	001	砂岩	48	28	14	28.2	帯痕（片）	
60	6M	II	042	砂岩	38	37	12.3	21.8	欠損	
61	6M N		002	砂岩	39	29	12.9	19.6		
62	6N	I	003	砂岩	40	29	10.3	14.9	帯痕（両）	
63	6N	II	023	砂岩	52	29	15.1	36.9		
64	6N	II	024	安山岩	43	31	20.3	41.8		
65	6N	II	025	砂岩	44	30	14	27.8	欠損	
66	6N	II	026	ホルンフェルス	56	35	12.6	31.7	欠損	
67	6N	II	043	砂岩	47	29	8.9	15.4	欠損	
68	7	III	040	安山岩	50	36	16.7	39		
69	7	III	041	砂岩	55	43	16.5	48.2		
70	7E	III	008	凝灰岩	49	25	11.1	13.8	欠損	
71	7E	II	015	ホルンフェルス	48	33	13.6	28.1		
72	7E	II	016	砂岩	47	36	11	27.9	タール	
73	7E	III	022	砂岩	42	32	9.4	17.6	帯痕（片）	
74	7E	II	043	ホルンフェルス	74	48	17.3	89.6		
75	7E S		006	砂岩	46	33	9.2	18	欠損タール	
76	7E S		007	ホルンフェルス	66	30	13.1	26.5	欠損	
77	7E S		035	砂岩	65	34	15.4	58.9		
78	7F		024	ホルンフェルス	62	27	10.6	28.2		
79	7K	III	003	砂岩	47	33	11.9	22.8	欠損	
80	7K N		002	ホルンフェルス	44	34	15.7	26.6	帯痕（片）	
81	7M	III	003	砂岩	58	29	13.3	22.3	帯痕（片）	
82	7M	III	009	ひん岩	36	28	11.4	17.8		
83	7Q	II	041	砂岩	53	33	13.4	35.4		
84	8E	III	005	砂岩	55	29	13.7	33		
85	8E	III	011	ひん岩	41	26	6.9	9.1	欠損	
86	8E	III	039	砂岩	29	21	8.3	7		
87	8E	III	060	砂岩	48	23	11.4	17.8	帯痕（片）	
88	8E	III	068	砂岩	43	36	8.3	16.4	タール	
89	8F杭		001	砂岩	51	28	14	31.4		
90	8Fトレ	II	193	砂岩	46	33	10.5	20.4	欠損	
91	8H	I	011	砂岩	53	43	13.9	47.8		
92	8I E		001	砂岩	50	37	12.9	34.8		
93	8K E		006	砂岩	51	30	11.4	26.9	帯痕（片）	
94	9F	III	036	砂岩	63	32	20.5	54.2		
95	9F	III	039	砂岩	67	37	13.4	41.8	欠，焼，タール	
96	9F	II	063	砂岩	56	23	12.5	18.9	焼	
97	9F	III	113	砂岩	52	28	15.2	33.9	帯痕（片）	
98	9F	III	117	ホルンフェルス	54	49	13.3	45.5	欠損 タール	
99	9H	I	010	ホルンフェルス	63	51	16.4	74.3		
100	9H A		026	砂岩	81	57	21.2	128.1	欠損	
101	10E	II	002	安山岩	50	40	14.1	43.8	欠損	
102	10E	I	014	ホルンフェルス	51	38	10.2	32.2		
103	10E	II	021	砂岩	42	30	16	27.3		
104	10E	III	041	砂岩	44	30	8.7	15.4		
105	10E	III	042	砂岩	43	35	9.9	22.4		
106	10E	III	044	砂岩	52	32	12.1	32.8	帯痕（片）	
107	10E	III	045	砂岩	39	33	8.6	16.7		
108	10E	III	047	砂岩	36	30	19.8	18.1	帯痕（片）	
109	10E	III	048	砂岩	68	40	16.5	73		
110	10E	III	049	ひん岩	53	36	11.9	33.9		
111	10E	III	050	砂岩	39	25	8.9	13.6		
112	10E	II	055	砂岩	48	30	15.4	30.9		
113	10E	III	067	砂岩	52	31	13.7	33.8	欠損	
114	10E	III	069	ホルンフェルス	49	41	10	26.5		
115	10E	III	070	砂岩	44	35	12.8	27.7		
116	10E	III	098	ホルンフェルス	37	18	5.4	5.3	欠損	
117	10E	III	107	ホルンフェルス	42	31	9.4	20.5	タール	
118	10F	III	001	砂岩	46	37	8.6	24		
119	10F	III	002	ホルンフェルス	38	33	9.7	17.8	帯痕（片）	
120	10F	III	003	ホルンフェルス	50	23	12.5	18.8		

第37表　打欠石鏃計測表(3)

No.	出土区	層位	番号	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	挿図
121	10G	II	003	ひん岩	55	41	17.1	56.4	欠損	
122	10H		001	ホルンフェルス	42	33	11.6	23.4	帯痕（片）	
123	10H	III	017	ホルンフェルス	48	37	13.1	31	欠損	
124	10H	III	027	砂岩	35	28	11.9	18		
125	10H	III	032	結晶片岩	45	27	10.2	14.4		
126	10H, N		003	砂岩	42	34	10.1	19.8		
127	10I, E		004	砂岩	42	34	13.2	27.5	タール, 焼	
128	10L	III	001	砂岩	41	32	11.7	24.7		
129	11F	II	001	砂岩	45	38	15.8	35		
130	11H	III	013	砂岩	45	34	8.5	18		
131	11H		022	砂岩	51	26	12.7	24.6		
132	11H	II	066	砂岩	53	30	15.7	36.1	タール	
133	11J		001	砂岩	39	29	8.7	15.8		
134	11KSZ	II	007	砂岩	46	40	13.4	35.3		
135	11L	III	001	砂岩	41	37	11.8	17.3		
136	11L	II	002	砂岩	48	36	15.9	37.8		
137	11L	III	005	ひん岩	41	25	7.9	12.3		
138	11L E		001	ひん岩	50	40	13.1	38.4		
139	12		001	砂岩	49	46	14	41		
140	12F	III	006	ホルンフェルス	57	47	15.4	61.8		
141	12F	III	008	砂岩	49	31	17.7	40.1		
142	12L	III	001	砂岩	81	82	25.1	219.4		286
143	13K	III	002	砂岩	48	30	10.8	24.6		
144	13M	II	001	砂岩	58	49	26.9	103.6		
145	13M	II	005	砂岩	33	24	10.3	11.6		
146	13M	II	006	ホルンフェルス	48	33	14.5	36.9	帯痕（片）	
147	14J	III	006	砂岩	66	43	19.8	84.1		
148	17O	III	001	砂岩	49	40	16.5	43.4		
149	排土		001	砂岩	50.5	37.5	9.5	31.5		
150	排土		002	砂岩	40.5	24	14.5	25		

第38表　切目石錘計測表(1)

No.	出土区	層位	番号	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	挿図
1	P21		001	砂岩	60	34	14	41.8	帯痕（片）	
2	P48		001	安山岩	50	37	22.5	57.7	片溝	
3	P78		001	砂岩	78	27	19	51.8		
4	P78		005	砂岩	48	28	19	29.9		
5	P90		003	安山岩	51	29	17	(24.4)	欠	
6	P99		001	ホルンフェルス	51	33	21	49.1	帯痕（片）	
7	P268		001	ホルンフェルス	43	24	8	10.9	欠，帯痕（片）	
8	P289		001	ホルンフェルス	36	34.5	13	24.5	帯痕（片）	
9	P294		001	ホルンフェルス	40	22	11	14.5	帯痕（両）	
10	P350		005	ホルンフェルス	36	18	9	(5.5)	欠	
11	P367		001	ホルンフェルス	35	34	15.6	(21.4)	欠	
12	P428		001	砂岩	40	28	15	24.2		
13	P454		001	砂岩	71	39	18	81.4		143
14	P546		001	砂岩	55	26	8	19.7		
15	P563		001	ひん岩	38	28	12	(15.9)	欠，帯痕（両）	
16	P580		001	砂岩	54	40	19	(62.2)	欠，帯痕（片）	
17	P593		001	砂岩	47	26	14	24.7	片溝	
18	P611		001	ホルンフェルス	44	33	10	(19.7)	欠	
19	P627		001	砂岩	59	25	12	28		
20	P686		001	砂岩	47	26	11	20.1	帯痕（片）	
21	P740		001	ホルンフェルス	50	32	11	28.7		
22	P831		001	砂岩	38	29	20	27.6		
23	P902		001	安山岩	60	40	15	(50.7)	欠	
24	P972		001	砂岩	36	21	12.5	14.8	帯痕（片）	138
25	P987		001	ホルンフェルス	43	32	15	27.7	帯痕（片）	
26	P1195		001	ホルンフェルス	39	32	6	(9.1)	欠，帯痕（片）	
27	SB1 NE		001	砂岩	(20)	(22)	(5.7)	(2.8)	欠	
28	SB1 SF	III	001	安山岩？	49	37	13	20.4	帯痕（片）	12
29	SB1 NE		025	砂岩	45	33	15	32.9	タール	13
30	SB2 SF		002	砂岩	55	31	13	29.6	タール・打欠＋切目	32
31	SB2		059	砂岩	44	18	11	11.3	帯痕（片）タール	31
32	SB2		060	砂岩	36	26	11	14.3	帯痕（片）	30
33	SB2 SF		003	凝灰岩	(23)	(23)	(1.0)	(5.2)	欠・タール	
34	SB2		158	砂岩	48	27	10	19.5	帯痕（片）	33
35	SB3		014	砂岩	39	26	11	14.9		38

第39表　切目石錘計測表(2)

No.	出土区	層位	番号	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	挿図
36	SB4		002	砂岩	58	36	2	37.4	帯痕（片）	89
37	SB4	WV	003	砂岩	42	29	16	27.4	帯痕（片）	85
38	SB4	18-228	001	ホルンフェルス	34	31	11	(16)	欠，帯痕（両）	79
39	SB4	18-117	001	ホルンフェルス	47	33	11	26.2	帯痕（両）	90
40	SB4	19-23	001	ホルンフェルス	14	20	6	(2)	欠	94
41	SB4	19-220	001	砂岩	54	26	13	28		92
42	SB4	19-280	001	砂岩	35	24	13	15.6	帯痕（両）	78
43	SB4 E		035	砂岩	42	31	10	19.8	帯痕（片）	84
44	SB4 NE		001	ホルンフェルス	30	24	11	(10)	欠	
45	SB4 NW		004	砂岩	36	23	8	10.2	帯痕（片）	
46	SB4 NW		056	ホルンフェルス	35	29	13	18	タール	80
47	SB4 SE		020	砂岩	47	30	15	30.9		91
48	SB4 SE		026	砂岩	65	24	16	39.9	帯痕（両）	93
49	SB4 SE		027	ホルンフェルス	43	24	8	12.6	帯痕（片）タール	82
50	SB4 SE		028	ホルンフェルス	42	24	10	14.6	帯痕（両）	81
51	SB4 SE		029	ホルンフェルス	40	28	8	11.7	欠，帯痕（片）	
52	SB4 SE		030	ひん岩	36	19	14	12.6	帯痕（片）	77
53	SB4 SE		031	ホルンフェルス	50	28	10	21.3	帯痕（片）タール	86
54	SB4 SE		033	砂岩	33	25	8	(7.8)	欠	
55	SB4 SE		045	ホルンフェルス	48	24	8	11.2	欠	
56	SB4 SE		060	砂岩	56	26	12	25.1	帯痕（片）	87
57	SB4 SW		001	泥岩	42	26	8	12.3	帯痕（片）	83
58	SB4 SW		002	砂岩	56	32	20	51.5	タール	88
59	SB4 SW		003	砂岩	48	29	17	(27)	欠	
60	SB4 SW		037	ホルンフェルス	32	17	8	7.1		76
61	SB4 SW		038	ホルンフェルス	38	30	5	(8.3)	欠，帯痕（片）	
62	SB4 SW		048	ホルンフェルス	51	24	8	16.2	欠	
63	SK		003	ホルンフェルス	(30)	(30)	(8.8)	(8.3)	欠	
64	SK1		005	安山岩？	58	44	24	94		
65	SK2		002	砂岩	44	32	10	16.9	帯痕（片）	
66	SK3		003	ホルンフェルス	43	32	15	27		
67	SK5		001	砂岩	(39)	22	10	(10.4)	欠	
68	SK5		002	砂岩	73	33	19	64.5		
69	SK13		001	砂岩	40	32	19	32.1		
70	SK19		005	ホルンフェルス	(50)	(37)	(13.5)	(36.4)	タール・欠	
71	SK24		001	安山岩？	43	34	12	21.1	帯痕（片）	
72	SK28		004	ひん岩	46	23	13	17.1		
73	SK30		001	砂岩	47	26	10	17.9	帯痕（片）タール	
74	SK32		002	ひん岩	40	35	13	26.6		
75	SK37		002	砂岩	72	(50)	25	(119.9)	欠	
76	SK38		001	砂岩	59	36	19	53.6	焼	
77	SK38		002	ホルンフェルス	47	20	9	15		
78	SK38		003	泥岩？	52	29	16	33.7		
79	SK39		002	砂岩	39	31	10	16.9		
80	SK40		003	ホルンフェルス	40	(28)	12	(14.4)	欠	
81	SK41		001	砂岩	51	29	11	26.8	帯痕（片）	
82	SK41		002	泥岩？	49	33	11	24.8	帯痕（両）	142
83	SK42		003	ひん岩	(45)	(28)	(14.6)	(20.9)	欠，帯痕（片）	
84	SK42		035	砂岩	46	30	10	23.1		
85	SK42		036	ホルンフェルス	38	33	13	15.9		
86	SK42		037	砂岩	34	33	9.5	(13.6)	欠	
87	SK42		038	結晶片岩	45	28	11	17.8		
88	SK71		001	砂岩	44	28	14.5	26.9		141
89	SK75		008	ホルンフェルス	61	28.5	16.2	35.9	帯痕（片）	
90	SK76		002	安山岩	38	23	11	13.9		
91	SK83		001	砂岩	53	30	18.5	34.7		
92	SK93		001	砂岩	39	35	12	22	帯痕（片）	
93	SK119		001	砂岩	32	27.5	11	14.6	欠	
94	SK124		002	安山岩	40	24	7	10	帯痕（片）	
95	SK134		001	砂岩	42	29	10	17.7		
96	SK134		002	砂岩	52	21	12.3	22.9		139
97	SK136		001	ホルンフェルス	27	21	6	(3.8)	欠	
98	SK171		001	ホルンフェルス	42	35	13	26	帯痕（両）２溝	140
99	SK180		001	砂岩	47	26	12	21.9		
100	SK213		002	砂岩	49	23	14	22.5	帯痕（両）	
101	SK214		002	ホルンフェルス	35	24	10	6.7	欠	
102	2C	II	039	ホルンフェルス	(41)	(30)	(13.6)	(23.6)	欠	
103	2D	II	003	安山岩？	57	29	20	51.1		
104	2D E		001	ひん岩	(61)	(48)	(22.8)	(93.8)	欠	
105	2E		002	砂岩	(64)	(26)	(12.8)	(36.1)	欠	

第40表　切目石錘計測表(3)

No.	出土区	層位	番号	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	挿図
106	2I N		001	ホルンフェルス	59	25	17	38.7		
107	2M		001	砂岩	42	24	12	17.4		
108	3H	III	015	ホルンフェルス	51	27	13	26.2		
109	3H	II	061	砂岩	51	34	19	46.4	帯痕（片）	
110	3I N		001	砂岩	43	31	10	19		
111	3K	III	015	砂岩	41	24	12	17.9		
112	3M		002	砂岩	(60)	(30)	(14.8)	(34.8)	欠	
113	3M		003	ホルンフェルス	(52)	(27)	(9.8)	(18.6)	欠	
114	3M		014	ホルンフェルス	(33)	(29)	(3.5)	(5)	欠	
115	4D		001	ホルンフェルス	75	40	21	92.1	帯痕（片）	
116	4D		002	ひん岩	(58)	(13)	(10.8)	(8.9)	欠	
117	4D 杭		002	ホルンフェルス	31	21	14	12.9		
118	4E SX		001	砂岩？	53	43	18	64.2		
119	4E	I	001	砂岩	(51)	(23)	(14.8)	(21.4)	欠	
120	4E	III	002	砂岩	46	36	24	57.1		
121	4E	III	003	砂岩	67	43	25	108.5		288
122	4E	III	029	砂岩	67	37	15	61.7		
123	4E	III	033	砂岩	43	25	13	21.3	帯痕（片）	
124	4H	I	002	凝灰岩	74	44	16	87.9	帯痕（片）	
125	4H	I	003	砂岩？	47	27	17	31.9		
126	4H	I	004	ひん岩	71	34	13	52.9		
127	4H		004	結晶片岩	63	32	15	43.2		
128	4H	III	005	ホルンフェルス	55	35	13	38.4		
129	4H	I	005	ホルンフェルス	58	42	19	79.8		
130	4H	III	006	ホルンフェルス	85	40	11	72.1		
131	4H	II	020	砂岩	48	35	22	51.8		
132	4H	III	034	砂岩	40	17	7	7.5	帯痕（両）タール	
133	4J	III	001	ホルンフェルス	56	39	16	47		
134	4M	IV	005	砂岩	46	23	11	19		
135	5E		011	砂岩	45	27	13	27.2		
136	5E	III	028	砂岩	53	35	12	32.2	帯痕（片）タール	
137	5E	III	029	砂岩	46	25	12	18.2		
138	5E S		008	安山岩	(69)	(45)	(23.4)	(92.6)	欠	
139	5F		001	砂岩	46	27	9	17.9		
140	5F		002	砂岩	45	25	14	23.2		
141	5F	II	003	砂岩	55	48	30	101		
142	5F		003	ホルンフェルス	51	23	14	25.4		
143	5F	IV	005	砂岩	(48)	(30)	(8.8)	(18.6)	欠	
144	5G	I	004	砂岩	45	28	13	25	焼	
145	5G	I	006	ホルンフェルス	51	35	17	47.8		
146	5I	III	001	砂岩	58	34	11	30.3		
147	5I	III	002	砂岩	58	26	13	30.5		
148	5I	III	003	砂岩	56	29	14	33.8		
149	5I	III	004	砂岩	50	23	15	24.6	帯痕（片）	
150	5I	I	037	ホルンフェルス	(39)	(18)	(11.1)	(11.8)	欠	
151	5L	III	011	砂岩	53	31	7	16.8		
152	5M	III	001	砂岩	60	25	10	20.5		
153	5M	II	003	砂岩	57	17	11	13.2		
154	5M SZ	II	007	砂岩	39	26	10	17.1	帯痕（片）	
155	5M	III	014	ホルンフェルス	45	27	11	18.1		
156	5M	III	016	砂岩	49	33	11	29.5		
157	5M	III	019	砂岩	(29)	(13)	(6.4)	(3.1)	欠	
158	5N	I	020	砂岩	(29)	(15)	(7.8)	(4.7)	欠	
159	5N	I	037	ひん岩	37	22	13	16.2		
160	5N	I	034	泥岩？	48	44	17	46.7		
161	5N	I	035	砂岩	40	27	9	14.7	帯痕（片）	
162	5N	II	085	砂岩	(37)	(26)	(9.3)	(12.5)	欠・焼	
163	5N	II	086	砂岩	36	23	11	12.7		
164	5N	II	134	砂岩	(41)	(18)	(9.2)	(7.1)	欠	
165	5N	II	166	砂岩	(52)	(19)	(14.4)	(21.7)	欠	
166	5N	II	238	ホルンフェルス	36	25	8	10.9	帯痕（片）	
167	5N	II	239	砂岩	46	20	14	18.3		
168	5N	II	240	砂岩	52	31	14	32.6		
169	6E	III	025	砂岩	45	40	23	54.9	焼	
170	6F	II	001	砂岩	59	53	26	127.9	帯痕（片）	
171	6J	II	003	砂岩	44	32	12	23.8	欠	
172	6L	III	003	溶結凝灰岩	32	31	9	10.8	欠	
173	6L	III	037	砂岩	50	34	21	52.6		
174	6L	III	038	砂岩	61	20	12	24.2	タール	
175	6L	III	039	砂岩	38	26	8	11.6	タール	

第41表　切目石錘計測表(4)

No.	出土区	層位	番号	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	挿図
176	6L	III	040	砂岩	30	33	12	14.9	欠・タール	
177	6L N		001	砂岩	45	30	15	30.9		
178	6M	II	040	砂岩	63	38	22	77.4		
179	6M	II	041	砂岩	61	26	15	35.7	タール	
180	6N	II	002	砂岩	46	26	11	21	帯痕（両）タール	
181	6N	I	002	砂岩	37	31	11	16.9	帯痕（片）焼	
182	6N	I	004	砂岩	38	26	10	14.8	帯痕（片）	
183	6N	II	027	泥岩？	36	19	7	7.2	欠	
184	6N	II	042	泥岩？	44	28	10	18.6		
185	7	III	034	ホルンフェルス	23	10	5	(8.1)	欠	
186	7	III	035	結晶片岩	58	31	15	33		
187	7	III	036	ホルンフェルス	(28)	(16)	(11.1)	(4.5)	欠	
188	7	III	037	砂岩	47	23	11	16.1		
189	7	III	039	砂岩	42	35	13	26.7	帯痕（片）	
190	7	III	043	砂岩	30	26	15	(14.6)	欠	
191	7E	I	001	ホルンフェルス	44	26	10	15.9		
192	7E	III	001	ホルンフェルス	52	25	11	19.2	帯痕（片）タール	
193	7E		002	砂岩	44	24	11	(13.1)	欠，帯痕（片）	
194	7E	I	002	砂岩	56	23	8	17.6	帯痕（片）	
195	7E		003	ホルンフェルス	30	24	6	(6.1)	欠・タール	
196	7E	II	012	砂岩	58	51	22	93		
197	7E	II	013	ホルンフェルス	47	39	16	42.2	タール	
198	7E	II	014	ホルンフェルス	56	30	9	24.7		
199	7E	III	015	砂岩	46	36	11	28.8		
200	7E	II	017	砂岩	46	32	16	34.5	３ヵ所切目	
201	7E	III	018	砂岩	38	25	10	14.7		
202	7E	II	019	ホルンフェルス	44	21	6	(8.1)	欠，帯痕（両）	
203	7E	III	019	砂岩	35	22	11	12		
204	7E	III	020	砂岩	51	27	12	23.4		
205	7E	III	021	砂岩	68	29	11	(30.4)	欠	
206	7E	III	024	砂岩	41	29	10	15.8	帯痕（片）タール	
207	7E		029	ホルンフェルス	55	50	18	64.5	帯痕（片）タール	
208	7E		030	砂岩	43	32	10	20.4		
209	7E	III	031	ホルンフェルス	39	24	14	19.6	帯痕（両）タール	
210	7E	III	037	ホルンフェルス	42	30	11	21.5	帯痕（両）	
211	7E S		008	ホルンフェルス	46	32	12	27.6	タール	
212	7E S		033	ホルンフェルス	41	38	19	(35.4)	欠	
213	7E S		034	ホルンフェルス	36	27	12	(14.6)	欠	
214	7F	III	026	砂岩	51	29	12	25		
215	7F 杭		001	砂岩	44	21	11	15.2		
216	7K	III	001	砂岩	66	45	28	122.3	焼	
217	7K	III	004	砂岩	41	28	13	20.2		
218	7L	III	010	砂岩	40	33	10	18.7		
219	7L	I	025	砂岩	57	22	8	16.2	帯痕（片）	
220	7L	I	024	砂岩	(42)	(25)	(9.4)	(10.6)	欠	
221	7M P	III	001	砂岩	61	28	18	45.9		
222	7M	III	004	砂岩	39	24	10	12.7		
223	7M	III	020	ホルンフェルス	(20)	(16)	(7.1)	(2.1)	欠	
224	8E	I	003	砂岩	38	31	9	17.3	焼	
225	8E	III	004	砂岩	55	43	10	64.6		
226	8E	III	006	砂岩	48	31	15	31.6		
227	8E	III	007	砂岩	50	44	20	57.3		
228	8E	III	008	砂岩	(45)	(26)	(11.5)	(16.7)	欠	
229	8E	III	009	ホルンフェルス	(55)	(39)	(19.1)	(40.9)	欠	
230	8E	III	010	砂岩	(43)	(22)	(11.2)	(14.1)	欠	
231	8E	III	012	ホルンフェルス	(50)	(21)	(16.8)	(23.3)	欠	
232	8E	III	041	砂岩	63	25	18	40.7		
233	8E	III	048	砂岩	42	26	11	19.1		
234	8E	III	057	ホルンフェルス	44	30	10	19.4	焼	
235	8E	III	058	砂岩	44	24	11	20.6		
236	8E	III	059	ホルンフェルス	(57)	(19)	(6.5)	(10.3)	欠	
237	8E W		001	砂岩	48	32	18	38.7		
238	8F	IV	012	砂岩	59	38	4	46.7		
239	8F	IV	013	砂岩	53	29	13	27.6		
240	8F A		033	砂岩	44	29	12	22.5	帯痕（片）	
241	8F 杭		002	砂岩	67	39	15	54.2		
242	8H SX		001	ホルンフェルス	47	29	13	24.3		
243	8H SX		003	砂岩	47	25	12	20.8	帯痕（片）	
244	8I	II	001	流紋岩	37	25	8	9.9		
245	8I	III	002	ホルンフェルス	42	28	16	29.2	帯痕（両）	

第42表　切目石錘計測表(5)

No.	出土区	層位	番号	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	挿図
246	8I N		001	砂岩	65	43	21	80.7		
247	8K	III	002	砂岩	53	40	13	39		
248	8K	III	003	砂岩	44	26	12	17.9	帯痕（片）	
249	8L		001	砂岩	63	42	23	87.7		
250	8L		002	砂岩	41	28	15	23.5	帯痕（片）	
251	8L		003	ホルンフェルス	77	38	17	65.1		
252	8L		017	砂岩	63	30	11	31.3	帯痕（片）	
253	8L E		002	砂岩	43	23	11	16.4		
254	9E		001	ホルンフェルス	48	37	11	27.2	タール	
255	9E		002	ホルンフェルス	47	24	12	20.5		
256	9E		003	ホルンフェルス	57	20	11	21		
257	9F		001	砂岩	41	24	12	17.9	帯痕（片）タール	
258	9F	I	001	砂岩	35	29	10	14.6		
259	9F 杭		001	砂岩	46	29	18	32.6		
260	9F		002	砂岩	46	38	16	(26.8)	欠・タール	
261	9F	III	038	ホルンフェルス	(34)	(32)	(9.9)	(15.8)	欠・タール	
262	9F	III	057	砂岩	90	47	19	114.3	タール	
263	9F	III	058	砂岩	64	38	16	54.4	帯痕（片）タール	
264	9F	III	098	砂岩	70	51	21	108.2	帯痕（片）タール	
265	9F	III	110	砂岩	39	26	6	11.3	帯痕（片）	
266	9F	III	131	砂岩	39	32	10	17.7	帯痕（片）タール	
267	9F	III	141	ホルンフェルス	49	31	11	(21.1)	欠・タール	
268	9F 埋		044	ホルンフェルス	29	34	15	(14.3)	欠	
269	9F E		001	砂岩	(51)	(38)	(15.8)	(39.1)	欠	
270	9F N		004	砂岩	58	22	15	26.1	タール	
271	9F S	III	001	ひん岩	48	44	20	61.1		
272	9F S	III	002	砂岩	30	16	14	(10.8)	欠・タール	
273	9G E		006	ホルンフェルス	64	23	17	32.5		
274	9H	III	035	ホルンフェルス	41	28	14	23.1	帯痕（片）タール	
275	9H	III	036	ホルンフェルス	35	22	18	19.6	帯痕（片）	
276	9I		001	ホルンフェルス	43	19	5	6.9	帯痕（片）タール	
277	9I	III	001	ホルンフェルス	(30)	(30)	(19.9)	(18.3)	欠	
278	9I W		001	ひん岩	40	30	12	12.9		
279	9J	III	001	ホルンフェルス	36	18	6	6.2	帯痕（両）タール	
280	9K	III	002	砂岩	40	27	8	13.8		
281	9K	III	021	ホルンフェルス	52	31	21	39.4		
282	9K W		001	ホルンフェルス	56	39	14	43.3		
283	10		001	砂岩	62	41	30	96.2	焼	
284	10E	II	003	砂岩	54	46	21	68.7		
285	10E	II	022	砂岩	50	21	10	(14.5)	欠	
286	10E	II	024	砂岩	33	25	7	9.2		
287	10E	III	026	砂岩	27	16	7	(3.6)	欠	
288	10E	III	043	安山岩？	40	27	13	19.3		
289	10E	III	046	砂岩	43	32	14	29.9		
290	10E	II	053	ヒン岩	52	20	19	27.9		
291	10E	II	054	泥岩？	46	30	15	31		
292	10E	III	068	砂岩	45	32	17	33.8		
293	10E	III	095	ホルンフェルス	45	23	13	21.9	帯痕（片）	
294	10E	III	096	砂岩	60	33	27	64.8		
295	10E	III	097	砂岩	51	39	15	39.1	タール	
296	10E	III	106	ヒン岩	43	26	11	15.6	タール	
297	10E S		047	ホルンフェルス	62	49	20	68.2		
298	10E S		048	砂岩	57	38	15	46.9	タール	
299	10E S		049	砂岩	50	43	17	52.8		
300	10E S		050	砂岩？	60	29	14	39.5		
301	10E S		051	砂岩	88	33	21	96.3	タール	289
302	10G	III	021	砂岩	50	30	17	36.5		
303	10F	III	036	砂岩	41	17	12	(9.8)	欠	
304	10H	III	001	砂岩	46	35	14	32.6		
305	10H	III	002	砂岩	43	27	12	22.6	帯痕（片）	
306	10H	III	053	砂岩	37	28	19	28.3		
307	10H	III	056	砂岩	46	29	13	26.9		
308	10H	III	059	砂岩	46	26	12	22.5		
309	10I	III	004	砂岩	47	35	11	27.9		
310	10J	III	001	砂岩	45	19	11	(13.6)	欠，帯痕（両）	
311	10K A		004	ホルンフェルス	40	25	10	16.4		
312	10L	II	006	ホルンフェルス	49	21	15	27.6	欠	
313	10L	II	007	砂岩？	37	29	11	15.6	タール	
314	10L	II	034	ホルンフェルス	43	25	8	14.4	帯痕（片）	
315	10M	III	002	砂岩	42	22	11	(13)	欠，焼，帯痕（片）	

第43表　切目石錘計測表(6)

No.	出土区	層位	番号	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	挿図
316	10M	I	002	砂岩	48	33	9	22.7		
317	10M	II	030	砂岩	51	38	8	21	帯痕（片）	
318	10M	II	031	砂岩	38	18	9	8	焼，帯痕（両）	
319	11F	III	002	ホルンフェルス	41	30	7	14.1	帯痕（両）	
320	11F	III	003	砂岩	45	29	16	27.2	打欠＋切目	
321	11F	III	024	砂岩	41	26	12	18.9	打欠＋切目	
322	11F	III	025	砂岩	50	33	16	33.1	タール	
323	11F	III	026	ホルンフェルス	(30)	(25)	(10.5)	(10.3)	欠	
324	11F	III	027	ホルンフェルス	(30)	(27)	(11.4)	(13.5)	欠・タール	
325	11H	I	010	安山岩	43	31	10	21.6		
326	11H	II	065	ホルンフェルス	35	22	8	9.5		
327	11K	III	002	砂岩	42	28	14	23.4		
328	11K		003	ホルンフェルス	39	22	7	8.9		
329	11L	III	002	ホルンフェルス	51	35	12	34.5		
330	11L	III	003	砂岩	(48)	(37)	(10.9)	(27.1)	欠，帯痕（片）	
331	11L	III	004	砂岩	49	20	9	15.6	帯痕（両）タール	
332	11M	III	001	砂岩	35	24	10	13.4	タール	
333	12		002	安山岩	40	30	10	12.8	タール	
334	12H	I	001	砂岩	60	44	15	52.5		
335	12L N		001	ホルンフェルス	45	29	12	21.9		
336	12M		001	砂岩	40	27	11	17.3	帯痕（両）	
337	12M N		003	ホルンフェルス	(40)	(18)	(10.5)	(10.7)	欠	
338	13I	III	011	砂岩	72	59	17	112.9		287
339	13KWSK		002	れき岩？	44	33	15	32		
340	13L	II	011	砂岩	42	28	8	13.6		
341	13L A		005	安山岩？	47	30	13	24		
342	13M	II	002	砂岩	43	32	16	31.7		
343	13M	II	003	砂岩	48	39	13	33.6	焼	
344	13M	II	004	砂岩	43	37	13	27.3		
345	14J	III	001	砂岩	(53)	(25)	(19.3)	(35)	欠	
346	14～16L	I	001	砂岩	(52)	(18)	(8.8)	(12)	欠，帯痕（片）	
347	14～16L	III	002	砂岩	73	31	15	48.7	帯痕（片）	
348	17P	I	001	ホルンフェルス	62	37	12	43.4	帯痕（片）	
349	排土		001	砂岩	53	27	12	28.1		
350	排土		002	砂岩	78	38	24	111.8		
351	排土		003	砂岩	44	35	12	27.9		
352	排土		004	ホルンフェルス	(43)	(34)	(16.4)	(38.1)	欠	
353	排土		005	砂岩	(41)	(7)	(11.6)	(6)	欠	
354	排土		006	安山岩	49	35	16.5	(34)	欠	
355	排土		007	ホルンフェルス	50	25	7	(9.7)	欠	
356	9G 杭	NO15	001	砂岩	52	38	16	44	帯痕（片）	

第44表　凹・磨・敲石類計測表(1)

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	凹部分類 表	凹部分類 裏	磨面・叩痕 a b c d e f	分類	挿図	備考
1	7E	－	053	安山岩	(40)	77	45	(231)	?	?				
2	10E	II	050	安山岩	116	(71)	72	(893)	Ia	Ia				
3	10L	II	031	砂岩	82	68	48	377	Ia	Ia				
4	10M	－	002	閃緑岩	82	67	50	424	Ia	Ia				
5	12L	III	011	砂岩	64	60	29	151	Ia					欠損
6	13N	II	001	れき岩	100	65	60	592	Ia	Ib				
7	4C	－	017	安山岩	94	88	40	490	Ia	Ia			342	
8	4G	－	002	砂岩	92	89	79	884	Ia					
9	4G N	－	014	安山岩	111	103	40	611	Ia	Ia'				
10	5G	II	033	砂岩	91	62	42	(297)	Ia					
11	5G	II	032	砂岩	71	65	49	286	Ia					
12	5K	II	001	安山岩	95	78	51	433	Ia					
13	5L	II	036	れき岩	122	109	84	(1504)	Ia					
14	5L	II	031	安山岩	83	79	65	596	Ia	IIIb				
15	6I	III	001	砂岩	74	73	41	300	Ia	Ia'				
16	6M	II	001	れき岩	103	68	54	569	Ia	?				
17	7J	III	001	砂岩	90	85	51	(503)	Ia	?				
18	7L	II	020	砂岩	104	92	62	814	Ia	Ie				
19	8L	II	001	れき岩	103	88	49	647	Ia	Ic				
20	SK24	－	002	砂岩	79	66	47	341	Ia	Ia				
21	11JA	－	004	砂岩	86	71	49	401	Ia					
22	10M	II	029	ひん岩	(68)	76	37	(311)	Ib					欠損
23	9G E		001	砂岩	(106)	60	46	(489)	Ib					
24	SB4 SW	－	047	安山岩	108	93	81	1000	Ib					
25	10H	III	031	れき岩	90	75	50	(476)	Ic	IIIe				
26	2E N		002	ひん岩	111	54	43	360	Ic	Ie				
27	4C	III	072	閃緑岩	115	100	53	(926)	Ic	Ia				全面

第45表　凹・磨・敲石類計測表(2)

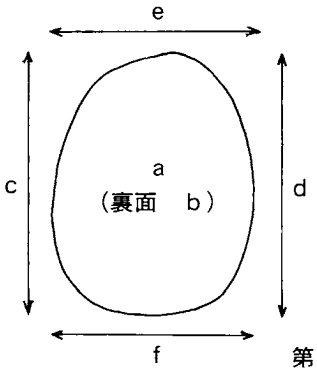
No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	凹部分類 表	凹部分類 裏	磨面・叩痕 a	b	c	d	e	f	分類	挿図	備考
28	6L	III	001	凝灰岩	105	70	59	618	Ic	IIIb									
29	6L	II	001	砂岩	97	79	50	530	Ic	Ia									
30	8F A	—	032	閃緑岩	101	84	44	622	Ic	Ic									
31	P535		001	閃緑岩	89	75	47	507	Ic	Ib									
32	SB3	—	009	砂岩	94	61	33	280	Ic	Ic								39	
33	SB4 19-	102	001	ひん岩	89	82	53	500	Ic	Ib								101	
34	5M	III	034	砂岩	120	75	45	564	Id									369	
35	5K	III	002	砂岩	104	86	34	453	Ie	Ic									
36	7E	—	065	安山岩	114	81	40	536	Ie	Ic									欠損
37	12J	I	001	砂岩	78	57	24	172	IIa	IIa									
38	13L	I	025	砂岩	83	78	39	334	IIa										
39	2D	II	002	砂岩	55	49	39	127	IIa									348	
40	3L	III	001	砂岩	99	70	27	230	IIa										
41	5E S	—	006	砂岩	72	67	37	216	IIa	Ia									
42	5E W	—	003	安山岩	66	55	39	187	IIa	Ia									
43	6I E	—	001	れき岩	92	83	45	450	IIa	IIb									
44	7E	—	054	砂岩	88	58	47	328	IIa	Ib									
45	8I	II	022	砂岩	81	63	46	333	IIa	Ia									欠損
46	SK76		001	砂岩	120	88	54	758	IIb	IIb								152	
47	3G	III	001	砂岩	(111)	113	64	(999)	IIc										
48	7E S	—	031	砂岩	89	67	47	390	IIc	IIa									欠損
49	8H	II	020	砂岩	114	74	53	520	IIc	IId								345	欠損
50	SB1 SW	—	004	砂岩	99	95	64	666	IIc										
51	10G	II	002	砂岩	120	55	41	356	IId									351	欠損
52	7D	II	022	れき岩	113	67	49	496	IId	?									
53	4E	II	006	砂岩	98	87	46	514	IIe	IIc									
54	5E	II	020	砂岩	85	68	50	405	IIIb	Ib								344	欠損
55	9H	III	046	ひん岩	90	75	58	(593)	IIIb	IIIb									
56	1K	III	001	閃緑岩	108	98	42	677	IIIc									354	
57	5N	II	169	安山岩	108	92	59	927	IIIc	Ia									
58	排土		001	砂岩	78	66	56	370	IIIc	Ic									欠損
59	13J	II	001	安山岩	109	98	71	1089	IIId	IIIe								353	
60	3F	III	001	砂岩	104	87	53	641	IIId	IIId									
61	13KWSB	—	001	砂岩	93	67	39	320	IIc	IIc								349	
62	12I	III	017	砂岩	94	60	33	297	Ia	Ia									被熱
63	9F 埋	—	016	安山岩	88	74	50	504	Ia	Ia									
64	10E	II	052	安山岩	108	(70)	48	(519)	Ic	IIIc									
65	6M	III	044	れき岩	100	66	71	608			1	1					1a		被熱
66	5E W		006	砂岩	(108)	(65)	76	(877)			1	?					1a		
67	7Q	II	029	砂岩	74	63	41	262			1	1					1a		
68	SB4		008	安山岩	116	87	53	820			1	1					1a	103	欠損
69	4E	III	019	閃緑岩	115	85	58	964	Ia		1	1					1a		欠損、被熱
70	4G E	—	001	れき岩	(68)	63	26	(151)	Ia		1	1					1a		欠損
71	SK138		001	砂岩	65	64	50	282	Ia		1						1a	151	欠損、被熱
72	6J	II	033	安山岩	127	84	60	1212			1	1	1	1			1a1c		欠損
73	8I	III	008	砂岩	(88)	82	(41)	(571)	Ia		1		1	1			1a1c		
74	3F	I	001	安山岩	119	97	64	1275			3	1	1				1a1c3a	386	被熱
75	7L	III	001	閃緑岩	113	79	57	940	Ia				1	1	A		1a1c叩		
76	10L	II	030	安山岩	63	59	62	395			1	1	1	1	1		1a1f		
77	5E	III	005	砂岩	(109)	88	42	(624)			1	1	2	2	2	2	1a2f	389	
78	9F	III	123	砂岩	(109)	(56)	(53)	(406)			1		2	2	2	?	1a2f		
79	3J 杭	—	001	砂岩	97	94	43	612	Ia	Ia	1	1			C		1a敲	358	
80	2D	II	001	砂岩	95	77	51	557	Ic	Ie	1	1			C		1a敲	368	
81	11F	III	001	安山岩	141	88	56	1154					1				1c		
82	4F		001	安山岩	93	83	54	619					1				1c		
83	5E	III	002	れき岩	(109)	(94)	(67)	(811)					1	1			1c		欠損
84	5M	III	050	れき岩	89	66	58	478					1	1			1c		
85	6E	II	016	砂岩	163	92	64	1401					1	1			1c		
86	6M	III	045	砂岩	113	80	60	883					1				1c		欠損
87	9F	III	125	安山岩	105	60	58	641					1				1c		
88	5K	III	001	砂岩	113	93	67	974					1				1c		欠損
89	2E N		003	閃緑岩	84	69	44	331	Ia	Ia			1	1			1c		
90	SB4	P36	005	砂岩	110	87	45	634	Ia	Ia			1	1			1c	102	被熱
91	6M N		003	れき岩	116	71	65	737	Ib				1	1			1c		被熱
92	7E S	—	066	安山岩	147	(67)	56	(795)	Id				1				1c		
93	7M	III	046	砂岩	143	97	69	1165	IIId				1	1			1c		
94	7K N	—	001	安山岩	(135)	93	55	(787)	I?		2	2	1	1			1c2a		
95	SK75		010	砂岩	115	90	55	737	Id		2	2	1				1c2a	147	
96	10G	I	001	砂岩	121	85	53	784	IIId	IIId	2		1				1c2a	372	欠損

第46表　凹・磨・敲石類計測表(3)

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	凹部分類 表	凹部分類 裏	磨面・叩痕 a	b	c	d	e	f	分類	挿図	備考
97	排土			安山岩	145	66	56	1097	Ⅰa	Ⅰa	2		1	3	A	A	1c2a3c叩	377	
98	14-16L	Ⅱ	002	ひん岩	95	67	41	376	Ⅰb	Ⅰb	3		1	1			1c3a		
99	14-16L	Ⅱ	007	砂岩	168	75	55	1149	Ⅰd				1	3			1c3c	376	
100	6M	Ⅲ	046	閃緑岩	153	111	75	2196					1			A	1c叩	394	
101	10E	Ⅱ	051	安山岩	128	108	94	2082	Ⅳa	Ⅳa			1	1	A	A	1c叩	370	
102	12H	Ⅲ	007	れき岩	113	87	56	803				111					1e	391	
103	6E	Ⅱ	011	砂岩	73	67	43	261				11	1	1			1e		
104	6J	Ⅱ	032	砂岩	94	83	66	687				11	1'				1e		
105	6G	Ⅱ	001	砂岩	86	83	51	588	Ⅰa	Ⅰa	2	2	1	1	1	1	1f2a	357	赤色顔料付着
106	10E	Ⅲ	108	ひん岩	94	90	42	612			2	2					2a	384	
107	12J E		002	砂岩	72	71	60	426			2	2					2a		
108	3J	Ⅱ	001	閃緑岩	115	91	50	849			2						2a	383	
109	3K	Ⅲ	012	砂岩	98	81	70	764			2	2					2a		欠損
110	3K	Ⅲ	011	砂岩	107	99	62	959			2	2					2a	385	
111	4C		001	砂岩	102	90	56	739			2	2					2a		
112	4E	Ⅲ	030	れき岩	104	92	40	582			2	2					2a		欠損
113	7E		056	砂岩	70	68	26	181			2	2					2a		
114	7E		056	ひん岩	70	68	26	183			2	2					2a	381	欠損
115	9F	Ⅲ	129	安山岩	94	90	50	610			2	2					2a	382	
116	9H	Ⅲ	047	ひん岩	118	103	54	1054			2	2					2a		
117	P414		001	ひん岩	117	100	51	955			2	2					2a	150	
118	SB2 S		001	安山岩	102	98	49	712			2	2					2a	34	石皿？
119	SB4 S	Ⅳ	001	砂岩	102	92	50	656			2						2a	104	欠損
120	2E N		001	ひん岩	105	66	45	510	Ⅰ？			2					2a		
121	2D	Ⅱ	001	砂岩	83	73	71	416	Ⅰa	Ⅰa'	2						2a	360	
122	4H	Ⅲ	016	砂岩	94	80	46	495	Ⅰa			2					2a		
123	4G	—	001	砂岩	87	70	52	427	Ⅰb	Ⅰb	2	2					2a		
124	5F	Ⅱ	001	安山岩	114	93	60	1011	Ⅰb	Ⅰb	1						2a	364	
125	6N	Ⅰ	001	安山岩	114	64	35	412	Ⅰc	Ⅰa	2	2					2a		
126	8E	Ⅲ	002	砂岩	117	84	55	(740)	Ⅰc	Ⅰc	2						2a		
127	7E	—	055	砂岩	119	70	37	436	Ⅰd	Ⅰb	2						2a		
128	7Q	—	028	ひん岩	110	86	50	691	Ⅰe	Ⅲb	2	2					2a		
129	7E	Ⅲ	015	砂岩	89	83	53	498	Ⅱa	Ⅰa	2						2a		
130	9H	Ⅲ	017	ひん岩	130	96	44	968	Ⅱa	Ⅰa							2a		
131	10E	Ⅲ	044	砂岩	87	70	41	361	Ⅱb		2	2					2a		
132	5E S	—	005	砂岩	86	63	41	304	Ⅱb			2					2a		
133	11I	Ⅱ	044	砂岩	102	91	50	641	Ⅱc	Ⅰa	2						2a	359	
134	6M	Ⅲ	043	砂岩	108	89	46	579	Ⅱc		2						2a		被熱
135	P767		001	ひん岩	160	62	45	700	Ⅱc	Ⅰd		2				A	2a	146	
136	7L	Ⅱ	017	砂岩	(99)	66	33	(278)	Ⅱd	Ⅰc	2						2a		欠損、被熱
137	4H	Ⅰ	013	れき岩	(92)	109	40	(620)	Ⅲa			2					2a		
138	3E	Ⅲ	005	安山岩	101	74	61	709	Ⅲb	Ⅰb	2	2					2a		
139	12J E	—	001	砂岩	112	86	60	765	Ⅲd	Ⅰd		2					2a	363	
140	10H N		002	ひん岩	134	89	65	1145			2	2	2				2a2c		
141	8I	Ⅱ	021	閃緑岩	(93)	61	59	(549)			2	2	2	2			2a2c		
142	9H	Ⅲ	045	砂岩	86	77	53	538			2	2	2				2a2c		
143	SB3		012	砂岩	147	82	38	916			2		2				2a2c	41	
144	10G	Ⅲ	003	砂岩	77	61	48	301			2		2				2a2c		欠損
145	10M	Ⅱ	025	砂岩	215	78	57	1300			2					A	2a叩	375	
146	2G	Ⅲ	001	砂岩	103	45	24	170			2					A	2a叩	379	
147	SB3		011	砂岩	(119)	63	52	(547)			2					A	2a叩	40	欠損
148	7E	Ⅱ	044	閃緑岩	173	90	66	1667	Ⅰa		2	2	A	A	A	A	2a叩	374	
149	10L	Ⅱ	033	ひん岩	113	62	34	439	Ⅰb		2				A		2a叩		
150	12K N	—	001	れき岩	100	(71)	55	(593)	Ⅰb		2'	2			A	A	2a叩		
151	5F	—	002	安山岩	107	87	40	575	Ⅰb			2	A	A			2a叩		
152	7L	Ⅱ	035	砂岩	144	83	55	909	Ⅰe			2			A	A	2a叩		欠損
153	6M	Ⅲ	042	砂岩	(89)	73	43	(397)	Ⅱc	Ⅱc	2				A	A	2a叩	362	
154	3K	Ⅲ	010	砂岩	120	65	41	466	Ⅱd		2				A		2a叩	352	
155	3E	Ⅰ	001	砂岩	111	75	54	673	Ⅲb		2	2	A		A	A	2a叩		
156	4G	Ⅲ	001	砂岩	92	80	45	452	Ⅰe	Ⅰa	2				C	C	2a敲	365	
157	3E	Ⅲ	004	砂岩	112	51	50	769	Ⅲd		2	2			C	C	2a敲	347	欠損、被熱
158	13L	Ⅱ	012	砂岩	77	63	59	354			2'	2'					2b		
159	3F	Ⅰ	003	砂岩	126	99	61	997			2'						2b		
160	3J	Ⅱ	002	砂岩	129	84	60	885			2'	2'					2b		
161	6E	Ⅲ	002	安山岩	115	88	59	928			2'						2b		
162	7M	Ⅱ	041	砂岩	92	71	63	597			2'	2'					2b		被熱
163	9F	Ⅲ	130	安山岩	101	82	67	797			2'	2'					2b		
164	10M	Ⅱ	028	れき岩	106	96	37	(547)	Ⅰa	Ⅰa	2'						2b	366	
165	7L	Ⅱ	018	砂岩	98	58	49	(442)	Ⅰa	Ⅰa	2'	2'					2b		

第47表　凹・磨・敲石類計測表(4)

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	凹部分類 表	凹部分類 裏	磨面・叩痕 a	b	c	d	e	f	分類	挿図	備考
166	SB4	P11	007	れき岩	132	97	45	814	Ⅰa	Ⅰb	2'						2b	105	欠損
167	10H N		001	砂岩	109	72	43	461	Ⅰb	Ⅰb	2'	2'	2'				2b	388	
168	10I	Ⅲ	003	砂岩	117	99	49	780	Ⅰb		2						2b		
169	8L	Ⅱ	002	砂岩	101	71	37	346	Ⅰb			2'					2b		
170	7M	Ⅱ	002	れき岩	92	78	64	575	Ⅰc	Ⅰa		2'					2b		被熱
171	8L	－	018	砂岩	108	97	51	766	Ⅰc	Ⅰd	2'						2b		
172	6J	Ⅱ	028	閃緑岩	124	98	40	880	Ⅰd	Ⅱc	2						2b		
173	7L	Ⅱ	037	砂岩	93	91	50	617	Ⅰb	Ⅰb	2'	2'					2b		欠損
174	11L	Ⅱ	001	砂岩	109	76	52	(571)	Ⅱa	Ⅰa		2'					2b		欠損
175	4F A		015	砂岩	82	82	60	516			2'				A		2b叩		
176	4G	Ⅱ	009	安山岩	89	87	55	683			1'				A		2b叩		
177	5G	Ⅱ	034	砂岩	84	72	46	371	Ⅰa			2'			A	A	2b叩		
178	6G	Ⅱ	002	砂岩	89	75	46	360	Ⅰa		2'			C			2b敲	367	欠損
179	3N	Ⅲ	001	安山岩	89	61	56	442					2				2c		
180	8H	Ⅲ	001	砂岩	106	95	70	990					2'	2'			2c		
181	10I	Ⅰ	001	砂岩	(87)	79	40	(348)	Ⅰ?				2				2c		
182	9F	Ⅱ	083	砂岩	135	81	53	779	Ⅰa	Ⅰa			2				2c		欠損、被熱
183	5E	Ⅱ	021	溶結凝灰岩	77	66	50	372			2	2	2	2	2	2	2d	387	被熱
184	5L	Ⅲ	013	砂岩	113	96	66	1071	Ⅲb		2	2	2	2	2	2	2d	371	
185	4C		016	砂岩	98	70	63	557			3						3a		
186	4H	Ⅰ	014	れき岩	128	78	62	883					3				3a		欠損
187	6N	Ⅱ	001	安山岩	114	89	66	904			3						3a		
188	7E	Ⅲ	016	凝灰岩	105	78	54	717			3						3a	393	
189	8I	Ⅱ	020	砂岩	89	78	39	336			3						3a		
190	4M	Ⅳ	006	砂岩	91	76	38	439	Ⅰa			3					3a	361	
191	10F	Ⅱ	001	ひん岩	(141)	58	32	(317)	Ⅱ?	Ⅱ?	3	3					3a	373	
192	5K	Ⅲ	003	砂岩	167	88	70	1427	Ⅲb			3					3a		
193	13K		001	砂岩	110	69	65	718			3		3	1			3a3c		
194	10G	Ⅲ	001	砂岩	128	81	60	970			333		3				3e	392	
195	7I	Ⅱ	044	砂岩	101	69	55	741	Ⅰa			33	3	1	1		3e	390	被熱
196	13L	Ⅲ	011	安山岩	107	71	48	567	Ⅰc		1	3	3	1			3a3c		欠損
197	7Q	Ⅱ	040	安山岩	101	90	78	1085	Ⅳa										
198	SK73		002	閃緑岩	152	134	55	1740	Ⅰ								台石	153	欠損
199	12H	Ⅲ	006	安山岩	143	(110)	80	(1753)	Ⅰa						A		台石？		
200	4H	Ⅱ	022	砂岩	140	131	68	1722	Ⅰa	Ⅰa			A				台石？	355	
201	3G E	－	001	安山岩	129	121	81	1833	Ⅲa								台石？	356	
202	14-16L	Ⅱ	001	砂岩	111	95	42	625							A	A	叩石		
203	3F	Ⅲ	002	砂岩	133	60	45	529							A	AA	叩石	380	
204	3I N		008	砂岩	113	51	26	226								A	叩石	378	
205	4H		004	れき岩	72	52	55	275							A		叩石		
206	5E W		005	れき岩	97	90	63	693					A				叩石		
207	7Q	Ⅱ	030	砂岩	(102)	(59)	(44)	(407)								A	叩石		
208	SB4 S	Ⅴ	003	砂岩	78	62	43	287					A	A	A	A	叩石	100	
209	10H E	－	001	砂岩	70	58	27	151	Ⅰa						A		叩石	340	欠損
210	11J A		001	閃緑岩	87	71	48	460	Ⅰa	Ⅰb						A	叩石		
211	3I	Ⅰ	006	安山岩	90	74	62	599	Ⅰa						A	A	叩石		
212	4E	Ⅲ	001	閃緑岩	114	64	50	644	Ⅰa	Ⅰa			A	A			叩石		
213	6E	Ⅲ	001	安山岩	91	85	53	618	Ⅰa						A		叩石		
214	7L	Ⅲ	009	砂岩	85	70	38	(278)	Ⅰa	Ⅰa					A	A	叩石		
215	8E	Ⅲ	003	砂岩	124	77	50	736	Ⅰa	Ⅰe					A	A	叩石	343	欠損
216	SK26	－	004	安山岩	111	72	47	579	Ⅰa	Ⅰa			A	A	A	A	叩石	148	
217	13J	Ⅱ	003	閃緑岩	86	71	51	479	Ⅰb				A	A			叩石	341	
218	6J	Ⅱ	029	ひん岩	121	71	37	530	Ⅰc	Ⅰd					A	A	叩石		
219	8L N	－	001	れき岩	94	73	45	450	Ⅰc	Ⅰd					A	A	叩石		
220	SK113		002	砂岩	92	77	40	393	Ⅰc						A	A	叩石		
221	10E	Ⅰ	016	砂岩	(81)	63	37	(289)	Ⅰd	Ⅰb			A				叩石		
222	3E	Ⅰ	002	砂岩	106	61	47	424	Ⅱc	Ⅰe					A	A	叩石	346	
223	12G	Ⅱ	019	砂岩	143	64	40	572	Ⅱd						A		叩石	350	欠損
224	2G	－	001	砂岩	98	86	51	633	Ⅲa					B		B	叩石		欠損
225	SK42		023	閃緑岩	100	91	41	597								C	敲石	149	



a・b　：　表面
c・d　：　長軸側面
e・f　：　短軸側面

表裏面の決定は、片面だけに凹み、磨面がある場合はその面をaとした。
両面ある場合は任意で決定した。

第145図　凹石、磨石、敲石類の観察面の位置

第48表　石皿計測表

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	備考
1	SB1		001	砂岩	313	203	104	8550	15	
2	SB1		002	砂岩	422	314	114	20000	16	
3	SB4		044	砂岩	436	363	128	24500	96	
4	SB4	14-11	001	れき岩	(250)	244	54	4950	95	欠損
5	5E	III	001	砂岩	138	102	42	997	400	
6	5H	III	037	砂岩	220	150	46	2794		
7	6L	II	002	安山岩	247	215	72	5795		
8	8I	III	001	安山岩	288	258	76	9600	396	
9	9F埋土		017	砂岩	88	64	26	216	399	
10	9G	III	001	ひん岩	335	310	95	11280		
11	10G	I	002	砂岩	91	91	30	383	398	
12	10G	III	004	砂岩	162	90	26	594	397	
13	10M	II	024	砂岩	365	125	75	4720	395	
14	排土		001	砂岩	146	115	44	938		
15	排土		002	砂岩	127	126	27	742	401	

第49表　砥石計測表

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	備考
1	5I	I	004	ホルンフェルス	167	66	26	292		欠損
2	6I	I	001	安山岩	127	79	39	368		欠損
3	7E	III	045	砂岩	217	133	79	3227		欠損
4	10L	III	029	凝灰岩	185	53	46	560	402	

第50表　石棒計測表

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	備考
1	2C		002	凝灰岩	154	64	55	520	403	折損
2	2E N		004	緑色片岩	86	25	22	102	409	折損
3	3K	III	021	緑色片岩	116	27	26	160	410	折損
4	6E	II	017	硬質頁岩	70	23	19	36.6	408	折損線刻入
5	6G	I	010	安山岩	44	28	11	20		破片
6	9H	II	029	ホルンフェルス	75	31	23	91.5		折損
7	9H		027	凝灰岩	154	85	74	1226		折損
8	P158		001	緑色片岩	60	21	11	18		破片
9	SB1 SW		003	凝灰岩	165	84	82	1339	14	折損

第51表　垂飾類計測表

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	備考
1	1K		001	砂岩	41	42	6	16.7	407	
2	4K	I	003	結晶片岩	32	8.5	6	2.6	404	
3	8E	III	088	メノウ	31	18	7.5	4.9	405	
4	P414		002	ヒスイ	23	14	5	2.3	113	

第52表　石冠計測表

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	備考
1	SK25		001	閃緑岩	71	65	58	308.5	128	

第53表　石刀計測表

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	備考
1	SK26		005	シルト	98	69	10	89	127	

第54表　鈎形石製品計測表

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	備考
1	6N	I	025	砂岩	33.5	10	7	3.4	406	

第55表　円盤状石製品計測表

No.	出土区	層位	番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	挿図	備考
1	6I N		001	砂岩	72	68	20	140	411	

第５章　その他の時代の遺構と遺物

第１節　中近世陶磁器類

戸入村平遺跡出土の中近世陶磁器は、総破片点数2,254を数える。

器種では、碗類・皿類・坏類・鉢類・壷類・甕類・瓶類などが出土している。

製作地は、ほとんどが瀬戸・美濃系の陶磁器で、不明なものを含めて越前系・常滑系も確認されている。中国陶磁（青磁）については、該当する各類の中に記載した。なお、明治時代以降の近現代陶磁器も多数出土したが、割愛する。

遺物の説明の際、出土地区・層位・法量等は省略した。第57表を参照されたい。また、出土遺物に関する挿図・写真図版は、第146～150図・図版53～58とする。

１．碗類　［天目茶碗・丸碗・平碗］　(601～622)

天目茶碗　(601～608)

天目茶碗は、製作時期により下記のように分類した。

Ⅰ類：古瀬戸後期Ⅳ（新）　15Ｃ後半

Ⅱ類：大窯Ⅱ期　16Ｃ半ば

Ⅲ類：大窯Ⅲ期　16Ｃ後半

Ⅰ類　(601) は、体部の形状は、下方はほぼ直線的で立ち上がりは強く、口唇部は短くほぼ直立し、端部は若干外反する。高台は、削り出し輪高台で、高台と高台脇の削り幅は狭い。高台周辺には、錆釉が薄く施されている。(602) は、口唇部は短くほぼ直立し、端部は若干外反する。

Ⅱ類　(603) は、口唇部の長さは短く、やや内傾気味である。端部はやや外反する。(604) は、口唇部と胴部の屈折部がはっきりしており、口唇部はやや内傾し、端部は外反している。内面は端部から緩やかなＳ字を描いている。全体的に器壁は厚めである。

Ⅲ類　(605) は、下方はやや丸みを帯び、立ち上がりは強く、口唇部は直立し、端部はほとんど外反しない。胴部下方は露体である。(606) は、下方はほぼ直線的に開き、口唇部は直立し端部はやや外反する。全面に鉄釉が施されている。(607) は、下方はほぼ直線的に開き、立ち上がりは強く、口唇部はやや外傾し、端部は若干外反する。全面に鉄釉が施されている。(608) は、体部はほぼ直線的に開き、口唇部はやや内傾し、端部は折り返され玉縁状となる。全面に鉄釉が施されている。

丸碗　(609～616)

(609)・(610)・(611) は、下方は丸みを帯び、上方の立ち上がりは強い。胴部下方は露体で

ある。(612) は、高台脇からの立ち上がりは強く、胴部から口縁部まで直線的である。胴部下方から底部外面にかけて露体である。(613)・(614)・(615) は、御室茶碗である。体部下方は丸みを帯び、上方はほぼ直線的にのびる。断面方形の付高台を有し、底部は平坦になる。底部にはヘラ削り調整、高台には指撫で調整が認められる。

(616)は、ルス釉の丸碗である。高台脇が削られており、胴部下方から底部にかけて露体である。

平碗　(617・618)

(617) は、胴部はほぼ直線的に開き、上方においてやや内湾する。端部はやや外反し、高台脇は削られている。胴部下方から底部にかけて露体である。(618) は、端部はやや外反し、胴部上位でＳ字を呈している。内面は全面施釉であり、外面は胴部下半のみ露体である。

その他

(619) は、青磁碗である。胴部外面に、線描蓮弁文が施されている。

(620) は、塗り分け碗である。胴部中央から急激に立ち上がり、端部はやや内湾する。胴部外側の中央に横位の数条の沈線が入る。底部付近の器壁は厚く、付高台の断面は台形である。胴部外面中央から口縁端部および内面にかけて灰釉、胴部外面中央から底部にかけては鉄釉が施されている。

(621) は、煎茶碗である。胴部には菊花つなぎの呉須絵が描かれている。

(622)は、広東茶碗である。胴部には渦巻きと四角をモチーフにした呉須絵が描かれており、口縁部内面に横線が施されている。

２．皿類　(縁釉小皿・丸皿・腰折皿・端反皿・折縁皿・菊皿・灯明受皿・おろし皿)

(623～643)

縁釉小皿　(623)

深形で、体部下方に丸みがかかっている。上方の立ち上がりは強く直立しており、全体的に器壁は薄手である。口縁部周辺に灰釉が施されている。

丸皿　(624～629)

(624)は、削り込み高台で、口縁部が緩やかに外反する。全面に灰釉が施されている。(625) は、体部はやや内湾気味だが、立ち上がりは低く平底である。口縁部外面から底部内面にかけて灰釉が施されている。(626) は、口縁端部がやや外反し、体部はやや丸みを帯びながら立ち上がる。付高台で、胴部外面中央から底部内面にかけて露体である。(627) は、削り込み高台で、口縁部が緩やかに外反する。胴部中央から底部外面にかけて露体である。(628) は、付高台で、高台は低く小さい。口縁端部がやや外反する。(629) は、胴部は丸みを帯びながら立ち上がる。付高台で、内面および口縁部周辺に灰釉が施されている。

腰折皿　(630)

削り出し高台で、胴部中央から強く外反する。内面および口縁部周辺に灰釉が施されている。

端反皿　(631・632)

(631) は、立ち上がりが強く、口縁端部で強く外反する。付高台で、全面に灰釉が施されている。焼成は悪い。(632) は、胴部は丸みを帯びながら立ち上がる。低い付高台で、全面に灰釉が施されている。

折縁皿　(633・636～640)

(633) は、体部はやや内湾しながら立ち上がる。付高台で、底部内面および胴部上方内外面に灰釉が施されている。

(636～640) は、器高2.5cm、底径6.5cm、口径12.0cm前後である。「鉄絵皿」である。胴部下方で稜が入り、上方が外反する。鉄絵の文様は、蘭竹のみである。胴部下方から底部にかけてヘラ削り調整が行われ、高台は断面が逆台形を呈するものが多い。いずれも口縁部周辺のみ灰釉が施されている。

菊皿　(634)

付高台で、高台断面は長方形である。胎土は炻器質で淡黄色をしている。高台周辺を除き灰釉が施されている。

灯明受皿　(635)

油溝半月状のものである。内面の仕切りの高さが口縁部より低く、仕切りには切り込み（油溝）を有する。底部外面は露体である。

おろし皿　(641～643)

(641) は、体部下方がやや丸みを帯びるが、上方は直線的に開く。口縁部は折り返され内側に小突起を形成し、口縁上面が浅く凹んでいる。糸切り痕未調整の平底で、口縁部付近に灰釉が施されている。(642) は、胴部は直線的に開き、口縁部は内側に折り返され、口縁上面がやや浅く凹んでいる。糸切り痕未調整の平底で、体部上方内外面に釉が施されている。(643)は、糸切り痕未調整の平底で、底部外面から胴部下方は露体である。

3．坏類　(腰折坏)　(644)

青磁の腰折坏で、無文である。口縁端部は、花文を模して形づくられている。

4．鉢類　(黄瀬戸鉢・擂鉢・合子・香炉)　(645～654)

黄瀬戸鉢　(645)

底部内面に5条の櫛描きによる同心円と菊の印花文がみられる。全面に灰釉が施され、内面に銅緑釉の流し掛けがみられる。底部内面には、円錐ピン用に釉が拭い取られている。

擂鉢　(646～651)

(646) は、越前系の擂鉢である。胎土は粗く、焼成は不良である。口縁端部は面取り気味に調整され、中央は浅く凹んでいる。(647) は、口縁端部に縁帯を形成している。体部はほぼ直線に開き、端部がやや斜め上方に延び、２cm弱の縁帯を形成している。底部外面は砂底で、全面に錆釉が施されている。(648) は、擂目の原体幅は4.15cmで、14本１単位である。口縁端部はやや外反し、内側に折り返されている。焼成は良好で、全面に鉄釉系の釉薬が施されている。(649) は、胴部から底部内面中央に向かって細い擂目が密に引かれている。断面長方形の高台を有し、指撫で調整がなされている。(650) は、越前系の擂鉢である。擂目は10本１単位であり、それに直交するように横位のヘラ状工具による数条の線を有する。(651) は、櫛目の原体幅は4.5cmで、11本１単位である。胴部は直線的に開き、口縁端部は折り返され、胴部と密着し、縁帯が形成される。胴部外面下方にはヘラ削り痕、底部には糸切り痕が残る。

合子　(652・653)

(652) は浅い円筒形で、口縁端部と底部外面は露体である。(653) は、煎茶碗と思われるが、高台が存在しないことから、合子の一種として分類した。胴部外面下方から底部外面にかけて露体である。なお、底部外面には「墨書」が見られ、「天印□□八十　大杉より入」とみられるが、書体が難しく、はっきりとした判読は不可能である。

香炉　(654)

体部がやや丸みを帯びながら内湾する浅筒形である。付高台で、口縁端部はほぼ水平に面取りされ、内側にやや突出している。高台周辺と底部内面は露体である。体部下方から底部にかけてヘラ削り調整が行われている。

５．壷類　(茶入・小壷・中壷)　(655～659)

肩衝茶入　(655)

口縁部は外反し、胴部はやや丸みを帯びた筒形で、底部は回転ヘラ削り痕が残る。胴部下方から底部外面にかけて露体である。

双耳小壷　(656)

口縁端部は外反し、球形に近い胴部に短く立ち上がる頸部を有する。一方の耳が欠損しているが、その部分に注口が存在すれば水注となる。全面に鉄釉が施されている。

中壷　(657～659)

(657) は古瀬戸、(658)・(659) は越前焼の壷である。(657) は頸部が内傾し、口縁部は外側に折り返され玉縁状となる。(658) は口縁端部がほぼ水平に面取りされ、外側につまみ出されている。焼成は良好、色調は青灰色で無釉である。

(659) は頸部がほぼ直立し、口縁端部が外反する。胴部内面は左上方向にヘラ撫で調整が施

される。焼成は良好、色調は青灰色である。外面に淡黄白色の自然釉が付着している。

6．甕類　(660)

常滑系の甕で、口縁部の縁帯が頸部に密着し、口縁端部にやや浅い凹みを有する。色調は内面が赤褐色、外面が暗褐色を呈しており、全面にロクロ撫でが施されている。無釉。

7．瓶類　(小瓶・中瓶)　(661・662)

(661)は小瓶で、神酒徳利あるいは一輪挿しに使用されたと思われる。器形は端反辣韮形で、口縁部は玉縁、胴部はナデ肩、底部は削り出し高台である。高台脇から底部外面にかけて露体である。

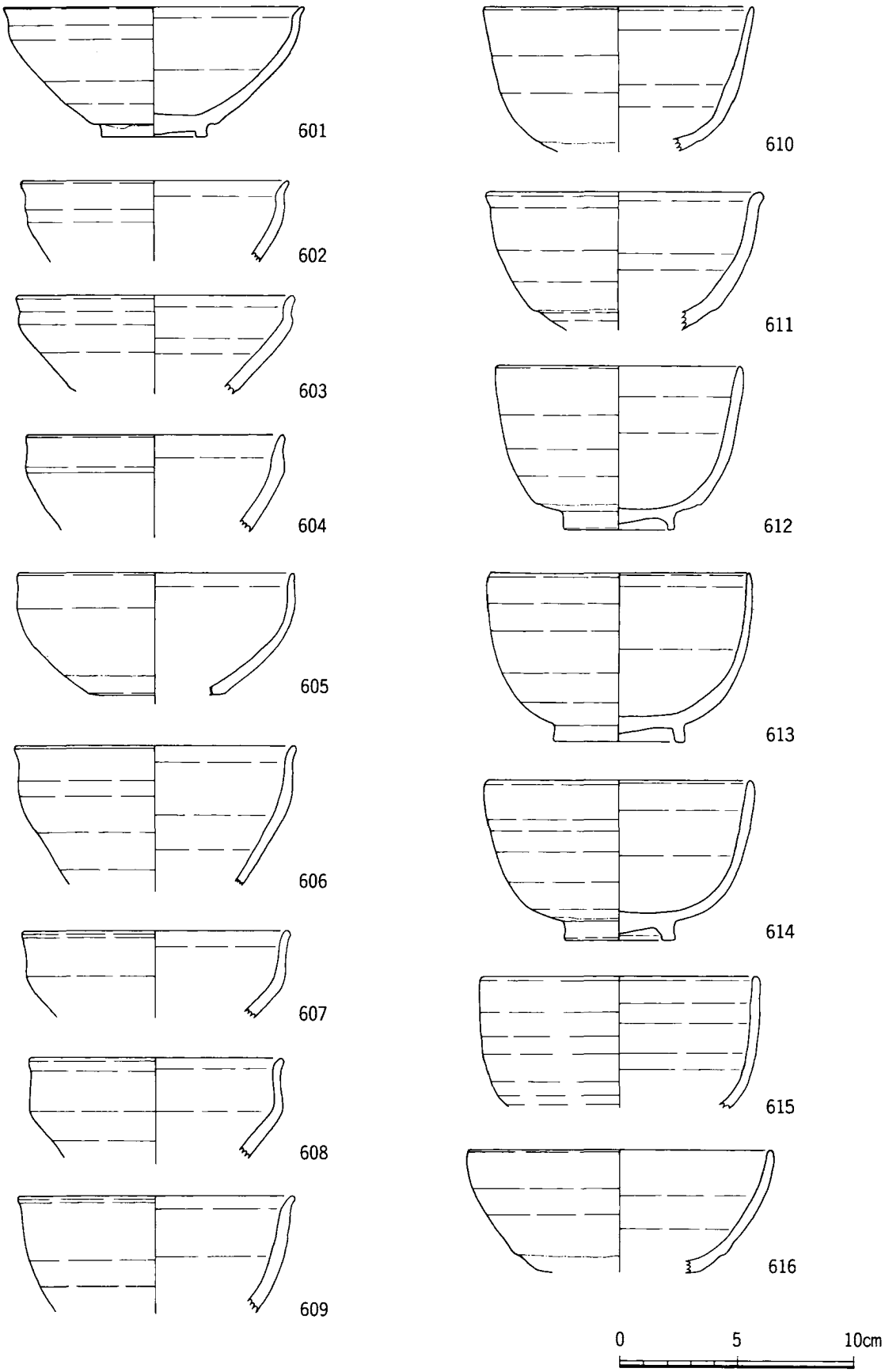
(662)は中瓶で、尾呂徳利である。口縁端部が折り返され、頸部に密着している。飴釉にうのふ釉を流し掛けている。

第2節　銭貨類

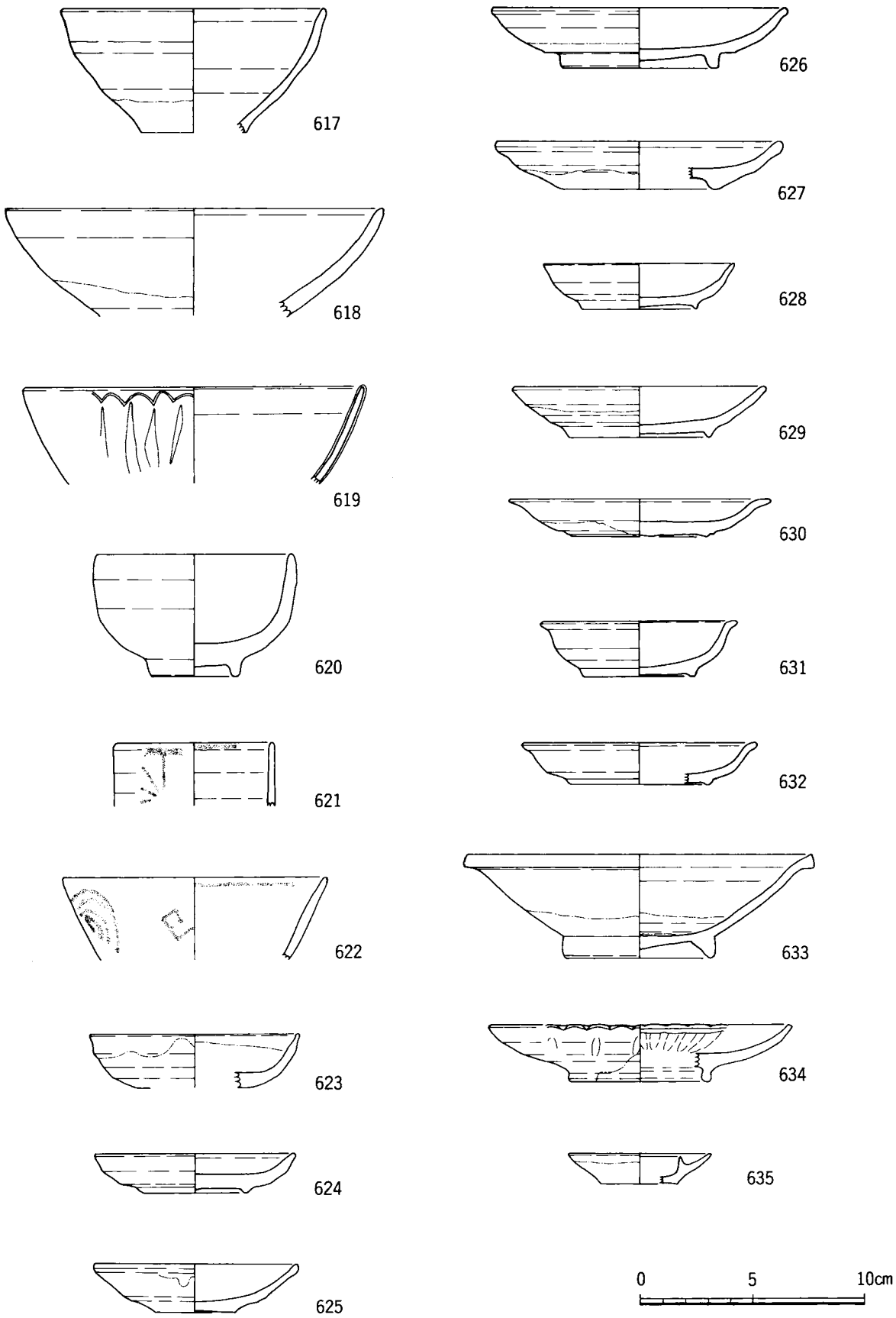
銭貨は65点出土している。銭文により分類すると宋銭であるところの景徳元寳1枚、祥符元寳1枚、皇宋元寳2枚、嘉祐元寳1枚、治平元寳1枚、元豊通寳3枚、元祐通寳2枚、紹聖元寳1枚、洪武通寳1枚、永楽通寳2枚、近世江戸時代の寛永通寳46枚、そして判読不明が4枚である。

なお、法量等については、第57表を参照されたい。また、出土遺物に関する挿図（銭貨類拓影図）・写真図版は、第151図・図版59とする。

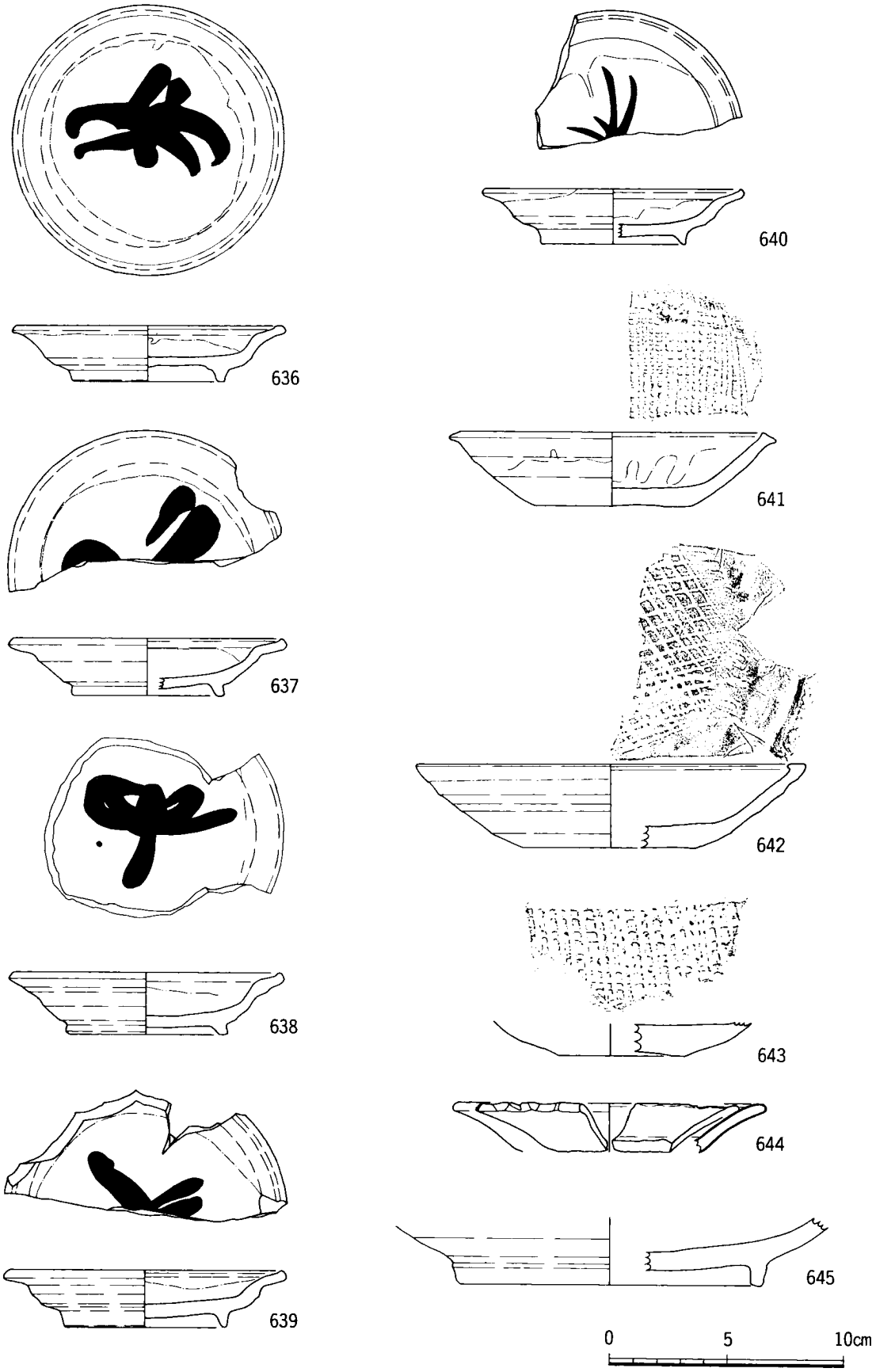
（鈴木　昇）



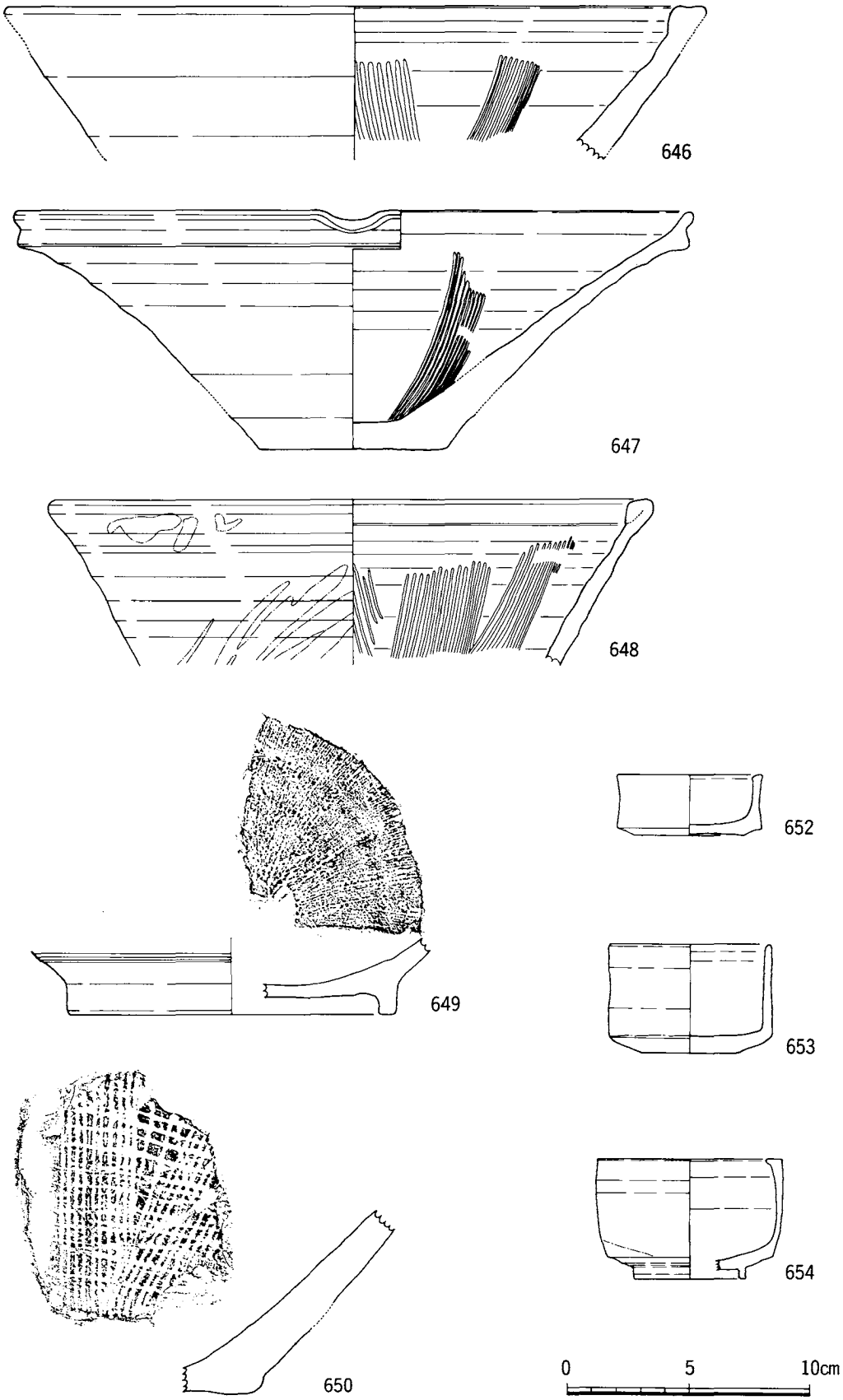
第146図　中近世陶磁器(1)



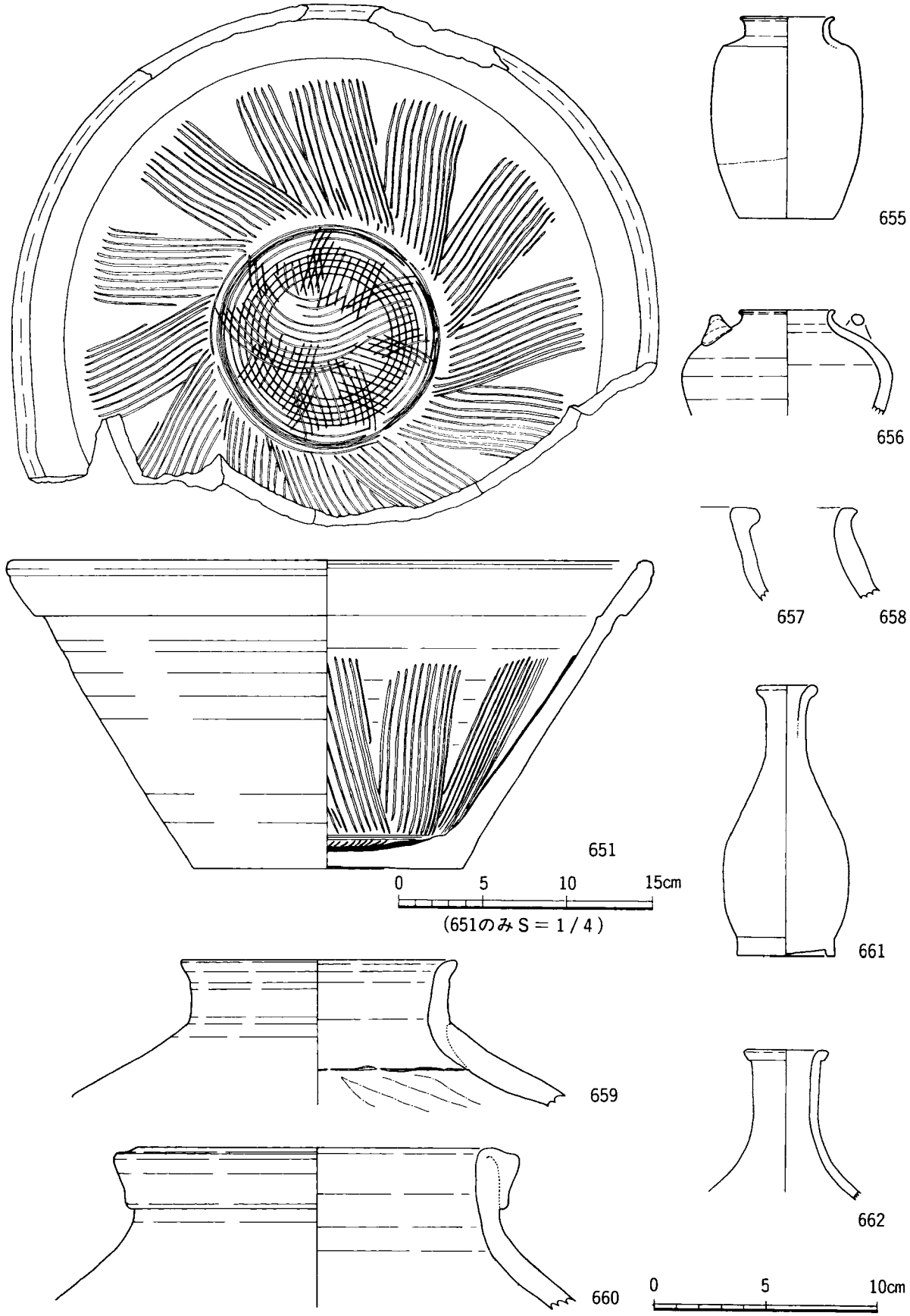
第147図　中近世陶磁器(2)



第148図　中近世陶磁器(3)



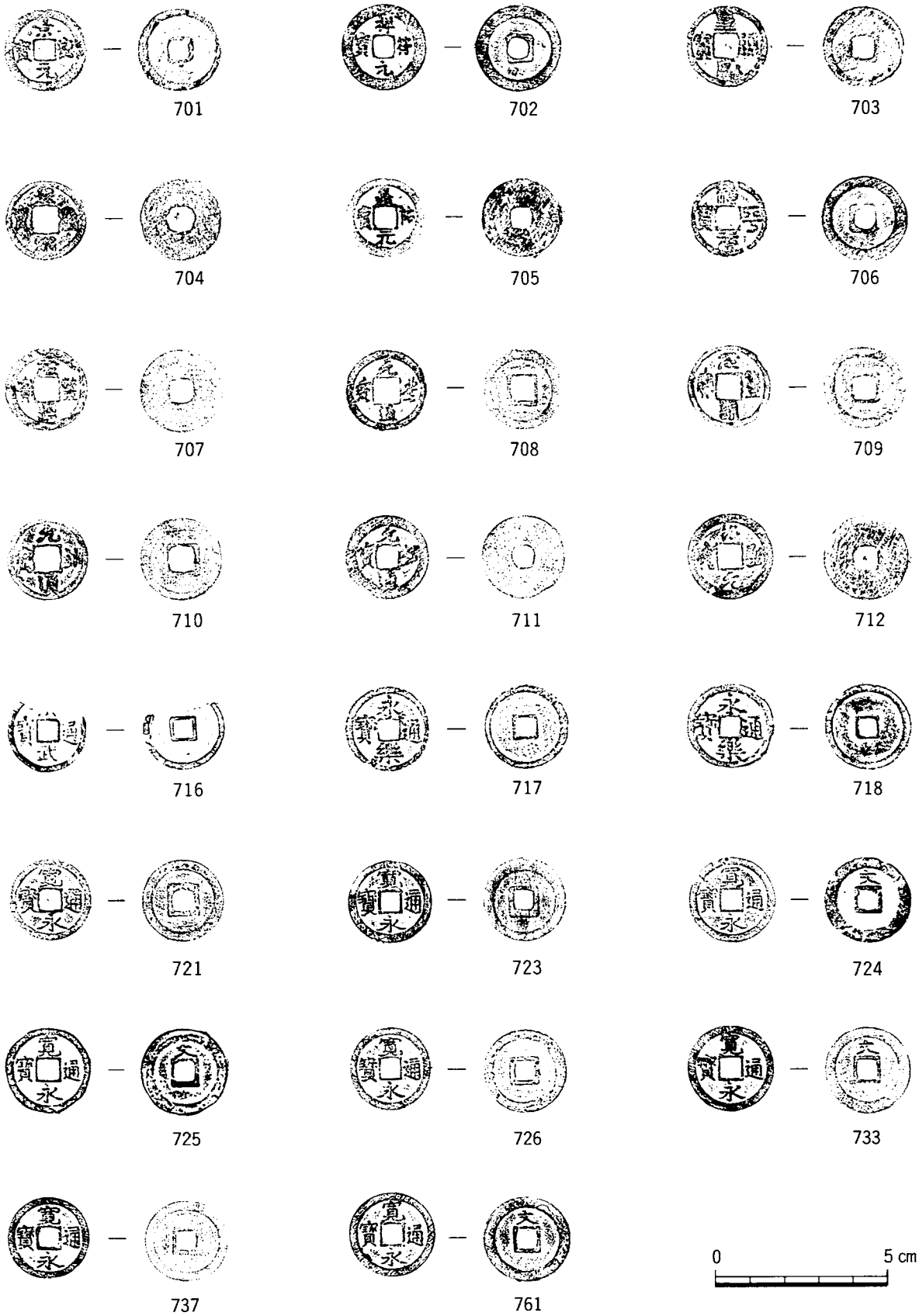
第149図　中近世陶磁器(4)



第150図　中近世陶磁器(5)

第56表　中近世陶磁器計測表

No.	出土区	層位	番号	器種	法量(mm) 器高	底径	口径	口縁残(%)	釉薬	胎土色	製作 製作地	製作時期	特記事項	挿図No.	図版No.
601	不明	—	—	天目茶碗	56	45	130	5	鉄	灰	瀬戸美濃	古瀬戸後期IV		146	53
602	17P	II	029	〃	—	—	116	5	〃	〃	〃	〃		〃	53
603	10Hアゼ	—	053	〃	—	—	120	5	〃	灰黄褐	〃	大窯II		〃	53
604	17Q	II	017	〃	—	—	112	5	〃	にぶい黄橙	〃	〃		〃	53
605	13Q	II	018	〃	—	—	120	15	〃	〃	〃	大窯III		〃	53
606	10G	II	102	〃	—	—	122	15	〃	〃	〃	〃		〃	53
607	7M	II	095	〃	—	—	116	5	〃	灰	〃	〃		〃	53
608	12J	II	068	〃	—	—	120	5	〃	にぶい黄橙	〃	〃		〃	53
609	7M	II	096	丸碗	—	—	120	5	〃	灰	〃	大窯I		〃	
610	3Eトレ	III	039	〃	—	—	116	25	〃	にぶい黄橙	〃	連房I		〃	53
611	3F	I	010	〃	—	—	120	5	〃	灰	〃	大窯I		〃	53
612	4Hアゼ	—	016	〃	71	46	106	5	柿	灰	〃	連房II	灰流し	〃	
613	10Fトレ	III	061	〃	73	55	114	25	灰	灰	〃	連房III	御室茶碗	〃	54
614	5L	II	198	〃	69	46	116	5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	54
615	7H	III	017	〃	—	—	116	10	〃	にぶい黄橙	〃	〃	〃	〃	
616	17Q	II	028	〃	—	—	132	10	ルス	〃	〃	連房IV		〃	
617	17Q	II	010	平碗	—	—	119	45	灰	〃	〃	古瀬戸中期IV		147	55
618	7Qトレ	I	066	〃	—	—	170	15	〃	〃	〃	古瀬戸後期IV		〃	55
619	13Q	II	012	青磁碗	—	—	150	10		灰		15C中頃		〃	55
620	4Gアゼ	—	008	塗分け碗	55	28	92	20	灰＋鉄	〃	瀬戸美濃	連房IV		〃	
621	4G	III	015	煎茶碗	—	—	70	5	透明	にぶい黄橙	〃	〃		〃	
622	7M	III	056	広東茶碗	—	—	118	20	〃	〃	〃	〃		〃	
623	17P	II	031	縁釉小皿	24	50	94	40	灰	〃	〃	古瀬戸後期IV		〃	
624	7I	I	001	丸皿	18	46	90	60	〃	灰	〃	大窯I		〃	
625	2Cトレ	I	041	〃	22	37	92	5	〃	浅黄橙	〃	大窯IV		〃	
626	12G	III	119	〃	27	68	132	15	〃	にぶい黄橙	〃	〃		〃	
627	10G	III	387	〃	22	68	129	40	〃	灰	〃	〃		〃	
628	3K	III	067	〃	21	51	85	55	〃	〃	〃	〃		〃	
629	17Q	II	015	丸皿	23	62	113	15	〃	にぶい黄橙	〃	大窯IV		〃	
630	5Eトレ	III	074	腰折皿	17	60	116	35	〃	灰	〃	大窯I		〃	54
631	7M	II	007	端反皿	25	48	88	40	〃	〃	〃	大窯II		〃	54
632	5H	III	019	端反皿	19	60	105	35	〃	にぶい黄橙	〃	連房I		〃	54
633	7L	—	010	折縁皿	47	66	157	30	〃	灰白	〃	連房III		〃	
634	17P	II	026	菊皿	26	62	136	15	〃	にぶい黄橙	〃	〃		〃	55
635	5N	I	179	灯明皿	14	34	64	30	〃	灰白	〃	連房IV		〃	55
636	170	III	005	折縁皿	24	64	118	100	〃	灰	〃	連房II	鉄絵皿(蘭竹文)	148	54
637	6K	III	033	〃	25	64	120	50	〃	にぶい黄橙	〃	〃	〃	〃	
638	6G	III	011	〃	27	66	119	20	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
639	7H	I	051	〃	25	68	122	20	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
640	10Hアゼ	—	058	〃	24	62	112	10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
641	11J	III	129	おろし皿	36	74	166	5	〃	灰	〃	古瀬戸後期I		〃	56
642	P524	—	001	〃	32	66	140	10	〃	灰黄	〃	〃		〃	56
643	4G	III	005	〃	—	64	—	0	〃	にぶい黄橙	〃	古瀬戸後期IV		〃	
644	4D	II	037	青磁坏	—	—	134	5		灰		15C前半		〃	55
645	6I	II	015	黄瀬戸鉢	—	128	—	0	〃	にぶい黄橙	瀬戸美濃	連房III		〃	55
646	7H	I	059	擂鉢	—	—	292	20		〃	越前系	15C前半		149	57
647	3Mトレ	II	030	〃	99	78	278	20	錆	灰黄	瀬戸美濃	大窯I		〃	57
648	11Fトレ	III	107	〃	—	—	251	20	鉄？	灰				〃	57
649	4J	III	014	〃	—	134	—	0	錆	にぶい黄橙				〃	
650	11Fトレ	II	029	〃	—	—	—	0		にぶい黄橙	越前系	15C前半		〃	
651	5L	II	001	〃	183	161	394	50	錆	にぶい黄橙	瀬戸美濃	連房IV		150	57
652	12G	II	010	合子	25	46	60	100	灰	〃	〃	連房III		149	
653	4H	I	011	合子？	45	47	68	100	鉄	〃	〃	〃	墨書あり	〃	56
654	P695	—	001	香炉	51	46	76	30	灰	明灰	〃	大窯		〃	
655	6N	II	395	肩衝茶入	91	42	42	100	鉄		〃	〃		150	58
656	13I	III	029	双耳小壺	—	—	43	30	〃	灰	〃	大窯I		〃	58
657	10I	III	308	壺	—	—	—	1	〃	青灰	〃	古瀬戸後期		〃	
658	7M	II	029	〃	—	—	—	1		〃	越前	15C後半		〃	
659	10Gアゼ	—	027	〃	—	—	124	20		〃	〃	16C前半		〃	58
660	7H	I	047	甕	—	—	160	10		にぶい黄橙	常滑系	15C後半		〃	58
661	10H	I	058	小瓶	91	42	42	75	灰	明灰	瀬戸美濃	連房IV～V		〃	58
662	4L	III	021	中瓶	—	—	38	25	飴＋ウノフ	灰	〃	連房III		〃	


701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
716
717
718
721
723
724
725
726
733
737
761
0
5 cm

第151図　銭　貨　拓　影

第57表　銭貨類計測表

No.	出土区	層位	番号	銭貨名	裏	径(mm)	孔径(mm)	厚mm	重(g)	材質	初鋳年	挿図No.	図版No.
701	7Qトレ	II	003	景徳元寳		24.9×24.9	5.6×5.6	1.3	3.1	銅	1004	151	59
702	11K	III	017	祥符元寳		25.4×25.5	6.0×6.0	1.3	2.8	銅	1008	151	59
703	10Kアゼ	—	012	皇宋通寳		24.1×23.5	6.6×6.4	1.2	2.1	銅	1039	151	59
704	12K	III	009	皇宋通寳		24.0×24.1	8.2×8.2	1.0	2.6	銅	1039	151	59
705	10K	III	010	嘉祐元寳		23.5×23.6	6.2×6.2	1.2	2.7	銅	1056	151	59
706	11Kアゼ	—	014	治平元寳		23.1×22.8	6.2×6.6	1.2	2.1	銅	1064	151	59
707	3G	II	002	元豊通寳		24.4×24.5	6.8×6.9	1.1	2.7	銅	1078	151	59
708	10J	III	007	元豊通寳		23.8×23.9	6.8×7.0	1.4	2.7	銅	1078	151	59
709	13L	II	001	元豊通寳		24.3×24.4	6.9×6.8	1.0	1.5	銅	1078	151	59
710	10K	III	011	元祐通寳		24.1×24.2	7.1×7.5	1.1	2.4	銅	1086	151	59
711	10Hアゼ	—	001	元祐通寳		24.5×24.5	6.0×6.0	1.1	2.5	銅	1086	151	59
712	19Lトレ	II	001	紹聖元寳		25.1×24.9	6.4×6.5	1.1	2.5	銅	1094	151	
713	4D	II	001	□□通寳		24.6×24.6	7.4×6.9	1.2	2.6	銅	—		
714	5Eトレ	III	005	□道□寳		24.0×□	7.3×□	1.2	(1.8)	銅	—		
715	8I	—	002	□宋□寳		25.1×□	6.6×□	1.4	(1.0)	銅	—		
716	9Kアゼ	—	004	洪武通寳		□×23.6	5.4×5.3	1.9	(2.0)	銅	1368	151	59
717	9Kアゼ	—	003	永楽通寳		25.1×25.1	5.4×5.5	1.8	3.6	銅	1408	151	59
718	10J	III	008	永楽通寳		25.4×25.3	5.4×5.3	1.8	3.1	銅	1408	151	59
719	4Hアゼ	—	003	寛永通寳		24.7×24.6	6.0×6.1	1.5	3.7	銅	—		
720	5G	I	006	寛永通寳		24.2×24.5	6.0×5.3	2.4	3.0	鉄	—		
721	5G	I	006	寛永通寳		24.4×24.4	6.3×6.4	1.2	2.6	銅	—	151	59
722	5Hアゼ	—	004	寛永通寳		24.4×24.4	5.8×5.8	1.2	3.8	銅	—		
723	6L	III	001	寛永通寳		24.7×24.7	5.5×5.5	1.1	3.5	銅	—	151	
724	6L	III	002	寛永通寳	文	25.2×25.2	5.8×5.9	1.1	2.6	銅	—	151	
725	6L	III	003	寛永通寳	文	25.4×25.4	6.1×6.1	1.2	6.1	銅	—	151	
726	6L	III	004	寛永通寳		24.4×24.4	5.6×5.4	1.3	2.2	銅	—	151	
727	6M	III	005	寛永通寳		24.3×24.4	6.9×6.6	0.9	2.2	銅	—		
728	7L	II	001	寛永通寳		23.9×23.9	6.1×6.1	1.0	2.5	銅	—		
729	7M	II	002	寛永通寳		24.9×25.4	6.1×6.5	1.1	2.5	銅	—		
730	7M	III	003	寛永通寳		22.4×22.4	6.2×6.2	1.3	2.7	銅	—		
731	7M	III	004	寛永通寳		23.6×23.6	6.0×6.0	1.3	3.1	銅	—		
732	8Hアゼ	—	001	寛永通寳		23.4×23.4	6.2×6.1	1.0	3.2	銅	—		
733	10G	III	001	寛永通寳	文	25.0×25.0	6.2×6.2	1.3	2.9	銅	—	151	59
734	10G	III	002	寛永通寳		23.1×23.1	6.7×6.7	1.1	2.7	銅	—		
735	10G	III	003	寛永通寳		24.1×24.1	6.3×6.3	1.0	2.6	銅	—		
736	10G	III	004	寛永通寳		23.0×23.0	6.8×6.8	1.2	2.1	銅	—		
737	10I	II	006	寛永通寳		24.1×24.4	5.6×5.7	1.0	2.7	銅	—	151	
738	11Fトレ	I	001	寛永通寳		23.0×23.2	6.5×6.6	1.2	1.9	銅	—		
739	11Fトレ	II	002	寛永通寳		24.3×24.4	6.2×6.1	1.0	2.7	銅	—		
740	11トレ	II	003	寛永通寳		22.9×23.0	6.2×6.2	1.2	3.1	銅	—		
741	11Fトレ	II	004	寛永通寳		22.7×22.7	7.2×7.1	0.9	1.5	銅	—		
742	11Fトレ	II	005	寛永通寳		24.1×24.1	6.2×6.2	1.2	2.2	銅	—		
743	11Fトレ	II	006	寛永通寳		□×□	□×□	1.1	(1.0)	銅	—		
744	11Fトレ	II	007	寛永通寳		24.5×24.4	6.1×6.1	1.1	3.7	銅	—		
745	11Fトレ	III	008	寛永通寳		23.1×23.1	6.2×6.1	1.1	3.0	銅	—		
746	11Fトレ	III	009	寛永通寳		24.8×24.5	6.5×6.7	1.0	2.4	銅	—		
747	11Fトレ	III	010	寛永通寳		24.1×24.1	6.1×6.0	1.2	3.1	銅	—		
748	11Fトレ	III	011	寛永通寳		25.2×25.2	5.8×5.8	1.4	3.1	銅	—		
749	11Fトレ	覆土	012	寛永通寳		23.1×23.1	6.2×6.2	1.0	3.0	銅	—		
750	11I	II	012	寛永通寳		21.0×21.4	6.6×7.3	0.	1.2	銅	—		
751	12G	I	014	寛永通寳		24.4×24.4	5.6×5.6	1.3	3.2	銅	—		
752	12H	I	005	寛永通寳		22.9×22.8	6.7×6.7	1.3	2.3	銅	—		
753	12K	III	010	寛永通寳		23.5×23.5	5.5×5.5	1.1	3.1	銅	—		
754	12K	III	011	寛永通寳		23.6×23.5	5.9×5.8	1.0	2.9	銅	—		
755	12K	III	012	寛永通寳		24.7×24.8	5.7×5.7	1.2	3.7	銅	—		
756	12K	III	013	寛永通寳		24.1×24.0	5.7×5.7	1.3	3.5	銅	—		
757	16トレ	I	001	寛永通寳		22.8×22.8	6.7×6.7	1.1	2.3	銅	—		
758	17Q	II	001	寛永通寳		22.7×22.8	6.5×6.4	1.0	1.3	銅	—		
759	SK81		001	寛永通寳		24.1×24.1	5.2×5.8	0.9	3.2	銅	—		
760	SK81		002	寛永通寳		23.9×23.9	5.3×5.3	1.0	3.4	銅	—		
761	SK81		003	寛永通寳	文	25.0×25.1	6.0×6.0	1.1	3.2	銅	—	151	
762	P601		001	寛永通寳		23.2×24.0	5.6×5.6	1.0	(1.9)	銅	—		
763	SD1		001	寛永通寳		□×□	□×5.4	1.1	(2.0)	銅	—		
764	不明		001	寛永通寳		24.0×23.9	6.1×6.0	1.3	2.4	銅	—		
765	4H	II	004	□□□寳		23.9×23.3	7.2×7.0	0.9	(2.7)	銅	—		

第６章　自然科学的分析

藤橋村徳山地区遺跡出土のサヌカイト、黒曜石製遺物の原材産地分析

藁科　哲男
（京都大学原子炉実験所）

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光Ｘ線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行っている[1,2,3)]。

サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行い、これを産地を特定する指標とした。

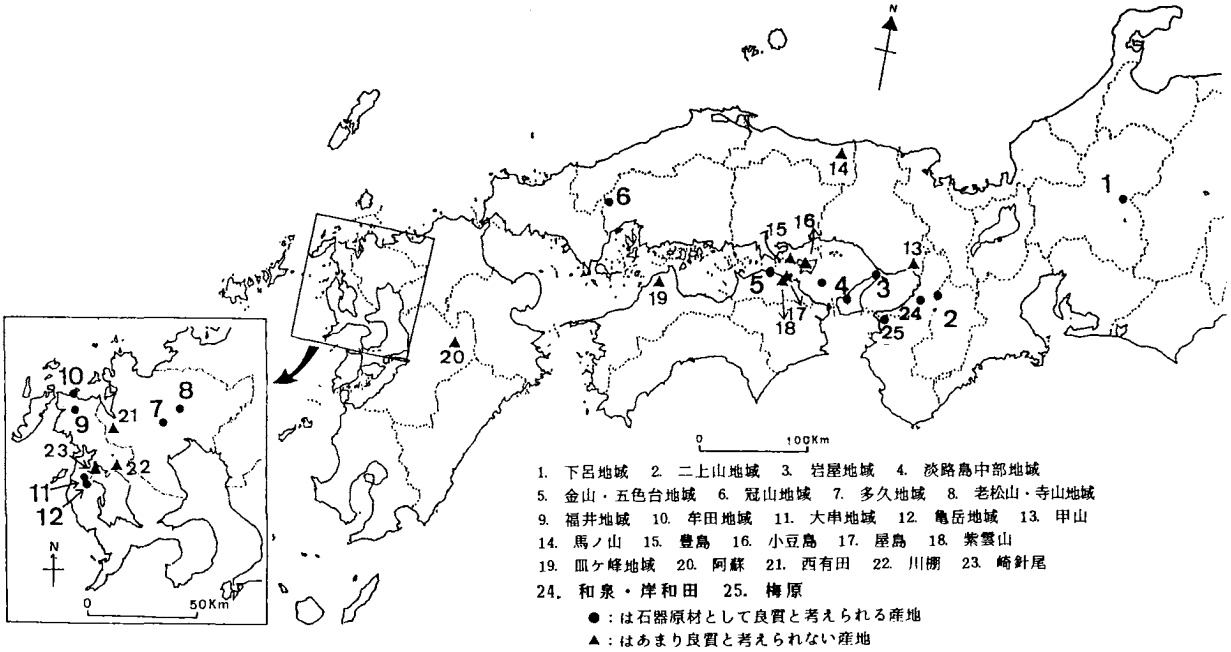
蛍光Ｘ線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格がわからないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。
この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

藤橋村徳山地区下の４遺跡から出土した黒曜石とサヌカイト遺物の合計36個の内訳は第63表にしめす。これら遺物について産地分析の結果が得られたので報告する。

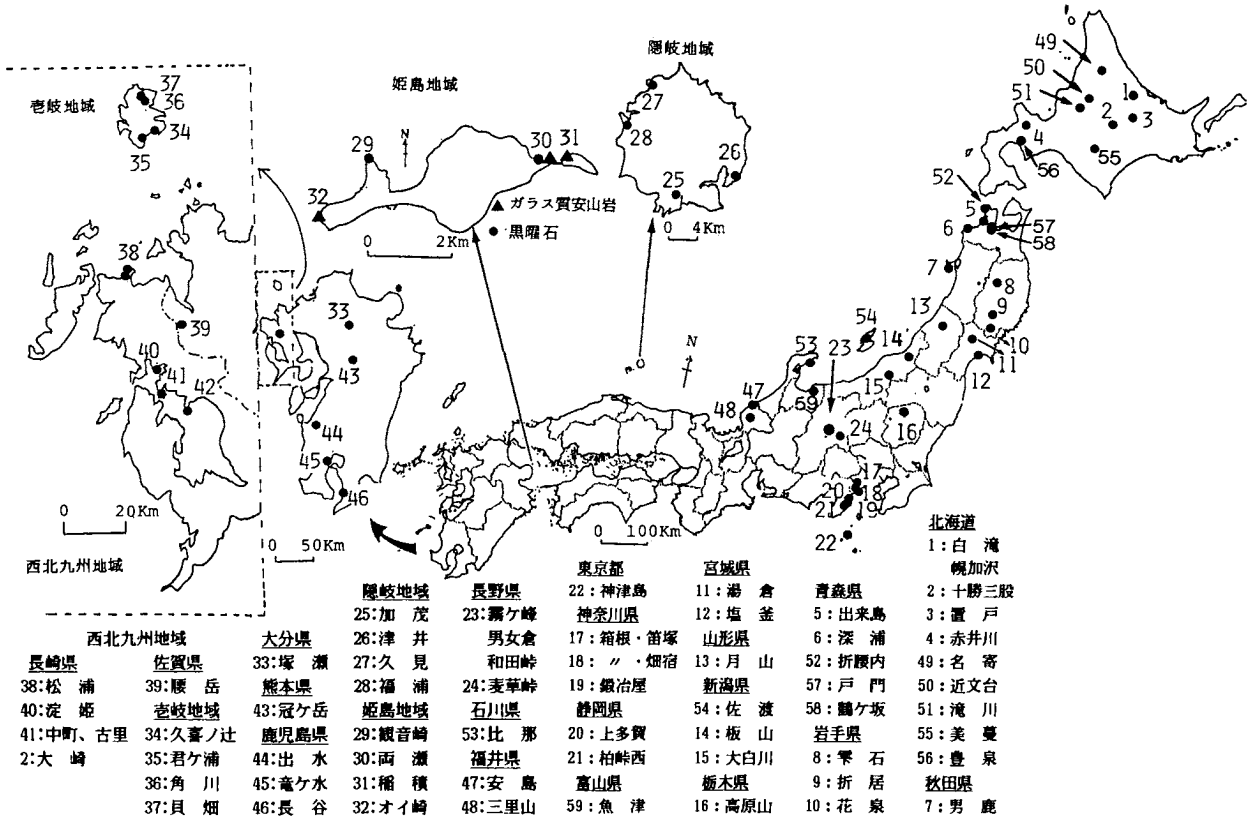
サヌカイト、黒曜石原石の分析

サヌカイト、黒曜石両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光Ｘ分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの１２元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトではK/Ca、Ti/Ca/、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srを、また黒曜石ではCa/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrをそれぞれ用いる。



第152図　サヌカイトの原産地



第153図　黒曜石の原産地

第58表　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地	原石群名	分析個数	K/Ca $\bar{X}\pm\sigma$	Ti/Ca $\bar{X}\pm\sigma$	Mn/Sr $\bar{X}\pm\sigma$	Fe/Sr $\bar{X}\pm\sigma$	Rb/Sr $\bar{X}\pm\sigma$	Y/Sr $\bar{X}\pm\sigma$	Zr/Sr $\bar{X}\pm\sigma$	Nb/Sr $\bar{X}\pm\sigma$	Al/Ca $\bar{X}\pm\sigma$	Si/Ca $\bar{X}\pm\sigma$
群馬県	荒船山	43	0.194±0.070	0.360±0.028	0.129±0.014	9.205±1.153	0.080±0.034	0.085±0.014	0.458±0.082	0.009±0.010	0.013±0.021	0.123±0.032
長野県	八風山	46	0.274±0.028	0.324±0.010	0.090±0.008	4.905±0.505	0.104±0.009	0.100±0.009	0.581±0.033	0.012±0.009	0.018±0.002	0.168±0.014
神奈川県	火打沢	40	0.092±0.005	0.285±0.009	0.166±0.009	12.406±0.332	0.023±0.006	0.111±0.008	0.483±0.023	0.005±0.007	0.012±0.001	0.012±0.001
岐阜県	下呂	93	1.576±0.055	0.227±0.011	0.038±0.004	0.766±0.025	0.277±0.020	0.031±0.013	0.504±0.024	0.035±0.009	0.052±0.003	0.660±0.025
奈良県	二上山	51	0.288±0.010	0.215±0.006	0.071±0.006	4.629±0.270	0.202±0.012	0.066±0.009	0.620±0.022	0.024±0.010	0.019±0.001	0.144±0.005
大阪府	和泉	26	0.494±0.023	0.325±0.025	0.056±0.004	4.060±0.148	0.296±0.021	0.065±0.010	0.706±0.025	0.038±0.010	0.023±0.001	0.194±0.009
兵庫県	岩屋第一	29	0.615±0.021	0.246±0.011	0.056±0.006	3.778±0.198	0.363±0.019	0.059±0.013	0.830±0.039	0.043±0.013	0.028±0.002	0.247±0.010
	〃 第二	24	0.530±0.018	0.255±0.006	0.056±0.006	3.542±0.200	0.332±0.018	0.046±0.018	1.066±0.027	0.042±0.014	0.026±0.001	0.227±0.009
	甲山	22	0.300±0.017	0.154±0.005	0.056±0.007	3.350±0.261	0.130±0.012	0.061±0.033	0.574±0.021	0.012±0.007	0.018±0.001	0.159±0.008
香川県	五色台 国分寺	29	0.450±0.030	0.244±0.008	0.057±0.004	3.842±0.310	0.298±0.023	0.043±0.012	0.951±0.037	0.046±0.012	0.023±0.001	0.194±0.011
	五色台 蓮光寺	18	0.455±0.011	0.244±0.004	0.057±0.003	3.762±0.136	0.298±0.018	0.043±0.015	0.989±0.038	0.048±0.008	0.023±0.002	0.196±0.007
	五色台 白峰	38	0.526±0.015	0.255±0.005	0.057±0.004	3.599±0.101	0.325±0.015	0.040±0.016	1.054±0.037	0.047±0.010	0.026±0.002	0.226±0.007
	五色台 法印谷	25	0.396±0.009	0.235±0.003	0.076±0.006	4.892±0.143	0.272±0.016	0.057±0.013	1.145±0.034	0.041±0.010	0.022±0.001	0.172±0.004
	金山 金山東	25	0.486±0.011	0.215±0.005	0.083±0.004	4.811±0.119	0.308±0.015	0.059±0.015	1.170±0.028	0.032±0.012	0.026±0.001	0.203±0.005
	金山 〃 西	19	0.401±0.008	0.209±0.004	0.086±0.005	5.165±0.167	0.277±0.015	0.064±0.011	1.058±0.028	0.033±0.011	0.022±0.001	0.176±0.004
	*五色台	63	0.869±0.048	0.120±0.006	0.023±0.005	2.294±0.114	0.484±0.026	0.006±0.011	0.705±0.044	0.043±0.011	0.039±0.003	0.459±0.028
鳥取県	馬ノ山	23	0.188±0.007	0.178±0.006	0.011±0.001	0.916±0.033	0.032±0.002	0.001±0.002	0.177±0.009	0.004±0.002	0.015±0.001	0.111±0.005
広島県	冠山 冠高原	60	0.651±0.021	0.485±0.014	0.046±0.004	3.322±0.104	0.174±0.009	0.029±0.009	0.462±0.017	0.185±0.010	0.025±0.002	0.241±0.008
	冠山 冠山東	29	0.323±0.019	0.363±0.031	0.019±0.001	1.607±0.060	0.059±0.009	0.003±0.005	0.399±0.043	0.025±0.009	0.021±0.001	0.171±0.006
	冠山 飯山	25	1.116±0.061	0.472±0.022	0.037±0.005	2.228±0.080	0.245±0.011	0.023±0.009	0.524±0.014	0.246±0.013	0.038±0.003	0.391±0.021
佐賀県	多久第一	53	0.834±0.053	0.385±0.010	0.060±0.008	5.075±0.284	0.507±0.036	0.060±0.017	0.851±0.036	0.237±0.019	0.030±0.002	0.307±0.019
	〃 第二	23	0.849±0.062	0.381±0.016	0.070±0.009	5.728±0.310	0.559±0.052	0.061±0.018	0.854±0.035	0.254±0.025	0.030±0.003	0.313±0.022
	〃 第三	8	1.109±0.220	0.335±0.029	0.068±0.009	4.784±0.981	0.702±0.091	0.082±0.024	0.811±0.031	0.260±0.025	0.036±0.006	0.401±0.063
	老松山	62	0.718±0.029	0.304±0.010	0.074±0.007	5.780±0.241	0.539±0.036	0.068±0.019	0.693±0.033	0.211±0.020	0.025±0.002	0.263±0.010
	寺山・岡本	30	0.633±0.045	0.299±0.011	0.079±0.005	6.119±0.295	0.478±0.035	0.071±0.018	0.638±0.033	0.192±0.013	0.023±0.002	0.237±0.016
	西有田	17	0.453±0.019	0.331±0.005	0.098±0.010	7.469±0.249	0.307±0.024	0.081±0.015	0.568±0.023	0.106±0.010	0.023±0.002	0.237±0.016
長崎県	大串	28	1.111±0.118	0.140±0.009	0.055±0.020	1.650±0.236	0.236±0.043	0.041±0.027	0.486±0.038	0.082±0.022	0.050±0.006	0.607±0.059
	亀岳	19	1.072±0.042	0.144±0.008	0.041±0.006	1.776±0.152	0.233±0.014	0.015±0.013	0.497±0.018	0.065±0.015	0.049±0.003	0.587±0.018
	牟田第一	30	0.794±0.094	0.335±0.024	0.072±0.009	4.938±0.251	0.872±0.132	0.223±0.036	0.720±0.053	0.301±0.042	0.026±0.003	0.284±0.033
	〃 第二	13	0.601±0.044	0.316±0.010	0.102±0.015	8.390±0.541	1.114±0.102	0.329±0.034	0.976±0.065	0.479±0.039	0.021±0.002	0.218±0.015
	川棚第一	59	0.509±0.022	0.294±0.008	0.072±0.006	4.539±0.157	0.211±0.016	0.072±0.015	0.823±0.046	0.044±0.010	0.022±0.002	0.201±0.009
	〃 第二	9	0.389±0.042	0.245±0.022	0.073±0.005	5.373±0.332	0.193±0.032	0.068±0.013	0.721±0.041	0.045±0.011	0.018±0.002	0.157±0.013
	福井第一	15	0.639±0.015	0.317±0.006	0.098±0.009	8.284±0.312	1.242±0.050	0.352±0.031	1.021±0.032	0.519±0.033	0.022±0.002	0.230±0.007
	〃 第二	25	0.519±0.015	0.305±0.007	0.090±0.008	7.729±0.227	0.954±0.038	0.274±0.027	0.871±0.041	0.407±0.019	0.020±0.001	0.190±0.006
	崎針尾第一	71	0.388±0.029	0.242±0.019	0.057±0.005	4.371±0.218	0.158±0.019	0.055±0.009	0.450±0.039	0.062±0.008	0.017±0.001	0.161±0.011
	〃 第二	14	0.608±0.125	0.360±0.046	0.081±0.013	5.625±0.884	0.316±0.055	0.071±0.016	0.659±0.097	0.098±0.023	0.024±0.004	0.246±0.050
熊本県	阿蘇第一	15	2.006±0.258	0.646±0.052	0.064±0.011	2.085±0.320	0.481±0.068	0.106±0.028	1.647±0.197	0.063±0.012	0.057±0.010	0.597±0.099
	〃 第二	14	0.993±0.198	0.514±0.070	0.061±0.008	3.087±0.441	0.299±0.066	0.064±0.013	1.043±0.182	0.038±0.013	0.032±0.005	0.293±0.041
	菊池	42	0.678±0.057	0.458±0.020	0.062±0.005	3.457±0.206	0.194±0.018	0.072±0.009	0.728±0.054	0.025±0.010	0.019±0.002	0.185±0.015
	JG－1 a)	56	1.327±0.021	0.266±0.006	0.058±0.006	2.817±0.074	0.756±0.015	0.183±0.024	0.762±0.033	0.078±0.014	0.036±0.003	0.448±0.011

$\bar{X}$：平均値、σ：標準偏差値、＊：ガラス質安山岩

a)：Ando,A., Kurasawa,H., Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol.8 175-192.

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて３１ヶ所の調査を終えている。第152図にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多くの地点から良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。

これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると39個の原石群に分類できる。その結果を第58表に示した。金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の６ヶの群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約２／３が金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一

群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。また和泉・岸和田原産地からも全体の約１%であるが金山東群に一致する原石が採取される。

仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、それぞれの群に帰属される頻度分布を求め、岩屋、和泉、岸和田原産地等の諸群と比較して確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から６%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、第66表のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州、の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を第 153図に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成の上から、これら原石を分類すると第59・60表に示すように95個の原石群に分かれる。黒曜石の原産地は、北陸地方では、富山県の魚津、石川県の比那、福井県の三里山、安島の各原産地が調査されていて、比那、魚津産黒曜石が石器原材として使用されている。中信高原地域の黒曜石産地の中で、霧ヶ峰群は、長野県下諏訪町金明水、星ヶ塔、星ヶ台の地点より採取した原石でもって作られた群で、同町観音沢の露頭の原石も、霧ヶ峰群に一致する元素組成を示した。和田峠地域原産の原石は、星ヶ塔の西方の山に位置する旧和田峠トンネルを中心にした数百メートルの範囲より採取され、これらを元素組成で分類すると、和田峠第一、第二、第三、第四、第五、第六の各群に分かたれる。和田峠第一、第三群に分類された原石は旧トンネル付近より北側の地点より採取され、和田峠第二群のものは、トンネルの南側の原石に多くみられる。和田峠第四群は男女倉側の新トンネルの入口、また、和田峠第五、第六群は男女倉側新トンネル入口左側で、和田峠第一、第三の両群の産地とは逆の方向である。男女倉原産地の原石は男女倉群にまとまり、組成は和田峠第五群に似る。鷹山、星糞峠の黒曜石の中に和田峠第一群に属する物が多数みられる。麦草峠群は大石川の上流および麦草峠より採取された原石で作られた。これら中信高原の原産地は、元素組成で和田峠、霧ヶ峰、男女倉、麦草峠の各地域に区別される。伊豆箱根地方の原産地は笛塚・畑宿・鍛冶屋・上多賀・柏峠西の各地にあり、良質の石材は畑宿・柏峠西で、斑晶の多いやや石質の悪いものは鍛冶屋・上多賀の両原産地でみられる。笛塚産のものはピッチストーン様で、石器原材としては良くないであろう。伊豆諸島の神津島原産地は砂糠崎、長浜、沢尻湾、恩馳島の各地点から黒曜石が採取され、これら原石から神津島第一群および第二群の原石群にまとめられる。

第59表　各黒耀石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(1)

原産地	原石群名	分析個数	Ca/K $\bar{x}\pm\sigma$	Ti/K $\bar{x}\pm\sigma$	Mn/Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Fe/Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Rb/Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Sr/Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Y/Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Nb/Zr $\bar{x}\pm\sigma$	Al/K $\bar{x}\pm\sigma$	Si/K $\bar{x}\pm\sigma$
北海道	名寄第一	114	0.478±0.011	0.121±0.005	0.035±0.007	2.011±0.063	0.614±0.032	0.574±0.022	0.120±0.017	0.024±0.016	0.033±0.002	0.451±0.010
	〃 第二	12	0.315±0.011	0.106±0.003	0.023±0.005	1.796±0.070	0.692±0.043	0.264±0.017	0.293±0.018	0.039±0.020	0.029±0.002	0.401±0.010
	白滝第一	130	0.173±0.014	0.061±0.003	0.079±0.013	2.714±0.142	1.340±0.059	0.283±0.019	0.341±0.030	0.073±0.026	0.028±0.002	0.374±0.010
	幌加沢	23	0.139±0.009	0.023±0.001	0.099±0.015	2.975±0.102	1.794±0.077	0.104±0.010	0.470±0.037	0.103±0.027	0.027±0.002	0.369±0.007
	白滝第二	27	0.138±0.004	0.021±0.002	0.102±0.015	3.049±0.181	1.855±0.088	0.097±0.016	0.492±0.039	0.107±0.019	0.027±0.002	0.368±0.006
	近文台第一	30	0.819±0.013	0.165±0.006	0.081±0.010	3.266±0.117	0.604±0.031	0.941±0.030	0.165±0.020	0.039±0.016	0.039±0.002	0.457±0.008
	〃 第二	107	0.517±0.011	0.099±0.005	0.067±0.090	2.773±0.097	0.812±0.037	0.818±0.034	0.197±0.024	0.041±0.019	0.035±0.002	0.442±0.009
	〃 第三	17	0.514±0.012	0.098±0.005	0.066±0.014	2.765±0.125	0.814±0.068	0.815±0.042	0.199±0.039	0.078±0.008	0.034±0.002	0.443±0.011
	秩父別第一	51	0.249±0.017	0.122±0.006	0.078±0.011	1.614±0.068	0.995±0.037	0.458±0.023	0.235±0.024	0.023±0.021	0.022±0.004	0.334±0.013
	〃 第二	25	0.506±0.016	0.098±0.005	0.070±0.011	2.750±0.099	0.805±0.042	0.808±0.032	0.197±0.026	0.027±0.016	0.027±0.003	0.371±0.010
	滝川第一	31	0.253±0.018	0.122±0.006	0.077±0.009	1.613±0.090	1.017±0.045	0.459±0.025	0.233±0.029	0.038±0.018	0.025±0.003	0.370±0.023
	〃 第二	15	0.510±0.015	0.098±0.005	0.068±0.009	2.740±0.072	0.802±0.019	0.812±0.019	0.192±0.026	0.032±0.023	0.030±0.004	0.393±0.031
	置戸	65	0.326±0.008	0.128±0.005	0.045±0.008	1.813±0.062	0.824±0.034	0.454±0.020	0.179±0.023	0.044±0.020	0.030±0.002	0.412±0.010
	十勝三股	60	0.256±0.018	0.074±0.005	0.068±0.010	2.281±0.087	1.097±0.055	0.434±0.023	0.334±0.029	0.064±0.025	0.029±0.002	0.396±0.013
	美蔓第一	41	0.499±0.020	0.124±0.007	0.052±0.010	2.635±0.181	0.802±0.061	0.707±0.044	0.199±0.029	0.039±0.023	0.033±0.002	0.442±0.015
	〃 第二	28	0.593±0.036	0.144±0.012	0.056±0.010	3.028±0.251	0.762±0.040	0.764±0.051	0.197±0.026	0.038±0.022	0.034±0.002	0.449±0.009
	赤井川	50	0.254±0.029	0.070±0.004	0.086±0.010	2.213±0.104	0.969±0.060	0.428±0.021	0.249±0.024	0.058±0.023	0.027±0.002	0.371±0.009
	豊泉	75	0.473±0.019	0.148±0.007	0.060±0.015	1.764±0.072	0.438±0.027	0.607±0.028	0.157±0.020	0.025±0.017	0.032±0.002	0.469±0.013
青森県	折腰内	35	0.190±0.015	0.075±0.003	0.040±0.008	1.575±0.066	1.241±0.046	0.318±0.014	0.141±0.033	0.076±0.021	0.024±0.002	0.348±0.010
	出来島	27	0.346±0.022	0.132±0.007	0.231±0.019	2.268±0.085	0.865±0.044	1.106±0.056	0.399±0.038	0.179±0.031	0.038±0.003	0.499±0.013
	深浦	36	0.080±0.008	0.097±0.011	0.013±0.002	0.697±0.021	0.128±0.008	0.002±0.002	0.064±0.007	0.035±0.004	0.026±0.002	0.379±0.010
	戸門第一	28	0.250±0.024	0.069±0.003	0.068±0.012	2.358±0.257	1.168±0.062	0.521±0.063	0.277±0.065	0.076±0.025	0.026±0.002	0.362±0.015
	〃 第二	28	0.084±0.006	0.104±0.004	0.013±0.002	0.691±0.021	0.123±0.006	0.002±0.002	0.069±0.010	0.033±0.005	0.025±0.002	0.369±0.007
	鶴ケ坂	33	0.344±0.017	0.132±0.007	0.232±0.023	2.261±0.143	0.861±0.052	1.081±0.060	0.390±0.039	0.186±0.037	0.037±0.002	0.496±0.018
秋田県	男鹿	43	0.293±0.007	0.087±0.004	0.223±0.015	1.637±0.072	1.512±0.082	0.920±0.054	0.287±0.042	0.125±0.031	0.027±0.002	0.362±0.006
岩手県	雫石	25	0.636±0.033	0.187±0.012	0.052±0.007	1.764±0.061	0.305±0.016	0.431±0.021	0.209±0.016	0.045±0.014	0.041±0.003	0.594±0.014
	折居	22	0.615±0.055	0.180±0.016	0.058±0.007	1.751±0.062	0.306±0.033	0.421±0.051	0.228±0.079	0.045±0.011	0.041±0.005	0.594±0.055
	花泉	30	0.596±0.046	0.177±0.018	0.056±0.008	1.742±0.072	0.314±0.019	0.420±0.025	0.220±0.016	0.044±0.013	0.041±0.003	0.586±0.030
宮城県	湯倉	21	2.174±0.068	0.349±0.017	0.057±0.005	2.544±0.149	0.116±0.009	0.658±0.024	0.138±0.015	0.020±0.013	0.073±0.003	0.956±0.040
	塩釜	37	4.828±0.395	1.630±0.104	0.178±0.017	11.362±1.150	0.168±0.018	1.298±0.063	0.155±0.016	0.037±0.018	0.077±0.002	0.720±0.032
山形県	月山	44	0.285±0.021	0.123±0.007	0.182±0.016	1.906±0.096	0.966±0.069	1.022±0.071	0.276±0.036	0.119±0.033	0.033±0.002	0.443±0.014
新潟県	佐渡第一	34	0.228±0.013	0.078±0.006	0.020±0.005	1.492±0.079	0.821±0.047	0.288±0.018	0.142±0.018	0.049±0.017	0.024±0.004	0.338±0.013
	〃 第二	12	0.263±0.032	0.097±0.018	0.020±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.326±0.029	0.091±0.022	0.046±0.015	0.026±0.002	0.338±0.009
	板山	44	0.232±0.011	0.068±0.003	0.169±0.017	2.178±0.110	1.772±0.098	0.772±0.046	0.374±0.047	0.154±0.034	0.027±0.002	0.359±0.009
	大白川	22	0.569±0.012	0.142±0.007	0.033±0.005	1.608±0.049	0.261±0.012	0.332±0.011	0.150±0.015	0.033±0.011	0.036±0.003	0.491±0.014
栃木県	高原山	40	0.738±0.067	0.200±0.010	0.044±0.007	2.016±0.110	0.381±0.025	0.502±0.028	0.190±0.017	0.023±0.014	0.036±0.002	0.516±0.012
東京都	神津島第一	56	0.381±0.014	0.136±0.005	0.102±0.011	1.729±0.079	0.471±0.027	0.689±0.037	0.247±0.021	0.090±0.026	0.036±0.003	0.504±0.012
	〃 第二	23	0.317±0.016	0.120±0.008	0.114±0.014	1.833±0.069	0.615±0.039	0.656±0.050	0.303±0.034	0.107±0.026	0.033±0.002	0.471±0.009
神奈川県	箱根・笛塚	30	6.765±0.254	2.219±0.057	0.228±0.019	9.282±0.622	0.048±0.017	1.757±0.061	0.252±0.017	0.025±0.019	0.140±0.008	1.528±0.046
	〃・畑宿	41	2.056±0.064	0.669±0.019	0.076±0.007	2.912±0.104	0.062±0.007	0.680±0.029	0.202±0.011	0.011±0.010	0.080±0.005	1.126±0.031
	鍛冶屋	31	1.663±0.071	0.381±0.019	0.056±0.007	2.139±0.097	0.073±0.008	0.629±0.025	0.154±0.009	0.011±0.009	0.067±0.005	0.904±0.020
静岡県	上多賀	31	1.329±0.078	0.294±0.018	0.041±0.006	1.697±0.068	0.087±0.009	0.551±0.023	0.138±0.011	0.010±0.009	0.059±0.004	0.856±0.018
	柏峠西	35	1.213±0.164	0.314±0.028	0.031±0.004	1.699±0.167	0.113±0.007	0.391±0.022	0.143±0.007	0.009±0.009	0.047±0.004	0.663±0.020
富山県	魚津	12	0.278±0.013	0.065±0.004	0.064±0.008	2.084±0.095	0.906±0.057	0.641±0.046	0.194±0.014	0.102±0.021	0.027±0.002	0.372±0.009
石川県	比那	17	0.370±0.014	0.087±0.004	0.060±0.009	2.699±0.167	0.639±0.028	0.534±0.023	0.172±0.028	0.052±0.018	0.032±0.002	0.396±0.017
福井県	安島	21	0.407±0.007	0.123±0.005	0.038±0.006	1.628±0.051	0.643±0.041	0.675±0.030	0.113±0.020	0.061±0.016	0.032±0.002	0.450±0.010
	三里山	21	0.350±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.561±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.069±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008

$\bar{x}$：平均値、　σ：標準偏差値

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行った。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。

今回分析した遺物の結果を第61、62表に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。サヌカイト遺物を例にし、説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考えると、第62表の試料番号31441番の遺物ではK/Caの値は0.286で、二上山群の［平均値］±［標準偏差値］は、0.288±0.010である。遺物と原石群の差を標準偏差値（δ）を基準にして考えると遺物は原石群

第60表　各黒耀石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(2)

原産地	原石群名	分析個数	Ca/K x̄±σ	Ti/K x̄±σ	Mn/Zr x̄±σ	Fe/Zr x̄±σ	Rb/Zr x̄±σ	Sr/Zr x̄±σ	Y/Zr x̄±σ	Nb/Zr x̄±σ	Al/K x̄±σ	Si/K x̄±σ
長野県	霧ケ峰	171	0.138±0.009	0.066±0.003	0.104±0.011	1.339±0.057	1.076±0.047	0.360±0.023	0.275±0.030	0.112±0.023	0.026±0.002	0.361±0.013
	和田峠第一	143	0.167±0.028	0.049±0.008	0.117±0.011	1.346±0.085	1.853±0.124	0.112±0.056	0.409±0.048	0.139±0.026	0.025±0.002	0.355±0.016
	〃 第二	17	0.146±0.003	0.032±0.003	0.151±0.010	1.461±0.039	2.449±0.135	0.036±0.012	0.517±0.044	0.186±0.025	0.027±0.002	0.368±0.007
	〃 第三	62	0.248±0.048	0.064±0.012	0.114±0.011	1.520±0.182	1.673±0.140	0.274±0.104	0.374±0.048	0.122±0.024	0.025±0.003	0.348±0.017
	〃 第四	37	0.144±0.017	0.063±0.004	0.094±0.009	1.373±0.085	1.311±0.037	0.206±0.030	0.263±0.038	0.090±0.022	0.023±0.002	0.331±0.019
	〃 第五	47	0.176±0.019	0.075±0.010	0.073±0.011	1.282±0.086	1.053±0.196	0.275±0.058	0.184±0.042	0.066±0.023	0.021±0.002	0.306±0.013
	〃 第六	53	0.156±0.011	0.055±0.005	0.095±0.012	1.333±0.064	1.523±0.093	0.134±0.031	0.279±0.039	0.010±0.017	0.021±0.002	0.313±0.012
	鷹山・和田	53	0.138±0.004	0.042±0.002	0.123±0.010	1.259±0.041	1.978±0.067	0.045±0.010	0.442±0.039	0.142±0.022	0.026±0.002	0.360±0.010
	男女倉	119	0.223±0.026	0.102±0.010	0.059±0.008	1.169±0.081	0.701±0.109	0.409±0.052	0.128±0.024	0.053±0.017	0.026±0.002	0.354±0.008
	麦草峠	68	0.263±0.020	0.138±0.011	0.049±0.008	1.403±0.069	0.532±0.048	0.764±0.031	0.101±0.018	0.056±0.016	0.029±0.002	0.401±0.017
島根県	加茂	20	0.154±0.008	0.092±0.009	0.018±0.003	0.943±0.029	0.289±0.016	0.006±0.003	0.047±0.010	0.144±0.019	0.022±0.001	0.269±0.017
	津井	30	0.150±0.008	0.100±0.003	0.015±0.002	0.919±0.033	0.305±0.010	0.013±0.003	0.046±0.013	0.132±0.007	0.022±0.001	0.258±0.006
	久見	31	0.142±0.004	0.061±0.002	0.020±0.003	0.981±0.048	0.398±0.013	0.001±0.002	0.093±0.015	0.229±0.010	0.023±0.002	0.317±0.006
大分県	観音崎	41	0.216±0.017	0.045±0.003	0.428±0.057	6.897±0.806	1.829±0.220	1.572±0.180	0.325±0.088	0.622±0.099	0.035±0.002	0.418±0.011
	両瀬第一	33	0.221±0.021	0.045±0.003	0.450±0.061	7.248±0.668	1.917±0.194	1.660±0.173	0.355±0.057	0.669±0.105	0.035±0.002	0.419±0.009
	＊〃第二	32	0.634±0.047	0.140±0.013	0.194±0.026	4.399±0.322	0.614±0.077	3.162±0.189	0.144±0.031	0.240±0.041	0.038±0.002	0.451±0.011
	＊〃第三	10	1.013±0.140	0.211±0.026	0.126±0.016	3.491±0.231	0.305±0.067	4.002±0.174	0.109±0.021	0.137±0.028	0.040±0.004	0.471±0.017
	＊オイ崎	29	1.074±0.110	0.224±0.024	0.122±0.012	3.460±0.301	0.286±0.048	4.010±0.197	0.101±0.022	0.133±0.025	0.040±0.003	0.469±0.014
	＊稲積	25	0.653±0.066	0.141±0.016	0.189±0.030	4.398±0.425	0.605±0.096	3.234±0.264	0.151±0.033	0.245±0.050	0.037±0.002	0.448±0.015
	塚瀬	30	0.313±0.023	0.127±0.009	0.065±0.010	1.489±0.124	0.600±0.051	0.686±0.082	0.175±0.018	0.102±0.020	0.028±0.002	0.371±0.009
佐賀県	腰岳	26	0.214±0.015	0.029±0.001	0.076±0.012	2.694±0.110	1.686±0.085	0.441±0.030	0.293±0.039	0.257±0.029	0.027±0.002	0.356±0.008
長崎県	久喜ノ辻	37	0.165±0.012	0.066±0.002	0.034±0.003	1.197±0.030	0.403±0.012	0.005±0.004	0.114±0.012	0.326±0.008	0.024±0.002	0.294±0.008
	君ケ浦	28	0.161±0.011	0.064±0.002	0.034±0.003	1.209±0.032	0.405±0.008	0.005±0.004	0.119±0.016	0.322±0.010	0.025±0.002	0.294±0.006
	角川	29	0.138±0.010	0.037±0.002	0.056±0.007	1.741±0.083	1.880±0.076	0.012±0.012	0.303±0.038	0.652±0.036	0.026±0.002	0.358±0.010
	松浦第一	23	0.218±0.010	0.029±0.002	0.085±0.013	2.692±0.125	1.674±0.064	0.439±0.027	0.284±0.047	0.266±0.028	0.027±0.002	0.359±0.012
	〃 第二	17	0.176±0.016	0.030±0.004	0.062±0.022	2.364±0.389	1.607±0.245	0.308±0.074	0.277±0.056	0.210±0.050	0.026±0.002	0.361±0.010
	〃 第三	16	0.245±0.019	0.060±0.006	0.045±0.012	1.975±0.240	0.878±0.099	0.421±0.081	0.130±0.030	0.145±0.023	0.026±0.002	0.358±0.013
	〃 第四	22	0.287±0.019	0.067±0.004	0.044±0.007	1.906±0.106	0.765±0.074	0.484±0.034	0.115±0.023	0.117±0.018	0.028±0.001	0.367±0.007
	淀姫	44	0.329±0.014	0.080±0.005	0.042±0.007	1.804±0.065	0.539±0.022	0.504±0.035	0.077±0.018	0.117±0.014	0.029±0.002	0.374±0.009
	中町第一	25	0.248±0.017	0.058±0.008	0.057±0.007	1.884±0.085	0.832±0.092	0.403±0.026	0.112±0.021	0.152±0.017	0.026±0.002	0.363±0.007
	〃 第二	17	0.327±0.030	0.080±0.017	0.045±0.007	1.832±0.074	0.653±0.088	0.488±0.030	0.090±0.030	0.093±0.023	0.027±0.002	0.358±0.012
	古里第一	40	0.192±0.020	0.027±0.003	0.080±0.016	2.699±0.215	1.780±0.164	0.413±0.065	0.312±0.056	0.259±0.040	0.027±0.002	0.358±0.008
	〃 第二	22	0.414±0.012	0.073±0.006	0.102±0.015	2.898±0.204	1.221±0.094	1.951±0.124	0.133±0.047	0.261±0.034	0.031±0.002	0.383±0.010
	〃 第三	19	0.257±0.035	0.062±0.009	0.054±0.009	1.939±0.131	0.812±0.113	0.436±0.052	0.101±0.029	0.145±0.037	0.028±0.002	0.364±0.011
	大崎	25	0.161±0.011	0.051±0.002	0.037±0.006	1.718±0.056	0.948±0.030	0.179±0.018	0.191±0.026	0.137±0.019	0.024±0.002	0.340±0.006
熊本県	小国	30	0.317±0.023	0.127±0.005	0.063±0.007	1.441±0.070	0.611±0.032	0.703±0.044	0.175±0.233	0.097±0.017	0.023±0.002	0.320±0.007
	南関	30	0.261±0.016	0.214±0.007	0.034±0.003	0.788±0.033	0.326±0.012	0.278±0.015	0.069±0.012	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.008
	鼻	44	0.258±0.009	0.214±0.006	0.033±0.005	0.794±0.078	0.329±0.017	0.275±0.010	0.066±0.011	0.033±0.009	0.020±0.003	0.243±0.008
	冠ケ岳	21	0.261±0.012	0.211±0.008	0.032±0.003	0.780±0.036	0.324±0.011	0.279±0.017	0.064±0.011	0.037±0.006	0.025±0.002	0.277±0.009
	白浜	40	0.197±0.020	0.104±0.008	0.025±0.006	1.405±0.073	1.048±0.087	0.348±0.028	0.163±0.023	0.033±0.017	0.019±0.001	0.273±0.007
	桑ノ木津留											
	第一群	47	0.207±0.015	0.094±0.006	0.070±0.009	1.521±0.075	1.080±0.048	0.418±0.020	0.266±0.034	0.063±0.024	0.020±0.003	0.314±0.011
	第二群	33	0.261±0.015	0.094±0.006	0.066±0.010	1.743±0.095	1.242±0.060	0.753±0.039	0.205±0.029	0.047±0.036	0.022±0.002	0.323±0.019
鹿児島県	出水(日東)	42	0.262±0.018	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	0.712±0.028	0.408±0.025	0.100±0.018	0.029±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	五女木	37	0.266±0.021	0.140±0.006	0.019±0.003	1.170±0.064	0.705±0.027	0.405±0.021	0.106±0.015	0.028±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	上牛鼻	41	1.629±0.098	0.804±0.037	0.053±0.006	3.342±0.215	0.188±0.013	1.105±0.056	0.087±0.009	0.022±0.009	0.036±0.002	0.391±0.011
	平木場	34	1.944±0.054	0.912±0.028	0.062±0.005	3.975±0.182	0.184±0.011	1.266±0.049	0.093±0.010	0.021±0.010	0.038±0.003	0.408±0.010
	竜ケ水	28	0.514±0.032	0.167±0.008	0.063±0.009	1.524±0.079	0.619±0.038	0.719±0.054	0.115±0.019	0.082±0.016	0.037±0.003	0.523±0.009
	長谷	30	0.553±0.032	0.137±0.006	0.065±0.010	1.815±0.062	0.644±0.028	0.553±0.029	0.146±0.021	0.066±0.020	0.037±0.003	0.524±0.012
	JG-1 a)	127	0.755±0.010	0.202±0.005	0.076±0.011	3.759±0.111	0.993±0.036	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.028±0.002	0.342±0.004

x̄：平均値、　σ：標準偏差値、　＊：ガラス質安山岩

a)：Ando,A., Kurasawa,H., Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol.8, 175-192.

から0.2δ離れている。ところで二上山原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から±0.2δのずれより大きいものが84ヶある。すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、0.2δ以上離れる確率は84％であると言える。だから、二上山群の平均値から0.2δしか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものでないとは、倒底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群に比較すると、金山東群の平均値からの隔たりは、約18δである。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から18δ以上離れている確率は、一兆の百万倍分の一であると言える。このように、一兆の百万倍個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は二上山群に８４％、金山東群に一兆の一万倍分の一％の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を第58表のすべて

第61表　岐阜県藤橋村徳山地区遺跡出土の黒曜石製石器、剝片分析結果

試料番号	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	元素比 Fe/Zr	Rb/Sr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
31413	.143	.065	.127	1.550	1.174	.409	.264	.052	.022	.348
31414	.144	.071	.105	1.230	.956	.346	.229	.078	.025	.326
31415	.117	.056	.092	1.168	1.104	.431	.364	.160	.000	.241
31416	.377	.141-	.086	1.711	.451	.666	.248	.056	.030	.447
31417	.167	.066	.113	1.254	1.065	.340	.318	.079	.025	.306
31418	.154	.072	.110	1.285	1.083	.386	.287	.098	.023	.325
31419	.164	.071	.092	1.308	1.074	.344	.211	.109	.023	.306
31420	.096	.051	.111	1.381	1.170	.420	.273	.072	.017	.251
31421	.130	.040	.136	1.331	2.007	.029	.501	.083	.024	.321
31422	.135	.066	.105	1.706	1.157	.360	.338	.068	.023	.328
34723	.957	.275	.027	1.352	.130	.333	.132	.022	.000	.564

第62表　岐阜県藤橋村徳山地区遺跡出土のサヌカイト製石器、剝片分析結果

試料番号	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	元素比 Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
31423	.449	.218	.092	5.165	.294	.077	1.165	.026	.020	.165
31424	1.574	.206	.042	.796	.271	.040	.492	.036	.047	.607
31425	.461	.219	.097	5.143	.324	.050	1.173	.019	.021	.177
31426	.281	.224	.075	4.570	.223	.070	.625	.011	.017	.125
31427	.282	.224	.070	4.877	.217	.044	.592	.010	.016	.133
31429	.313	.194	.058	4.115	.221	.077	.600	.012	.017	.137
31430	.497	.192	.062	4.350	.229	.056	.602	.000	.017	.148
31431	.285	.226	.067	4.823	.214	.042	.653	.018	.015	.126
31432	.282	.217	.073	4.806	.208	.046	.650	.038	.015	.127
31433	1.520	.210	.033	.770	.276	.030	.492	.033	.045	.603
31434	32.339	3.256	.026	2.016	1.184	.000	.924	.087	.534	12.028
31435	.281	.218	.070	5.004	.194	.058	.594	.012	.016	.132
31436	.283	.219	.087	4.957	.204	.050	.616	.025	.015	.131
31437	.405	.224	.077	5.006	.213	.071	.677	.040	.013	.124
31438	.284	.226	.083	4.827	.187	.065	.614	.025	.015	.129
31439	.286	.219	.078	4.943	.215	.056	.627	.025	.015	.126
31440	.285	.229	.072	4.452	.207	.073	.644	.023	.013	.122
31441	.286	.224	.075	5.121	.190	.057	.610	.020	.016	.133
31442	.294	.228	.072	4.979	.188	.078	.654	.025	.015	.128
31443	.282	.229	.069	4.358	.243	.041	.630	.020	.015	.122
31453	2.288	1.071	.000	4.719	.378	.293	.858	.267	.000	27.617
31454	21.038	14.466	.021	8.194	.667	.260	1.189	.100	.000	70.271
31455	1.450	.217	.039	.746	.312	.012	.479	.042	.047	.593
31456	.267	.206	.076	5.035	.199	.055	.631	.028	.014	.124
31457	20.849	4.152	.039	1.478	.719	.018	.885	.059	.409	7.711

の原石群について行ない、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、二上山群の原産地だけとなり、二上山産地または和泉・岸和田原産地の石材が使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯１ヶの変量だけでなく、前述した６ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングT^2検定である。これによって、それぞ

第63表　岐阜県揖斐郡藤橋村徳山地区遺跡出土のサヌカイト、黒曜石遺物の原産地推定結果

試料番号	遺物出土遺跡、出土区番号	時代（伴出土器）	原石産地（確率）	判定	遺物品名
31413	1、戸入村平遺跡、SB1	縄文時代中期後葉	霧ヶ峰(1%)	霧ヶ峰	黒曜石、剥片
31414	2、〃、〃	〃	〃 (8%)	〃	〃、〃
31415	3、〃、SB2	〃	〃 (D^2=70)	〃	〃、微細片
31416	4、〃、8E、Ⅲ層	縄文時代中期～晩期	神津島第1群(71%)	神津島	〃、剥片
31417	5、〃、9K	〃	霧ヶ峰(1%)	霧ヶ峰	〃、〃
31418	6、〃、11J、Ⅱ層	〃	〃 (37%)	〃	〃、〃
31419	7、〃、5N、Ⅱ層	〃	〃 (4%)	〃	〃、〃
31420	8、〃、12M、Ⅰ層	〃	〃 (D^2=60)	〃	〃、〃
31421	9、上原遺跡、SK44	縄文時代前期(北白川下層式)	和田峠第一群(7%)、和田峠第二群(1%)	和田峠	〃、異形石器
31422	10、上開田村平遺跡、SK34	縄文時代中期～後期	霧ヶ峰(D^2=71)	霧ヶ峰	〃、微細片
34723	11、戸入村平遺跡、7L、Ⅱ層	縄文時代中期～晩期	柏峠西(9%)	柏峠西	〃、〃
31424	1、〃、SB1	縄文時代中期後葉	金山東(2%)	金山	サヌカイト、剥片
31425	2、〃、〃	〃	下呂(51%)	下呂	安山岩、〃
31426	3、〃、SB2	〃	金山東(30%)	金山	サヌカイト、〃
31427	4、〃、SB3	縄文時代中期中葉	二上山(15%)	二上山	〃、〃
31428	5、〃、SB4	縄文時代中期後葉	〃 (9%)	〃	〃、〃
31429	6、〃、〃	〃	〃 (D^2=81)	〃	〃、〃
31430	7、〃、10G	縄文時代中期～晩期		不明	〃？、〃
31431	8、〃、5M	〃	二上山(2%)	二上山	〃、〃
31432	9、〃、7M、Ⅱ層	〃	〃 (8%)	〃	〃、〃
31433	10、〃、6M、Ⅱ層	〃	下呂(72%)	下呂	安山岩、〃
31434	11、〃、9Ⅰ、Ⅰ層	〃		不明	頁岩、〃
31435	12、小の原遺跡、SB1	縄文時代前期(北白川下層Ⅱb期)	二上山(24%)	二上山	サヌカイト、〃
31436	13、〃、〃	〃 〃	〃 (17%)	〃	〃、〃
31437	14、〃、〃	〃 〃		不明	〃、〃
31438	15、〃、〃	〃 〃	二上山(6%)	二上山	〃、〃
31439	16、〃、〃	〃 〃	〃 (58%)	〃	〃、〃
31440	17、〃、〃	〃 〃	〃 (10%)	〃	〃、〃
31441	18、〃、SB2	縄文時代前期(北白川下層Ⅱc期)	〃 (20%)	〃	〃、〃
31442	19、〃、〃	〃 〃	〃 (5%)	〃	〃、〃
31443	20、〃、〃	〃 〃	〃 (0.2%)	〃	〃、〃
31453	21、〃、〃	〃 〃		不明	チャート？、〃
31454	22、〃、〃	〃 〃		〃	硬質頁岩、〃
31455	23、戸入村平遺跡、4Ⅰ、Ⅰ層	縄文時代中期～晩期	下呂(23%)	下呂	安山岩、〃
31456	24、〃、4E、Ⅲ層	〃	二上山(49%)	二上山	サヌカイト、〃
31457	25、〃、9F、Ⅳ層	〃		不明	頁岩、〃

れの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する[4,5]。藤橋村徳山地区の各遺跡より出土した遺物の産地推定の結果を第63表に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、小さな遺物試料の測定から原石試料と同じ測定精度で元素含有量を求めるには、測定時間を長時間かけなければならない。しかし、多数の試料を処理するために、1個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。原石産地（確率）の欄にマハラノビスの距離D^2値の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこのD^2の値が原石群の中で最も小さなD^2値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、

推定確率は低いが、そこの原石産地と考えてほゞ間違いないと判断されたものである。

今回分析した黒曜石遺物には霧ヶ峰産、和田峠産、神津島産、柏峠西産の各原石が使用され、またサヌカイト遺物には二上山産原石、金山産原石、下呂産原石が使用されているのが明らかになった。今回の結果は柏峠西産原石の西方伝播の限界となった。二上山産及び金山産原石と同じ組成の原石は和泉・岸和田の原産地からも６％及び１％の確率で採取される。従って二上山産と判定された遺物は、金山原産地、和泉・岸和田原産地、岩屋原産地を考えなければならない。これら複数の原産地から１ヶ所の原石産地に特定するには、多数の遺物を分析し各産地に同定される遺物の頻度分布から求めなければならない。今回の分析では、和泉・岸和田原産地及び岩屋原産地から比較的高い頻度で採取される岩屋第一、第二群の組成の遺物が本遺跡群から出土していない。また和泉・岸和田原産地近傍の遺跡でこの産地の原石が使用されたとする結果が得られず、近傍の遺跡でも二上山産（二上山産原石の組成以外の原石が使用されていない）のみが使用されているなどの理由により、今回二上山産原石と同定された遺物の原材産地を奈良県の二上山原産地の原石に、また、金山産は香川県金山原産地と特定した。

今回産地が判定できなかった遺物の多くは、サヌカイト以外の頁岩系の石材である。分析で遺物の原産地が特定できない理由としては、分析精度が悪くて本来一致する原産地の群から分析値が外れてしまう場合と未発見の別の原石産地が存在する場合が考えられる。後者を考慮して、産地が明らかにできなかったサヌカイト（安山岩）遺物については福井県、愛知県で産出する良質な石器原材と組成の比較を行った。茶臼山産原石は良質で石器の原材料になるようなものも見られる。三河安山岩と称しているサヌキトイド質の石材および福井県産の安山岩の分

第64表　愛知県下及び福井県下産出のガラス質安山岩の分析結果

試料番号	元素比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
31378	.302	.308	.112	7.430	.135	.100	1.093	.025	.016	.152
31379	.300	.315	.109	7.422	.141	.092	1.064	.028	.018	.148
31380	.299	.319	.098	7.271	.123	.088	1.078	.036	.019	.154
31381	.301	.318	.106	7.034	.137	.109	1.115	.040	.016	.144
31382	.303	.315	.112	7.529	.134	.113	1.101	.043	.016	.150
31383	.305	.563	.058	5.236	.104	.079	.826	.029	.017	.150
31384	.305	.563	.058	5.411	.104	.086	.847	.035	.013	.139
31385	.320	.551	.054	5.217	.094	.086	.842	.032	.017	.154
31386	.317	.531	.069	5.276	.110	.068	.875	.038	.016	.142
31387	.325	.524	.058	5.012	.129	.081	.848	.036	.016	.145
31388	.147	.288	.087	8.146	.116	.069	.631	.028	.013	.109
31389	.498	.361	.039	2.389	.147	.028	.657	.023	.021	.184
31390	.466	.340	.039	2.392	.136	.032	.654	.017	.021	.185
31391	.546	.368	.042	2.525	.152	.040	.701	.014	.020	.203
31393	1.321	.261	.056	2.775	.747	.168	.743	.089	.030	.405

31378～31382:愛知県豊根村茶臼山産原石（緻密で良質）、31383～31385:三河安山岩（サヌキトイド）、31386～31387:三河安山岩（亀甲石）、31388:勝山市法恩寺山産（良質部は小豆大）、31389～31391:福井県織田町越知山産、31393:標準試料－ＪＧ－１、（豊橋市教育委員会　小島　隆氏、岐阜県文化財保護センター　千藤克彦氏提供）

析も行い分析結果を第64表に示した。これら原石と遺物と比較した結果、一致するものは確認できなかった。今回の産地分析で岐阜県地域まで香川県の金山原石及び伊豆諸島の神津島産や伊豆半島の柏峠産の原石が伝播し、また中信高原産の原石がそれぞれ伝播している。このことは、石器は日常品であることから、遺跡の住人がこれら原石産地地域の情報を日常的に入手していると推考しても産地分析の結果と矛盾しないであろう。

第65表　岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

群　名	個　数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
岩屋第一群	２０個	３０％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	２２	３３	白峰群に一致
第三群	６	９	法印谷群に一致
〃	５	８	国分寺群に一致
〃	４	６	蓮光寺群に一致
〃	３	５	金山東群に一致
〃	２	３	和泉群に一致
〃	４	６	不明（どこの原石群にも属さない）

第66表　和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

群　名	個　数	百分率	岩屋原産地に関係する他群名
岩屋第一群	１２個	１７％	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和　泉　群	９	１３	〃　〃　〃
岩屋第二群	６	８	白峰群に一致
	４	６	二上山群に一致
	１	１	法印谷群に一致
	１	１	金山東群に一致
	３９	５４	不明（どこの原石群にも属さない）

参考文献

1)　藁科哲男・東村武信（1975）「蛍光Ｘ線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（II）」『考古学と自然科学、8:61-69』

2)　藁科哲男・東村武信・鎌木義昌（1977），（1978），「蛍光Ｘ線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（III）、（IV）」『考古学と自然科学』，10，11:53-81:33-47

3)　藁科哲男・東村武信（1983）「石原材の産地分析」『考古学と自然科学　16:59-89』

4)　東村武信（1976）「産地推定における統計的手法」『考古学と自然科学　9:77-90』

5)　東村武信（1980）「考古学と物理化学」『学生社』

戸入村平遺跡出土の垂玉の産地分析

藁科哲男、東村武信
（京都大学原子炉実験所）

はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたかということを調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイの原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[1)]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光Ｘ線分析で行う元素比法[2,3)]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では蛍光Ｘ線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例[4)]が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を表しているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉は岐阜県揖斐郡藤橋村戸入の戸入村平遺跡の縄文時代晩期？の層から出土した１個の垂玉の分析結果が得られたので報告する。

非破壊的での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

第67表　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(1)

原産地名	分析個数	蛍光X線法による元素比の範囲 比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00～3.35	0.01～0.17	0.01～0.56	0.15～30	0.00～2.94	0.72～27.6
若桜産	12	3.12～3.29	0.01～0.91	0.03～0.59	3.45～47	0.00～0.25	4.33～48.4
大佐産	20	2.85～3.17	0.01～0.07	0.00～1.01	3.18～61	0.00～12.4	3.47～28.6
長崎産	3	3.16～3.23	0.01～0.14	0.17～0.33	0.02～0.06	4.30～16.0	
日高産	22	2.98～3.29	0.00～0.01	0.00～0.02	0.00～0.37	0.00～0.063	5.92～51.6
引佐産	8	3.15～3.36	0.04～0.04	0.00～0.03	0.03～0.33	0.00～0.018	36.3～65.9
大屋産	18	2.96～3.19	0.03～0.08	0.04～0.16	1.08～79	0.02～0.48	0.95～4.81
神居コタン産	9	2.95～3.19	0.02～0.49	0.09～0.17	0.04～0.22	0.12～0.85	2.22～17.3
飛騨産	40	2.85～3.15	0.01～0.04	0.00～0.00	0.02～0.10	0.00～1.24	12.7～28.5
ミャンマ産	26	3.15～3.36	0.02～0.14	0.01～0.26	0.09～2.5	0.01～23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND：検出限界以下の濃度

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊的で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している[5]非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はＥＳＲ法を併用するのが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産[6]、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(7)兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9)岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくされていると思われる。これら原石の原産地を第154図に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国の春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

第68表　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(2)

原産地名	蛍光X線法による分析元素（各元素が確認できた個体数の百分率）							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND：検出限界以下　　tr：検出確認

ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム（Na）、アルミニウム（Al）、珪素（Si）などの軽元素[7]で、次いで比較的含有量の多いカルシウム（Ca）、鉄（Fe）、ストロンチウム（Sr）である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム(K)、チタニウム(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、ルビジウム(Rb)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオビウム(Nb)、バリウム(Ba)、ランタニウム(La)、セリウム(Ce)の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい。しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出きる方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原

石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピークが見られ、Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素（As）のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2～3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色の原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は３個しか分析できなかったが良質である。このうち１個は濃い緑色で、他の２個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

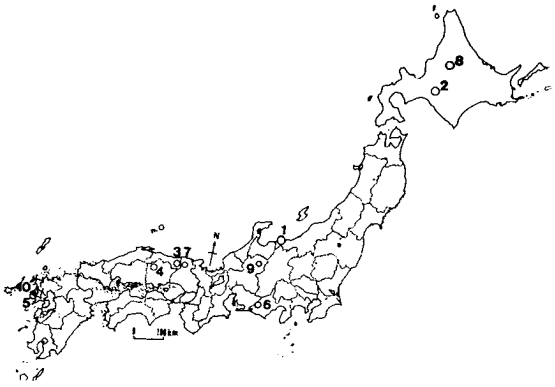
原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石の分析データーから引き出すが、分析個数が

少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。第67表に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr／Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。第68表の判定基準(2)にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ce、の各元素の蛍光X線ピークが観測できた個体数を％で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

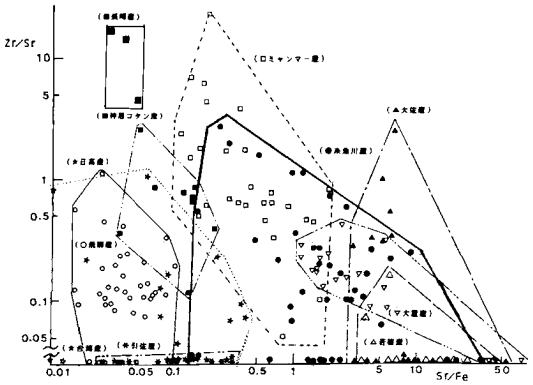
第155図はヒスイ原石のSr／Feの比の値とZr／Srの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Feの値（横軸）2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピークが見られなかった場合、第68表の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および＊印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Fe比を指標とすることにより（第156図）、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより（第157図）、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

ヒスイ製勾玉の分析結果と考察

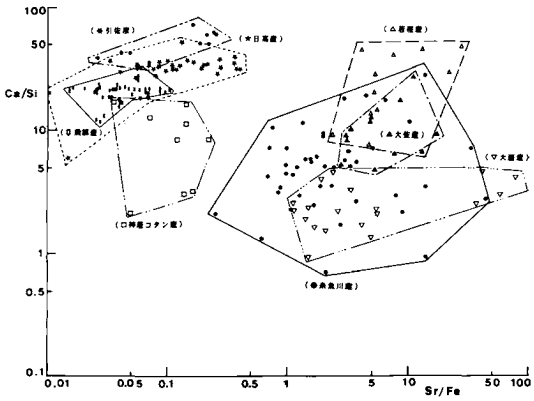
分析した垂玉の比重は3.216（アルキメデス法）で、蛍光X線分析で主成分組成のNa元素が観測されたヒスイ製丸玉は、比重も硬玉の範囲に入り硬玉製垂玉と考察した。垂玉の蛍光X線スペクトルを第161図に、比重およびK/Ca、Ti/Ca、Sr/Fe、Zr/Sr、Ca/Si、Na/Si、Mg/Siなど



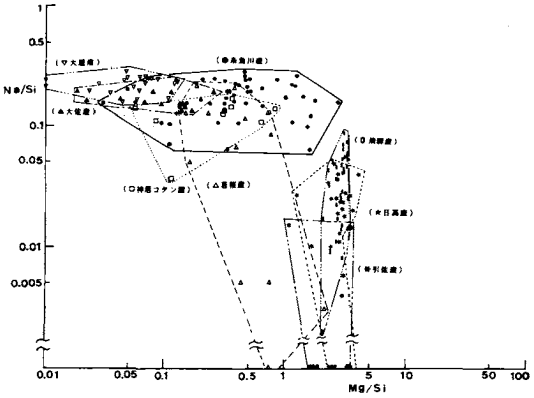
第154図　ヒスイとヒスイ類似岩の原産地



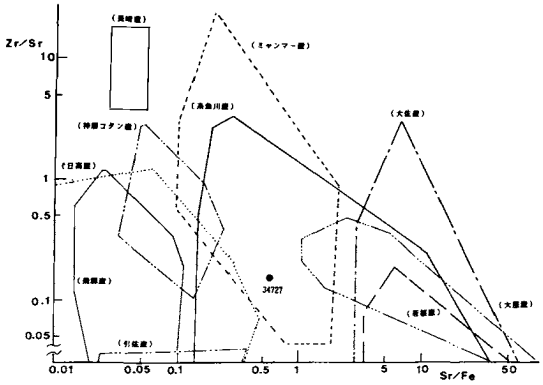
第155図　ヒスイ原石の元素比値Zr/Sr対Sr/Feの分布および分布範囲



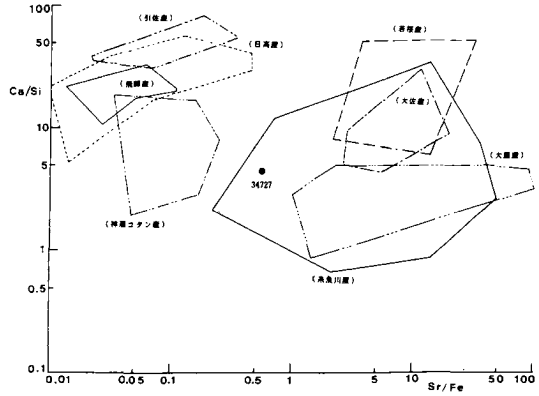
第156図　ヒスイ原石の元素比値Ca/Si対Sr/Feの分布および分布範囲



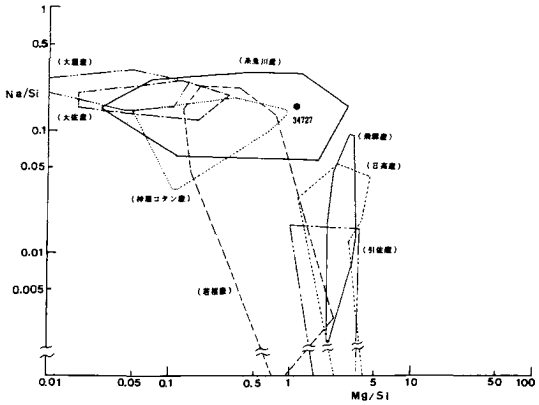
第157図　ヒスイ原石の元素比値Na/Si対Mg/Siの分布および分布範囲



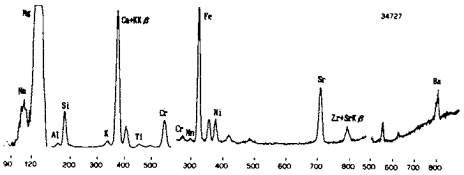
第158図　戸入村平遺跡出土の硬玉製垂玉のZr/Sr対Sr/Feの分布



第159図　戸入村平遺跡出土の硬玉製垂玉のCa/Si対Sr/Feの分布



第160図　戸入村平遺跡出土の硬玉製垂玉のNa/Si対Mg/Siの分布



第161図　硬玉製垂玉(34727)の傾向X線スペクトル

第69表　戸入村平遺跡出土の硬玉製垂玉の元素分析値の比量と比重

分析番号	遺物番号	元素分析値の比量 K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si	Na/Si	Mg/Si	分析元素の有無 ○有、△微量、×無 Nb	Ba	La	Ce	試料比重	試料重量
34727	1, TMP-414	0.043	0.023	0.564	0.157	4.206	0.162	1.080	×	△	×	×	3.216	2.380
JG－1[a]		1.325	0.280	0.341	0.752	2.696	0.006	0.068	加圧固化整形試料					

a):標準試料、Ando,A., Kurasawa,H.,Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192.

第70表　戸入村平遺跡出土の硬玉製垂玉の原材産地分析結果

分析番号	各分類基準による判定 図５判定	図６判定	図７判定	比重＆基準(2)	Ni/Fe判定[a]	総合判定
34727	IT	IT	IT	IT	0.16	糸魚川産

IT：糸魚川 WK：若桜 OS：大佐 NG：長崎 HK：日高 IN：引佐 OY：大屋
KM：神居コタン HD：飛騨 、＊＊：判定より少しずれる。
a)：（飛騨産原石、４２個の平均値±標準偏差）Ni/Fe=0.091±0.030
（日高産原石、１４個の平均値±標準偏差）Ni/Fe=0.065±0.028

の各比値を求め第69表に示した。また各原産地の原石の元素比量の分布範囲と比較し第158、159、160図に示した。第158、159、160図で垂玉は糸魚川産のみの範囲に入り、また、比重と判定基準(2)の含有元素の有無などの判定を総合して、硬玉、軟玉製の勾玉の原材産地を推測した。その結果分析した垂玉の原石産地は糸魚川産と推定された（第70表）。

参考文献

1) 茅原一也（1964）「長者ヶ原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）」『長者ヶ原』新潟県糸魚川市教育委員会：63-73
2) 藁科哲男・東村武信（1987）「ヒスイの産地分析」『富山市考古資料館紀要6:1-18』
3) 藁科哲男・東村武信（1990）「奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析」『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷　14:95-109』
4) Tetsuo Warashina（1992）「ALLocation of Jasper Archaeological Implements By Means of ESR and XRF」『Journal of Archaeological Science 19:357-373』
5) 藁科哲男・東村武信（1983）「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学16:59-89』
6) 番場猛夫（1967）「北海道日高産軟玉ヒスイ」『調査研究報告会講演要旨録No.18:11-15』
7) 河野義礼（1939）「本邦における翡翠の新産出及び其科学的性質」『岩石礦物鉱床学雑誌　22:195-201』
8) 東村武信（1976）「産地推定における統計的手法」『考古学と自然科学　9:77-90』

戸入村平遺跡出土炭化材の樹種同定および炭化種実同定

藤根　久・吉川純子（パレオ・ラボ）

1．はじめに

戸入村平遺跡は、藤橋村戸入地内に所在する縄文時代中期の遺跡である。この遺跡からは、縄文時代中期を中心とした遺構から、炭化材や炭化種実が出土している。

ここでは、これら炭化材の樹種同定あるいは炭化種実同定の結果について記述する。なお、炭化材の同定は藤根、炭化種実の同定は吉川がそれぞれ担当した。

2．炭化材の処理方法と記載（図版62～64）

試料は、実体顕微鏡下で横断面について観察し、同定できる試料と同定できない試料とに分類する。これら同定できない試料と同定される典型試料は、片刃カミソリなどを用いて試料の横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柾目と同義）の３断面について作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM

第71表　戸入村平遺跡出土炭化材および炭化種実

No.	遺　構	位　置	時　代	炭化材および炭化種実（（ ）内検出点数）
1	1号住居		中期後半	材：ク　リ
2	〃	東西ベルト内	〃	材：ク　リ（多量）
3	〃	北西区	〃	材：ク　リ
4	2号住居	土器溜り	〃	材：ク　リ
5	〃	炉跡	〃	材：クリ
				種子：オニグルミ核破片(5)
6	3号住居		〃	材：ク　リ
7	〃	土器敷炉？東半分	〃	材：ク　リ
8	4号住居	北西区	〃	材：ブナ属(2)
9	〃	南東区	〃	材：ケヤキ、カエデ属(2)
				種子：オニグルミ核破片(4)、不明堅果種子破片(3)
10	〃		〃	材：カエデ属(2)、ク　リ
				種子：トチノキ果皮破片(2)
11	124号ピット		—	種子：アズキ近似種種子（多数）
12	126号ピット		中期後半	材：ク　リ
13	211号ピット		—	材：ク　リ
14	327号ピット		中期	種子：トチノキ果皮破片(8)、不明堅果種子破片(12)
15	456号ピット		〃	種子：トチノキ種子破片(9)
16	601号ピット		〃	種子：トチノキ種子破片(1)
17	712号ピット		〃	材：オニグルミ
18	25号土坑		中期？	材：ク　リ
19	29号土坑		中期	材：ク　リ
20	32号土坑		〃	材：ク　リ
21	75号土坑		〃	材：カエデ属
22	162号土坑		—	材：ス　ギ
23	174号土坑		—	材：ス　ギ
24	203号土坑		中期	材：ハンノキ節・ブナ属・コナラ節・カバノキ属
				種子：トチノキ果皮破片(8)
25	215号土坑		〃	材：コナラ節
				種子：不明堅果種子破片(2)
26	220号土坑		〃	種子：トチノキ種子破片(13)、同果皮付種子破片(32)
				同種皮破片(20)、不明堅果種子破片(43)
27	12GIII層		—	種子：アワ果実（塊状）

T-100型)で観察する。樹種同定は、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載と同定の根拠を示す。また、同定の結果は、炭化種実と合わせて第71表に示す。

スギ　Cryptomeria japonica　(Linn. fil.) D.Don スギ科　図版62—1a～1c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行はゆるやかである(横断面)。分野壁孔は、水平方向に長軸をもったスギ型で、1分野に2個見られる(放射断面)。放射組織は、単列で2～6細胞高からなる(接線断面)。

以上の形質から、スギ科スギ属のスギの材と同定される。スギは東北から九州にかけての温帯から暖帯にかけて分布する常緑針葉樹である。

オニグルミ　Juglans ailanthifolia Carr.　クルミ科　図版62—2a～2c.

大型の管孔がやや径を減じながら単独または放射方向に2～4個複合して散在する散孔材で、軸柔細胞は短接線状に1列に並ぶ(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性に近い同性で、1～4細胞幅、3～36細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クルミ科クルミ属のオニグルミの材と同定される。オニグルミは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ケヤキ　Zelkova serrata　(Thunb.) Makino　ニレ科　図版62—3a～3c.

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、晩材部では小管孔が2～8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる(放射断面)。放射組織は、異性1～7細胞幅、2～50細胞高からなり、大型の結晶細胞が見られる(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科ケヤキ属のケヤキの材と同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

ハンノキ節　Alnus sect. Gumnothysus　カバノキ科　図版63—4a～4c.

中型の管孔が放射方向または塊状に2～4個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、8本程度の階段状である(放射断面)。放射組織は同性で、単列もしくは2細胞幅、3～30細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科ハンノキ属のハンノキ節の材と同定される。ハンノキ節の材には、平野部の水湿地に生育するハンノキ(A. japonica)、平野部から山地の斜面にかけて生育するヤマハンノキ(A. hirsuta)、そして山地に生育するヤシャブシ(A. firma)などが分布している。ハンノキ節の樹木は、いずれも樹高20m、幹径50cmに達する落葉広葉樹である。

カバノキ属　Betula　カバノキ科　図版63—5a～5c.

やや丸い中型の道管が単独あるいは2～4個放射方向に複合してほぼ均一に散在する散孔材である（横断面)。道管のせん孔は11本程度の横棒からなる階段状である（放射断面)。放射組織は異性で１～３細胞幅、２～30細胞高程度である（接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科のカバノキ属の材と同定される。カバノキ属の樹木には、樹高25m、幹径１mに達するウダイカンバ（B. maximowicziana）や亜高山帯上部に広く分布するダケカンバ（B.ermanii)、山地帯の二次林に多いシラカンバ（B.platyphylla var.japonica）など10種類ほどある。

ブナ属　Fagus ブナ科　図版63—６a～６c.

丸い小型の管孔がほぼ単独で散在し、晩材部にかけて径を除々に減ずる散孔材である（横断面)。道管のせん孔は単一あるいは数本の横棒からなる階段状である（放射断面)。放射組織は同性で、細胞幅の広い複合放射組織からなる（接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のブナ属の材と同定される。日本に分布するブナ属の樹木には、温帯に生育するブナ（F. crenata）と中間温帯に分布するイヌブナ（F.japonica）の２種類がある。いずれも樹高25～30mに達する落葉広葉樹で、北海道から九州の温帯に分布する。

コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus ブナ科　図版64—7a～7c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である。また、木部柔組織は短接線状に配列する（横断面)。道管のせん孔は単一である（放射断面)。放射組織は単列同性のものと集合放射組織からなる（接線断面)。

以上の形質からブナ科コナラ属のコナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ（Q. serrata）やミズナラ（Q.mongolica var.grossesrrata)、カシワ（Q.dentata)、ナラガシワ（Q. aliena）などがある。いずれの樹木も樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹で、温帯から暖帯にかけて広く分布する。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科　図版64—８a～８c.

年輪のはじめに大型の管孔が１～３列並び、そこから除々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する（横断面)。道管のせん孔は単一である（放射断面)。放射組織は柔細胞で単列同性であり、時に２細胞幅で、２～12細胞高である（接線断面)。

以上の形質からブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径１mに達する落葉広葉樹である。

カエデ属　Acer カエデ科　図版64—9a～9c.

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2～5複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は帯状または雲紋状を呈する(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がかすかに認められる（放射断面)。放射組織は、同性1～5細胞幅、1～35細胞高である（接線断面)。

以上の形質から、カエデ科のカエデ属の材と同定される。カエデ属の樹木は、樹高15m前後のイロハモミジ（A.palmatum）や樹高20mに達するイタヤカエデ（A.mono　Maxim.　var. marmoratum）など全国の暖帯から亜寒帯まで広く分布し、その種類も20種以上と多い。

3．炭化種実の特徴記載（図版60・61）

炭化種実は、実体顕微鏡下で形状あるいは表面形態を中心に観察し、現生標本との比較によりその同定を行う。以下では、出土した炭化種実の各分類群の特徴記載について述べる。

オニグルミ（Juglans ailanthifolia Carr.）　クルミ科

核の破片を出土した。オニグルミの核は木質で堅く、表面には緩い凹凸と浅く細い溝が不規則に入る。核壁は断面が緻密で、間に空隙がある場合もある。特徴的な表面形態を有するため、比較的微少な破片でも同定が可能である。

トチノキ（Aesculus turbinata Blume）　トチノキ科

いずれも破片である。表面や割れ口には凹凸が見られ、しわも多い。果皮が、種子の周囲に付着しているものもある。

アズキ近似種（Vigna cf. angularis Ohwi et Ohashi）　マメ科

種子は円筒形であるが、種皮が完全に残っているものは少ない。種皮が完全に残っているものでは、へそがはっきり残っており、へそは全長の50%前後で一側に偏っていることから、アズキの仲間であることがわかる。長さは6㎜以下で、現在食用とされているアズキよりやや小さいものが多い。ここではアズキ以外の比較標本がないため、アズキ、ツルアズキ、ヤエナリのいずれであるかは断定できない。ツルアズキは、インド原産でかつては各地の田の畦などで作っていたが現在ではほとんどない。ヤエナリは、インド原産でリョクトウとも呼ばれアズキよりやや小さく、現在では豆もやしで利用されている。

アワ (Setaria italica Beauv.)　イネ科

果実は1.6㎜程度で、球形に近く、穎が残っているものが多い。粒同士は熱のために接着し塊状になっている。

堅果

ブナ科、あるいはトチノキなどの果実の種子の部分が炭化して破片になったと思われるが、特徴に欠けるため、種類は不明である。割れ方はトチノキに似る。

第7章　ま　と　め

徳山ダム建設に伴って廃村となった旧徳山村内の考古学的遺跡は、地元の研究者を中心とする弛みない踏査と、昭和61年度に始まる発掘調査によって、旧石器時代から中・近世にわたる30数ヵ所を数えるに至ったが、中でも縄文時代遺跡は20ヵ所に及び、草創期から晩期までほとんど絶えることなく続いたことが明らかになり、標高 1,200m前後の峰に囲まれた福井県・滋賀県と境を接する揖斐川上流域のこの山深い地が、東日本・西日本の各地や東海・北陸から伝えられた文化の交流の要衝であり、人々の営みの中心地でもあり、また縄文時代文化の一大拠点でもあったことが、しだいに明らかにされ、学界の注目を集めるようになった。

昭和63年度と平成元年度の２年次にわたる戸入村平遺跡での2,300m²余りの発掘によって検出された層序、出土遺構・遺物の概要は次のように要約できるであろう。

基本的層序は、表土・耕作土層（第Ⅰ層）と地山層（第Ⅳ層）の間に、厚さ10～40cmの暗褐色土層（第Ⅱ層）と、厚さ15～40cmの黒褐色土層（第Ⅲ層）が識別された。この両層が主として縄文時代中期から晩期までの遺物包含層で、その他、中・近世の遺物も認められたが、一方、この地は廃村までの大字戸入字村の内の人々の生活の場であり、家屋や付随施設等による削平・掘削が遺物包含層や地山まで及んでおり、包含層の攪乱がはげしく、層序別に出土遺物を考察することは困難な状況であった。

出土遺物の総点数は95,000点余りにのぼり、その98%は縄文時代の遺物で、時期を判別できる土器からみると、その９割以上は中期後半のものが占め、その他、後期・晩期のものとごく少量ながら早期のものが認められた。

検出された遺構のうち、所属時期を判別できたものは、縄文時代中期後半の住居跡８軒と、後期・晩期の土器棺墓13基であるが、この他に時期の不明な遺構として配石土坑１基の他、土坑・ピットの類1,431個がある。

出土遺物の中心である縄文時代中期の土器は型式学的に、11群に類別された。そのうち中期中葉に含められるものが５群――西日本系の船元Ⅱ・Ⅲ式に類似する群（Ｃ１群）、船元Ⅲ式の在地化した島崎Ⅱ式に含められる群（Ｃ２群）、東海系の北屋敷式に類似する群（Ｃ３群）、信州系の勝坂式・平出Ⅲ類Ａ群に類似する群（Ｃ４群）、北陸系の上山田式・古府式類似の群（Ｃ５群）――となる。

中期後葉に含められるものは６群――船元Ⅳ式・里木Ⅱ式系に属する群（Ｃ６群）、咲畑式Ａ類に類似する群（Ｃ７群）、神明式１群Ｂ類似の群（Ｃ８群）、加曽利ＥⅡ式・曽利Ⅲ式の影響により在地化した取組式・島崎Ⅲ式に類似する群（Ｃ９群）、北白川Ｃ式に類似の群（Ｃ10群）、島崎Ⅲ式～山の神式類似の群（Ｃ11群）――が識別された。

現段階では各群の中の細別や型式変化の過程も必ずしも十分に解明されたとはいえないが、

各時期ごとの文化変化問題解明に向けて、１つの糸口を与えることはできたであろう。今後さらに調査の進展とともに検討を重ねていくべき多くの課題もまた残されている。

戸入村平遺跡の他に、西谷川の上流域では、これまでに調査が行われた縄文時代遺跡として、対岸の段丘上に位置するはいづめ遺跡と小の原遺跡が指呼の間にある。これら３遺跡の存続した時期は、小の原遺跡が縄文時代早期～前期、戸入村平遺跡が中期中葉～晩期中葉、はいづめ遺跡が晩期後葉～弥生時代前期であり、これらの相接して存在する３遺跡は、縄文時代早期から弥生時代前期に至るまで、その間、時期的に若干の空白部分が認められるけれども、連続して生活の営まれた１つの集落とみることができるであろう。

戸入村平遺跡の８軒の住居跡は、炉跡あるいは覆土中から検出された土器の観察から、いずれも中期に属するものと判断され、またそのうち３軒は中期中葉に、５軒は中期後葉に位置づけられるが、さらに、中葉の３軒は第３号（船元II期）、第８号（船元III期）、第７号（船元IV期）の順に相次いで構築されたものと考えられ、中期後葉の５軒は加曽利ＥＩ期～III期に属し、そのうち３軒は第５号―第４号―第１号の順序で加曽利ＥＩ期～ＥII期の間に相次いで建てられたものと思われるが、第４号と第１号住居跡は同時期に存在した可能性も指摘される。第２号と第６号は加曽利ＥII期の新しい段階からＥIII期にあたるものであろう。

住居跡の平面形は、中期中葉の３軒がいずれも隅丸方形を呈するのに対し、中期後葉の最初に構築された第５号住居跡が同じく隅丸方形であるのに対し、その他の４軒は第６号住居跡を例外とみるなら、他は、いずれも円形であることから、この遺跡に関する限りは、縄文時代中期の住居の形は隅丸方形から円形に遷移したとみてよいであろう。

住居跡の他に、縄文時代の遺構と認められた土器埋設遺構13基は、検出時の状況から勘案して土器棺墓の範疇に含められた。埋設時期を判別できたものは、後期前葉の福田Ｋ２式あるいは中津式類似の型式に属するものが計４基で、後期の土器棺に一般的な単棺・立位の状態で埋設されているが、うち１基は斜位に埋納され、また底部穿孔のものも１例認められる。晩期に属するものは７基で、いずれも粗製土器を使用し、晩期中・後葉の稲荷山式ないし西之山式期に属し、単棺のもの、土器破片を蓋としたもの、合口棺のものが認められ、埋設状況は立位のもの、斜位のもの、横位のものなど様々で、一定の埋設様式は認められない。

今回検出された遺構の分布をみると、住居跡は発掘区の北区に集中する傾向があり、一方、土坑・ピットの配置も調査区中央部の西半分ではやや疎で、その空白部を取り囲むように馬蹄形に濃密に分布する傾向がみられ、住居跡の分布域と重なっているようである。今回は住居跡として検出されなかった遺構の中にも住居跡であった可能性の残された遺構も存在し、２年次にわたった今回の発掘区の北側部分（道路部分）の調査も含めて、戸入村平の縄文時代の集落の全体像をさらに検討する必要があるといえよう。

（大参　義一）

引用・参考文献

愛知県埋蔵文化財センター　1991　『麻生田大橋遺跡』
1993　『東光寺遺跡』

愛知考古学談話会　1985　『条痕文系土器をめぐる諸問題』資料編Ⅰ

愛知考古学談話会・三河考古刊行会　1991　『突帯文土器の始まり』（第94回愛知考古学談話会９月定例会資料）

赤羽一郎　1984　『常滑焼』（考古学ライブラリー23　ニューサイエンス社）

網谷克彦　1992　「Ⅳ出土遺物　Ⅰ縄文土器」　『北寺遺跡』（福井県三方町教育委員会）

石川県立埋蔵文化財センター　1983　『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅳ）』

石原哲彌　1992　「飛驒の地理と下呂石の動き」　『特別展・飛驒のあけぼの　展示図録』（岐阜県博物館）

泉拓良　1982　「西日本縄文土器再考―近畿地方縄文中期後半を中心に―」　『考古学論考　小林行雄博士古希記念論文集』（平凡社）
1988　「咲畑・醍醐式土器様式」　『縄文土器大観３・中期Ⅱ』（小学館）

泉拓良・玉田芳英　1986　「文様系統論―縁帯文土器―」　『季刊考古学』第17号（雄山閣）

和泉村教育委員会　1976　『和泉村の埋蔵文化財』
1978　『後野遺跡』

磯部幸男・久永春男他　1960　『咲畑貝塚』（愛知県知多郡師崎町立師崎中学校）

伊藤禎樹・篠田通弘　1982　「美濃徳山村の切目石錘（越美山系をめぐって）」　『岐阜史学』76号

揖斐郡教育会　1993　『岐阜県揖斐郡　ふるさとの自然』

揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い　1994　『第12回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集いレジュメ集』

岩瀬彰利　1991　「咲畑式土器の分布とその背景―縄文時代の通婚圏―」　『三河考古』第４号

岩田修　1993　「「下呂石」は流紋岩となり、若返った」　『どっこいし』44

牛丸周太郎・梶田澄雄　1963　「揖斐川上流地域学術調査報告（地質）」　『揖斐川上流域総合学術調査報告書』（岐阜県教育委員会）

恵那市教育委員会　1982　『阿木川ダム関係遺跡発掘調査報告書』

小江慶雄　1954　「滋賀県醍醐遺跡発見の縄文式土器」　『京都学芸大学学報』Ａ（文科）No.5

大江上　1984　「縄文中期後半の土器編年について―木曽川下流の場合」　『岐阜県考古』９号

大野市教育委員会　1985　『右近次郎遺跡Ⅱ』

大参義一　1972　「縄文式土器から弥生式土器へ―東海地方西部の場合―（Ⅰ）」　『名古屋大学文学部研究論集』ＬⅥ
1978　「東海地方西部における縄文時代後期前半期の土器について」　『名古屋大学文学部研究論集』ＬＸＸⅣ

岡村秀雄・新深節生　1991　「栗毛坂遺跡群Ａ地区　石器」　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２―佐久市内その２―』（長野県埋蔵文化財センター）

小川栄一　1952　『美濃の石器時代文化』（梅田書院）

奥義次　1987　『大宮町の先史遺跡』

奥川弘成　1986　「咲畑貝塚の咲畑式土器」　『知多古文化研究』２　（知多古文化研究会）
1990　「知多半島における縄文時代中期の諸相（その１）」　『知多古文化研究』６　（知多古文化研究会）
1993　「知多半島における縄文時代中期の諸相（その２）―咲畑式土器の出現期の問題―」　『知多古文化研究』７　（知多古文化研究会）

小澤一弘　1975　「美濃徳山村宮ヶ原遺跡出土の縄文時代遺物」　『古代文化』第27巻第10号

各務原市教育委員会　1973　『炉畑遺跡発掘調査報告書』
各務原市埋蔵文化財調査センター　1993　『八龍遺跡Ｂ地区発掘調査報告書』
加賀市教育委員会　1985　『藤ノ木遺跡』
勝山市教育委員会　1982　『三室遺跡調査概要』
　　1983　『三室遺跡調査概要II』
　　1984　『三室遺跡調査概要III』
金沢市教育委員会　1984　『金沢市新保本町チカモリ遺跡―石器編―』
　　1986　『金沢市新保本町チカモリ遺跡―第４次発掘調査兼土器編―』
金沢市埋蔵文化財調査委員会　1981　『金沢市笠舞遺跡』
可児町北裏遺跡発掘調査団　1973　『北裏遺跡』
可児町教育委員会　1976　『宮之脇遺跡発掘調査報告書』
上矢作町教育委員会　1983　『道下』
河合村教育委員会　1969　『下小鳥ダム関係埋蔵文化財調査報告書』
京都教育大学考古学研究会　1989　「考古学資料室所蔵遺物の資料紹介」　『史想』第22号
京都大学文学部博物館　1991　『先史時代の北白川』
京都大学埋蔵文化財研究センター　1985　『京都大学埋蔵文化財調査報告III―北白川追分町縄文遺跡の調査―』
岐阜県　1972　『岐阜県史　通史編原始』
岐阜県教育委員会　1984　『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書』
　　1989　『はいづめ遺跡』
　　1991　『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』
岐阜県文化財保護センター　1993　『追分遺跡・下開田村平遺跡』
串原村教育委員会　1988　『大平遺跡―発掘調査報告―』
小井土由光　1994　「奥美濃地域の火成岩類」　『美濃山地の自然』（岐阜県博物館）
紅村弘　1957　『東海の先史遺跡―美濃編―』
紅村弘・増子康真他　1977　『東海先史文化の諸段階　資料編Ｉ』
　　1978　『東海先史文化の諸段階　資料編II』
小林謙一　1994　「竪穴住居の廃絶時の姿―ＳＦＣ遺跡・大橋遺跡の縄文中期の事例から―」　『日本考古学協会第60回総会研究発表要旨』
小林達雄　1994　『縄文土器の研究』（小学館）
小林達雄・小川忠博　1988　『縄文土器大観２・中期Ｉ』（小学館）
　　1988　『縄文土器大観３・中期II』（小学館）
　　1988　『縄文土器大観４・後期・晩期・続縄文』（小学館）
小林達雄他　1981　『縄文文化の研究４・縄文土器II』（雄山閣）
後藤信幸・吉田英敏　1984　「洞戸村底津遺跡について―石錘考―」　『岐阜県考古』第９号
齊藤基生　1993　「下呂石―飛騨・木曽川水系における転石のあり方―」　『愛知女子短期大学研究紀要』第26号
　　1994　「下呂石の定点採集」　『縄文時代』第５号（縄文時代文化研究会）
篠田通弘　1986　『大昔の徳山村―縄文人の息吹きを追って―』（徳山村教育委員会）
島田市教育委員会　1989　『東鎌塚原遺跡発掘調査報告書』
白川町教育委員会　1983　『薬師遺跡発掘調査報告書』
　　1984　『広島遺跡発掘調査報告書』
新宿区内藤町遺跡調査会　1992　『内藤町遺跡』
鈴木公雄・林謙作編　1981　『縄文土器大成４―晩期』（講談社）
鈴木保彦他　1980　『神奈川考古第10号　縄文時代中期後半の諸問題―とくに加曽利Ｅ式と曽利式土

器との関係について―　土器資料集成図集』
関市教育委員会　1985　『山王遺跡』
瀬戸市教育委員会　1990　『尾呂』
1991　『古瀬戸小西遺跡』
瀬戸市史編纂委員会　1993　『瀬戸市史　陶磁史篇四』
1993　『瀬戸市史　陶磁史篇五』
第１回東海考古学フォーラム豊橋大会実行委員会　1993　『突帯文土器から条痕文土器へ―伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まり―』
高山市教育委員会　1991　『垣内遺跡発掘調査報告書』
田口昭二　1983　『美濃焼』（考古学ライブラリー17　ニューサイエンス社）
巽三郎・中村貞史　1969　『鷹島』（南紀考古同好会）
多治見市教育委員会　1993　『美濃窯の焼物』（多治見の古窯第３号）
田中清文　1984　「伊那谷縄文中期後半土器編年への展開」　『中部高地の考古学III』
田辺昭三編　1973　『湖西線関係遺跡調査報告書』（湖西線関係遺跡発掘調査団）
茅野市教育委員会　1986　『高風呂遺跡』
千葉豊・冨井眞　1993　「III遺物　１縄文土器」　『浜詰遺跡発掘調査概要』（網野町教育委員会）
寺内隆夫　1988　「俎原遺跡出土土器の検討」　『平出遺跡考古博物館・歴史民俗資料館紀要』第５集（塩尻市立博物館）
徳山村史編集委員会　1973　『徳山村史』
徳山村の歴史を語る会　1984　『徳山村のあけぼのを求めて―岐阜県揖斐郡徳山村遺跡分布調査中間報告―』
常滑市教育委員会　1962　『石瀬貝塚』
戸田哲也他　1992　『横浜市泉区泉警察遺跡』
突帯文土器研究会　1993　『第５回考古学フォーラム　突帯文土器から条痕文土器へ』
豊川市教育委員会　1993　『麻生田大橋遺跡』
豊田市教育委員会　1968　『船塚遺跡』
都立学校遺跡調査会　1990　『白鷗』
中津川市教育委員会　1985　『阿曽田遺跡』
1991　『九須田遺跡発掘調査報告書』
1979　『中村遺跡第１～２次発掘調査報告書』
長野県史刊行会　1988　『長野県史』考古資料編
永峯光一編　1981　『縄文土器大成２―中期』（講談社）
名古屋市見晴台考古資料館　1993　『特別展・名古屋の縄文時代　資料集』
楢崎彰一　1965　「中野遺跡」　『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（日本国有鉄道）
日本貨幣商協同組合　1993　『日本貨幣カタログ』
野口義麿編　1981　『縄文土器大成３―後期』（講談社）
野村宗作他　1983　『巾通り遺跡』（岐阜県大野郡白川村教育委員会）
日置弥三郎　1963　「近世における徳山村」　『揖斐川上流域総合学術調査報告書』（岐阜県教育委員会）
福井県　1986　『福井県史　資料編13考古―本文編―』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1988　『鳴鹿手島遺跡』
袋井市教育委員会　1984　『長者平遺跡―昭和58年度緊急発掘調査報告書』
藤則雄　1984　「金沢市縄文後期後葉～晩期前葉新保本町チカモリ遺跡出土石器の石質と石器圏」『金沢市新保本町チカモリ遺跡―石器編―』（金沢市教育委員会）

藤澤良祐　1986　「瀬戸大窯発掘調査報告」　『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』
1987　「本業焼の研究」　『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』
1988　「本業焼の研究」　『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』
1989　「本業焼の研究」　『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅷ』
1991　「瀬戸古窯址群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年―」　『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』
藤森栄一　1965　『井戸尻』（中央公論美術出版）
古川町教育委員会　1993　『中野山越遺跡発掘調査報告書』
文化財保護委員会　1952　『吉胡貝塚』
堀武義・川地利昭　1963　「揖斐川流域上流の植物群落」　『揖斐川上流域総合学術調査報告書』（岐阜県教育委員会）
堀武義・鳥居進　1963　「揖斐川河畔上流の植物群落」　『揖斐川上流域総合学術調査報告書』（岐阜県教育委員会）
間壁忠彦・間壁葭子　1971　「里木貝塚」　『倉敷考古館研究集報』第７号
増子康真　1978　「縄文中期後半土器の編年―東海地方西部地域―」　『古代人』34　（名古屋考古学会）
1981　「第３章　東海地方西部の縄文文化」　『東海先史文化の諸段階』（本文編）補足改訂版
1986　「東海西部沿海地域縄文中期土器型式の検討―北屋敷式の細別と咲畑式の再検討―」『知多古文化研究』２（知多古文化研究会）
1988　「近畿地方縄文中期後半土器編年の問題点―東海西部との対比から―」　『求心能道　巽三郎先生古希記念論集』
1992　「名古屋市瑞穂遺跡ＳＢ１の縄文中期末土器―山の神式土器の検討―」　『縄文時代』第３号（縄文時代文化研究会）
松本市教育委員会　1990　『松本市坪ノ内遺跡』
真脇遺跡発掘調査団　1986　『真脇遺跡』
三重県文化財連盟　1970　「東庄内Ｂ遺跡」　『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』
瑞浪市教育委員会　1979　『大川東窯』
南知多町教育委員会　1976　『清水ノ上貝塚』
1983　『林ノ峰貝塚Ⅰ』
美並村教育委員会　1988　『稲葉遺跡』
美濃加茂市教育委員会　1971　『神明遺跡発掘報告書』
1973　『牧野小山遺跡』
桃野真晃　1982　「石器を作るハンマー―凹石の用途について―」　『考古学論考　小林行雄博士古希記念論文集』
森川正和・山田昌久　1976　「縄文前期の石斧柄」　『どるめん』10
八百津町教育委員会　1980　『岐阜県八百津町南森遺跡発掘調査報告』
山中二男　1979　『日本の森林植生』（築地書館）
吉田英敏　1989　「Ⅲ縄文時代」　『塚原遺跡・塚原古墳群』（関市教育委員会）
吉田英敏他　1994　『川合遺跡群』（可児市教育委員会）
渡辺誠　1975　『縄文時代の植物食』（雄山閣）
1984　『縄文時代の漁業』（雄山閣）
1991　「石錘ピット出土の礫石錘について」　『垣内遺跡発掘調査報告書』（高山市教育委員会）
渡辺誠編　1975　『桑飼下遺跡発掘調査報告書』（舞鶴市教育委員会）

文献データシート

書　　名	岐阜県文化財保護センター調査報告書　第11集 徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書　第４集 「戸入村平遺跡」
執 筆 者	武藤貞昭・千藤克彦・鈴木昇・藤田英博・小谷和彦・大参義一
発 行 所	財団法人岐阜県文化財保護センター
発行年月	１９９４年１２月
遺 跡 名	戸入村平遺跡
読　　み	とにゅうむらだいらいせき
所 在 地	岐阜県　揖斐郡　藤橋村　大字戸入　字村の内
調査原因	徳山ダム建設
種　　別	集落跡（住居跡・土器棺墓・配石土坑他）
時　　代	縄文（中・後・晩）・室町～江戸

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第11集
徳山ダム水没地区埋蔵文化財
発掘調査報告書　第４集

戸入村平遺跡

１９９４年12月９日　印刷
１９９４年12月15日　刊行

編集・発行　岐阜県岐阜市司町１（岐阜総合庁舎内）
財団法人　岐阜県文化財保護センター
印　　刷　西濃印刷株式会社

「戸入村平遺跡」調査報告書正誤表

ページ	訂正箇所	誤	正
5	第２図	９長吉遺跡の位置	手前のカーブの位置（南南東へ2.5mmずらす）
5	第２図	33弘法穴の位置	南わずか西寄りに３mmずらす
9	11行目	これに対して、	削　除
9	12～13行目	大窯期以降の陶磁器類は出土しているが、それ以前の遺物は確認していない。	古瀬戸後期以降の陶磁器類が出土している。
98	第49図	２段目右から２つ目の番号	1460
162～164	第５～７表	大きさの単位	cm
167	第88図	1714の拓影ならびに断面図	縄文がほぼ縦走する土器で拓影の右辺が上になる。
236	第133図	２つのグラフのキャプションが反対	上が打欠石錘、下が切目石錘
236	第133図 ２つのグラフの重量(g)の数字	250 ～ 210	250 ～ 260
254	６行目	蛍光線分析	蛍光Ｘ線分析
254	下から５行目	清美村	清見村
260	第15表　No.162	(出土区)　ＩＧ	(出土区)　１Ｇ
261	第16表　No.259	(出土区)　130 U	(出土区)　13O
297	下から６行目	蛍光Ｘ分析装置	蛍光Ｘ線分析装置
303	下から５行目	Caの量を計ればれ	Caの量を計れば
図版19	下段一番右下の土器番号	1443	1413
図版26	一番右上の土器番号	1287	1278